

# 赤城南麓の民俗

—芳賀・南橘・桂萱地区—





地区全景（市役所から）



赤城型民家（小坂子町）



大峰神社 太々御神楽  
火の神の舞 (嶺町)



上泉の獅子舞 (上泉町)



ナンマイダンボ (日輪寺町)



秋葉講 (小神明町)



青面金剛明王（閔根町）



寒念仏供養塔（小神明町）



衣笠大神（川原町）



筆子塚（田口町）



念仏橋供養塔（青柳町）



九頭竜さま（川原町）



カマを掛ける稲束（龍蔵寺町）



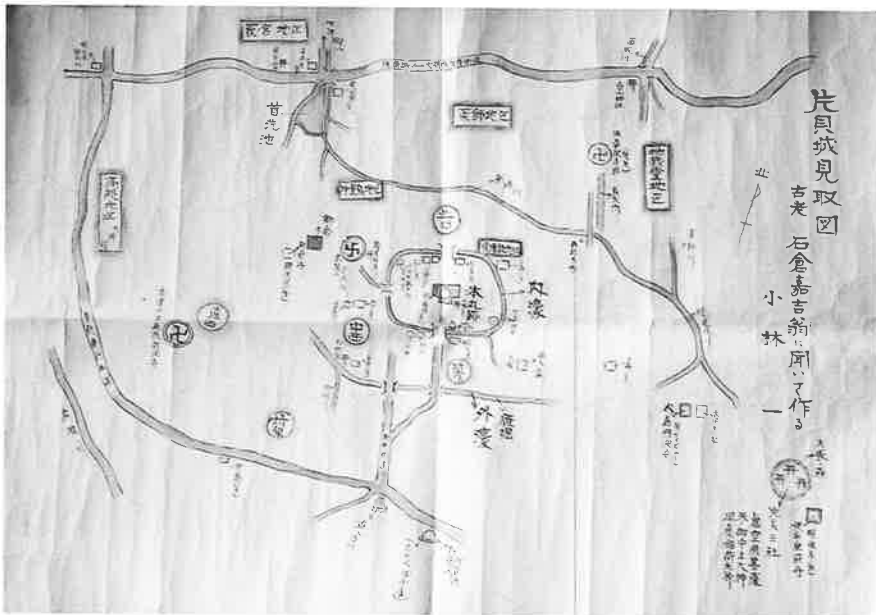
夜鳴き地蔵（上細井町）



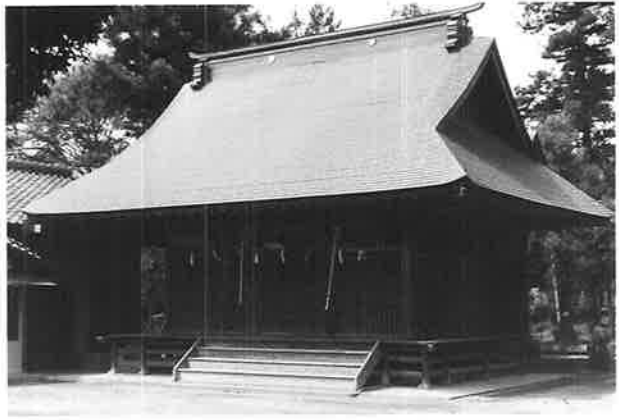
日枝神社の絵馬 (端気町)



いぼ神 (小神明町)  
(時枝 務撮影)



片貝城復元見取図 (小林一氏作図) (片貝町)



上沖の大黒さま（上沖町）



雀神社（青柳町）



正円寺の萩の門（堀之下町）



八丁×（上細井町）



## 序

前橋市教育委員会  
教育長 岡本信正

昭和六十年年度の芳賀地区から始まった民俗文化財調査事業も、南橋地区、桂萱地区の調査を終え、第一集の刊行を迎えることができました。

この報告書は、文化財調査事業の中で実施され、消えゆく民俗を総合的に調査し、記録したものです。これらの地区は、これまで本格的な民俗調査が実施されていない地域であり、貴重な記録を残せたと思います。報告書の詳しい内容は本文を読んでいただきたいとおもいます。

民俗調査の民俗学はよく民族学とまちがわれる学問です。民族学は異なる民族の生活や文化、社会、価値感などの比較研究を通して文化の機能や構造、あるいは歴史的变化や相互関係を明らかにする学問です。民俗学は研究者が属する民族の文化（日本人なら日本）を深く研究する学問です。研究対象には習慣、行事、信仰、昔話など日常生活にかかわる分野ですが、精神史、文化史などを明らかにするのがおもな課題といえるものです。

さて、前橋市は、昭和六十一年度に生涯学習本部をスタートさせ、市民の生涯学習推進のためにおおきな一歩をふみだしています。生涯学習推進事業を設定し、積極的に取り組んでいます。その一つである生涯学習奨励員制度により市内の各自治会ごとに奨励員さんが委嘱され、種々の活動を行っています。その中に自分たちの郷土の歴史を知る学習会、研究会、史跡めぐりが多く実施され、教育委員会にも資料の紹介や、講師派遣の依頼が寄せられています。

この調査と生涯学習との係わりでいえば、調査時点での御協力もあり、また、報告書は、生涯学習の資料として活用していただけるものとおもいます。調査では各町で聞き取り調査を中心に行いましたが、すべてを調査できたとは思っておりません。まだまだ知られていないことがあるかと思えます。願わくば、この報告書が、地区の民俗の一つのまとめとして利用していただくとともに、これ元にしてこれ以上の内容を調べる、生涯学習のきっかけとなれば幸いです。

第一集以下第四集までを刊行の予定であり、全巻刊行の段階では、前橋市内の民俗の輪郭を明らかにする資料集となるとおもいます。最後になりましたが、調査にさいして御協力いただいた地元の話者、自治会の方々、調査執筆に御苦勞いただいた調査員みなさんに深く感謝いたします。

平成元年三月



## 経 過

昭和六十年 度 芳賀地区

民俗調査 (民俗文化財総合調査事業)

### 一、目 的

民俗とは、一般には民間伝承と呼ばれ、衣食住を始めとして、人々が先祖より受け継いできた日常生活の上で、繰り返し行われる生活事実のすべてを意味するものである。こういった伝承や残された民俗文化財を調査することによって、一般庶民の伝統的生活様式、社会形態を明らかにしようとするものである。

それは、民俗が、一切の階級、身分、出身、才能などの相違に関係なく、日本人であるならば、誰でもが無意識のうちに繰り返し表出する類型的行為の総体を意味し、いわば、日本人を日本人たらしめているものだからである。

そこで、社会の急激な変化により、滅び去ろうとしている民俗を、総合的に調査し、資料収集を行うことで、記録保存を図り、地域をみつめる心を取り戻させる契機とする。

また、資料整備により、将来の博物館構想に資する。

二、調査組織 (前橋市民俗文化財調査委員会)

委員長

近藤義雄 県文化財保護審議会委員 市史編纂委員

副委員長

井田安雄 日本民俗学会会員

### 顧問

山田武麿氏 市文化財調査委員  
中沢右吾氏 市文化財調査委員  
丸山知良氏 市文化財調査委員  
松島栄治氏 市文化財調査委員  
梅沢重昭氏 市文化財調査委員

### 調査員

桑原 稔 豊田高専教授  
井野誠一 黒保根中教諭  
磯部淳一 県博学芸員  
岡野 健 伊勢崎一中教諭  
寫村真也 細井小教諭  
池田 修 前橋工業高校教諭  
新保一美 早稲田大学演劇学会会員  
時枝 務 立正大学大学院生  
神宮善彦 県博学芸員

### 調査補助員

菊池誠一 前市女教諭  
小暮正剛 群馬大学学生  
横田雅博 群馬大学学生  
田口智彦 群馬大学学生  
佐藤 健 群馬大学学生  
佐鳥孝之 上毛歴史建築研究所員

### 地元協力員

各町自治会長  
協力員 (各町一名)

事務局

- 米倉 忍 社会教育課長
- 福田紀雄 文化財保護係長
- 井野修二 文化財保護係主任
- 関根吉晴 文化財保護係主事

◎夏期集中調査

八月二日 端氣 五代

三日 小坂子 小神明 鳥取

四日 嶺 金丸 勝沢

地元協力員

町名	氏名	住所	電話	備考
勝沢	松村利信	勝沢町六四	六九一二〇	自治会長
	鈴木浅吉	〃 七七	六九二〇三	
小神明	宮内禎一	小神明町四六	三二五三七	自治会長
	荻原豊吉	〃 六五〇二	三二〇八六	
端氣	近藤栄一	端氣町三七	六九一九五	自治会長
	高橋滝治郎	〃 三五二	六九四九七	
五代	村山栄一	五代町四三	六九一〇五	自治会長
	摩庭初太郎	〃 四二七	六九三〇四	
鳥取	平林俊雄	鳥取町三九	六九三三五	自治会長
	大沢清作	〃 三〇〇	六九一六三	
小坂子	小林宏	小坂子町三〇五	六九一六〇	自治会長
	糸井春海	〃 一六五	六九一七六	

嶺		金丸		高花台一	
青木武士	青木多三郎	山本吉男	書上守一	山田光彦	大嶋博
嶺町委六	〃 一三	金丸町三	〃 一五	高花台一四一〇	〃 二二二三
六九三三九	六九七七三	六九一三一	六九四九六	六九一五〇	六九一五五
自治会長		自治会長		自治会長	自治会長

昭和六十一年度 南橋地区

一、目的 同じ

二、調査組織（前橋市民俗文化財調査委員会）

委員長

近藤義雄 前橋市郷土芸能連絡協議会長

副委員長

井田安雄 日本民俗学会会員

顧問

山田武麿氏 市文化財調査委員

中沢右吾氏 市文化財調査委員

丸山知良氏 市文化財調査委員

松島栄治氏 市文化財調査委員

梅沢重昭氏 市文化財調査委員

調査員

桑原 稔 豊田高専教授

井野誠一 黒保根中教諭

岡野 健 富士見中教諭

嵐村真也 細井小教諭

新保一美 早稲田大学演劇学会会員

時枝 務 立正大学大学院生

神宮善彦 県博学芸員

三原宗作 上毛歴史建築研究所研究員

菊池誠一 前橋商業高校教諭

小暮正剛 伊勢崎第二中教諭

横田雅博 甘楽小幡小学校教諭

田口智彦 館林女子高教諭

佐藤 健 太田市立強戸中教諭

井上悦子 (ボランティア参加)

地元協力員

各町自治会長

協力員(各町一名)

事務局

米倉 忍 社会教育課長

中嶋隆二 社会教育課長補佐

福田紀雄 文化財保護係長

浜田博一 文化財保護係主任

井野修二 //

夏期集中調査日程

八月七日(木)

上細井町 北代田町 下細井町 下小出町

八月八日(金)

日輪寺 川端町

八月八日(金)

調査の中間検討会(調査員と協力員)

八月九日(土)

上小出町 竜蔵寺町 青柳町

八月一〇日(日)

荒牧町 田口町 関根町 川原町

南橋地区

自治会長

町名	氏名	住所
上細井町	野田和夫	上細井町八七一
北代田町	石沢博	北代田町五九五
下細井町	関根政一	下細井町二六六
下小出町	町田角太郎	下小出町一丁目二一七
上小出町	中島祐治	上小出町二二〇
龍蔵寺町	今井一三	龍蔵寺町一五七
青柳町	松本高雄	青柳町八五九一三
南橋町	花木敏治	南橋町一四一八
荒牧町	関口泰	荒牧町三八三
日輪寺町	飯島泰雄	日輪寺町三六一一
川端町	品川正	日輪寺町三五四
田口町	金子誠一	田口二七六一二
関根町	清水藤雄	関根町五五〇
川原町	野上昌男	川原町五二三

協力員

町名	氏名	住所
上細井町	長谷川隆治	上細井町六〇八
上細井町	大嶋一	上細井町一〇二九一四
下細井町	金子一雄	下細井町二八一
北代田町	生方信治	北代田町五二一

下小出町	町田一雄	下小出町一―二五―一一
上小出町	栗原繁	上小出町二―四〇―一二
竜蔵寺町	今井光男	青柳町五〇四
青柳町	岡田栄重郎	青柳町六二三
荒牧町	萩原敏男	荒牧町八五三
日輪寺町	関原佐四次	荒牧町一〇八〇―一二
川端町	金子浅次	川端町二九
田口町	塩原四郎	田口町三七二
関根町	茂木員衛	関根町二五八―一二
川原町	野上和夫	川原町五二一

追加集中調査

一月二五日(火)

川原町 田口町 日輪寺町

一月二六日(水)

青柳町 竜蔵寺町

昭和六十二年 桂萱地区

一、目的同じ

二、調査組織〔前橋市民俗文化財調査委員会〕

委員長 近藤義雄 前橋市文化財調査委員

副委員長 井田安雄 日本民俗学会会員

顧問

梅沢重昭氏 市文化財調査委員

近藤義雄氏 市文化財調査委員

中沢右吾氏 市文化財調査委員

松島栄治氏 市文化財調査委員

丸山知良氏 市文化財調査委員  
調査員

桑原 稔 豊田高専教授

井野誠一 文化財保護室主任

岡野 健 群大附属小教諭

嵐村真也 細井小教諭

新保一美 文化財保護室嘱託

時枝 務 県史嘱託

神宮善彦 県博学芸員

池田 修 前橋工業高校教諭

菊池誠一 吉井高校教諭

小暮正剛 伊勢崎第二中教諭

横田雅博 群馬歴史民俗研究会員

田口智彦 板倉高教諭

佐藤 健 太田市立強戸中教諭

地元協力員

各町自治会長  
協力員〔各町一名〕

事務局

福田紀雄 文化財保護室長

浜田博一 埋蔵文化財係長

遠藤和夫 埋蔵文化財係主任

井野修二 文化財保護係主任

夏季集中調査

八月六日(木)

三俣町 石関町 上泉町 幸塚町

八月七日(金)

上沖町 下沖町 片貝

八月八日(土)

片貝 龜泉町 荻窪町

八月九日(日)

堀之下町 堤町堤町北区 江木町

追加集中調査

一〇月二二日

片貝町

一〇月二三日

上泉町

一〇月二四日

荻窪町

桂置地区

自治会長

三俣町一丁目	大塚富一	三俣町一丁目三三	(電三一〇三七)
三俣町二丁目	狩野理一	三俣町二丁目〇一七	(電三八八七)
三俣町三丁目	筑井達也	三俣町三丁目一三三	(電三一三〇〇)
幸塚町	篠田博之	幸塚町二	(電二八七四)
上沖町	岩田晴男	上沖町二〇一	(電三一七〇)
下沖町	手嶋敏夫	下沖町〇	(電三一九八)
西片貝町	齊藤和雄	西片貝町五丁目三二	(電四一三四〇)
東片貝町	篠原信康	東片貝町九一	(電四一〇八〇)
上泉町	田村忠三	上泉町六七四一	(電六一六五五)
石関町	田部井武敏	石関町三四	(電六一七七一)
龜泉町	柴崎千之	龜泉町三四	(電六一六七九)
荻窪町	青木博久	荻窪町六七	(電六九〇三三)

堀之下町	鳥山栄治郎	堀之下町六九	(電六九〇三五)
堤町	中島博雄	堤町四一	(電六九一四六)
堤町北区	菊地定則	堤町五五一四	(電六一〇〇七)
江木町第一	植栗長寿	江木町二四〇	(電六一五七四)
江木町第二	登丸登喜太	江木町二〇七一	(電六九四六三)
江木団地	庄司雅美	龜泉町二七RA二〇一	(電六九〇四一)

協力員

三俣町一丁目	茂木六次	三俣町一丁目三三	(電三一六四七)
三俣町二丁目	根岸栄尾	三俣町二丁目三二六	(電三一三四六)
三俣町三丁目	内田恒治	三俣町三丁目五二六	(電三一五二四)
幸塚町	奈良正太郎	幸塚町〇六	(電三一九〇三)
上沖町	岩田夙司	上沖町〇六	(電三一五〇八)
下沖町	吉田茂	上沖町四四一六	(電三一三七六)
西片貝町	武田富夫	西片貝町二丁目三三	(電四一三五三)
東片貝町	竹内長平	東片貝町二七六一	(電四一三八七)
上泉町	岡田喜代治	上泉町二六一	(電六六二〇三)
石関町	田部井一永	石関町三三三	(電六九一二七〇)
龜泉町	岡田清次郎	龜泉町三三	(電六九一〇四〇)
荻窪町	青木信雄	荻窪町八五二	(電六九六六六)
堀之下町	女屋慎正	堀之下町四九四一四	(電六九四七〇)
堤町	荒木武光	堤町二七〇	(電六九一〇一三)
堤町北区	五十嵐源七	堤町三三三四	(電六一〇〇〇八)
江木町第一	斉藤要吉	江木町六四一	(電六一一三五〇)
江木町第二	信沢常雄	江木町三四八二	(電六九一九四)

民俗文化財調査員 分担表

委員長 近藤義雄 石造物

副委員長 井田安雄 民俗概観

調査員

桑原 稔

民 家

井野 誠一

人の一生

岡野 健

社会生活

鳥村 真也

有形民俗文化財

新保 一美

芸能、娯楽

時枝 務

信 仰

神宮 善彦

生産生業

菊池 誠一

口頭伝承

小暮 正剛

年中行事

横田 雅博

衣食住

田口 智彦

民俗知識

佐藤 健

交通交易

池田 修

民 家

佐鳥 孝之

〃

調査参加 職員（事務局以外）

〃

昭和六十一年度 南橋地区

文化財保護係

主任

遠藤 和夫

〃

主任

中野 和夫

〃

主任

中野 覚

昭和六十二年度 桂萱地区

文化財保護係

主任

中野 和夫

〃

主任

中野 覚



話者 一覽表

芳賀地区	勝沢町	鈴木 孫平	明治四〇年	九月 一日生
鈴木 平三郎	明治三二年	四月二日生		
梶沢 浅吉	明治三九年	二月二日生		
鈴木 英治	明治三〇年	四月一五日生		
五十嵐	明治三〇年	七月二七日生		
横山 コウ	明治四三年	九月二四日生		
鈴木 クラ	明治三八年	三月二四日生		
五十嵐 そのえ	明治三九年	一月二日生		
樺沢 シャウ	大正一三年	三月六日生		
松村 利信	明治四〇年	九月一日生		
鈴木 善平	明治四一年	二月二四日生		
小神明町	宮内 藤太郎	大正 元年		
荻原 豊吉	大正 七年	八月 九日生		
角田	明治三七年	二月二六日生		
塩野 いく	明治三八年	七月二二日生		
後藤 竹五郎	大正 二年	一月一八日生		
端気町	高橋 滝次郎	明治三一年		
近藤 栄太郎	明治三八年	二月 一日生		
五十嵐 シゲ	明治三八年	一月 五日生		
五十嵐 たけ	大正一〇年	九月 五日生		

五代町

六本木	ちゃう	明治四一年		
後房	清	大正 三年		
片貝 トモ	大正 五年	一月二〇日生		
摩庭 トヲノ	大正 二年	七月二〇日生		
町田 イワ	大正 三年	七月二八日生		
摩庭 初太郎	明治四〇年			
長沢 龍吉	大正 七年			
摩庭 久男	明治四三年	六月 二日生		
倉賀野 萬吉	大正 四年	一月二二日生		
片貝 敬勇	明治三七年	七月二五日生		
中沢 竜吉	大正 二年	九月一九日生		
梅原	大正 三年	四月 八日生		
小坂子町	小林 幸市郎	明治三七年		
五十嵐 こと	明治四〇年	二月二〇日生		
酒井 きち	明治三七年	八月 八日生		
小林 孝一	明治三三年	一月一三日生		
小林 幸市郎	明治三七年	一月二六日生		
松倉 保男	明治三八年	二月 七日生		
横堀 鶴治	大正 元年	九月一四日生		
阿部 喜三郎	明治四二年	二月 六日生		
横堀 万五郎	明治四〇年	八月二四日生		
角田 登	明治四五年	三月三〇日生		
横堀 四平	明治四二年	一月 一日生		
木村 貞吉				

糸井敏雄 明治四四年 九月二日生

嶺町 青木多三郎 明治四三年 一月二〇日生

青木利郎 大正 五年二月 六日生

青木一衛 明治四四年 三月二日生

青木武士 昭和 二年 一月二日生

池田嘉藤 明治三八年 一月二日生

金丸町 書上守一 明治四〇年 七月三日生

山本吉男 昭和 二年 二月一〇日生

鳥取町 大沢清作 明治四〇年 九月一日生

蜂須賀小重 明治四三年 一月二〇日生

石坂定平 明治四三年 三月三十一日生

南橘地区 上細井町 金井武男 大正 五年一月 四日生

大谷好一 大正 七年二月 四日生

小暮仙太郎 大正 四年 三月九日生

金子夕カ 明治三三年 五月五日生

岡庭芳夫 大正一三年二月二日生

鈴木徳重 明治三八年 四月九日生

設楽茂雄 大正 四年 一月二日生

高橋又一 明治三六年 二月二六日生

金子久太郎 明治三七年一月六日生

野田和夫 昭和 五年 一月五日生

都丸平八郎 大正 八年 八月五日生

長谷氏 隆治 明治四〇年一〇月二日生

北代田町 大嶋一 大正 三年 九月一〇日生

生方信治 明治四五年 二月二八日生

宮下周襲 明治三八年 九月二五日生

藤井トク 明治三八年 五月一八日生

宮下亮太郎 大正 四年 一月一日生

下細井町 阿久沢テツ 大正 二年 四月二〇日生

阿久沢シマ 明治三五年 三月五日生

金子タカ 明治三三年 五月一五日生

塩沢好 明治三五年 六月一日生

中野正行 大正 元年 八月九日生

阿久沢栄成 大正 五年

下小出町 船津福三郎 明治四〇年 四月四日生

藤井幹市 大正 四年 三月二八日生

中野照雄 大正 九年一月二五日生

町田一雄 明治三五年 七月九日生

角田栄三郎 明治四四年 五月一八日生

藤井松二 大正 三年 三月九日生

藤井幹市 大正 四年 三月二八日生

上小出町 中島喜太郎 明治三五年一〇月三日生

関口理作 明治三九年 四月九日生

藍沢弥男 明治四〇年

綾谷 守衛	明治四〇年
関口 喜代作	明治四三年
栗原 繁	大正 五年
龍藏寺町	
小池 盛義	明治三三年 三月一三日生
今井 フクジ	明治四〇年 七月二三日生
今井 清平	明治四二年 九月 五日生
今井 いく	明治三八年 八月一〇日生
渋川 いし	明治三六年一〇月一七日生
今井 徳次郎	大正 三年 二月一六日生
青柳町	
岡田 タキ	明治四二年 三月二一日生
内山 トメ	明治四二年 七月 一日生
岡田 栄重郎	明治三六年 三月二二日生
岡田 摩左夫	明治三六年一二月二四日生
都丸 次郎	明治四二年 一月 八日生
荒牧町	
矢端 貞	大正 三年 九月一二日生
高橋 たけ	明治四四年一〇月二七日生
関口 せい	明治三六年 三月一〇日生
日輪寺町	
天野 利雄	明治三四年 八月一一日生
田子 利太郎	明治三〇年 三月一三日生
木村 かね	大正 二年 二月二九日生
相沢 ぬい	大正 二年 七月 九日生
木村 かつ	明治三五年 一月一一日生

関 左団次	明治三九年 一月 九日生
品川 文弥	明治四四年 八月二七日生
川端町	
金子 浅次	明治四三年 三月三〇日生
品川 正寿	明治三四年 二月二六日生
品川 しげ	明治三五年 四月一二日生
品川 重雄	明治四二年 二月二二日生
金子 きよみ	明治四三年 九月二五日生
小川 八郎	明治四三年 九月二八日生
小川 トミ	大正 三年 四月 五日生
品川 ヨシエ	
田口町	
塩原 虎之助	明治三七年一〇月二八日生
塩原 進	明治三七年一二月一八日生
島田 始治	明治四〇年一二月二〇日生
下田 初次	大正 三年 六月二七日生
塩原 四郎	大正一三年 一月二九日生
高橋 妻子	明治四三年一二月二一日生
小池 清六	大正 四年一二月 四日生
下田 荒平	明治三七年 九月 五日生
須川 とみ江	明治四三年 九月一七日生
金子 とし	大正 五年 三月一一日生
関根町	
清水 藤雄	大正一四年 九月 八日生
萩原 みね	大正 元年一二月 八日生
高橋 照十郎	明治三九年一二月二八日生

茂木員衛 明治三六年一〇月一六日生  
森田ハツ 大正四年九月二六日生  
川原町

野上昌男

井野君男

永井源八

野上和夫

井野春男

佐藤福司

青木英男

野上静江

青木ヌイ

桂萱地区 三俣町

根岸栄尾

奈良政五郎

奈良まつえ

神村良一

神村邦次

狩野とく

大塚富一

狩野三郎

田中勇吉

山田実

茂木六次

内田恒治

幸塚町

明治三六年一〇月一六日生

大正四年九月二六日生

明治四〇年七月二三日生

明治四〇年七月二三日生

明治四〇年七月二三日生

大正三年六月九日生

大正三年六月九日生

明治四二年一月七日生

明治四二年一月七日生

明治四二年一月七日生

明治三五年二月二三日生

明治四〇年二月二四日生

明治四〇年九月一五日生

明治四一年二月六日生

大正四年二月八日生

大正四年二月八日生

明治四一年二月七日生

大正二年二月三日生

昭和二年八月一〇日生

大正五年九月一七日生

大正六年一〇月一八日生

明治四三年七月二二日生

大正五年六月二二日生

大正五年六月二二日生

大正五年六月二二日生

真下隆太郎 明治三三年二月一〇日生

奈良正太郎 明治三九年一月九日生

篠田やよい 明治四一年五月三日生

奈良謹寿 明治四二年二月六日生

奈良きくえ 大正五年三月二日生

高橋花美枝 大正五年六月二八日生

北爪ヤイ 明治四二年

篠田博之 昭和四年二月二六日生

奈良成一 昭和二年二月三日生

篠田玉輝 大正九年六月一〇日生

真下友一郎 昭和六年二月七日生

清水章年 昭和二年一月八日生

北爪好光 昭和二年一月八日生

上沖町

岩田夙司 大正一三年八月二四日生

岩田駒吉 大正一五年一月一六日生

八木原健明 昭和三年一〇月一八日生

田中二郎 昭和六年二月三日生

岩田金三郎 明治三四年五月一五日生

下沖町

篠田喜代作 明治四四年一月二九日生

篠田茂平 明治四五年一月一〇日生

手嶋友太郎 明治四五年二月二五日生

武井博治 昭和五年二月二六日生

上田桑太郎 明治四二年一月一六日生

荒井潔 明治四〇年二月二二日生

吉田 箕智雄	明治四三年 七月 八日生
吉田 茂	大正一五年 五月 四日生
片貝町(東西)	
小林 一	明治四三年 七月一九日生
鈴木 アキ	明治四〇年 一月二〇日生
石関 きち	明治三八年 二月二四日生
鈴木 伝六	
青木 末吉	
青柳 新栄	
篠原 信康	
竹内 長平	
上泉町	
閑野 政次郎	明治四〇年 七月二四日生
井岡 軍治	明治四二年 三月 二日生
女屋 多久治	明治三五年 一月二五日生
石関町	
塩原 松江	明治四四年一〇月二九日生
田部井 いち	明治四〇年 五月 二日生
龜泉町	
横堀 重二	明治四一年 九月二九日生
柴崎 己義	明治三八年 三月一七日生
新井 邦次	昭和 四年 二月二八日生
岡田 清次郎	大正 五年 四月 一日生
川野 鬼子松	明治四〇年 七月二二日生
柴田 千之	昭和 七年 三月二八日生
横堀 さく	明治四〇年 五月二六日生

角田 あき	明治三七年 二月 六日生
岡田 善八	明治三七年 七月 五日生
関 丑之助	明治四四年 七月三〇日生
荻窪町	
篠田 房吉	明治四五年 五月二五日生
湯沢 キノ	明治三九年 二月 二日生
田口 伊三雄	明治三五年 一月二二日生
太田 林平	明治四二年 八月一九日生
平田 津る	明治四一年 五月 七日生
湯沢 信一郎	昭和 四年 一月 四日生
青木 博久	昭和 二年 二月二〇日生
木村 金司	明治四三年 一月二〇日生
吉沢 佐四郎	明治四一年一〇月 五日生
吉沢 志ゲ	明治四〇年 九月一〇日生
橋詰 あさ	明治三一年一〇月二〇日生
太田 六重	大正 六年一〇月一〇日生
湯沢 喜三雄	大正 七年 七月一五日生
堀之下町	
岡田 右平	明治三八年 一月 九日生
田中 秀次郎	明治三九年 六月 八日生
大塚 マサエ	大正 二年 二月二六日生
青木 ゆき	大正 九年 二月二七日生
女屋 喜代午	大正 九年 一月 九日生
鳥山 栄治郎	大正一四年 三月一七日生
柴田 夏雄	大正一三年 八月二二日生
女屋 慎正	大正 九年 一月三一日生

鳥山義雄 大正一五年 二月二日生

五十嵐政重 明治三五年二月一日生

五十嵐源七 明治四三年 一月二八日生

荒牧武光 大正一一年 九月二五日生

中島峯雄 明治三二年 六月二〇日生

桐生金太郎 明治四五年 七月 八日生

中島福太郎 大正 九年 三月一〇日生

桐生栄一 大正 五年 五月 二日生

高橋喜代次

荒本やす

五十嵐たつえ

江木町

齐藤要吉 明治四三年一月二六日生

町田善四郎 明治三九年一〇月二四日生

齐藤祐司 明治四一年二月 五日生

大島庫吉 大正 八年二月 二日生

植栗長寿 大正 六年 五月二八日生

北爪守一 大正一二年 七月 一日生

登丸登喜太 大正 五年 八月二二日生

大島善六 明治四五年 六月一日生

大島春枝 明治三九年 四月二九日生

町田と志奈 明治三八年一〇月二〇日生

# 赤城南麓の民俗 目次

序  
経過  
話者 一覧表

## 第一章 民俗概観

一、調査地区の概観	一
二、民俗の概観	一
(一) 社会生活	二
(二) 衣食住	三
(三) 生産・生業	八
(四) 交通・交易	一〇
(五) 信仰	二一
(六) 民俗知識	二六
(七) 芸能・娯楽	二六
(八) 人の一生	二七
(九) 年中行事	三〇
(十) 口頭伝承	三四
まとめとして	三五
第二章 社会生活	三七
一、村の概況	三七
(一) 村と道路	三七
(二) 村と川	三七
(三) 村と外来者	三六

(四) 村の生業	三六
(五) 村の水利	三六
(六) 村の移り変わり・由来	三六
(七) 人物	三三
(八) その他	三三
二、村構成	三三
(一) 自治会の構成(組・班)	三三
(二) 自治会の組織・役員	三三
(三) 組の付き合い・クルワ	三五
(四) 自治会費	三六
(五) 公民館	三六
(六) 寄り合い	三六
(七) 村の境・その他	三七
(八) 農休み	三七
(九) 共同労働	三七
(十) 共有財産・共有地	三六
(十一) 神社・寺	三六
(十二) その他	三六
三、青年団と子供組	三三
(一) 青年団	三三
(二) 子供組	三三
四、講	三三
五、家族生活	三三
六、その他	三三

第三章 衣食住…………… 五

一、衣服…………… 五  
 (一) 服装…………… 五  
 (二) かぶり物…………… 五  
 (三) 履物…………… 五  
 (四) 雨具…………… 五  
 (五) 理髪・化粧…………… 五  
 (六) 衣服の仕立て・管理…………… 五  
 (七) その他…………… 五

二、食物…………… 六  
 (一) 食糧…………… 六  
 (二) 食品…………… 六  
 ① 主食…………… 六  
 ② 粉食…………… 六  
 ③ 年中行事の食事…………… 六  
 ④ 副食…………… 六  
 (三) 保存加工・貯蔵…………… 七  
 (四) 調味料…………… 七  
 (五) 食制…………… 七  
 (六) 食器・調理用具…………… 七  
 (七) その他…………… 七

三、住居…………… 八  
 (一) 屋敷どり…………… 八  
 (二) 間取りと使い方…………… 八  
 (三) 暖房器具…………… 九  
 (四) 井戸・風呂・便所など…………… 九  
 (五) 照明・その他…………… 九  
 (六) 建築工程と儀礼…………… 九

第四章 生産・生業…………… 九

一、農耕全般…………… 九  
 (一) 耕地…………… 九  
 (二) 労働…………… 九  
 (三) 用水・雨乞い…………… 九  
 (四) 肥料…………… 九  
 (五) その他…………… 九

二、水田…………… 一〇  
 三、畑作…………… 一〇  
 四、山樵…………… 一〇  
 五、養蚕…………… 一〇  
 六、家畜…………… 一〇  
 七、諸職…………… 一〇

第五章 交通・交易…………… 一〇  
 一、交通…………… 一〇  
 二、運搬…………… 一〇  
 三、通信…………… 一〇  
 四、交易…………… 一〇  
 五、村に來た芸人…………… 一〇

第六章 信仰…………… 一〇  
 はじめに…………… 一〇  
 一、家の神仏と信仰…………… 一一  
 (一) 屋内神と仏壇…………… 一一  
 (二) 屋敷神…………… 一二  
 二、村の社寺と信仰…………… 一四  
 (一) 鎮守…………… 一六  
 (二) 寺院…………… 一三



(三) 小祠と堂	三三
三、講と俗信	三三
(一) 村内講	三三
(二) 代参講と社寺参詣	三三
(三) 山の信仰	三四
(四) 百万遍念仏	三五
(五) 禁忌と呪術	三六

### 第七章 石造物

芳賀地区	三四
南橘地区	三五
桂萱地区	三六

### 第八章 民俗知識

一、しつけ・作法・禁忌	三八
(一) しつけ	三八
(二) 作法	三八
(三) 禁忌	三八
二、医療・衛生・保健	三九
(一) 薬物療法	三九
(二) 呪術医療	四〇
(三) その他	四〇
三、卜占・まじない	四一
四、天文・気象	四二
五、数理	四三
六、動物・植物	四四

### 第九章 芸能・娯楽

一、神楽・獅子舞	四六
(一) 峯太々神楽	四六

(二) 片貝神社太々神楽	四五
(三) 上泉獅子舞	三七
(四) 堤の獅子舞	四一
(五) その他	四一
二、歌謡	四二
(一) 田植唄	四二
(二) 麦打唄	四三
(三) 馬子唄・草刈唄	四四
(四) 念仏	四六
(五) その他	四九

### 三、門付け芸他

四、地芝居	五三
五、灯籠まつり 他	五五
六、その他	五七

### 六、その他

(一) 獅子舞・競馬	六〇
(二) 遊び	六一

### 第十章 人の一生

一、産育儀礼	六五
(一) 子授け	六五
(二) 妊娠から出産	六五
(三) 出産	七一
(四) 子供の成長と祝い	七三
二、厄年・年祝儀礼	七九
(一) 厄年・厄除けと呪法	七九
(二) 年祝い	八〇
(三) 余暇と娯楽	八四
三、婚姻儀礼	八六
(一) 青年期の動向	八六
(二) 婚姻の条件	九〇

(三) 婚姻の成立	三〇五
(四) 結婚式	三〇九
(五) 婚礼後の習俗	三三三
四、葬送儀礼	三三七
(一) 葬式の習俗	三三七
(二) 墓制	三三八
(三) 死後の供養	三四一
(四) 死 霊	三四四
第十一章 年中行事	三五五
一月	三五五
二月	三五六
三月	三五九
四月	三六〇
五月	三六一
六月	三六三
七月	三六三
八月	三六四
九月	三六八
十月	三七〇
十一月	三七〇
十二月	三七三
第十二章 口頭伝承	三七八
一、昔話	三七八
二、伝説	三六五
三、世間話・怪異	三六七
四、その他	三六九

第十三章 民 家	三九三
一、総論	三九三
(一) 調査の目的	三九三
(二) 調査対象民家	三九三
(三) 調査の方法	三九四
二、農 家	三九四
(一) 平面の形式	三九四
(二) 編年の指標	三九四
(三) 二間取りの民家	三九五
1 はじめに	三九五
2 調査遺構の建築解説	三九五
(四) 三間取りの民家	三九六
1 はじめに	三九六
2 調査遺構の建築解説	三九六
(五) 不整形田字間取りの民家	四〇二
1 はじめに	四〇二
2 調査遺構の建築解説	四〇二
(六) 喰い違い四間取りの民家	四〇八
1 はじめに	四〇八
2 調査遺構の建築解説	四〇八
(七) 整形田字間取りの民家	四〇一
1 はじめに	四〇一
2 調査遺構の建築解説	四〇一
(八) 多間取りの民家	四〇四
1 はじめに	四〇四
2 調査遺構の建築解説	四〇四
(九) 特殊な間取りの民家	四〇九
1 はじめに	四〇九
2 調査遺構の建築解説	四〇九

三、町家造りの民家……………四三〇

(一) はじめに……………四三〇

(二) 調査民家の建築解説……………四三〇

第十四章 金丸町の民俗……………四四九

一、社会生活……………四四九

二、衣食住……………四五〇

三、生産・生業……………四五三

四、交通交易……………四五四

五、信仰……………四五四

六、人の一生……………四五五

七、年中行事……………四五六

金丸の今昔物語……………四五六

さくいん



0 500 1000 2000m





# 第一章 民俗概観

本報告書に関係する地区は、旧勢多郡芳賀村、南橋村及び桂萱村の三つの旧村にあたる。いずれも、赤城山南麓に位置し、かつては米麦と養蚕を主生業とする本県における中心的な農村地帯であった。

## 一、調査地区の概観

芳賀地区と、南橋・桂萱地区の北部は、赤城火山斜面の上に形成された集落からなり、南橋・桂萱の南部は旧利根川の河道とその氾濫原の上に形成された集落からなる。

三つの地区とも、原始・古代以来の歴史をもつ。赤城火山斜面に縄文文化の時代の遺跡や遺物の散布地をみる。また、オブ塚古墳（勝沢町）、新田塚古墳（上泉町）、塩原塚古墳などの市指定史跡としての古墳をはじめ、多くの古墳の分布は、古代における豪族の存在を示す。

日輪寺の十一面観世音像は平安時代後期のもので、当地における観音信仰を物語っている。また、芳賀東部団地遺跡は、縄文時代からの奈良・平安時代を中心とする複合遺跡であり、本地区の祖先の生活の一端を残し、古代における集落構成を知る手がかりを与えているという。

一方、文献資料としては、平安時代の「和名抄」に、芳賀・桂萱・藤沢の三つの郷が記され、くわしい地区の比定はむずかしいが、現在の芳賀・桂萱地区を含むとされている。また、古文獻によつて知ることのできる青柳の御厨や細井の御厨についても、本地区の一部が古代

から中世にかけて伊勢神宮の神領とされていたことを知る。

中世に至つては、端氣の善勝寺鉄造阿弥陀如来坐像、上泉宝禅寺の異型板碑をはじめ、各地の中世文書や中世金石文によつて、当地の中世における歴史を知ることができる。

近世に至つて、現在の各大字の地名を諸記録によつて確認することができる。

本調査地区は、このように、原始時代以来集落の形成をみ、その生活の範囲をひろげつづ古代・中世さらに近世・近現代への歩みを続けてきたのである。

今回の民俗調査の対象地区は、以上のような地理的あるいは歴史的背景によつて成立しており、周辺地区との交流をもちながら、以下に述べる民俗を形成してきたのである。

## 二、民俗の概観

芳賀・南橋・桂萱の三地区の民俗については、その一部が『勢多郡誌』の中に収録されているし、芳賀・南橋地区については、それぞれ「村誌」に報告がある。しかし、民俗全般にわたる組織的な詳細な調査報告はない。

今回の調査は、市教育長の「序」にも記されているように、調査項目を設定し、民俗全般にわたる本格的な調査である。

調査結果については、若干の濃淡はあるが、本地区の民俗を網羅している。

以下、調査結果について、各項目別に内容の概要と特長的な面をとりあげてみることにする。

## (一) 社会生活

「社会生活」については、次のように六節に分けてまとめられている。

一、村の概況、二、村構成、三、青年団と子供組、四、講、五、家族生活、六、その他

「村の概況」では、村と道路、村と川、村と外来者、村の生業、村の水利、村の移り変わり・由来、人物、その他の七項目に分けて概観してある。この中で特に、今と昔の村（大字―現在の町）の生活形態の変化を追っている。米麦と養蚕を主体とする農業中心の生業から、農家戸数が半減し、反面に給料生活者が増加し、農業も畜産農家や園芸作物を栽培する農家が増加し、複合農業化している様子が報告され、本地区の生活形態の大きな変化を知ることができる。

「村の構成」については、それぞれの町が市全体の行政組織の中に組み入れられ、自治会長を中心とする新しい自治組織の下で運営されている様子と、かつての、クルワを中心とする各大字ごとの自治組織についての報告がみられる。

かつての大字は、その中がいくつかのクルワに分れていた。そのクルワをムラ（大字）の基本単位として自治が行われていた。クルワの中はさらに伍長組とか伍組（ゴグミ）と呼ばれる近隣組織に分れていた。それが昭和十年代の戦時体制下、隣組に再編成され、これが現在の班（組）につながっている。しかし、それぞれの地区の戸数の増加により、一つのクルワの中に多くの組（班）をふくむようになり、か

つて、五十戸前後のムラで、上・中・下といったクルワの区分けは不可能となり、新たに地区の編成替えが行われているのが現状である。

かつては、ムラの行事や連絡事項については、フレ番とか定使用と呼ばれる役の人がいたことや、祭りに際しては、数名の年番がいて世話をしていたという。それぞれのムラの生活に即した形がとられていた。冠婚葬祭に際してのムラの相互扶助的な組織もきちんと定められていて、近隣の人たちによって、そつなく運営されていた。農作業については、べつにエエ（結）の組織があった。「遠くの親類より近くの他人」という諺のとおり、おたがいの助け合いの生活が行われていたのである。

このほか、自治関係の事項としては、農休み・共同作業や共有財産のことがある。農休みは田植と養蚕の終わった段階でムラ一帯に三日間の休業日を設定したものである。このとき、ふかしまんじゅうをつくるのが例であった。共同作業としては、春先に道普請や堰普請が行われた。このことについても、ムラ一斉の行事として、不参者からは出不足金を徴集し、負担の均等化をはかった。共有財産については、各大字とも若干の共有地あるいは共有林をもっていた。第二次世界大戦後の農地解放や売却など戦後の改革によって消滅した。なお、ムラの共有財産として祭祀関係の諸道具などを引き継いでいるところもある。

次に年齢関係の組織についてみることにする。このことについては、かつてのわかいしゅ組（わかれん）や子供組のことがあげられる。むかしはムラのわかいしゅ組が自治的な組織であるわかいしゅ組をつくっていた。それが官制の青年会（のちの青年団）となり、いろいろの自治活動を行ってきた。この様子は本文報告のとおりであり、とくに、



ムラの共有地を借り受けて桑の栽培などをして、その売り上げを活動資金にしたり、時報代りの太鼓たたきとか祭りの世話、道普請、道標の設置や婚礼の際のトリムスビ役など、その活動の範囲は広がった。また、力くらべや剣道の寒稽古を行ったり、体力づくりにもはげんでいた。わかいしゅ（青年会）の活動は、それぞれのムラの自治的な活動の一つとして、ムラの生活の中で大きな役割を果たしてきたものである。

子供組については、ムラの行事にも関係して、比較的まとまった形をみることが出来る。子供組は小学校の学齢とほぼ一致していた。小学校に入学すると子供組に加入し、卒業すると前述の青年会に入会することになっていった。子供会の行事としては、天神講、ドンドンヤキ、地蔵様のまつり、神社の祭典（オクンチ）、天道念仏、悪魔っばらいなど、ムラによってちがいがあがるが、大人の世話になりながらも、ムラの諸行事に参加して、社会的訓練を行ってきたのである。小正月のドンドンヤキや神社や地蔵様などの灯籠たてのときには、年長者を親方として自主的な運営をおこなってきた。たとえば、ムラ内をツラヌキと称する寄付金をもらいあるいて、これを行事の運営資金としたのである。今の子供会の前身と考えられるが、親方にかんがりの権限があり、自主的な組織としての性格が強かった。

家族生活についての報告はすくなかった。むかしの家族生活は、オヤジ中心に展開されていた。身上まわしはオヤジ夫婦が中心であり、わかいもんは下積み生活であった。特に嫁は大変苦労したという。別項にあるように、毎日の家族の食事の世話をしたり、風呂の世話から、育児をした上で、農作業を一人前にやりとげねばならなかったのである。「嫁のつとめは十年」とか、「こしかけ十年」といわれた。嫁いで十年たたないとおちつかなかったという（萩窪）。

むかしは、兄弟が多く、なかなか分家に出すことはできなかったという。分家にだすには、土地がある程度なければできなかったから、二男以下の中には婿に行ったり、よそへ働きに行ったりする者もあった。分家しても余裕のあるほど土地をもらえなかったから、いわゆる身上は大変きびしかったという。

同族については、イチマケとかイツケという言葉がある。同じムラに居住していて、家紋や家例を同じくする同姓の者で、墓地も共有している場合にイツケといっている。大体本分家の関係になっている。イチマケもほぼ同じであるが、イチマケの中には、血のつながりがないくてもワラジヌギで同じ苗字になっているうちも含んでいて、やや範囲が広い。ワラジヌギのうちについては、イチマケというが、イツケとはいわない（萩窪）。イツケとイチマケの使い分けは、新旧の差もいい、イチマケの方が古い表現であるともいう。

冠婚葬祭のときとか、共同作業のときなどイツケ（イチマケ）の人たちは、呼ばれて行ったり、手伝いに行ったりした。一族としてのつながりは、このような場合に強くみられた。

本地区においては、信仰面でイツケの人たちが同じウジガミをまつるといふ形はほとんどみられないようである。比較的新しい本分家関係の間においては、正月行事として、朝湯をよびあったり、年礼に往来するということは行われたが、先祖祭りを行ったり、講を同族でつくったりするような固い結束はみられない。なお、家例については、「年中行事」を参照されたい。

## (二) 衣食住

「衣食住」については、一、衣服、二、食物、三、住居の三節に分けてそれぞれの資料をとりあげてみる。

## ① 衣服について

本節では、まず、ここ数十年間の衣服の移り変りについて注意したい。その中で、いくつかわの変化がみられた。

大きな変化は、着物から洋服への変化であろう。このことに伴って、下着類・履物・かぶり物にも変化がみられた。

昭和のはじめごろから、洋服が一般化するようになり、下着としてはシャツを着、ふんどしに代ってさるまた(パンツ)をはくようになった。履物も靴が主流となった。かぶり物も帽子となった。髪型も、男子に丸坊主頭から長髪になり、女子も短髪、パーマネントも流行するようになってきた。こうした衣生活での洋風化傾向は、昭和になってから急速に進行したものである。

このような変化の中で、一つ注意したいことは、モンペのことである。モンペは、昭和十年代、第二次世界大戦中に、国策として、上からの一斉指導のもとに普及したものであるが、女性にとっては、今までの、ももひき、あるいは長着だけの生活から、モンペを着用することによって、行動面・意識面でも大きな変化がもたらされたということとを聞く。これには外出用もあつたから、比較的気軽に外出できたというし、気軽に行動できるようになったという話も聞く。今では、モンペもそれほど目立たなくなつたが、ここ数十年間の女性の衣生活の中での一つの変化であつたのである。

こうした衣生活の変化は、べつの面でも生活の中に変化をもたらした。これまで、女性にとって機織りと裁縫の出来ることが嫁入りの必須の条件とされてきた(「機二針」という諺がある)が、最近では、着物を着ることもほとんどなくなり、使い捨ての風潮も手伝って、購入品で間にあわせるようになって、女性に対する特殊技能の要求もすくなくなつたのである。

本節では、このような現代での衣生活の基礎となつたかつての衣生活の様子を、聞きとり調査によって、次のような内容によつてまとめてみた。

(一)服装 (二)かぶり物 (三)履物 (四)雨具 (五)理髪・化粧 (六)衣服の仕立て、管理 (七)その他

以上のような内容によつて、本地区の衣生活の概要を示してある。

服装においても、ハレの場合(あらたまつたとき)とケの場合(ふだんのとき)によつて、服装を分けて考えてきたのである。祝儀不祝儀に着用するのが喪服である。もう一つがふだん着である。大きく分け、この二つになるのだが、その間に、よそいぎとちよいちよいぎがあり、ふだん着の下にのらぎ(仕事着)がある。用途によつて、着物の形や質(材料)が分化したのである。上つぱりにしても、ハレの場合は羽織であり、ふだん着は半纏であつた。この二つは厳重に区別され、かつては、羽織の着用を許さない場合もみられたのである。逆に、じんぎに行くのには羽織ときまつていた。半纏の着用は許されなかつたのである。着物にも、ハレとケの区別がきちんとしていたのである。一部には、社会的な地位を着物によつてあらわしたこともあつた。

年齢によつても、着物にちがいがあつた。

一ツ身はあかんぼうから三歳くらいまでの子供に着せた。一丈の布でできた。

三ツ身は「三つのお祝に着せるもんだ」といわれ、三歳くらいからつくつてやつた。五歳くらいまでは着ていた。

四ツ身は五歳くらいから十三、四歳くらいまでの間着ていた。それは半反の布でつくられた。これまでは、肩あげ、腰あげがついていた。

十四、五歳から一人前の着物として、本裁の着物を着た。これは一

反の布でつくった。

これらの着物は、子供の成長にあわせてつくりかえてやった。夏と暮に着物をつくってやったので、このときにつくりかえてやったという。夏は農休みを目あてに、浴衣をつくってやり、暮には正月ぎもんをつくってやりたりした。

むかしは、男には、兵隊検査のときに、新しいよそいぎの着物をつくってやった。また、婿になるときには、婿どんぎもんをつくってやった。娘の場合は、嫁に行くときに、嫁御ぎもんをつくってやった（五代・荻窪）。

時期によって着物をかえたことは、報告にあるとおりである。あわせからひとえもんにきりかえるのは、春の彼岸すぎで、このころにはあいぎを着た。五月になっても寒い日があるので、ひとえもんの上にちゃんちゃんことか半纏を着たりした。ひとえもんからあわせになるのは、十月ごろであった。このときも、あいぎを着て、寒さの調節をはかった。

足袋は、むかしの人は、秋のえびす講（旧の十月二十日）がくるまでははかせなかった。このころは寒かったから、がまんがむずかしかったという。四月の末ごろまでは、足袋をはいていた。

着物はふだん、たんすの中に入れておいたが、夏の土用とか、十月のころに外へ出して干した。土用の場合は、土用干しといい、たんすの着物を出して、座敷にひもをとおして干した。風をとおすといった。十月は秋風のたつころであった。これは、一種の行事的なもので、毎年やったことである。虫除けのためともいう。

布団は、大体の大きさが、敷布団は三幅、掛布団は四幅か四幅半であった。嫁は嫁入りのときに布団をもってきた。

枕は、もみがらを入れたり、そばがらを入れたりしたが、そばがら

の枕は、頭の熱とりになっていいといった。枕は頭をのせるもんだから、あがつたりけつたりしてはいけないといった（関根）。

今は「着物の時代ではない」という。あるおばあさんは、今（平成元年）から十七年前に外孫に三つ身の着物をつくってやったというが、その後、内孫にはつくってやらないという（五代）。

衣服の面での変化を物語る一つのエピソードである。

## ② 食物について

食生活の面でも、大きな変化がみられる。

ここ半世紀ほどの間の食生活、食習慣の変化は著しい。第二次世界大戦を境にしての食生活の変化、特にここ十年來の食生活の面には大きな変化がみられる。電化製品の急速な普及、外食やインスタント食品の一般化は、各家庭の食生活の姿を一変させている。

ここに報告されている食生活の様子は、大凡、昭和十年代ごろまでのものである。それまでの食生活の一般的な形としては

主食としては、米麦の混合食が一般的であったこと。

粉食として、うどんやおきりこみ（にぼうと）、まんじゅう（ゆでまんじゅう、ふかしまんじゅう）、やきもちがあったこと。

副食物として、肉や魚類を食べることは少なく、野菜類を多く食べていたこと。

鍋釜による煮たきが行われ、一人一人に膳が与えられていたこと。というものであった。

食生活の面での、形の上での変化は、食生活をめぐる諸習慣を一変させ、生活様式の変化はそれにもなう意識面の変化ももたらしている。このことは、特に、食生活の中で中心的な役割を果してきた女性の仕事（役割）にも変化を与えている。

次に、本報告においてとらえられたいくつかの特長的な事項について

てとりだしてみる。

主食については、前述のように、米と麦の混合食が一般的であったが、一部にアワやキビを食べたところもあった。この中で注意したいことは、麦がヒキワリからオシムギへと変化したことと、最近における米ぞっきの食事の普及（一般化）のことである。

米麦の混合食については、いわゆる身上のちがいで、その混合の割合もちがっていた。むかしは、米ぞっきの食事は、正月、としとり、盆など、一年のうちのごく限られた行事のときとか、葬式のときなどであり、米麦の混合食が一般的であった。むかし、「貧乏人の片食い」という言葉があったという（関根）。米がとれば米ばっかり、麦がとれば麦ばっかりを食べていたことをいったものである。余裕のない家庭での食生活の様子を示したものである。本文中にあるように、米と麦を半々食べられればいい方だとさえいわれていた。このように米と麦の混合の割合が、かつては身上の上下を示す一つの指標とされていたのである。そのムギも、ヒキワリからオシムギに変わった。この時期は、おおむね昭和十年前後とされ、水車から電氣を利用した精米所の出現によるものとされている。このあと、各家庭では米ばかりを食べるようになり、かつて食膳をにぎわしていたムギ飯は姿を消した。それとともに、炊飯器の出現や、住宅の改良によるリビングルームの出現は、前述のように、家庭生活の中の食生活の面に大きな変化をもたらした。

粉食は、この地区の食生活の中で、大きな役割を果たしてきた。うどんやおきりこみは本地区の粉食の中心であった。

うどんやそばは、主としてお客様用とか、盆や祝儀・不祝儀のときの特別食であり、今のようにふだんの食事として一般化していなかった。ふだん、とくに寒いときの食事をにぎわしたのがおきりこみ（おっ

きりこみ）である。飯がすこし足りないときには、よくおきりこみをつくって補いとした。手軽につくられたので、各家庭でよくつくったものという。時期的には寒いころが多く、夏にはつくらなかつたという。ねじつことよばれる水団（すいとん）も時々つくった。小麦粉をこねて、しゃもじで汁の中にたらしたり、にぎったものを汁の中に入れて煮たりした。よく、昼食のときに飯の不足を補ったという。味噌汁の中でなく、あんこの汁をつくって、あまねじをつくって食べたこともあった。それは、一種のおごりであった。ねじつこは、ふかして砂糖醬油をつけて食べたこともあった。これはおやつであった（小神明）。このほか、まんじゅう（はじめはゆでまんじゅう、のちにふかしまんじゅうとなつた）も、七夕、月見、農休みのときなどかわりもんとしてつくられた。

やきもちや、ふだんのこじょうはん（間食）として食べた。これにはかためにやくやきもちと、やわらかめにこねて、ねぎなどをぎざんいでいて、ほうろくに油をひいてやくじりやくとあつた。

年中行事やできごとのときなどに、餅や赤飯などかわりもんをする。これらについては特に別表にまとめてある。

### ③ 住居

住居については、構面からの民家調査が行われ、その報告が第十章にある。本節においては、特に住居の機能的な面に重点をおいた調査結果についてまとめてある。

本地区は農村地帯であつたから、屋敷どりにしても、住居の構造についても、農家としての家づくりが一般的であつた。特に本地区においては、養蚕とのかかわりあいから、母屋を養蚕用につくつた家が見られた。屋根裏を養蚕に使うために、屋根の正面を切りおとしてあかりとりにした、いわゆる赤城型の民家もあつた。

このような本地区の住居について、調査結果の中から、特長的な事項をまとめてみる。

屋敷どりでは、赤城おろしの関係で、西北にかしぐねをつくったり、防風林として竹やぶのある家が多かった。また屋敷のイヌイ（北西）のすみに屋敷神として稲荷様をまつることも一般的な形である。井戸は母屋の中心からほぼ真北に掘った。多くはつるべ井戸で、車井戸の家はすくなかった。かつては井戸掘りもなかなか大変で、青柳のように、地下水の深いところでは、井戸掘りと土蔵をつくるのと同じくらいの費用がかかるまでいわれた。かつては、近隣で共同して井戸替えを行っていた。それも春の年中行事の一つであった。

便所は外便所が一般的で、カミゴウカのある家はすくなかった。母屋より東につくった。年寄や子供のために、夜になると肥桶を台所においた。小用のためであった。

作業小屋、物置小屋はコイとよばれていた。バラックや養蚕専用の蚕室をつくるようになったのは、養蚕をさかんにした大正のなかばのことである。バラックをとくにたてるようになったのは昭和十年代になつてからである。

農家では、屋敷の南東のすみに堆肥塚（こやしば）を設けた。はじめは野積みであったが、昭和のはじめのころに、堆肥小屋をつくる家もあつた。いい堆肥をつくることは、農家としてのつとめであった。

土蔵のあるうちは、ムラでもすくなかった。このことは、ムラによって多少のちがいもあるが、農家戸数の一割五分くらいというところもあつた（荻窪）。財産のある家では、米をとっておいて、年を越してから売するために、土蔵をつかつたという。土蔵も屋敷構えの一つとしての意味をもっていた。そんなところから「隣に土蔵がたつと腹がたつ」という諺もあつた。

庭はなるべく広くとつた。干しもんをしたり、そばとか麦のこなしもんをするのに使つた。干しもんは、一度にむしろを五、六十枚も干す必要があつたから、母屋の南を広くあけた。むしろ（畳一帖より大）一枚に八升から一斗分のみみをほした。一俵で七枚のむしろが必要であつた。庭には小石を入れないように注意した。牛や馬にはわらぐつをはかして足跡がつかないようにした。

道路から屋敷に入るかいどうも、タツミカイドウがいいといつた。母屋の間取りについては、各地区からの報告が寄せられているが大同小異である。

本地区のふつうの農家では、母屋は間口八間、奥行四間のいわゆる四間八間の家がふつうのかたちであつた。大きいうちで、間口が九間から十間、奥行が四間半とか五間であつた。養蚕をさかんにやるうちは、このほかに蚕室をつくつたのである。ふつうのうちで部屋を四つに仕切り、ほかに、あがりはなとか、お勝手があり、土間をへだてて馬屋とオコンマヤがあつた。

とほ口を入ると台所があり、右側に馬屋、左側にアガリハナがある。馬屋の奥にオコンマヤがあり、その相むかいに、土間を間にはさんでお勝手がある。オコンマヤには、味噌樽とか漬物桶や米櫃などを置いた。

アガリハナからあがつてすぐの座敷がオモテザシキであり、その奥がオクリ（オクザシキ・コザ）、その右側にヘヤ（ナンド）、その手前にコタツノマ（コタツノヘヤ）があつた。それぞれの部屋の役割については、本文にくわしい。

オモテザシキは、正月棚や盆棚を飾る場所であり、応接間としても利用された。

オクザシキは、上客を接待する場所であり、婚礼のときはトリムス

どの場所となった。死者の祭壇はこの部屋に設けた。ふだんは主人夫婦の寝室である。床の間は、この部屋の奥に設けられた。オクザシキは、各家庭において一番いい、大切な部屋（座敷）である。

へやは、ふだんは若夫婦などの寝室として利用された。特別の場合には、産室になったし、死者の湯灌の場所にもなった。

いろりは、お勝手の台所に面したところにあった。台所から土足のままにあたるようにコの字型になっていて、台所に面したほうが口が空いているのがふつうであった。いろりには、自在鉤が二本あるいは一本下っていた。これに鉄瓶をかけて湯をわかしたり、鉄鍋をかけて汁をつくったりした。いろりには、近所の人がきて坐ったり、家族の者が坐って団らんの場となった。山間部では、いろりのまわりの座席がきちんときまっていたが、本地区においては座席についての特別の報告はない。

台所には、いろりとならんでへつつい（かまど）が設けられてある。ここでは釜や鍋をかけ、飯を炊いたり、煮物をしたりした。

むかしは、風呂場を特別に設ける家はほとんどなかったから、台所に風呂桶を据えて入った。夏は外風呂をたてた。むかしは、近所の人がよく湯もらいにきた。その世話をするのが嫁のつとめであった。風呂に入るのも、嫁は最後であったという。

照明具は、電灯の前はランプであり、ほやみがきは子供の仕事であった。電灯がつくようになったのは、地区によつてちがいがあがるが、大体大正の末期であった。

建築関係の儀礼については、地まつりや建てまえ、屋移りや新築祝いなどのことがあるが、この中で建てまえの儀式は大きかりで、近親者からグシ餅が贈られた。グシ餅の形は本地区は四角である。建て前のと棟梁送りが行われた。新築祝いは近隣の人や職人、近親者など

を招いて、盛大な祝宴を開いた。

### (三) 生産・生業

生産・生業については、調査資料がすくなかった。

本地区の生業としては、米麦と養蚕を中心とする農業が一般的で、他の生業に従事する人たちもいたが、このことについての調査資料はすくない。

農業については、稲作と麦作と養蚕が中心であった。

稲作についてみると、むかしは用水不足で苦勞した地区もあった。群馬用水や大正用水が開通する前は、水不足でずい分悩んだという。雨乞いをしたこともあるし、水げんかがしばしばあったという。亀泉の地蔵様は、亀泉と上泉の水げんかかるとき、加勢に出て、上泉の人に手鋏で耳をそがれたという伝承をもつ。このほかに、しほり水のこと、水不足を伝える話である。

田植は結（ゆい）で行った。それは一家で行う場合もあったし、近隣で手伝いあった場合もあった。

田植は、タツの日と半夏の日をさけた。これは中毛地方一帯で聞くことである。タツの日に田植をすると穂がたつてこまないと（よく稔らないということ）。また、この日は寺の田植をする日だといって、一般の人は田植をしないと（龍蔵寺）。また、葬式のときのタツガシラの糊になるといって（死人がでること）いやがった（五代）。

半夏の日には田植をするなといった。むかし、半夏さんという人がいて、半夏の日に、田に片足、畑に片足ふんばって、どっちの仕事をしていいかわからずに、気をもんで死んでしまったという。そのため、半夏の日には田植をするなという（上泉）。半夏の日に田植をしたときには、三年つづけて植えればいいといった。三年目には餅をつい

て祝えという（萩窪・端氣）。

田植が終わるとオサナブリをした。これは田植の祝いである。このときは、田植を手伝ってくれた人を呼んでご馳走をした。

苗代とオサナブリ等の稲作関係の資料がすくないので、べつの資料によって若干補足してみることにする。

苗代……一月十五日の朝、小豆粥をつくる。十五日は百姓の祝いといった。ニワトコの木でつくったかゆかき棒で小豆粥をかきまわして、そのあと、かゆかき棒は神棚にしんぜておいた。苗間をつくった日に、そのかゆかき棒を苗間の水にたてた。その前にもみをつまんでしんぜた（五代）。

一月十五日、かゆかき棒で小豆粥をかきまわす真似をする。そのとき、「それひけ、やれひけ」といつてかきまわした。苗代のときそのかゆかき棒を苗間の水口のところを立てておく。こうすると苗に虫がつかないといった（上泉町）。

苗代づくりのとき、苗間の水口にかゆかき棒をたてる。これは、田の神様に、苗の発育がよくなるようにとお願ひするわけである。

苗代が終わった日に苗代祝いをする。ご馳走は赤飯などいろいろ（萩窪）。

萩窪では、苗代をしたとき、苗間の水口のクロのところ半紙をして、炒った米と豆を山にしてきた。どういうわけだかわからない。

オサナブリ……田植が終わったとき、その田の水口の苗を、七・五・三、十五株とつてくる。家の炊き場のそばにご幣がまつつてある。そこへその苗を、お盆の上に、七・五・三に並べてしんぜた。ことしも豊作であるようにと田の神様に祈った。苗はあとでお勝手の出ごしのところにしんぜておいた。オサナブリのときは、苗が長く育つようにと、うどんをしんぜた。ご馳走は田の神様にあげるといすが、むかし

の人はオカマサマにあげるといった。このころは、田の神様にあげるといつている。オカマサマではわからないので、田の神様というようになつたのである（端氣）。

田植が終わったとき、苗を水口から七本とつてきて、箕に苗をならべ、箕の口を北にむけてオカマサマのところへあげた。田の神様にあげるといつておはぎとか赤飯、うどんなどをあげたりした（萩窪）。

田植が終わったとき、植えのこりの苗を水口でよく洗つて持つてくる。それを箕の中に七・五・三に並べて、そこにご馳走とご神酒をあげる。箕は台所に飾つた。本来は女衆が植えた苗を抜いてもつてくるのが正しいという。むかしは、マンガ（馬鋏）、テング（手鋏）も台所にならべてお祝いしたが、今はテングだけ、箕と一緒に飾つておみきをあげるだけ。この行事は稲の豊穰を田の神様に祈ることである。ご馳走は田の神様にあげるといふことである（亀泉）。

苗を水口のところからとつてくる。苗をとるとき、「ダイレン（来年）ゴザレ、タノカミサマ」と田植唄を歌いながらとつた。苗は七株とつて植えなおしてくる。七株の苗をうちへ持つてきて、これを十二株に分けて、箕の中にならべて台所に飾つた。そこへ、酒とめんを供える。めんの代りに赤飯をあげる場合もある。ご馳走は、田の神様にあげるといふことである（上泉）。（『群馬・農の習俗（一）カケスの会』）

ところで、オサナブリの日に、田の神様をまつるといふことについて注意したい。田植が終わった日に、田のアゼにわら宮の田の神様をまつる地区があつた。このことについては「信仰」のところに、鳥取と萩窪の報告がある。

萩窪では、昭和の初年のころまで、田植の終わった日に、田のクロにわら宮で田の神様の仮り宮をつくつて、赤飯を植えた苗を七株とつてあげた。田の神様に豊作をおねがいするのだという。竹の筒に酒を入

れていってあげた。仮り宮は毎年同じ場所につくった。このお宮をつくるうちは、地区でも三、四軒でそれほど多くはなかった。なお、この頃、手伝ってくれた人をよんでオサナブリの祝いをした。

小坂子でも、昭和十年代のころまでは、軒なみの字で田の神様をまつた。ここでは、田のイヌイの方向のすみのあぜの上にわら宮をつくった。ここに赤飯とご神酒をあげた。その晩はうちでも手伝いの人と呼んでオサナブリをした。

このように、田のあぜにわら宮をつくって田の神様をまつるところは、赤城南麓（勢多郡宮城村、大胡町、富士見村などにみられる）と一部北群馬郡子持村にみられることである。他に田の水口に竹をさして、ご神酒を供えて田の神様をまつるところ（勢多郡粕川村、前橋市二之宮町、泉沢町など）もみられるが、本地区の一部でも、オカリヤ型の田の神信仰の形をみる事ができる。

稲刈りのとき、刈りはじめのとき、いい穂をえらんでこいできて、それをお勝手のおかさまにあげた（荻窪・端気・五代）。稲刈りをしている都合のいいときに稲の株をとってきて、おかさまにあげる。それは一年中あげておいた（亀泉）。子供がのどに魚の骨をつかえたときに、この穂でのどをなでれば、骨のつかえがとれるといった（五代）。麦作については資料がすくない。ムギまきが終ると、アナツプサゲとかモグラツプサゲといわれる祝いをした。このとき、ぼたもちをつくって祝ったり（五代）、あずきがゆをつくって祝ったりした（日輪寺）。養蚕については、年三回がふつうで、四回飼育する家はすくなくかつた。春蚕と晩秋蚕をたくさんはきたてたが、晩秋蚕はあまりとれなかつた。養蚕は女衆が中心になつたことである（関根）。

養蚕は、この地区では、身上がけでやるうちが多く、現金収入はまゆの売り上げにたよっていた。養蚕をさかんにやっていた家では、利

根方面などから蚕の手伝いを雇っていた。田口では養蚕がさかんであつたから、臨時雇いが多かったので、夏の人口は冬の人口の倍もあつたという。また、養蚕がさかんなときには、蚕種業者が十五軒もあつたという。

養蚕をやっていた家では、製糸会社から金を前借りした。まゆがとれたらかねを返すといつて金を借りて、蚕がはずれると、次のまゆがとれたら返すといつてひきのばしたという。そのため蚕のことはでんぼう虫と呼ばれたという（上泉・荻窪）。蚕がはずれると大さわぎをしたことがあつたという。むかしは、養蚕が身上がけであつたのである。

#### (四) 交通・交易

本章では、交通・交易・運輸・通信などについての調査資料をまとめてある。

交通については、むかしの街道、橋や交通手段などの資料をまとめた。その中で、沼田街道は沼田と前橋を結ぶ交通路で、沼田藩の参勤交代用道路であつた。荒牧を通過し、近くには米野宿が繁昌していた。運搬関係では、むかしの背負い道具から、大八車、牛車、リヤカーから車へと大きな変化をみせている。この中で、リヤカーは、自動車が出現するまでの間、昭和の年代の前半を、農家の運搬用具の中心として大きな役割を果してきたのである。

通信関係では、ムラ内の連絡はイイツギや触れ番役によつた。半鐘は火事など有事の際に鳴らした。ホラ貝も区長が用事のあるときに使用したという。回覧板は第二次世界大戦中から現在に至るまで、隣組など近隣への伝達手段として利用されている。農協による有線放送は、ほとんどの農家が加入し、日常の諸連絡に大変有効に利用されている。



交易関係では、各地の市や行商人などについてまとめている。桑市は大胡に立った。馬市も大胡に立った。前橋は四・九の六斎市で近郊の人たちは、そこへ糸を売りに行ったという。上泉の赤坂には青物市が立ち、上泉大根が有名であった。主な買物物は前橋まで出かけたという。

むかしは、行商が各家庭にまわってきたり、街道をながしてあるいたりした。越後の毒消し売りや刃物売り、富山の薬売りなどはよく知られている。職人としては、越後や信州などから、屋根ふきがやってきた。

行商人のほかには芸人もやってきた。越後からのごぜは三、四人でやってきて、ムラの特定の家を宿にしてごぜ唄を歌ってみせた。このほか、三河万才や祭文語りなどもやってきた。これらの諸芸能の中には、ムラの中に語り伝えられたものもあった。

## (五) 信 仰

信仰については、担当者が本地区の特長的事項についてまとめているので参照されたい。

本章は、本地区の信仰について

一、家の神仏と信仰、二、村の社寺と信仰、三、講と俗信の三節に分けてまとめている。

ここでは、これらの中から特長的事項をとりだしてみることにする。

屋内神としては、神棚にまつられている大神宮様、かまどの神としてのおかさまさま、商売繁昌の神としてのエビス、大黒様、馬の神様としてのオソウデン様、蚕の神としての絹笠様、オシラ様などがある。また、先祖様の位牌をまつる仏壇は、神様と仏様は近い関係にあると

いって、神棚の下におく。

このうち、神棚は、それぞれの家庭の屋内神の中心的な信仰対象として、仏壇とともに日常の信仰対象とされている。ここには、大神宮様や諸社のお札をまつる。むかしは、朝晩お灯明をあげ、おがんだという。諸社のお札は、毎年新しいものとりかえている。

おかさまさまは、その姿をとらえにくい神様である。まず、おかさまさまに対する信仰の様子をみることにする。神無月におかまのるすんぎょうをしてまつったり、田植のあとのオサナブリのとき苗を供えたり、稲や麦の初穂を供えたりしている。本地区では、どうも作神的な性格が強い。その名のとおり、かまどの神としての性格ははっきりしない。

荒神様については、三本の幣束をご神体として、神棚にまつている。この点にはつきりとおかさまさまと区別されている(五代・関根・日輪寺・荻窪)。しかし、人によつてはおかさまさまと荒神様は一体だという(荻窪・小坂子)。一方で、かまどを守る神様がおかさまさまで、火を守る神様が荒神様で、荒神様のほうはたたる性格をもっているというところもある(嶺)。たとえば、ゆるり(いろりのこと)で汚れた物を燃すと、荒神様がおこるとか、火ノ神様がおこるといった。また、やけどをさせるともいう(荻窪)。また、かまどをいじると荒神様がおこるといったり、いろりで汚い物を燃すと、足をつつこんだりすると、いろり神様とか、荒神様がおこるといったりする(五代)。

ここでは、荒神様はおこりっぽい神様で、かまどの神様であつたり、いろりの神様であつたりしている。

ところが、おかさまさまはかまどの神様で、神無月に神様が出雲へ行つているときに、えびす様・大黒様と一緒に留守居をしているともいう(荻窪)。そのために、ルスンギョウをする。オカマノルスンギョウと

いつて、ぼたもちをつくつて、おかまさまにあげるといふ(荻窪)。五代では、オカマノルスンギョウのときには、おかまさまにあげますといつてながしの棚にあげるといふ。亀泉では、神無月に留守居をしているのはおかまさまだけといふ(子供がたくさんいるので、出雲へ行けないのだといふ)、旧十月六、十六、二十六日に、ルスンギョウといつて、おかまさまにぼたもちをしんげた。その数はべつにきまつていないが、ながしの棚にしんげた。下細井では、三本荒神様はまきわらに三本の幣束をたてて神棚にまつてあるといふ。荒神様は火伏せの神といふ。おかまさまはへつといふところに幣束を一本たててまつてゐる。かまどの神様であるといふ。上泉でも、三本荒神様は火伏せの神様、おかまさまはかまどの神様といつてゐる。おかまさまには、十二月十五日の稲荷祭りのとき、なわを三本よつて、一本に三つずつのよたれべいをさげ(合計九つ)、うらの出入り口の上(屋根裏)に張つておく。おかまさまにあげるといつた。五代でも同様である。

オカマノルスンギョウについては、本地区でははつきりしないが、「年中行事」のところにも報告がない。

屋敷神の中心は稲荷様である。屋敷稲荷という言葉があるように、本地区においては、屋敷の守護神として一般的に稲荷様をまつてゐる。最近石宮が多くなつてゐるが、むかしは、屋敷の西北のすみにわらでオカリヤをつくつてまつた。これは、毎年つくりかえるのを例とした。このまつりの日どりは地区により、家により異なる。屋敷神に対する信仰は多面にわたつてゐる。屋敷の守護神であるので、その家の家族のいろいろの願いを聞いてくれる。火伏せの神、子供の名付の神、百姓の神であるといふ(上小出)。稲荷様への供え物は、赤飯、豆腐、あぶらげ、おかしらつきなどである。この中に、オシトギを供えるといふ報告(上細井・日輪寺)があるが、県内でも、稲荷祭りの

ときオシトギを供えるところがあり、古い供え物として注目される(報告にはないが、ほかに五代や上沖でもオントギを供えている)。なお、供え物について、これをさげられないと、もう一度供えなおしたといふ。これは、稲荷様が生き神としての性格をもつてゐることを示してゐる。稲荷様のほかに屋敷神として八幡様などをまつてゐる報告もある(五代・小神明・荻窪)。

ムラの鎮守様の祭りについては、春と秋に行うところが多い。この間に、夏祭りを行うところもある。夏祭りは祇園祭り、一部の地区(上細井・端氣・青柳・関根・荻窪・江木など)で行われてゐる。

春と秋の祭りは対をなしてゐると考えられる。春に豊作の祈念を行い、秋は収穫の感謝をするといふ形であるが、時期的には農作業の日程とあわない面がある。祭りの内容(目的)がはつきりしない。村内安全と五穀豊稔の祈念が一般的のようである。夏祭りについては疫病除けと目的がはつきりしてゐる。

この中で秋祭りについて若干まとめてみたい。

秋祭りはオクンチと呼ばれる。もとは旧九月九日、十九日、二十九日のうちの一日をそれぞれムラできめていた。新暦になつてからは、十月に移してゐる。このとき、子供が神社の境内を中心に灯籠をつけ、相撲大会などの催し物が行つたところもあった。上沖の大黒様(神明宮境内)の大相撲と小神明の神明宮の大灯籠(仕掛け。上沖・端氣・時沢の青年が応援にきた)、上泉の屋台と獅子舞、北代田の神楽などがある。

オクンチのときは、宵のうちから親戚の者を呼び、接待するのが一般的な形となつてゐる。また、オクンチには、前の晩から子供たちが神社におこもりをしてゐた。そこへ、ムラの人が早朝赤飯をあげに行つた。なお、青柳の雀様は子供のハシカ、ハウソウ予防の神様として信

仰されていた。また、各地の天神様は子供たちの天神講のときに、字が上手になるように、勉強が出来るようにとお参りに行った。

次に、仏教関係の信仰についてとりあげてみる。

一月元日には、檀家の人たちは寺へご年始に行く。四日は坊さんの年始日で、坊さんが各檀家を年頭の挨拶にまわる。四月四日のお釈迦様の誕生には寺へ甘茶をもらいに行つた。これは子供たちが中心であつた。春秋の彼岸には墓参りをしたし、盆のときには寺まで盆様を迎えに行く。

新米がとれると寺へ初穂米として納めたところもある(五代)。年忌の供養は、それぞれの家で、寺の和尚さんを頼んでおがんでもらい、墓へ塔婆をたてた。

以上は、行事的な事項であるが、次に本地区の仏教関係の民間信仰についてとりあげてみる。

一月三日に龍藏寺町の大師様へ厄除けにお参りに行く人が多い。こへは、近郷近在からかなりの人出がある。

東片貝の片貝神社の境内に虚空蔵様がまつてある。ここのおまつりは一月と四月(もとは三月)の十三日。虚空蔵様は丑寅生まれの人の守り本尊として信仰されている。虚空蔵様の眷属はウナギである。その関係で東片貝、西片貝の人たちはウナギを食べない。境内にはウナギ池があり、信仰者がウナギをこの池に放した。このウナギは、片目といわれ、目の祈願者の身代りになっているのだといわれている。十二年目ごとに小開帳、丑寅の年(六十年ごと)に大開帳を行っている。なお、一月と四月の祭日には、前橋市指定無形文化財の太々神楽が奉納される。

この地区には、下細井町にも虚空蔵様がまつられていて、四月と十月十五日が祭日となっている。片貝の虚空蔵様はもとここにまつられ

ていたという伝承がある。

関根町の摩多利神は金剛寺の境内にある。厄病除けの神として信仰されている。三月二十四日が祭日。もう一つの摩多利神は上細井の端気田グルワの人たちがまつっているもので、やはり厄病除けの神として信仰されている。祭日は七月二十四日。近くでは富士見村横室の横室会館の敷地内に摩多利神の石碑が立っている。

荻窪の麦わら地蔵は、旧六月二十三日が祭日で、この日は麦わらを高く積み上げて火をつけ、灯籠をつけ、念仏を唱えるという形の祭り方をしている。厄病除けという。

このほかに、各地の地藏様、薬師様、観音様、大日様、阿弥陀様、不動様に対する人びとの信仰の形を報告している。

次に、各地の民間信仰についてみることにする。

秋葉信仰としては、実際に火災にあつてまつたという例もあり、いわば体験的な信仰がみられる。火伏せの神としての信仰である。

石尊信仰も夏の行事の一つとなっている。神奈川県伊勢原市に本社のある阿夫利神社(雨降山)に対する信仰で、広く農耕神として信仰されてきた。各地に石尊宮と書かれた石燈籠があり、それに、川で水垢離をとつてから、地区の人びとが交代で灯明をあげ、流行病除けの祈願などをした。

五代の木福様は、この近在では有名な神様で、できもんの神様として信仰された。祭日は旧十月十四日。参拝者はワラツトにごまだんごを入れて持つてきたが、供える前に、待ち伏せをしているわかいしゅに途中でとられてしまったこともあつたという。参拝者はそれを取られないように早く投げて供えたという。ちよつと変つた行事であつた。この日は風が吹くといひ、荒れる神様といわれた。木福様と同じところに、福守様がまつられている。祭日も同じ日。戦前には下の病いに

効くといっているので前橋あたりから花柳界の人たちがお参りに来たという。田口町の八幡様のうしろにまつられている福守様も同様の信仰があった。こちらは祭日が四月二十八日。この日は隣接の雷電様の祭日でもある。ムラの世話人がでて祭りの世話をしている。

次に宗教的集団としての講についてみる。

講には、ムラ内で行っている村内講と、代表が信仰している社寺へ代参に行く代参講とある。

村内講の中で特にさかんであったのは庚申待である。庚申信仰がさかんであったことは全県的な傾向であった。庚申様は作神として信仰され、地区内に残る庚申塔も多い。

次に、庚申待の様子を示してみることにする。

○幸塚町の庚申待（昭和三十四年調査）

幸塚は現在（昭和三十四年）七十戸ほど。ここにはむかしは四組の庚申講の組があった。現在庚申待をしているのは一組だけ。その組はもと六軒であったが、よそから来た人が加わって七軒となっている。この組は享保年間から庚申講の組をつくっているという。

庚申待には一戸一名ずつ、男衆が参加、庚申待のときには米を持ち寄せる。自分が食べる量だけ持つて行く。庚申待は十二月におこなう。宿の順はくじびき。一番と六番にあたった者は餅をつく。その他の番の者は好きなものをご馳走した。以前は近親者を招待してにぎやかにした。庚申待のときには農作物の作柄などを話題にして、朝食を食べべからわかれた。

「話は庚申待のときにしろ」といわれた。

庚申様は正月様と仲が悪いというが、このことは、坊さんがいった言葉だという。正月には神様がいますので、仏様をまつてはならないとして、一月十五日前には庚申待をしないで十日遅らせていた。十五

日過ぎれば庚申待をしてもよいといわれた。

もとは、年六回の庚申待をしたが、現在は十二月に一回だけとしている。最後の宿の家で庚申様の餅を一臼ついて、正月のおそなえをかさねつくつた（一臼の餅全部でつくつた）。その餅米は宿で負担した。庚申様の餅は、節餅より前につくのがふつう。米をといでつきあげるまで女の人に手をつけさせず、一切男衆がした。この餅は、田の神にあげますといって、別扱いにしている。

正月中は庚申様の掛軸（一徳齋が慶応三年に書いた青面金剛像）を床の間にかけて、その前に前記のおそなえ餅を供えておく。

庚申様の軸があるうちに火災があるといけないというので、その軸は正月三が日がすぎるとはずしてしまおう。おそなえ餅はあとでほかの餅と一緒にして食べる。

なお、庚申様の掛軸は、十二月三十日のお飾りのときに飾り、おそなえ餅も供える。このおそなえは一年中の作物に関係するので、前記のように田の神にあげるといった。庚申様に田畑の耕作物を守ってもらうと考えている。おそなえは、大体一升分くらいの米でつくつた（カケスの会編『庚申信仰』より）

このように、庚申様は作神様としての信仰が強く、正月様と不仲であるという考えが、前橋市東部の地区にみられることが特長である。

天神講は、一月とか三月に、子供たちが集つて行う行事であった。子供たちが宿をきめて宿泊し、会食をしたり、「奉納天満宮」という習字を、近くの天神様に奉納した。オクンチとともに、子供同士が宿泊する行事である。

二十三夜待は、女衆が集つて行つた。宿に集つて縄をなつたり、お針仕事をしながら月の出を待った。上泉では、年寄りが集つて念仏を申していた。そこへ、妊婦がご馳走をつくつて持つて行つた。三夜様

を信心すると安産できるといった。お月様があがるまで念仏を申し立て、あがると、お月様をおがんで解散した。他の地区では、娘たちが集って三夜待をした。三夜様を女衆がまつたところもあった。このほか、弁天講、社日講、念仏講などもあった。

赤城講は、前は赤城様へおまいりに行ったと考えられるが、今は赤城様とは関係なく、組の者が集って餅をついて食べる赤城講となっている(五代)。

講の中で珍しいのは、荻窪町の道陸神講である。これは次のような内容である。

荻窪では春と秋の彼岸のころ道路普請をする。このあと、わかいしゅが集って会食をした。会場は、荻窪の西には竜洞庵、東には相統庵という庵室があつて、そこを公会堂として使っていたので、会場とした。宿は西と東で一回ごとに交代した。餅米(三合ずつ持ち寄せ)と小豆、砂糖を用意し、ぼたもちをつくった。これを食べたり、庵室のところにある道陸神塔に供えたりした。これは、もとは荻窪のわかれん、のちに青年会の行事であつた。道に関連して道陸神講と名付けたところがおもしろい。

以上がムラ内で行われる講組であるが、このほかに代参講があつた。おもな代参講としては、信州の戸隠講、木曾の御嶽講、沼田の迦葉山講、高崎の少林山講、世良田(新田郡尾島町)の天王様の講などがあつた。この中で、五代の戸隠講は八十年の歴史をもつという。

三峰講は、埼玉県の奥秩父の三峰神社の信仰をしている。ここへ四月に代参に行つてお札を受けてきた。講は大体クルワごとの組織になつていて、一組に一名とか二名の代表が三峰神社まで行つてお札を受けてきて、宿で会食をし、お札を分けた。三峰様のお姿はお犬様で火伏せ、盗難除け、諸災除けの神として信仰されている。大体クルワ

ごとに三峰様のオカリヤをつくり、そこへお札とご眷属のお姿を納めた。各戸に配布されたお札は、とぼ口とか、お勝手などにはつておいた。

伊勢参宮は一生に一度は行くものとされ、むかしは伊勢講をつくつて、交代で伊勢参りをした。交通機関が今のように発達していなかったころは、この辺から伊勢参りに行つてくるには一カ月もかかったという。そのために出かけるときは家族で水盃を交わして出かけたということである。近所の人とか親戚の人たちからは賤別が贈られた。伊勢参りの間は、オカリヤをつくつて、毎日家族の者が無事を祈つた。出発するときも、帰つてきてからも、関係者をよんでお祝いをした(立ち振舞、下山祝い)。神社の境内にある参宮記念の石燈籠や石垣などは、かつての伊勢参りのムラの人たちの大きな関わりあいを示しているといえよう。

信仰関係では、このほかに、小坂子の赤城への総参りのことが注目される。五月八日の赤城の山開きの日に、一戸一人ずつ参加して赤城神社へお参りに行つた。このことは、ムラの規則としてきまつていたことである。むかし、小坂子が大変な降雹の被害にあつたとき、これからムラ全員の者が赤城神社へ毎年五月八日にお参りに行くからお願生をかけたことによるという。それから降雹の被害を受けなくなつたという。この日は、ムラの人全員が鋏を使わない。苗代をしないときめ、この日はムラの監査役(一区二名ずつ、十名)が区内をまわつて点検するという。ムラの人には赤城神社へおまいりして、嵐除けのお札を受けてきた。赤城北麓の利根村に総参りの風習がみられるが、南麓の例は珍しい。

赤城に関連して、盆月一日のカマノクチャアケのとき、地藏岳のかまの口がいて仏様がうちへお客に来るといった。小坂子の石田義信さ

ん（明治29年生まれ）は七歳のとき、おじいさんに連れられてこの日地蔵岳へのぼった。そのとき、四ツ前（十時前）にガキボツタ（地蔵岳の下のところで、すこしくぼくなっている）へ行くと、蚊の鳴くよ、うな、人がしゃべるような、にぎやかな声があるといわれた。そこで、わあわあする声を聞いたことがあったという。また、そのとき、子供のあしっこ（足跡）がつくといわれたが、それは見なかったという。そのとき、地蔵岳のかまの口があいているのだといわれた。（さいのかわらで）子供の仏様が、鬼にいじめられるのを、地蔵様がかわいそうで見たいらなくなつて子供をかこつてくれて助けてくれるのだという。これは石田さんの話である。祖霊のあつまる山としての赤城の信仰の一端を示しているといえよう。

仏教的な行事として注目されるのが、各地でみられる百万遍念仏である。それは、小神明、上小出、日輪寺などの報告があるが、「ナンマイダンボ」と唱え、厄病除けの行事である。

このほか、田の神信仰や雨乞いのこともあるが、「生産・生業」のところを参照されたい。また、八丁注連については、「年中行事」のところ記してあるので参照されたい。

#### (六) 民俗知識

本章では、民俗知識について次の六節に分けてまとめてみた。

一、しつけ・作法・禁忌、二、医療・衛生・保健、三、卜占・まじない、四、天文・気象、五、数理、六、動物・植物

各節とも各地の事例を項目別に分類して、まとめてみた。

一の「しつけ等」については、衣食住関係の内容が中心である。そのほかに農耕・出産等の事項を含む。

二の「医療等」については、かつての民間医療の概要を示してある。

この中には、現在でも用いられている薬草についての報告をふくんでいる。呪術医療については、そのほとんどが過去のものとなっている。

三の「卜占・まじない」については、特にまとまった資料をあげることができなかった。クモの動きとか、夢による占いが中心である。まじないとしては、失せ物、雷除け、捨て子（厄おとし）などについての報告がある。

四の「天文・気象」については、気象関係の報告が比較的多い。このことは、農作との関連で、人びとの関心の的となったと考えられる。「小幡の三束雨」は、「御荷鉾の三束雨」ともいい、この地方では、早くやってくる雷様として、よくいわれている言葉である。

五の「数理」、六の「動物・植物」については、それぞれ若干の資料をあげてある。

#### (七) 芸能・娯楽

本章では調査地区に伝承されている郷土芸能について、次のように分類してまとめてみた。

一、神楽・獅子舞、二、歌謡、三、門付け芸能、四、地芝居、五、燈籠まつり他、六、その他

それぞれの内容については、聞き取り資料のほかに、文献資料を援用してまとめてある。

一の「神楽・獅子舞」については、嶺・片貝の太々神楽、上泉の獅子舞について詳細な報告をしている。

嶺の神楽は江戸時代末期からはじめられたとされる。もとは十二座の演目があったが、最近是天狗の舞、田神、鉦女、岩戸、鯛釣り、小屋根、鍛冶屋、火の神の八演目を奉納している。むかしは県内各地へ

出張したり、明治年間には伊勢神宮へも奉納したことがあるという。

片貝の神楽は明治初年に市内元総社町の総社神社から伝えられたものという。もとは長男のみが伝承してきたが、最近はその枠をはずして自由とした。神楽の演目は二十一座、祭礼の日には必ず奉納するのは、大幣、神招、伊佐奈岐伊佐奈美命、天ノ岩戸の舞、猿田彦大神御供の五座。現在では青年団が中心となつて継承している。

上泉の獅子舞は、十月十七日前後の日曜日（もとは十七日が祭日としまつていた）に諏訪神社の境内で奉納される。ここの獅子舞の伝承経路は不明であるが、古くからの伝承という。獅子は一人立ち三人獅子で、法眼、雄獅子、雌獅子といわれている。舞いには歌舞伎や神楽の振り付けがみられるといわれ、古風な形をあらわしている。獅子舞の奉納者は列火精進を行い、きびしい修業を積んでいる。その様子を詳細に伝える記録は貴重な資料といえよう。

二の「歌謡」は、田植唄、麦打唄、馬子唄、念仏などをまとめている。田植唄の中にはおさなぶりの唄が収録されているが、資料的に貴重である。麦打唄（穂打唄）は即興的な歌詞というが、軽妙な内容を示している。このほか、馬子唄、草刈唄、かぞえ唄、子守唄などが報告されている。

三の「門付芸」は、この地区へやってきた芸人について報告している。万才、ごぜ、祭文語り、春駒、浪曲師、猿まわし、獅子舞などの芸人がやってきた。万才や春駒など年の始めにやってきて、各家をめぐって春の寿ぎをした。小坂子に伝えられている祭文唄は、大変貴重な資料である。むかしは、こうした芸人たちが時を定めてムラを訪れて、人びとに季節の到来といろいろの芸能を伝えたのである。

四の「地芝居」は、本地区に伝えられている地芝居について、各地の様子を伝えている。

五の「燈籠まつり他」は、かつてこの地方で「小沢の花火、小神明の燈籠」と地口にまでいわれ、よく知られていた小神明の燈籠まつりの様子が報告されている。今はその様子を示す燈籠小屋などもなくなり、今はその記念碑が建てられている。

片貝の虚空蔵様の祭りもこの近在ではよく知られている。このとき前述のように太々神楽が奉納されるが、六十年ごとの御開扉（御開帳）のとき、別当所の西片貝の玉蔵院から東片貝の虚空蔵様までの間、厨子を行列で遷す。このとき、神主を先頭にして居合抜きの人たちの露払いや、神楽のおはやしと舞い子たちがお練りをする。道中の辻での剣を抜いての悪魔払いをしながらの行列である。近在には珍しいお練りである。

六の「その他」では、かつて本地区で行われていた各地の獅子舞や競馬のことや、子供たちの伝統遊戯（遊び）やわかいしゆの娯楽などについてまとめている。

#### （八）人の一生

「人の一生」についてはくわしい報告がおこなわれている。調査を、次のように分けてまとめている。

一、産育儀礼、二、厄年・年祝儀礼、三、婚姻儀礼、四、葬送儀礼。これらの諸儀礼（習俗）の中から、特長と思われる事項をとりあげてみる。

一の「産育儀礼」については、調査資料を（一）子授け（二）妊娠から出産（三）出産（四）子供の成長と祝の四項目に分けて各地の産育儀礼をとりあげている。

子授けや安産祈願では、前橋市下大屋町の産泰様が大きな役割を果していることを知る。産泰様の祭神は木花咲耶姫で、この近在はもと

より、県内外から広く子授け安産の神として信仰されている。遠地においては分社をもつほどである。

「辰己藏の米をくれると子ができる」という報告（東片貝）がみられるが、それは市内東上野の女屋喜代松さん方の土蔵にある米をもらうてきて食べると子が授かるというものである。

出産に際して、擬婉の報告が各地区からなされている。出産に際して、夫が石臼を背負つて家のまわりをまわり、妻と同じ苦しみを味わうということである。このことは県内各地に事例があるが、本地区においては報告例が多く、かつてはこうしたことが広く行われていたことを知る。

出産に際しての産婦の里の協力の様子を、力米のことから知ることが出来る。こうしたことは、産後の肌着、七夜着やウブキから初節供のひな人形やのぼり、子供のお歳暮（羽子板や破魔弓）までつながっていく。

出産後の習俗として、ウブタテメシのことは、死後のデハノメシとともに、生と死の確認として注意すべきことである。ただ本地区ではこのとき産神へ供えるという形がはっきりしないが、まわりの人との共食するという産飯本来の形はとらえることができる。

異常出産については、報告が少ないが、サカサッコ、ブドッコ、ケサッコなどが報告されている。このほかに、ケツカイといって、ふわらした毛が生えて生まれる子があつたという。ケツカイに生まれるとすぐさまう。それだから、お勝手の水がめの水を飲む、そうすると母親が死んでしまふ。それだから、ケツカイが水がめのところへ行かないうちに殺せといった（上泉）。このことについては、県下から広く報告がみられるが、異常分娩に注意していた様子を知ることができるし、古い習俗を窺うこともできよう。

育児儀礼については、まず名付けのことがある。候補の名を屋敷稻荷に供え、そこから子供にひかせてきめるといふ形がみられる。このことについて、県内の他所では、なにも知らない子供に選ばせるといっている。命名も神意にもとづくことを示しているといえよう。

便所まわりについては、生後三日目のところ（小坂子・勝沢・北代田・下細井・田口・青柳・石関・荻窪）と、七日目のところ（鳥取・嶺・五代・川原・関根・三俣・西片貝）とある。三軒の家の便所を、橋を渡らないでおまいりした。あかんぼうの初外出である。

オボアキは男が十九日目、女が二十一日目である。この日あかんぼうは母親や祖母につれられ、ウブギを着てお宮まいりをし、母親の里へお客に行つた。忌みあけの日に初の宮参りをしたわけである。なお、お宮まいりのとき持つて行つた赤飯を神様にあげたあと、そこに居あわせた人たちにも食べてもらったという（五代、上泉）。

捨子の風習もみられた。それは、厄年つ子とか、弱い子、歯が一本だけ生えたオニッコ、生後十月で歯の生えるトツキトウバの子などである。三本辻に捨てて、近所の人に拾ってもらつたが、拾い親との親子関係が目立つたことはないようである。

七五三の祝いは近年さかんになつたことで、むかしはこの祝いをするうちはほとんどなかつたという。

二の「厄年・年祝儀礼」についてみる。

子供の厄年は四歳といい、太田の呑竜様とか、新田町の反町薬師、あるいは、前橋市朝日町の高岑院におまいりに行く、また、弱い子は三十三軒寄せの着物を着せたり、太田の呑竜様にお願生をかけて呑竜坊主（七つ坊主）にしたりした。

大人の厄年の人たちは、近在あるいは遠地の神社や寺院へおまいりに行つたり、芸人をたのんだりして、厄除け、厄おとしをした。



年祝いについては、喜寿と米寿の祝いとあるが、むかしはめつたに  
しなかったという。長寿社会になり、近年に至つてさかんになった祝  
いである。

三の「婚姻儀礼」については、まずむかしのわかいしゅの活動の様  
子が報告されているが、青年会の活動が主である。むかしのわかいしゅ  
としては、荻窪のワカレンの活動が目立つ。また、各地のわかいしゅ  
の夜遊びの報告もある。

婚姻関係では、むかしの縁談・縁組みの様子が報告されている。見  
合い結婚が一般的であつたが、ずっとむかしは、見合いなしで、親同  
士ではなし合つてきめたという。むかしは縁談には仲人の役割が大き  
く、仲人のゾウリキラシとかナナデンボの話があつた。

縁談のとりきめについては、口がため(樽立て)、カドイレ、アシイ  
レなどの報告がある。

婚礼(嫁入り)関係の習俗については、いろいろと注目すべきこと  
がある。

まず、結婚式の日程をみると、「祝儀三日」という言葉があるが、次  
のようになつていた。

○式の前日……結納おさめ、結納振舞

○式の当日……モライ一見(ムカエイチゲン) オクリイチゲン

トリムスビ(夫婦盃・親子盃) そのあと名びろめ(嫁と兄弟の名  
乗り)

一見座敷・ワカイシユ座敷・一般の座敷(親類の人と近所の人など)  
○式の翌日……カネツケの祝い(婿が赤飯を嫁の里へ持って行く)

アトズネ(嫁の親とかきようだいが来る)、嫁さんのムラマワリ(姑  
につれられて、屋敷神・鎮守様におまいり、隣組とかムラ内の親戚  
のところへ挨拶)

○三日目……里帰り(もらい方の母親がついていく)(下細井)

場所によると、二日目にオクリイチゲンがくるところもある。これ  
がアトズネである。また三日目の嫁帰りのとき、女一見が行くところ  
もある。また、五日目にひぎなおしといって嫁が里へ帰つてきて翌  
日あたりに嫁の母親が送つてきて嫁ぎ先の近所を挨拶まわりするところ  
もある(川原)。トリムスビのところ、この地区のしきたりとして  
は、かわりむこのことや、仮仲人のことがある。かわりむこは、三々  
九度の盃の途中(二度の盃をすませてから)むこがいなくなり、代り  
のむこをたててトリムスビを行う。また、夫婦のトリムスビは本当の  
仲人がするが、親子の盃は仮仲人がする。あるいは、トリムスビ全般  
を仮仲人がするところ(上沖)もある。これは前もつてたのんでおい  
た。ご祝儀のやり方は地区によつてちがう点がみられたのである。

「嫁の里帰り」については年間の里帰りの機会をまとめてある。こ  
の中で大事なことは、節供歳暮という言葉があるところ、三月・五月  
の節供と、八朔の節供のときの里帰り、歳暮のときには、嫁に里へ  
お客に行き、届け物をした。三月の節供は菱餅、五月の節供にはタラ  
の干物と赤飯、八朔にはショウガ(場所によってはゴボウ)と赤飯を  
持つて行くのが例であつた。八朔のときには里からメカイなどのお返  
しがあつた。このほか一月四日には初嫁の場合、婿のご年始といつて、  
大判餅を持つて行く、これはジנגダから泊らずに帰つてきた。一月  
十五日は鬼の首も許されるという日でゆつくり行つて泊つてきた。

このほか、初嫁は盆前に親が丈夫なら生き盆といつて婿と一緒に  
行つた。ムラの祭りや秋の収納の終つたあとの秋あげなどに里帰りを  
した。

最後に四の「葬送儀礼」について特長的な事項をとりだしてみる。  
魂呼びについては、耳のそばで呼びもどしをしたり(荻窪、田口・

関根)、井戸にむかつて病人の名を呼んだりした(嶺・小坂子・勝沢・石関・堀之下・三俣・川原・北代田)。

通夜はむかしは、近親者のみで、一晚、仏様の枕もとに寝たという。湯灌はむかしはていねいにした。ごく近い血のつながりのある者がした。そのあと、はだして近く川まで行つて体を清めてきた。

むかしはたて棺であった。かめ棺は火葬など一部の人がつかった。

葬式の連絡はツゲの人が二人ずつ組んで行つた。ツゲ飯という言葉があるように、行つた先ですぐご飯を炊いて出してくれた。

穴掘りは順番がきまつていた。トメアナは掘らないといつて、当日掘つた。

野辺送りについては、それぞれの役柄は、仏様とのつながりよつてきまつた。位牌はあととり、膳はその嫁、棺桶は近所の人、天蓋は近親者、花かごは孫がもつ。

庭まわりはするところとしないところとあつた。葬列は、行きと帰りはべつ<sup>の</sup>道を通つた。

むかしは香奠として、米とか粉に線香をつけてもつてきたという。二升づきあいとか三升づきあいといつていた。むかしの葬式のとときの帳面をみて、もらつただけの米とか粉をもつていった。その後におかねを持つてくるようになったという。

上泉には、庭帳というしきたりがある。これは、葬式がでたとき、親戚とか近所の人、懇意の人などは香奠を持って行くが、ムラ内でも縁のうすい親戚とか、よそのクルワの人などは庭帳をもつていく。香奠を出した人は持つていかない。それは、現在は千円である。庭帳を出してくれた人は香奠とはべつに帳面に控えておく。そして、そのうちで葬式がでるときには庭帳をもつていくようにした。そして、おたなあげのときに、施主が羽織を着て、イミアケ(ユミワケ)といつて、

庭帳をもらつたうちへ「お葬式るときはお世話様になりました」といつてじんぎにまわつた。庭帳あるいはこれに類似の習俗は本地区には見当らない。これは、お線香代とか、四十九日のあいびのお燈明代ということであるという。ユミアケというのは忌み明けということであると考えられる。本地区でも上泉以外にもこの習俗はみられた(亀泉・荻窪・関根)。

このほかに、おたなあげ、位牌分け、水掛け着物、年忌供養(三十三三年忌のとむらいあげなど)、同齡感覚としての耳ふさぎ(ムラ内の若い年の者がなくなつたとき、そのことを聞かないとて、馬糞を紙にくるんで耳をふさぐこと。(堤)、ヒノウエ(ごく身近かな者が、香奠のほかにおかねとか米などを持つてくること。上沖・上泉)、縁切り髪(夫婦で相手がなくなつたとき、髪の毛を切つて棺箱に入れてやる。亀泉)などのことがある。どこのムラでも現在まで行つているということではないが、古い葬送関係の習俗として、本文にないので、一部地区で行われていることをとりだしてみた。

## (九) 年中行事

「年中行事」については、各月べつに、本地区内のおもな行事についてまとめてある。

各月ごとに、特長的な事項についてとりだしてみる。一月の行事の中では、大正月関係の行事と小正月関係の行事が中心となる。

大正月の関係では、まず、各家の正月三が日の家例についてみることにする。これは、むかしからのしきたりで、各家できまつた食習が伝えられている。その分布の状況まではわからないが、種類としては、ソバ・ゾウニ・赤飯がある。『勢多郡誌』によると、芳賀・南橘・桂萱

の三地区はめん家例の家が多いという。

二日にはウタイゾメ(片貝)があつたというが、報告例はすくない。若い衆(ワカレン)の初会合である。

四日はタナサガシ。三が日あげたものをさげ、七日までとつておいで七草がゆにまぜて食べた。この四日はまた、ムコの年始ともいう。よそでは、ナベカリといい、初嫁の里帰りの日とされた。この日は前述のようにジングィの日であつたから泊らずに帰ってくるものとされた。坊さんの年始日でもあつた。

六日は、山はじめ(山入り)の日でもあつたが、この地区の西半分を中心にして六日年とよんでいる。女の年取りという。馬の年取りというところ(上細井)もある。行事の内容ははつきりしないが、この日を年取りとしている。この行事を行うところと行わないところが、ほぼ東と西に分れている点が、周辺の地域との関連で、今後の課題であらう。

一月十四日がおかざりかえ。本文にあるように、正月飾りはずして、お松の芯だけのこしてお飾りのところにさし、この日つくつたまゆ玉やハナなどを飾つた。前日に各家をまわつてあつめた正月飾りで小屋をつくつて、十四日の晩にドンドン焼きをした。この晩にオタキアゲをした。この報告は萩窪だけであるが、他でも行つていたことである。五代では、おしらまちといって蚕の神様をまつたし、上泉では、男衆がご飯を炊いてこばち二つに山盛りにして、柳の箸を六本ずつさして正月棚にあげる。これはあとでさげて、男だけで食べた。これをおしらみ(おしらび)まちといった。なお、日輪寺でも同様の行事があつたというし、田口の塩口の塩原家では六日年に同様の行事をしたという。六日も十四日もとしりとみられているから、同じ形の行事が行われたと考えられる。

十五日の朝、小豆粥をつくることは、各地区共通のことである。このときかゆかき棒でかゆをかきまわすが、このかゆかき棒をとつておいて、苗代のとき苗間の水口にさすことは、「生産・生業」のところでは報告のとおりである。小豆粥をかゆかき棒でかきまわすのは、代かきを意味しているという(片貝・五代)、田植の予祝行事である。この日はまた嫁のご年始であるし、奉公人の休み日(十六日も)であつた。小豆粥を煮た鍋とか釜を洗うが、その洗い水を屋敷にまくところもある(堤・上泉・関根)、これはおもに女衆の仕事であつた。こうすると、へびやムカデがうちの中に入らないといった。これと同じことを、十八日にするところもある。それは、十五日の小豆粥をとつておいて、十八日の朝食で、その残りを水でうすめて、うちのまわりにまいたのである(三俣・日輪寺・萩窪・上泉)。

十四日にあげたまゆ玉は、十八日にまゆかきとつた(萩窪)。二十日は二十日正月、夜エビス講をする。二十五日が天神様の日で、二十四日の晩に子供たちが宿にあつまって天神講をした。

二十八日はしまい正月。

二月の行事としては、一日が次郎の朔日。

三日ごろが節分、豆まきで、この辺では、この日のことをとしとりという。豆を炒るとき、ヒイラギの二又にイワシの頭をさして唱え言をいながら焼いてとほ口にさすことも、この周辺の地区と同様である(これをヤカガシという)。なお、小神明では、ヤカガシを苗代をしてから苗間の水口にさした。こうすると、虫がつかないといった。

二月の初めの牛の日を初牛といってまゆ玉を飾り、かいこの神様(おしらさま)をまつる。

二月八日をコトハジメといって、むかしはメカイの中にヒイラギの枝を入れて、竹の竿の先に結えつけて庭先に立てた。天からかねがふつ

てくるといった。悪魔除けともいった(萩窪)。トボ口にヒイラギの枝をさすところもあった(五代)。この日はまた針供養の日でもあった。

三月にはひな祭り、梅若(三月十五日)・彼岸・社日の行事がある。

三月の節供のときには、五月の節供、八朔の節供とともに嫁が里帰りに行くことは、別項に記すとおりである。飾らないひな様があると泣くという。古いひな様は川へ流した。嫁にくるとき子供のとくにもらったひな様をもつてくる人もあった。それは、その人がなくなつたとき棺に入れてやるという(東片貝)。

彼岸の中日に天道念仏をすることもあった(三俣)。それは天道様をまつたもの。

四月には、一月遅れのひな祭りをするところもあった(三俣)。

八日は寺で花祭りをした。子供は甘茶を飲みに行った。

十三日は東片貝の虚空蔵様のご縁日。

十五日を中心に各地で春祭りが行われる。

五月は、端午の節供が中心、現在では、鯉のぼりや吹きながしがみられるが、むかしは英雄豪傑などの絵ののぼりを立てたという。シヨウブとヨモギを軒下にさしたが、これは魔除けのためであった。子供の初節供については、近年になって贈答が派手になつたようである。このときの嫁の里帰りについては前述のとおり。

五月八日は赤城の山開き。もとは旧四月八日(卯月八日)。この地区の人のなかには、赤城の山開きに赤城まで行く人が多い。小坂子ではこの日ムラの人の総参りが行われた。

六月は、農作業が忙しい関係で、特別の年中行事はない。田植祝い(オサナブリ)が行われる程度である。

七月には、農休み、祇園、百万遍、地藏祭り(これは旧暦の七月)などが行われた。

農休みは、七月十四、十五日の二日間とかこの頃の三日間、農作業を休んだ。農休みは各大字ごとにきめられた。このとき農休み勘定といつて、田植の賃金を支払つた。

八月には、盆関係の行事として、カマノクチアケ、七夕と盆行事が行われる。

カマノクチアケ(カマノクチアキ)は、盆月の一日で、地獄のカマのクチが開く日で、仏様がお客にやってくる日だといつた。この日、赤城山のガキボツタへ四ツ前(十時前)行くと子供の仏様のはなし声が聞えるとか、足跡が見えるということ(小坂子)や、この日は釜を使つては悪いので朝食のときはやきもちをつくつて仏様に供えたり、うちの者が食べたるときはやきもちをつくつて仏様に供えたり、ちをカエルが仏様のところへ持つて行くということ(萩窪)など、カマノクチアケ行事については、もつと注意する必要がある。

七夕は墓掃除をしたり、七夕祭りをしたりした。

盆行事は十三日が盆迎え、十六日が盆送り、各地とも盆行事の内容は大同小異といつたところである。本地区では、盆迎えのときの餅つき、野回り、盆送りの土盛りなどはみられない。盆棚をつくり位牌をならべる。迎え火、送り火としてムギワラを燃すことは各地でみられる。盆中の食べ物(供え物)は、朝はぼたもち、昼間はうどん、夜は米の飯とうなす汁というのが一般的な形である。なお、盆中の昼うどんのことは、ひるばてという(上泉)。送り盆のとき、ナス、キュウリで馬をつくつて、うどんの手綱をつけ、ナスやキュウリをさいのめにきつて餌をしてもたせて、墓(あるいは三本辻)へ送りだした。この馬に乗つて、仏様が帰つて行くといつた(江木)。

九月には、八朔の節供、十五夜、彼岸などの行事がある。

八朔の節供については、「人の一生」のところで説明済みである。シ

ヨウガの節供ともいい、嫁がシヨウガと赤飯を持って里へお客に行つた。里からはメカイとかザルなどをもちつてきた。前述のように、嫁は節供に里帰りした。

十五夜は旧八月十五日の行事、お月様にふかしまんじゅう、野菜、果物、カヤなどを供えた。子供が供え物をとりにきた。

彼岸には、客の場合と同じ、墓参りをした。

中日に天道念仏をするところもあった。

十月の行事は、十三夜とオクンチ。

十三夜は、旧九月十三日の夜の行事。十五夜と同じ行事、供え物の数は十三コ。

オクンチは、各地区の秋祭りのこと。日取りは地区によつてちがうが、十七日(三俣・東西片貝など)と十九日(江木・上細井・五代・小神明・勝沢など)のところがある。前の晩に子供たちが境内に灯籠をつけ、社務所などに泊つていた。オクンチの当日、早朝に氏子の人たちが赤飯をあげに行った。それを子供たちもいただいた。

十一月には、十日夜とエビス講がある。十日夜は旧十月十日の行事であるので、十一月に入つてから行う。また、新暦の十一月十日に行うところもある。いづれにしても現在では十一月の行事である。子供たちが稲わらでワラデッポウをつくつて、唱えごとをいいながら各家の庭などをはたいてあるいた。モグラ除けといった。また、十日夜は大根の年とりといった。これ以降大根とりがはじまった(江木)。

十日夜に隣同士のムラ(大字)でけんかをするところもあった。けんかといつても、口げんか程度のこと、一種の行事であり、ふだん仲がわるいわけではない。

十一月二十日はえびす講である。本来は旧十月二十日に行うもの。正月のえびす講に農作物の豊作をお願いして、十一月二十日のえびす

講で豊作の感謝をするものという。

なお、旧十月十四日は五代の木福様の縁日で、参拝客が多かつた。今は新の十一月のなかばすぎが祭日となる。

オカマノルスンギョウといつて、おかまさまをまつるのも今は十一月の行事。

十二月の行事としては、屋敷稻荷のまつりや冬至のほか、正月の諸準備の行事がある。

屋敷稻荷のまつりについては、「信仰」のところで既述したとおりである。もとは旧十一月十五日を祭日としていたが、今は、新暦にあつためて、十二月十五日としている家が多い。むかしは、この日、お宮(オカリヤ)をつくりかえたが、今は石宮にあらためた家が多い。

冬至の日は、いい日だといつて、この日はなにをしてもよいといつた。冬至トウナスといつて、トウナスを食べたり、こんにやくを食べたりした。トウナスを食べると中風にならないといい、こんにやくは腹の中の砂払いといった。また、冬至湯といつてユズ湯をたつて入つた。

二十四日に子供たちが天神講をするところもあった。

正月の準備としては、ススハキや餅つき、正月飾りをした。正月飾りは一夜飾りをさけ、餅つきも、二十九日はくんち餅といつてきつた。なお、家例として、餅つきをしない家もあった。正月棚は、毎年買い換える家もあったが、多くは正月棚をつくつておいて、その年の恵方にむけてつるした。お飾りをするところとか、おそなえを供える場所は家ごとにきまつていた。正月棚には歳徳神を中心まつた。

大晦日には、年越しそばを食べる家もあるが、米の飯を食べる家がある。また、おにぎりを十二コ(閏年は十三コ)つくつて仏壇に供える家もある。

## (十) 口頭伝承

口頭伝承については、調査資料を次のように四節に分けてある。

一、昔話 二、伝説 三、世間話・怪異 四、その他

本地区において、口頭伝承全般にわたってすぐれた伝承者にお目にかかることはなかなかむずかしいことであつた。これは、隣接地区においてはほぼ同様の傾向がみられる。ただ本地区には、鳥取町に一人のすぐれた語り手がおられた。平林タカノさん(M30・4・12上細井生まれ)である。平林さんは先年なくなられたが、市の広報等にも話題の人物として紹介された方で、研究者による調査も行われている。その一部が、本章に発表されているが、平林さんの昔語りについては、『群馬県史』や「カケス通信」(前橋・カケスの会)などに収録されている。

本章にまとめた口頭伝承の中で、「赤堀道元の娘小沼入水」の伝説は、県内でも赤城山の周辺地区を中心に広範囲に伝承されている(『日本伝説大系』第四巻北関東参照)。その伝承内容も一樣ではない。本章に収録されている六例の内容をみてもそのことがいえる。赤堀道元の娘が十六歳のとき小沼に入水してその主になつたという話を中心である。上泉では、小沼の主に人身御供をあげていたのを、あるとき身代りの男がその主(蛇)を退治して道元の娘を救つて、それ以来、この地の人たちは、赤城からの降雹(砥石)のような大きな雹が降るといふの被害を防いだという話を伝えている。人身御供の話は、筑井町でも聞いているので、この種の話が一類型として伝えられていたものと思われる。「伝説」では、日輪寺の絵馬の話、鎌倉坂の由来、五代の伝説、菟窪の鱗浮の話や赤城と日光の神戦譚などが収録されている。この中で五代の地名伝説は、中国に類似の伝承があるとのことで興味深い(大

室幹雄著『囲碁の民話学』参照)。

「伝説」では、このほかに、亀泉の地蔵様に片耳がないのは、上泉と小泉(亀泉はもとの中亀村と小泉村が合併)の人たちが日照りるとき、水争いをしたとき、加勢に出た地蔵様が上泉の人に歎でたたかれて耳をもがれたためだという(『日本伝説大系』第四巻参照)。東片貝の虚空蔵様については、山王町の禅養寺から移つたという伝承(県史調査資料)、菟窪から移つたという伝承、下細井から移つたという伝承(以上、本書「信仰」参照)。西片貝の玉蔵院から移つたという伝承(前橋市女郷土研究部「ふるさと」一九六四年版)などがある。その当否はべつにして、神様や仏様の移動のいい伝えは各地にみられる。

上泉の船津又七家の先祖や西片貝のマンカイ塚の話は、いわゆる行人塚のことである。このことについての報告はないが、いずれも、生きながら入定した人物について伝えている(マンカイ塚については「ふるさと」収録)。

「世間話」では、オトウカ(キツネ)に関する話が大部分である。世間話は話者の体験談とか伝聞したことをいい伝えている。したがつて、場所とか、人物とか、実名をもつて語られている。ここに報告されているオトウカにだまされた話をみてもみな具体的な事実談となっている。

アズキトギババアの話は、伝説として扱うべき話であるが、この話も広く伝えられている。

本文にないが、奉公人話(「飯が仕事をやる」「田の草取り」など)、や六部大尽の話(六部を泊めて大尽になつた話)、小坂子のでんぼう覺さんの話なども事実談として語り伝えられている(カケスの会「群馬の変人奇人譚」参照)。

荒牧の報告にある「お化け」の話は、死者と会つたという珍しい話

である。類話は県内にもあるが例は少ない。

嶺の小次郎薬師の話も實在の人を薬師として祀っているという珍しい例である。

四の「その他」のところには、ちょっとした四方山話といった内容の話をもとめている。

この中で、川原のそばの話とか、村名尽しはおもしろい。

本文にはないが、むかしからの地口として、「幸塚わらじに沖むしろ」というのがある。これは、むかし、幸塚ではわらじをつくって売りだし、沖（上・下沖）ではむしろをつくって売りだしていたことをいったものである。

「鳥取小坂子嶺小暮、勝沢残してもつたいない」というのもある。

鳥取・小坂子・嶺・小暮の四大字が、いわゆるつきあいしよう（つきあいむら）であり、祭りのときに芝居とか競馬などの特別の行事をするときに、おたがいに手伝いに行き来した間柄である。ところが、間にはさまれている勝沢が入っていないので、このようにいつているのだという。昭和のはじめのころまでの行事のことをいいあらわしたもので、今でも時には地区の人たちの口にのぼることばであるという。

## まとめとして

以上、今日の民俗調査の結果について、各章の大概をまとめてみた。全体的には、赤城の西南麓に位置するかつての農村地帯における民俗事象として、地区ごとに大差のない内容となつているといえよう。

歴史的には、原始古代にまでさかのぼれる地区もあるし、近世以降にまとまった集落としての歴史をもつ地区もある。いずれにしても、田畑にめぐまれた米麦養蚕を主たる生業としてきた地域であり、おた

がいの交流も古くから行われてきたところである。

このような地域で、特長ある民俗については、各章のまとめのところで説明してきたが、その中からさらにとりだすと、

### 一、赤城型民家

### 二、田の神信仰

### 三、赤城信仰

が、本地区の特長ある民俗ということができそうである。

「赤城型民家」については、かつての養蚕とのかかわりあいの中から、従来の民家を改造して、屋根の南面の中央を切りおとして屋根裏へのあかりとりとしたものである。いわゆるオカッパ型の屋根型の民家で、今でも一部の地区に残っている。本地区の養蚕の盛行を物語る資料として大切な民俗文化財である。

「田の神信仰」は、現状では赤城南麓を中心に確認できる信仰形態である。ワラミヤ（オカリヤ）を田のクロ（土手）につくって、そこへ田の神をまつるといふ形である。苗代づくりについては、田の神はつきりでないが、水口祭りの中に、田の神をまつるといふ形をみることができる。収穫については、オカマサマが表にでて、田の神は姿を示さない。田植の最後の日に「来年ござれ田の神」と田植唄に歌われて帰って行くようにも思われるのである。いずれにしても、田植を中心し、田の神が表に姿をみせるというのが、本地区における田の神信仰の一つの形である。

「赤城信仰」については、赤城山を背にして生活している人びとによって特に農業との関わりの中で信仰されてきている。ムラ（町）の鎮守様として赤城神社をまつっているところもある（五代・上細井・関根・上小出・亀泉）。

五代の赤城神社は、もとは同地の六本木家の氏神で、三夜沢（勢多

郡宮城村)の赤城神社の分社という。上小出の小出神社も通称は赤城神社、上細井の細井神社も赤城神社が中心の神社、関根も鎮守様は赤城神社、以上いずれも祭神は豊城入彦命、亀泉の赤城神社は祭神は大己貴命。

これらの鎮守様としての赤城神社は、赤城信仰の地域への定着ということで、ムラの人たちとの長い年月のつながりを示している。このほかに、クルワでまつっている赤城社もある。

赤城登拝については、本文で説明しているとおりである。五月五日には三夜沢の赤城神社のおまつりで、ここへおまいりに行ったという。また、五月八日(もとは旧四月八日)は赤城山の山開きで、この日大洞の赤城神社へお参りに行く人が多かった。このときの様子について各地の報告がある。特に小坂子の人たちの総参り(総行きといっている)のことは比較的新しい信仰形態であるが地域ぐるみの赤城信仰の具体例として注目したい。

このほかに、八月一日のカマノクチアケ(カマノクチアキ)のときとか、五月の八十八夜に登拝したところもあった。カマノクチアケの日の登拝については前述の小坂子の報告が、地藏岳の地獄のかまの様子を示している興味深い。それとはべつに、荻窪の報告によると、八月一日のカマノクチアケの日には、盆様が赤城からやつてくるので、そのこじょうはん(おやつ)として、カエルが持つて行くという。そのため、この日には、かならずやきもち(小麦粉をこねてまるめて、いろりにくべてやいたもの。なるべくかたくやけといた)をつくつて仏様にあげたという。また、川端のヤキモチはドラ焼きといい、特別に大きくて有名であったという。

赤城東麓の人たちは赤城の山開きの日に、新仏のできた場合に、地藏岳へのぼつて仏様と会ったということである。このようなこととあ

わせて赤城の地藏岳に死者の霊があつまることを示す信仰内容として、カマノクチアケの事例は興味深い。

以上、本地区の民俗の特色ある事項をとりあげてみた。このほかにも、いくつかの特色ある民俗事象がみられる。残念なことには、調査日数が少かったことと、きめられた時期における調査のために、年間を通しての行事とか作業などを追うことができなかったために、報告内容に具体性を欠くことも多い。また、これまでに刊行された村誌類を参考にすることも少なかつたので、本地区の民俗の全体像をとらえるまでにはいたっていない。

今回の調査資料をもとにしてのまとめであるので、本文をご覧のとおり、調査内容に精粗があり、補充調査の必要なことは十分承知しているが、今回はこのままにとどめておいて、あとの補充を計画している、そちらにゆずることにした。

不十分ではあるが、今回の旧三カ村の調査によって、赤城山の南麓に位置するかつての農村地帯の民俗の概要をまとめて報告することができたと思う。



## 第二章 社会生活

### 一、村の概況

#### (一) 村と道路

三俣の中には、前橋へ通じる主な道路として、「中道」と「大胡街道」とがあった。

**中道** 現在の県民会館、前橋市立女子高校の北側を通り、東部バイパスを横切って、三俣から芳賀へと通じる道であり、大胡街道が整備されるまではメインストリートだった。(三俣)

**大胡街道** 現在の大胡街道は、それまでの大胡街道を大正時代の初めに県道として整備したものである。大正から昭和にかけて、この大胡街道沿いに人家が増え、それまでの下グルワが二つに分れるが、この大胡街道沿いの家々を「新道」と言っていた。(三俣)

**新道** 大正から昭和の初期にかけて、下の方から三俣学校へ行く道路が整備された。これを新道といい、三俣の南北の道路としては中心的な道路であった。(三俣)

**沼田街道** 沼田街道が荒牧から関根に至り、田口へと通じていた。関根では新田組と片原組の境を沼田街道が走っていた。荒牧の諏訪神社のところには道しるべが残っている。田口の郵便局のところから道は橋山へ向かって登って行く。関根には新町に問屋という屋号の家があり、前橋城主が沼田へ行くとき泊まったと伝えられている。田口に

も問屋という屋号の家がある。(関根)

上小出のあたりでは八木川に沿って通っていた。行人塚をすぎて、学校道のあたりを通り、日輪寺へ通じていた。(上小出)

**大胡道** 北代田から、大胡へ通じる「大胡道」がある。今でも残っている。代田↓下細井↑上沖↑大胡(北代田)

**交通** 石井県道から沼田に至る街道筋との交流がある。赤城村の猫や津久田から嫁をもらったこともある。(龍蔵寺)

#### (二) 村と川

**オツキリ川** 寺沢川のことを「オツキリ川」と呼んでいた。これは寺沢川が川底が高く、夕立くらいの大雨でもすぐに切れて水があふれてしまったからである。川が切れそうになると、その付近の田を持つ人が出て、雷が鳴っていても、川が切れないように作業を行った。特に被害が大きかったのは、三回ほどで、村中の田が石だらけになったり水びたしになったりしてしまった。中でもキティ台風の被害は大きかった。(堀之下)

**風呂川** 昔、上杉謙信が風呂の水に使ったというので、その名がある。風呂川は前橋城の生活用水として使われていたという。風呂の水に使って、その重要さを隠そうとしたのだという。(上小出)

**渡船場** 利根川の渡しがあった。組合で行っていた。五銭だった。一月十五日は漆原の観音様のお祭り、養蚕の神様で、ザル観音とい

われ人が大勢出、たくさんの人が渡船を利用した。また、青柳の大師様も人が多く出、その日には渡船の利用者が多かった。(川原町)

吊り橋 大渡橋より北にあった。大人五銭、子供三銭の渡り賃をとられた。(川原)

アオツカワ 前橋と三俣との境にはアオツカワという小さい川が流れていた。現在の県道前橋大胡線の境橋は昔からあり、このアオツカワにかかつていた。

天神川 今の南中の西を南下する桃木川は天神川と呼ばれ、天神橋の名で残っている。下流には天神せきがある。(青柳)

観音川 明治元年の大洪水で利根川が現在の流路をもつまで、観音川と呼ばれる川があった。漆原の観音さまの下を流れたので観音川と呼ばれたらしい。漆原村と利根川をはさんで別れたのも、この大洪水による。(川原)

### (三) 村と外来者

村に來た人

マユ買 (村内にもいたし、近場から)

ノシ買 (前橋から)

魚屋 (前橋から)

衣料屋 (作業着などを持って前橋から)

反物屋 (前橋の上田屋が来た)

万才 (正月に三河から来た。戦後は一、二回来ただけ。米一升ずつ持たせた)

警女 (冬にやって来た、時にはどこかに泊まることもあったらしい)

葉屋 (富山や奈良から来た)

屋根屋 (秋から春にかけて越後から。中にはいついた人もいる)

米つき (水車が出来るまで越後から来ていた)

行者 (戦後まで御岳の行者がお札を持って来ていた) (小神明)  
新潟の屋根屋 (ケイさんという人が来た。)

越後の警女 (十一月頃になると三味線をもち、子供に手を引かれてやって来た。)

富山の葉売り

祭文 (セイモン) 語り

春駒

(川原)

越後からの住人 越後から江戸へ向かう途中、この地に住みついた人が居たらしい。越後からお伊勢参りに行く途中、住みついた人もいたらしい。(川原)

行商人・鎌売り 新潟の西蒲原あたりから来たらしい。包丁も売った。

置き葉売り 富山から来ていた。

反物 江州屋ごうしゅうといって、反物を借して、正月前に集金に来た。大胡のミノヤに泊って、このへんをまわった。

みそ屋 みそ、正油をかついで、貸し売りした。

あん巻屋 おかし屋で、ようかんのようなものを買った。

こやし屋 こやしを売った。

酒屋 酒を売りにきた。

これらの商売は、現金売りではなく、盆暮の勘定だったから、正月前になると、大みそかの暗くなるころまで、集金の人が出来た。正月に入ると来なかった。(萩窪)

### (四) 村の生業

生業 現在の若い人は勤めに出るようになったが、昔はみな百姓を

していた。平均三反くらいの田畑（畑の方が多）を持っており、養蚕、米、麦を主としていた。養蚕は十年ほど前にやめてしまった家が多い。（鳥取）

嶺はほとんどが一種兼業農家で、多くの家が農閑期に小遣い取りに土方などの仕事に行く。ずっと米、麦、養蚕を柱に農業をやってきたが、二十五年ほど前から乳牛を飼う家が増えてきた。逆に養蚕をする家は激減し、現在は七戸ほどである。一戸あたりの農地は平均一町五、六反で、七・三くらいの割り合いで畑が多い。（嶺）

農家戸数は、現在、専業、兼業を含めて、四十五、六戸になっている。平均的な田の面積は五、六反である。主に米、麦（昔は大麥、今は小麦）、養蚕をやってきたが、現在養蚕をやっているのは十七、八戸に減っている。（小神明）

端氣は純農村地帯で、十数年前までは、ほとんどの家が専業農家だった。主に米、麦、養蚕で、特に養蚕が中心だった。現在多くが兼業になってきて、町へ働きに行く人（若い世代）が増えている。それにつれ、養蚕農家は減少し、現在は十五、六戸になっている。（端氣）

賃びき 大胡の糸屋からまゆを借りて、糸にして持っていくと、賃料をくれた。大胡の市日、三八の市の日に持つていく。安い時で、賃料は一疋七十銭だった。（萩窪）

勘定 七月十四日に肥料の勘定に回った。（三俣）  
小作 一反八俵のうち、四俵半くらいを地主に納めたものだった。

（関根）

## （五） 村の水利

水利 天水に頼っていた頃、水に苦労した。干ばつになると、一口半もひいてきて、堤に水をためていたので、水アゲの水番は大変だった。

た。番帳がまわると水番に順に出ることになっていた。夕立があると、こもなどを持って、ミノ、カサで中亀へ行つた。シモの方でも水欲しさに堰をこわすので、水争いが生じた。オタ木をわたして、こもをはつて、土砂をつけて、水量を調節した。大正用水ができてからなくなつた。大正用水は土をもつて運んで村人も手伝つた。（堤）

堀之下では、寺沢川が流れているにもかかわらず、村の田に水を入れる堰が何か所きりなくて、村の田で使う水のほとんどは、区役員が酒を一斗持つて石関にお願いに行つてもらつてきた。これは、石関が桃の木川から水を引くために所有している堀を借りるためであった。村へ引いて来るまでにいじ（意地悪）されると、村には全然水が来ないことになった。結局、石関の余り水をもらう形だった。（堀之下）

水利、水世話人 小神明では三つの沼があつたので、植え付けの水に困ることはなかった。それでも、各クルワの伍長の代表が出て、水世話人となり、沼の水について管理していた。どうしても水のないときは、上の方の田から順に田植えをしていた。（小神明）

氷池 今の総合グラウンドのそばに池があつて冬になると、むしろを立て、日よけにして氷をはらせた。二十センチ以上の厚さになり、氷のこざりて四角に切つて氷倉に入れて保存した。（一尺五寸角ぐらいの大きさ）もっこに入れて氷倉にはこんだ。大工さんの家が夏場は氷屋になった。（上小出）

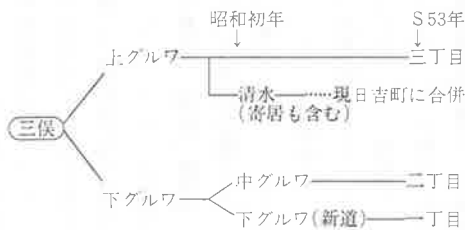
## （六） 村の移り変わり・由来

草分け 武藤、新井は吉岡の下野田から来て、川原の草分けになった。漆原の長昌寺の檀家になっている家がある。（川原）

三俣町の移り変わり 現在、三俣町は一丁目、二丁目、三丁目の三つの自治会にわかれているが、明治時代までは南勢多郡三俣村として

一つの村として独立していた。その後、勢多郡桂萱村大字三俣として桂萱村の中の一大字となった。そのとき三俣の中には、城ノ内・天神廻・中道下・中田・下高輪・上高輪・清水・寄居・宮下・中丸・斉藤・五反田・東田・早道・西出・山形の十六の小字に分れていた。

昭和二十九年の大幅な町村合併の際、桂萱村が前橋市に合併されたことにより、三俣も前橋市三俣町となった。これに先立ち、昭和二十六年、寄居・清水の二小字は前橋市東町（現日吉町）に合併していた。現在のように一丁目から三丁目までに分れたのは昭和五十三年の住居表示の変更がなされたときからである。この住居表示の変更は昭和三十一年からの大規模な区画整理と四十年代に始まった東部バイパスの完成などと相まって行われたものである。江戸時代、三俣は中道（ナカミチ）を境に上グルワ（上三俣）と下グルワ（下三俣）に組が分れていたが、大正から昭和にかけて大胡県道が整備されるにつれ、大胡県道沿いに人家が急増したため、下グルワがさらに中グルワと下グルワに分れた。この上・中・下の各クルワ（組）がそれぞれ三丁目、二丁目、一丁目の母体となった。



「三俣」地名の由来 昔、利根川の主流と桃木川・広瀬川の三本の川がこの地を流れていたので「三又」と書いていた。その後「三俣」と書くようになったという。

町の由来 亀泉の町名の由来は、明治九年に、もとの勢多郡小泉村と同郡中亀村とが合併した際に二つの村の一字取ってこの名前にしたとのことである。なお、亀泉はこの後、前橋市に合併されるまでは、勢多郡亀泉村、勢多郡桂萱村大字亀泉という具合に行政区をたどっている。（亀泉）

自治会の歴史 亀泉町は、勢多郡桂萱村時代には大字亀泉として一つの区を作っていて、「区役場」という村役場の出先機関があったが、市に合併後も区として一つにまとまってきたが、昭和四十二年市の方針で区から自治会に呼び名が変わり自治会として一つにまとまってきた。江木団地ができた関係で昭和四十五年に自治会を分けた。（亀泉）

江木の村 昔は大胡領で一緒だったが、その後、北の下江木は、稲葉丹後守の領地、南の上江木は前橋様の領地になった。前橋さまへ納める年貢は、郷倉におさめたが、稲葉の分は、遠いので、ごまかしたという。（江木）

湯之気グルワ 清水が出て、そのまわりに湯の花がついていたので、そう呼ぶようになった。（小神明）

戸数の変遷 嶺は芳賀の中でも上の方にあるので、他の地区のように急激な増加はない。それでも戦前から戦後、現在にかけて三、四十戸増えている。これはほとんどが分家によるもので、他所からの新入者は全くといっていいほどない。増えても一年に一、二戸である。（嶺）  
昭和三十年、四十年頃は村の戸数は六十二、三戸だった。現在は五九八戸ある。（龍蔵寺）

中三俣は、大正頃二十三戸、昭和三十七年には六十三戸くらいだった。急速に住宅がふえ、昭和六十三年には、一七二四戸になった。

上グルワは、一番戸から六十二番戸までであった。その頃は地番でな

（三俣）

く、戸番だった。(三俣)

西堀の場合、一五〇年前は七戸、大正末で十五戸、現在は四一戸。

(上細井)

昔は四十八戸だった。分家でふえて六十一戸、九十戸とふえた。その後転入でふえ、今は千戸の上ある。共有地があり、明治維新で各戸に一反五畝ずつ分けた。その後三畝分けし、農地解放でまた分けた。昔は戸数が少なくて田畑が多かった。(江木)

### 町名の変遷

〓明 二 群馬郡 川原島新田

明一七〓 二二 西群馬郡 川原島新田 大久保村

他二ヶ村連合

明二二〓 二九 南勢多郡 南橋村

明二九〓 大 五 勢多郡 南橋村 川原島新田

大 五〓 昭二九 勢多郡 南橋村 大字川原

昭二九〓 前橋市 川原町(川原)

熊谷県の時、第八大区第五小区といい、群馬県になって、南勢多郡

江木村になった。(江木)

### 土地の呼称

根岸下(ネギシシタ) 赤城火山斜面と広瀬川低地帯を画する崖の下をいう。東根岸下・西根岸下に分かれている。字名では東根岸・西

根岸がある。

前タンポ 現在の赤城県道から東で西は田島分までをさす。

冷田 前タンポの南をさす。現在も東冷田、西冷田の字名がある。

水が冷たかったのでそういった。

西原(ニシツバラ) 観音川から西の部分をついた。

ヨシ沼 西原の南、八幡山南橋聖霊廟の西で、芦沼をヨシ沼といっ

た。

松下(ヒノキシタ) 赤城県道と県道今井・前橋線の交差点から西に二〇〇m程行き北に二〇〇m程の部分に元の光蓮寺の参道があり松の並木があった。松下は、交差点から西に二〇〇mの部分の南をさす。

鎌倉 字田島分北側の崖から上の部分をさす。この地名には次のような伝承がある。

頼朝が草津に来た時、草津から鎌倉坂まで送って来たが、ここで分れた。その時前田ンボのある低地部分を七里ヶ浜に見たてたという。

また、北条時頼が善勝寺に泊り、ここまで送り別れた、という伝承もある。(上細井)

本郷山 本郷には、今でも昔の城跡が残っていて、「本郷山」と言っている。この城は上杉氏に攻められ、アサメシメーにやられてしまったという言い伝えがある。(亀泉)

川原町の人 川原町には富山県出身者が多かった。富山出身の人は、利根や吾妻から木を筏に組んで流すのを仕事にしていた。

ラントウバ 西原にあった。身元不明の人を埋けた。川流れの人、住職の妻、子ども、修行僧はここに埋けた。昔は墓地がムラのなかに散在していたが、区画整理でまとめられた。(上小出)

追いはぎ 小神明霊園の上のぼつていく道は、元は狭くて、おいはぎが出るようだった。(小神明)

堤分教場 江木の西芳寺がそうだった。一〓四年まで二教室あった。(堤)

寺子屋 善勝寺には、寺子屋があった。(端気)

萩原武一氏の曾祖父が師匠をしていたという。(小神明)

細井学校 村にあった小学校で、現在の上細井町八三九、内田信治

氏宅の東にあった。高等科があったので、幸塚・清王寺・時沢などか

ら生徒が来た。(上細井)

## (七) 人 物

木村松太郎 日輪寺町には、品格の高い人物が多かった。中でも、庚申塚の組をつくり、役場の書記も努めていた木村松太郎翁は、羽織の紐にいつも、村人から頼まれた仕事のメモを付け忘れないよう心がけていた。(日輪寺)

医者 加賀美さんの家は、農家をしながら医者をしていた。後には、寺子屋「香庵」となる。(龍蔵寺)

## (八) そ の 他

水害 戦前には、白川は毎年といってよいほど決壊し、上細井・東細井は水びたしとなった。(北代田)

桃木川があれで、上三俣は大変被害を受けた。夕立が降ると被害が出て、戦後まで続いた。中三俣でも、台所が水びたしになったりした。

### (三俣)

前橋空襲 昭和二十年八月五日、夜の九時過ぎから空襲始まり、照明弾がまず投下された。代田では十人が死んだ。代田は、八十%が全滅の状況だった。(北代田)

台風の被害 昭和二十二年の台風の時、白川が決壊した。流れる水は、ちょうどB29のようなゴーというものすごい音をあげた。また、高圧線の鉄塔が倒壊し、そこに水が触れ、パチパチという音をあげた。小沢の部落は全滅し、多数の死人が出た。(北代田)

白川洪水 昭和二十二年九月十五日に白川が氾濫1m位土砂で埋まった。仁王さんも埋まった分だけ木をついで高くした。(日輪寺)

家の値段 大正十五年には、千円、千二百円で一軒のいい家が建て

られた。(片貝)

イキダオレ イキダオレが出ると、その村でかたづけたが、墓と墓の間に埋めた。(荻窪)

馬の死 馬が死んだときは、ウマステヤマとかリウマヤマとかいわれる場所にもついていた。(下小出)

## 二、村 構 成

### (一) 自治会の構成(組・班)

自治会 端気町全体で一つの自治会を作っており、その中が、現在一五班に分れている。自治会の組織としては、自治会長(区長)・副会長・会計の三役があり、毎年三月二十日近くの日曜日に総会を開いて選挙で決めている。この三役の下に各班の班長がいて、自治会や市の具体的な連絡や何かの仕事をしている。班長は、以前はゴチョウと言っていたが、「区」から「自治会」と呼び名が変わったときに、班長と言うようになった。しかし、今でも、ゴチョウの呼び名は残っている。班長は一年任期で、回り番である。(端気)

昔は自治会を区といった。会長一名・副会長二名・組長一三名・班長一〇名がおかれている。会長・副会長は推選で決める。班長は家順にまわる。組はクルワとは別である。農事組合はほぼクルワごとにおかれている。新道クルワは、明治末期に、新道あたりに家ができたので新しくつくられたクルワである。(上小出)

一丁目自治会は、現在、戸数七三四戸で九組、六七班に分れている。自治会の運営は、自治会長、副会長(会計兼務)・組長(九名)で行っている。(三俣町一丁目)

クルワ・ゴチヨウグミ・小字 端気町は、元、勢多郡芳賀村大字端気であったが、前橋市に合併後、端気町となり、一つの自治会を形成している。端気の中には、小字としての地名が一一あるが(大胡道下・赤坂・西畑・塚越・着場・大明神・東谷・西谷・芦沼・端気前・橋場)この内、東谷以下は、田んぼばかりで、人家はない。端気において、小字による付き合いの区分はあまり明確でなく、全体が、カミグルワ・ナカグルワ・シモグルワの三つのクルワに分かれ機能していた。また、その各クルワの中でゴチヨウグミに分かれていた。(端気)

小字と組 嶺の中は五つの小字に分れていて、それが行政上の組の元にもなっている。小字は○請地(四組五八戸)○寺間(二組、三三戸)○峯久保(二組、二七戸)○公田(二組、二八戸)○天沼(四組五五戸)のようになっている。全部で一四の組に分れている。(嶺) 亀泉には人家のある小字が十二あった。小字の名前と戸数は次のようである。

・西組(七)・払山(九)・向(一三)・本郷(三)・赤城廻(六)・江戸原(二〇)・山街道(六)・上泉境(一)・間ノ田(一)・前組(一一)・天矢(一)・関東(五)

この小字が、もとは三つの組合に分れていた。これは、昭和四十二年に自治会となるまでで、その後は、全部で六つの組に分れている。昔の組合は、地理的に西組より上(上泉境も含む)が「上組」で、西組よりも下(払組の一部も含む)が「下組」、払組の残りとしてそれよりも前の方が「前組」と言っていた。

現在の組合は昔の小字にはあまりこだわらずに一組から六組までとしている。(亀泉)

組とクルワ 大字鳥取には、北口・内出・東原・原地・八王子などの小字があって、それぞれに組(クルワ)を作っていた。戦後、この

組が一班から三班までに再編された。ここ数年、他所からの新入者が増えてきているが、極端な増加は見られない。北口は昭和四十年代には一二軒ほどだったが、現在は二十四軒になっている。このうち新入者は二軒、他の増加は分家による。

村の構成 今の一丁目は上三俣で上ぐるわ、二丁目は中三俣で中ぐるわ、三丁目は下三俣で下ぐるわといった。中と下は一緒に行事を行い、上は別だった。(三俣)

組と班 亀泉は、現在六組合計三十四班からなっているが、各組の内訳は次のようである。一組……七班 二組……七班 三組……五班 四組……七班 五組……四班 六組……四班(亀泉)

堀之下町は、現在百八十一戸で町全体が六組、十九班に分れているが、これまでに三度組合等の編成替えを行っている。

①昭和四十五年……五組合から六組合に

②昭和五十年……八班から一二班に

③昭和五十二年……一二班から一九班に

現在の各組と班の組織は、第四組が四班からなっていて、他の班は三班からなっている(堀之下)

小字 田口は八つの小字にわかれている。上田尻<sup>カミクジリ</sup>・下田尻<sup>シモクジリ</sup>・新町<sup>シンマチ</sup>・芝木屋<sup>シバギヤ</sup>・西北<sup>シキキタ</sup>・東北<sup>トウキョウ</sup>・天神<sup>テンジン</sup>・南曲輪<sup>ミナミマグルワ</sup>(田口)

隣組 戦時中にできた。それ以後、クルワが崩れてきた。(上小出) 町内の区分 上・中・下町と分かれていた。(川原)

## (二) 自治会の組織・役員

自治会の組織 自治会の組織は、自治会長・副会長・会計の各役員と各組の代表である組長(六人)、各班の代表である班長(合計三四人)とで運営をしている。三役は自治会の住民の投票で決める。任期は二

年であるが、組長は組の推薦で決め、任期は一年、また、班長は班の中の回り番で任期はやはり一年である。(亀泉)

○区の役員 現在は自治会だが、昭和四十二年までは区と呼んでいた。そのときの役員には区長・代理者・伍長幹事・評議委員等があった。

○区長(現在の自治会長)……区全体の責任者で、区の住民全員の投票で決めた。任期は二年。区長は区の費用を立て替えておき、七月と十二月の決算で返してもらっていたので区長になると大変だった。そのため、区長になったために土地を売ったりして、しまいは焦付きを出したこともあるそうだ。

○代理者(現在の副自治会長)……自治会長の補佐をする。やはり、区全体の投票で決める。任期二年。

○伍長幹事(現在の会計)……各組から選ばれ区長の下請け仕事を主にする。投票で選ばれた。

○評議委員……自治会になってからなくなった。区全体の顧問のような存在だった。各組から一人ずつ、計六人がいた。(亀泉)

自治会長と組長 嶺は全体が一四の組合に分れている。自治会長の下に一四名の組長がいて、自治会と組の仕事をしている。市に合併になる前は、自治会長は区長、組長は伍長と言っていた。自治会長は率全体から投票により選び、組長は各組で互選する。任期はどちらも二年である。(嶺)

#### 役員

○自治会長―任期二年。自治会全体の投票で決める。

○代理者(昔は副区長)―同。

○伍長―今は任期二年、昔は一年。

今は各クルワとも輪番になったが、昔はクルワごとの互選で決めた。

○氏子総代―各クルワから一人ずつ(計四人)出る。

自治会長は市に合併前には、推せんて決めたこともあり、また、各クルワから順番に出したこともあった。(小神明)

自治会には、自治会長(任期二年、住民の投票)、副会長(同)、会計(同)、幹事(同二名)の各役員がいて区全体の仕事をしている。なお、この下に各組に組長がおり、各班には班長がいる。組長は任期は二年で組の中の投票により決めるが、班長は任期一年で班の中の回り番になっている。このように堀之下町だけで自治会長を立てるようになったのは、昭和四十年以後のこと、二十九年に前橋市に合併されるからその間は、堀之下・堤・江木の各区から区長を出し、その三者の代表を区長としていた。このときは各区二年交替というきまりになっていた。合併前の桂萱村大字堀之下のときには、区長・区長代理・伍長幹事・伍長(五名)の各役員が区役場の役員をしていた。このときのすべての役員は、区全体の投票で決めていた。(堀之下)

フレ番 村(自治会)のことで村中に知らせたいことがあるときに、区長の指示で村中にふれ歩く係りが決まっており、これを「フレ番」と言った。フレ番は順番になっており、村中の人の名前が順番に書かれた板があり、その順番にしたがってフレ番をつとめた。このフレ番は、主に葬式のフレ、道普請の連絡、正月の札配り、寄り合いの連絡、区費の切符の配布などを行った。(堀之下)

定使 区長の用があるときホラ貝をふいた。「定使」といった。歩き板という名を書いた板もあった。(堤)

定使番という板に順番が記してあり、その名前の順にまわり番でつとめる。定員は一人で、一日交代。戸主がやった。板は一尺×六尺ほどの大きさだった。定使は区長の手伝いをする事務員だった。戦前まであった。(関根)

年番 地藏や馬頭観音のまつりの世話をする。一年任期で、家順に



まわる。四、五人ほどいる。(荻窪)

### (三) 組の付き合い・クルワ

オツキアイ村 荻窪・亀泉・上泉・石関の四か村を「オツキアイ村」といって、何かと大きな行事のときにはお互いに手伝い合った。

(亀泉)

組の付き合い 寺間は上・南の各組が、それぞれさらに上・下の二つに分れているが、葬式が出たときは上組の上ならばそこでだけで手伝い合い、それで足りないときには下にも頼む。同じ組ならば会葬には行く、隣の組になると懇意の人だけ焼香に行く。結婚式のときは(家でやっていた頃)上組の下なら下だけを呼んだ。(嶺)

一組 寺間は上組・南組の二つに分れていて、それぞれに組長が一名ずついる。そして、さらにこの組がそれぞれ上、下の二つに分れている。これは昔からのもので、特に祝儀、不祝儀の時に機能している。

(嶺)

葬式組 現在は、市の斎場で葬式を行う家はかなり増えてきたが、まだ六、七割の家は自宅で行っている。そのときの手伝いは、原則としてその家の班で手伝い合う。しかし、人手が足りない場合は隣の班に班長が頼みに行く。葬式の一切の仕事は班長が親方となって中心になって班の人が全部やってくれる。町内には長屋が多いが、長屋は人の出入りが激しく困ることもある。施主は、班長や班の人に一切の仕事をまかせっきりで客との対応をしてくらいである。班の人は市役所への手続きや寺への連絡、また、親戚等への「告げ」に行ってくれる。「告げ」は必ず二人組で行くものだとされていたが、今では電話で済ますのであまり関係なくなつた。昔は自転車まで行くこともあった。この他に班の人達は、花籠や「ハヤ道具」作りをしてくれた。

この「ハヤ道具」はタツガシラ・六地藏・五色旗・弓・天蓋などで、これは、上・下のクルワの共有の物だった。現在は、すべてが火葬だが、前橋市に合併されるまではほとんどが土葬だった。その頃は、お棺運びは班の人がやるが、穴掘りの仕事は隣の班の人がやってくれた。その場合、出してくれた人にお墓で清めの酒を出し、その上で家に来てもらい夕食を食べてもらってから帰ってもらった。(三俣)

班・クルワの手伝い 祝儀・不祝儀はすべて班の中で手伝い合った。現在は葬式のときのみ手伝うが、以前は建前・屋根替えなどの労働やお祝儀も手伝い合った。火事が出た場合には、クルワ全体が片付けなどの手伝いをする。(三俣)

クルワ 上細井には、西堀・端気田・新田・鎌倉・荒屋舗・天王・本宿のクルワがある。(上細井)

堀之下町は、もともと上・中・下の三つのクルワに分れていた。これは、組合よりも大きなまとまりだが、行政的なまとまりではなく、昔からの付き合いのようなものだった。特に葬式のときなどにはクルワで手伝い合う。また、村で祭っている稲荷様の屋根替えにはいつもクルワで仕事をする。さらに、結婚式を家でやっていた頃、普通は組合の中を呼んでいたが、でかくやる家では、クルワ中を呼んだ。

(堀之下)

上細井には「クルワ」と呼ばれるまとまりが七つあった。字では、宿・天王・荒屋舗・西端気・灰俵(北灰俵と南灰俵を合わせたもの)、鎌倉(西堀の南部分)、西堀の七つ。正月一日には、クルワ内の家々をあいさつして回った。クルワ(曲輪)の由来は、江戸時代の五人組あたりではないかという。(上細井)

葬式の手伝い 葬式が出たときには、ゴチョウ組が出てゴチョウを中心に仕事をする。

そのゴチヨウ組だけで足りないときには、隣りのゴチヨウ組（男衆だけとか、女衆だけとかいった具合に）にも出てもらう。これはゴチヨウが判断する。（小神明）

**葬式の会葬** 葬式が出た場合、同じクルワ内ならば全員お焼香に行っていた。クルワが違くと親戚とごく親しかった人が行った。

（小神明）

**エー仕事** 田植えのときは、毎年決まった二、三軒が組んで互いに手伝い合う。これをエー仕事と言う。これはお互い様で、手伝ってもらってもお札などはしないで、晩ご飯を出すくらいである。（小神明）  
田植えのときには、だいたい二、三軒の家と組んで手伝いあった。これをエー仕事といい、馬のない人が、馬のある人と組むことが多かった。組む人はだいたい決まっていた。（小神明）

**エイ仕事**は、一人前の人による仕事の助けあいのこと。助け合う範囲は、親戚や家の主人と懇意の家で、仕事の内容は田植や稲刈である。エイ仕事のときは、人数を同じにして行われるが、人数に差が生じたときには品物で調節する。（五代）

**エエ** 親戚や懇意の人の間でおこなわれた。エエガエシといって必ず返さねばならなかった。共同田植とは別である。（堤）

#### （四） 自治会費

**自治会費** 小神明の自治会費は現在七、〇〇〇円（母子家庭は五、〇〇〇円）で年二回（四月と十一月）集金する。十五年程前までは（自治会になる前から）一定しておらず、「平等割」「地籍割り」「見立て（役員から見て裕福そうな家に割り当てる）」の三本柱に分れていた。

（小神明）

端気では、「平等割り」「資産割り」の二通りの合計で自治会費を集

めている。「平等割り」は一戸あたり毎月三五〇円で、「資産割り」は所有地等の資産（勤め人は給料）により評価し、各戸の金額を算定する。この「資産割り」については、決め方の問題で多くの問題をかかえている。以上の自治会費の他、公民館の建築費用として、月々一、〇〇〇円ずつ積み立てている。これは構造改善のため、現在の公民館が立ち退くためである。（端気）

現在の自治会費は、各戸四〇〇円で平等割になっているが、昭和五十二年頃までは二段階になっていた。これは、「見立て割」という等級割と、平等割であった。見立て割が六分で平等割が四分であったが、見立て割はその家の固定資産税により決めていた。（堀之下）

#### （五） 公民館

**公民館** 昭和五十七年に町の公民館ができた。それまでは何かと会議があるときには自治会長の家に集まっていた。公民館の建設費は町内の人からの寄附と市からの助成金とでまかなった。（堀之下）

村には公民館がなく、建設会社の飯場を借りていたが、昭和四十二年に村の共同山（赤城様の山）を売り、その金で今の赤城様の所に公民館を作ることができた。（亀泉）

三俣の公民館は、一丁目から三丁目まで各町内で持っているが、もともとは一つの会館にする予定だった。そのため「財団法人三俣会館」をつくって準備を進めていた。しかし、結局土地の問題で話し合いが進まず現在のようになった。（三俣）

#### （六） 寄り合い

**寄り合い** 亀泉では、村全体の寄り合いを正月の三日に行っていた。公民館ができるまでは、お寺で行っていた。このときに区長など役員

の選挙を行った。今は全体で集まることはなくなり、区長が組町を集めて組長会議を開いている。これは四月の第一日曜日に公民館で行われることになっており、この日に、一年間の区の行事の計画を作る。

(亀泉)

一月一日の早朝、熊野神社へお参りしたあとで、村中の戸主が区長の家に集まり村の寄り合いを行った。これは新年会を兼ねていたが、毎年定例の寄り合いはこれだけだった。何か特別なことがあれば、そのときには区長が召集した。これは、自治会に変わってからも続いて自治会長の家に集まっていた。昭和五十七年に公民館ができてからは、自治会長の家ではなく公民館に集まるようになった。(堀之下)

総会 ムラのきまりを決めた。ここで決めたことは、服従しなくてはならなかった。(端気)

### (七) 村の境・その他

境界 関根と川原で境界あらそいがあった。大きな松を境界としていた。お艶ヶ岩を境界とし、川原分・総社町植野分・上小出分とした。境界の定めは、お艶ヶ岩から、子持山の頂・浅間山の頂・一本木稲荷の大イチョウなどを見渡した線上を区分したりして決めていた。お艶ヶ岩には、それを記した刻みがあるという。群馬学院のそばにある、黒岩もそうだった。(川原)

八丁ジメ 十二月の大バライのとき神社からお札をもらってきて竹にさし、村の入り口に立てた。(小神明)

山の境 山の境にはウツギの木を植え、境界を明らかにした。

(小神明)

山 山の意識は、畜産試験場から上の方をさしている。上細井の入会は嶺にあった。赤城興業組合が組織され管理した。片道一二km程あつ

たので、朝三時頃出かけて行った。朝食はウドン粉とミソを混ぜて焼いたヤキモチの大きなものを持って行った。四、五月はワラビが取れ、七月から一ヶ月位下草刈りに行った。九月にはキノコが取れた。

(上細井)

墓地 川流れ(利根川)の無縁仏を葬る場所があった。(川原)

### (八) 農 休 み

農繁休暇 農業が忙しい時期学業が休みになった。年間二〇日間程で、田植えとカイコの時だった。小学校一年位の子供などは子守りさせられた。(上細井)

農休み 毎年七月十三日から十六日くらいまでを農休みとして、村全体で農作業を休んだ。農休みの日が正式に決まると、区長から伍長を通じて各戸に知らせてきた。(小神明)

毎年、区役場が七月の中旬の三日間くらいを選んで農休みとして決め、村全体で仕事を休んだ。この日は「うでまんじゅう」を作った。

(亀泉)

休日 農家には、盆と正月以外は休みらしい休みはなかった。仕事の区切目にくらかの休みをとる程度であった。(龍蔵寺)

### (九) 共同労働

共同作業 村全体の共同作業として、毎年道普請をやっている。日取りは春の総会で決める。このほか、三年か五年に一回ずつ沼の土出しの作業がある。これらの作業に出られない人からは「出不足」を徴収する。(小神明)

道普請 四月と十月の年二回、峯全体(ただし小字単位)で道普請を行っている。日取りについては、組長会議で決める。(嶺)

クルワ単位でおこなう。(上小出)

春と秋のお彼岸の頃、区長が日を決めて道普請を行った。区長は、日を他の役員に諮って決めると、伍長さんを通して各戸に知らせた。道普請は、主に急な坂道に木をわたしてをしたり、道の両端のシバを切って道の真中に置いて道をならしたりした。(亀泉)

**堰普請** 田に引く用水の一切は区役場が管理していたが、堰は区長が責任者になっていて、昭和四十九年に土地改良普及事業が完了して耕地整理が済むまで、毎年、四月の下旬に堰を使う人が総出で作った。堰は寺沢川に沿って何か所か作ったが、堰により準備するものが割り当てられてあった。準備するものはクレ、シバ、オダ木、オダ木かけなどであった。これらの準備物の中で、オダ木かけだけは大工に頼んで作ってもらうが、その他の物は割り当たった者が準備をした。クレとは土手などにはえている草のついたままの土のかたまりで、これをトウグワやテンガで一尺五寸×一尺くらいに切り取ってきた物である。このクレを切ってくることをクレッキリといい、これが割り当たった人は事前に用意しておいた。クレは一つの堰におよそ二坪くらいあれば足りた。オダ木とは、堰を組むときの骨組にするもので、松枝やシノ竹を使い、当日、皆で切ってきた。これは大工に頼んで作ってもらったオダ木かけ(おだ木をかけるわく)にかけた。そして、このオダ木を組んだ上にクレとシバをのせて水をとめるようにした。オダ木は大水などで流されると新しく作り直した。ときには、上の堰と下の堰とで、堰争いがおこり夜中に下の堰の人が上の堰に穴を開けたりすることがあり、その度に穴を補修しなければならなかった。各田には、この堰から水を引くための堀が掘ってあった。そこで、この日に堀掘いもいっしょにした。(亀泉)

**堀あげ** 四月、水系ごとに用水をさらう。水利組合が中心になり、

農事組合も関わる。(上小出)

**堀掘い** 石関から水を引いたり、寺沢川の堰から水を引いたりするため、堀をさらってきれいにするための「堀掘い」の作業を区役場で決めて、村中で行った。だいたい五月の下旬に行った。(堀之下)

**こさ切り** 道路にはみでている木の枝を手入れする。道普請のときにする。(上小出)

**しょうゆしぼり** 毎年四月に各戸で仕込みをし、十二月十日頃各組(十組で一単位、一組は十二軒)から代表一人がでて総勢十人しぼった。

- ① 小麦をいる
- ② ①をあらびき
- ③ ②をふるいにかける
- ④ ③に、こうじ菌を混ぜる
- ⑤ 大豆を煮る(半日かけて)
- ⑥ ④に⑤を加え、山にして熱をさます(川原)

#### (十) 共有財産・共有地

**共有林** 旧芳賀村では前橋市合併以前に村全体の共有林を持っていた。この共有林の土地は、合併により市の財産として組み込まれてしまった。合併前に分けておかなかったのどうしようもなかった。しかし植えてあった杉については、村全体で植林したものであったので業者に売り、その金を村内の権利者全戸で分配した。(芳賀)

鳥取では金丸の方に三ヶ所の共有林を持っていた。面積は三ヶ所を合わせて二町歩くらいで、すべて松を植えてあった。松の植え付けや刈り払いなど山の管理は区長を中心に村中で行っていた。一戸が一株の権利を持っていた。戦後すぐに売り払ってしまったが、そのとき各

戸に四百円が分配された。(鳥取)

嶺では昭和五十年まで峯公園の場所に共有林を持っていた。しかし、公園を造るときに市に売った。全部で一町五反歩ほどあり、杉を植林していた。売った金は各戸で分けた。(嶺)

戦後間もなくまで、小神明全体の共有林があった。(小神明)

共有地 小神明では、昔から住んでいる人たちで、戦後間もなくまで五か所の共有地(山林)を持っていた。金丸の二か所、長坂、大川原、コワキザワにそれぞれあった。金丸の二か所については、戦後の農地解放の際になくなり、その他については次第に売ってしまった。主に松を植えてあったが、戦時中全部伐採し供出してしまった。そして、その後杉を植えた。

共有林の杉の世話 戦後、共有林を売却するまで、植えた杉がかなり大きくなるまで、毎年十月に日を決め村全体でカリハライをしていた。杉を売った金は持ち株の数によって分配したが、株数はだいたいの家が一株で、時には分家して半株ほど持っていた家もある。なお植え付けなども一切を村中でやり、区長が責任者となっていた。

(小神明)

神社の土地 小神明では、村全体の共有として、農地解放まで、神社の土地を持っていた。田(約三反)畑(六、七セと五、六セの二か所)があり、個人に貸して小作料をもらい、その小作料を神社の諸費用にあてていた。また、青年団がこの畑を借り、桑を作って売り、その代金を青年団の費用にあてていたこともあった。(小神明)

青柳所有の鍋割の山へ入って、区割りをし、かやを刈った。(青柳) 三俣全体で赤城山タツノクチに共有地(山林)を持っていた。この山はずっと以前に払い下げられたもので、この際金を出した家が権利を持っていた。山は松を植えてあり、権利者全員で世話をし、売った

金をみなで分けていた。ある人が、浜出し料が高くつきすぎて割りが合わない、というので売却することになり、昭和二年に売り払った。この時の利権者は二十戸ほどだった。(三俣)

ムラの共有地はグラウンドの所にあつた。競馬をよしてから村人に分けて売った。昭和二十五年頃のことだった。そのほか、神社や寺の土地もあつた。寺の土地は戦後解放になつた。(上小出)

入会地 赤城県道の料金所のわきから入つた所に村の入会の山があつた。年2回程行つた。片道二時間はかかるので朝六時頃出発した。山へ行く時期は春のキノコ(ハツタケ)が獲れる時分と蚕がヒマな時だった。(龍蔵寺)

赤城山に入会地が二〇歩もあり、カッチキをとる株をもつていた。

昭和三〇年代に売つた。(上小出)

タキギトリ 秋から冬にかけて共有林(マツ林)にタキギをとりに出た。(田口)

村全体の共有林としては、赤城様の山があつたが、そのほかには元からの家二七戸の共有の山と、五戸の共有の山があつた。二七戸の共有の山は赤城山の穴という所にあつた。全部で六町歩ほどの面積だったが、昭和四二年に売却してその金を、権利者が持ち株によって分配した。この山にはカラマツと杉とが植えてあつたが、最後の植林は昭和二七、六年だった。

五戸の共有の山は、赤城山の水の口にあつたとのことだが、かなり昔になくなつたため詳しいことはわからなくなっている。(亀泉)

共同山 村の共同山(村山)があり、赤城様の山と言っていた。この山には松の木があり、関のオダ木など村で使っていた。この山は、昭和四十二年に県警の厚生課に売却した。そのときの金で公民館を建てた。(亀泉)

赤城様の土地 上グルワでは赤城神社を祀っていたが、その赤城様には百坪ほどの土地があり、青年会が耕作していた。この土地は、昭和二十三年、上三俣（上グルワ）の共同墓地を拡張する際その墓地続きの地所を持っていた町田義雄氏と村とで交換した。（三俣）

お蔵 神社の境内にあった。村持で、米を貯えておいて困ったときに分けた。今はお蔵のうちに移建されている。（関根）

水車 小神明では共有の水車が二か所あった。そのうち一か所のは端氣と共同で使っていた。この端氣と共同のものの方が古い。水車の世話人が村で決まっています、管理をした。年一回いくらかずつの費用を取った。

毎月家ごとに使える日が決まっています、自分の家の番の時に使えた。家によって一口の人と半口の人があり、一口はまる一日、半口は半日だけ使えた。月に二、三日空き日があつて、急用の人はその日に使った。自分の家が番のときには、一晩中ついているので、フトンを背負って行き寝ながら番（盗まれないように）をしていたこともある。（小神明）

桃の木川の車橋の付近と広瀬川の畔の現在発電所になっているあたりに水車があった。一五、六軒でかわるがわる使った。穀屋に貸したこともあった。米の粉などを作った。（関根）

町内に三つあり、それぞれ近くの水車を利用した。ドウシンボウはそのひとつ。上は小神明の人、下は上沖の人も入っていた。修理代を負担した。一俣いくらとはいわなかった。みな共同で、四つの白で、いっぺんに二俣つけた。ヒキワリと粉をついた。（端氣）

昭和三十八年の区画整理まで三俣の人だけで共同の水車を一か所持っていた。これは農家のほとんどが出資者として加わっていた。家族の人数や持分で月に一日使える家と半日だけの家があった。しかし、

急に使わなければならないようなときには、他の家に頼んで使わせてもらうこともできた。水車の必要な経費は加入者で負担したが、これは、一月二十日に加入者が集り、家族の人数で頭割した分の金を支払った。これを「車勘定」といった。この「車勘定」の日までは組合で費用を立替えておいてくれた。四月十日頃の水が枯れる頃を見計らって加入者が総出でホリサライをする。（三俣）

共同墓地 三俣町では上三俣と下三俣でそれぞれ共同の墓地を持っていた。明治二十三年頃上三俣では、内田、大谷、奥野、町田、斉藤の各姓二九戸の家がその墓地を使っていた。また、下三俣では神村、兼子、狩野、根岸、茂木の各姓二三戸の家がその墓地を使っていた。この墓地は、都市計画の際一か所にまとめられ、希望者のみが加入して使用している。（三俣）

町の共有財産 三俣町では以下のような共有の機械等を持っていた。

○動力脱穀機・粃すり機…：昭和十年頃農事組合で購入した。維持費はその年の取れ高によつて加入者に割り当てた。昭和十年頃一俣あたり一五銭だった。粃すり機は器用な人がいて専門に運転してくれた。このどちらの機械も町の農業倉庫にしまつておいて、空襲で焼けてしまった。

○消防ポンプ…：昭和十五年頃まで町で消防のポンプを持っていた。町の青年が消防団を作っていた。火事場まで行くと、野次馬がポンプを押すのを手伝ってくれた。火事場へ行き、消火を手伝って近所の人から三〇銭ずつもらつたので帰りにそばなどを食つて帰つたこともある。関東大震災のときには火がすぐ近くに見えたので駒形まで出掛けて行つたが、途中で帰つた。

以上の他に町の共有財産として、お祭りの関係の物がいくつかある。

- ・おみこし
- ・天道念仏のときの木版
- ・悪魔つばらいのときに使う鉦
- ・葬式のときの「ハヤ道具」

(三俣)

(二) 神社・寺

**日枝神社** 端気町全体で日枝神社を祀っている。日枝神社には神主がいないので、小坂子の神主に来てもらっている。祭日は四月十五日の春祭り、七月十五日の天王祭り、十月十五日の秋祭りの年三回である。三つのクルワから一ずつの氏子総代が出て、三人で祭りを指揮する。また氏子総代の補助として、各クルワ(三つ)から、祭典当番が一名ずつ出る。氏子総代には特に年限はないが、祭典当番は二年の任期。(端気)

**大峯神社** 峯では村社として大峯神社を祀っている。祭日は四月十五日の春祭り、五月二日の稲荷祭り、十月十五日の秋祭りである。この神社には昔から太々神楽があり、村の人が稲荷祭りの際に奉納してきた。この神楽は、これまで神楽をやる人が持ち回りで保存してきたが、たいへんなので数年前、神社の敷地内に保存庫を造って保存している。春、秋の祭りにはノボリを立て村の役員が集まり、神官を招いて(小坂子の根岸さん)祝詞をあげてもらう。村の人はお参りする。現在、組長が氏子総代を兼務しているが、以前は組長とは別に総代が各小字から出ている。農地解放まで神社の田畑があり、村の人が借りて耕作し、借り賃を神社に払っていた。(嶺)

**大鳥神社** 鳥取では大鳥神社を祀っている。この神社は、明治時代には八王子の現在の小学校の裏あたりにあって「八王子権現」と称していた。祭日は四月十五日の春祭りと十月十五日の秋祭りである。祭

り前日に村中が出て境内の掃除をしたり、幟を立てる。当日は世話人がお供えの餅をついて供え、村中でお参りする。そのとき、各戸では赤飯をふかし、赤飯を進げる。戦前は嶺の太々神楽が来た。(鳥取)

**大鳥神社の役員** 大鳥神社の役員は、村全体で氏子総代が一名いて、その下に各クルワから世話人が一名ずつ出ている。以前は氏子総代は一人の人がずっと続けていたが、十五年ほど前から世話人も含め毎年順番に交代するようになった。(鳥取)

**大鳥神社の土地** 大鳥神社には山と畑があつて村で管理していた。山はナラ山で八王子に三反ほどあつたが、大正頃売り払った。畑は三セほどで、これは村内の人に昭和十五年頃まで貸していた。その人が作らなくなり村に返されたので、その直後市へ売った。戦前は青年会でその畑を借り、野菜を作つて市場へ出し、会費を稼いだりしていた。(鳥取)

**三俣神社** 三俣町にはもともと、赤城様と天神様の二つのお宮があつたが、戦前、合祀して三俣神社として町内全体でまつるようになった。元は町内全体が氏子であつたが、新しく入ってくる人が多くなつたことから、昭和五十一年に「三俣神社奉賛会」という氏子の組織を作つた。この奉賛会ができるまでは、上・中・下の各クルワから二人ずつの総代が出て神社の役をしていたが、奉賛会ができてからは、加入者全体の総会を春祭りの後開き、役員を決めている。奉賛会の役員は、会長・副会長(一〜三丁目から二名ずつ、計六名・会計・常任理事(一五名)、理事(三〇名程度)となつている。神社の祭りは、昔も今も、四月十五日の春祭りと十月十五日の秋祭りを行つている。どちらの祭りも神主を呼び祝詞をあげてもらう。(三俣)

**村の神社** 現在、亀泉町には赤城神社があり、昔ながらの家で祭つている。もとの小泉と中亀に分れていたときには、小泉がお神明様を

祭り、中亀が稲荷様を祭っていた。小泉のお神明様はもとは神社があつたが、今では灯籠と石宮が現在の公民館のところにあるだけで、跡はとくに残っていない。(亀泉)

**赤城様** 亀泉町全体で赤城様をお祭りしている。名目は町全体だが、実際には新しく入って来た人達は神社の氏子にならないので、元から家だけで祭っていることになる。祭日は四月十五日で、この日は役員が公民館に集り神主に祝詞を上げてもらう程度になつてしまつた。

もともとはもつと村の人達も神社に参つていたが、今は神主(大胡から来る)の都合で祭りが行なわれるので、氏子が浮き上がつてしまつたようなことになつてしまつた。祭りの全体の流れとしては、大胡より神主を招き、役員と集まつた人で共に神社に拝礼して祝詞を上げてもらい、玉ぐしを奉てんする。この祭日には、自治会の三役の人も招待する。この祭りにかかわる費用は、昭和四十二年に赤城様の山を売つたときの金で公民館を建てたが、そのときの金が余つて貯金しておいたその利子を当てている。神社の役員は各組から代表が出ているが(全部で一〇人)、この中から神社総代を決めていた。(亀泉)

**中亀の稲荷様** 中亀の稲荷様は二月の初午がお祭りで、この日は神主を呼び、祝詞をあげてもらつた。その後、宿に集り料理を食べたり酒を飲んだりした。この日の宿は回り番で、費用は各戸が出し合つた。

**稲荷様** 堀之下ではもとの家から稲荷様を祭っている。この稲荷様は、昭和一二年頃、村中で村にあつた古墳を掘つたのだが何も出なかつた。そこで、村中で稲荷様を祭ることになつたものである。この稲荷様の祭日は二月の初午で、この日に、子どもたちがトウロッコを作つて辻々に立てた。(堀之下)

**お諏訪様** 上泉のお諏訪様のヤタイの手伝いに、ワカイシがいった。

**寺** 鳥取は全戸が善勝寺の檀家になつている。(鳥取)

(堤)

嶺では、磯田イツケは石井の柵圃寺の檀家となつているが、その他は端気の善勝寺の檀家になつている。ただし天沼の池田、請地の木村イツケは神葬祭である。(嶺)

小神明には、神宮寺という無住の寺があり、村で公会堂に使つたりしていた。しかし、昭和二十年八月五日、空襲で焼けてしまい、そのままになつてしまつた。(小神明)

小神明では長岡姓と石原姓は橋林寺(曹洞宗)の檀家で、その他は善勝寺(天台宗)の檀家になつている。(小神明)

**三面薬師(東向き観音)** 亀泉全体で、三面薬師という薬師様をまつている。この薬師様は東を向いているので別名東向き薬師といわれている。この薬師様は如意寺にあり、如意寺が管理している。八月七日がお祭りの日で、お坊さんが来てお経を読んでもくれる。この薬師様は目にいいといわれていた。(亀泉)

#### (五) その他

**金融** 神社の所有地から「アガリ」があり、村人に貸し付けた。神主は、いながつたことが多いため、貸し付けの判断は総代らが決めた。

(北代田)

昔は、八円ぐらいで正月を迎えられた。その金がない時には、村の金から借金をした。借りた金は、翌年の春子(養蚕)の金で返済した。

(日輪寺)

端気信用組合、大正期にできた。(端気)



### 三、青年団と子供組

#### (一) 青年 団

青年会 戦後しばらくまで青年会があり、一七才で入会し、二五才(三〇才くらいまで入っていた。青年会では剣道をやって体力作りをしたり、桑畑を作って桑を売り小使いかせぎをしたりした。小神明青年会と言っていた。(小神明)

小神明の青年団では、戦前、村の共有地であった神社の畑一か所を借り、桑畑を作っていた。その桑を養蚕農家に売り、青年団の費用にあてていた。桑園の手入れをして、桑を分けて売った。縄ないの作業で、縄を作って売って収入にした。力くらべで、墓石のかつきっこ、一俵かついで歩く、口でくわえて歩くなどをした。一升マスの上は何人かのかというのもした。徒歩で伊香保まで泊りに行った。大正大震災の時、田口に高崎歩兵連隊が出勤していて、歩いていたら、青年団をばげましてくれた。敬礼してくれたので、軍歌をうたった。(端気)

上下の三俣では、それぞれに戦争前まで青年会があり活動していた。この青年会は、戦後青年団に移行した。名称は「上三俣青年会」「下三俣青年会」と言っていた。青年会には子供連を終えてから入会し、二十五歳で脱会していた。しかし、戦争が激しくなつてからは、兵役の関係で会の人数が少なくなつたために年齢の制限を三〇歳に引き上げた。上、下の青年会には役員として幹事長がいたが、両方の幹事長が寄つて、「三俣連合青年団」の団長となり、桂萱の青年団に出て行った。この団長はとくに仕事があつたわけではなく、桂萱の青年団の本部との連絡が主な仕事だつた。(三俣)

昔は「若い衆」と言っていたが、これが「青年会」となつた。青年

会には高等二年で学校が終わると入り、二五歳まで入っていた。青年会には、会長・副会長・幹事等の役があつた。青年会ではいろいろな行事や活動を行っていた。剣道の寒稽古を行つたり、寺の畑を借りて桑を作つたり、太鼓たたきをしたり、旅行をしたりした。畑を借りての桑作りは、正円寺の畑一反を借りて行つたもので、この作つた桑を柵ごとに村の人に入札により買つてもらつた。この桑を売つた金が青年会の活動資金となつた。太鼓たたきとは、村の消防の番小屋(消防ポンプがしまつてあつた)に太鼓があり、この太鼓を毎日朝五時と夜の九時に時報として鳴らしたものである。これは毎日青年が一人ずつ回り番でやっていた。村内はもちろんだが、付近の村でも、よなべをしていてこの太鼓の音が聞こえると「堀之下の九時デーコが鳴つたから、もうやめるべー」と言つたそうだ。このことが県から認められて、表彰されて時計をもらつたことがある。この太鼓はたきは戦後間もなくまでやっていた。(堀之下)

青年団 学校卒業後から四〇才くらいまでの男衆で川端青年団を作っていた。青年団には、正・副団長の他会計・幹事の役職があつた。青年団では村内の家から畑を借りて桑を作り、その桑を売って活動資金にあてていた。また、結婚式の取り結びなどもやつた。(川端)

亀泉の青年団は、荻窪・上泉・石関の若者で作っていた。昭和の初め頃までは「若い衆組」と言っていたが、その後「青年会」となり、戦争中に「青年団」となつた。しかし、「若い衆組」から「青年会」になつたとき、しばらくの間だったが、青年会を終えた人が、青年会の相談役となるために「若い衆組」と称して一つの組を作つたときもある。青年会には学校を終えたと入り、二五歳まで入っていた。「若い衆組」のときには、入会に際しては酒を一升買ったという。村に婿に来た人は二五歳を過ぎていても二年間は青年会に入ることになつて

いた。青年会の役員には、会長(任期二年、選挙により決める)、副会長(同)、会計(同)がいた。若い衆のときから、青年は村のいろいろなことに協力したり、独自にいろいろな行事を行っていた。道普請や各お祭りの旗立て、運動会の主催、旅行などを行っていた。また、田や畑を借りて作物を作り、これを売った金を会の運営費にあてていた。昭和三年の上泉の諏訪神社の遷宮式ときには、東京から大きな歌舞伎を呼んだが、このときには若い衆が小屋がけなどの仕事を中心になつて進めた。(亀泉)

数え二五才までの男子が青年団に入っていた。青年団での活動は、勤勞奉仕や遊びをした。

主な活動は次のとおり。

○雪 かき

○夜 遊び

○力比べ (石塔を倒す)

○結婚式の取り結び

○戦時中は、百社まいり、援農、勤勞奉仕など (上細井)

小学校を出るとすぐ青年会に入った。二五才でやめたものだった。

(上泉)

伊香保まで歩いていったことがある。(端氣)

一月、節分には、寺に大勢の人がやってくる。寺の周囲の四、五ヶ所で「竜蔵寺青年団自転車預所」を設けた。(竜蔵寺町)

青年会でいった。兵隊帰りが指導者だった。朝出て、夕方着いたくらい。四万温泉までいったことがある。泊るだけだった。伊香保にいたこともある。相馬ヶ原まで行軍にいったり、両毛線を使って日光までいったこともある。(片貝)

ワカレン 一七才になるとワカレンに入った。酒一升買って行って

入れてもらった。ワカレンに入ると近所の村ともつきあいができ、上泉のヤタイなどに出かけることもあった。ヤタイをひっぱるのを手伝った。三二才になるとぬけた。一月二日に謡のけいこをやった。先輩が教えてくれた。世話人という年長の者がまず歌つてみせ、ついで皆で歌つた。祭典のときには、幟を立てたり、はずしたりした。旗竿は一間もある長いものだった。終戦頃を境に、ワカレンがなくなった。終わるときに記念品として机をもらった。(荻窪)

ワカイン 大正初年までそう呼んだが、以後青年会になった。上からの指示でなつた。二五才までワカインだった。他所からきた人は三〇才まで。三〇才で養子にきても、一年は青年に入ることになつていた。女の子のところへ行ってポタモチをくわれたということもあった。(堤)

## (二) 子供組

子供連 三俣では上、下の三俣で、それぞれ「子供連」という今の子供会のような組ができていた。これは、かぞえて八歳くらいから一五歳くらいまで(小学校に上がると入り、高等二年くらいまで入っていた)の男の子供達が作っていた。この子供連を上がると青年会に入つた。(三俣)

行事 子供連の行なう行事としては、十二月二十四日に天神講をやっていた。これは、子供連に入っている子の家の中で大きい家を宿として借りて、米三合と二銭を持ち寄り、宿に頼んだその家のお母さんとかに頼み五目飯を作ってもらつて食べたり、お金でお菓子を買つて食べたりした。天神講の他には、一月の小正月に行なう「ドンドン焼き」をまかされてやつた。上三俣の子供連は、地藏様の祭り(八月七日)と観音様(八月十七日)のときに、また下三俣の子供連は、葉

師様の祭り（八月十一日）と天神様の祭り（八月二十四日）のときに、それぞれトウロウを作り道路ばたに立てた。これは、竹で作ったトウロウのわくに紙をはり絵や文字を書いたもので、これを竹の棒に刺して（つけて）町内の辻に適当な間隔で立てた。このトウロウを上の子供連がやるときには下の子供連がやぶりに行き、逆に下のときは上はやぶりに行った。このトウロウを作る紙代や明りの油やロウソクの代金は子供連が各家からツラヌキとし集めて回った。（三俣）

**天道念仏** 上三俣では四十八年頃まで子供連の子どもたちが天道念仏という行事を行っていた。これは、子どもたちがおばあさんたちといっしょに「ナンマイダンボ」ととなえごとをしながら鉦をたたき、長い縄をひっぱって町の各家をまわる行事である。この際に、ツラヌキを集めさせてもらうので、そのかわりとして木版で刷ったお札とおみごくのお菓子配った。全部の家をまわり終わると、その縄を桃木川に流す。（三俣）

**悪魔つばらい** 下三俣では、七月十五日に子どもたちが中心になって「悪魔つばらい」という行事を行っている。この日、子どもたちは、薬師様の寮の庭にワラで作った太い縄を持って集る。そのとき「青年」の人達が鉦や太鼓を持ってきてたいてくれる。その青年の人達を囲んで、子どもたちが「ナンマイダンボ」ととなえごとを繰り返しながらまわり、その際に持ってきた縄を青年の人達にひっかけながら悪魔を倒す真似をする。終わると、使った縄を各自がカネ塚の横の堰のところに流した。この行事は昭和五十年頃まで行っていた。（三俣）

**赤城様のオクンチ** 十月十六日の赤城様のオクンチの宵祭りに、子供組が、竹で作ったわくに絵を書いた半紙をはりつけたとうろう（トウロッコ）を作り、中に火をともして神社の参道に立てた。このときの道具は村の世話人が用意してくれた。だいたい、一本のトウロッコ

を四人くらいで作った。この日は、子供組がフトンを持って神社に集まり、泊まって帰った。このときは村人があげてくれたお赤飯を食べたりした。子の行事は昭和三十年ころまで行われていた。また、子供組では三面薬師のときにもトウロッコを作った。このときには、村の世話人がまんじゅうを買って来てくれたり、世話人の家の庭にムシロを敷いて、そこで夕飯を食わせてくれたりした。このほかに、子供組では小泉のお地藏様のときにもトウロッコを作った。（亀泉）

**子供組** 小学校二年から高等二年までの子供たちで組を作っていた。組と言っても、それほど強いつながりではないが、年長の子供を中心にいろいろな行事をやっていた。特にドンドン焼きのときには中心になって行事を進めた。その他には田の害虫取りを行った。これは、苗間で稲がちょうど育つ頃を見計らって、子供たちが一斉に棒を持ち、苗の上をなでてやる。すると蛾がとび上がり、それを捕まえて焼き殺すといったやり方だった。この日は学校から先生も来ていた。この作業が終わってから区長さんの家に行くと、片原まんじゅうをくれた。その他、上級生だけで、蚕を飼う時期に、村の人達に天気予報を知らせることをやっていた。これは、桂萱の役場にいつも翌日の天気予報が出されるので、これを交替で見に行つて来て、その結果を火の見の上に旗を立てて村中に知らせた。（堀之下）

**子ども仲間** 神社のとうろうのとき、高等二年の者が一番カシラ、高等一年の者が二番カシラになって、お前はこっちの方をやれというように指図した。火をつけるのもカシラが決めた。とうがいに灯心をさして、菜種油を注いで火をつけた。カシラはいく人かいた。年がくれば自然とカシラになった。天神講のときはとくにカシラとはいわなかった。（荻窪）

頭かしらは尋常六年の者がなった。太鼓のはりかえやサイセンの管理もこ

のカシラが中心になってやった。頭はオクンチで交代になった。神社のそうじも子どもの仕事で、頭が三田ほどの手当をもらい、それを小さな子にわけて小遣にした。(堤)

#### 四、講

**アキワ講** 各クルワごとに、順番に宿となる家を決め、アキワ講をやっている。今は春、秋の二回だけだが、以前は夏場を除いて、十月から翌年の四月くらいまで毎月十七日にやっていた。当番の家では夕飯を用意し、みなで集まって夕飯を食べたりする。湯之気で秋葉様をまつている。(小神明)

**庚申請** 小神明では、南グルワで庚申請を祀り、庚申請を行っていた。(小神明)

**三峯講** 明治二十三年頃、町内の有志一七名で三峯講を作った。毎年二人ずつ交代で代参に行く。費用は自分持ちだが、お札代だけはもらうて行く。代参が帰って来る日、残った者は仮小屋を作って待っている。代参の者が帰ってくると、もらってきたお札をそのお仮屋に納め、御馳走を供える。その後、お札を分けてもらい家に帰る。(川端)

**榛名講** 昭和三十年頃まで村で榛名講を組んでいて、村から代参の者二名が榛名神社へお参りしてお札をもらってきて、各戸に配ることになっていた。行く日は特に決まっていなかった。代参に行く人は毎年回りで順番が決まっており、各家の戸主が交替で行くことになっていた。初めは歩いて行っていたが、戦後は室田までバスで行くようになった。代参に行くと、カドクラという神主の家に泊めてもらう。そのとき、風呂に入れてくれ、酒が出される。翌日、神社にお参りして、お札をもらって帰る。お札は泊まった神主の家で出してくれた。

代参に行くための費用は村から出された。(堀之下)

**庚申請** 旧の小泉村、中亀村の両方で庚申請を行っていた。しかし、小泉村では戦争中になくなってしまった。中亀村では今でも七軒で行っている。毎年、十二月の庚申の日に、一軒の家を宿にして、講に加わっている人が集まり、飲み、食いをしながら夜を明かしていた。今は百姓の忘年会になっている。宿は毎年回番になっている。講全体で、お膳・お腕・掛軸を持っていて、当番の家が翌年の庚申請の日まで保管しておくことになっていた。(亀泉)

**おしろい薬師** 旧中亀に昔からいる人だけで(現在七軒)「おしろい薬師」を祭っている。祭日は四月八日で、女衆がおしろいを塗ってお参りする。この日、宿を決め(中亀の中で回番)お参りをした女衆が集まり、飲み食いをする。このときの費用は出席者のわりかんでこれを「テンサク割」という。(亀泉)

**戸隠講** 堀之下の有志で戸隠講を組んでいた。これはたまには戸隠神社までお参りに行く人もいたが、普通は年に一回、御師が村に来て、柴田夏雄氏の家に泊まり、世話人の案内で村中を回りお札を配った。柴田氏の家では、床の間にシメをはり戸隠神社の掛軸をかけて、もてなした。(堀之下)

**百社参り** 戦争中、出征する人が出ると、その人の武運長久を祈って村の人が手分けをして、たくさん神社へお参りした。村の中を何組かに分けて方面を決め、それぞれの方にある神社に自転車や歩きでお参りした。これを百社参りと言った。(堀之下)

**赤城講** 戦争前までは堀之下全体で赤城講をやっていた。回り番で代参に行く人が二名ずつ決まっており、その人達が宮城村の赤城神社へお参りに行ってきた。(堀之下)

**代参講** 下小出には代参講として、三峯講があった。

## 五、家族生活

**身上マワシ** 身の上マワシ 農作業の指し図はオヤジがやり、金のやりくりはバアさんがやっていて、セガレ夫婦に子供でも出来て一人前になったと思ふ頃を見はからつて身上マワシをセガレ夫婦に渡す。金のやりくりやお勝手ことは、家によつてはいつまでもバアさんがやっていることもあつた。(小神明)

**新宅** 長男が家を継ぎ、二男以下はふつう新宅に出た。新宅にはすぐに出してもらるわけではなく、結婚してから、ある程度見込みがつくと、土地(宅地と農地)をもらつて分家に出してもらえた。

**分家** 二男以下は簀にやる家も多かったが、分家としてシントクに出すこともあつた。分家する場合、宅地と家は最低くれてやるもので、田畑は家によつてまちまちだつた。(小神明)

一反も土地をつけて、屋敷を立ててやつて分家させた。その分仕事して、とりもどした。番頭を使つても、自分はボロを着てかせいだ。

**二男、三男などが結婚したりすると分家をした。** 田畑は七〇八反で本家の $\frac{1}{4}$ 位のものを付けてもらった。本家に余裕のない場合は分家に出られず、町に働きに出た。(上細井)

**二男三男一新宅** だいたいの家で二男以下は簀に行く人が多かった。しかし、中には嫁をもらい、しばらく親、長男夫婦と同居して、シントクに出してもらう人もいた。また同居しないですぐにシントクに出してもらう人もいた。(小神明)

**財産分け** 普通は一〇〇%長男が相続。土地がたくさん有る場合、

分家・新宅に出す。(北代田)

**インキヨ小屋** 物置を作つて、その下に年寄りが住んでいた家もある。(小神明)

**アキヤシキ** 疫病で一家が死にたえたりして誰も住まなくなった家をアキヤシキという。このアキヤシキはそのイツケで管理していた。他所から来て、下働きなどをしてる人がこのアキヤシキをもらつて住むようなこともあつた。その場合、新たに住む人が元のその家の姓を名乗り、そのイツケに入ることもあつた。(小神明)

**イチマケ** 本家分家の関係で成り立つ同じ系統の家同士をイチマケという。本家分家としての濃い付き合ひは三、四代までだが、イチマケの場合は何代でも続く。イチマケは原則として、姓が同じであり、墓地を共有している。祝儀や仏事の場合はイチマケの人は多くおつつみをする。鳥取の中には、佐藤(二二)、樋口(二二)、大沢(二二)のイチマケがある。(鳥取)

**イツケ** 本・分家の関係で、同じ姓を名乗っている家どうしをイツケという。別れたのがいつとはわからなくても、祝儀や不祝儀の際には手伝い合う。血縁関係がなく、他所から来た人でアキヤシキに入り、元のその家の姓を名乗ると同じイツケに入る。(小神明)

家と家のつながりや系統をイツケという。一つの本家から別れた家々の集まりで、この付き合ひは何代たつても続く。基本的には、同じ村内に分家して同じ苗字であることが条件だが、他の土地へ出ても同じ苗字ならばイツケに入っている。イツケの内では、祝・不祝儀には必ず呼びつこをする。(川端)

昔はイチマケともいった。中島・関口などのイツケがあり、葬式の時などに助け合う。戦後、班ができてから、イツケのつきあひが弱くなった。(上小出)

萩原イツケ 萩原イツケの先祖は原之郷から来た。萩原坂という坂が今も残っている。かつてイツケで先祖まつりをしたこともあった。

(関根)

嫁のあいさつ 村中をあいさつしてまわった。(端氣)

嫁と姑 姑に対し、嫁は絶対服従。(荒牧)

位牌分け 木と紙の位牌をわけた。今はやらない。(上細井)

歳暮 鮭が多かった。砂糖もあつたが決まっていた。おかえしは米。お中元のおかえしは粉にした。(三俣)

## 六、その他

女中 小学校五く六年くらいの子から働きに出ていた。中には小学

校に上がらないで出ている子もいた。口べらしと金を得るために女中に行き、子守で赤ん坊をしょったまま学校へ来ていた子もいた。一年三〇円の契約だが、お金をわたすと半分以上も父親が持つていつてしまった。給料のほかに、夏はヒトエ、冬はアワセとハオリをくれた。

正月、節句と田植には、手ぬぐいをくれた。もんぺもくれた。本當の行儀見習は、東京へ行ったのが多い。豪族、社長、太尽の家へ行った。

女中や蚕の手つだいをあっせんする人をケイアンといった。(江木)

子守 子守は子供の仕事で、学校へ行くのに赤子を風呂敷にくるんで来た者も多かった。代田の八幡さまへよくでかけた。杉ゲタをよくはいたが、男子はワラゾウリが多かった。女子は着物で腰巻をつけた。

(青柳)

よばい 昔はワケエシがよばいにいった。よその村へ出かけ、娘のいる家に行った。伊勢崎の神谷まで行ったことがある。夏は開け放しだったから簡単に家に入れた。つかまって、ひっぱたかれたこともあつ

たという。(上泉)

順にまわったもんだという。(端氣)

ダルマ買い 前橋の紺屋町界限のダルマ屋へ行った。ダルマ買いには十八手あつた。(上泉)

女郎 女郎買いには玉村までいった。(川原)

夜あそび 障子に穴をあけて中をのぞいた。暗いので、米のとき汁のたまつた水たまりにおちてしまった。(端氣)

夕方、遅くまで表で遊んでいると、片石山から天狗がでる、オトウカがでると大人から言われた。(田口)

一人前の基準 米俵をかつぐ。娘はうどんうち、機織りができる。

一日に五畝稲刈りができる。(端氣)

一人前

田植で五畝できれば一人前

エンガで一反土を返せれば一人前(鳥取)

兵隊帰りは、目の玉がちがうといわれた。女衆は、反物一疋を三日でおれないと遅いといわれた。早い人は二日でおった。(荻窪)

田植えは八畝

さくきりは二反

山できつた木を一駄

縄ないを一日二十ボウ

はねむしろ一日一枚半、かいこむしろは一日六枚

俵あみは六俵

桑つみは晩秋のとき四ザルつんで一人前(川端)

一人前の量

夜なべの縄ないで、縄を三ボウなえられれば一人前である。なお一ボウとは、二十ヒロを一ボウとしたときの三ボウ、つまり六十ヒロの

ことをいう。

ワラゾウリは、一日四足作れて一人前である。

ムシロ織りでは、一日に二枚で一人前である。

ケダイ(ミノ)は二日で一つで一人前。(五代)

老人 昔の人は四十で「老人」になってしまふ。五〇歳にもなれば、農仕事ノラシゴトの役に立たなくなつて世捨て人になってしまふ。隠居カクレイというほど優雅でなく、「役立たず」、「米潰し」というイメージが強かつた。

(北代田)

子供の数 昔は子だくさんだつた。医学が発達してないので途中で子供がよく死んだ。だから、死ぬ分を計算に入れて子供を産んだ。

ただ、ほしくもないのに子ができた場合、下ろす金もないので産んだという場合もあつた。口減らしもあつた。産まれた子どもに、ぬれた布をかぶせ、窒息させた。(北代田)

新客 嫁方のオジ、オバ、嫁の兄弟など、婚礼の日に初めて顔を合わせる客を新客(シンキヤク)といつた。

お湯 おかいこの春蚕が済んだころ、あるいは、稲刈りの頃が済んで、温泉へ出かけた。老神温泉や四万温泉方面へ行つた。(荒牧)

昔の楽しみ みんなで話すこと。変わり物を食ふこと。風呂が立つこと。(荒牧)

競馬 水池付近はその後競馬場になつた。阪東じようせつ競馬場と言われた。上小出が主催して草競馬を行つた。今から五十七〜八年前のことほとんどが農耕馬で騎手は持主が多かつた。来々軒に「来姫」という馬がいて、それだけはプロ級だつた。賞品になつたものは、タンス、ごたんばた、ふきながしのはた、下駄箱等のもので、質は大変悪かつた。騎兵として出兵していたばくろうの福やん(日輪寺の福本)という人がいた。三、四〇〇人ぐらいの見物客が集まつた。区長級の



まつた。(上小出)

競馬の札(上小出町)

人が会長をつとめ組長級の人が役員になつた。青年団は力仕事をさせられた。昭和初期まで開催していたが、てき屋とのいざこざでやめてし

# 第三章 衣食住

## 一、衣服

### (一) 服装

**普段着** 男女とも、普段は木綿の地縞の着物を着ていた。若い人ほど太い縞の着物を着た。年寄りの着物は縞が細いので万スジと呼ばれた。(小坂子)

通常は木綿。夏には紺がすりや染めかすり。冬は綿入ればんでん。たびは、コールテンだった。(荒牧)

男は頭はスゲ笠かほつかむり。上着は腹がけにシャツと手甲、下はモモヒキで、足は地下足袋をはいた。冬は綿入れの半てんを着た。女はてぬぐいをかぶり、手甲、着物に、地下足袋だった。田植の時嫁は買ってもらった田植モモヒキに前掛けとたすきをした。(三俣)

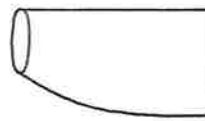
**男の普段着** 男の人は、普段は木綿の地縞の着物を着て、三尺の帯を締めていた。男の人の普段着の袖は筒袖であった。(端気)

**普段着のこと**はツネギ(常着)と呼んだ。男の人は、普段は木綿の地縞の着物を着て三尺の帯を締めていた。着物の袖は筒袖であった。(北代田)

男の人は、ツツポウ袖の地縞の着物を着た。(田口)

**普段着のこと**はチヨイチヨイ着、または常着と呼んだ。男の人は、普段は木綿の地縞の着物を着て、絹のしぼりの三尺帯(兵児帯)を締

めていた。着物の袖の形は、筒袖またはコイグチ袖(ネジリツツポウ)だった。(東片貝)



コイグチ袖

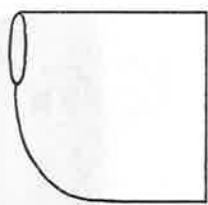


筒袖

(東片貝町)

**女の普段着** 女の人は、普段は木綿の地縞、または紺の着物を着て半幅の帯を締めていた。女の人の普段着の袖の形は元禄袖が一般的だったが、未婚のごく若い人は丸袖の着物を着ていた。(端気)

女の人は、普段は木綿の地縞の着物や柄物の着物を着て、半幅の帯を締めていた。着物の袖の形はナギナタであった。(北代田)



元禄袖

(東片貝町)

女の人は、普段は木綿やガスの縞の着物を着て、メリンスや縺子、藤絹などの半幅帯を締めていた。着物の袖の形は、元禄袖またはコイグチ袖(ネジリツツポウ)だった。(東片貝)

**男の仕事着** 仕事着のことは野良着と呼ぶ。農作業をする時には、シャツを着て股引をはいた。昭和になってからはズボンをはく人も現



われた。また、冬季には綿入れの野良繻絆を着た。特に寒い日には、その上に半てんや胴着を着た。(端気)

男の人は、農作業をする時には袖口にボタンのついたシャツを着て、股引をはいた。股引の色には浅黄や紺があった。一反の布地から三本の股引を作ることができた。(小坂子)

男の人は、田植の時には浅黄や紺の股引をはいて、越後笠をかぶった。山仕事の時には股引をはき、足袋をはいてその下に草鞋をはいた。草鞋は、大正末頃まで使われていた。(田口)

男の人は、農作業をする時には、木綿のシャツを着て股引をはいた。冬には綿入れの胴着や半てんを着た。胴着は半てんより丈がやや短く、袖があり、脇の下に「ウマノリ」があいていた。(北代田)

男の人は、農作業をする時には国防色の野良シャツを着て、やはり国防色の野良股引をはいた。冬はこの上に木綿の綿入れの半てんを着た。(東片貝)

男の人は、農作業をする時には木綿のシャツを着て、木綿の紺の股引をはいた。冬には、シャツの上に綿入れの着物を着た。また、その上に筒袖の半てんを着ることもあった。半てんは、作業中には脱いでいることが多かった。(江木)

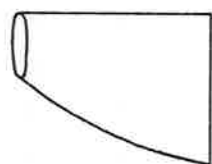
女の仕事情 仕事着には普段着の古くなったものを利用した。田に出る時は、木綿の長着を着て帯を締め、たすきをかけて着物の裾をはしょって仕事をした。冬季には着物の上に綿入れの半てんを着た。第二次世界大戦頃からはモンペが普及し、仕事着としても利用された。(端気)

女の人は、夏季に農作業をする時には、単衣の長着を着て尻をはしよった。冬季には綿入れの着物を着た。綿入れの着物を作るには、布地を二反使って表と裏を作り、その間に真綿を入れた。(小坂子)

女の人は、田植の時にはオコシをつけ、頭には手拭をアネサンカブリにしておぼった。山仕事の場合は着物の尻をはしよった。家事の際には着物にたすきがけが普通であったが、昭和七年頃からエプロンが普及していった。(田口)

女の人は、仕事をする時には、木綿の着物を着てシリッパシヨイ(尻はしよい)をした。また、着物には前掛けをかけ、袖をからげるためにたすきをかけた。大正期頃までは、田植の時には股引をはいた。冬には綿入れの胴着や半てんを着た。また、第二次世界大戦中にはモンペが普及した。(北代田)

女の人は、チョイチョイ着の古くなったものを仕事着として利用していた。夏は単衣の着物を着てたすきをかけ、シリッパシヨイをして農作業をした。冬はこの上に木綿の綿入れの半てんを着た。女の人は、田植の時には紺の着物を着て股引をはいた。また、手には手甲をつけ、着物には赤いたすきをかけた。(東片貝)



ナギナタ袖

(江木町)

女の人は、普段仕事をする時には木綿の着物を着て、半幅帯を締め、夏には単衣の着物を着たが、冬にはこれに裏をつけて着た。また、冬には着物の上にナギナタ袖のウワツパリを着ることもあった。後にはウールの着物も登場した。第二次世界大戦中にはモンペが普及し、仕事着としても利用された。戦後は次第に標準服を着るようになった。(江木)

男の外出着 外出着のことはヨソユキという。男の人は、絹のたもと袖の着物を着て三尺の帯を締めていた。(端気)  
外出着のことはヨソイギと呼んだ。男の人は、ヨソイギには紺緋の

着物を着て、三尺の帯を締めた。ヨソイギの着物の袖は、たもとの袖であった。冬は、着物の上に羽織をはおった。また、若者が夏に夜遊びに出る時には、浴衣を三尺で縛って肩にかけて出たりした。(北代田) 男の人はヨソイギには紺紵を着た。大正末頃から、夏には浴衣を着るようになった。(田口)

外出着のことはヨソイギと呼んだ。男の人は、ヨソイギには絹の縞の着物を着て、縮緬のしぼりの三尺帯を締めた。祭りなどで踊りを踊る時には角帯を締めた。(東片貝)

男は着物に冬はエンバナスといった二重まわし、足袋にげた、中折れ帽子か烏うち帽子をかぶった。二重まわしはオーバーに変わり、若い人はマントを着た。(三俣)

外出着のことはヨソイギと呼んだ。男の人は、夏には絹の単衣の着物を着て、木綿や絹のしぼりの三尺帯を締めた。冬には裏のついた着物を着て、その上に羽織を着た。マントを着ることもあった。(江木)

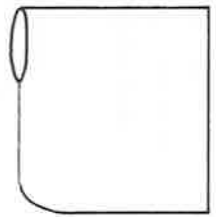
女の外出着 女の人は、外出のときには絹のたもと袖の着物を着て、半幅の帯を締めた。着物の柄は縞で、若い人ほど太い縞の着物を着た。

(端気)

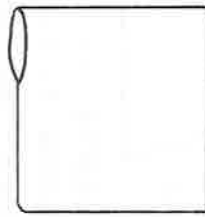
女の人は、ヨソイギには銘仙や縮、メリンスなどの着物を着た。ヨソイギの着物の袖は、たもとの袖であった。帯には、半幅の帯と並幅の帯があった。半幅の帯はおたいこに結びあげた。冬は、着物の上に羽織をはおった。さらにその上に、道行をはおることもあった。

(北代田)

女の人は、ヨソイギには絹や縮緬の着物を着て、縺子にメリンスや絹をあわせたあわせ帯を締めた。着物の袖の形はたもと袖で、未婚者のたもと袖は八口の入口の色が赤いものだった。既婚者の着物のたもと袖は、八口の入口の色が白いものだった。(東片貝)



既婚者



未婚者

たもと袖 (東片貝町)

女はチリメンの着物にござ付の吾妻げたをはいた。ふだんはメリンスの着物にござのない下駄だった。そうりは結婚式の時にはいた。(三俣)

(三俣)

女の人は、夏には絹の単衣の着物を着て、表が絹で裏が縺子のあわせ帯を締めた。また、この上に夏羽織を着ることもあった。冬には裏のある着物を着て、その上に羽織を着た。また、マントを着ることもあった。(江木)

子供の服装

子供は、校服を着て

着て藁草履をはいて学校へ通っていた。藁草履は一日ですり切れてしまうので、家庭で毎日新しいものを作った。(端気)

普段は、男の子も女の子も木綿の地縞の着物を着て、三尺帯を締めていた。男の子の着物の袖は筒袖、女の子の着物の袖は丸袖だった。

ヨソユキの場合には、男の子は紺紵の着物を、女の子は柄のある着物を着た。また、女の子は学校で儀式がある場合には、柄のある着物を着て袴をはいた。(小坂子)

自分で織った地縞の着物から、カスリの着物になった。冬は羽織か半てんを上に着た。足は下駄かゴムぐつだった。(三俣)

子供は地縞の着物を着て、風呂敷を背負い、弁当を持って学校へ行った。大正七年頃からはカバンを下げる子供がみられるようになった。履物は、下駄か家で作った藁草履で、雨が降ると素足で歩いたものだった。(田口)

男の子は、普段は木綿の紺や縞の着物を着て、三尺を締めていた。男の子の着物は筒袖だった。女の子は、普段はえんじなど赤系統の地色に柄（菊の花など）のある木綿（ニコニコ）の着物を着た。また、女の子は茶・黒・紺などの縞や紺の着物を着ることも多かった。子供は、尋常小学校に通っている間は四つ身の着物ですごした。農休みに、夏着を買ってもらい、四つに折った手拭を三尺にはさんで下げている。履物については、登校時や普段家にいる時には藁草履をはいていた。正月になると、足袋をはいて下駄をはいた。（北代田）

子供は、昭和初期頃まで着物を着ていた。男の子は、普段は木綿の地縞の着物を着ていた。ヨソイキには紺縞を着た。女の子は、普段は木綿の地縞の着物や、ニコニコの綿の着物を着た。冬には、男の子も女の子も綿入れの長着や綿入れの半てんを着た。履物については、藁草履、フジクラ草履、雪駄などをはいた。なお、通学時には風呂敷包みを持って行った。（東片貝）

祝儀の着物 祝儀に着的る着物は祝い着という。男の人は、結婚式には絹の紋つきの黒い着物を着て、袴をはいた。女の子の花嫁衣装は、黒地に裾文様のある江戸褌だった。（北代田）

祝儀の際に着的る着物は晴れ着、または祝いで呼んだ。男の人は、絹の縞の着物を着て、仙台平の袴をはき、黒い紋つきの羽織を着た。女の人は、絹や縮緬の黒無垢の着物を着て、錦織りの丸帯を締めた。女の子の着物の袖はたもと袖で、入口の色は白だった。（東片貝）

男の人は、婚礼の日には絹の無地の着物を着て、男帯または三尺を締めた。そして黒い袴をはき、紋つきの黒い羽織を着た。紋つきには五つ紋と三つ紋があったが、五つ紋が正式とされた。夏には絹の羽織を着た。

女の子の花嫁衣装は、黒い留袖の着物だった。帯については丸帯を

締めた。昔は、自分の家で絹織物を織り、紺屋に染めてもらって着物を作った。なお、打掛けを着る人はほとんどいなかった。（江木）

喪服 葬式には、男の人は黒い絹の紋つきの着物を着て、袴をはいた。女の子は、黒地に紋の入った絹の着物を着た。大正末期頃までは、死者の身近な女の子（妻・娘・嫁・姪など）は白無垢の着物を着て、さらしの白布を頭にかぶった。（北代田）

男の人は、祝儀と同様に黒い紋つきの羽織を着て袴をはいた。女の子も、一般の人は祝儀と同様にたもと袖の黒無垢の着物を着た。昭和の初め頃までは、死者のごく身近な女の子は白無垢の着物を着た。

男の人は、祝儀の場合と同様に、紋つきの黒い羽織を着て、袴をはいた。女の子は、五つ紋または三つ紋のついた黒い着物を着た。夏には絹の黒い着物を着た。女の子で死者のごく身近な人（親や子など）や、葬列の中で位牌を持つ女の子は白無垢の着物を着た。（江木）

## （二） かぶり物

手拭 農作業のために田に出る時は、男女ともに手拭をかぶるのが普通だった。男の人のかぶり方はホウコッカブリ、女の子のかぶり方はアネサンカブリが一般的だった。（端気）

農作業をする時には、日除けや虫除けとして手拭をかぶった。男の人の手拭のかぶり方はフウコッカブリと呼ばれ、手拭を広げてかぶり、あごの下で結ぶものだった。女の子の手拭のかぶり方はオンナツカブリと呼ばれ、手拭を広げてかぶり、頭の後ろで結ぶものだった。

農作業をする場合には、菅笠の下などに手拭をかぶった。男の人の手拭のかぶり方は、ホウコッカブリが普通だった。ホウコッカブリは、

（北代田）

手拭を広げて頭にかぶり、あごの下で結ぶものだった。女の人の手拭のかぶり方はアネサンカブリと呼ばれ、手拭いを広げて頭にかぶり、頭の後ろの方で結ぶものだった。(江木)

農作業をする時には、ほとんどの場合、手拭をかぶった。男の人は、冬の寒い日にはホウカムリをした。これは、手拭を広げて頭にかぶり、あごの下で結ぶものであった。女の人の手拭のかぶり方はアネサンカブリが一般的だった。これは、手拭を広げて頭にかぶり、後ろの方で結ぶものだった。また、女の人は子守や盆踊りなどの時には、手拭を広げて頭の後ろからかぶり、前の方で結んだ。これをモリッコカブリと呼んだ。(東片貝)

鉢巻き 男の人は、農作業をする時に手拭で鉢巻きをすることもあった。手拭を細く折って頭の後ろで結ぶウシロハチマキや、手拭をねじってはさみこんで止めるネジリハチマキなどがあった。(東片貝)

帽子 男の人は、頭を丸坊主にしていたので、ヨソイキの時には帽子をかぶることもあった。若い人は烏打帽をかぶり、年をとった人は中折帽をかぶった。これらの帽子が古くなると、畑仕事をする時にかぶったりした。(北代田)

越後笠 田植の時などにかぶった笠で、ワツカがついていた。大正十年頃まで盛んに用いられていた。大正の中頃からは、越後笠に代わって麦藁帽子が普及していった。(田口)

笠 農作業をする場合には、雨除けや日除けのために菅笠をかぶった。ヒゲ笠(経木笠)をかぶる人もいた。後には麦藁帽子をかぶるようになった。(江木)

雨の降る日の農作業には菅笠をかぶった。男の人の菅笠には、頭に合わせたワクがついていた。女の人の菅笠には、あごで結ぶためのヒモがついていた。晴れた日の農作業には、日除けとして男女ともにヒ

ゲ笠(経木笠)をかぶった。大正十年頃からは、ヒゲ笠に代わって麦藁帽子をかぶる人もみられるようになった。(東片貝)

### (三) 履物

履物 普段は男女ともに駒下駄をはいていた。農作業で田に出る時は素足だった。(端気)

普段は藁草履をはいた。田畑で仕事をする時は、夏は素足だったが、冬には草鞋ガゲの下に草鞋をはいた。藁草履や草鞋は、夜なべ仕事に作った。(上小出)

足袋 普段は木綿の紺足袋をはくことが多かった。足袋は旧前橋市内から買って来ることが多かったが、型紙を作って自分で縫う人もいた。(小坂子)

男の人は、普段は木綿の紺足袋をはいた。女の人は、普段はキヌテンやコールテンの足袋をはき、色は特に決まっていなかった。ヨソイキや祝儀の場合には、男の人は木綿の黒足袋をはき、女の人は綿の白足袋をはいた。足袋は、買って来てはくことが多かったが、第二次世界大戦中は自分の家で作った。田や畑で農作業をする場合は、丈夫な布でできたワラジガケという足袋をはいた。なお、地下足袋のこともワラジガケと呼んだ。(江木)

草履 普段、農作業をする時には藁草履をはいた。子供は学校へ行く時にも藁草履をはいた。藁草履は水に濡れると傷みやすいので、「井戸端へはいて行くな」と言われていた。(北代田)

普段は、裏にキルクの張つてある草履をはいた。ヨソイキの場合は、表に布の張つてある草履をはいた。(江木)

普段は男女ともに藁草履をはいていた。また、フジクラ草履をはくこともあった。ヨソイキには男女ともフェルトの草履をはいた。ヨソ

イキに雪駄をはく人もいたが、これは男の人に多かった。また、男の人は冠婚葬祭にはゴザのついた草履をはいた。(東片貝)

**草鞋** 山へ薪などを採りに行く時には、木綿の足袋の古くなったものをはいて、その上に草鞋をはいた。昭和初年頃には、草鞋に代わって地下足袋が使用されるようになった。(北代田)

東片貝町では草鞋をはいている人はほとんど見られなかった。田植や畑仕事の際には素足になるのが普通だった。第二次世界大戦後になって、農作業用のはき物として地下足袋が普及した。(東片貝)

**下駄** 普段は藁草履をはいていたので、下駄をはくのはほとんどヨソイキに限られていた。ヨソイキには朴の下駄や桐の駒下駄をはいた。雨の降る日には足駄下駄をはいた。(北代田)

普段は、駒下駄や後丸、朴歯の下駄などをはいた。雨の降る日には、高歯の下駄や足駄下駄をはいた。(江木)

普段は朴歯下駄や駒下駄をはいた。駒下駄のうち、かかとの部分の丸いものを後丸下駄と呼んだ。男の人の駒下駄は征目のものが普通だった。冠婚葬祭の時には、丸下駄にゴザのついた草履下駄をはいた。昭和十年頃から、下駄や草履に代わって靴が次第に普及していった。(東片貝)

#### (四) 雨 具

**雨具** 雨の降る日に農作業などを行う場合は、藁で編んだケダイを着て、スゲ笠をかぶった。ケダイは自分で編むこともあったが、旧前橋市内の荒物屋で買うことが多かった。(端氣)

田植や田の草取りの時には、菅笠をかぶり、ゴザを着た。菅笠には男用と女用があり、男用のものは頭に手拭が入るようにワツカがついていた。女用の菅笠には、蒲団のような台とあご紐がついていた。田

に出る時は「天気でもゴザと笠は持って行くものだ」といわれ、日除けとして、また夕立への備えとして使用した。菅笠やゴザは昭和二十年頃まで使われていた。これらのほかに、雨具として藁で作ったケダイもあった。(北代田)

ケダイ、油紙のカツパ、キゴザ、スゲガサ、ミノがあった。紙にしぼった油をしみこませたものが雨具のはじめで、その後売っているものを買って着るようになり、そしてキゴザになった。牛や馬の鼻取りする時は、前がはねでよごれるため、すれたミノを前からつけた。カサは蛇ノ目と唐カサ、番ガサがあり、蛇ノ目は、嫁入り道具として、仲人がお祝いにくれた。(三俣)

雨の日の田植や田の草取りの際には、女の人はゴザを着た。ゴザには上に油紙が貼ってあった。男の人は藁で作ったケダイ(ミノ)を着た。ケダイには紐がついていて、首と前と腰で縛るようになっていた。ケダイを作る時には、藁の根元の部分は使わずに、中程から先の部分を使った。(東片貝)

明治頃までは、雨の降る日に農作業をする場合には、稲藁で作ったミノを着た。ミノは大正頃からみられなくなった。(江木)

#### (五) 理髪・化粧

**髪型** 男の人の髪型は坊主頭が普通だった。女の人は、普段は髪を無造作に丸めておいて、ヨソユキのときに日本髪を結った。(端氣)

**男の髪型** 男の人は、頭を丸坊主にしていた。(北代田)

男の人の髪型は坊主頭(丸刈り)が多かった。なかには髪をのばして七三わけにしている人もいた。(東片貝)

**女の髪型** 昭和二十年頃まで、女の人の普段の髪型はヒツカラミが一般的であった。ヒツカラミは、髪の元の部分をモトイ(元結)で縛っ

てから頭の上で巻いたものであった。ヒツカラミには、髪を編んでから巻く方法もあった。また、髪のを元結で縛り、巻いてからピンで止める方法もあった。終戦後、髪にパーマネット・ウエイブをかける人が多くなった。ヨソイキの髪型については、若い娘は桃割れに結うことが多かった。やや年上になると銀杏返しを結う人もいたが、あまり多くはなく、ハイカラな人がお祭りの時などに結った。嫁に行った後は、丸鬘を結うのが普通だった。(北代田)

女の人は、普段は髪のを頭の後でしぼり、下がらないようにマキツプシをつけて巻いておいた。また、ハイカラ巻きにしている人もいた。ヨソイキの場合は、既婚者は丸鬘を結うのが普通だった。ハイカラな人の中には行方不明(束髪の種類)を結う人もいた。娘の髪型は桃割れが一般的だった。(東片貝)

女の人は、普段は髪を二つに分けて後ろで丸めて縛っていた。ヨソイキの時には、髪をとかし直して出かけた。正月などには既婚者は丸鬘を結った。娘は銀杏返しを結び、かんざしなどをさした。婚礼の時には、花嫁は島田鬘を結った。(江木)

髪かざり 髪には飾りとして櫛をさすことが多かった。(東片貝)  
女の人は、ヨソイキの時には髪に櫛をさした。柘植やべっこうの櫛が多かった。また、このほかにも、めのうのかんざしや花かんざしなどをさす人もいた。(北代田)

子供の髪型 男の子の髪型は丸坊主だった。女の子の髪型は、オカッパや編み下げが多かった。(北代田)

男の子の髪型は、坊主頭(丸刈り)が普通だった。女の子は、小学校四年生頃まで髪を桃割れに結っていた。桃割れは頭の後に二つの輪を結うもので、飾りとしてザンザやタテナガをつけた。小学校五年生くらいから上になると、髪を三つ編みにしておさげにした。おさげは

編みさげ、または組みさげとも呼ばれた。昭和の初め頃からは、桃割れに代わってオカッパが多くなった。(東片貝)

洗髪 髪を洗う時には、うどんのもうで湯を使って洗った。また、うどん粉とフノリを湯に溶いたものを使っても、汚れがよく落ちた。

昔は、髪洗いの粉を買って来て洗髪に使った。髪洗いの粉は一袋二銭くらいで売っていた。また、うどんのもうで湯を使うこともあった。うどんのもうで湯で洗うと髪がすべこくなかった。このほか、卵の白味を使うこともあった。(東片貝)

化粧品 女の人は、外出する時にネリ(練り白粉)を水でといて塗ることがあった。ネリはビンに入ったものが売られていた。オハグロは結婚した女の人がつけるもので、明治時代には見ることができた。(端氣)  
ヨソイキの時に、ほお紅、口紅、お白粉などをつける人もいた。(北代田)

化粧などめつたにしなかった。ヨソイキの時に、紅や白粉をつける人もいた。(東片貝)

お歯黒 昔は、女の人は結婚すると眉毛を落とし、お歯黒をつけた。お歯黒はヨソイキの時につけた。オハグロの実を粉にして茶碗に溶き、時々うがいをするが、歯ブラシを使って歯に塗った。六十年くらい前に、五十代くらいの人がしているのを見たことがある。(北代田)

嫁に行くとき、着物の袖の八口の入口を白くし、歯にお歯黒をつけた。大正初期頃までお歯黒をしている人を見かけることができた。(東片貝)

## (六) 衣服の仕立て・管理

着物の生地 木綿のカスリ、シマ、麻などだった。(荻窪)

布地・着物の入手法 木綿の布は、旧前橋市内で買うことが多かった。農作業用のシャツ・股引き・繻絆・胴着などは、買ってきた木綿布を材料に家庭で作るのが普通だった。絹のヨソユキの着物は、呉服屋で買うことが多かったが、家庭で織って作ることもあった。(端気)

昔は、布地を買って、家庭で母親や祖母が農作業の合間に家族の着物を作った。布地は旧前橋市内から買って来るが多かった。大正初期頃で木綿布が一反当たり八〇錢程度だった。また、滋賀県から江州反物を売りに行商人がやって来たので、布地を行商人から買うこともあった。江州反物の行商人は、正月前、三月・五月の節供前、農休み前と一年に四回くらい、反物を天秤棒でかついで売りに来た。

(小坂子)

機織り 第二次世界大戦前までは、糸ひきから機織りまでを家庭で行った。糸の原料は屑繭で、これを座繰器にかけて糸をひいた。ひいた糸は灰や炭酸で練り、染め粉で染めた。染め粉は前橋市内で売っていた。染めた糸はバツタン(高機)を使って機に織った。(東片貝)

端気の角田さんというおばあさんにならつておぼえた。十人くらい、いっしょだった。日機(一日一反)はなかなか織れない。腕のいい人で一日一反がやつとだった。(小神明)

裁縫 昔は、家族の着物は女の人が家で縫って作るのが普通だった。着物の仕立てなど縫い物は町内の師匠さんから習った。着物の仕立てやつぎあてなどは、夜なべ仕事として家庭の主婦が行った。布地は、前橋市内(弁天通りあたり)の呉服屋から買って来るが多かった。

(東片貝)

### 裁縫用具

- ・ラシャばさみ——布を裁つ。(北代田)
- ・握りばさみ——布を裁つのに使った。後にはサシャばさみを使うようになった。(東片貝)

うになった。(東片貝)

・つまみばさみ——糸を切る。(東片貝)

・小ばさみ——糸を切る。(北代田)

・ものさし——寸法を測る。(北代田・東片貝)

・ヘラ——象牙製で、寸法にあわせて布にあとをつける。(北代田・東片貝)

・指皮——針から指を守るためにはめる。(北代田)

・針坊主——針をさしておく。(北代田・東片貝)

・裁ち板——ヘラを使う際に、布を平らに広げておくのに使う。(東片貝)

・くけ台——布をカンバリではさみ、きせかけをするのに使う。(北代田・東片貝)

・針箱——裁縫箱ともいう。針、はさみなどの裁縫用具を入れておく。(東片貝)

・こて——着物のたもとの角などに筋をつけるのに使う。木綿布は手でこけば筋がついたが、絹や毛織物にはこてをかけた。(東片貝)

火のし 手鍋のような形をしており、中におきを入れて着物などのしわを伸ばすのに使った。座蒲団のような台の上に着物を広げ、濡らした手拭をかけてその上から火のしをかけた。(小坂子)

針と糸 縫い針には木綿針や絹針があり、絹針の方が細かった。糸には木綿糸、麻糸、絹糸などがあつた。絹布のしつけ糸にはゾベ(ぞべ糸)を使った。(北代田)

仕立て まず、はさみで布を裁つ。次に、寸法にあわせて布にヘラをあて、あとをつける。毛織物の場合にはチャコを使う。それから、つけたあとに従つて布を縫っていく。縫う手順については、最初に袖を縫い、次に身頃を縫う。それから、身頃におくみ(衽)をつけ、裾

をくける。さらに、縫っておいた袖を身頃につけ、最後に襟をつける。あわせの場合は、裏地と表地を裁断し、それぞれの部分で裏表二枚を縫い合わせる。仕立ての順序は、基本的には単衣の場合と同様である。

(北代田)

着物を仕立てるにあたり、まず布を裁断する。布一反の長さは二丈八尺から三丈くらいで、一反から大人用の着物一枚を作ることができた。布を裁つ際には、まず袖から裁ちはじめ、続いて身頃、おくみ、えり、おくえりの順で裁つていった。袖と身頃は大幅でとり、おくみとえりは半幅でとった。裁断した布を縫う手順については、まず袖を縫い、次に身頃を縫う。単衣の場合は、背縫い、わきの順で縫い、その後で身頃におくみ、袖、えり、ともえりをつける。そして、最後に袖口や裾をまつる。あわせの場合は、表地と裏地をそれぞれの部分で縫い合わせ、裾合わせをする。(東片貝)

つくろいもの・フトン作りなど　つくろい物は夜にした。秋からは、新年に着せる新しい着物をぬいにかかる。また、かいまきも自分で作った。男は、女がぬい物をしている時は、縄をなったり、米俵をつくった。フトンも買えないので、自分で布を染めて作った。布は木綿やキヤラコを用いた。(荒牧)

股引の膝が破れたものは、よく洗ってから裏側から布を当ててつぎあてをした。半てんの肘の抜けたものは、切れた綿を入れ替えてからつぎあてた。蒲団皮の古くなったものは、よく洗っておむつにした。

(小坂子)

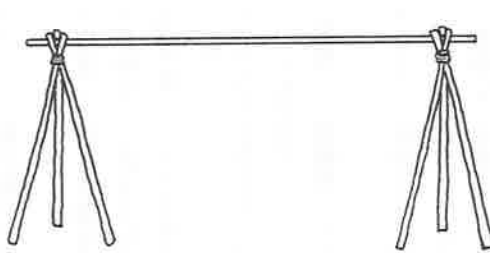
### 裁縫に関する禁忌

- ・申の日には布を裁たない。
- ・正月十四日のオシラ日待ちには、針を使わない。
- ・初午の日には針を使つてはいけない。(東片貝)

・申の日には布を裁つものではない。できた着物が焼けるからだという。

・ある人の着物を作る時に、その人の生まれ年と同じ日には布を裁つてはいけない。身を切るといふ。(北代田)

洗濯　洗濯には、洗剤としてさなぎから作った固形石けんや、こぬかを使った。木綿の着物を仕立て直す時には、糸を抜いて洗つてから、ウスノリをつけて張り板に張って形を整えた。これを洗い張りという。洗い張りに使うウスノリは、湯にうどん粉を入れて煮えたたせ、これにフノリを加えてから漉したものだ。(北代田)



物干し台 (東片貝町)

昔は、洗濯には洗剤として、木灰に水を入れてよどませたものを使った。その後、石けんを使うようになった。洗い方については、たらいの中でもみ洗いをするのが主な方法であったが、大正初期頃から洗濯板を使うようになった。洗濯物を干す時には物干し台を使った。木綿のものは日向に干すのが普通だった。絹のものは半日陰に干し、あまり天日に晒さないようにした。

(東片貝)

張り板　木綿の着物を仕立て直す場合合には、洗濯してから張り板に張って、

布の形を整えた。(東片貝)

伸子張り　絹の着物を仕立て直す場合には、洗濯してからふのりをつけ、伸子を使って布を伸ばして形を整えた。(東片貝)

着物の収納　晴れ着などは、たたんでダンスの中にしまっておいた。



虫除けには樟脳を使った。土用の頃には、着物をタンスから出して干したが、これを土用干しといった。(東片貝)

着物は、洗濯したのち、たたんでタンスの中にしまっておいた。

(端気)

綿 明治時代頃までは、綿から糸をつむいで木綿の布を織った。

(田口)

昭和二十五年頃、綿を栽培したことがある。とれた綿をつむいで糸

にし、練つて、染めて機に織った。織った布で地縞の着物を作った。

また、とれた綿を綿屋に出して綿にしろい、綿入れにも使った。

(北代田)

作ったことがある。綿つみをした。(三俣)

昔は、綿を栽培していた。各家庭には糸車があり、綿から木綿糸を

つむいだ。木綿の綿は半てんや蒲団に入れることもあった。(江木)

絹糸 昔は、座繰で蚕の繭から糸をとった。前橋市には糸市場があ

り、「シク」といって、毎月四日、九日、十四日、十九日、二十四日、

二十九日に市があった。(北代田)

麻 昔は、麻を栽培したこともあった。刈り取った麻を川へもつて

いってふやかし、皮をむいて麻にした。麻はホソビキ(荷縄)を作る

のに使った。(北代田)

## (七) その他

寝間着 寝る時には普段着のまま寝ることが多かった。下着で寝る

こともあった。寝間着としては、ネルの単衣の着物があつた。(北代田)

寝間着については特別なものはなく、普段着のまま寝ていた。(端気)

下着 男の人は、長さ三尺の越中褌を締めた。また、メリヤスやネ

ルのシャツを着た。ネルのシャツは第二次世界大戦後に普及した。女

の人は、さらしの縹絆を着て腰巻を巻いた。(北代田)

男の人は褌を締めていた。越中褌や三尺の褌を締める人が多かったが、六尺褌を締める人もいた。六尺褌は、一反の長いさらしを後ろで兵児帯式に締めるものだった。後には褌に代わってサルマタをはく人が多くなった。女の人は、ネルの肌襦袢を着て、ネルの腰巻をした。

昭和の初め頃からはメリンスの肌襦袢も用いられるようになった。なお、女の子は股引をはいていた。(東片貝)

枕 普段、寝る時は靱ガラの枕やソバガラの枕を使った。日本髪を

結った場合には、朱塗りや黒漆塗りの箱枕を使った。(江木)

蒲団 蒲団の中には綿を入れて使った。昔は、綿を栽培して自分の

家で綿を作って入れた。屑繭を煮て、炭酸を加えて練つて真綿を作り、

蒲団に入れる人もいた。また、繭のケバを綿にする人もいた。江木町

には綿打ちを商売にしている人がいたので、その人に頼んで蒲団を作

ることもあった。(江木)

夜具には木綿わたの蒲団が用いられていた。敷き蒲団は一枚だけ敷

き、かけ蒲団は必要に応じてかけた。(端気)

寝具は、せんべいぶとん・かいまき・かけぶとん・すそぶとんなど

がある。夏はゆかたを一枚腹にひっかけて寝る。カヤはまちな行つた

ときに買ってくる。(嶺)

袋 旅行用には信玄袋があつたが、ふだんの荷物は、ふろしきでは

こんだ。(三俣)

子守り用具 子供を背負う時は、うぶいおびという木綿製の長い丸

帯を使った。そして、その上に綿入れのネンネコ(ねんねこ半てん)

を着た。(端気)

## 二、食物

### (一) 食糧

**食糧** 主食として、大麦、小麦、サツマイモなどを沢山作つた。アワ、ヒエ、キビ、ソバなどの雑穀類は、土地に合わないのでほとんど作らなかつた。(北代田)

**米** 米には粳と糯があつた。糯米は御飯として食べるほか、小豆粥・七草粥など粥としても食べた。また、石臼で粉に挽き、繭玉にもした。糯米は正月や節供の餅にするほか、赤飯やボタ餅にもした。(小坂子) 昔から、いつ災害にあうかわからないから「米は二年分とっておけ」と言われていた。しかし、これは大尽の家でのことである。(川端)

**麦類** 大麦は水車で挽いてヒキワリにし、米と混ぜて御飯に炊いた。小麦は石臼で粉に挽き、うどんやネジッコ、焼餅やイリヤキにして食べた。また、麦類はコウジの原料にもなつた。(北代田)

昔は大麦と小麦を沢山作つた。小麦は新田早生という品種をよく作つた。(上小出)

大麦は、主に水車で挽いてヒキワリにし、米と混ぜてヒキワリ飯にして食べた。また、ヒキワリを作るときに出たコワリ(細かく割れたもの)は小麦粉と混ぜて焼餅にした。その他、大麦は味噌を作るときのコウジの原料にもした。(小坂子)

小麦は主に石臼で粉にされ、小麦粉として利用された。小麦粉は、焼餅やふかし饅頭、うどんなどの材料とされていた。また、小麦は醤油を作るときのコウジの原料としても用いられていた。(小坂子)

**モロコシ** 戦争中粉にしてもちにした。赤飯のような赤いもちにした。(三俣)

**芋類** イモといえば里芋をさす。里芋は煮物にしたり、味噌汁に入れたりした。また、米やヒキワリと一緒に炊いて芋飯にもした。

(小坂子)

「イモは陰の俵」といわれ、単にイモといえばサトイモやサツマイモのことをさした。上小出町ではサツマイモを多く作つていた。サツマイモに次いで多かつたのはサトイモであり、ジャガイモはあまり多く作らなかつた。(上小出)

亀泉町では里芋やサツマイモを多く作つた。里芋のことはタダイモと呼び、煮て食べたり、ヒキワリ飯に入れて芋飯にしたりした。サツマイモは、ふかしてゴジョハンとして食べることが多かつた。(亀泉)

里芋はおかずとして食べることが多く、主に煮物や汁の具にした。ジャガイモは汁の具にするほか、ゴジョハンの時に茹でて食べた。サツマイモは、主にゴジョハンの時にふかして食べた。また、里芋、ジャガイモ、サツマイモはヒキワリ飯に混ぜて炊くこともあつた。(北代田)

**豆類** マメといえは大豆をさす。大豆は主に味噌や醤油の原料にした。また、焙烙で炒り、石臼で挽いて黄粉にもした。(小坂子)

小豆は、赤飯や小豆粥などに入れて使つた。また、砂糖を加えて煮て、ふかし饅頭やボタ餅の餡にも使つた。(小坂子)

**野菜類** ナスは糠漬や味噌汁の具や油味噌にした。キュウリは主に糠漬や味噌漬にし、冷汁の具にもした。白菜やシャクシ菜などの菜類は塩漬にすることが多かつた。大根は煮物や味噌汁の具にするほか、タクアンや切干にした。シンは、葉を細かくきざんでイリヤキや冷汁に入れたり、実を味噌漬にしたりして食べた。(北代田)

**果物** 庭には、柿・梅・栗などの果物の樹を植えていた。甘柿はそのまま食べた。渋柿は干し柿にして食べた。梅は主に梅干にした。また、梅に砂糖を加え、焼酎の中に入れて梅酒を作つた。栗は主に茹で

て食べ、保存用にカチ栗も作った。(端氣)

柿、栗を食べた。柿は干し柿、しょうちゅうづけ、ぬかの中に入れてるなどして、甘くして食べた。(小神明)

## (二) 食 品

### ①主 食

飯 朝はごはん、昼はひやめし、夜はごはんかうどんで、一回に茶わんで二杯以下ということはなかった。ごはんに、さといも、さつまいもを入れて煮たことがある。(小神明)

米三、麦七か、米六、麦四の比率があつて半々なら良い方だった。

(小神明)

米六、麦四が良い方で、半々が普通だった。アワ、ヒエは食べたことはなかった。(端氣)

ひきわりの麦を入れて食べた。米と麦の割合は六対四だった。米三升到麦二升入れてかきまぜた。ザルの中に米だけをといで入れ、一緒にたいて、弁当用にした。小さいなべに別に煮たりもした。勤め人の家だと米だけの家もあったが、ひきわりの家が多かった。(三俣)

米七、麦三の割合でまぜたものだった。押し麦なら半々でも食べられたが、割り麦なら七三でないといへなかった。他には、豆飯、粟飯、キビ飯、コウリヤン飯、モロコシ飯を食べた。(荻窪)

「米の飯を食うのは正月の三箇日とオイベス講くらいなものだ」といわれ、日常食の中心は米と大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯だった。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、「四分六(ヒキワリ四分・米六分)の飯が食えればトクセイ(大尽)だ」といわれた。また、十一月頃から翌年の二月頃にかけては、米に里芋を加えて炊く家庭もあった。里芋入りの飯は、水の量を少なくして炊くとかた

くなりやすかった。(小坂子)

日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯であった。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、米七分にヒキワリ三分なら上等とされた。十月から十一月にかけては、ヒキワリ飯に里芋を混ぜて炊くこともあった。(端氣)

日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯であった。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、五分五分は良い方で、四分六(米四・ヒキワリ六)の家庭が多かった。また、里芋やジャガイモ、サツマイモをヒキワリ飯に入れて食べることもあった。

(北代田)

日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯だった。後にはオシムギを混ぜるようになった。家によつては、年寄りだけ小釜で炊いた米の飯を食べていることもあった。(田口)

日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯だった。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、米五分にヒキワリ五分なら良い方で、米三分にヒキワリ七分くらいの家庭が多かった。後にはヒキワリに代わつて押し麦が用いられるようになった。

(東片貝)

日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯であった。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、米七分にヒキワリ三分なら上等とされ、米五分にヒキワリ五分くらいの家庭が多かった。第二次世界大戦中は、ヒキワリ飯の中にサツマイモや里芋を入れて食べていた。なお、戦後はヒキワリに代わつて押し麦が普及した。(幸塚)

日常食の中心は、米に大麦のヒキワリを混ぜて炊いたヒキワリ飯であった。米とヒキワリの割合は家庭によつて異なるが、米三分にヒキ

ワリ七分くらいの家が多かった。また、タグイモ（里芋）をヒキワリ飯に入れて芋飯にすることもあった。（亀泉）

**ヒキワリ** 大麦を水車で搗き、挽臼で挽いてヒキワリにした。大麦は二、三度臼に通すのが普通で、その後で篩にかけた。細かく砕けたものをコワリと呼び、これは焼餅の材料にした。コワリが沢山でたときは、馬の飼料にすることが多かった。昭和十年頃から押麦がヒキワリにとって代わるようになった。（小坂子）

**焼飯** 昼食の残りの冷飯を握り、醤油をつけて焙烙の上で焼いて焼飯にした。焼飯はコジョハンに食べた。（北代田）

**白米飯** 米だけで炊いた白い御飯は、正月や盆の夕食くらいにしか食べなかった。（江木）

米だけで炊いた御飯はもの日の食べ物で、正月、盆、十一月のオイベス講などに食べた。（川端）

## ② 粉 食

**うどん** 小麦粉に塩を少し入れて水でこねる。これをメン棒とメンバ板でのばし、包丁で細く切つて茹でたものがうどんである。うどんは主に夕食として食べた。醤油の汁で食べる家と味噌汁で食べる家とがあった。（小坂子）

小麦粉に水を加えてこねてのばし、オツキリコミよりも少し細く切る。これを茹であげてうどんにする。うどんは醤油の汁で食べた。

（幸塚）

うどんを作るには、まず小麦粉に水を加え、こね鉢の中でこねる。次に、こねたものをフジで編んだフミゴザの上にのせ、足で踏んで伸す。伸したものは板の上にのせ、麵棒を使って伸ばす。伸ばしたものをうどん切り（包丁）で細く切り、茹であげるとうどんができる。うどんは、オサナブリやお盆などの日に食べた。うどんの汁にはオスマ

シや醤油を使い、だしには煮干を用いた。（江木）

小麦粉に塩と水を加えてこね鉢の中でこね、メンボウ（麵棒）で伸ばす。これをウドン切り包丁で切つて茹であげ、うどんにした。うどんの汁にはオスマシを使うことが多かった。うどんのコ（具）には、ナス、インゲン、大根、ウグイス菜など季節の野菜を使った。うどんは夕食として食べることが多く、二日に一度くらいは食べた。（田口）

**ソバ** ソバ粉に小麦粉を加えてこね、メン棒とメンバ板でのばし、包丁で細く切つたものをソバキリという。ソバキリは正月三箇日や結婚式の日、家の建前の日などに食べた。（小坂子）

ソバ粉に小麦粉と水を加え、こねてのばす。これを包丁で細く切り、茹でてソバにする。ソバ粉と小麦粉の割合は、ソバ粉三分に小麦粉七分が一般的だったが、ソバ粉と同量の小麦粉を加えることもあった。

（幸塚）

ソバを作るには、ソバ粉に小麦粉と水を加え、こね鉢の中でこねる。この時、つなぎとして卵や山芋を加える。こねたものをメンボウでのばし、ウドン切り包丁で切つて茹であげ、ソバにした。ソバは祝儀の膳に欠かせないものだったが、秋には普段の夕食としても食べた。普段ソバを食べる時には、具として大根を沢山入れて食べた。（田口）

水（井戸水）と土（砂質）が良かったのでソバが多くできた。閻魔様に川原のソバを喰つて来たか、と問われて食べていけば天国に行け、食べていなければ地獄に行かされてしまう、という言い伝えがある。

川原のソバは、ソバ粉が多く、ウドン粉が少いのでうまくいった。汁につけると固まらずサラツとした。客が来ると、ソバをふるまった。客も期待していた。（川原）

ソバ粉に小麦粉を加え、水を入れてこねる。こねたものを麵棒で伸ばし、うどん切りで細く切つて茹でるとソバができる。ソバ粉と小麦

粉の割合は一对一くらいを目安にしたが、ソバ粉よりも小麦粉を多めに入れる家も多かった。ソバ家例の家では、正月の三箇日にソバを打っていた。(江木)

一 升ぶちを食べる うどん、そばを一升の粉でうったものを食べる。こと。こういう人が何人もいた。(小神明)

そばがき 桑園の間作でそばを作った。八十八夜にまくと、田植頃にとれた。花が咲いたころ切っておくと、実がはいる。そばの粉でそばがきを作つてよく食べた。(三俣)

ニボウトウ 小麦粉をうどんを作る時と同様にこねて伸ばし、普通のおどんよりもやや太目に切つたものをヒモカワといつた。ヒモカワを茹でずに汁の中に入れて煮たものをニボウトウといい、日常の夕食として食べた。ニボウトウの汁にはオスマシを使い、季節の野菜を漬山入れて煮込んだ。(江木)

オツキリコミ 小麦粉をこねてのばし、包丁でやや太目に切る。これを茹でずに汁の中に入れて、里芋、大根などの野菜を漬山入れて煮たものをオツキリコミという。オツキリコミの汁には味噌を使う家と醬油を使う家とがあつた。オツキリコミは、冬の夕食としてよく食べた。(幸塚)

水団 小麦粉を水でこね、ちぎつて汁の中に入れて煮て水団を作つた。水団の汁にはオスマシや醬油を使い、季節の野菜を入れた。(江木)

水団のことをオネジと呼んだ。オネジを作るには、小麦粉をこねて適当な大きさにちぎり、汁の中に入れて煮る。オネジの汁には、オツキリコミの汁と同様に野菜を漬山入れた。(幸塚)

水団のことをネジツコと呼ぶ。小麦粉をこね、汁に入れて煮てネジツコを作る。ネジツコの汁には醬油を使い、里芋・ジャガイモやナス・インゲンなどの野菜を入れ、最後にネギを加えた。また、小麦粉をこ

ね、湯で茹でてネジツコを作り、とりあげておいて、砂糖醬油をつけて食べることもあつた。(北代田)

焼餅 大麦のコワリ(ヒキワリ)を作るとき細かく砕けたもの)に小麦粉を加えてこね、丸めて焙烙で焼いて焼餅を作つた。焼餅はコジョハンに食べた。(小坂子)

小麦粉を水でこね、丸めて焙烙の上で焼いて作る。コジョハンに食べるが多かつた。(端氣)

小麦粉に重曹を加えて水でこね、丸めて焙烙で焼いて焼餅を作つた。焼餅には砂糖を加えることもあつた。また、八月一日の釜の口開きの日に作る焼餅には、中に小豆の餡を入れた。焼餅は主にコジョハンに食べた。(北代田)

余つたごはんに粉を混ぜ、フライパンのような鍋で焼いて食べた。三時のおやつに食べた。(龍蔵寺)

小麦粉に炭酸と水を入れ、塩を少し加えてこねる。これを丸め、焙烙に油をひいてその上で焼く。焼餅は、釜の口開けの日などに食べた。(幸塚)

御飯の残りに小麦粉を溶いて混ぜ、味噌を加えて丸める。これを油をひいた焙烙の上で焼いたものを焼餅といつた。焼餅はコジョハンに食べた。(江木)

八月一日、あんこやみそを入れたものを作つた。おやつにした。(三俣)

ふかし饅頭 小麦粉に重曹を入れ、水でこねる。これを皮にして中に餡を入れて丸め、せいろで蒸して作る。農休みや釜の口開けの日などに食べた。(端氣)

釜の口開き、十五夜、十三夜などの日にはふかし饅頭を作つた。うどん粉に重曹を入れて水でこね、餡を入れて丸め、せいろで蒸して作つた。十五夜にはふかし饅頭を一五個、十三夜には一三個供えた。(川端)

小麦粉に炭酸と水を加えてこねる。これを適当な大きさにちぎり、中に餡を入れて丸める。丸めたものをセイロに入れて蒸すとふかし饅頭ができる。ふかし饅頭は、農休みや十五夜、十三夜などの日に作って食べた。(幸塚)

オサナブリや農休み、七夕などの日にはふかし饅頭を作って食べた。ふかし饅頭は、せいろでふかして作った。(江木)

ゆで饅頭 小麦粉をこね、中に餡を入れて丸める。これを煮え立った湯の中に入れて茹でると、ゆで饅頭ができる。ゆで饅頭は、主にもの日に食べた。(北代田)

ジリヤキ 小麦粉を水でゆるめに溶き、油をひいた焙烙の上で焼いたものをジリヤキといった。ジリヤキは主にコジョハンに食べた。(江木)

小麦粉を水で溶いてシソの葉などを加え、焙烙の上に油をひいてその上で焼いたものをジリヤキといった。ジリヤキは主にコジョハンに食べた。(北代田)

ドラ焼 七月十四日の農休みにはドラ焼を作った。前日の晩に、うどん粉に塩と水を加え、こね鉢の中でこねておく。翌日、こねておいたうどん粉を丸め、中に餡を沢山入れる。これを焙烙に油をひいた上で焼く。餡がはみ出さないように、まわりを指で押さえながら焼き上げる。焼き上げたドラ焼は、シヨウギの中に並べて家の裏に吊しておき、すえないようにした。(川端)

③ 年中行事の食事

年中行事の食事(川端)

月・日	祝祭日	食	事
一・二	大正月朝	ソバ(雑煮の家もある)、昼	湯漬

二	夕	白米飯・魚・けんちん汁(三箇日中に山芋のオトロを食べる)
三	〃	〃
六	朝	白米飯
七	朝	七草粥
八	朝	小豆粥
二〇	朝	十五日の小豆粥の残り
二・三	節分	炒り大豆
初旬	初	藪玉
二七	秋葉講	まぜ御飯
三・三	彼岸	ボタ餅、中日にはサクラ飯
四・三	桃の節供	すし
八	花祭り	日輪寺で甘茶
五・五	端午の節供	赤飯・煮つけ・タラ
八	赤城の山開き	昼——白米飯の握り飯
六・下旬	オサナブリ	赤飯・煮物(七月初旬に行くこともある)
七・四	農休み	ドラ焼
一五	〃	〃
八・一	釜の口開き	焼餅(ふかし饅頭の家もある)
七	七	ふかし饅頭・赤飯
三	迎え盆	夕——白米飯・煮物
四	盆	朝——ボタ餅、昼——うどん
五	〃	〃
六	送り盆	朝——ボタ餅、昼——うどん

年中行事の食事(幸塚)

月・日	祝祭日	食	事
一・一	大正月	朝—雑煮(ソバ家例やうどん家例の家もある) 夜—白米飯	
二	〃	朝—白米飯	
三	〃	朝—白米飯	
六	六日草	朝—白米飯	
七	七日草	朝—七草粥	
八	〃	朝—小豆粥	
九	〃	朝—白米飯・お頭つきの魚・テンプラ・煮物(野菜)・ケンチョン汁	
二・三	節分	炒り大豆	

九・一	八朔	赤飯・シヨウガ	
三	十五夜	ふかし饅頭(米粉の団子の家もある)	
	彼岸	ボタ餅、中日にはサクラ飯	
一〇・九	十三夜	ふかし饅頭(米粉の団子の家もある)	
	秋祭り	赤飯・菓子(買ったもの)	
二・一〇	十日夜	餅	
三	新嘗祭	朝—ボタ餅、昼—うどん、夕—白米飯・けんちん汁	
三	アナップサゲ	白米飯	
二・一五	稻荷祭り	ボタ餅・小豆粥	
七	秋葉講	赤飯・豆腐・鰯	
三	油餅	雑煮・アニコロ餅	
三	冬至	アンピン餅	
三	天神講	カボチャの煮つけ	
三	大晦日	まぜ御飯	
		ソバ	

三・三	桃の節供	すし・うどん
二	彼岸	朝—オハギ・うどん
五・五	端午の節供	赤飯・うどん・煮つけもの
七・四	農休み	ふかし饅頭・うどん
七・一	釜の口開け	焼餅
七	七夕	ふかし饅頭
三	迎え盆	夜—白米飯
四	盆	朝—ボタ餅、昼—うどん、夜—白米飯
五	〃	朝—〃
六	送り盆	朝—ボタ餅・うどん
九・三	彼岸	朝—オハギ・うどん
一〇・五	十五夜	ふかし饅頭
一〇・六	秋祭り	赤飯
九・三	十三夜	ふかし饅頭
九・三	二十三日	ふかし饅頭
一〇・三	十日夜	ふかし饅頭
一〇・三	稲荷祭り	アンピン餅
三・五	エビス講	赤飯
三	大晦日	御飯
三		ソバ

変りもの 年越しそば、夕飯のうどん、おきりこみ、祭りや御祝儀の赤飯、彼岸や盆のおはぎ、天神講の宿の五目ごはん、正月十五日の小豆粥、たきこみごはんなど。すしは、のりまきといなりで、のりまきには、かんぴよう、ごぼう、ちくわ、でんぶなどを入れた。いなりはかんぴようでしばった。(三俣)

正月三箇日の食事 正月三箇日はソバ家例の家が多く、餅は三箇日過ぎてから食べた。

朝食 ソバ(前夜に打っておいて、朝茹でて食べる。)

昼食 御飯・キンピラゴボウ・煮豆

夕食 御飯・焼魚(サンマなど)(端氣)

正月三箇日の食事(朝)

元日 雑煮

二日 ソバ

三日 雑煮(小坂子)

七草粥 一月七日の朝には七草粥を食べた。七草粥には、セリ・ナズナや、ネギ・大根などの野菜を七色入れた。七草粥を家の周りに撒くと、ムカデが来ないといわれた。(幸塚)

小正月の食事 一月十五日の朝に小豆粥を食べる。この時に小豆粥を吹いて食べると、田植の時に風が吹くといわれる。また、神棚に供えた繭玉を茹で、砂糖醬油をつけて食べた。(端氣)

小正月の小豆粥は、熱くても、吹いて食べてはいけない。田植の時に風が吹く。カユカキ棒は、かきませたあと、神だなにあげておいて、苗代の水口に立てておく。(小神明)

粳米に小豆を混ぜ、粥として煮たものを小豆粥という。小正月一月十五日の朝に食べる。(端氣)

一月十五日の朝には小豆粥を食べた。小豆粥を作るには、御飯に小豆と餅を入れて煮た。小豆粥を吹いて食べると、田植の時に天気が荒れるといわれた。(幸塚)

二十日正月 塩びきの鮭の頭などを入れた昆布巻きを作り、夜、御飯やサンマとともにエビス・大黒に供える。(端氣)

寒もち 節分の時についたもち、長くもつ。(三俣)

桃の節供の食事 四月二日に餅を搗き、ひし餅にしておひな様に供えた。また、翌日の三日にはノリ巻キや稲荷ズシ、キンピラゴボウな

どを作って食べた。(端氣)

端午の節供の食事 赤飯を炊き、タラの干物を食べた。また、嫁の実家へ行く時にはタラの干物を持って行った。(端氣)

農休みの食事 七月十四日〜十六日が農休みで、フカシマンジュウを作った。(端氣)

農休みにフカシマンジュウを作った。(小坂子)  
土用のうしの日 天ぷらのおかずが多かった。精進あげだった。

釜の口開きの食事 八月一日の釜の口開きには、焼餅を作った。ゆで饅頭を作る家もあった。(北代田)

八月一日の釜の口開きには、フカシマンジュウを食べた。(端氣)  
盆の食事 盆の期間は八月十四日から十六日までで、ボタモチやうどんを食べた。(端氣)

油もち 十二日の日の良い日についた。油の供養のためについたという。(三俣)

赤飯 糯米に煮た小豆やささげを入れ、せいろで蒸して赤飯を作った。赤飯は、端午の節供、オサナブリ、七夕、八朔、秋祭り(愛宕神社)、稲荷祭りなど、もの日に炊いた。また、結婚式の膳にも赤飯を出した。(川端)

糯米に小豆を加え、せいろで蒸して赤飯を作る。赤飯は、子供の七夜やおボヤキ、結婚式の日などに食べた。(小坂子)

七月二十七日、二十八日の天王様(八坂神社)の日には赤飯を炊いた。(江木)

小豆やササゲ、または赤いインゲン豆などを煮しておく。これらの豆の煮汁に糯米を浸たし、その後でよく水をきる。煮ておいた豆を糯米に加え、セイロで蒸して赤飯にした。後には、赤飯の色つけに食紅を



用いる家も現われた。(幸塚)

ジロウのツイタチ(二月一日)、氏神の祭、八朔の節句、薬師、稻荷祭には赤飯をふかした。(小神明)

**餅** 糯米をせいろで蒸し、立臼と横杵で搗いて餅にする。正月、十日夜、十二月の秋葉講、油餅などの日には餅を搗いた。薄くのして切ったノシ餅、平たく丸めたお供え餅、餡をからめたアンコロ餅、中に餡を入れたアンピン餅などがあつた。(川端)

糯米をせいろで蒸し、立臼と横杵で搗いて餅にする。餅は正月や三月の節供などに搗くほか、家の建前の時などにも搗いた。(端氣)

もちは、一カ月に一度くらいついていた。二十六日頃についた。とり入れのあとかかしにもちをしんぜるならわしがあつた。(上小出)

正月や三月節供、五月節供には餅を搗いた。(江木)

糯米を一晩水に浸し、シヨウギにあげて水をきる。水をきった糯米をセイロに入れて蒸し、立臼と横杵で搗いて餅にする。搗いた餅は、のばして切つてのし餅にしたり、餡を入れて丸めてアンピンにしたりした。(幸塚)

もちつきは、小正月・三月の節句・冬至・年末のみそかに行つた。

(川端)

正月、節供、十日夜、二十三夜、油モチ(十一月一日)、オコアゲモチ、マキアゲ、ニアガリモチ(稻刈りのあと)などに餅をついた。

(小神明)

**ボタ餅** 糯米をせいろで蒸し、それを半ごろし(完全に餅にならない程度に搗くこと)にして丸める。丸めた糯米のまわりに、砂糖で煮た小豆餡をつけたものをボタ餅という。ボタ餅は盆や彼岸の日に食べた。(端氣)

せいろで蒸した糯米を軽く潰してから丸め、まわりに小豆餡をつけ

てボタ餅を作る。ボタ餅は、春秋の彼岸(オハギと呼ぶ)、盆、十一月のオイベス講、麦播きの後のアナツプサゲなどの日に作つて食べた。

また、蚕のとまりにもボタ餅を作つた。(川端)

「盆のボタ餅、昼間はうどん、夜は米の飯、トウナス汁よ」という唄があるように、盆にはボタ餅を作つて供え、食べた。また、春と秋の彼岸の中日や、麦播きが終わったあとのアナツプサゲにもボタ餅を作つた。(江木)

セイロで蒸した糯米を軽く搗き潰す。これを丸め、まわりに小豆餡をつけてボタ餅を作る。ボタ餅は、盆や彼岸に作つて食べた。なお、彼岸に作つたものはオハギといつた。(幸塚)

四十九日、お盆にはボタ餅を作つた。

また、ニアガリ(稻刈りのあと)の時、ボタ餅を作つて、嫁が里へ持つて行つた。(小神明)

**まぜ御飯** 二月の秋葉講には、まぜ御飯を食べた。また、天神講は子供の祭りであるが、この日にも頭が良くなるようにと、人参、ゴボウ、カンピョウなどを入れたまぜ御飯を食べた。まぜ御飯のことは、カテメシとも呼んだ。(川端)

講やお願所で食べた。正油めしといつた。人寄せの時、夜はこれだつた。湯気曲輪では、するすひきのしまい、講の時に食べた。(小神明)

**すし** 三月三日の節供には、のり巻きと稻荷ずしを作つた。のり巻きには、具としてかんぴょう、でんぶ、人参などを入れた。稻荷ずしは、醤油と砂糖で煮た油揚げの中に御飯を詰め、かんぴょうで二回巻いて作つた。(幸塚)

四月三日・四日の桃の節供には、巻きずし(のり巻き)や稻荷ずしを作つて食べた。また、一月のオイベス講には「近所の身上を巻き上げるように」といって、巻きずしを作つた。(川端)

のりの上に飯を敷き、かんぴょうなどの具を入れて巻いたものをノリ巻キという。また、油揚げを砂糖と醤油で煮て、その中に飯を詰めたものを稲荷ズシという。いずれも四月三日の節供に食べた。(端氣)

④ 副 食

おかず みそづけ、菜、大根、梅干し、きゅうり。ごぼうを金びらにした。

サツマ、インゲン、カボチャの天ぶら、暮の三十日に、米だけのごはんを炊いて、一人に一切のサケの切り身を出した。年に一回だけだった。野菜の実のみそ汁がついた。

ニシンの干物を売りにきて、イロリで焼いて食べた。

ウナギ、ドジョウをドシ網でとって、煮つけて食べた。

たまごは、自給していたので、割合食べている。たまごかけごはんにして食べた。

ナス、ネギは、油みそにした。(小神明)

魚はメザシ、ニシンを食べた。(端氣)

普段は、たくあんやおなめだった。魚の塩引きは、酒につけておいて、焼いて食べた。さしみは御祝儀に出たくらい。卵はめつたに食べなかつた。生あげ、かんぴょう、しょうが、梅酒を食べたり飲んだりした。(三俣)

味噌汁 朝食にはたいてい味噌汁を作った。味噌汁の具は季節の野菜が多く、春は菜葉、夏はナス、秋から冬にかけては大根や芋が多かった。また、ネギは味噌汁の具として四季を通じてよく使った。(小坂子)

味噌汁には季節の野菜を入れた。春はシャクシ菜、白菜、大根、人参、ゴボウなどを入れ、夏にはジャガイモ、インゲン、ナスなどを入れた。秋から冬にかけては、里芋、ジャガイモ、ネギ、大根などを入れた。(幸塚)

味噌汁は野菜を入れて作った。(端氣)

呉汁 大豆を冷やしておいてシラジで搗り潰し、味噌汁の中に入れてたものを呉汁といった。呉汁には好みによりシソなどを加えた。呉汁は夏のおかずとして食べた。(江木)

冷汁 夏には、水に味噌を溶いてその中に薄切りにしたキュウリを入れ、砕いた氷を浮かべて冷汁を作った。冷汁には、好みにより搗りゴマやきざんだシソの葉などを加えた。(北代田)

ケンチヨン汁 里芋、大根、ゴボウ、人参などの野菜を油でいため、水を加えて煮る。これに醤油で味つけをする。ケンチヨン汁は、エビス講の日に食べた。(幸塚)

アラ汁 塩びきの頭とニンジン・ゴボウなどといっしょに煮て作った。(堤)

オナメ 大豆を煮て大麦のコウジを混ぜ、ムシロの上で一昼夜ねかせる。これをカメに入れ、水と塩を加えてかき回す。カメの味が発酵するとオナメができた。オナメのカメはトボグチに出しておき、出入りする時にゆすつてやった。こうするとオナメが早くできた。オナメはおかずとして食べた。(田口)

オナメは主に冬から春にかけて食べるおかずで、十月頃に作った。味噌と同様に、煮た大豆に大麦のコウジを加えて作るが、塩の量を少なくし、ナスなどの具を入れた。オナメは六月頃まで食べることができた。(幸塚)

油味噌 ナスやネギを油でいため、味噌で味つけしたもので夏のおかずとしてよく食べた。好みにより砂糖やトウガラシを加えた。

(小坂子)

なすを油でいため、みそであえたものをよく食べた。(端氣)  
ナスにトウガラシを加え、油でいため味噌で味つけしたものを油

味噌といった。油味噌は夏のおかずとしてよく食べた。(北代田)

鉄鍋に油をひき、ナスとネギをいためる。これに味噌を加えて味つけしたものを油味噌という。油味噌は、夏の昼食のおかずとしてよく食べた。(東片貝)

煮物 種々の野菜が煮物にされた。結婚式や子供のオボヤキの日などには、里芋・ゴボウ・人参などの煮物を作った。カボチャなども煮物にした。味つけは、主に砂糖や醤油を使った。(小坂子)

もの日のおかずには煮物をするが多かった。春には里芋、人参、ゴボウ、フキ、夏には竹の子、ジャガイモ、インゲン、輪麩など、主に季節の野菜を煮物にした。味つけは砂糖や醤油ですることが多かった。(川端)

キンピラゴボウ ゴボウを細切にし、これに人参の細切りなどを加え、油でいためる。主に砂糖と醤油で味つけをし、トウガラシも少し加える。結婚式など人寄せの時に作った。(小坂子)

カライリ 卵の花に人参やエビなどを加え、砂糖と醤油で甘辛く炒る。結婚式のときなどに出した。(小坂子)

油いため 切り干し大根やイモガラは、水にもどしてから油いためして食べた。味つけは、醤油と砂糖ですることが多かった。切り干し大根やイモガラの油いためは、冬のおかずとしてよく食べた。(東片貝)

大根葉は、タクアンを漬ける際に樽の蓋として使った。この大根葉をあとで取り出し、よい部分を細かく刻んで油いためにして食べた。(江木)

シヨウロ シヨウロは三月末から四月にかけて松林に出るきのこで、熊手でかいて採った。シヨウロは砂糖と醤油で煮つけて食べた。

魚 正月やエビス講などには、サンマ、イワシ、サケなどを食べた。(上小出)

一年中食べる魚としては身欠きニシンがあった。(東片貝)

旧前橋市内から魚の行商をする人が来たので、その人から魚を買っていた。サンマのヒラキやチリメンジャコなどを買ったことがある。(端気)

五月の上旬、蚕の掃き立ての頃にニシンの干したものを束で買っておいした。また、お歳暮には鮭のシオビキを使うことが多かった。また、大正月には鮭、端午の節供にはタラ、稲荷祭りには鱒、オイベス講にはサンマなど、もの日には魚を食べた。(川端)

魚を食べるのは正月くらいだった。鮭の切身などを焼いて食べた。

(北代田)

魚はもの日にしか食べなかった。正月に塩づけの鮭を食べた。卵や果物などは病気になる時に食べる程度だった。(田口)

シオビキ お歳暮には鮭のシオビキを使うことが多かった。シオビキは、縄で縛って川の中に流しておき、塩ぬきをしてから焼いて食べた。また、酒粕で煮ることもあった。(川端)

普段の日に魚を食べることはほとんどなかったが、正月には鮭の塩ビキを食べた。塩ビキは旧前橋市内から買って来た。(幸塚)

ニシン 五月頃、干したニシンを束で買った。干したニシンは、米のとぎ汁や灰汁などにほとぼして柔かくしてから使った。水にもどしたニシンは、大根の切干と一緒に醤油と砂糖で煮た。また、ニシンを細かく切って味噌で煮て、ニシン味噌を作ることもあった。ニシンは普段のおかずとして食べた。(川端)

身欠きニシンは、藤の皮で束ねてあった。煮物にしてコビル・コジョハンにした。(堤)

ウナギ・川魚 ウナギはいくらでも川にいた。時々捕って食べた。川では、時々「川切かわぎり」をして、魚を水たまりに追い込みらくらく魚を

とれた。ただ、「川切」の時には、ウナギは土の中にもぐつてしまおうので捕るのは難しい。(北代田)

カニ 春三月頃のやみ夜によく捕れた。月夜の晩は捕れない。いつて食べる。砂糖正油で味をつけ、丸ごと食べた。(端氣)

### (三) 保存加工・貯蔵

つけ物 たくあんを四斗ダルで二つくらい、はくさいを一〜二タルつけた。他に、なす、きゅうり、しゃくしな、ごぼう、にんじんをつけた。ごぼうとにんじんは、みそづけにした。(端氣)

味噌漬、タクアン、お葉漬、梅干などがあつた。(北代田)

タクアン タクアンのことはコウコウと呼んだ。タクアンを漬けるにあたっては、まず材料の大根を干す。大根は葉をつけたまま束にして、直射日光に当てないようにして干した。夜は、大根が凍らないようにハナムシロをかけておいた。干した大根を曲げてみて丸くなるくらいになったら、四斗樽に入れて小糠と塩を加え、漬け込む。小糠と塩の割合は家庭によって異なるが、小糠一斗に対して塩二升ではやや甘く、小糠一斗に塩三升ではやや塩が強いといわれた。タクアンの樽には蓋として大根葉をかぶせておいた。タクアンを漬けるのは大抵十一月頃で、翌年の正月には食べることができた。(江木)

大根は十一月頃に収穫した。大根は主にタクアンにし、十二月頃から翌年の七月頃まで食べた。(田口)

大根を干し、塩と小糠を加えて樽に漬け込んで、タクアンにした。

(北代田)

塩漬 塩水を煮たてた後、よく冷ます。樽の中に材料のナスを入れ、冷ました塩湯を加えて漬け込んだ。(端氣)

白菜やシャクシ菜は樽の中へ塩を加えて漬け込み、塩漬にした。白

菜やシャクシ菜の塩漬は、冬のおかずとしてよく食べた。(東片貝)

シャクシ菜や山東菜などの菜類を塩で漬けたものをお葉漬といつた。お葉漬は秋から冬のおかずとして食べた。(小坂子)

白菜やシャクシ菜を塩漬にしたものをお葉漬といつた。(北代田)

白菜は十一月頃に塩漬にした。一日くらい干した白菜を二つ割にし、四斗樽の中に入れて塩をふり、漬け込んだ。白菜を四つ割りにして漬ける家もあつたが、昔は長く保存できるように塩を沢山使つたので、四つ割りにすると塩がきすぎることが多かつた。(江木)

糠漬 糠に冷ました塩湯を加えてよく混ぜ、その中にキュウリやナスを漬け込んで糠漬を作つた。一度に漬ける量は家庭によつてちがうが、一日に食べる分だけ漬けるのが普通だつた。(端氣)

こぬかに塩と湯冷ましの水を加えてぬか床を作り、その中にナスやキュウリを漬けた。糠漬は夏のおかずとしてよく食べた。(幸塚)

梅干 生梅に塩を加え、樽に入れて漬け込む。「梅一升到塩一升」といわれ、生梅と同量の塩を入れるのが普通である。水があがつたらシソの葉をもんで加え、着色する。梅を漬けるのは田植の頃で、七〜八月になったら樽から出して干し、梅干にする。(端氣)

昔は各家に梅の木があつたので、入梅後には梅の実をとつて漬けた。とつた梅の実は、ひと晩水に浸しておいた。こうすると種の離れがよくなつた。翌朝、梅の実を水からあげて樽に入れ、塩を加えて漬け込んだ。塩の量は目分量で測つたが、梅一升到して塩一升くらいを目安にした。樽の中で水が上がつたら、シソの葉をもんで入れた。この時、シソの汁が入ると梅がアクでどす黒くなるので、汁は捨てた。漬けた梅の実は、土用の頃に樽から取り出して三日間干し、梅干しにした。(江木)

梅は、入梅を過ぎれば食べられるといわれ、六月半ば過ぎに採つた。

採った梅は袋に入れて、一昼夜川の流りに晒す。こうすると種から実が離れやすくなった。晒した梅は、塩を加えて桶に漬け込み、水が上がつたらシソの葉をもんで入れた。こうして漬けた梅は、土用の頃に三日三晩干して梅干にした。(川端)

シソのお茶うけ 塩漬にした梅を土用干しして梅干にする時には、色着けに使ったシソの葉も一緒に干しておいた。干したシソの葉は葉研で粉にし、砂糖を混ぜてお茶うけにした。また、この粉に湯をさして飲むこともあった。(江木)

ラッキョウ漬 昔は、ラッキョウを栽培し、四、五月頃に収穫して漬けた。ラッキョウは、うす塩で漬けておいてからあげて、酢と砂糖で漬けた。(江木)

味噌漬 味噌を作る時に、味噌樽の中にゴボウ、人参などを入れて味噌漬を作った。このほか、大根、ナス、キュウリ、スイカの皮などを味噌漬にして食べた。(東片貝)

自家製の味噌の中に、人参、ゴボウなどを入れて味噌漬にした。

(川端)

ナス、キュウリ、白ウリなどを味噌漬の中に入れて味噌漬にした。

また、シソの実を袋に入れてから味噌樽に入れ、味噌漬にした。

(北代田)

大根を味噌漬の中に入れて、味噌漬にした。(田口)

ナスのカラシ漬 ナスのスエナリを二つ割りにして塩とカラシを加え、カメに入れて一箇月くらいおくとナスのカラシ漬ができた。家によつては、これにコウジや砂糖を加えて漬けることもあった。ナスの

カラシ漬は、秋の終わり頃におかずとして食べた。(田口)

貯蔵 サツマイモはダイドコロに掘ったイモガマに入れて保存した。サトイモは庭の隅などに穴を掘って埋めておいた。(上小出)

里芋は、親芋から子芋をとらずに、そのまま畑に掘った穴の中に埋めておいた。大根もそのまま土の中に埋めた。サツマイモの場合は、一メートル以上の穴を掘り、その中に麦藁を入れてからサツマイモを入れた。そして、息抜きのために竹筒を立てて土をかけ、さらに雨水が入らないようにトタン板をかぶせておいた。ジャガイモは日に当たると青くなるので、縁の下に入れておいた。(北代田)

里芋は、十一月から翌年の二月頃までムロ(室)の中に入れて保存した。また、オコンマヤの床にシビ(藁をすぐった時にでる外皮)を敷き、そこに里芋を入れた袋を置いて蓋をしておくこともあった。

(小坂子)

乾燥芋 サツマイモをふかしてから薄切りにし、天日乾燥させて乾燥芋を作った。乾燥芋は、十月末頃から作り始め、翌年の一月頃まで日に当てて干した。あまり早い時期に作るとかびてしまった。(幸塚)

イモガラ 八頭のカラ(茎)を干したものをイモガラといった。イモガラは油でいため、醤油で味つけしておかずにした。(江木)

ヤツガシラの赤い茎を軒下などに吊して干しておく。これをイモガラといい、冬の野菜の少ない時期に煮て食べた。(幸塚)

大根の切干し 大根を細く切って干し、切干しを作った。大根の切干しを作る時は、日に当てるより白くあがらないので、日陰に干した。

大根の切干しは、煮たり油いためにしたりして食べた。(江木)

大根を包丁で細かく切って天日で干し、切干を作った。切干は主に煮て食べた。(北代田)

ヒバ シャクシ菜を茹でてから、軒下などに吊して干したものをヒバといった。ヒバは、冬の青物の少ない時期に味噌汁などに入れて食べた。(田口)

171

#### (四) 調味料

味噌 四戸くらいの農家が共同で味噌を作った。味噌作りは四月頃に行われた。味噌作りに際しては、まずコウジが作られる。コウジを作るには、原料の大麦を蒸し、これをむしろの上に広げて冷ます。蒸した大麦が人肌くらいの温度になったらコウジ菌を加え、これにむしろをかけて二・三日おくとコウジができる。次に、味噌の原料の大豆を釜で煮る。煮えた大豆は立白と横杵でよく搗き潰し、塩と先程のコウジを加えて樽の中に仕込む。「三年味噌」といわれ、昔は三年くらい保存するのが普通だった。現在は、ひと冬越せば食べる家庭が多い。

(端氣)

戦前には沢山作っていた。大豆を煮て臼と杵で潰し、これに塩と大麦のコウジを混ぜて、高さ四尺くらいの樽に仕込んだ。大豆を煮る時には二斗釜を使った。戦後、養蚕が盛んになると、味噌作りもすたれてきた。これは、麦コウジが元で蚕のコウジカビ病が発生したためであった。最近では養蚕農家が少なくなってきたので、また味噌を作る家庭が増えてきた。ただし、大麦が入手しにくいので、麦コウジに代わって米コウジが使われている。(端氣)

大豆を煮てつぶし、これに大麦のコウジを入れて味噌を作った。

(小坂子)

昔は、自分の畑でとれた大豆を原料にして味噌を作った。味噌作り四月に行った。まず、大麦をふかしてムシロに広げ、これにコウジ菌を加える。一週間ほどねかせると大麦コウジができる。次に、大釜で大豆を煮て、臼と杵で搗く。搗いた大豆に塩と大麦コウジを加え、樽に入れてねかせる。材料の割合は、大豆一斗に対して、塩一斗、大麦コウジ一斗が普通だった。味噌は、一年くらいねかせれば食べられる

ようになった。一軒の家で四斗樽に三つくらい味噌を作った。(東片貝)

味噌作りは四月頃、春蚕の飼育前に行った。まず、大麦をふかしてコウジ菌を加え、発酵させて大麦コウジを作る。コウジ菌は、諏訪や中島のコウジ屋から買って来た。大麦コウジができたら、大豆を大釜で煮る。煮た大豆は樽の中に入れて棒で搗いて潰し、これに目分量で大麦コウジと塩を加えて仕込む。味噌は、ひと冬越して翌年の八月を過ぎてから食べた。なお、ずっと以前はコウジを使わずに味噌を作ったというが、詳しいことはわからない。(江木)

味噌作りは十一月頃に行った。まず、大麦をふかしてこれにコウジ菌を加え、ねかせてコウジを作る。次に、大豆を釜で煮て、これに大麦のコウジと塩を加え、樽に仕込む。塩の量は、大豆一斗に対して一斗程度がよいといわれた。「三年味噌」といって三年目くらいに食べた。

(幸塚)

昔は、各家庭で味噌を作った。コウジは蚕に悪いので、味噌作りは養蚕の始まる前、四月頃までに行った。まず、大豆を釜で煮て、臼と杵で搗く。味噌にする大豆は、醤油にする大豆よりも柔らかく煮た。搗いた大豆は丸めて味噌玉にし、藁で縛って天井に吊しておく。味噌玉にカビが生えたら天井からおろして碎き、コウジと塩と水を加えて四斗樽に仕込む。味噌に使うコウジは大麦のコウジで、蒸した大麦にコウジ菌を加え、ねかせておいて作った。材料の割合は、大豆一斗にコウジ一斗、塩六升くらいであった。味噌を仕込む時には、藁草履をはいて樽の中に入り、足で材料を混ぜた。四月に仕込んだ味噌は、土用を越せば食べられた。しかし、「新しい味噌を食べるようではだめだ」といわれ、その年に仕込んだ味噌を食べる家庭は貧乏だとされた。

(北代田)

味噌には寒水がよいといわれ、味噌作りは十一月から翌年の一月頃

にかけて行った。大豆を煮てから搗き潰し、丸めて味噌玉を作る。味噌玉は、藁で縛ってダイドコロの天井に吊しておく。十二月末から正月になって味噌玉が乾いたら天井から降ろして砕き、塩と大麦のコウジを入れ、水を加えて樽の中に仕込む。塩の量は家によって異なるが、大豆一升に対して五合、あるいは三合程度が一般的だった。なお、味噌は三年味噌がうまいといわれていた。(田口)

オスマシ 味噌を三角袋に入れて煎じ、三角袋からしたり落ちた汁をオスマシといった。オスマシは、うどんなどの汁に使った。(江木) 味噌を搗ってから布で漉し、すましたものをオスマシといった。オスマシはうどんの汁などに使った。(田口)

醤油 醤油は春に作った。まず、大豆を煮て臼と杵で潰し、これに小麦で作ったコウジと塩を混ぜて樽に仕込む。秋になったら樽の中のモロミをジャッキのついた箱に入れてしぼる。昔はムラに醤油をしぼる道具があり、共同で使った。一度しぼったモロミにはまた水を加え、このようにして三度くらいはしぼった。しぼり汁にカラメルを加えて着色すると醤油ができた。しぼりかすは馬や牛の飼料にした。(端氣) 四戸くらいの農家が共同で醤油を作った。醤油作りは四月頃に行われた。醤油の主な原料は小麦と大豆である。煎った小麦と煮た大豆をあわせ、これにコウジ菌と塩と水を加えて樽の中に仕込む。樽の中味を毎日かき回してやると、次第にモロミができてくる。十二月初旬頃に樽からモロミを出し、麻袋に入れてジャッキでしぼる。このしぼり汁をカラメルで着色すると醤油になる。作られる醤油の量は、一戸当たり焼酎のカメに十本程度であった。(端氣)

昔はクルワで共同で醤油を作った。二月または三月頃、小麦と大豆でコウジを作り、室(横穴)にねかせる。コウジは発酵して百五度から百十度くらいまで温度が上がる。これを樽に仕込んでモロミを作る。

モロミをしぼる道具には、石を重ねて重しにするもの、天秤を使うもの、テコを使うもの、ジャッキを使うものなど様々なものがあった。

(小坂子)

大豆と小麦コウジを使い、カラメルで着色して醤油を作った家もあった。醤油は、数軒が共同で作ったり、組合で作ったりした。(江木) 昔は、組単位で共同で醤油を作った。醤油作りは、四月頃に深町の清水井という醤油屋を頼んで行った。まず、炒った小麦と煮た大豆を混ぜ、コウジ菌を加えてムシロの上でねかせる。これが発酵したら大樽の中に入れ、水と塩を加えて仕込む。醤油を仕込んだ樽は、家の者が毎日棒でかき回す。十月頃になると、また醤油屋を頼み、機械を借りて醤油をしぼった。一番醤油をしぼった後で、モロミに水と塩を足して二番醤油までしぼった。醤油屋には機械の借り賃や手数料を払った。(東片貝)

醤油は、春ねかせて秋に絞った。二番醤油までとった。(田口) 昔は、共同で醤油を作った。まず、小麦を炒り、大豆を煮る。大豆を煮る釜は数軒が共同で使った。次に、小麦と大豆をあわせ、これに買って来たコウジ菌を混ぜる。四月頃、小麦と大豆とコウジ菌を混ぜたものに、塩と水を加え、樽の中に仕込んだ。原料の割合は、小麦一斗、大豆一斗、塩一斗が普通で、原料の三〜四倍の水が必要だった。それから、板のついた棒で一日に一回樽の中身をかき回してやると、次第にもろみができてくる。十月中旬頃になると、もろみを出して釜で温め、麻袋に入れてジャッキでしぼった。醤油をしぼる作業は、数軒が共同で組をつくって行った。一番醤油から三番醤油くらいまでしぼり、カラメルで色をつけた。(北代田)

醤油は、大豆を煮て、共同でしぼって作った。最初は業者から道具を借り、あとは道具を買ってしぼった。こうじまで自分の家で作った。

一石で二十四本とれた。一日一回かきまわすのが大変だった。(三俣)  
公民館東の木村宅に道具があつて、使わせてもらつて醤油を作った。  
もろみの心配もしてくれた。(小神明)

四月頃、個々人で麴を用意する。小麦を煎り挽く(荒挽き)。ふるいをかけ、粉に麴を混ぜ、大豆を煮て半日置いたものに混ぜ、人肌の温さになつたら山にします。醤油絞りは十二月十日頃行う。共同作業で一組十二軒で十組ぐらいできた。(川原)

こうじ小屋 長岡宅南に立つていた。こうじむろがあつて、しぼりの機械もあつた。(小神明)

味噌、醤油 自宅で、味噌、醤油を作った。納豆も時おり作った。

(龍蔵寺)

菜種油 駒形に油をしぼる水車があり、そこへ菜種を一斗ずつ袋に入れ、一斗缶に入れてもつていった。ふかしたり、いったりして作る。しぼるのを手つだつた。(端氣)

菜種は、駒形の方の稲荷山へ持つていった。菜種を持つていくと、しぼつて油にしてくれた。高崎の日高に行つたこともある。(小神明)  
菜種から油をとつた。伊勢崎のイナリヤマに絞る家があつた。伊勢崎のとつつき(入つてすぐ)に油屋があつた。一斗かんに入れて持つてきてくれた。(三俣)

昔はアプラナを栽培して菜種を採り、これを油屋にもつて行つて油を搾つてもらつた。菜種油は主に食用油として使つた。菜種油でテンブラを揚げると黄色く揚がつた。(江木)

ゴマ 昔はゴマを各農家で作つていた。ゴマは主にゴマ和えなどに使い、ゴマを搾つて油を採ることはしなかつた。(江木)

## (五) 食 制

食生活 麦ごはんの上に、「おなめ」をのせて食べた。「おなめ」は、豆を麦こうじでねせたもので、甘くておいしい。他には、つけ物・汁・ほんのまれに魚を食べた。魚は、祭やえびす講・彼岸など、年に何度も食べられなかつた。魚は、大正始めごろには行商が売りに来ていた。(荒牧)

普通は麦メシ。おかずは梅干し、みそ漬。白米は、正月や特別な時しか食えなかつた。魚や肉を買つて食つことはめつたにない。自分で捕つた魚を時々食うぐらひだつた。(北代田)

食事の名称 端氣地区では養蚕が盛んだつたので朝食は早かつた。午前四時頃に御飯を炊き、蚕に桑を与えてから、午前六時頃に食べた。朝食はアサゴハンと呼ばれた。昼食はオヒルと呼ばれ、午前十一時三十分頃にとつた。午後三時頃になるとコジョハンと呼ばれる間食をとつた。夕食はユウハンと呼ばれ、午後六時頃に食べるのが普通だつた。養蚕で忙しい時は、夕食が午後九時頃になることもあつた。(端氣)  
朝食はアサハンと呼ばれ、午前五時頃から六時頃に食べた。昼食はオヒルと呼ばれ、正午にとつた。夕食はユウハンと呼ばれ、午後六時頃に食べた。(小坂子)

朝食はアサハン、昼食はオヒル、夕食はユウハンと呼んだ。間食はコジョハンと呼び、午後三時頃にとつた。(北代田)

朝食はアサハンと呼び、主にヒキワリ飯と味噌汁、漬物などを食べた。昼食はヒルメシと呼び、朝食の残りものを食べた。午後三時頃の間食はコジョハンといい、ヤキモチやサツマイモを食べた。夕食はユウハンと呼び、うどんやソバ、またはヒキワリ飯と味噌汁、漬物などを食べた。(田口)



日常食 (幸塚)

	春	夏	秋	冬
アサメシ	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャクシ 菜、白菜、大根) お葉漬(白菜、シャ クシ菜)、タクアン オナメ	ヒキワリ飯 味噌汁(ナス、イン ゲン、ジャガイモ) 糠漬(ナス、キュウ リ)	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大根 ネギ) オナメ	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャガイ モ、里芋、大根、ネ ギ) お葉漬(白菜) オナメ
コジョハン	握り飯 ジャガイモの煮た もの タクアン	握り飯 糠漬(ナス、キュウ リ)	サツマイモのふか したもの 梅干	
ヒルメシ	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャクシ 菜、白菜、大根) タクアン、オナメ	ヒキワリ飯 味噌汁(ナス、イン ゲン、ジャガイモ) 糠漬(ナス、キュウ リ)	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大根 ネギ) オナメ、梅干	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャガイ モ、里芋、大根、ネ ギ) タクアン、オナメ
コジョハン	握り飯 ジャガイモの煮た もの タクアン	握り飯、焼餅 糠漬(ナス、キュウ リ)	サツマイモのふか したもの 梅干	
ユウメシ	ヒキワリ飯 味噌汁(ジャクシ 菜、白菜、大根) オッキリコミ(大 根、人参、ゴボウ、 里芋) オネジ(オッキリ コミに同じ) タクアン	ヒキワリ飯 味噌汁(ナス、イン ゲン、ジャガイモ) 糠漬(ナス、キュウ リ) 油味噌(ナス、ネ ギ)	オッキリコミ(大 根、人参、ゴボウ、 里芋) オネジ(オッキリ コミに同じ) 梅干	オッキリコミ(大 根、人参、ゴボウ、 里芋) オネジ(オッキリ コミに同じ) イモガラの煮たも の タクアン
ヤシヨク				炒り豆(大豆、ソラ マメ) 乾燥芋 みかん

注：( )内は材料、または汁物の具を示す。

朝食はアサメシ、昼食はヒルメシ、夕食はユウメシと呼んだ。午前  
十時頃と午後三時頃にとる間食はコジョハンと呼んだ。また、冬(十  
二月から三月頃まで)に縄ないやムシロ織り、ボロットジなどの夜な  
べ仕事をする場合にはヤシヨクを食べることが多かった。(幸塚)

普段の食事の献立の例①  
朝食 ヒキワリ飯・味噌汁・漬物  
昼食 朝食の残りもの  
夕食 うどん、ネジッコ(北代田)

普通の食事の献立の例②

朝食 御飯・味噌汁・納豆

昼食 朝食の残りもの・漬物

間食 小麦粉の焼餅

夕食 うどん(端気)

普段の食事の献立の例③(春〜夏)

朝食 御飯・漬物(ナス・キュウリの

糠漬)・味噌汁(ネギ・ナス)

昼食 朝の残りもの

夕食 御飯・漬物・油味噌・キュウリ

もみ・うどん(小坂子)

普段の食事の献立の例④(秋〜冬)

朝食 御飯・漬物(タクアン・ジャクシ

菜のお葉漬)・味噌汁(大根・芋)

昼食 朝の残りもの

夕食 御飯・漬物・煮物(カボチャ

等)・煮込みうどん(小坂子)

朝食 朝飯では、麦飯に汁、漬物とい

うのが多かった。汁には、ジャガイモ・

サトイモ・ダイコンといった自家製の野

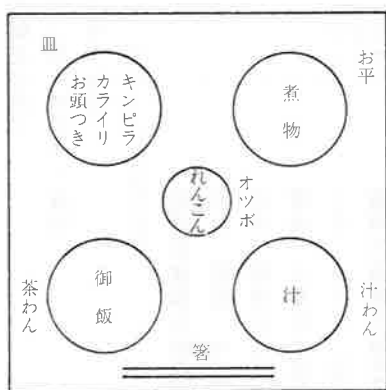
菜が多く、油揚げはめったに入らなかった。

漬物は、タクアン・白菜・なす・キ

日常食 (田口)

	春	夏	秋	冬
アサハン	ヒキワリ飯 味噌汁(菜類) お葉漬(白菜) タクアン、オナメ、 ニシン味噌	ヒキワリ飯 味噌汁(ナス、ネギ ジャガイモ) 糠漬(キュウリ、ナ ス)、タクアン、オ ナメ	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大 根) お葉漬(白菜) オナメ 味噌漬(大根)	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大根 ヒバ、カケ菜) お葉漬(白菜) タクアン、オナメ
ヒルメシ	ヒキワリ飯 味噌汁(菜類) お葉漬(白菜) タクアン、オナメ ニシン味噌	ヒキワリ飯 味噌汁(ナス、ネ ギ、ジャガイモ) 糠漬(キュウリ、ナ ス)、キュウリモミ 油味噌(ナス、ネ ギ)	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大 根) お葉漬(白菜) オナメ 味噌漬(大根)	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大 根、ヒバ、カケ菜) お葉漬(白菜) タクアン、オナメ
コジョハン	焼餅、ジリヤキ、サ ツマイモ	焼餅、トウモロコ シ 白米飯の握り飯 ……麦刈りや麦穂 打ち、田植えなど の日	サツマイモ	食べない
ユウハン	ヒキワリ飯 味噌汁(大根の切 り干し) うどん(ウグイス 菜)	ヒキワリ飯 味噌汁(ナス、ネ ギ、ジャガイモ) うどん(ナス、イン ゲン)	ヒキワリ飯 味噌汁(菜、大根) お葉漬(白菜、山東 菜) キンピラ うどん(菜、大根) ソバ(大根)	ヒキワリ飯 味噌汁(里芋、大 根、ヒバ、カケ菜) ケンチン汁(人参、 大根、ゴボウ、里 芋、豆腐) オナメ うどん(里芋、大 根)

注：( )内は材料または汁物の具を示す。



祝儀の膳  
(小坂子)

祝儀の膳 婚礼当日に出す膳には、御飯や赤飯を出す場合とソバを出す場合とがあった。イチゲンの客にはソバを出すことになっていた。汁物については、醤油を使った汁を出した。皿にはキンピラゴボウ、カライリ、ゴマメを盛った。カライリは、卵の花に人参やエビなどを入れ、砂糖と醤油で炒ったものだった。ゴマメも砂糖醬

食事の作法 茶碗を箸でたたくものではない。

(北代田)

餅やイリヤキ、焼飯などであった。このほか、夏には焼いたトウモロコシや茹でたジャガイモを食べることが多かった。また、秋にはふかしたサツマイモをよく食べた。

(小坂子)

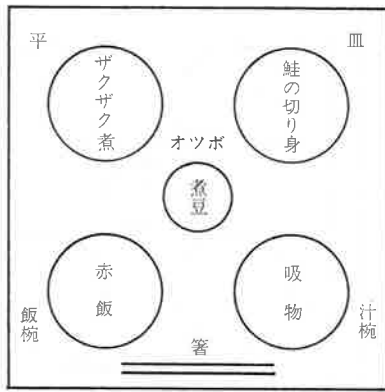
ユウリなどを食べた。(龍蔵寺)  
 朝食 朝食では、朝飯の残りを食べ、特に新しくおかず等に食べな  
 かった。(龍蔵寺)  
 夕食 夕食では、うどんが多かった。うどんは、自分の家での手打

ちで、自分の家で作った麦による粉で作った。粉は、龍蔵寺の東にあつた水車を使って打った。水車は、村内の人が順番で使っていた。自分の家で使わない分を売っていた。(龍蔵寺)  
 間食 間食(コジョハン)として四季を通じてよく食べたのは、焼

油で炒って出したが、後にはその代わりにお頭つきを出すようになった。オツポには蓮根を盛り、お平には煮物(里芋・ゴボウ・人参・麩・イカの足など)を盛った。また、酒宴の最後にはネギヌタを出した。

(小坂子)

婚礼の日の一般客の本膳は次のようなものであった。飯碗には赤飯を盛り、汁碗にはタラとコブの吸物を出した。オツポには煮豆を盛り、平には野菜の煮物を出した。この煮物はザクザク煮と呼ばれ、大根、人参、ゴボウ、コンニャク、かんぴょうの五品を用いることになっていった。また、皿には鮭の切り身をのせたが、これは後に鯛の形をした落雁にかわった。このほか、酢と砂糖を使った大根と人参の酢のもの(スエ)も出した。イチゲンの客には、オチツキといって最初に皿にスシを二つ出して出した。それから本膳を出す、イチゲンの客には



祝儀の膳

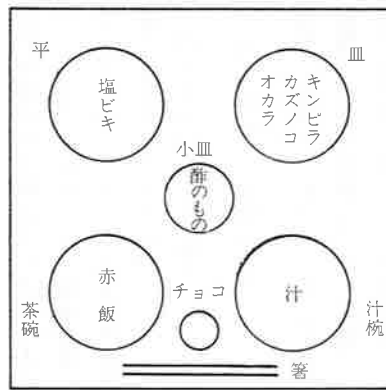
(幸塚)

タラとコブの吸物のほかに、ミツバとカマボコの吸物とシジミの吸物を出した。また、一般客に出した品のほかに、最後にネギヌタを出した。

(幸塚)

タイ・結びコブ・数の子・かんぴょうの吸い物等を、五つの祝い膳で祝う。数の子―子宝に恵まれるように。お嫁さ

んの御飯はおたかもりで最後にねぎぬたを食べた。食事の後はお菓子の婚礼の日の客には猫脚膳で本膳を出した。茶碗には赤飯を盛り、汁碗にはソバを食べるための汁を出した。平には塩びきの切り身をのせ、小皿には大根と人参の酢のものを盛った。また、皿にはキンピラ、カズノコ、オカラの三品を盛った。本膳の手前の方には酒のオチヨコを置き、これに娘が酒をついだ。ソバは大皿に盛って、ところどころに置いた。イチゲンの客には、まず最初に平にスシを二つくらい出して



婚礼の膳

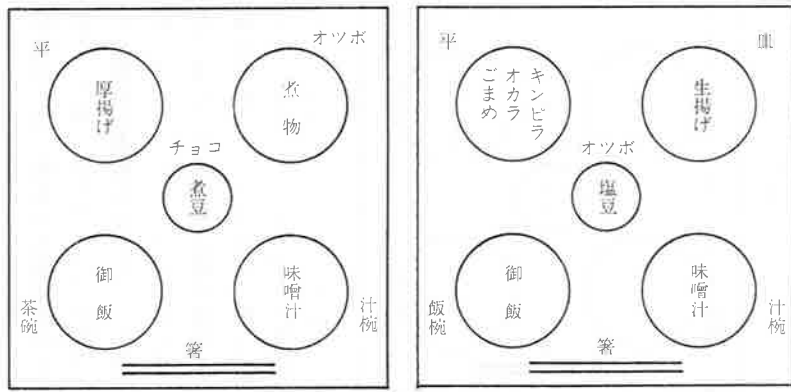
(田口)

出し、お茶を入れた。これをオチツキといい、スシのかわりに安倍川餅を出すこともあった。それから本膳を出す、イチゲンの客の本膳には先に述べた一般客の本膳の品のほかに刺身と煮魚(マグロやカツオ)をつけた。オシヨウバン(イチゲンの客の接待役)の膳にもイチゲンの客と同じ品を出した。身上のある家では、イチゲンの客には会席膳を使って二の膳を出し、吸い物も二種類くらい出すことがあったが、そこまでできる家はめつたになかった。なお、婚礼の引き物には、鯛や鶴亀の形をした落雁やスルメ(五枚くらい)などを出した。(田口)

葬式の膳 葬式の膳には御飯を出した。汁物については、サンバイ豆腐や麩を入れた味噌汁を出した。お平には厚揚げを盛り、オチヨコには煮豆を盛った。後には煮豆に代わって塩豆が用いられた。また、

膳の上に三角形の紙を敷き、その上に饅頭を置いた。(小坂子)

葬式の日に出す本膳は次のようなものであった。飯碗には御飯を盛り、汁碗には味噌汁



葬式の膳  
(田口)

葬式の膳  
(幸塚)

り、汁碗には味噌汁を出した。オツポには塩豆を盛り、皿には生揚げをのせた。平にはキンピラ、オカラ、ごまめの三品を出した。(幸塚)

葬式の場合にも、本膳には猫脚膳を使った。茶碗には御飯を盛り、汁碗には大根・里芋・豆腐などの人つた味噌汁を出した。平には厚揚げをのせ、オチョコには大豆(最近ではインゲン)の煮豆を盛った。また、オツポには人参・ゴボウ・里芋・大根・栗などの煮物を盛った。オツポの煮物にはクズやカタクリでとろ味をつけた。このほか

にもヒジキの煮たものを皿に盛って出した。葬式の引き物には、折箱に入れた饅頭を出した。また、初七日には清めの酒を出し、うどんを振舞った。(田口)

弁当 山に燃し木を採りに行く時には、一日がかりの仕事になるので弁当を持って行った。弁当は八合小鉢に詰めたヒキワリ飯で、八合小鉢の本体と蓋の両方にヒキワリ飯を詰めて出かけた。山に着くとまづ半分を食べ、昼になってから残りの半分を食べた。普段のおかずは味噌などが多かったが、正月には鮭の切身を持って行き、山で焼いて食べたこともあった。(北代田)

山で仕事をする時などには弁当を持って行った。弁当はヒキワリ飯だった。弁当のおかずは、夏は梅漬やシヨウガ漬、キュウリやナスの糠漬が多かった。冬はタクアンやお葉漬をよく食べた。(田口)

食べくらべ カレーの食べくらべ、片原まんじゅうの食べくらべ、飯や酒でもやった。(三俣)

#### (六) 食器・調理用具

食器 箱膳に入れて使った。使ったあととは洗ってしまった。(端気)

箱膳 箱型のお膳で、中に茶碗、汁碗、皿、箸が入っていた。蓋を裏返すとお膳になった。食事の後、茶碗などはお湯やお茶でゆすいで飲んでしまい、布巾で拭いて箱膳の中にしまっておいた。十歳くらいから箱膳を使い始めるのが普通だった。(川端)

箱膳は杉板でできた箱型の膳で、ニスが塗ってあった。箱膳の中には、御飯茶碗、汁碗、皿、箸が入っていた。おかずは大皿に盛り、各自の皿にとって食べた。食後は、各自が洗い桶で食器を洗い、箱膳の中にしまっておいた。(田口)

鉄釜 御飯を炊くのに使った。大きさは様々であった。(端気)

鉄釜は、御飯を炊いたり、うどんやソバを茹でたりするのに使った。鉄釜には、一升炊き、二升炊きなどの種類があった。御飯を炊いたあとは、藁で編んだ蓋をかぶせて御飯が冷めないようにした。(田口)

鉄釜はかまどにかけ、御飯を炊いたり、味噌の原料の大豆を煮たりするのに使った。大きさはいろいろあり御飯を炊くのに四升炊きを使い、大豆を煮るには二斗釜を使うなど、目的に応じて使い分けた。

(北代田)

鉄釜はヘツツイにかけて、御飯を炊いたりうどんを茹でたりするのに使った。御飯を炊く時は、燃料に松葉を燃して炊いた。(幸塚)

鉄鍋 いろいろやかまどにかけ、味噌汁などを作るのに使った。(端氣)

鉄鍋は、囲炉裏にかけて味噌汁やケンチン汁などを作るのに使った。

(田口)

鉄鍋は囲炉裏にかけて使い、味噌汁やケンチン汁などの汁物を作るのに使った。(幸塚)

鉄瓶 鉄瓶は、囲炉裏にかけて湯を沸かすのに使った。大きさはいろいろあったが、二升入りくらいのもを使う家庭が多かった。(幸塚)

焙烙 鉄製で、焼餅を焼くときに使った。(端氣)

焙烙は鉄製で、焼餅やジリヤキを作るときに使った。(田口)

焙烙は薄い鍋のような形をしたもので、焼餅などを焼くのに使った。鉄製の焙烙と土を焼いて造った焙烙とがあり、土の焙烙は二年くらい使うと割れてしまうことが多かった。土の焙烙の方が鉄の焙烙よりも古くからあった。(幸塚)

イジメ 藁で作った容器で、中に釜敷を敷き、御飯の入った釜を入れて保温した。赤ん坊を入れるイジメもあった。(北代田)

セイロ セイロは、饅頭や赤飯をふかすのに使った。セイロの中にはカケンという布を敷き、饅頭や糯米を入れて、釜にかけてふかした。

セイロには、三升炊きや五升炊きなどいろいろな大きさのものがあった。(田口)

セイロのことはフカシと呼んだ。セイロは、糯米やふかし饅頭をふかしたり、茶の葉をふかしたりするのに使った。(江木)

セイロは、ふかし饅頭や赤飯をふかしたり、餅を搗く時に糯米を蒸したりするのに使った。セイロには、丸いものや四角いものがあった。

(幸塚)

ミソコシ 味噌汁などを作るとき、味噌をこすのに使った。(田口)

マゴノテ 竹製で五本くらいの歯がついたもので、煮込みうどんなどを盛りつける時に使った。(田口)

シラジ すり鉢ともいう。内側に細かい刻みのついた陶器で、味噌などをすりこぎ棒で搗るのに使う。(田口)

フミゴザ フジで編んだもので、この上に小麦粉をこねたものなどをのせ、足で踏んで伸す。(江木)

メン板 メン棒で、こねたうどんやソバをのばす時に使用した。

(端氣)

メンボウ(麵棒) うどんやソバをこねたものをのばすのに使った。

(田口)

板の上で、うどんやソバを薄く伸ばすのに使う。(江木)

コネ鉢 うどんやソバをこねる時に使う鉢。木製のものと陶製のものがあった。(田口)

木製で、うどんやソバをこねる時に使った。(端氣)

小麦粒やソバをこねる。(江木)

スタレ 竹ひごを糸ですだれ状に編んだもので、のり巻きずしを作る時に使った。スタレの上のりを敷き、その上に御飯と具をのせて巻いた。(田口)

包丁 野菜を切る菜切り包丁、うどんやソバを切るウドン切り包丁、刺身を切る柳刃包丁などがあつた。(田口)

うどんやソバを切る包丁は、うどん切りとよんだ。(江木)

片口 陶製の器で、酒などを徳利に入れたり、醤油をさしたりするのに使つた。(田口)

スイカン ジョウゴともいう。ブリキ製の朝顔型をした道具で、酒を徳利に入れたり、醤油を瓶に入れたりするのに使つた。(田口)

シヨウギ 竹を編んで作つたもので、茹でたうどんやソバをあげたり、ふかした饅頭をあげたりするのに使つた。また、洗つた糯米の水をきるのにも使つた。(田口)

竹で編んだもので、茹でたうどんやソバ、まんじゅうなどをあげるのに使つた。(端氣)

穀箱 米や麦は納屋や倉に保存しておいたが、日常使う分はオカツテにある穀箱に入れておいた。穀箱は木でできた箱で、一俵分くらいの米や麦を入れておくことができた。後には、米や麦の保存には穀箱に代わつてカンを使うようになった。(江木)

水車 田口町には水車があり、玄米を搗いて白米にするのに使つた。

(田口)

江木町には、水車を使って穀物を加工するのを商売にしている人がいた。水車では、玄米を精米したり、大麦をヒキワリにしたりした。

また、小麦やソバを粉に挽いたりした。(江木)

幸塚町には、昔は水車があつて、大麦とヒキワリにするのに使つていた。水車は昭和二十二年の大水で流れてしまつた。(幸塚)

## (七) その他

茶 お茶を自分の家で作る人はあまりいなかった。お茶を作るには、セイロに布巾を敷いて、その中に茶の葉を入れてふかす。ふかした葉を遠火で乾かしながら手でよるとお茶ができた。(幸塚)

昔は、畑の境に茶の木を植えていたので、自分の家でお茶を作つて飲んだ。まず、摘んだ茶の葉をフカシ(セイロ)の中に入れ、釜の上でふかす。ふかした茶をトタン箱の中に入れ、炭火の上にかざしてもみながら乾かすとお茶ができる。お茶作りに使うトタン箱は、木枠にトタンを張つたもので、もともとは稚蚕を飼うために使つた箱だつた。大体、一軒の家で一年間飲むだけのお茶を作つた。現在は、宮城農協で製茶を行っている。(江木)

昔は、お茶グネの茶を利用して、自分の家でお茶を作つた。五月中旬頃、春蚕のニワ休みくらいの時期になるとお茶作りをした。まず、茶摘みをし、摘んだ茶の葉をセイロに入れて釜の上で蒸す。セイロに入れた茶の葉を箸でかきまわし、箸にからまるようになれば蒸し上がったことになる。蒸した茶は、ホイロに入れて乾かす。ホイロの台の中におきを入れ、その上にトタン板に和紙を張つたものをのせ、蒸した茶の葉を広げて乾かした。こうして作つたお茶は自家消費で、一年間飲むことができた。(上小出)

昔は自分の家でお茶を作つた。セイロで蒸したお茶の葉をカンの上に広げ、囲炉裏やかたつの上にかざし、手でよつて作つた。(田口)

二十年くらい前までは、お茶を家庭で作つていた。茶の樹は畑のまわりに植えてあり、庭の生垣にすることもあつた。茶摘みは五月中旬頃に行い、手で摘んで籠に入れて集めた。摘んだ茶の葉は、まずせいろで蒸し、むしろの上を広げてもむ。次に、一メートル四方の篩に蚕

座紙を張つたものを用意し、その中にもんだ茶の葉を入れる。そして軒下で炭火をおこし、篩をその上にかざしてもんだ葉を乾かすとお茶ができた。弱火で時間をかけて乾燥させるのがコツだが、あまり時間をかけ過ぎるとこげ臭くなった。また、早く乾かそうとして天日に当てたりすると味が落ちた。乾燥したお茶は、篩にかけて葉と粉茶に分け、茶箱に入れて保存した。二番茶・三番茶くらいまで作つたので、一年間飲むに足りた。なお、お茶は六く七月頃に火入れ直しをする長持ちした。(端氣)

旧前橋市内に茶屋があるので、そこから茶を買っていた。特に千代田町の茶屋から買つて来ることが多かった。(端氣)

からゆ お湯だけで、茶葉の入らないもの。(端氣)

菓子 普段は、なかなか菓子が食えなかつた。一銭で大あめが二ヶ買えた。十銭でまんじゅうが沢山買えた。冠婚葬祭の時に配られるラクガンの菓子やまんじゅうが楽しみだった。五銭もんには、もなか、羊かん、あんこ玉などがあり、なかなか食えなかつた。(龍蔵寺町)

正月のおかしに金平糖のである家が最高だった。駄菓子は、ねじりぼろやうさぎ玉、きんか糖があつた。特別のお菓子は、五銭もんといつてミジンコの中にあんこが入つたもので、フタのついた箱にはいつていた。片原まんじゅうは、一個二銭だった。(三俣)

バナナを加工した西洋菓子と金平糖があつた。何もないうちでは、砂糖だった。(三俣)

母のつくるおやつ 子供の頃、母親の手作りのおやつを食べた。サツマイモのふかしたものを、焼イモ、きんとん、味噌で味付けをした麦めしの結び、等々。(龍蔵寺)

酒 酒造は禁止されていたので、ドブロク造りなどは江木町では行われなかつた。酒は専ら買つて来て飲んだ。このあたりでは、駒形の

「近江屋」という酒屋がよく知られていた。また、粕川村深津の「桂川」という酒も有名だった。(江木)

旧前橋市内の酒屋から酒を買っていた。(端氣)

戦時中はドブロクを造る人もいた。(小坂子)

第二次世界大戦中から戦後しばらくまで、ドブロクを造つて飲んだ人もあつた。(端氣)

若い衆は、あまり酒をのまなかつた。駄菓子を食えることが多く、前橋へ行った帰りに、三俣せんべいや、ビスケットを食べながら来た。(荻窪)

四斗ダレで正月に買い、益・暮の勘定だった。上細井の賀茂川、駒形の清原をのんだ。駒形からは、番頭が大八車で売りにきた。(三俣)

酒屋については、上細井、小神明の万屋の所に柿崎の酒屋、片貝の吉田酒店などがあつた。(三俣)

女が酒を飲むのは、正月ぐらい。盃に一杯ぐらい飲んで、顔を赤くしていた。女はタバコは吸わない。(龍蔵寺)

酒はショーチューがめから汲んで飲んだ。ショーチューは、ツケで買つており、月末に酒屋が代金を取りにくる。金がない場合には、米で支払う場合もあつた。肴はイワシを焼いて食べた。正月の酒は、四斗樽で酒屋から買い、何軒かで分けた。空になつたショーチューがめは、ラッキョを漬ける樽として使つた。(龍蔵寺)

タバコ きざみタバコをきせるですつた。萩、ナデシコ、アヤメという銘柄があつた。すい口付の朝日、敷島という紙巻きタバコ、両切りのゴールデンバットがあつた。(三俣)

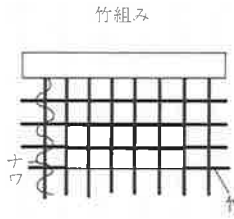
お乳の代用品 米を水にひたして、翌朝すつて、煮たてて砂糖を入れたものを、赤ん坊にやつた。熱い灰の中に、桑の葉でつつんだ米の

粉をといったものを入れて焼いて、噛んで子どもにやった。(三俣)

### 三、住居

#### (一) 屋敷どり

母屋 トブグチから母屋の中に入り、向かって左側に部屋のある家を左ズマイの家、向かって右側に部屋のある家を右ズマイの家といった。上小出町には左ズマイの家が多かった。(上小出)



当時の家は、夏は涼しく冬は寒い。地震や風には弱く、昭和八、九年頃に一軒が、たつ巻によつて潰れた。一本町釘も使っていないかった。また、カンナの無い時代でチョーナが使われていた。壁は竹組みで、土は三回塗りの土壁であった。(北代田)

屋敷へび よく家の中にはへびがいた。天井のあたりにいることが多い。へびは嫌われるどころか、ネズミを採るので、有益だと思われた。人には悪さをしないし、屋敷を守り神として大切にされた。ただ山にいるへびは攻撃的で嫌われた。(北代田)

庭 庭では、麦の脱穀など農作業を行った。このため庭木などはあまり植えなかつた。(小坂子)

庭は、主に麦や粃を乾燥するために使った。このような穀物の乾燥は、庭に三尺×六尺くらいのムシロを四十枚くらい広げ、その上で行った。冬には霜柱を防ぐため、庭に藁を敷いた。霜柱ができて解けると庭の土が流れ出すので、それを防ぐのが目的だった。(上小出)

庭では、麦の棒打ち(脱穀)などを行った。また、庭にムシロを広げ、穀物の天日乾燥を行うこともあった(亀泉)

農家の庭は非常に重要な仕事場であった。冬に、シモ柱で土がうき上ったり、凍ったりしないように庭にワラを敷き込んだ。(北代田町)

防風林 庭のまわりには、防風林としてカシやケヤキなどの樹木が植えられていた。(小坂子)

北から西にかけて竹や杉で防風林をつくる。(鳥取)

亀泉町には、母屋の北側から西側にかけてカシの木を植えてクネを作っている家が多かった。これはカシグネと呼ばれ、防風林の役割を果たしていた。カシグネは、一年に一回、十月十七日のオクンチ前には刈り込んで手入れをした。(亀泉)

コサギリ 何年かに一度、隣の家から伸びてきた木の枝を切り落とす作業をコサギリといった。コサギリをするには、区長所で一月の末頃に開かれる村総会の席で、その旨を申し出なければならなかった。村総会で木の持ち主の承諾を得ると、枝を切り落とすことができた。このように、持ち主ではなく他人にコサギリをさせるのは、あとで文句が出ないようにさせるためだった。(上小出)

垣根 家の敷地のまわりには、割竹を組んだ竹垣をめぐらす農家が多かった。また、家と家との間にはお茶グネを作ることも多かった。お茶グネは五く六年前までよくみられたが、区画整理で大分なくなつた。(上小出)

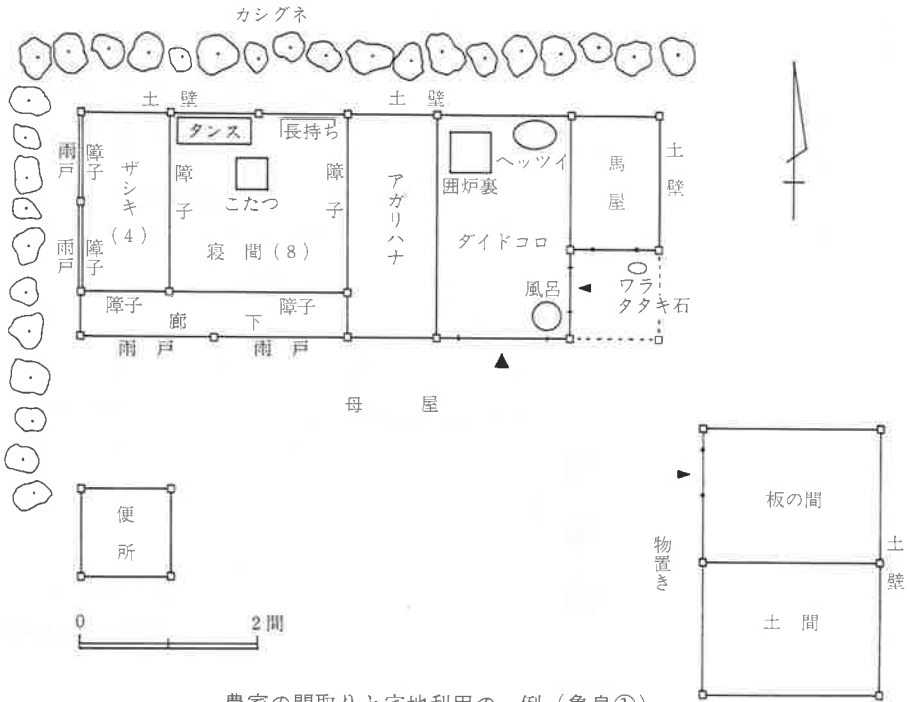
竹やぶ 農家の裏庭には、竹やぶがあることが多かった。竹やぶは防風林として利用されていた。また、竹やぶの竹は竹垣を作るのにも用いられた。(上小出)

モノオキ 竹のスを屋根の下にしき、そこへ道具などをあげておいた。味噌などもおいた。(小神明)

物置の中は板の間と土間に分かれており、土間には味噌樽などを置いておいた。板の間には米俵を保存しておいた。また、養蚕の上蒨期



には寝間で蚕を飼ったので、物置の板の間で寝た。(亀泉)  
 物置小屋のことをコイと呼んだ。コイには主に穀物を保存していた。  
 また、養蚕の時期には桑を保存することもあった。(上小出)



農家の間取りと宅地利用の一例 (亀泉①)

注：母屋内の数字は畳数を示す。

**屋敷稻荷様** 母屋の裏には屋敷稻荷様を祀った。十二月十五日は屋敷稻荷様の日で、この日にはお宮にチガヤの縄をしめ、切りはぎをと리카え、赤飯・お頭つきの鰯(二匹)・豆腐を供えた。「お供えしたら、お稻荷さんが下げに来るから外へ出るものではない」といったが、実際には近所の子供が供物を下げた。(小坂子)

母屋の裏には稻荷様を祀っていた。十二月の稻荷祭りには、稻荷様に赤飯とイワシを供えた。また、毎年十二月三十日には稻荷様に幣束をあげた。(亀泉)

**シメ** 裏口の上にしめをお稻荷様の時に下げた。きつくするとよくない。一年中おいて下げない。(小神明)

**お飾り** 入り口、大神宮、お勝手、仏間、床の間、おかまさま、便所に飾った。(端氣)

**堆肥場** 堆肥場は、家屋の庭の東隅にある。ここには、ウマヤのふみ草や下水などを入れて堆肥を作る。この堆肥は、二十日ぐらいごとにかきまぜる。(五代)

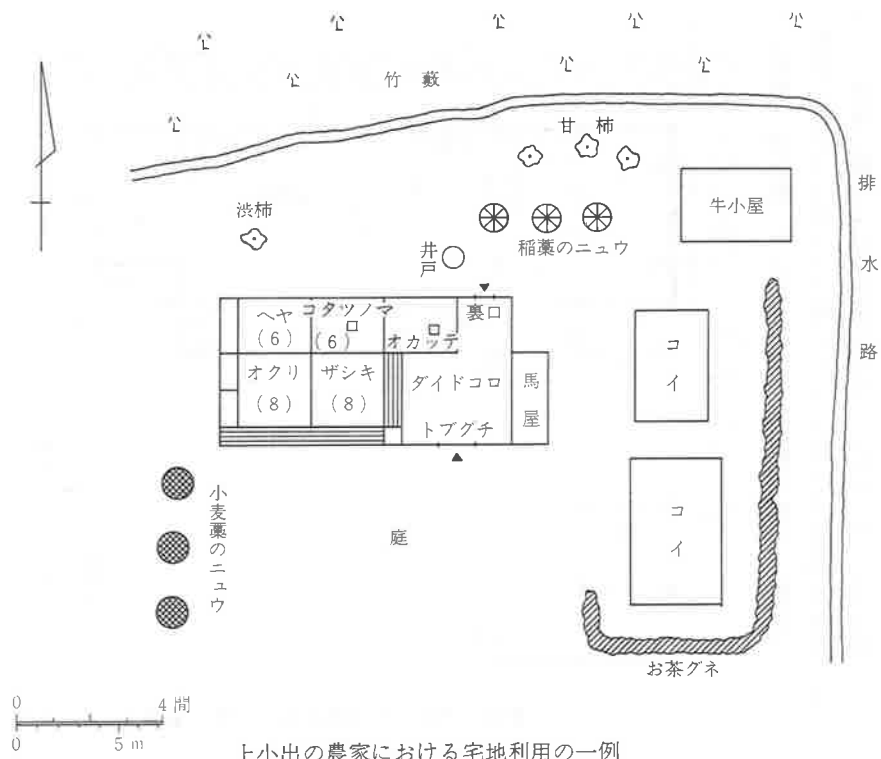
**ニユウ** 稲藁や小麦カラ(小麦藁)は、庭の隅などに三メートル位の高さに積み上げ、ニユウにして保存しておいた。稲藁は主に牛馬の餌にし、小麦カラは屋根材に利用した。(上小出)

**排水路** 上小出町の土地は地下水面が高く、湿気が多かったので、水ぬきのために庭のまわりに排水路を掘っている家が多かった。(上小出)

**鬼門** 鬼門の方角には穢れたものを置いてはいけないといわれ、家畜小屋などを建てないようにした。(上小出)

**モロ** 里芋やサツマイモなどは、竹やぶに横穴を掘ってその中に保存しておいた。この横穴をモロ(室)と呼んだ。(亀泉)

(二) 間取りと使い方  
 入口 母屋の入口はトボグチと呼ばれる。トボグチには大戸があつ



上小出の農家における宅地利用の一例

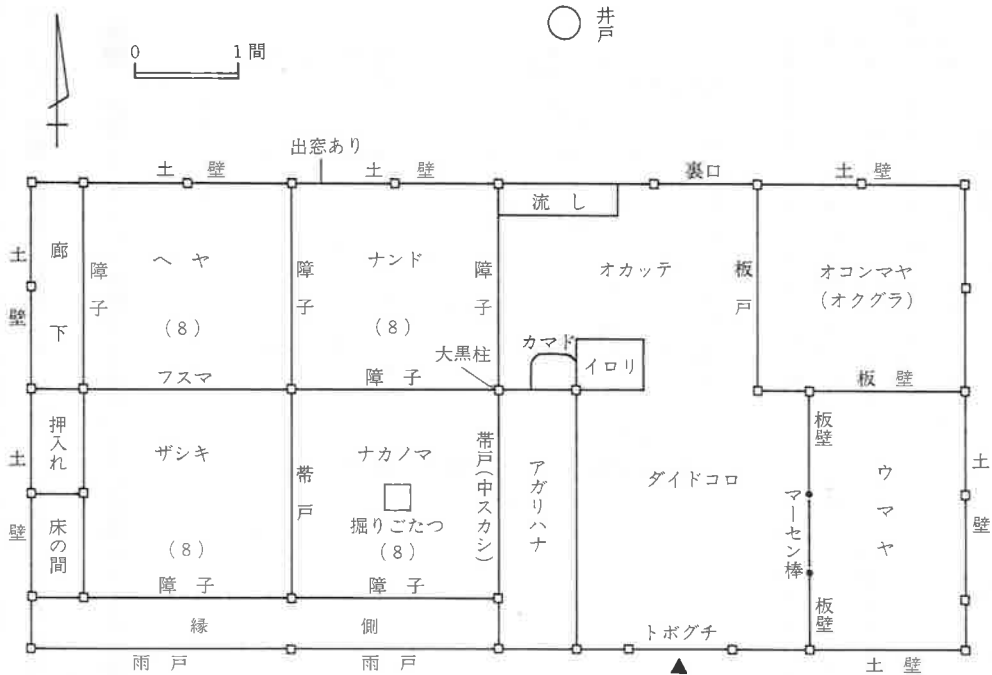
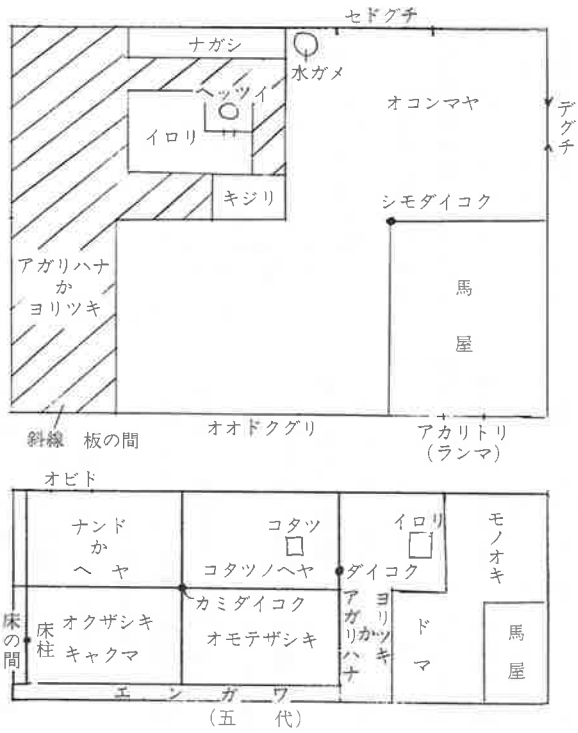
馬屋には馬一頭飼う家が多い。馬が逃げないようにマーセンボという丸太で囲いを作る。このマーセンボは、クルミなどのすべりのよい丸太三本ぐらいで作る。馬屋の下には、木の葉やワラを敷いて、馬の糞尿で堆肥を作る。この堆肥は二カ月ぐらいで外に出すが、冬は三カ月ぐらい入れておいた。この馬屋は、戦争中に馬を供出したために牛を代わりに入れておいた。(嶺)



ウマヤのあと (竜蔵寺町)

て、それにクグリ(くぐり戸)がついていた。(小坂子)  
 馬屋 トボグチを入れてすぐ右手には、馬屋が設けられていることが多かった。ここでは馬が飼われていた。馬屋はダイドコロとは板壁で仕切られ、馬屋の入口は三〜四本のマーセン棒で閉じられていた。  
 馬屋はダイドコロの右側に設けられているのが普通で、ここでは馬が飼養されていた。馬屋には山からかいてきたナラツ葉が敷かれ、これから堆肥が作られていた。また、馬には餌として稲藁が与えられた。  
 戦前までは多くの家で馬一頭を飼っていた。この馬は、母屋の中に馬屋を作り、ここで飼っていた。しかし、五代町で一、二軒の家は外に馬屋があった。(五代) (亀泉)

どこの家でも家の内に馬を飼っていた。馬は農耕の担い手でもあり人間並みに扱った。夜寝ていると馬の小便の「ジャー」という音が聞こえた。馬を出す時には、玄関の大きい戸を外した。(北代田)  
**オコンマヤ** オクグラとも呼ばれ、米俵、味噌樽などが収納されていた。また、床にシビ(藁を敲いたときに出るクズ)を敷き、その上に袋に入れた里芋などを保存した。(小坂子)  
**アガリハナ** ダイドコロとナカノマの間の場所をアガリハナという。養蚕の時期にはナカノマや座敷でも蚕を飼ったので、アガリハナに寝ることもあった。(小坂子)  
 土間から部屋へ上がる途中の場所で、板張りになっている。近所の人などが来た時は、ここで茶を出して接待した。(端気)



小坂子の農家の間取りの例

ダイドコロからザシキへ上がる途中の場所をアガリハナといい、板張になっていた。アガリハナは幅三尺のものが多かったが、幅二尺の家もあった。(上小出)

ダイドコロと寝間の間の板張りの部分をアガリハナという。アガリハナは食事をする時に使った。(亀泉)

座敷 床の間や押入れがついており、普段は寝室として使った。養

蚕の時は、畳をあげて蚕棚をとりつけ、蚕室として使用した。(端気)

床の間や押入れがついており、長持ちなどを置いてある家もある。普段は寝室として使い、養蚕の時期には蚕室として使った。春蚕を飼う前に畳をあげて大掃除をし、むしろを敷いて使用した。(小坂子)

ザシキは、普段は来客があつた時に使っていた。養蚕の時期には、畳をあげて蚕室として使った。

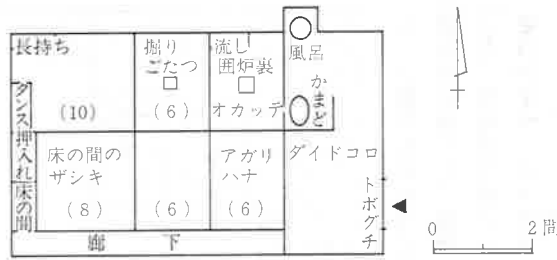
ザシキでは機織りや裁縫などの作業をした。(亀泉)

ザシキは、普段は来客の接待に使用した。養蚕の時期には畳を上げ、ここで蚕を飼った。(亀泉)

オモテザシキ 応接間として利用され、正月の客を泊める部屋として使われる。また、正月には正月棚を、盆には盆棚をこの部屋に飾る。

十五夜の棚はオモテザシキの前のエンガワに飾られる。(五代)

ナカノマ 掘りごたつがあり、普段は居間として使った。養蚕の時

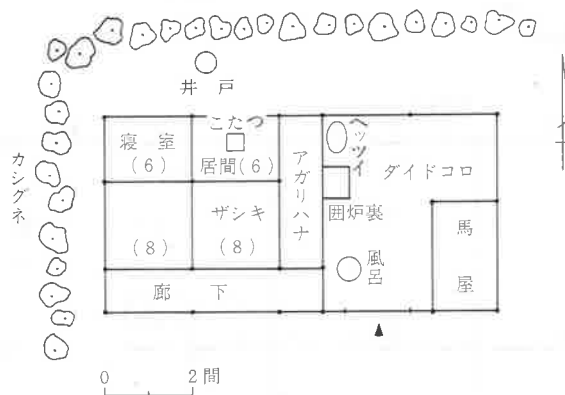


端気の農家の間取りの例

期には座敷と同じように、畳をあげてむしろを敷き、蚕室として使った。また、麦類の収穫の時期には、ナカノマに麦をとり込んだ。(小坂子)

居間 居間にはこたつが設けてあり、主に食事をする時に使った。(亀泉)

(亀泉)



農家の間取りと宅地利用の一例 ② (亀泉)

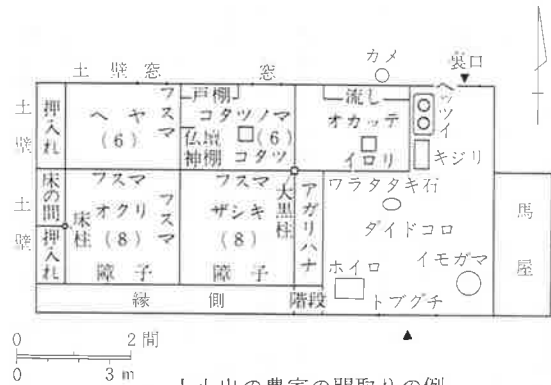
注：母屋内の数字は畳数を示す。

コタツノマ コタツノマには、掘りごたつがあり、普段は居間として使っていた。養蚕の時期には、寝室として使った。(上小出)

コタツノヘヤ コタツノヘヤは、家族の団らんの部屋である。この部屋に神棚や仏壇を置く。(五代)

ヘヤ ヘヤは、主に寝室として使っていた。(上小出)

ヘヤの北側に縁側のある家は少ない。北側には大壁の家が多いが中



小出の農家の間取りの例

へ棺を出した。(小坂子)

縁側にはムシロを敷き、小麦を干すのに使った。婚礼の時には、嫁や嫁方の新客を縁側から迎えた。婿取りの場合も同様であった。また、僧侶は縁側から入ることになっており、葬式の際の出棺も縁側から行った。(上小出)

ナンド 北西の部屋で、ふだんは年寄りが寝ている部屋だが、お産や、亡くなった人が出ると、ここでやった。(小神明)

箱膳などが置いてあった。(小坂子)

ナンドは若夫婦の部屋で、北側がおいしいで出口が六尺で、しょうじと雨戸がいつも閉めっぱなしになっている。物置きがわりに使っている家もある。(下小出)

にはしようじの家もある。ただし、このしようじは大そうじのときでなければあけることはない。へやは主に若夫婦の寝室として使われた。(嶺)

家で子を産むときは、へやの畳をあげて板をはずす。そこに竹を二つに割ったものを並べて、その上にボロきれや油紙などを敷いた。(嶺)

縁側 結婚式で家に嫁を迎え入れる時は、縁側から座敷へ通した。

また、葬式で座敷から出棺する場合も、縁側を通して表

寝間 寝間は普段は寝室として使った。また、寝間にはタンス、長持ちが置いてあるほか、こたつが設けてあり、居間としても使っていた。養蚕の時期になると、寝間の畳をあげて蚕を飼った。(亀泉)

寝間は寝室として使用した。また、長持ちや夜具などを置いておいた。(亀泉)

主人夫婦がナンドに、若夫婦がコタツノへやに寝るのが普通だが、主人夫婦と若夫婦の寝る部屋が逆になっていることもある。(五代)

オクリノへやに主人夫婦、へやに若夫婦や子どもが寝る。客が正月や盆に来たときは、オクリノへやを客の寝室にし、主人夫婦がオモテザシキに寝室を移す。(嶺)

披露宴はオクリノへやとオモテザシキを使い、間にある戸を取りはらう。嫁が最初に家に入るときは、オクリノへやのそばの縁側から入る。このとき菅笠をかぶせて姑が嫁をかかえて家に入れる。そしてトリムスビの儀式をオクリノへやで行う。(嶺)

オクリ オクリは、普段は寝間として使っていた。養蚕の時期には、畳をあげて蚕室として使った。(上小出)

オクザシキ 床の間のある部屋。嫁を送り出す部屋であり、かつ嫁ぎ先で一番最初に入る部屋である。この部屋は上等の客しか寝かせないが、嫁いだ日は嫁をこの部屋に寝かせる。また死んだときの祭壇を作る部屋でもある。(五代)

オクザシキは、客が来て泊るための部屋である。(下小出)

祭祀の部屋 仏壇があるのがナンドかオクザシキ、神棚はコタツノマにある。(下小出)

台所 土間になっており、かまどや風呂が設置されている。(端氣)

ガイドコロは土間になっていた。ガイドコロには、藁を叩くためのワラタキ石が置かれており、ここで縄ないや俵作りが行われた。ま

た、ダイドコロには鍋や釜をかけるヘツツイや、製茶に使うホイロが設けられていた。(上小出)

ダイドコロは土間になっていた。ダイドコロには、ヘツツイや囲炉裏が設けられており、炊事が行われた。また、風呂もダイドコロに設置されていた。(亀泉)

オカツテ オカツテは土間になっている家が多く、板の間の家は少なかった。オカツテには囲炉裏、かまど、流しがあり、ここで炊事を行った。流しのそばには水ガメがあり、炊事にはこの中の水を柄杓で汲んで使った。井戸には水舟が設けてあって、そこから水ガメまで樋が出ており、井戸で水舟に水を流すとオカツテの水ガメに水がたまる仕組になっていた。冬には水が凍らないように水ガメに蓋をした。

(小坂子)

板の間になっており、流しやいろいろが設置されている。お勝手は食事をする時に使用され、嫁が流しに近い場所に座って給仕をした。

(端気)

オカツテは板の間になっており、食事の時に使われた。また、オカツテには流しや囲炉裏が設けられており、炊事にも使用された。流しのそばには、洗いに使った水を溜めておくカメが置かれていた。カメの水は下肥を薄める時に使われた。(上小出)

食事をする際は、勝手の板の間で食べた。いろいろ端でよく茶をのみながら話こんだ。室内はいろいろの煙のため、真っ黒で、黒光りしている。家で人寄せや儀式がある時は、八畳の間をふすまを開けて大部屋にして使用した。(北代田)

囲炉裏 囲炉裏は炊事や暖房に使用された。囲炉裏の上からは竹カギが下がっていて、鉄瓶や鍋を下げられるようになっていた。大切な場所だったので、昔から「囲炉裏の縁をたたくものではない」と言わ



イロリ (竜蔵寺町)

れていた。雨や雪が降って外で農作業ができない日には、囲炉裏のはたで縄ないや縫い物などの仕事をするが多かった。(小坂子)

あまりイロリ中心ではないので、お客は、こたつに入ってもらった。

(小神明)

囲炉裏はオカツテに設けられていた。囲炉裏のそばにはキジリがあり、その中には燃料のクワゼが入っていた。囲炉裏には、鍋や鉄瓶をかけるために自在鉤が下げられており、自

在鉤の止め木には魚形やヒョウタン形のものがあった。囲炉裏の座り方は特に決まっておらず、座席の名称もついていなかった。囲炉裏には囲炉裏の神様が祀られ、十二月三十日には幣束が立てられた。

(上小出)

囲炉裏には鉤竹が下がっており、鉄瓶で沸を滞かしたり、鉄鍋で汁物を作ったりするのに使った。また、囲炉裏は暖房用としても重要だった。囲炉裏のそばには燃料(モシキ)を入れておく場所があり、キジリと呼ばれていた。なお、囲炉裏を囲む座り方は、特に決まっていなかった。(田口)

いろいろの周りで、うどんを打った。家族の団らん、地域のだんらんの場だった。(荒牧)

いろいろには自在鉤が下げてあり、ここでは鉄鍋で汁物を作ったり、鉄瓶で湯を沸かしたりした。また焙烙をかけて焼餅も焼いた。(端気)

囲炉裏のことはユルリと呼んだ。囲炉裏には大蛇の形をした鉤竹が

下がっており、鉤竹の途中には高さを調節するためのコブナがついていた。また、鉤竹には囲炉裏の神様の幣束がつけてあった。囲炉裏の鉤竹には鉄鍋や鉄瓶をかけ、汁物を作ったり湯を沸したりした。(亀泉)

囲炉裏の大きさは六尺×六尺くらい、深さは三尺くらいが一般的だった。囲炉裏の真中には鉤竹が下がっており、そこに鉄鍋や鉄瓶をかけた。(幸塚)

かまど かまどには釜や鍋をかけ、炊事を行った。かまどのそばには、火伏せ・盗賊除けとして荒神様が祀ってあった。(小坂子)

台所に据え付けられており、釜で飯を炊いたり、鍋で汁物を作るのに使用された。燃料にはクワゼ(桑の枝)などが用いられた。(端気)

カマドのことはヘツツイと呼び、鍋や釜をかけて使った。ヘツツイにはカマ神様として三宝荒神を祀っており、毎年十二月三十日に幣束を立てた。また、ヘツツイのそばには火伏せのため、秋葉神社のお札を貼っておいた。(上小出)

ヘツツイはダイドコロに設けてあり、鉄釜や鉄鍋をかけて使った。ヘツツイの近くには、オカマ様として三宝荒神の札を貼っておいた。

また、オカマ様には毎年十二月三十日に幣束を上げた。(亀泉)

ヘツツイは、石を並べて粘土をその間に入れて作る。修理のときは塩をまき清めてから行う。小さなヒビのときは、その上に泥を塗るのだが、大きいものは布きれをはりつけた上に泥を塗る。コンクリートのヘツツイがでてきたのは戦争の直前で、町から買ってきたり近所の人に作ってもらったりした。レンガのヘツツイは戦後になって数軒みられた。(嶺)

イモガマ ダイドコロの隅には、イモガマと呼ばれる深さ六尺くらいの穴が掘ってあり、冬の間ここでサツマイモを貯蔵していた。水田に水を張るとイモガマの中に水が浸み出してくるので、田植えの時期

には芋を出してしまった。後にはイモガマの内側をコンクリートで塗り固めるようになり、夏の間は桑の保存に使用した。イモガマの中に桑を保存する時は、中に竹箆を敷いて桑を入れ、板で蓋をした。

(上小出)

ワラタキ石 ダイドコロや母屋の軒下にはワラタキ石が置いてあった。ワラタキ石には油石と呼ばれるのめっこい(滑らかな)石を用い、この石を台にして糞を叩いた。ワラタキ石で叩いた糞は、縄をなったり、俵や蔴を作るのに使った。(亀泉)

中二階 中二階のある農家もあった。中二階は物置として使われていた。(亀泉)

二階 二階のある農家では、二階を蚕室として使用した。二階には仕切りが全くなく、上蔴期の蚕を二階に上げて飼育した。(小坂子)

### (三) 暖房器具

いろり 煙突はなし。家の中はススで真黒。火ばちを併用する場合もあった。(荒牧)

こたつ 昔のこたつは掘りごたつだった。こたつには矢倉が組んであり、その上から蒲団をかけて使った。こたつには、燃料として囲炉裏のおきを入れた。また、こたつにはナラやクヌギを焼いたカタ炭も使った。カタ炭は城東町の荒物屋から買って来た。第二次世界大戦頃からは煉炭も使うようになった。(亀泉)

あんか あんかには囲炉裏のおきを入れ、手足を暖めるのに使った。あんかは、火鉢を小型にしたような形のものが多かったが、猫の形をしたものもあった。(亀泉)

燃料 ヘツツイや囲炉裏の燃料には二十年くらい前までクワゼ(桑の枝)を使っていた。クワゼは、束にして母屋の壁のまわりに積んで

おくことが多かったが、クワゼ小屋を造つてその中に保存している家もあつた。なお、たきつけには松葉を使うことが多かった。(上小出)

囲炉裏やかまどの燃料には薪やクワゼ(桑の枝)を使った。これらの燃料は、家の壁のまわりに積んでおいた。キフク(木福)といつて、壁のまわりに沢山燃し木のある家が良の家だつた。麦播きが終わると、十一月から十二月にかけて、馬を連れて山へ燃し木を採りに行つた。

赤城の鍋割山の麓には北代田町の共有林が二十町くらいあつたので、そこへ出かけることが多かった。朝五時頃から弁当を持って出かけ、一日がかりで燃し木を集めて来た。(北代田)

カマドや囲炉裏で使う燃料のことはモシキと呼んだ。モシキは、馬を使つて赤城山の方まで採りに行つた。(田口)

囲炉裏やかまどの燃料は薪やクワゼ(桑の枝)などであつた。薪やクワゼは家の壁のまわりに束にして積んでおいた。家のまわりに薪やクワゼが沢山ある家ほどトクセイ(大尽)だといわれ、燃料の多い少ないはその家の経済状態を示すものとされた。(小坂子)

囲炉裏の燃料には、クズ(落葉)やナラ枝、クワゼ(桑の枝)などを使った。また、囲炉裏の火を強くしたい時には薪をくべた。松葉やナラツ葉などのクズは、近くの山林へ行つてかいて来た。ナラ枝も同様に近くの山からかいて来た。一方、薪は赤城山の方まで採りに行くことが多かった。薪を採りに行くのは主に十二月頃で、馬やリヤカーを引いて午前三時頃から赤城山に出かけた。昼までに六把くらいの生木を刈つて来ることができた。薪やクワゼなどの燃し木は、束にして母屋のまわりにたてかけておいた。なお、薪は山師から買うこともあつた。(亀泉)

昔はヘツツイの燃料に松葉を使ったので、冬になると赤城山の方まで松葉かきに行つた。かいた松葉は、馬につけて運んだ。風呂の湯を

沸かす時はクワデ(桑の枝)を燃した。ムシキ(燃料)は母屋のまわりに積んでおくのが普通で、ムシキが沢山あるほど大尽だといわれた。

(幸塚)

燃料には、松くず・しの・ワラ・クワゼ・薪などが使われた。松くずは、火をつけるときに使われた。クワゼは冬の燃料として使われた。

(五代)

今の金丸に七〇八軒の共有林があり、そこからもしきをとつてきた。鍋割の下で、大倉、寺沢、金丸の三ヶ所あつた。大八車か荷グラ馬でいった。馬ならもしきを六把つんできた。たきつけにするクズが多く、もやす時にはクズ→クワゼ→マキともやした。クワの根、杭など、何でもやした。星の出ている頃家を出ていき、帰つてくると、もう暗くなつていた。唐ぐわで地面を掘り、その中へ馬を入れると背が低くなり、つむのが楽だつた。しつかりしぼりつけておかないと、途中でひつかかつて、おちてしまうことがあつた。(片貝)

主に使われるのは、クワゼや松葉であり、竹なども使う。大尽の家では櫓などを使う。(嶺)

早朝、赤城山へ薪拾いに行つた。(関根)

もし木採り・草刈 もし木は、馬で赤城山へ取りに行つた。シノやマツ、マツボックリ等を拾つた。一升のマツボックリで、一升の米が炊けた。夏には、夏草を刈りに出た。夜のうちに、ヤキモチをもつて家を出る。刈つた草を使つて堆肥を作つた。(龍蔵寺)

燃料は、クワゼ、松葉、落葉、クワ根、薪などである。これらのもし木は冬に共有林のところにとりに行く。馬がいたときは四束ぐらいつけて、馬がいなくなつたら荷車で家まで運んできた。薪はほとんど

の家で買わなかつた。(下小出)  
○竹ははねるのでもすな。(下小出)



○松をもしておふるに入るとあたたまる（下小出）。

○竹をもしておふるは膚にしみる。（下小出）

クヅカキ 十二月の中旬頃になると、赤城山から松の枝や松葉をかいてきた。松の枝は燃し木として使い、松葉はたきつけにした。沢山かくときは、牛運送を使って運んだ。（上小出）

クワゼの利用法 クワゼは主に燃料にしたが、腐らせて肥料にすることもあった。第二次世界大戦中には、クワゼの皮をむいて供出したことがあった。このクワゼの皮からは、繊維をとって服を作っていた。（亀泉）

#### （四）井戸・風呂・便所など

井戸 昔の井戸は釣瓶井戸だった。竹竿の先に縄をつけ、その先に桶をつけたハネ釣瓶の井戸が多かった。正月十四日は縄ないの日といわれ、釣瓶に使う縄をなつた。井戸が深い場合は井戸車を使って釣瓶を上げ下げしたが、こういう井戸をクルマ井戸と呼んだ。なかには四丈二尺もある深い井戸もあった。井戸は大正末期頃からポンプ井戸にかわっていった。毎年四月頃には、何軒かで手伝い合つて井戸替えを行った。また、井戸には井戸神様が祀つてあり、毎年十二月十五日の屋敷祭りの日には切りはぎをとりかえた。（小坂子）

井戸の水の出が悪いので、人寄せする時は他の家からもらつてきた。地層がよくないという。（三俣）

昔の井戸は釣瓶井戸だった。竹竿の先に縄をつけて釣瓶を下げたものを、はね釣瓶といい、これが一般的だった。竹竿の反対側には重石がつけてあった。このほかにも、釣瓶を手でたぐり寄せるタグリや、釣瓶を滑車で引き上げる車井戸があった。井戸の内壁には石を積み上げてあった。釣瓶井戸は後にポンプ井戸にかわっていった。井戸の水

は、夏は冷たく、冬は湯気が出るほど温かいといわれた。井戸のそばには石の水槽があり、ここに水を汲み上げて流すと、竹樋を通つてオカッテの流しのそばの水がために水がたまる仕組みになっていた。上小出町の井戸はすべて個人もちのもので、共同井戸はなかった。毎年春には井戸替えを行い、釣瓶の縄も取り替えた。井戸には雨除けのため簡単な屋根が設けられていたが、その柱には神様の幣束が祀られていた。（上小出）

井戸は各家にあった。井戸の深さは一丈から一丈五尺くらいが普通であり、深いものでも二丈くらいであった。井戸には、ツリ井戸、車井戸、ポンプ井戸などがあった。井戸を掘る場合には、井戸掘りの技術をもっている人に頼み、近所の人にも手伝ってもらつて掘つた。三俣町には井戸掘り専門の職人がいた。井戸には、雨除けに簡単な小屋が設けてあり、その柱には井戸神様の幣束を祀っていた。幣束は毎年十二月三十日に付け替えた。なお、亀泉町では昭和初期に水道が引かれた。（亀泉）

昔は各家に井戸があった。幸塚町の井戸は、竹竿の先に縄で釣瓶を下げた釣瓶井戸が多かった。釣瓶井戸の多くは、深さ一丈くらいの割合浅い井戸だった。このほか、滑車で釣瓶を引き上げる車井戸もあった。毎年四月には、伍長組毎に井戸替えを行った。大正末期頃になるとポンプ井戸が普及し、さらに第二次世界大戦後には水道が引かれた。（幸塚）

昔の井戸は、竹棒の先に桶をつけて水を汲み上げる釣瓶井戸であった。しかし、川端町には井戸がほとんどなく、たいていの家庭では山から引いた清水を使っていた。また、川の水も飲用水に使った。川の「流れ水は三尺流れれば清まる」といわれていた。（川端）  
飲料水には井戸の水を用いた。井戸は釣瓶井戸だった。井戸のそば

には石舟があり、石舟に水を流すと、水は竹樋を通ってオカッテにある水ガメに溜まるようになっていた。洗い桶などには柄杓で水ガメから水を汲んで入れた。(田口)

井戸掘り 青柳は水の出ない所で、三丈掘ってもでない事が多かった。井戸から水がでないと、馬穴でもらい水をしたり、清水から運んだ。水は大事なので、洗たくのすすぎは極力節水し、風呂も毎晩はたてられないので人呼びをした。井戸掘で死者を出すような事故もあつた。

「井戸掘には蔵が一つたつ」、「青柳には嫁をくれるな」などと言つた。(青柳)

水は二丈八尺掘らないと出ない。「井戸を掘るか蔵をたてるか」と言われた。水の質は良く、「川原は美人が多い」と言つた。(川原)

井戸のつるべ縄(江戸つるべ) 恵比須講の日に共同で一年分のつるべ縄をなつた。縄は、三本でよつたものを三つよせ、一本に仕上げるため三人以上の頭数が必要だつた。また、井戸替えは水の枯れる二月に行つた。(川原)

井戸替 四月下旬から五月上旬に家の者だけで行ふ。(五代)

井戸替は三月に行い、長いしごで下まで降りてそうじをする。そうじの後は一かか二日は井戸が使えないので近所の家に水をもらいに行つた。(嶺)

井戸替えは、三々四月中頃にかけて行ふ。近所の人を頼んでやる。

井戸は三時間ぐらいおけば、その日のうちに使えた。(下小出)

もらい水 子どもが水おけをてんびん棒に下げて、井戸のある家に入った。つるべの縄をなう時は、もろう人がなかつた。(青柳)

水道 上小出町では、昭和二年から四年にかけて水道が引かれた。

(上小出)

風呂 据風呂を用いる家庭が多かつた。据風呂は台所に置かれることが多く、燃料には薪が用いられた。(端氣)

風呂は据風呂だつた。風呂の水は井戸から汲んだ。手桶を二つ使つて水を汲み、井戸と風呂を五回くらい往復すると風呂がいっぱいになつた。(小坂子)

風呂はウマヤのすぐ下にあつた。ゴエモンプロなので、都合で移動した。風呂の水は、子供が水入れ、火もしをした。使つた水は、朝かい出して、畑などへまいた。(小神明)

隣保班で、風呂を立てて、入つた。湯が立つたよと、子供がよびにまわつた。(三俣)

もらい風呂は、近所つきあいの一つで、近所の家の人に呼ばれたり、呼んだりした。また呼ばれた家で風呂の順を待つ間に、農作業の話や世間話などをする。(五代)

風呂の位置は、通常トボ口のそばかキジリの裏などである。しかし、夏の暑いときや養蚕のときは、表の軒下におき、外風呂にした。井戸の水は、井戸から汲み、三日間ぐらいはその水を使う。水を取り替へるときは、風呂の汚れた水を堆肥場に持つて行き、そこに捨てる。

(五代)

風呂に入るのはその家の嫁さんが一番最後だつた。六々九時頃まで入り、入浴順は特になかつた。水汲みは子供の仕事だつた。洗い場は、たらいの上になんかのこわれたものをおいたものや、竹を二つ割にしてしいたものだつた。何人も入るので最後は、醤油みたいな色の湯になり、あかもういていた。あるとき香集寺の住職が最後に入り、あかの浮いたしょうゆみたいな湯をすくつて飲んだ。(上小出)

だるまがまでわかしした。燃料はくわぜ、くわぜのない家ではくわぜをもらうために、くわこきの手伝をした。報酬はくわぜだつた。四々五

軒でもらい湯をした。(上小出)

風呂を沸かすときは、水汲みと火もしは、子供がする。湯がわくとあたりの四・五軒の家に連絡をする。十人以上の人たちが湯舟の中で体を洗うため、翌朝湯を見ると、ドブ水のように汚れている。風呂は、回り順で交替で立てて、お互いに招き合う。夏には湯桶を外に出し、外で風呂に入った。風呂は一つの社交の場を提供していた。正月三日は、毎日風呂をたてた。(北代田)

昔は、風呂を呼び合ったので、近所の人が風呂に入りに来た。体を洗う時は湯舟の中で洗ったので、湯が汚れた。最後に湯に入った人は垢をしょって出てきたものだった。(幸塚)

風呂の残り湯は、肥したまり場に持っていく、ワラの上にかけて、ワラをくさらせる。(下小出)

便所 便所は外便所になっていた。大小便は下肥として畑に埋めていた。(小坂子)

内便所のある家はほとんどなく、外便所だった。大便と小便に分かれていた。(小神明)

便所は、下肥を利用するため母屋の外に造られていた。便所には便所神様が祀られ、毎年十二月三十日には幣束をあげることになっていた。(上小出)

便所は、下肥を利用しやすいように、母屋の外に造られていた。便所には便所の神が祀られており、毎年十二月三十日には幣束が供えられた。(亀泉)

川棚 川の近くに住む人は、川に川棚を造っておいた。川棚は洗濯などができるように石を積んで造った棚で、すべて個人もちであった。川棚には川神様が祀られ、幣束を立ててあった。(上小出)

池 多くの家では、山から清水を引いて裏庭に池を造っていた。こ

の池では、食物や食器を洗った。池の中には鯉などを飼ってあるので、食器を洗った時に落ちた飯粒などは鯉の餌になった。毎年、春には年に一回の池の水替えをした。(川端)

排水 オカッテの流しで使った後の水は、カメにたまるようになっていた。カメがいっぱいになるとニナイでかっいで桑原(桑畑)へ捨てた。カメ一杯分の水がニナイ一杯分になった。風呂や洗濯場で使った水は、排水路で桑原へ流れるようになっていた。(小坂子)

下水のかい出しは、子供の仕事だった。(小神明)

##### (五) 照明・その他

あかり 実家の前橋では電気だったが、小神明の家ではガスとランプだった。ガスはカーバイトで作った。電気より明るかった。大正末頃に電気がついた。カーバイトは大八車をひいて買いに行った。買いくのが大変だったので、ランプを買いに、ランプのそうじが大変だった。鉛の配管が家中にあった。(小神明)

大正八年には、一軒に電気が一灯あるくらいで、ランプを併用していた。(片貝)

室内の照明には石油ランプを使った。夜間に外出する場合は提燈を持った。火種には、明治以前には火打ち石が使われていたが、その後はマッチが使われるようになった。なお、昭和初期頃には亀泉町に電気が引かれ、電燈が普及していった。(亀泉)

電気は大正十二年に共同発電によって使用されるようになったが、嶺町の中には大正五年に自家発電によって電気を使用した家もあった。このときの電気は弱く、松葉を燃したぐらいの光なので「松葉電気」とも呼ばれた。電気が使える前は、石油ランプを使い、オカッテやザシキに置いておいた。このランプはすすで黒くなるので、子ども

がそうじして使った。(嶺)

ランプ 普段の照明にはランプを使った。石油かんに三本くらいの油で一年間使えた。(小坂子)

大正末期に電気が通るまで石油ランプを使った。ランプのそうじは子どもの仕事であった。ランプは、オカッテに一つ置いただけであったが、養蚕期になると養蚕をしている部屋ごとにランプを置いた。

(五代)

電気がくる前、ランプが照明器具として用いられた。ランプは毎日磨かねばならなかった。ランプのガラスの口が小さいので、子供の手なら入ることから、ランプ磨きはもっぱら子供の仕事であった。

(北代田)

行燈 明治頃までは行燈を使っていた。火をつける時は火打ち石を使った。(上小出)

提燈 夜、外出する際には、提燈に火をつけたロウソクを入れて使った。(上小出)

トウスミ トウスミは燈籠の中に入れ、火をとますのに使った。

(江木)

ツケ木 ランプなどに火を移す時にはツケ木を使った。ツケ木は、薄い板切れの両端にイオウのついたもので、三つくらいに割って使った。大正の初め頃、よくツケ木売りがやってきた。(上小出)

電気 上小出町では、大正十一年に電気がついた。この年の十月十日には電気の点火祝いをした。(上小出)

大正八年四月、電気が来た。ランプのそうじが無くなってありがたと言った。どうしてこんなに明るいのか不思議だった。(荒牧)

大正末期に電気がきた。あまりにも電気が明るいので驚いた。

(北代田)

幸塚町では、大正十五年頃に電気が引かれた。(幸塚)  
ラジオ ラジオは、昭和十年頃から普及し始め、各家庭にも入り始めた。(北代田)

テレビ 以前は各家庭に普及しておらず、「一家に一台あればいいな」と思った。皇太子のご成婚は、みんなで見えた。(荒牧)

## (六) 建築工程と儀礼

地鎮祭 家を建てる前には、神主を頼んで地鎮祭をした。ムラに神官の資格をもった人がいたので、その人に頼んだ。地鎮祭の際には、地面に竹を四本立ててこれに注連縄を張り、サカキをあげた。(小坂子)  
家を建てる前に神官を頼んで地祭りを行った。敷地の真中に竹を四本立てて注連縄を張り、その中に御神酒、お頭つき、野菜、果物などの供物をして、神官に祝詞を上げてもらった。地祭りには施主とごく近い親戚が参加した。(上小出)

家を建てる前に神主を頼んで地鎮祭を行った。神主は、敷地のまわりの方からおはらいをはじめ、大黒柱を建てる場所には最後に特に念入りにおはらいをした。亀泉町では、大胡町の奈良原さんという人や、荻窪の青木さんという御獄さんを地鎮祭に頼むことが多かった。地鎮祭には親戚の人が集まり、おはらいの後には酒や御飯が振舞われた。神主にはお金を包むことになっていた。(亀泉)

地鎮祭のことを地まつりともいう。これには本家を呼び、神主を頼んで行く。このときの供え物は、丸い餅、オサゴ・イワシの頭付である。(五代)

水盛 母屋を建てる敷地に杭を打ち、水盛(水準器)を使って土地の高低を調べた。(上小出)

家屋の寸法 家屋の寸法の取り方には、本間とスロクがあった。本

間は一間を六尺二寸とする寸法の取り方で、スロクは一間を六尺とする寸法の取り方であった。(上小出)

**地づき** 家を建てる前の基礎工事として、地づきを行った。これは、柱を建てる部分の地面を固く平らにするために行うものであった。まず、地面に玉石を敷く。次に矢倉を組んで、その中心に綱をつけた太い心棒を立てる。そして、綱を引いたり弛めたりして心棒を上下させ、玉石を地面につき込んだ。地づきの作業の際には職人が中心となり、親戚や近所の人が手伝うのが普通だった。(小坂子)

柱を立てる前に地面を突き固める作業をサンヤラヅキ、またはジギョウといった。柱を立てる場所に溝を掘って玉石を並べ、その上を突き固めた。矢倉を組んで左右に綱をつけた大心棒を立て、綱を引いては大心棒を打ち込んだ。サンヤラヅキの時は親戚の人を頼み、両方の綱に七く八人ずつがついて「○○○○エンヤラー」と唄を歌いながら地面を突き固めた。真中で大心棒の操作をするのは職人の役目だった。(上小出)

**ジギョウ** 柱を建てる前に土方を頼んで地ならしをするが、この作業をエンヤラー、またはジギョウといった。ジギョウの際には大心棒で地面を突き、柱を建てる場所に石を敷いた。(亀泉)

**柱** 母屋の柱には四寸角のものを用いた。古い家の柱はチョウナ仕上げになつていた。(上小出)

**建前** サンヤラヅキが終わると、柱をのせるための栗の木の台を敷いた。この台をジチョウと呼んだ。柱にヌキ穴を掘ってジチョウの上を立て、梁を入れ、棟木を組んだ。(上小出)

柱を建て、棟木を上げると建前の祝いを行う。建前の際には、棟梁が幣束をあげ、家の四隅に酒をかけて祝詞をあげる。その後で、屋根または二階から四角形のグシ餅を投げる。また、この時には「八百八

十倍のタネ銭を投げる」と言つて銭も投げた。(小坂子)

ジギョウが終わると柱を建て、棟木を上げた。柱にする材木には番号がふつてあり、これに従つて柱を建てた。棟が上がると上棟式を行った。上棟式は棟の上で行い、施主と棟梁とごく近い親戚の者が棟に登つた。棟には酒と魚と七枚のグシ餅を供えた。棟梁は棟に幣束をあげ、酒を四隅に撒いて祝詞をあげた。その後で棟に登つた人達は一く二杯の酒を飲み、グシ餅やみかんや銭を棟の上から投げた。(亀泉)

棟が上がると建前の祝いをした。上棟式の際には、施主、大工、左官などが屋根に上がり、そこで棟梁が祝詞をあげた。そのあと、施主や近い親戚の家からホカイに入れてもつてきたグシ餅を、屋根の上から投げた。グシ餅は一合拵の大きさに合わせて切つたものだった。

(上小出)

親戚・近所の人を集めて行う。兄弟や肉親は、ホケイに四角のグシ餅を入れて来る(この餅をホケイ餅ともいう)。このグシ餅や頭付の魚、野菜・オサゴを主人が供え、その後主人が供え物を下にいる者に投げる。(五代)

**棟梁送り** 建前の終わった後には、大工その他の職人や親戚、近所の人達を招いて酒宴を行う。盛大に行う家では、酒宴を一週間も行うことがある。酒宴が終わると棟梁を家まで送つて行く。これを棟梁送りといい、キヤリをもち行列をつくつて棟梁を送つて行く。この時には、米一駄を車で引いて送ることもあった。(小坂子)

建前の晩には、隣り組の人や近い親戚をはじめ、大工、左官、トタシ屋、畳屋、建具屋などの職人を招いて祝宴を行った。祝宴の際には、お膳に赤飯、酒、うどんまたはソバを出した。また、三品といつて吸い物、煮魚、刺身を出し、このほかにグシ餅を五枚藁で縛つてお膳につけた。祝宴が終わると棟梁を家まで送つていった。(上小出)

上棟式のあとは、大工の棟梁をはじめ、職人や親戚、近所の人達を招いて酒宴を行った。酒宴のあとは、歌を唄いながら棟梁を家まで送って行った。この時、棟梁にはグシ餅五枚を藁で縛ってあげた。棟梁を家まで送って行くと、行った先でも酒宴を行った。(亀泉)

壁塗り 家の建築工程で最後の作業が壁塗りである。まず、柱の間に間柱を建て、さらに柱の間に鉋で割った竹を縄でからげて縦横に組む。この時に使う割竹をコメダケと呼び、竹を割る作業を「コメを割る」という。次に、田圃から土を採ってきて、その中にツタ(稲藁をきざんだもの)を入れ、よく踏んで壁土を作る。壁土は踏めば踏むほどきれいになるという。壁土ができたなら、組んだコメダケの上に塗っていく。一度塗った壁土が乾燥したらもう一度塗る。ここまでの作業は、近所の人が手伝って農家の人が行う。あとは左官屋に頼んで壁の上塗りをしてもらう。壁塗りの作業は冬季に行うことが多かった。

(小坂子)

壁塗りには荒壁、中塗り、仕上げの工程があった。まず、柱の間に間柱を入れ、そこに割竹を縦横に組んでいく。この作業をコメイカキといった。コメイカキのあとは、土をこねてその中に細かく切った藁を入れて壁土をつくる。この壁土の中に入れる藁を壁ツタ、または単にツタと呼んだ。こねた壁土を、組んだ割竹の上に塗ると荒壁ができた。ここまでの作業は、近所の人が手伝って施主や家族が行った。中塗り、仕上げは左官屋が行った。中塗りに使う壁土は、真土と砂を半々に入れたもので、これに槌で叩いた藁を加えて塗った。仕上げには漆喰を用い、白またはネズミ色に塗り上げた。(上小出)

屋根葺き 板屋根の場合は職人がすべて行った。クズ屋の場合は近所の人ワラを運んだり、屋根に投げ上げるなどして、職人を手伝った。(上小出)

クズ屋 上小出町には平屋のクズ屋が多かった。上小出町の八割くらいの家がクズ屋だった。クズ屋はたいてい小麦カラ(小麦藁)で葺き、カヤで葺くことはほとんどなかった。屋根材の小麦カラは、ニユウを作って保存しておいた。毎年、脱穀後の小麦カラを干して束にし、穂を上向きにして高さ三メートルくらいに積み上げ、ニユウにしておいた。屋根葺きは十一月から四月下旬頃までの間に行うことが多かった。屋根を葺く職人は越後からやって来た。小麦カラの束を一段積んでは縄をかけてとめ、屋根を葺いていった。小麦カラが足りない場合は近所で借りることもあった。小麦カラで葺いた屋根は七、八年に一度葺き替えるのが普通であったが、屋根の面積が広いほど傷みやすかった。このほか、ヨシで屋根を葺く家もあり、ヨシで葺いた屋根は五十年くらいもつといわれていた。(上小出)

亀泉町には平屋のクズ屋が多かった。母屋の屋根の形は寄棟型が普通であった。クズ屋は小麦藁で葺くのが普通で、葺き草(材料)にする小麦藁は干して物置などに積んで保存しておいた。屋根の葺き替えは、十一月から翌年の四月頃までの間に行うのが一般的で、屋根屋を頼んで葺き替えを行った。屋根屋は毎年越後からやって来た。屋根葺きの作業は家の者も手伝って行い、葺き草が足りない時は近所から小麦藁を分けてもらった。クズ屋は一度葺き替えると十年くらいもつた。

(亀泉)

屋根は、養蚕をするために、二階の使えないくずやが多くなかった。

(下小出)

カヤの屋根が五代の中で二、三軒しかなく、大部分が麦ワラの屋根であった。麦ワラは水はけが良く、また二、三十年は持つ。(五代)

農家の屋根は、茅葺きや藁葺きのものが多かった。茅葺き屋根は二十年に一度くらい葺き替えを必要とした。そして、その時には大量の

茅を必要とした。このため、ムラの中では各農家の葺き替えの順番が決まっております、ある一軒の農家で葺き替えが行われる時には、各農家で刈りためておいた茅を集めて使った。このような仕組は茅無尽と呼ばれ、大正末期頃まで行われていた。藁葺きの屋根には小麦藁が用いられており、七・八年に一度葺き替えを必要とした。一度に屋根全体を葺き替えるのは大変なので、一面ずつ葺き替えることが多かった。なお、茅葺きや藁葺きの屋根の葺き替えは屋根屋が行った。屋根屋は大胡町滝窪にいたが、新潟県からもよく来た。(小坂子)

田口町の農家の屋根は、麦藁屋根やカヤ葺屋根が多かった。麦藁屋根は小麦藁で葺いたもので、三十年から四十年くらいもった。カヤ葺屋根は五十年から六十年くらいもった。カヤ葺屋根の材料のカヤは、赤城山(中郷あたり)まで行って刈ってきた。屋根葺は越後から来た職人が行うことが多かった。このほか、栗の板や杉の板、杉の皮などで葺いた屋根もあった。また、大正七年頃からトタン屋根がみられるようになった。(田口)

板葺 上小出町には、数は多くないが板葺屋根の家もあった。屋根材の板はササ板と呼ばれ、栗や杉が用いられていた。特に栗の板は長持ちするといわれていた。板葺の屋根は、ササ板を釘で打つとめるトントン葺が多かった。また、ササ板を割竹でおさえ、その割竹を垂木に打ちつけるヒラ葺もみられた。物置小屋などの屋根には杉皮葺のものも多かったが、母屋には杉皮はあまり使われなかった。上小出町では大正初期頃からトタン葺の屋根が現われ、次第にクズ屋や板葺屋根にとって代わっていった。(上小出)

屋根がえ 下が茅で、上は小麦ワラでふく。二十年前にやったのが最後だった。秋で枯れたころ、茅を刈りにいった。六把で二、一〇〇円だから、一束で七、〇〇〇円近くになる。(小神明)

萱 赤城の鍋割の下に青柳の萱場があった。三人に一台のリヤカーの割合ではこんで来た。(青柳)

ヤウツリ 新しい家ができ上がると、よい日を選んでそこに移る。この日には、親戚の人や近所の人など世話になった人達を呼んで酒をふるまった。(小坂子)

家が出来上がると、大安の日をみはからい、家具を運び込んで移った。(上小出)

新しい家ができて、そこに入ることを家移りといった。家移りの日には、施主の兄弟などごく近い人達をよんだ。(亀泉)

新築祝い 家が出来上がると、隣保班の人や親戚家の建築に携わった職人を招いて新築祝いを行った。この日には、お膳にキンピラ、テンプラ、カライリ、野菜の煮物やネギヌタなどを出し、酒を振舞った。(上小出)

家ができて家移りが済むと、ごく近い親戚や大工の棟梁を招き、酒を振舞って祝った。(亀泉)

蔵造り 土が川原にはないので、荒牧から土を持って来た。カゴに入れて荷いで来た。蔵造りは村人の共同作業で、何年もかかった。(川原)

船津伝治平の家 今井福二郎さんの家は、船津伝治平さんの家を持ってきて再築した。全部の材木ではないという。(龍蔵寺)

## 第四章 生産・生業

### 一、農耕全般

#### (一) 耕地

開墾 町の裏の方で、戦後に多かった。大正十二〜三年ころよりはじまり、昭和十三〜四年ころは一冬で二反近くしたこともある。クズさらい↓木を切る↓開墾の順にした。今の勢多農の実習地の辺である。江原氏より土地を借り、戦後の開放後に分担で開墾した。松の木は松根油をとったり船を作るのに切った。松の根は割ってもし木にした。田には差があつて収量が違つた。畑は水ハケの良いところがとれた。開墾後はオカボがよくとれた。(上泉)

耕地 各戸の耕地面積が八反平均の頃、一町一反あつた。砂地なので雨つぶりでも仕事をした。(川原)

#### (二) 労働

生産の中心 米三分、麦三分、蚕四分で、野菜は自家用が中心であつた。(上泉)

土方 川の改修工事に十五銭で行つた。(上泉)

棒うち(ノゲをとる) 六十cmほどの大きい玉を馬でひき、大麦の上をゴロゴロとあるかせた。庭をハンドリをしながらまわらせた。馬のシヨンベンはコヤシの柄の長いものにとつた。その後ト〜ミでふいた。

ボウウチボウ 麦のボウウチはエイで協力してした。麦ウチうたをうたいながらした。(上泉)

諸職・夜ナベ仕事 縄は一晚に三ボー(二十ヒロが一ボー。一ヒロは手の広さ)山に行くくと三ボーで一ダもつてこれる。ワラジも作つた。(上泉)

夜なべ仕事 スルスヒキ(靱すり)をした。一日ひいても十俵が最高で、たわらあみもした。「居丈、立ち丈作れ」といわれ、背の高さになるだけ、チョウツパシラをあんだ。百俵から百五十俵分だから、二百から三百作つた。(片貝)

出かせぎ 土砂とりの仕事があつたが、弁当もちで行つても、道具が少なくて、働かせてもらえる人が少なく、遅い人は働かせてもらえなかつた。(端氣)

なわな いわらを、ひらべったい石でたたいて、やわらかくしてから、水をつけてあんだ。冬や、夜あそびの前に作つた。(端氣)

子供の仕事 子守り、馬の世話(草刈り)をして忙しかった。なまけてむちでたたかれたこともあつた。(端氣)

ワラ仕事のはじまり 一月二十日は恵比須講で、ワラ仕事の始まりの日でもある。

つるべ縄、わらじ、はやお縄(田植えに用いる)。しろ縄(まんがをつける)(青柳)



女の仕事 そばを上手に打てるのがいい嫁。畑の仕事、草むしり、夜は着物のつくり。知り合いの着物も縫った。(下細井)

はたおり 一戸に一台、道具があった。糸をそめており、嫁にやる布団も母親がおつて作った。上細井、青柳に染屋があった。(龍蔵寺)

男たちの仕事(春)

麦の手入

桑原の手入く肥料は、牛糞による堆肥を使用。

養蚕始まる

六十戸の農家のうち九十%は養蚕農家で、米、麦を中心にしていた。

田に水をひく河川の掘り下げ(桃木川・天神用水)

田植二、三軒の共同作業(龍蔵寺)

農閑期の副業 ワラを使ったワラ工品作業組合を結成。組合は、昭和十四、十五年頃まで続いた。縄を県へ出し、肥料を代金として受け取ったりもした。でき上った物は一ヶ所に集荷して出荷した。材料のワラが不足した際には、よその村のワラも買い取ってワラ製品を作った。時には、ナワナイ競技会があり、早く正確にナワをなうことをきそい合った。(龍蔵寺)

ワラ工品作業組合 昭和十年頃からでき、縄ないとむしろあみをした。多い時は三台の機械を使った。県下で一、二の組合になり、ワラを買って作るほどだった。その頃縄ない競技会が前橋公園で行われ一位は甲子園の全国大会に出た。長さと出来具合で、一時間で一玉をなつた。(龍蔵寺)

女の内職 くずマユで真綿作りをする。また、中マユを座繰でひいて糸にする。これらは現金収入を得られる。(龍蔵寺)

たき木ひろい 十二月から山へ行つて、桑せ・松葉・松枝・しのを集めた。朝七時ころから夕方四時ころまで仕事をした。六把で一駄だつ

た。しのは四把で一駄になった。ナタとナタガマを用意した。しぼるなわは夜なべで、一ボウを二つ用意した。一ボウは二十ひろにあたる。(龍蔵寺)

### (三) 用水・雨乞い

用水慣行 大正用水からの水。麦刈り後に出すので、のろい人がいとおくれた。(上泉)

水利 水は少なかつた。水ゲンカもあつた。夜水アゲに行くところ。チンをつけて見にきた。堰のはらいつこをした。今は大正用水からくる。(上泉)

寺沢用水 荻窪の寺沢のせきから引いた。深堀といつて一丈も深く掘つた。前田ぜきといつた。酒を持ってあいさつに行き、水をもらつた。おてんまが大変なので、コンクリートにした。春の彼岸から秋の彼岸までという契約で水をひいた。契約書にうたつてある。荻窪の人に来てもらうについて、江木で競馬をして、招待して厚遇した。競馬は、毎年開催した。馬は、大日沼のまわりをまわつた。(江木)

雨乞い 赤城神社と榛名神社に行つた。井戸がありビンに水もらつてきた。帰ると大雨、夕立があり、その雨で田植えをした。神社までは歩いて行つた。(上泉)

ひでり 水不足で、雨乞いを二回したことがある。神社に集まり、酒をのんでから沼で水をあびた。大正十三年のひでりの時は、沼の水がひけてしまった。一反三〜四俵きりとれなかつた。田植がおわるのと、沼の水がなくなるのと一緒だった。(江木)

### (四) 肥料

肥料 人糞を、元町などの町からもらつてきた。どの家から持つて

くるかは、決まっていた。(月に一度程度汲んだ)自分の家で取れた野菜を持って行き、人糞と交換した。馬に大きな桶オケを二ツつけ運んできて、家のコエダメに入れて腐らせ、農地にまいた。(龍蔵寺)

下肥 昔は肥料に下肥を使ったので、町まで歩いて下肥を汲みに行った。国領町や岩神町あたりの家をまわって汲むことが多かった。

大正七年頃からは荷車を引いて下肥を汲むようになった。下肥汲みは戦争中特に盛んで、群馬郡方面からも運送を使って大勢汲みに来ていた。

## (五) その他

一俵の基準 一俵の基準は、良い大麦なら四斗二升、普通の大麦は四斗三升。小麦は四斗。米は四斗。ソバが五斗。粳は八斗。(関根)

小作料 一反で三〜三、五俵。一反五畝で五俵。畑は金でおさめた。(上泉)

井戸掘り 昭和三年に井戸を掘ったが、一日朝から掘っても終らない。ブッコミという鉄管を入れても入らない、三丈掘っても出ず、また下げて出た。一日五回飯を出した。(青柳)

田植のときの食事 田植のときは、アサメシ、十時休み、ヒルメシ、コジョハン、ユウメシと五回食事をとる。十時休みはヤキモチを、コジョハンにはニギリメシやマンジュウを食べる。またユウメシには、ニシンやコブ・里芋・竹の子などを食べる。なおニシンは、「田植ニシン」といわれるほど田植のときの食事にはつきもので、このためにニシンを束で買っておく。(五代)

田の呼び名 シロツゲタ 苗代を作るときに堆肥を踏み込む田のこと

ハナレッタ ヒッコンダ 離れた所にある田のこと。(五代)

二ツアガリ 冬のうちに作っておいた俵と俵ツパシにモミをいれた。モミの八斗俵で一俵できた。(上泉)

アキアゲ アキアゲにはボタモチを作り、嫁はお客に行った。モミスリ後玄米は別にしまった。(上泉)

水車 九五軒で共同所有している。株のある人は一俵四百円でついている。他の人は倍額払う。今、七十軒のこっている。使わない人がぬけている。抜けても払いもどしはない。維持費の負担がふえて、自治会の補助でやっている。(片貝)

果樹 ナシ、桃などを作った。(川原)

川漁 昔、川の岸辺に水たまりになったところができて、そこに鮎がいるときには、手づかみでとったものだった。(上小出)

川木拾い 明治の末頃には、川岸に漂着した木を焚木・薪に使うために拾った。誰でも拾った者の所有に帰した。昭和二十二年には上小出あたりは水が出て、近くの部落には家ごと流されたところもあったが、上小出は浸水のみで済んだ。そのときも川木が多く流れ着いたが、拾った記憶はない。(上小出)

うなぎ針 どじょうを切って針につけ、夕方にかけておく。朝になると二〜三匹はかかっていた。けつこううなぎは食べた。夏がいちばんうまい。うなぎは肉の上に骨をのこさないようにさくのがむずかしい。かかつてすぐ死んだものはまずい。(端氣)

魚とり 網、ド、置き針でとった。(端氣)

ワラの利用 麦まきが終わった頃から、夜中まで男たちは、ワラを使って縄・ムシロ・カマス・オカイコのアミ・ワラゾーリ・馬のワラジ・人のワラジ等を作った。余ったワラでも捨てることはなく、利用していた。(龍蔵寺)

タニシ・ドジョウ・鯉 田んぼには、タニシやドジョウがたくさん

いた。また、田に鯉を放して除草の役目を果たさせた。一反の水田に三〇〇尾放した。田の所々には深みをつくって池とした。(北代田)

## 二、水 田

田植え 六月下旬、近所の二、三軒の共同作業で実施。係分担がしっかり決まっていた。

苗配り……………子供・女

親方……………肥料くれ・水回し

親方のムスコ……………マンガ押し

ハナドリ……………馬のハナを引っぱる子供

ストメ(植える人)……………女

ツナハリ(めやすのヒモをはる人)……………男(龍蔵寺)

水がないので、小坂子、嶺にため池があり交代でもらいに行き、上から田植えをした。途中の川ざらいをして、もらいに行つた。「御出張田植」という。上の植え付けを手つだいにいき、提燈をつけて見に行った。(端氣)

四月末から苗作りをした。縄なえの時は、神棚の飾りのワラを使った。田植頃は子供の頃聞いたことがある。今は思い出せない。田植は、手伝いに行つた時は、普通一日一人で五、六畝位だった。自分の田では一日一反植えたこともあるが、タバコを喫うひまもなかった。田植は結(えい)で行なつた。結は隣組のようなもので、三、四軒位だった。結の他は、親類が手伝いに来て行つた。田植の後はおさなぶりをした。おさなぶりは、飲食をし、皆で話などをした。個人的にはお神酒を神棚に供える者もあった。(龍蔵寺)

田植えは親戚、近所で一〇人位が集り行なつた。近所というのは「う

しろ前」で付合のある家で、エイガイシといって、近所の家を手伝つたりした。大人で一日五畝から七畝ぐらい平均植え、子供にも一日十錢、二十錢位のお金をやつた。(昭和の初め)米が一升二十五錢位だった。(上細井)

植える一時間前にはかいておき、その後テンガでならしておいた。七月になることが多く、早くなつて六月末になった。農休みが七月十三、四日にしても農休みにできず大変であった。市場の裏が少し高く遅かった。そこで用水と土提にカサアゲをして水がゆくようにした。しかし、上で二番草の時に下で田植えであった。植え方は、はじめよミツナは三さくずつ横にうえてさがつて行つた。五株ごとに四本ずつはさみ間に植えた。エイを作り、スケに行き、来てもらった。田植えうたをストメがうたつた。手がよく出た。朝・昼・夕ぐれとうたがあった。(上泉)

しほり水 田植えのとき干ばつになると、しほり水といって、田植えが終わると次の田へ水をまわすことがおこなわれた。区長が号令をかけて、七月十五日くらいまでかかつてやつたこともある。手くぼ水といって、苗の根元のくぼみにたまつた水くらい、残しておいてもいいといわれた。そんなときには、榛名や赤城に雨乞いに行つたものだった。(堤)

カマカケ サゲ穂をオカマ様に十二本かけた。(家による)オサナブリの前に水口から七本とつてきて神様にそなえた。(上泉)

オサナブリ マンガを床の間に置き、酒をかけて清めた。ユイの人を集めて酒をのんだ。(上泉)

田植の後はおサナブリと言って、手伝ってくれた人に酒肴を配つた。

(青柳)

田休み 七月十四日にほぼ決まっていた。フカシマンジュウを作り、

夜はウドンだった。(上泉)

**苗代** 昔はその田の苗はその田で作った。一反で一畝作った。種を水にひやしておき、田を小さく区切つてまいた。のちに交通の便のいいところにまとめた。(上泉)

**代掻き** 馬に押しマンガでした。十五〜六本つき。長さは二十五cmくらい。スキトリはハンドリが大変であった。二番ズキで水を入れて代掻きになった。代掻きを二回して、中代をして、植代を四回の合計七回した。朝三〜四時おきでした。子守りしたままハンドリしたこともある。井岡一家では四軒で共同田植をした。(上泉)

**肥料** 戦時中配給になり肥料がないので、町までタメくみに野菜を持つて行った。大八車で行った。のちに金になった。荷車で二駄引くのは大変である。フロの水もすてないでタメ場にすてた。(上泉)

**田草取** 手で取り三番草まで三回した。(上泉)

**田植えを忌む日** タツの日、稲がジャンボンのだんごのコナになるので。寺はタツの日に人をあつめてした。人足はあつまりやすかった。半夏の田植えをする家としない家とある。あまりよくないと言う。あまりとれない。(上泉)

**田植えの食事** コワメシを出した。十時、三時にはニギリメシとタクアンを出した。ふだんはヒキワリメシなのでよかった。(上泉)

**稲** センイチとかアイコクとかあった。センイチはワラ細工作り用。(上泉)

### 三、畑 作

**麦まき** 川原は水位が低く、土地がやせており、風も強いので麦まきの前に畑にワラを敷きさく、をきつて麦をまいた。(川原)

**稲刈りと麦蒔き** 十月中頃に稲刈りをした後麦蒔きをした。収穫祭のようなものは特別行わなかった。(龍蔵寺)

**麦まき肥** 小麦ワラをくさらせて牛馬がふむ。下肥を層にして積んでおき、トীগで切り、金肥をまけてピクでもつて行った。(上泉)

**小麦** サイタマなどがあつた。一反で六〜七俵とれた。戦前は穀屋へ。戦中は供出した。(上泉)

**陸稲** 開墾後の一〜二年は良くとれた。あとは雨によりでき悪しがある。田の半分とればよいほう、一反で五〜六俵はとれない。水田は一反八俵。「作リツケエシはダメ」と言った。(上泉)

**綿** 内田ヨウゾウさんが作つていたくらい。(龍蔵寺)

**作物** 米、麦、サツマイモ、ジャガイモ、ナス、キュウリ、玉ねぎ、大根、ソバ、小豆を作つた。(龍蔵寺)

### 四、山 樵

**炭焼き** 第二次世界大戦前、養蚕の時に使う木炭を共同で焼いたことがある。県からの技師の指導で、簡易製炭による黒消し(黒炭)を焼いた。畑に穴を掘つてその中に原木を並べ、煙突を立てて土窯を造つて焼いた。煙突から出る煙が目にしみなくなれば、炭が完全に焼けていた。

### 五、養 蚕

**埋薪法** 木炭の上にヤキヌカをかけた。ケブが出ないでむし焼きになる。七十〜七十二度になった。七十四〜五度では蚕によくなかった。

生業(養蚕)

(上泉)

八月「ナツゴ」……この家もあまりたくさんはしない。

九月「バンシユウ」九月二十日頃にはあがる。

十月下旬 稲刈・脱こく

〔金ごき〕を使用。やがて、「足ぶみ脱こく機」「電力原動機」を使用。

十一月 麦まき

十一月二十日のエビス講に間に合うように終わらせる。

五月 モミマキ始まる

カイコは小さい

六月 麦刈

カイコがあがる(仕事が重なって忙しい)

田植の準備

牛や馬で耕やす(龍蔵寺)

養蚕―製糸 年三回(春・夏・秋)やる。枝切りは、男の仕事。忙しい時には、寝床がなくて、カイコの間で寝ることもあった。カイコは、神さま。収穫の後には、大間々の貴船や沼田の迦葉山に自転車でお礼参りに行った。製糸工場は、碓氷社が龍蔵寺の前と東橋組との二ヶ所があり、糸は横浜へ出荷していた。(龍蔵寺)

碓氷社 碓氷社は、昭和十四、十五年に潰れた。女工さんが五十人。寄宿あるいは通いで勤めていた。一戸の家から、三人も女工を出している家もあった。(龍蔵寺)

自分の家のまゆを持って行って糸につむいだ。あちこちの家のまゆをまぜてひいた。(龍蔵寺)

養蚕 繭は年三回から四回取った。四回取る人は少なかった。七月

二十日〜二十三日頃に初秋を始める。上族はお盆前の八月十三日頃で、繭かきを行う。晩秋は八月二十七日から九月一日頃から始める。上族は九月二十四日頃で、十月二、三日頃に繭の出荷を行う。蚕種は県の試験場で買い、共同飼育場で飼育した。共同飼育場は人手がないので昨年閉鎖した。(龍蔵寺)

戦前は個人でやっていた。春は五月五〜十日から六月。温度の調節が大節であった。初秋は七〜八月で、あつさで戸を開放することもある。陽気で飼う。一軒百二十gのこともあった。今は十gで二万粒。晩秋は八月末のはきたてで、九月の彼岸のころにあがった。オシヤレという悪いカイコが出るが多かった。十貫目くらいとれた。若いころは一貫百五十円のこともあった。(上泉)

たねは塩原蚕種から買った。桑の種類はやまと、大島、ねずみ返し、赤城など。一年に三回飼った。春蚕夏蚕秋蚕七〜八〇から一〇〇gほどだった。春蚕は、肥料代等にあてるためほとんど収入にならなかった。まゆはマルトへ運んだ。代金は引きかえでもらえた。一七号線を通っていた。一七号線は馬車鉄道から電車へとかわった。前橋まで二銭五厘だった。(上小出)

養蚕農家 土地が砂質で桑に向いているので、養蚕農家が多かった。蚕種を扱っている家は番頭がいて、五人から十人の人を雇っていた。女の番頭もいた。繭は年三回から五回とった。(川原)

種屋 女衆が手伝いに行った。大黒様の近くの岩田家などへ行った。(堤)

関根には蚕種をつくる種屋があった。(関根)

蚕祝い 四眠祝いにはフカシマンジユウを作った。蚕があがるとモチをつき、嫁の実家にモチをついて送った。休んでこいということ。(上泉)

養蚕信仰 堤町に絹笠様(女の神様)があり毎年おまいりに行った。ザルなどをくれた。五料の大橋の北に伊勢崎市紫の稻含様か稻荷さまがあり養蚕道具を売っていた。五月一日が祭り。上沖の大黒様でも道具を売っていた。(上泉)

害 蚕は身上<sup>シシヨウ</sup>かけといい大変であった。浅間の噴火の灰で桑が黒くなりサオでおとした。これをくれると大きくならない。噴火はわりとあった。(上泉)

桑市 赤坂の市場で夜やった。売りたい人がよせた。切ってきて並べて一束いくらで売った。中身に小つぶちの変なものを入れて売ったこともある。重いのでよいと思つたら悪いのが入っていてガツカリしたこともある。桑は桑苗屋があり、新しい種は買ってきた。毎年買ってきて、こいで、また植えた。新しくないと葉の出が悪い。(上泉)

桑の仕立方 六尺×三尺、六尺×四尺(機械が入る)、三尺×一尺五寸。九尺×三尺にうえると大きい桑になる。間をあげれば大きくなるので総体の収量はかわらない。肥料は堆肥、金肥、タメをくれた。(上泉)

### 桑の品種

グンクカ——良い桑、葉が小さい。

オオダテ——モミジの型、葉は小さい。大正三年ころ。

ヤマト——小さい桑で三〜四cmの中。つんでいると手からもるほどで、一貫目つむのは大変であった。

ネズミガエシ

オオシマ——今は改良のオオシマになっている。やや丸い背の大きなもの。

トミエソウ、コクソク——大きな葉で初秋専門に使った。手早くとりやすいのでいそがしかった。

はじめはツメでつんだが、のち切ってきて家でこぐようになり、そのままくれるようになった。一貫目つんで一〜二錢こずかいもらった。賃づみはメカイで一貫二〜三錢。昭和三十年ころより切るようになった。(上泉)

繭の出荷 丸六製糸や交水社に入れた。見本を持って工場を回った。一等等か二等とかあり、いいわるいでは何割か差があった。見本と荷物がちがついて値引要求されて、足元をみられ三十〜五十円まけたこともある。クズは抜いておかないとミソをつけられて安くなるので良く抜いておいた。繭を百貫目出してリヤカーをもらった家もある。車は大八車からリヤカーになった。リヤカーは昭和はじめに入った。三貫十円のこともあり「イノシシ」と言った。工場の特約店があり買いに来たこともある。仲買いの人が来て買ってゆくが金をくれないう人もある。工場にいれたらもつてくると言った。値が良いとあぶない。工場でも金をくれず何度も行ったことがある。(上泉)

マブシ マブシは冬(正月中に)に一年分を作っておいた。(上泉)

桑摘み 五時おきで十二時までクワもぎをした。掃き立ては五mmくらいに切ってくれた。これは大きいとのぼつてこれないので。くれて回るとはじめの方はもう白くなっていることもある。(上泉)

蚕の病氣 空頭蚕——温度が高くていびいと出る。途中で死んでしまう。

ナダレ——黒くなりマユが黒くくさる。ニオイが手につく。ウミツコも同じ。

オシャレ——カビてしまう。軽くなり安くなった。シロコで固く軽くなる。焼かれてしまう。(上泉)

蚕室の準備 四月のしまいに大そうじをして、その時に障子に目ばりをした。座敷の中央に桑根などをくべていぶした。温度をもたせた。

炉は四角で三尺×九尺。いぶして空気の循環をさせた。養蚕火ばちも使った。炉はグレた炉だと火事の原因になることが多かった。(上泉)

蚕種 ニチボタエ。ニチボ (日本産) とシナ (支那) の交じり。ニチボタエはくびれ目が大きい。シナが多いシボタエはタマゴ型であった。紙に一がつけ。二十八の輪がワクセイになり十gであった。今はバラになっている。端気に四軒種屋があった。片貝、田口のイワタより売りに来たこともある。端気からは荒砥に売りに行った。(上泉)

## 六、家畜

貸し馬 馬を一日借りると、金で払わず、人間が二人で一日の労力で返す。あるいは、クズの麦を馬のエサにやって返した。(龍蔵寺)

バクロウ 馬を借りたり、貸したりの仲立ちをした。貸し馬というものもあった。(江木)

馬喰 売ったり交換もした。「おとなしい」とのふれこみでもハンドリにかみつきたがるのもいた。ウソを言わないと買ってくれない。(上泉)

馬の死 前橋の馬を焼くところに持って行った。(上泉)

馬市 大胡にあった。一頭を七十五円で購入した。荒砥川のむこうにあった。(上泉)

馬のワラジ 山にもし木をとりによく時にはかせたが、一回で切れた。(上泉)

馬のくせ たまげると止まる。耳のところを引き付けるとける。かじる。飼い主に似る。おとなしいのは使いものにならない。(上泉)

馬の手入れ 根グシでこすりアカをとった。いれておくとあばれるのでオヤマ (山) のほうで運動をさせた。(上泉)

馬の飼料 カイバはカイバ切りでワラを細かく切り、フスマとコヌカをまぜた。大麦のいたものをまぜた。また、赤城山で萩を刈ってきて軒につるっておき、ワラの間には萩の葉をまぜてくれた。(上泉)

馬屋 馬がいる家が多かったが、軍の徴発でとられた。三百五十円で売れ、福島まで再度買いに行ったがその値では買えなかった。馬はニセ (二歳) で買い、キンタマをぬいた。(上泉)

## 七、諸職

職人 大工、左官、桶屋、畳屋、屋根屋などの職人は、越後から来る人が多かった。正月になるとミノ笠を着けた越後の人達がぞろぞろと帰っていったものだった。そうした職人の中には、この土地に住みついた人もいた。

レンガ焼 今の公民館の前に小野里工業がやっていたレンガ工場があった。五百歩の広さがあった。いい土がとれたため。(三俣)

屋根ふき職人 青柳に小野沢たつきさんという新潟の人がいて仕事をしていた。(龍蔵寺)

龍蔵寺には、片貝ともう一人の二人の職人がいた。(龍蔵寺)

屋根葺の職人 青柳の雀神社の屋根替えの時、六人の職人が来て仕事をした。長沼ジヘイ、長沼キヨジ、小野沢タツジロウ (新潟から来た)、細貝セイマツ、狩野の親子 (北代田の人)。

一ヶ月かかってやった。(青柳)

## 第五章 交通・交易

### 一、交 通

米野街道(コメノミチ) 現在の大胡く渋川線。富士見村米野から大胡へ至る道で、県道になっている。村内では一番大きな道である。

(桂萱)

小坂子街道 前橋く小坂子↓日光方面へと向かう道。坂道があり、坂の上には松の木と一里塚があった。(下沖)

山街道 赤城く江木く木瀬へ至る道。山開きの時など赤城山へ行く時に利用した。昭和一二〜一三年頃の新しい道である。(荻窪)

タツミチ たての道、という意である。亀泉部落の真中を横切って、

新田塚から現在の霊園に至る道である。(荻窪)

三夜沢道路 赤城神社く三夜沢く滝窪く三保く前橋に至る道。

(荻窪)

産泰街道 産泰様へ通じている道。(堤)

橋 桃木川にかかる橋は、西からオオハシ、タケバシ(今のダイコクバシ)、タイホウバシの三つがあった。タケバシは、二本の木でつくられた幅1mくらいの木で、大黒様に行くのに通るので名称がダイコクバシとなった。桃木川は改修が行われるまで、よく氾濫を起こした。(下沖)

天神橋 天神様が近くにあるのでそう呼ぶ。(荻窪)



旧沼田街道 (荒牧町)

橋 洪水で橋が流されて、神社の杉の太木を橋木にした。(関根)  
自転車 種屋が羽振りがよかった七十年前前に、種屋の人が関根で始めて自転車に乗った。(関根)

旅行 青年会で日光東照宮へ行った。足尾を通って徒歩で行った。ゲートル巻いて、着物のすそをしりっぱしりにしたいでたちで行き、日光で一泊した。二日ほど土方に出て稼いだ金で旅行をしたものだった。(上泉)

淵 利根川の一本松という場所の淵が危険だった。(川原)

荷車 昔は荷車には税金がかかっていた。日露戦争の時には荷車の徴集が行われ、上小出町からも検査のために五十台の荷車が桐生へ運ばれた。大正時代には、道路が傷まないうように、荷車のワッパ(車輪)の幅も決められていた。

沼田街道 荒牧町の松並木に商家があった。「甘酒屋(加藤さん宅)などがあった。(荒牧)

渡船場 戦前まで吉岡村漆原と川原との間に渡しがあった。船主が交代で番をした。一人二銭から五銭まで船賃が変わった。漆原の観音さま



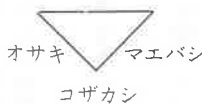
がお祭りの時は混んだ。(川原)

念仏橋 昭和二十二年までは石橋だったが、水害でこわれ「なあご用水」として改修した。こわれた石橋は不要になったので農道にかけた。近くに「念仏橋供養塔」があり「安永四年乙未三月吉日之を建つ」と記される。昔、この川で子供が水死することが多かった。(青柳)

自転車 教員の給料が二十八円の時百円した。(端氣)

交通機関 昭和四十年代から車が多くなった。それまでは、歩きか馬だった。自転車も少なかった。(端氣)

道しるべ 道と道の交差点に道しるべが立てられていた。下沖のカネツカにあった道しるべには



(三本辻)  
と書いてあった。



道しるべ (荒牧町)

荒牧神社の西の道は、旧沼田街道で、入り口に道しるべが立っている。(荒牧)

道普譜 毎年、春秋の二回、一戸一人出で道のくぼんだところに土を入れたりした。ま

た雪の日は、雪かきなどもした。場所によっては、青年団が春秋の彼岸の中日に道普譜を行った。

川さらい その地区に耕地をもっている人達が出て、春に必ず行っ

た。川のゴミをさらったり、周りの木を切ったりした。

堰 桃木川にかかるオオハシの上流にシヨジマゼキ(片貝堰)、タケバシの上流にシモオキゼキがあった。両方とも堰組合ができていた。(下沖)

堰普譜 堰に関係する部落の人達が出て行った。一年に一回、田植えの前に堰の手入れをする。また大水の時は、村中全員が出て補修を行った。

伊勢参り 講をつくり、金を積み立てる。順番で講金をつかって行ってくる。行く前にお飯屋をつくり、皆で水盃をくみかわして出掛けた。無事帰ってくると、お飯屋をとりこわし燃やして、下向祝いをする。殿様の休憩所 酒井のお殿様が、産泰におまいりに行く途中、上泉の都丸と富田の星野の二軒によってお茶をのんだ。(江木)

## 二、運 搬

### 運搬具

シヨイカゴ……草刈りに用いた。

ザ マ……メがつまり、外は粗いメのもの。

カイコカゴ

メカイ……主に桑をつんだ時に用いた。

シヨイコ……桑や稲を背中に背負う時に用いる。

テンピン……おけの中に下肥などを入れ運ぶ時に用いた。

ツノボウ……竹の先をとがらせて、稲、麦わらにつきさして運んだ。

人力車 大正く戦前にかけて使われていた。利用する人は、主に医者などであった。

大八車 明治頃、よく使われていた。稲、麦、米などの収穫物の運

搬に使った。

リヤカー 昭和になって四、五年頃に出回った。

牛車 大八車の小さいものに、牛をつかつてひかせた。

運送屋 荷車ひき、とも言った。商店に頼まれて、米や肥料などの荷物を運んだ。また、赤城で切った松の木を前橋の製材所へ運んだりした。

### 三、通 信

イイツギ 簡単な話は、家から家へ、口頭で順番に言い伝えていく。触れ番役 毎朝、区長宅へ「何かありませんか」と言い伝えることがあるかを聞きに行った。木の板に順番が書かれており、順番で触れ番がやってきた。(下沖)

アルキ 自治会組織の中で報酬をもらって、各家に連絡事を伝達する人がいた。(荻窪)

半鐘 火事、大水、強盗などの時、火の見やぐらにある鐘をついて知らせる。火事が近くの時は乱打、遠い所の時は三つ、また大水の時には二つ鳴らした。

ホラ貝 区長の家にある。区長が何か用事があって人を呼ぶ時、当番を呼ぶ時などに使った。

回覧板 戦時中くらいから回覧板が利用されるようになった。順番を決め、家から家へと回状する。

有線 昭和三九年頃、有線がはいった。

### 四、交 易

市 昭和初期、タイホウ橋の北に生産市場があった。毎日、農家がつくった農作物がせりにかけられた。前橋の八百屋がここへ買いに来た。(下沖)

大胡と市 大胡では年三回、桑市がたつた。農家は、余った桑をもつて行って売ったり、また足りない家は、そこへ桑を買いに行つた。また十月一七〜一八日には、荒砥川の河川敷に馬市がたつた。

#### 村に来た商人

飴屋 前橋日吉町からリヤカーをひいて「オーイ」と声をかけて飴を売りに来た。

醤油屋 前橋から、醤油を樽でかついで、計り売りで売りに来た。

納豆売り 昭和初期から、四角にあんだかごに納豆を入れて売りに来た。

来た。

干びよう売り 栃木県から、落花生も一緒に売りに来た。

葉売り 年二回程、富山、奈良県から女の人が葉売りに来た。

毒消売り 秋、収穫が終わった頃、越後から女の人が売りに来た。

屋根ふき 越後、信州の親方が弟子二〜三人をつれて毎年来た。

ザマシヨイ 背中にかごを背負い、神棚にあげるサカキを売りに来た。毎月一日と一五日、滝窪の女の人が来た。(下沖)

行商人 毒消し屋が売りに来た。(荻窪)

ちぢみ屋 反物を新瀉から売りに来た。できたばかりの着物はよそ

いきにして、古くなったものをふだん着にした。(三俣)

まんじゅう屋 坂東橋のたもとにまんじゅう屋があった。(関根)

絹市 前橋の市は4と9の日だった。農家の女性が座ぐりでひいた糸が売られた。糸買いが出て、そこで糸の売買があった。布も売りに出た。農家の女性が機を織ったものだった。糸市場は赤城県道の脇にあった。市立のときには、商人が10軒くらい出ていた。何軒も値を聞いて決めた。目方と質で決めた。明治末期までのこと。話者がおばあさんにつれていってもらい、帰りに大坂屋の大坂まんじゅうを買ってもらって食べた。組合製糸の金挽きが変わって市が終わった。(関根)

買物 前橋に行った。岩神の大甘堂、琴平町の越後屋、国領町、豎町通りなどが多かった。徒歩か自転車で行った。(川原)

市 農産物の市がたち、前橋から買いに来た。(川原)

赤坂に青物市場があった。トマトなどを出荷した。ナス・キュウリも出した。上泉大根という細身で長い、つけものに良い大根があった。町からも買いに来た。品評会にも出品し、一等を九回もとり献上した。戦時中はつけものにして軍隊に出した。会員が三十六〜七十人あり、百〜百五十本で一タル作った。「上泉理想大根」と言った。種をとり東京に出荷した。今もある。(上泉)

物売り 魚屋・油屋・小間物屋、越後から毒消し売り、金物屋、富山から薬売りなどが来た。また、麦まぎの前頃に、桶屋がきて桶の夕ガをはめたりした。(川原)

## 五、村に来た芸人

ゴゼ 正月に越後から三人一組でやって来た。三味線をひき、越後の歌をうたい、おさい銭をあげた。宿と呼ばれる家に泊まっていた。

三河万才・神楽・シシ舞い ともに正月に来て、芸をしていった。代わりにおさい銭や米などをやった。

シロタノブチカ 神主で一年に一度、秋の始めに村内の家々をまわり、家内安全、厄払いを祈願していった。宿があり四〜五日逗留して、各家では、お礼に米一升ほどあげた。(下沖)

### 村に来た人

○ゴゼー子供のころ。大正。新潟より来て近所の決まった家(田村、井岡の自家)にとまった。

(祭文かたり。

ジョールリ。

ナニワ節。

クズ屋根屋。新潟より来た。朝早く来た。一般はヒキワリメシでも米の飯をにたべさせた。江木に親方がいて決まって来た。(上泉)

## 第六章 信仰

### はじめに

「信仰」をめぐる民俗的世界は、伝統的な村落生活を営んできた人々の考え方や生き方を知るうえで、多くの興味深い資料を提供してくれる。ここでは、「信仰」伝承を、家の神仏と信仰、村の社寺と信仰、講と俗信の三つに分けて資料を掲げたが、豊かな伝承の一端を示し得たに過ぎない。

「家の神仏と信仰」では、家を基盤としてまつられる神仏をとりあげ、屋内神と仏壇、屋敷神の二項に分けて資料を提示した。屋内神のなかでは、ヘツツイにまつられているオカマサマにまつわる伝承が、家の神について考えるうえで興味深い素材を提供してくれる。とりわけ、「オカマサマの留守行」といって、他の神々が出雲へ出かけているあいだ、ひとり家で留守居をしているというのは、家の神の本来的な姿を暗示しているように思われてならない。屋敷神は、稲荷信仰の影響がきわめて強くみられ、屋敷稲荷と呼んでいるほどであるが、祭日や供物にはより本来的な姿が残されているように思う。供物としてのシトギやグシ餅の存在はもつと注目されてよいであろう。

「村の社寺と信仰」では、村の神仏をとりあげ、鎮守、寺院、小祠と堂の三項に分けて資料を掲げた。鎮守では、赤城神社が多くまつられていることが注目されるが、まつりのあり方などには赤城信仰の影

響はみられなくなっている。むしろ、まつりの日に灯籠を立て、子どもたちがお籠もりをするオクンチなどのあり方のなかに、鎮守をめぐる信仰の特色がにじみ出ている。寺院については資料が不十分で、まだ特色をつかめるまでになっておらず、今後の調査にまつところが大きい。小祠と堂は、資料が豊富で、地域の特色を示すものがみられる。田の神は、田植えのときに田の近くに祠を作つてまつる神で、群馬県では赤城山南麓に集中的にみられる。今回示した資料のほかに、大胡町と富士見村で知られているが、いずれもいわゆる谷戸田を耕作しているところである。しかも、標高が比較的高いところに集中しているのは、開田の歴史と深い関係があることを感じさせる。摩多利神は、もともと後戸にまつられる神で、おもに天台宗の寺院が管理していたといわれているが、おそらくこの地域に広まった背景には龍蔵寺などを拠点とした僧侶の活動があつたのであろう。現在、摩多利神は、流行病などをおさえる力をもつ神として信仰されており、仏教が土着していく過程で、神仏も民俗のなかに溶けこんでいった様相をうかがわせてくれる。

「講と俗信」では、村をこえて広まるものが予想されるような信仰をとりあげ、村内講、代参講と社寺参詣、山の信仰、百万遍、禁忌と呪術の五項に分けて資料を提示した。村内講としては庚申講や天神講、代参講としては三峰講や伊勢講がみられたが、とりわけ伊勢講をめぐる信仰には興味深いものが多い。山の信仰では、五月八日の赤城山登

拝が、地域の特色を示すものとして注目される。登拝が祖霊を迎える儀礼としての意味をもつことは早くから指摘されているが、それが遊びとしての性格をあわせもっていることも、今後十分に注目する必要があろうかと思う。百万遍は、仏教民俗として興味深いが、地域性をつかむまでには至らなかつた。禁忌と呪術は「民俗知識」とあわせ利用されたい。

(時枝 務)

## 一、家の神仏と信仰

### (一) 屋内神と仏壇

**神棚** ザシキにあり、天照皇太神と鎮守のお札をまつる。昔は、朝晩灯明をあげて拜んでいたが、最近はやほど信心深い人でもなければ、そのようなことはしなくなつた。毎月、オツイタチと十五日には赤飯をたいて供えたが、今は一日のみとなつた。(五代)

大神宮様をまつっている。正月九日に、前橋の市でダルマを買つて、神棚にまつる。毎年買いかえる。お札は鎮守神明宮と伊勢のお札とふたつある。(小神明)

吹竹で神棚をつくると、火事にならないといつて、昔は実際につくつたものだった。(小神明)

ザシキの天井近くにまつる。下には仏壇を配しており、神仏は近いものだといつている。神棚には、神社からくるお札のほか、前橋の市で買ってきたダルマをまつっていた。ダルマは養蚕に効験があるともいふ。(勝沢)

ザシキに大神宮様をまつる。お札は神社からくる。(嶺)

どこの家にも神棚があり、お札がまつられている。毎年、秋祭りの時に神社総代(今は自治会長)が注文をとり、小出神社・歳徳神・大

神宮様の三枚ひと組になつたお札を十二月に配るので、古いお札ととりかえる。(上小出)

新しい家はタンスの上でもいいから神をまつれという。大神宮様が中心。古いお札は燃やす。棟木にしぼりつけておくことと火事にならないともいふ。火伏せとか厄除けの意味がある。(上細井)

天照皇大神をまつてあり、毎月一日の朝おはらいをし、灯明・御神酒をあげた。うけたお札は何でも天照皇大神の後ろへまつた。

(青柳)

天照皇太神宮をまつっている。(荻窪)

**お札** 神主から区長にきて、区長が各戸に配布する。今は自治会長がやる。予約をとつておき、前金で、伊勢とオハライがセットになっている。(上細井)

**オタナ** 正月にはオタナを作つた。暮れの二十日頃に買い物に行き、魚などを買つてきてつるしておき、正月の二十日近くになつてから食べたものだった。(上泉)

**正月棚** ナカザシキに正月棚をつくる。供物は二升餅である。

**オカマ様** オカマ様はかまどの神で、オカマ様の留守行といつて、他の神が出雲へ行った時、この神だけは家にいて留守居をしているといふ。まつりは特にないが、正月にはしめ縄を張つた。(小坂子)

オカッテにまつている。初刈りの稲の穂を下げておき、のどに魚の骨が刺さつた時などになでるととれる。田植えがおわると、オサナブリといつて、水口のところからとつてきた苗を七株、よく洗つて箕に入れて四、三の配置でヘツツイの上に供える。戦後しばらくやつていたが、その後やらなくなつた。オカマ様は作の神だといふ。(小神明)

土間の柱にまつっていた。稲の穂を供え、一年中おいてあつたが、それのどをなでると、できものが直り、魚の骨などがとれるといふ

た。お松も飾っており、それでなくても、同じようなききめがあるといった。(嶺)

三本荒神様ともいう。オカツテの神であり、火伏せの神でもある。かまどのところにまつる。十二月六日は、オカマ様が留守居をする日だといって、ボタモチを供える。オカマ様は女性だといひ、女性のことをオカマ様と呼ぶこともあった。また、田植えの時、水口付近の苗を三本とつてきれいに洗って、白紙にのせて箕の中に供え、豊穰を祈った。オサナブリという。七本の苗をとつてきて、箕の中に四、三に並べて供える家もあった。別のザシキにごちそうを供えた。手伝つてくれた人を呼んだ。秋、初刈りの時、初穂をオカマ様に供えた。それは一年中とつておいたが、それでのどをなでると声がよくなるといった。

(五代)

イロリの神で、稲の穂をあげた。日は不明だがまつりがあつて供え物をした。小正月にもまゆ玉をあげたりした。オサナブリは知らない。

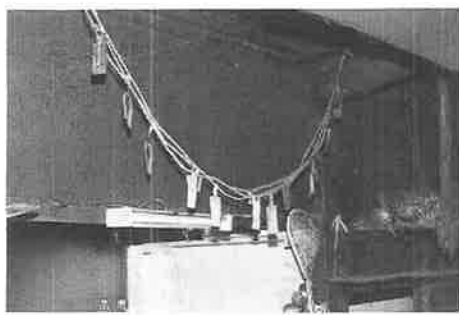
(上小出)

田植の後、田植えに使つた苗を洗つてカマドに供えた。

稲の収穫後、イネをひと握りオカマサマに供えた。イネは一年中(次の田植えで苗を供えるまで)さげておいた。

ノドになにかつまると、その穂でノドをさすると、つまつたものが下るといわれている。(龍蔵寺)

オカマサマの麦 麦の穂を下げておき、魚の骨などがのどにひつかか



オカマサマ (龍蔵寺町)

つたときになでると下がるという。(堤)

オカマサマ 十二月二八日に御幣をたてる。伊勢大麻といつしよに配られるものである。オサナブリのときに、水口の苗を七株ぬいて、根をよく洗い、箕の中に並べ、ごちそうとともにオカマサマに供えた。そのとき、マンガアライといひ、田植えなどに使つたマンガを洗つて、それにお神酒を供える。ごちそうは、赤飯とみがきニシン・じゃが芋・竹の子・なつごぼう・いんげんなどの煮しめが一般的だった。(堤)

オカマサマの稲 オカマサマのところに下げておいた稲で、のどにものがひつかつたときに、なでるととれた。(荻窪)

オカマサマ 田植えが終わると、お祝いに赤飯をたき、オサナブリをした。水口の苗を七本とつてきて、洗つて、箕の中に並べ、ヘツツイの所に供えた。オカマサマにあげるといった。オカマサマは火の神である。(荻窪)

オカマ神 オカツテの神。お正月にまつた。初刈りの麦、稲の穂を一株下げておいた。オサナブリのときモチ・ボタモチを供えた。

(関根)

釜神様 稲の初穂を下げておいた。大麦の穂も供えた。のどをなでると、骨がひつかかつてもとれるといった。一番しまいの一株をとつたものであるが、最初のものでいいという。オサナブリのときには、水口から苗を七株とつてきて、根を川で洗い、箕の中に四と三の割で並べ、ヘツツイに供えた。供物は「お神の鉢」に入れた。それは弁天通で売つていた。(上細井)

荒神様 オカツテにまつり、幣束を三本たてておき、毎年神主に切つてもらつてとりかえる。三宝荒神ともよび、根松を供えると六三除けになる。ねぎなど、くさい臭いのするものはイロリにくべてはいけな

いといわれ、もやすと荒神様がおこるといった。(嶺)

三本荒神 へつついに幣束を三本にぐらにさしてまつた。(関根)  
三宝荒神 かまどの神。お札がある。朝、小鉢に入れて供物を進ぜ  
る。ごはんの初あげである。ホトケさんにも進ぜる。(上細井)

ホド神 ホドの所でさつま芋をよく焼いたが、そこにいる神である。  
へつついの下の焚く所にいるという。(上細井)

エビス・大黒 正月二十日と十月二十日に、エビス講といって、巻  
きあげたすし・お頭つき・柿・金(古い金)・クマデ(ハキコムように  
というので、竹でつくる)・ケンチン汁を供えてまつる。(小神明)  
オカッテにまつる。正月と十月の二十日に、エビス講といって、エ  
ビス・大黒の像をちやぶ台の上におろしてまつる。ケンチン汁などを  
つくる。(嶺)

ザシキにまつっている。正月二十日が春のエビス講、十一月二十日  
が秋のエビス講である。エビスと大黒は親子であるという。エビス講  
には、棚から出して、麦飯のときには白いご飯と尾頭つきにヌツペを  
供え、試し棒といって竿ばかりを供えた。糸をやっていたので、商売  
繁昌を願うてのものであった。(上細井)

正月二十日と十一月二十日にエビス講がある。(荻窪)  
二十日エビスといって、正月二十日に俵を編み、その上にエビス・  
大黒をまつた。(荻窪)

十一月二十日と一月二十日がオイベス講で、エビスは一月に働らき  
に出て、十一月に帰ってくるという。エビスは留守にまつてもらおう  
神だという。神無月に他の神が帰ってくるとエビス様がいじめられる  
という。(関根)

エビス講 十二月二十日と一月二十日にまつる。供物を娘に食わせ  
ると娘が縁遠くなるという。(片貝)

便所神 生まれた子をつれて、三日目に便所まいをした。隣近所

を二、三軒おまいりした。幣束をたてたが、これといってまつること  
はなかった。(小神明)

便所には便所神がいる。お七夜には、子どもを抱いて、便所におま  
いりした。(上小出)

オソーデン様 馬の神でうまやにまつっていた。正月二十日に、土  
間の下の大黒柱にハヨウ縄を結えて、しめ縄のかわりにした。(嶺)

下大黒の柱に幣束を供える。(龍蔵寺)

馬小屋の柱(下大黒)に馬頭観音の幣束をあげる。(龍蔵寺)

井戸神 正月、若水を吸む時に、井戸げたに、オサゴと塩、それに  
酒を供えた。七月に井戸がえをおこなうが、その時は始める前に塩で  
清め、終わるとオサゴ・水・塩などを井戸の水が涸れないように祈っ  
て供えた。井戸を埋める時は、水をぬき、梅とヨシを入れ、息ができ  
るようにと節をぬいた竹をさしてから、埋めたものであった。拝み屋  
が指導してくれることもあった。(五代)

メケエができる、片目をみせると直るといふ。毎年、春に井戸が  
えをやり、はしごで降りて水をかきだした。井戸を埋める時は、全部  
埋めると息苦しくなるといふので、息竹を入れてから埋めた。  
(小神明)

井戸を掘るには、二丈八尺程掘り、石垣で積んだ。蔵をたてるか井  
戸をつくるか、と言われるほどの大仕事だった。つるべ縄を編むのは  
共同作業でやった。縄を三本よつたものを三本よつて編んだ。井戸神  
様は、エビス講のとき、御幣をまつり祀った。井戸がえといつて毎年  
二月頃井戸さらいをした。(川原)

井戸には井戸神がいる。(上小出)

幣束を正月にたてた。埋けるときは神主などに拝んでもらう。井戸  
の掃除は春初午の頃で、秋にはかまどの掃除をするが、それを「春は

井戸、秋はかまど」といったものである。井戸がえは夏で、中に入れて水をくみ出して、きれいに洗ったが、そのとき昔はミノ・ケデエをつけて入ったものであった。(上細井)

井戸神様には、正月にご幣束をあげ、小正月にはまゆ玉をあげ、川で死んだりしないように松飾りをする。(下小出)

キヌガサ様 蚕神様のこと。お札があった。ムラでもってきてくれるので、蚕室に貼っておく。(小神明)

#### 蚕の神。(五代)

女の人形を買ってきてまつると、蚕があたるといっているので、ヒナをまつた。「網笠大明神」という旗などをつけている人形もあり、喜んで買ったものであった。(上細井)

#### 掛軸を買ってきて飾った。(関根)

オシラサマ 小正月の十四日にマエ玉を作ったが、その中にオシラサマのマユ玉があった。オシラサマの掛軸をかけて、まつたが、二十年も昔のことである。(上細井)

仏壇 春秋の彼岸や盆にまつる。盆のときには、八月十三日に盆棚をこしらえ、盆送りはお墓へする。位牌はそのまま仏壇に入れておき、盆棚へはほとんど出さない。(上細井)

ザシキ・オカッテの神棚の下などにまつり、先祖様を供養した。(小神明)

## (二) 屋敷神

屋敷神様 どの家でも、家ごとに屋敷神様をまつっている。屋敷神様は稲荷様で、ふつうの稲荷様のほかに、坊主稲荷というのがある。祭日は、家によって異なるが、暮れの十五日とするものや二月初午とするものなどがある。ふつうの稲荷様では、暮れに赤飯と尾頭つきを

供えるが、坊主稲荷では赤飯・けんちん汁・すみ豆腐を供え、生臭さは遠慮する。それは、坊主稲荷が質素で、百姓の食物だけで十分だというからだといわれる。(小坂子)

屋敷稲荷 稲荷様を各戸の北西(乾)のすみにまつている。家によつては、屋敷神がふたつあり、稲荷様のほかに八幡様などをまつている。お宮は昔からわら宮だったが、戦後になって石宮が多くなった。稲荷様は主家の床よりも高くしてまつらねばいけないとされている。祭日は十二月で、一日や十五日が多い。豆腐・油あげ・赤飯・お頭つきを供える。お頭つきは稲荷様の眷属であるオトウカにやるために供える。供えるときにけつして後をふりかえつてはいけないといわれる。主屋が火事になったとき、稲荷様のわら宮・石宮に水をかけると燃えないといわれる。昔は、子どもが生まれたとき、稲荷様のところに名前を書いたこよりを置いておき、小さな子にひかせて、名前をつけたこともあった。わら宮は竹とわらで作るが、家によつては今でも祭日に先立つて作っている。貧乏すると、稲荷様が他所へ出るという。(五代)

屋敷の乾(北西)に稲荷様をまつる。祭日は十二月十五日で、かつては竹・ワラ・縄を用いてワラ宮をつくったが、今は大部分が石宮に変わっている。イワシ・豆腐・油揚げを供え、供えるときには後をふりかえつてはいけないという。ふりかえると犬みたいな姿がみえるので、絶対にふりかえるなというのだという。翌朝、供物がなくなつていとよいという。主家が火事になったとき、稲荷様に水をかけるとよい。稲荷様のところに、名前をかいたこよりを置いておき、幼ない子に引かせて、生まれた赤ん坊の名をつけることもあった。あまりやらなかった。(小神明)

屋敷稲荷の祭り 十二月十五日にやる。赤飯をたいて、豆腐・魚・



塩・おさごをお膳の上にあけて、稲荷に供える。供えておくと、自然に下った。犬が食べたり、子供がさげてまわった。上がったままはよくないという。昔は、ワラ葺きで、前日までに、縄をなつて仮宮を作った。(小神明)

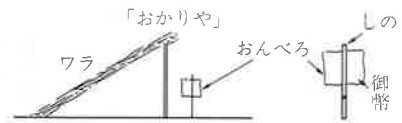
イナリマツリ 上げたものが下がったほうがいい。油揚げは、子供が待つていて下げた。(端氣)

屋敷稲荷 お稲荷様を乾の方向にまつている。お稲荷様は百姓の神だという。稲荷まつりは十月十五日や十一月二十三日で、家によって異なる。昔はワラ宮を毎年つくつたが、今は石宮になってしまい、特につくらなくなつた。竹で枠を組み、ワラを片流造に葺く。神主にご幣を切ってもらつて、ワラ宮の中にもつる。赤飯・イワシ・豆腐を供えるが、そのとき後をふりかえつてはいけないう。近くが火事の時、稲荷様に水をかけると火事がこないという。名づけの時、紙に名前をかいて、稲荷様にあげておき、その中からひいて名を決めたこともある。大神宮様でやつた家もあった。長子の場合、かたい家では、そのような方法で名づけをしたものだった。(上小出)

屋敷神様(お稲荷様) 十二月十五日は稲荷祭り。朝飯を食べてワラでお宮を一日がかりで作る。夕飯前に、赤飯・いわしを稲荷様に供える。「家内安全」等を祈願する。一人が提灯、おともが供え物をもつ。供えた後、後ろを振り向かない。翌朝、供え物に手がついていないと、「稲荷様があらだっている」といつて、進ぜなおした。(青柳)

稲荷祭りは十二月一日におこなつた。赤飯・さんま、豆腐を供えた。屋敷の西北に「お仮屋」を作り、お仮屋の前に篠と御幣で「おんべろ」を作つて飾り、赤飯と豆腐とさんまを供えた。

神社の石宮にもお供物をした。それを子供が取りに来た。今はお仮屋の代わりに石屋で石宮を買つて来る家もある。お稲荷様にまつわる



言い伝えとして、「家がつぶれる時、お稲荷様が陽なたに

出る。」というのがある。(川原)  
お稲荷祭り 十二月十五日におこなつた。屋敷の北西(乾)の方向にまつた。石宮もあるが木製のものもあつた。家格により正一位とかの格付けがあつた。コンコン様を買つて来て上げている家もあつた。赤飯とイワシを供えた。供えたら後を見てはいけなうとされていた。供え物は二時間位で犬とか猫が下げたが、下げないとはりあがないので、改めて供え直したこともある。

(龍蔵寺)

十二月一日は稲荷様祭りで、おこわをふかし、いわし・豆腐・けんちん汁を屋敷稲荷様と、市杵島神社裏の稲荷様に供えた。供えたら後ろを振りむいてはいけなう。供えたものが動いていないと二日の晩に進ぜなおした。動いていないと不吉のしらせと言つた。(川原)

稲荷様 どの家にも稲荷様(屋敷稲荷)がまつてあつた。十二月十五日には稲荷様にお頭付きが備られた。お頭付きを下げに行くのは子供の役目だった。下げてきたお頭付きは、年に何度も食べられるいごちそうだった。(北代田)

稲荷祭り 十一月二十三日(家によつては十二月十五日)には稲荷祭りをした。屋敷神様である稲荷様に、赤飯・御神酒・生のイワシ二匹を供えた。供えたものはネコなどが食べた方が「稲荷様が食べた」といつて喜んだ。(田口)

お稲荷様 家が経済的理由等で傾いてくると、「お稲荷様にヒナタバッコをさしちまつた」と言つた。(田口)

稲荷祭り 十一月二十三日か十二月十五日。稲荷様の注連を張り直す。稲荷様の家をワラと竹で作りがえる。稲荷様に豆腐・油揚げ・グ

シもち（もち米をすって手のひらでまるめたもの）・イワシを供える。供えた後は振り向かず帰ってくる。（日輪寺）

**屋敷神** 稲荷である。十二月四日にまつる家も、十二月十五日にまつる家もある。家によって違う。ワラ宮をつくったが、今は石宮になった家が多い。片屋根のもので、竹とワラでつくった。屋敷の乾のすみにつくった。赤飯をたいて、篠に紙をはさんだ幣を二本づつ納めた。A家では古墳の上にもまつているが、それは稲荷が高い方がいいからである。赤飯は家じゅうの他の神にもあげる。宮ができる棟上げをする。幣束を棟に立て（二本）、オシトギ（米をといで摺鉢ちでする）を紙の上にあげ、三ヶ所に供える。済むとろうそくを二本供える。また、紙を三枚下げ、自分で右縄になった縄で、しめをはる。A家では、供物は赤飯・イワシ二匹、B家では赤飯・イワシ・豆腐・ろうそくである。供物をあげたあと、一杯飲んで、あとをふり返らずに帰る。翌日、あげたままだとよくないので、やり直す。お稲荷様に水をかけたり、前で赤い腰巻をふると、火事があったときでも、主屋の火が消えるという。また、嫁にくると、まず最初に稲荷におまいりさせた。

（上細井）

**屋敷稲荷** 乾の隅にある。毎年、お仮屋のワラ宮をつくりかえる。竹の柱にワラを葺くが、竹の根元を下にして埋めこまねばいけない。石宮の家もある。A家では十二月十五日にまつる。昔、戦争に行つて、列車が横倒しになり、玉が腹に当たる寸前で服を貫通したが、運よく腹に当たらなかつた。十月十八日のことだつた。帰つてきてから稲荷をみると、稲荷が半分に割れていた。お稲荷様が身代りになってくれたのである。十二月十五日は稲荷祭り、赤飯・イワシ・尾頭つき・てんぶら・油揚げ・豆腐などを供えた。翌朝、見に行くと、赤飯もなく、イワシの頭が食べられていたものだつた。朝残つているとよくな

いといった。また、供え物をあげるときには後をふり返つてはならないといった。B家では戌の日にやる。稲荷祭りという。晩に、まだ日がわずかに出ている頃、主人が供物をもつていく。御幣と瀬戸のコンコンサマがまつられている。その日は夕食に赤飯を食べる。しめ縄をはる。キツネはと稲荷の化身だという。C家では、年に一回早くも遅くも、夜になつてもやらねばならないといつて、旧十一月十五日頃、かならずやるという。D家では午の日にやるが、ヒノエウマはだめだという。供物が残つていたときはまつり直す。分家すると、本家の稲荷の土を分けてもらい、稲荷をまつる所にまく。シンショが終えた家の稲荷は、その屋敷を相続した人がまつるものとされている。（堤）

**屋敷神** 太田家では八幡様をまつっている。旧九月十五日に、赤飯をふかして、神酒をあげる。他の家は稲荷様をまつっている。（萩窪）

**八幡様** 武の神様で、稲荷の隣りにまつつてある。稲荷と一緒にまつる。（小神明）

**蛇をまつる** お諏訪様らしいという。稲荷と一緒にまつつてある。（小神明）

**馬の神様** 馬の安全を願つてオソウゼン柱に水沢の神様の札を貼る。石山の馬頭観音に病氣のないようにおまいりに行く。そのとき絵馬を買つてきて、馬小屋においておいた。（下小出）

## 二、村の社寺と信仰

### （一） 鎮 守

**五代神社** 五代町の鎮守で、字大宮に鎮座する。かつては赤城神社といつたが、明治四十年に菅原神社・八坂神社・八幡宮（以上字天神鎮座）・厳島神社・菅原神社（以上字嶺久保鎮座）・思兼神社（字社口

鎮座)、琴平宮・熊野神社・大山祇神社(以上大字大宮鎮座)の九社を合祀したのを機に、五代神社と改称した。赤城神社は、本来、六本木家の氏神であったが、のちに村の神社となったと伝えられ、また三夜沢の赤城神社を分祀したものともいわれる。社地は、五代町のふたつの村組である北部と南部の境界にあたり、かつては四〇〇年もたつような松や杉の古木がうっそうと茂っていた。戦後、台風で木が倒れ、それ以後広場ようになった。

氏子は五代町の住民全員で、氏子入りはとくにない。

氏子総代は五人で、とくに任期はなく、適任者が推せんされて就任する。うち一人が代表となる。

社守は各伍組一人、計一六人おり、一年任期で、家順にまわる。社守はまつりの当番で、各戸から寄附を集める。一月・三月(一月と三月は神職の都合で日が変わるという)・八月一日・十月十九日がまつりで、神職が祝詞をあげる。終わってから宴会となる。

八月一日は疫病除けで、村境にお札をたてる。

秋の祭日は十月十九日(今は十五日。五・六年前に旧市内にあわせて十五日とした)で、神職が祝詞をあげ、各戸では赤飯をたいて祝った。神社へ赤飯をもって参詣し、ハンビツの中に供えて、すでに供えてある他の家の赤飯をオミゴクとしてもらって帰った。

祭りの日には、土俵を作つて、すもうをやつたことがあつた。道端で風呂をわかし、すもうをとつた者を入れ、参詣者に赤飯を配つた。また、舞台をつくつて、ワケエシが盆踊りや八木節をやつたこともあつた。いずれも、戦前のことである。

最近は、夏に、子ども会が中心となった子ども祭りがあり、樽御輿を男と女のふたつ出す。(五代)

神明宮 小神明町に鎮座しており、町全体でまつっている鎮守であ



小神明神社 (小神明町)

る。町全体が氏子で、氏子入りは特になく、住めば自然と氏子になる。維持費は区から出している。農地解放前には、神田があり、小作に出し、小作料を神社が徴集していた。

総代は各クルワに一人づつ、計四人いる。任期は決まっておらず、永年勤続となっている。適任者を推せん決めて。お札を配つたりするのが仕事である。

祭りは春秋ともにおこない、四月十六日と十月十六日が祭日である。いずれも、赤飯を各戸でたき、神社に灯籠をつけ、皆が参詣する。昔はヨイマチもあり、前日の晩、役員やワケエシが神社に泊まった。祭りの準備は、前日に当番がおこなう。

当番は、当番クルワといつて、祭典ごとに四つのクルワを順にまわる。その時順番にあつたクルワが当番となる。

昔は、祭りの時、親類の者がお客にきた。

そのほか、元始祭・大祓いなどの祭りがあがるが、それは神職がおこなうもので、ムラの者は総代を除いて参加しない。大祓いの時にはムラ境にお札をたてる。暮れのことである。明治時代には、祭りの時、ムラのワケエシが、神社のまわりの家に保管しておいた灯籠に、紙を貼つて、かますに入っていた灯明皿を出して、それに菜種油を注いで、夜になってから灯をともした。神宮寺の屋根に、富士の巻狩りのつくり物をこしらえたこともあつた。

小神明町の神明宮は金の幣束二本が御神体で、上沖町の大黒様は金の幣束一本を御神体としているが、もとはひとつで、上沖町の大黒様ももとは神明宮だったという。小神明町からわかれたのが上沖町のものだという。祭日は同じ日で、上沖町では大相撲をやったので、「小神明の大灯籠に上沖の大相撲」とよくいったものだという。その日は露店が出て賑やかだった。(小神明)

**神明宮の祭り** 灯籠をやる時、同じ日に上沖で相撲をした。露店がたくさん出た。(小神明)

**神明宮の御神体** 金の幣束が三本あった。一本を上沖の大黒様に持つていったので、二本になっている。(小神明)

**神明宮の祭り** 上沖、端氣、勝沢、小神明の青年がやった。芳賀の消防が応援に来て、詰めきりだった。親戚の人が来たりして、泊まりの客が多かった。女の人は世話で外へ出られなかった。(小神明)

寺が敷地の南にあり、寺の建物を利用して、富士山の飾りを作った。巻狩りの飾りものを作った。紙、ろうそくが、前橋からなくなるほどだった。(小神明)

明治二十四年にやったのが最後だったが、大変に賑かだった。飾り物の弁天様の灯籠があり、水車が回ると、ベルトで人形が動くようになっていた。滝があり、塚を作り、まわりが池になっていた。池のまわりを弁天が逃げ、大蛇が追いかけた。(小神明)

**灯籠小屋** 三間に四間の大きさの小屋が四棟あり、灯籠がしまつてあった。祭りになると出して、紙を貼って流した。灯りはナタネ油をもやした。(小神明)

**上沖の神明宮** 小神明の神明宮から分祀し、今は大黒様が併合されている。小神明には三体の金の御幣束があつて、向こうにやった。夜、上沖までむしろを敷いて運んだ。(小神明)

**諏訪神社** 大峰神社は神社合祀前には諏訪神社といつて、天明三年の浅間の噴火の時には霊験があつたので、領主からも信仰されたという。神体は蛇だといわれる。(嶺)

**小出神社** 江戸時代には正五位小出明神といつていたというが、通称は赤城神社で、豊城入彦命を祭神としてまつてきた。鎮座地の字は赤城というが、神社の名に由来するものだろうという。明治の末期に神社整理がおこなわれたが、そのときに霜川神社と諏訪神社が赤城神社に統合されて、小出神社が成立した。赤城神社は仁王皆戸・築場・天王などを氏子とし、霜川神社は中クルワ、諏訪神社は北クルワを氏子圏としてもつていた。神社は耕地整理前には今の公民館あたりにあつた。

例祭は、春が四月十五日、秋が十月十五日だった。最近には神主の都合などで変動がある。神主は赤城神社の神主が兼務している。昭和六十一年に御輿を買つたので、祭りに御輿を出すようになった。

祭りのあとは直会をかならず開く。費用は、神社の土地を貸している収益でまかない、氏子費は集めない。自治会からの援助をうけないで神社が維持できるわけで、南橋地区の一、二社の中でもそういうところは三社しかないという。

氏子は昭和三十年頃には七八戸だったが、今は一一〇戸にも達している。昔は氏子である家と氏子でない家の区分があつたが、今は住めば氏子として認めるようになった。



小出神社の立札 (上小出町)

神社の維持費は、水道局に養魚池を売った金の貯金、発電所に土地を貸している金などでまかなわれている。(上小出)

**細井神社** 上細非の赤城神社(祭神豊城入彦命)と、下細井の星宮神社(天御中主神)が明治四十二年に合併されて、細井神社ができた。もともと、明治三十八年に、赤城神社の名称は細井神社になっていた。祭日は四月十四・十五日、七月十五日(もと八坂神社のまつり)、十月十四・十五日(もと十月十九日、合併前のこと。オクンチという)である。(上細井)

**祭り** 四月十五日が細井神社の祭典で、神主を頼み、上二名・下一名の氏子総代、自治会役員(下は会長くらい)・団团长(老人会・婦人会・育成会・消防団など)が参列する。神主は淡島様からくる。

鳴り物はいけない。太鼓などたたいてはいけない。(上細井)

**秋祭り** 十月十五日が秋まつりで、もとは十月十九日にやったので、オクンチという。クルワごとに灯籠を奉納する。新田では昔赤城神社にとうろうをあげていたが、今は細井神社に奉納する。祭典費は、上細井は七分、下細井は三分、自治会で出す。下細井は灯籠をあげない。修繕費はやはり七分・三分で負担する。(上細井)

**八幡宮** 北代田の八幡宮の建物は、二百数十年前に建てられた。ワラ葺きで、応神天皇をまつる。四月十五日と十月十五日の祭礼には、以前は神楽が奉納された。神楽は、現在の公民館の位置にあったワラ葺きの大きな舞台で行われた。(北代田)

北代田の八幡宮は、小作地をもっていたため、そこからの「あがり」があった。その「あがり」から村人に貸付がされ、証文は現在も公民館に保管されている。借金の返済は、連帯責任が果され、コゲツキが出ないよう配慮されていた。(北代田)

**雀様** ハシカの神様なので、子供がハシカになるとお詣りをした。その他は大師様に行った。(龍蔵寺)

四月二十五日が大祭である。

子供のはしかを治す神といい、こんな伝承がある。

昔この近くを親子が通りかかった。子供がはしかにかかっていたので、ほこらを修復しいり、豆を供えた。親は一心不乱に祈って死んでしまったが子供のはしかはなおった。これを見た村人は神社をたてて、雀様として祭った。雀様という名は、村人がおさご(米)を供えたら雀がきたので、この名としたと言われている。(青柳)

春祭りは、四月二十五日で、雀様をまつた。ホウソウ・ハシカの神様。(青柳)

ハシカ予防の神様。四月二十五日がお祭りで子供を連れてお参りをした。(日輪寺)

青柳の雀様は、ハシカ、ホウソウの神様として有名だった。(青柳)

**神明宮の秋祭り** 十月十六日、子どもが宮に泊り込み、誰かが一番に赤飯を持ってくるまで待った。赤飯が来るまでは、相撲をとったりして遊んだ。太鼓をたたいたりもした。(龍蔵寺)

**秋祭り** 十月十五日に行った。村の鎮守様(神明宮)へ赤飯を供えた。

おこもりと言って、前日の夜から子供たちが社殿に泊って、太鼓などを一晩たいたりして過した。翌日の十月十五日に大人がお供物の赤飯を持って来て、その赤飯を子供たちに分けた。子供にとっては楽しい行事だった。(龍蔵寺)

十月十七日は市杵島神社の祭りだった。神社にのぼり二本立て、赤飯を炊いた。氏子総代、組長などで祭典を行った。神職は田口の代田から来た。塩原幸雄という人で、今は、赤城神社(天洞)の方に行つて

いる。神職は半日位いて、神事を行い、御神酒をふるまったりした。

(川原)

とうろう



灯籠祭り 九月十七日はオクンチで、各戸で

絵(景色)や字(御神燈・奉納)を書いた灯籠をたてた。現在は絶えた。(川原)

菅原神社 四月十五日・十月十五日に菅原神社にふとんを持って泊りに行った。また、奉画のためのお金をもらいに行った。「おこわもつてこい」という大きな声が真夜中頃になると聞こえた。夜、墓に肝だめしに行った。(日輪寺)

お籠り 春祭(四月十五日)と秋祭(十月十五日)の前夜、子供たちが神社に泊り込む。夜中まで、「ほうが(奉賀)くんな」「おこわもつてこい」と騒ぎ立てながら過ごす。赤飯などが届けられると、みんなで食べた。夜中には、相撲をしたり、肝試しをしたり、子供たちが大好きな年中行事の一つだった。(日輪寺)

赤城神社 大洞の赤城神社を分祀したもので、関根の鎮守である。明治の末期の神社合祀で天王様や薬師様が統合された。天王様の灯籠は神社の入口のところに移されている。もと萩原イツケの氏神だったという。村社になったときの基本財産には採石場も含まれていた。氏は関根町の住人で、氏子費を納めている。暮れに大神宮様・歳徳神のお札を申し込みした人に頒布する。氏子総代は三人で、推せんで選ぶ。任期は特になく、一生涯やっていることが多い。

祭りは春秋におこなう。春は四月十五日(もとは四月十九日)、秋は十月十五日(もとは十月十九日)に祭りをおこなう。昔は十九日だったが、南橋全体で十五日に統一した。祭りのときには神主が来て祈禱

した。昔は飴屋・風船屋・おでん屋などの露店商が出て賑わった。祭りはお祭り当番が世話をした。お祭り当番にあたった組は、組長一人・班長五人が中心になって準備に奔走した。招集は組長がした。祭りの前の晩には、ワカイシが社務所に詰めて、強飯を食べて、祭りの準備をした。強飯はお参りに来る人が持ってきた。ワカイシは旗杭のところのぼりを昭和初期までたてたが、けがした人があつてからたてなくなつた。お祭り当番は祭典ごとに変わる。当番は寄居・新道口・新田・片原・新町・広瀬西の順にまわる。寄居は一〇五班、新道口が六〇十班というようになっている。祈年祭、春の例祭、秋の例祭、神嘗祭の年四回の祭典ごとに順番に当番がまわる。(関根)

熊野神社 氏子総代は四人いる。任期は決まっていない。会計一人・代表一人がその中から選ばれる。区長経歴者など経験豊かな人がなることが多く、総会るとき推せんで決まる。(堤)

堤村は上泉から分村したが、その頃にまつられたという。境内に大木があつた。神社の基本財産の土地は農地解放でなくなつた。その基本財産は、神社を守るために、合併の危機にみまわれたとき、先々代の区長が寄附などをして作つた。雷電・サルダヒコ・地神・八幡・天神などが合併された。(堤)

オクンチ 十月。朝早く、競争で赤飯をあげに行った。子どもが泊っていて、飯台にあけると、子どもが食べた。子どもが食べた残りは買いとつてもらつた。(堤)

荻窪神社 もとは神明宮といったが、石尊様・秋葉様・八王子様・お諏訪様・天神様など一八社を合併して、荻窪神社になった。八王子様は八王子権現といった。お諏訪様は上と下の二ヶ所にあつた。(荻窪)

神明様 天照皇大神をまつっていた。(荻窪)  
オクンチ 十月十七日が荻窪神社の祭りで、オクンチとよんでいる。

合併後、西と東がいつしよにまつるようになった。十六日の晩に赤飯を各戸で神社に進げた。早くいく方がよいとされていた。子どもは灯笼を作り、晩になると灯りをもした。子どもは赤飯をもらって食べた。初まりりといって、誕生日をむかえた子が十六日の晩から翌日の早朝頃、おまいりにきた。(萩窪)

**神社の祭り** 萩窪神社の祭りは、四月十五日の秋葉様と、十月だった。十月には、灯笼つ子が泊りこんだ。各家から持つてきてくれた赤飯を食べた。(萩窪)

**諏訪神社** 十月十七日が祭りで、オクンチというが、今はそれに近い日曜日にやっている。屋台は四台ある。もとは一区・三区・四区だけにあつたが、今度新しく五区(太郎三)にもできた。太鼓・笛の囃子があり、昔は青年が屋台をひいて、ムラの決まった順路を練り歩いたが、今は子どもがひくように変わった。(上泉)

**氏子総代** 上細井から三人、下細井から一人選ぶ。任期はとくにない。自治会で決めて、会長が指名するが、他所からきた人にはできない。仕事は祭典や普請などのことである。会計が一人、責任役員が上下一人ずつ出る。(上細井)

小出神社の氏子総代は四人で、自治会長歴任者や重立で、農業をやっているような人がなる。築場・新道・北・中の各クルワから一人づつ計四人が選出される。(上小出)

**お神送り** 旧十月一日がお神送り、十月三十日が神迎えというが、片貝神社では、一年中いるといって、式をやっていない。(片貝)

**六所神社** 安永五年(一七七六)再建。本殿はその時のものか。もと、六所にあり二回焼けて現在地に移った。上杉以後の戦いで三回目焼けて現在に至っているという。(江木)

**神社参り** おたなあげまでは、神社・仏閣に行かない。また、百日

まで神社に行かないという。(小神明)

## (二) 寺 院

**神宮寺** 神明宮の、別当をしていた寺で、太平洋戦争の空襲で焼けた。茅葺の堂があつたが、無住だった。檀家はなかつた。(小神明)

**福德寺** もとは実相院と称した。個人の屋敷の中にあつた。小坂子の人が檀家である。(小坂子)

**大興寺** この地には古く薬王寺が所在したが、明治四年の火事で焼失し、松平侯時代の大興寺を移した。寺の北側は大興寺所有の墓地だが、他は共同墓地になっている。御神体は金の御幣束である。(川原)

**香集寺** 明治四十三年頃に本堂が焼けてしまった。区画整理に際して建てかえた。上小出に古くから居住している家はほとんど香集寺の檀家で、関口姓・中島姓の家がおもな檀家となっている。大正時代まで四月八日のお釈迦様の日に甘茶を参詣者にくれた。

天正八年の大水で寺が流れた。建長寺から大師がきて、そのときいつしよに相沢・高橋姓の先祖も来た。相沢姓は寺の北、高橋姓は寺の南に墓がある。住持は今の代で二八代になる。昔、沼田街道を殿様が通るとき、香集寺の屋根が見えると、駕籠からおりて歩き、見えなくなるとまた乗ったという。そのくらい格の高い寺だった。檀家は四三〇軒で、内一一五軒は上小出、八九軒は下小出、あと残りは各地に散在している。(上小出)

**龍蔵寺** お寺には小僧が五人位いて、農繁期には子供をあずかった。また、おぼけ小屋といって、窓がなく、いつも閉めきりで暗くて、他の部屋より一段と高くなっている部屋があつたが、別におぼけを見たという人はいない。(龍蔵寺)

**日輪寺** 嵯峨天皇が日輪寺を祈禱院朝天山鎮国密寺として建立し

た。

菅原神社と日輪寺は神仏混淆だった（日輪寺）

金剛寺 明治二年に焼けて、三十八年に建てた。（関根）

上泉寺 公民館のところにあった。八幡様もあった。（上泉）

寺院 上泉には玉泉寺（真言宗）・西林寺・宝禅寺（天台宗）・了覚寺（真宗）の四つの寺院がある。玉泉寺の檀家は上泉が中心で、全部で三〇〇軒以上ある。西林寺は中の寺と通称され、劍聖小泉伊勢守をまつっている。宝禅寺には、流行したことのある仏神様がまつられている。了覚寺は近年に旧市内から移ってきた。（上泉）

延寿庵 尼寺で、龍蔵寺の隠居寺といった。無住になってからは集会所として使った。（青柳）

庵 西に龍洞庵、東に相統庵がある。龍洞庵は神社のそばにあり、かつて念仏をやった。相統庵では、四月八日に、今でも念仏をやる。各戸二、〇〇〇円ずつ集める。（荻窪）

檀家 小神明町の家は、端気の善勝寺か、橋林寺の檀家となっている。大部分は善勝寺に属し、橋林寺は長岡・石原両姓のみである。善勝寺では、檀徒総代が小神明に二人おり、年に二回（夏と暮れ）、金を集める。総代は永年勤続である。葬式や年忌の時以外は、僧侶はこない。（小神明）

寺と檀家 五代町には寺がなく、大部分の家が端気町の善勝寺の檀家である。天理教と神道の信者は檀家に入っていない。檀徒総代は、北部と南部から一人ずつ、計二名選出され、寺の改装やら維持費の徴集にあたる。選出方法は推せん、檀家が集まって決めることになっているが、実際は自治会から依頼する。任期は決まっておらず、生涯やる人が多い。春の彼岸には、共同霊園の供養を、年忌の人の塔婆をたて、僧が読経しておこなう。維持会費は八月と十二月に檀家総代

が徴集する。（五代）

檀家 善勝寺の檀家になっている家がほとんどだが、長岡次男家は、前橋藩に仕えていて土着したとので、橋林寺の檀家になっている。

（小神明）

寺総代 四人いる。任期は二年である。（上小出）

檀那寺 長谷川・岡庭・斎田・小暮・大谷などは龍蔵寺、高橋・松本・粕川・金井・木暮などは善勝寺、シンタクや他所者は光運寺というように、主にイツケによって寺が決まっている。もともと、高橋のように龍蔵寺と善勝寺にまたがるイツケもあるが、だいたいはイツケごとにまとまっている。光運寺は龍蔵寺の院代が置かれていたという。元旦には寺へお包みをもって御年始に行く。三日は龍蔵寺の元三大師様のお札を受けに行き、門口などに貼っておくと厄除けになる。節分には厄除けの豆撒きがあり、盆にもお詣りする。善勝寺では一月十五日に護摩をたき、正月と盆にはお詣りする。寺世話人はいずれもいる。

（上細井）

初穂米 十二月に初穂米をお寺へ各戸一升ずつもっていった。

（五代）

お寺 お寺は、大胡の金蔵院（真言宗）になっている家が多い。町の半分くらいがそうになっている。斉藤、町田、北爪がそうである。金蔵院は、西迎寺、滝窪、荒口のお寺が合併してできた。建物は改装前までは、荒口にあった寺の建物を移して使っていた。荒口はそれっきり神葬祭になった。二之宮の無量寿寺に入った家もある。吉田と植栗は堀ノ下の正円寺、大島は満福寺、矢島は大胡の長善寺が檀那寺になっている。（江木）

庵室 東荻に相統庵、西荻に龍洞庵があり、玉蔵院末だったが、大胡の金蔵院に合併された。（荻窪）



### (三) 小祠と堂

小祠 上細井では、西堀グルワに西堀神社、端氣田グルワには三柱神社、新田グルワには赤城神社、天王グルワには熊野神社というように、クルワごとに小祠がまつられていたが、神社合併でほとんど昔日のおもかげをとどめていない。新田の赤城神社は、お昼前に、荷車に御神体をつけてもってきた。(上細井)

西窪のカミで石尊様、シモで薬師様、東荻の向山で観音、内出で天神様、原で神明様をまつっていた。(荻窪)

北代田町の各曲輪ごとの神様はつぎの通りである。

西曲輪……若宮八幡

上曲輪……お伊勢様

中屋敷……大黒天・猿田彦大神・二十二夜様

沼曲輪……薬師如来

鍛冶屋敷……秋葉様

祭礼は四月十五日・十月十五日以外の日を選んで行われた。(北代田)  
一区(西久保)には天王様がまつられ、昔は灯籠をつける祭りがあつた。二区(浪花)には赤城神社、三区(城)には大日様、四区(新地・出口)には千手観音、五区(太郎三)には阿弥陀をまつっている。

(上泉)

秋葉大権現 火伏せの神で、各クルワでまつっている。かつて、素封家の荻原十左衛門が、子どもが買った火縄銃を打ったところ、折からの強風にあおられて、小神明が大火につつまれたことがあり、それ以来、秋葉様をまつるようになった。明治時代に秋葉様を神明宮に合祀したことがあつたが、大火事が発生し、北クルワから火が出て、鳥取町や五代町の方まで火がのびた。それで、秋葉様の崇りだというの



秋葉様 (小明明町)

で、もとの鎮座地に戻した。

八月十七日が祭り、小さな灯籠をたてて、夜灯りをもした。火袋のところに紙を貼り、子どもが絵をかいた。

湯之気クルワでは、各伍長組から一人づつ計三人が当番に出て、祭りの準備をした。当番

は一年任期で、家順にまわった。

祭りの日には、太鼓をたたき、夕方から秋葉様の石祠のところに集まり、石祠の西の家をヤドにして宴会をする。最近は公民館を使うようになった。秋葉講といって、今でもやっている。(小神明)

秋葉様 火伏せの神で、西クルワでは、送り盆の時に灯籠をたてる。

(小神明)

石宮があつた。火伏せの札はオカッテに貼っておくとよいといった。(上小出)

火伏せの神で、秋葉三尺坊とも秋葉大権現ともいう。神社の奥の院に、白狐にのつた仏像があるという。(荻窪)

八坂神社の夏祭り 天王祭りといって、旧六月十九日だったが、今は七月十五・十六日頃になっている。キュウリをあげた。盆踊りと八木節をやった。(端氣)

天王祭り 七月十五日は天王様の祭り、竹を割って花をつけたホロジョンがでた。ホロジョンの竹を一本ずつ各戸に配った。天王グルワが中心になってやっている。厄除けになる。費用は各戸から集めた。当番が祭りの準備にあたった。端氣田では踊りをやる連中が熱心で、

八木節などを奉納した。(上細井)

天王様 築場クルワでまつっていた。神社整理で小出神社に合祀されたが、整理後も旧鎮座地でまつっていた。戦前まで七月に祭りがあったが、その後衰れた。(上小出)

八坂神社 宿東にあった。明治四十年、雀様に合祀。七月十四日(昭和二十九年)からは子供の夏休みの関係で八月十五日に変更になった。は、祭日で、「青柳のぎおんばやし祭」「青柳のねっこぎよん(ぎおん)」と呼ばれた。はやしは、昔はやぐるまばやしだったが今はさんてこばやしである。若衆三十五人が「ねっこだ、ねっこだ」といいながらかついだ。桑原の根っこを踏まないようにこういった。この神輿は松平大和守の本丸まで入ったことがある。(青柳)

天王様 七月十四日は天王様の祭日で、石灯籠に灯をともし、多くの小さな燈籠をつけた。しめ縄を道の傍に張って、それに灯籠を下げた。小さな灯籠は木の枠が箱状にこしらえてあって、それに紙を張ったもので、中に菜種油を注いだ灯明皿を入れて灯をともした。天王様の日には旗を入口のところに立てたが、その旗竿石が今も残っている。神主がきて祈禱をした。厄除けの祭りである。(関根)

八坂社ともいう。村全体でまつる。七月二十五日が祭日で、昔は灯籠をつけた。灯籠の火袋に紙をはり、色とりどりの絵具で、子どもが絵をかいた。とうろう三つに、それをつるす竹を、各人が用意して集まって、準備をすすめる。明治三〇年に疫病がはやって、龍洞庵と相続庵に病人を集め、死人が出るかと薪で燃した。それ以来、世良田から天王様を勧請し、村中でまつるようになった。二月十五日には、世良田の天王様へ代参に行く。毎年二人づつで、家順にまわるが、六十年に一度くらいしか順番がこない。(荻窪)

獅子まわし 七月二十七日に、江木町の南だけでやっている。八坂

様、天王様の祭りともいう。若い衆がやっていて、元は家の中までまわった。今は区長さんと、もう一人ぐらいが戸口でやるくらい。

八坂様を信心して、キュウリが作れない家がある。(江木)

石尊様 新田のカミとシモにひとつづつある。八月二十二日が祭りで、灯明をあげる。(上細井)

金井政十郎氏宅の向い側の路の角と小暮隆氏の向い側の道端にある。はやり病にきくと言われ、お盆の時にろうそくをたてる。(上細井) 地神様の石灯籠の所に、御幣をきって、ボンデンをたてた。「サンゲサンゲ大山石尊大権現」といって、しめを川の端に張り、水あびをした。川は今では側溝になってしまった。八月一日が石尊灯籠で、九組ある隣保ごとにもうそくを一本ずつもってきて、灯明をあげる。もとは四軒一組になってやった。明治七年には三三戸の小さなムラだったという。水あびは大川のほとりに、竹を二本たてて、しめを張り、ちょうど鳥居のような形にして、それに水をかけてやった。裸で水のかげっこをした。戦前まで、青年がやった。二五才まで青年であった。他所からきた人は三〇才まで。三〇才で養子にきても一年は青年に入らねばならなかった。(堤)

西窪のカミのクルワでまつっていた。七月に祭りがあった。(荻窪) 昔あったが、神社に合併された。(上泉)

お諏訪様 浄水場の近く、諏訪橋のあたりにあった。神社整理で合祀され、それ以後祭りはなくなった。(上小出)

上社が内出、下社が原にあった。その頃は毎年祭りがあったが、明治末期に合併されて以後絶えた。(荻窪)

椿の森稲荷 森の中に稲荷がまつられていた。その脇を八木川に沿って沼田街道が通っていた。(上小出)

高山塚の稲荷 大道寺の鎧を葬ったという。稲荷がまつられていた。

神社の稲荷がそれだろうかという。(堤)

八幡様 鳥居だけ旧鎮座地に残して、本体は嶺神社に合併された。崇る神で、動かそうとした人が病気になった。天沼にあった。疱瘡にかかるとおまいりした。(嶺)

角田イツケでまつっている。まわり番でなく宿が決まっています、会食をした。(端氣)

灯籠をあげた。大灯籠を祠にあげ、大門に小さいのをあげた。秋祭りのとき、いっしょにやったものであった。(堤)

高橋イツケでまつっていた。(関根)

八柱神社 東荻全体でまつっていた。八体まつってあった。(荻窪)

四月十七日がおまつりで、西窪でまつっていた。(荻窪)

天神様 五代町の北部(村組)でまつる神で、かつてはうつそうと茂る森の中にあつたが、神社合併によって合祀された。旧三月二十五日が祭日で、神職に拜んでもらい、子どもにお菓子を配った。そのあとで、宴会をした。祭りは神社合併を境におこなわれなくなった。氏は北部の住人全員で、当番が決まっています、順番で務め、祭りをとりしきった。(五代)

八幡様といっしょに、天神様にも灯籠をあげた。(堤)

菅原神社(天神様) 明治四十年に青柳神明宮に合祀されるまで今の南橋中の西にあつた。南橋中の北側は荒牧天神、南側は青柳天神と呼ばれていた。(青柳)

灯籠祭り 子どもたちが一銭くらいもらって紙などを買い、社日講・オクンチ・葉師・十五夜などに灯籠を作ったという。(堤)

神明様 もとは上細井にあつた。神明という所が西神明・東神明に分かれて、計五反ほどヤマになっていた土地がある。松の木があつた。現在、龍蔵寺へ移された。(上細井)

霜川神社 霜川様と呼んだ。神社整理で小出神社に合祀され、その

あとのヤシキは桑畑になり、個人に解放された。祭りは小出神社といっしょにおこなうようになったため、それ以前の祭りについてはよくわからない。合祀のとき、霜川神社の神体を、夜中の丑三ツ時に笛を吹きながら移したという。(上小出)

雷電様 雷の神(堤)

市杵島神社 市杵島姫命を祀る。神社合祀の時に村社となった。水神。(川原)

市杵島神社 夜泣きに効くと言われ、豆腐や七色菓子を供えて願かけをした。(川原)

イワシボトケ イワシ塚にある。イワシ屋が殺されて、有金をとられた。その場所に塚を作って供養した。(荻窪)

大神宮様 昔、大神宮様の祠があつたが、明治の末頃に合祀された。(上泉)

金毘羅様 四国から勧請したと伝えられ、桃の木川のほとりにあつた。合併された。(上泉)

山の神 正月六日まで山へ入ってはいけない。六日にモチをもっていき、山の神の石碑のところまで焼いてくるが、それから仕事をしてもいいといった山始めといった。山の神は女だという。(荻窪)

大宮様 宿西にあつた。子供の夜泣きの神様でこん言われがある。「貧乏だが信心深い夫婦があつた。子どもが夜泣きで困っていた。あゝ、神様が現れて子供の頭をなでた。すると夜泣きがなおった。夫婦は灯明をあげ卵を供えた。その後、夜泣きの家に神様が現れるようになった。そこで最初の家に宮を建てた。これが大宮様である。」昔、この地域で開墾中に白蛇が出た。村人は神の使いだとして卵をあげた。

(青柳)

お十二様 ねずスパーの前にあった。字十二という所。昔は山林だった。根岸家の鎮守である。(関根)

広瀬西の十二様は、森の中に木宮に覆われた石宮がまつられている。もとは浅間の焼石の上にあった。三角点になっている。(関根)

木福様 五代町の南部(村組)でまつる神であったが、神社合併後、北部(村組)でまつる神がなくなったので、全村をあげてまつるようになった。本尊は板碑で、その前が石畳になっている。きわめて荒い神であるといわれ、かつて賽銭箱を奉納したら伝染病がはやったことがあった。祠もないが、それはかつて燃やされたためであるという。境内地は二反歩以上もあったが、耕地整理で狭くなった。

祭日は旧十月十四日で、神職が来て拜み、当番がお札を配る。お札の売り上げは神社の維持費となる。戦前には参拝者がきわめて多く、東は粕川村・西は富士見村・南は上川淵・下川淵あたりからもたくさんの人が来た。参拝者は賽銭やゴマダンゴをワラツトに入れたものをあげたが、それを子どもが石畳のところできりこした。参拝者も子どもにとられないように、遠くへ投げたものであった。ゴマダンゴというのは、黒いゴマをまぶした団子で、木福様の祭りにはかならず供えたものである。

かつては、この日には露店が多く出て賑わったが、戦後すたれた。青年会でも、ゴマダンゴやまんじゅうを売る店を出した。各家では、赤飯をふかし、親戚を呼んだ。赤飯は木福様にも供えた。(五代)

福守様 木福様の境内には福守様があり、戦前には花柳病に効くというのではやり、前橋町から芸妓や娼婦が人力車でおまわりしてきた。法華行者が福守様の神体として石棒を奉納した。ふだんは地中に埋めておき、祭りの時に掘り出す。祭りは木福様と同じ時である。(五代)

四月二十八日が福守様のお祭りで、昔は赤鳥居がいくつもあって芸

者がたくさんお参りにきた。福守様は子宝の神様で自分で作ってお供えした。(田口)

シャクジ様 石神で、田んぼの中の径一〇メートル、高さ三メートルほどの塚の上にあった。とくに祈願するようなことはなかった。

エボ神様 湯之気グルワにある。もとは鳥居もあり、道路から参道がついていたが、今は畑の中になってしまった。まん中に凹みのある石で、願をかけるとエボなどが治る。病気にも効験があり、一時盛った。どこの医者へ行っても治らなかった病気が、エボ神様に祈っただけで治ったという。直ると、竹筒に水や酒を入れて、地面にさして供えた。エボ神様は崇めることもあり、この石をどかさうとした者が、交通事故で死んだというような事件もあった。(小神明)

庚申様 土橋のたもとに庚申塔がまつられていた。サルダヒコのことと、道路の傍にまつられる交通安全の神であった。庚申様のあった土橋の付近で、川に落ちた人があったが、けがひとつなく助かった。(五代)

道祖神 道祖神は道の神で、辻などに石像がまつられている。足が痛んだ時など、線香を立てて祈れば、治るといふ。(小坂子)

地蔵の下を掘ったら出てきた。(萩窪)

田の神 今から五十年前までは、田んぼにも田の神様として藁宮を作った。(鳥取)

正月に藁宮をこしらえて、田植えの前に挿んで、終わるとお赤飯を進げた。田の神は五穀豊穡の神で、いわば稲荷様みたいなものであるという。一家で一社ずつ、広い土地のある田んぼの畦などに作った。毎年、竹で枠を組み立て、藁を葺いた。田の神は天に登るといふ。

(萩窪)

子どもの頃、田の神様ということを親がいった。小正月のニワトコのツクリモノを水口に立てた。(上小出)

カユカキボウ 小正月に作ったカユカキボウ(ニワトコ)の木を棒状に切り、上部に十文字の割目をつけたものを、正月、十文字のところに十五日粥か餅をはさんでおき、それを田植えの時水口に近いクロに立てた。それを田の神様に供えるといったが、祠をつくるようなこととはなかった。(五代)

掃木松 蚕神がいるというので、蚕のネズミ除けに願をかけた。絹笠様といったかもしれない。一時盛ったが、その後あまりまつられなくなつた。(嶺)

蚕の神様 アヤトリ稲荷の石祠が日枝神社の境内にある。木のほこらだったが、一度つぶれて、石で作直した。(端氣)

絹笠様 四月十五日が春祭りで、そのときにまつた。区長が養蚕神としてまつたものである。共同蚕室を作つたりした区長なので養蚕に熱心にとりくんだのである。まつりの福引きでは、掃立ての羽根・ハシ・蚕座紙・ヌカブルー・箕・亀の子ダワシなどが当たつた。絹笠様で当たつた蚕具を使うと蚕が当たるといふので近郷近在から人が集まつた。福引き代は最初二銭、しまいには一〇銭くらいだった。お札も出した。共同稚蚕飼育所が昭和四十六年頃の構造改善でできてからおこなわなくなつた。昔はマイ玉を作つて絹笠様に進げた。お重に入れた進げた。大きな入れ物にあげて、それをオミゴクとして、お札といっしょに配つた。もらつたマイ玉は各戸で食べる。マイ玉は、昔は、班長に分け、それを隣保に分けるといふふうに行つていた。祭りに参加するのは今は役員だけで、神主がきて拜む。お札は、昔は版木を刷り、各戸で請けていつて神棚にあげた。宮司は北爪氏が務める。絹笠様がおわると春蚕が始まる。(堤)

昔あつたが、諏訪神社に合併された。(上泉)

とうりゆう様 公田にある。足が悪い人が、わらじを奉納して祈願すれば、すぐに治るといふ。(嶺)

地藏堂 本尊は一寸八分の黄金仏といひ、七月と八月の二十二日が祭日である。ムラの老人が念仏を唱える。明治の初め頃、福徳寺へ地藏を移したところ、コレラがはやり、多くのムラ人が死んだので、再びもとのところでもつるようになった。(小坂子)

子育て地藏 西原にある。赤ん坊が生まれると、この地藏の腹かけを借りてきて、その子にかけると丈夫に育つという。一年たつと、新しいのを二枚つくつて奉納した。十二にもある。日を限つて、願をかけ、治ると赤飯をあげる。(小坂子)

請地にある。子どもが病気になるに祈願し、治るとよだれかけをかけてやる。(嶺)

子育て地藏のお屋敷は転々としている。この地藏に願をかけて成就したときは、よだれかけをあげたり、木の地藏を彫つてもらつてあげたりする。(鳥取)

地藏 昔、越後のちりめん問屋の手代が殺されて、金をとられた。その供養のため、そこに地藏をまつた。(上小出)

地藏様 子供の病氣予防を祈願し、供養のために始められたのが「なんまいだんぼ」である。七月十五日に桐の枝に焼き火箸を入れて作った数珠を持って、村の各戸を「ちようちん持つて出てくんない」といひながら、二、三十人の男の子がまわる。衣裳は白いシャツ・白いパンツ・白いズック・白いはちまきをつける。

夜青柳と日輪寺の境に捨てに行き、また拾ってくる。最高年齢の子どもが「なんまいだんぼ、そらまめだんぼ」と親方になって、かけ声をかける。(日輪寺)

宿にある地蔵は、赤いよだれかけが奉納されている。新田の地蔵は子どもの神様なので、赤い帽子とよだれかけをかけ、子どもがまつるという。(上細井)

八月二十二日に石尊様といっしょにまつる。お灯明をあげる。地蔵祭りという。(上細井)

**地蔵** 荒屋舗にある。(上細井)

**麦わら地蔵** 旧六月二十三日に、麦藁を高く積み、火をつけて、念仏をやった。麦藁を積むのにハシゴを使うほどだった。地蔵の近くでやったが、三十年前に地蔵が盗まれたので、新しいのを作った。麦藁を燃すのは、昔厄病があつたので、それをはらうために始めた。あちこちから人がおまいりに来た。その火で焼き餅を焼いて食べた。焼きまんじゅう地蔵ともいう。皆でナンボイナンボイと数珠をまわした。太鼓をたたいた。念仏婆さんは、東に五人ほど、現在でもいる。この日には灯籠をたてた。(荻窪)

**薬師様** 五代町の南部でまつっていた仏で、堂があつたが、昭和五十二年頃に共同墓地ができたため、堂はとりこわされた。もと旧四月八日、のち新四月八日が祭日で、堂のお釈迦様(銅造)に甘茶を施した。当番が出て、まつりの世話をした。各戸では、赤飯をたき、それを薬師様に供え、かわりに他の人が供えた赤飯をオミゴクとして請けてくる。また、南部の各戸では、ツラヌキといつて、わずかな金銭を納めた。(五代)

**おしろい薬師** 江木との境近くにあり、目を病むと、薬師におしろいをぬって祈願すると治るといふ。(小坂子)

**耳塚の薬師** 耳を病んだ時に祈願する。治ると、酒を竹筒に入れて奉納した。耳だれ薬師ともいふ。(勝沢)

**薬師堂** 天沼の薬師堂は、八月七日が祭日で、眼病に効験があると

いふ。目を病むと、半紙に「め」と書き、それを百枚書いて奉納すると治るといふ。それで百め薬師と呼ぶ。(嶺)

**小二郎薬師** 寺間にある。小二郎は荒れ狂った人だといわれ、それを鎮めるためにまつったという。(嶺)

**薬師様** 土用の丑の日には薬師様のお祭り、鉦を昼中たたいたり、四尺の赤い旗を出したりした。これは、一六組の組長と総代五人で行う。(鳥取)

目が悪いときは薬師様を拝むと良い。(鳥取)

新田にあつた。井戸から八角の台石が見つかり、地蔵様の脇(新田集会所)に飾つてある。(上細井)

桃木川の南岸の字薬師というところにあつた。大きな杉の木があつて、そのたもとに木の宮があつた。今は石宮になつた。目を患つたと、き、「め」と書いた絵馬を奉納すると治るといふ。(関根)

**薬師堂** 香集寺境内にある。地獄の責ぎの石仏も境内にある。

(上小出)

**イボ薬師** 村内に、「イボ薬師」という薬師様があり、顔に白粉を塗つて拝むと眼病が治るといふ。(北代田)

**薬師様** 目の悪い人に効験がある。(下細井)



耳だれ薬師 (田口町)

**薬師** 字薬師にあつたが、三年ほど前に耕地整理で、神社の横に移された。頭をなでると病気が治るといふ。削りつけてそれをつけるとよいともいふ。耳だれ薬師といい、耳だ

れに効くといった。女堀を掘るとき地中から出現したという。八月八日が祭日で、子どもが絵をかいたとうろうを立てた。茅葺きのお堂があり、ノラボウがよく泊ったので、ノラボウ薬師ともいわれた。神仏分離で正円寺へ一時行っていたが、交通事故が多発するので、薬師の崇りだというので、もと通りにまつられることになった。交通事故といっても馬と人がぶつかるといようなものだった。大正初めには戻した。(堤)

**薬師様** 西窪のシモでまつっていた。ヤンメに効く。山芋の実を数珠にかけてやるとよい。お日得もやった。(荻窪)

**ヤンメの神様** 眼の神様。宿西にあった。(青柳)

**けが除け観音** 請地にある。正月二日と十月十日に、馬をつれて参詣する。オサゴをあげて、馬がけがをしないように祈った。この観音様は昔福田金五郎という人がまつり始めたという。イボができた時、祈願すると、イボがころりとれたという。(嶺)

**観音堂** 観音様をまつている。(勝沢)

宮内家、塩野家などの元屋敷にあたる地名。ここに観音堂がまつられていたものらしい。今、五輪塔が五基ある。まわりの人が、あまりかまわないので、観音様が、日輪寺の十一面観音の所へ逃げていったという。日輪寺は河原敷で、川の流れが変わってそこへ村が作られたという。宋銭が四百枚くらい出た。(小神明)

**観音様の祭り** 一月十一日に馬に乗ってお堂のまわりをいまわりする。竹棹の先に馬守りをはさんで出すと、乗っている人が取って返礼に半紙に米とお金を包んで賽銭代わりに投げた。本尊様を御開帳する。露店が並んだものだった。(日輪寺)

**夜泣き観音** 子どもが夜泣くとそこをろうそくをあげる。そうすると治る。石灯笼があるだけである。(上細井)

**馬頭観音** 草競馬の競馬場のところにまつてあった。(上小出)  
一月十八日が祭りで、石山と同じ日である。昭和五十一年に整備した。線香と水はよくとりかえてまつている。年番が暮れにお賽銭を勘定するが、だいたい四、〇〇〇円ほど集まる。これを暮れ勘定といっている。世話人は三人いる。村の共有で、昔は馬入れ(道)がついていた。正月には馬をつれてお参りする人もいた。もとはクスヤがあった。石碑があるが、中には山を掘ったときに出てきたものもある。

(荻窪)

一月十一日は日輪寺の馬頭観音の縁日で、馬に乗っておまいりした。荒れ馬でも、観音様でけがしたことはない。馬頭観音は馬の神である。馬がいなくなつて、牛にかわつてから行かなくなつた。馬の上からお賽銭を投げた。竹の先を割つたものにお札をつけてもらつて帰つた。

(関根)

**摩多利神** 金剛寺の境内にある。明治末期か大正初期までは片原にあったが、その頃に金剛寺までかついできた。伝染病の神で、この神があつたおかげで関根へは厄病が入つてこなかった。三月二十四日がまつりで、お籠堂で護摩をたいて、灯笼をともしまつる。伝染病に効験があり、快癒したお札に旗を参道にたてる。お願生をかけてから、



麻多利神 (上細井町)

治るとたてる。祭りの日には盆踊りをやつたこともあつた。堂は寺が管理しており、昔は毎朝、僧が片原まで拝みに行き、護摩をたいた。今は、三友会(六十一・六十二才

の人で結成)で護摩の希望をとって、希望者の名で護摩をたいている。このとき、お札を出す。お姿が刷つてあり、家のトボ口にはる。病除けの効果がある。顔が三つある無気味な姿である。(関根)

三柱神社ともいう。古墳の上に石宮がある。七月二十四日が祭日で、端氣田グルワでまつっている。時には神主を頼んで拜んでもらう。子どもが集まつてお飾りして、夜花火大会をやるが、大人は芸能大会をやり、酒を飲む。ちょうちんがつき、他のクルワからも多くの人がくる。三柱神社が合併された後、空地は摩多利神のみを残して、公民館の土地と旧鎮座地を交換した。摩多利神の灯籠がある。(上細井)

大日様 団子を供えて、祈願すると、頭痛や歯痛が治るといふ。

(小坂子)

大日塚に大日の石仏がまつられている。(荻窪)

大日如来 新田の旧道端にある。個人でまつっている。(関根)

阿弥陀堂 二十年くらい前まで辻にあつた。近くの家(素封家)で管理していた。最初にまつり出したのも、その家の先祖だといふ。本尊は靈園に移し、お堂はとりこわした。盆の十六日(送り盆)に、夜灯籠をたてて、西グルワを中心にお祭りをした。(小神明)

阿弥陀様 現在、永井茂夫氏が所有しており、永井一家がおまつりしている。

天明三年の浅間墳火による泥流をさけて、小高い所に阿弥陀様をまつた。(川原)

金井一家では阿弥陀様をまつっている。(上細井)

阿弥陀如来 百日ぜきの神様。百日ぜきの子供があると、左縄(普通の方と逆になう)をなつて仏さんの首に三回半巻いて線香をあげる。百日ぜきがな治おると縄を解く。今でも縄が巻いてあることがある。(青柳)

虚空蔵様の祭り 四月十五日と十月十五日で、下細井の神社は上細井の虚空蔵様に持つていかれたので、お祭りの時は上細井まで行く。(下細井)

虚空蔵様 西窪にあつた。それを盗んだ者が、片貝まで行った所で降ろしたら、動かなくなつたため、片貝でまつるようになったといふ。西窪のロックボに今も屋敷の跡があり、五輪塔などが転がっている。(荻窪)

十三番目の神様なので、十三日にまつる。命日だといふ。

十三仏の一番目だともいふ。ウナギ屋は、十三日が休みなのは、このためといふ。(片貝)

不動様 青木家でまつる。(川原)

弁天様 弁天塚にあつた頃、よくつくり物をつくつた。弁天が宝珠をもつて歩くのを、大蛇が追いかけるといふもので、明治二十一年頃までやっていたといふ。塚のまわりが池になっていて、そこをうまく利用して仕掛けをしたといふ。神明宮の祭りの時にやった。(小神明)

弁財天 神社に石宮があり、子どもが夜泣きした時に願をかける。(川原)

庚申塚 百庚申があつた所を庚申塚といつた。今は神社の所に移つた。百庚申は昔祭りをしたと伝えられているが、話者が覚えてからはしていない。(荻窪)

青面金剛 庚申さんでサルダヒコのことである。(堤)

百庚申 神社に合祀された。まつりは特にない。八十八夜にまつたこともあつたと伝えられるがはっきりしない。(五代)

天神様 今の南橋中学校の庭に天神様があり、西の川を天神川と呼んだ。橋は天神橋、堰を天神堰といつた。(青柳)

九頭竜様 戸隠神社の奥宮からお札を請けてきた。もとは下の共有



地にあった。(川原)

### 三、講と俗信

#### (一) 村内講

庚申講 六軒一組で、六〇日ごとの庚申の日に、祭りをおこなう。庚申様は農業の神である。昔は、この晩寝てはいけけないといひ、男女の交合も禁止されていた。初庚申には梁に繩を結んだ。地藏様の所には百庚申がある。それは赤城山の鍋割山の頂上からもってきたものだという。(小坂子)

町内で二ヶ所やっている。年一回やっており、神社の境内の庚申をまつっている。庚申様の手書きの掛け軸がまわり番でまわっている。

(端氣)

いくつもあった。百姓がお庚申待をやった。五・六人の組になつていた。昔は寝てはいけけないというのでヤドに泊つた。うどんとそばを食べた。酒は出ない。戦前のことである。掛軸をかけた。サルダヒコの図だった。灯明は神道式だった。女衆がごちそうを作つた。芋などの煮物が中心で、豆腐や油揚げなども煮こんだ。子待も同様だった。飯を山盛りにして食べた。汁がついた。(上細井)

十二月中におこなう。村内の各家庭のもちまわり、庚申組の人々が、自分たちで作つた物を持ち寄つて食つた。食物、赤飯・うどんなど。

(日輪寺)

サルダヒコをまつる。クルワごとに年番でヤドがまわつた。食い放題で、山盛りにごはんを盛つた。(荻窪)

明治末期まで庚申待をやつていた。ヤドでポタモチなどを食べた。掛軸があつた。秋にやつた。(関根)

五・六軒でやつた。風呂に入つてから夕飯を食べた。掛軸を掛け、お膳をあげ、供え物をした。(片貝)

六月にやつた。雨の日が多がつた。(三俣)

若い頃はあつた。雨が降つたりするとやつた。(三俣町)

伍長単位で、寒くなつてから、庚申様のおまつりを行った。当番制で、当番の家には猿田彦の軸や膳碗などを保管していた。

ソバを打つたりした。(川原)

天神講 天神様の小祠があつた頃、その講があつた。子どもが書き初めを奉納したが、そうすると字が上手になるといつた。昭和十年頃に嶺神社へ整理されてから、講をやらなくなった。(嶺)

二月二十五日は天神様の祭りで、天神講ともいつた。子どもが習字を奉納する。皆で寄つてお茶を飲んだ。子ども中心だが、大人も加わつて、世話を焼いた。(嶺)

二月四日に行った。子供が主体の行事で、男女に分かれて、上・中・下町毎に、上級生(高等小)の当番の家で料理を食べたりして過ごす。料理は土地のもので、ご飯・にんじん・ごぼうなどで作つた。会費は十銭ぐらいだった。また、子どもが「天満天神宮」と書いたりした。(川原)

二月二十五日は天神講で、子供達が集まつて煮たきをしたり、「天満宮」などの字を書いたりして泊つた。書いた字を度胸試しで、市杵島神社の裏へもつていつたりした。(川原)

天神様をまつる講で、昔あつたと聞いた。(上小出)

子どもだけの行事。お泊り会。米を持ち寄つて、当番の宿の家の人にたいてもらう。大人は口出しせず、子供のリーダーが指示する。

(北代田)

子どもがやる。江木の方へ「天満天神宮」とかいて奉納する。ヤド

で五目飯などのごちそうを食べる。習字が上手になるよう祈つて書く。費用はヤドでもつ。四、五人くらい気のあつた連中が集まり、ヤドに泊つた。(堤)

一月二十四日にやる。子どもが集まって自炊し、カテメシなどを食べた。五銭づつくらい集めてやつた。天神様に進げて、それから食べた。年下のものは燃し木拾いに山へ行かされた。(荻窪)

弁天講 下五代クルワで、十一軒が加入している。女性が中心で、春と秋に、当番の家で、百円か二〇〇円と米一合を持ち寄つて食事を皆でとつた。弁天様をまつた。(五代)

已待講ともいう。大宮クルワでやつている。女性が講員で、九軒が加入している。春と秋の二回、己の日に弁財天の掛軸をまつり、当番の家で煮物などを食べた。(五代)

雀講 昭和七年頃まで続いた。講は五人一組で組織され、各講の代表が五〇銭(一〇銭×五人)と、おさごをもつてお参りした。雀様では、講の代表に昼飯を食わせ、お札と供物を与えた。(青柳)

秋葉講 湯之氣曲輪の秋葉様は、神明様から持つていつて、まつるようになった。八月十七日には、秋葉講をやる。(小神明)

曲輪ごとに勤勞奉仕の時に組長の家などで飲食する。米二合、お酒などを持ち寄る。(上細井)

かつてやつていた。(川原)

道陸神講 ボタモチをたくさん食べる。道陸神にお詣りする。道陸神はサルダヒコをオカメが道案内している姿だという。(荻窪)

お子待 大黒様の祭りで、もっぱら飯を食べ、世間話に花を咲かせた。秋十一月から翌三月頃のことだった。エビス講も同じようだった。(上細井)

社日待 地神は百姓の神で、石尊といっしょにまつている。春秋

の社日にまつる。ワケエシが五目飯やボタモチを作つて大食した。その日をシャニチマチ(社日待)といった。掛軸をかけたものだった。(堤)

二十二夜様 秋、三十前後の女性が寄つて、夜、月待をした。(関根)

二十二夜様は女の神様で、この日は女の人が集まって飲み食いをした。音頭をとる年長者がいた。(青柳)

二十三夜様 十月か十一月の二十三夜様には赤飯をたいて神棚にあげた。この日は女性が集まって飲み食いした。集まる家は決まつて居なかつた。(田口)

念仏講 アト念仏をやる。命日に申し込みがあればやる。老人が集まつてやるが、もともと講だったものが、近年崩れはじめた。(上細井)

## (二) 代参講と社寺参詣

三峰講 七、八年前まで順番で、一人ずつ代参していた。昔は二泊ほどして行つていたが、今は自動車で、鬼石を通つて三峰山へ行く。お札を請けてきて講員に配る。(小神明)

カミとシモの二組ある。カミは二四人で結成している。毎年代参が二人お参りに行き、盗賊除・火災除・諸災難除のお札を人数分請けてくる。昔は、高崎から寄居まで汽車で行き、そこで乗り換えて秩父まで汽車で行つて、そこから徒歩で三峰へ登つた。秩父で一泊するのがふつうだった。自転車で行つたこともあるが、今は自動車で行くようになった。帰つてくると、代参に行つた者の家で宴を開いた。米四合(今は二合)と御神酒をいただくが、ご飯は三峰盛りといつて山盛りになることになっている。会費制で二四人で均等に割り当てる。カミの三峰講の講員は昔から二四



三峰盛り

均等に割り当てる。カミの三峰講の講員は昔から二四

軒の家に固定しており、男が参加することになっている。代参は秋十月で毎年一度であり、都合のいい日を選んで行く。三峰で憑きもの落としをしたことは知らない。昔は代参に行かない者たちが、お寺の東にある自然石を集めた所に、お飯屋を藁で作って毎日拜んだ。石宮もあつた。(上小出)

クルワごとに結成されている。代参は全クルワいっしょになって、四月八日に行くことが多い。昔はワラジで歩いて行き、鬼石へ出て、杉の峠を越え、長瀬へ行き、影森で秩父鉄道に乗り、またおりて歩いた。お山へ泊り、帰りは秩父電鉄を利用した。その前は往復三日かかったという。女はだめ。お札と御眷属をうけてきた。藁宮を作って、御眷属を納めた。神社の境内には三峰様がまつられている。代参は一年に四人で、計二十四人だったので、六年に一回の割で順番がきた。新田は代参というだけでなく、希望者が行く。新田には講がないためである。三峰様は山犬様で、百姓の神であり、盗難除けにも靈驗あらたかである。帰つてくると宴会を開いた。行かない人が用意して待っていた。行った家(代参者のうちの一軒)がヤドを務めた。都合の悪いときは、別の人に代参してもらつた。(上細井)

四月八日頃、組から二人が代参人として参拜。観光業者が取りしきつているので全メンバーはわからない。(上細井)

西と東にわかれて、有志が加入してやっている。四月末頃、西二人、東二人が、代参に出かける。昔は歩いて、泊まりがけで行つたが、その頃はワラジばきだった。今では一四、五人しか入っていない。狼の姿をしたお犬様のお札をうけてくる。狼は御眷属であるという。盗難除けになる。(荻窪)

二十年以上前まであつた。ムラの有志で結成されており、二十〜四十人いた。毎年一人が代参し、お札をもらつてきた。代参は紙よりの

くじで決めた順番に行つたが、都合が悪いと交代した。行く前に藁でお飯屋をつくつた。新田に講元がいた。男のみで構成されていた。代参が山から帰つてくると酒宴を開いた。代参に行つた人の家がヤドになった。(関根)

戸隠講 信州戸隠山の講で、六人一組で講を結成していた。毎年一人が代参で戸隠へ行く。古くは全員で行つたというが、その頃は十七人で講をなしていたと伝えられる。結講してから八十年たつという。代参に行つた者はお札を請けてくる。代参は十月中旬頃、稻刈りが終わった頃に出かけた。古くは、戸隠の今井さんという御師が来て、一軒ずつまわつて歩いた。正月から二月頃にかけてのことで、初穂料をいただいていた。七、八年前から、六人一組の制度をやめ、代参も事実上なくなった。それでも、講員は六二名ほどおり、戸隠からお札が送られてきて、各戸へ配る。(五代)

少林山講 十から十五年程前まであつた。代参に行き、お札をもらつてきた。一三人いた。代参に行つた人の家をヤドに酒宴を開いた。

(関根)

御嶽講 石倉町に先達がいて、小神明町では七・八軒が加入していた。世話人の家が決まつていて、数年に一回、木曾御嶽山へ代参した。神主のところまで一泊し、木曾福島で一泊して、帰つてきた。毎年十二月にお日待といつて、ヤドのうちの井戸水で水ごりをとり、拝みおわると、飲食をとにした。(小神明)

ヨノサンがやつていた。頼むと拝んでくれた。(堤)

伊勢参り 藁の仮小屋を建て、ムラでお祝いしてくれた。ろうそくを立て、拝んで送り出した。帰つてからもお祝いしてもらつた。

一生に一度は行くものだという。お祝いが終ると、仮小屋は燃した。

(端氣)

神社に伊勢参拝記念の石灯籠がある。文久二年・明治二十年代・大正八年のものだという。水盃をかわして、人が四人も入れるお仮屋に籠もった。二間三間ほどの小屋だった。竹のしんに藁を葺いて作った。行く前に建て、帰ってくる、中で酒を軽くかわしてから、燃した。本式に飲むのはヤドへ行つてからだ。神社の前の田んぼの中に立てた。行っている間、お仮屋へ、おかみさんなどがおまいりに行き、無事帰ってこられるよう祈った。(荻窪)

お宮を作り、端氣田ではその中に入ってから出かけたが、作るころは決まつておらず、田んぼや畑など広い土地に作った。出かけたあと、行った人の五軒組合の者が、留守にお宮におまいりした。帰つてきて、行った人がそこで無事を報告した。ずっと昔には水盃をかわして出かけたという。陰膳はしない。(上細井)

個人が寄つて行つた。(堤)

迦葉山 祭りのとき、お面を借りてきた。蚕が当たるといった。古いのと新しいものと二つ返した。倍にして返したわけである。講元の関口氏が中心になつてつれていった。講とはいわない。酒宴があつた。

(関根)

養蚕 貫前神社のお札が配られた。

迦葉山に行つた時、天狗の面を借りる。当たつたら大きいのを買って返す。五円、十円のお金も借りた。(荻窪)

代参 四月頃、榛名神社へ行つたことがある。(端氣)

仮宮を作つて、伊勢に参拝に行つた。そこで神楽を奉納してきた。記念の灯籠などを作つた。(荻窪)

馬頭観音 埼玉県上岡の馬頭観音や石山の観音様へ、馬力をしていた人がお参りに行つた。石山へいく者が多く、鐘つき堂のやぐらのところに馬をくぐらせると馬が病まないといひ、無理して馬をくぐらせ

たものだった。また、馬が死ぬと、そこに石造の馬頭観音をたてた。

(五代)

馬をつれて石山の観音様へ行き、絵馬を請けてきた。(小神明)

ザル観音 漆原のザル観音へお参りした。(関根)

産泰様 お産の神で、個人で参詣する。(小神明)

お産の神で、女性が個人的にお参りした。(五代)

三体の神をまつているのでサントイというようになった。(荻窪)

大宝八幡神社 茨城にある神社で、金がもうかるというので、講があつた。大館から電車で行つた。(上細井)

八坂神社 大正十一年に話者の父が歩いて世良田の八坂神社へ行つたが、そのときの帳面が残っている。毎年二人ずつ行く。代参であつた。(荻窪)

### (三) 山の信仰

赤城信仰 五月八日に赤城の大洞へ登つて一日中遊んだ。これは今でも行く人がいる。昔は盆に近い八月一日に登つたが、これはもうする人はない。なぜ登つたのかはわからない。(小神明)

五月八日に、各家ごとに、赤城山へ登つた。弁当を持って、歩いて登つた。また、八十八夜に赤城山へ登つたこともある。戦後になつて衰れた。(五代)

赤城講 三月中旬に、組の者が米を持ち寄つて、あんびんをつくつて食べる。特に赤城とは関係がなくなつていたという。二十年くらい前のことである。(五代)

山開き 夜中に行つて赤城山に登つた。九時頃出ていった。弁当持ちで行つて、地蔵の上でおがみ、お札をもらつて帰つた。(端氣)

赤城信仰 五月八日は赤城山の山開きで、仲のいい者同士で、弁当

持ちで大洞まで歩いていった。朝飯を食べてから出発し、石井——木暮——大河原——箕輪——一杯清水と登っていき、急坂を登りきると大洞に着いた。大洞で弁当を食べ、同じ道を帰ってきた。雨乞いは利根川の畔なのでなかった。(上小出)

五月八日は赤城山の山開きで、ワケエシは大洞まで登った。新坂という急坂を登らねばいけなかった。馬が糞をしたので、それを肥料にして馬つっじが繁茂していた。花はとつてはいけなかった。馬道を馬で登った。(関根町)

五月五日に代参で三夜沢へ行つた。勢多郡中から集まっています、二宮赤城神社が最右翼でその隣が江木六所神社、そして大胡の近戸神社の順だった。二之宮の総代があいさつをした。(江木)

五月八日は山開きで、勢多の連合青年団の総会が大洞であった。大胡から荒山ごえで大洞にのぼった。下りは銚子のガランから滝沢に下ってきた。(江木)

十二様 天沼にあつた。十二様は山の神で、山仕事の時にまつた。草刈りをしたあとで、十二講といって、山で飲み食いをした。山の人にはパンダイ餅というのを掲ぐが、ムラの者はやらなかった。(嶺)

山の神で、山仕事の時、薪山始めなどに、十二講といって男衆が集まって飲み食ひした。正月の山始めの時にもまつた。(小坂子)

山の神のこと。十二祭りといって、山仕事をする人たちがまつる。お十二講は、十二月頃、山仕事へ行つた時、男たちが宴会を開くことをいう。山仕事といっても、おもに草刈り・焚き木拾い・松葉ひろい・木の葉集めだった。(小神明)

山の神のことで、木材関係者がまつっていた。お十二講といい、業者が集まって、十二月頃の山仕事を始める前と、春四月頃に、日は特に決まっていないうが、十二神とか書いてある掛軸をまつて、宴会を

やつた。(五代)

山の神のことで、山仕事をする者がまつた。山で草刈りをした後、飲食をしたという。(小坂子)

山仕事をやつたとき、終わると十二まつりをやつた。(関根)

山へ入ると十二講といって男衆が寄つてぼたもちを作つて食べた。

(青柳)

かつて行つていた。(川原)

#### (四) 百万遍念仏

百万遍念仏 老人が集まって、数珠をまわして、念仏をする。鉦・太鼓をたたき、線香をたて、水を供えて、寺のザシキで念仏を唱える。葬式のアト念仏もその人たちがやる。その時十三仏の掛軸をかけてまつる。(小神明)

クルワごとにやつていた。四つあつた。築場はやらなかった。四月十五日に、太鼓と鉦をたたきながら、村中をまわつた。子どもがやつた。高学年の子が太鼓をかついで、小さい子がたたいた。家の中を表から入つて、裏へ出ていった。五銭か一〇銭を各戸でもらつて、集めた金でお菓子を買つた。お寺ではお札を刷つて配つた。坊さんが刷つた。百万遍なんとかと書いてある。太鼓は竹竿に下げて歩いた。寺にあつたのは二つだけだった。ナンマイダンボーもいった。厄病除けの祭りで、昭和十六年頃までやつた。その日にはうでまんじゅうを作つて食べた。(上小出)

ナンマイダンボー 南無阿弥陀仏がなまつたもの。安永・天明の頃に始まつた。疫病が蔓延し、子どもがたぐさん死んだ。日輪寺では三〇人ほどの子どものうち三人だけ生き残るほどだった。それ以後、子どもの霊を弔うためか、疫病を防ぐためか、ナンマイダンボーが始まつ

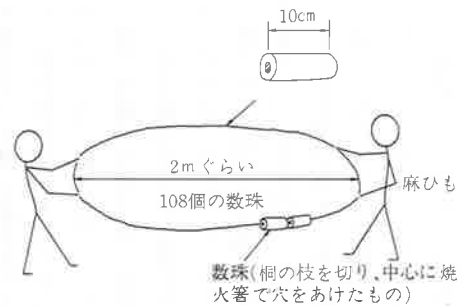
た。日輪寺で行われていたものが上小出にも伝わった。南橘地区でナンマイダンボイをやっていたのは日輪寺と上小出のみだった。小学生の年中行事として毎年七月十四日に行われ、三〇人くらいの子どもが鉦・太鼓を打ち鳴らしながらナンマイダンボイを唱える。表口から裏口まで抜けながら、ナンマイダンボイを唱え、その家の人に南無阿弥陀仏と書いてあるお札を渡す。その家の人はお盆の上に賽銭をのせてくれる。集まった賽銭で菓子を買って食うのが楽しみだった。裏口を出ると、ふかしまんじゅうがあり、とって食べた。その日のために、新しい服・靴などが買ってもらえるので、うれしかった。鉦は寺から借りた。太鼓は神社から借りた。太平洋戦争を境にして行われなくなった。(上小出)

天明三年(一七八三)の浅間山の大噴火によって生じた泥流が、吾妻川から利根川へ流れ込み、人家や家財道具を押し流した。農作物にも甚大な被害を及ぼした。翌、天明四年(一七八四)には、農作物の不作により大飢饉が発生した。また、疫痢も発生し、三〇戸の農家の子どもは三名しか残らなかった。萩原与兵衛という知恵者があり、石像を建て、天変地異や悪病が村に入らぬよう祈った。(日輪寺)

毎年七月、農休みに実施する。「ナンマイダンボ、ソラマメダンボ」と子どもが声を掛け合いながら、平穩無事や所願成就を祈る。

昭和三十五年を最後に、姿を消した。その理由は数珠がなく、骨がおれるというものだった。昭和五八年八月二日に復活した。その後、毎年継続している。(日輪寺)

昔は二〇〜三〇人の男の子が白い服を着て各戸をまわった。「ナンマイダンボ、ソラマメダンボ」と声を掛けながら庭をだんだんスピードをあげながら七回半回り、大将(二人)が合図をして終らせ、次の家へ「ワッショイ、ワッショイ」と言いながら走った。回る方向は、北



回りで冴の方向へ回った。ナンマイダンボは南無阿弥陀仏のこと。ソラマメダンボは、そらまた南無阿弥陀仏による。ナンマイダンボの行われる夕方には、マエブレ(前触れ)が、村中を歩きながら、「ナンマイダンボだよ。はやようはん(早夕飯)で、ちようちん(提灯)もって出てくんな。」

と触れまわった。前触れは青年と子どもたちの役目だった。ナンマイダンボの一行を迎える各戸では、子どもたちがすごいスピードで回って、喉が渇

くので、水を用意していた。ナンマイダンボの一行には、大将(二名・年長者がなる)とワキドリ(脇取、二名)という役割があった。全部の家を回り終わった後、大将と脇取だけが村境に残って数珠の後始末をする。ほかの子どもは家へ帰ってしまう。数珠を捨てる時、「お化けだぞー」と大声で言い、後をふり向かずに行って帰ってくる。捨てた珠玉は、明朝拾って、お寺の縁側の所におき、一年後のナンマイダンボまでしまっておいた。(日輪寺)

### (五) 禁忌と呪術

エド流し 天神様の傍のエド(井戸)流しは、もと塚の近くにあって家が明治時代につぶれたが、その家のものだろうという。あまりにうなるので恐れをなして神社に納めたのだろうという。(堤)

石堂畑 樽道下にある。石の堂があったのでその名がある。タメをまくと眼病を患う。耕してもいけない。素足で行ってはならない。正

月には幣束・供物をあげる。今は耕地整理で田んぼになった。もとは畑で、それ以前にはヤマだったらしく、くぬぎの根が残っていた。(堤)

ヨコサンヤシキ ヨコサンという御嶽行者がいた。古い関係のない家のお稲荷さんを、清めずに家をたてたら、事故になった。絶家した家の稲荷である。それ以後、その稲荷をていねいにまつている。熊野神社の下土をいただいて清めた。(堤)

お寺の田植え 辰の日に村人に手伝わせてやる。辰の日の田植えは忌まれたが、お寺は大丈夫だった。(萩窪)

辰の日 田植えをしないといけない。もしすると、葬式のタツガシラののりになるという。お寺はこの日に田植えをする。(五代)

ヒノエウマ ヒノエウマと縁ぐみすると片方が食われるという。ヒノエウマ同士は大丈夫だという。(堤)

雨乞い 田んぼのひびができ、陸稲が赤くなると、区長がフレを出して、雨乞いをおこなった。代表が一人か二人、赤城神社と榛名神社へ行った。赤城は大洞まで行った。竹筒に水をいれて帰って来て、それを田にまいた。その時、途中で休んではいけないといった。休むと、そこに雨が降ってしまうからだという。雨が降ると、御礼まいりに、五〇銭くらいもって、再度参詣に行った。(五代)

早魃の時、赤城の大洞の水を、神社で拜んでもらって、もってきて、ムラの中の沼に注いだ。村中の男子が大勢で出かけた。田植えの頃に多かった。榛名などへ手わけして行ったこともある。(小神明)

早魃で田の水が不足すると、龍の姿をした御神体に水をかけて、雨の降ることを祈った。靈験あらたかで、かならず雨が降った。(小坂子) 雨乞いの代参は組から二人出て赤城山・榛名山へ行った。区長さんの所へ行って費用をもらって行った。

御師の家に泊った。一軒二円くらい(二〇銭くらい?)もらっていい

た。お札を受け、区長にあずけ、上中下曲輪の六十戸ほどの家に分けた。(端気)

干魃で水不足になると赤城神社(大洞)へお参りに行った。水争いはなかった。(竜蔵寺)

祈り釘 桑五郎墓場の榎の大木に、藁人形が釘で打ちつけられていたことがあった。(上小出)

木福様の御神木に藁人形を打ちつけたということが、四・五年前にあったが、何のために誰がやったのかわからない。人をのろつてのものであろうという。(五代)

サンリンボウ 悪神で、それをまつると隣り三軒を亡して、自分の家を富ませるといふ。(五代)

八丁注連 ムラ境に八丁注連をたてる。七月二十五日と十二月二十五日の年二回たてかえるが、そのときには自治会長(区長)が集まって、神主の祈禱をうけ、八丁注連をうけていき、それを自分の町内にたてる。昔は定使が区長の差配で八丁注連をたてた。(関根)

七月二十六日と十二月二十日頃の年二回の大祓いのときに、町の境に八丁注連を立てる。大祓いは南橋中の自治会長・県議・市議・校長が参加し、神主に厄を祓ってもらう。八丁注連は、上小出の東西南北の境界に立てる。北はバスターミナルの南、西はヤカン川の淵、南は国産の北、東は日野自動車のところの計四ヶ所に各一本立てる。八丁注連は、六尺の竹の一端を割って、「塞神三神真霊」と書いてあるお札をはさんだものである。上端は麻でしぼる。昔はお札にしんが入っていて固かったので、それをそのまま地中にさして立てた。八丁注連は自治会長(昔は区長)が立て、立て終わってから直会の集まりがある。昔は村と村の間には家がなくて、村境がはっきりしていたが、今は家が建てこんで村境がはっきりしなくなった。村境にあたる総合グラウンド



のあたりには十二山があつて、昼でもうす暗く、村境がこわいところに思えたものだった。(上小出)

三本辻に竹をたて、幣束をつけて厄除けにする。廃止したら赤痢がはやつたことがあつた。(三俣)

悪魔除け はやり病が出た時には、村境にお札を立てた。地面に竹を立てて、お札をはさみ、悪魔よけをした。(北代田)

犬猫がいなくなつたとき 屋敷イナリに、「立ちわかれ、因幡の山の峯に生うる」と百人一首のカミの句を書いてあげると見つかる。帰ってきたら七色の菓子をおげますと祈願するのである。見つかったら、「待つとし聞かば今帰りこむ」とシモの句を紙に書いて、七種類の菓子などを供えた。(上細井)

地鎮祭りの竹 家の基礎を作るとき中心に埋ける。(堤)

狐憑き 拝み屋に頼んでおとしてもらう。神主みたいなことをする人がいた。(上細井)

オサキ 人を化かす。キツネ・イタチも同じように化かす。(小神明)

片石山の天狗 片石山の頂上には石のムロがあつて人が二、三人入れる大ききだった。そこに昔は天狗がいると言つた。(田口)

天理教 玉川親分が天理教でもやれといふので、ヤオさんという人が、おかみさんのおぜんさんとともにはじめた。(五代)

神主 地鎮祭や小祠のまつり、あるいは個人的なお祓いをやつた。

(五代)

火渡り 大正五・六年頃のこと。薪を燃やし、オキになつて真赤になつた所へ、塩を撒き、その上を歩いた。この火の上を歩くと病気に

かからないかかつたとしても軽くて済むといわれた。火の道は五メートルほどで村人がその上を歩いた。(北代田)

三隣亡 これをまつる人は一代か二代で絶えてしまう。猿田彦はこれを除けるためにまつる。(三俣)

六三除け 一つの線香を三つに折つて流しの下に入れ、仏様の線香立てに立てる。六三三三三、六三三三三と三回となえ、ことしいくつの人六三で苦しんでいるから、線香の燃きるまでに直してくださいといふ。これで直らなければ六三ではないから医者に行く。土に浜がたまつていて、石が黒くなるような所に六三がある。一週間以内くらいに六三なら六三除けでおる。(片貝)

占い 丸尾講。十月八日頃と、十二月二十一日の冬至待の宵祭りに集まつた。先達の家に集まつた。一時、三峯講といつた。村中寄つて、その後一年間の収穫を占つた。木曾御嶽山といい、神がかりになつて託宣があつた。米麦が何分作か、蚕のでき、火災、盗難、霜などの天候を占つた。その日には、萱で飯宮の屋根を葺きかえた。代表が、代参としてご神体を請けに三峯に行き、お札を請けてきた。昔は半分くらいは歩いて三日くらいかかつた。

講員が、米二合、餅などを持ち寄つて食べる。(片貝)

オセガキ念仏 お施餓鬼のときに念仏をする。(上小出)

十三仏 掛け軸が町内に二つある。古いものは手書きで、善勝寺に預けてあり、葬式があると借りてくる。(端氣)

念仏の控

南無光明至上十方世界念仏浄土生死□□南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

(一) 南無阿弥陀仏南無阿弥陀 南無阿弥陀仏南無阿弥陀

十回くりかえす



(二) 重應實對南無阿弥陀 重應實對南無阿弥陀

十回くりかえす

(三) 西は西方しようじゆが池の はちすのけんげ一切南無阿弥陀

一本ひらいて極楽浄土へ 輝き渡れば即ち仏に

うたがいなし殊瑞念仏 なむあみだ

十回くりかえす

(四) 道の端の六地藏おとなえ 申しなおいとくに十六世紀を

のがれ給う南無阿弥陀仏 南無阿弥陀いわはしどうの

お地藏様をおとなえ申した おいとくに四十八世をのがれた

もうなむあみだぶつ なむあみだ

十回くりかえす

南無十三仏の念仏教へ

南無不動釈迦文殊凡元地藏弥六薬師

観音世紀阿弥陀阿四苦大日虚空蔵

南無阿弥陀

十回くりかえす

南無十三仏

(龍蔵寺)

社寺堂守一覽表 (前橋市史より) 明治十二年調

芳 賀

社名	所在	祭神	祭日	境内末社
日枝神社	勢多郡端氣村	大山咋命	九・元	愛宕社、稻荷社、大山祇社、八坂社、猿田彦社、八幡宮、雷社
神明宮	南勢多郡端氣村	大日靈命	九・元	神明宮、大山祇社、八幡宮
琴平宮	勢多郡五代村	大物主命	九・〇	熊野社、大山祇社
巖嶋神社	勢多郡五代村	市杵嶋姫命	九・九	菅原社
思兼神社	勢多郡五代村	八付思兼命	九・九	なし
菅原神社	勢多郡五代村	菅原道真公	三・三 九・三	八坂神社、八幡宮
鳥取神社	勢多郡鳥取村	湯河板拳命	九・九	菅原社、大山祇社
諏訪神社	勢多郡鳥取村	健御名方命	七・七	巖島社
神明宮	勢多郡鳥取村	大日靈尊	九・六	諏訪社、熊野社、秋葉社、八坂社、稻荷社、大山祇社、神明社、巖島社
八幡宮	勢多郡小坂子村	菅田別尊	八・五	巖島社、猿田彦社、大山祇社、大雷社、若宮八幡宮、八坂社
諏訪神社	勢多郡小坂子村	健御名方命	八・七	なし
菅原神社	勢多郡小坂子村	菅原道真	九・五	八坂社、八千矛社
神明宮	勢多郡小坂子村	大日靈尊	二〇・六	なし
愛宕神社	勢多郡小坂子村	火産靈命	二〇・四	琴平宮
熊野神社	勢多郡小坂子村	速玉男命、伊弉冉命、事解男命	二〇・元	大山祇社
諏訪神社	勢多郡嶺村	健御名方命	八・七	八坂社、八幡宮、菅原社、琴平宮

社名	所在	祭神	祭日	境内末社
霜川神社	南勢多郡上小出村	大花開耶姫命	九・九	菅原社、三柱社、
小出神社	南勢多郡上小出村	豊城入彦命	九・九	八幡宮、薬王社、
赤城神社	南勢多郡下小出村	豊城入彦命	九・九	八幡宮、菅原社、

社名	所在	祭神	祭日	境内末社
八幡宮	勢多郡嶺村	菅田別尊	八・五	壇山姫社、稻荷社、
若宮八幡宮	勢多郡嶺村	菅田別尊	九・九	菅原社
大山祇神社	勢多郡嶺村	大山祇命	九・九	菅原社、稻荷社
稻荷神社	勢多郡嶺村	倉稻魂命	九・九	なし
大山祇神社	勢多郡嶺村	大山祇命	九・九	なし
箕輪社	勢多郡嶺村	健御名方命、豊城入彦命、大山祇命	七・三	なし
三柱神社	勢多郡嶺村	菅田別尊	八・五	菅原社、八幡社、
八幡宮	勢多郡勝沢村	菅田別尊	八・五	三峯社、若宮八幡宮、稻荷社、東照宮、神明宮、大山祇社、猿田彦社
一之宮神社	勢多郡勝沢村	経津主命	九・九	造化社、道祖社
神明宮	勢多郡勝沢村	大日靈尊	九・九	八幡社、稻荷社、
若宮八幡宮	勢多郡勝沢村	菅田別尊	九・九	八幡社、水神社
神明宮	勢多郡小神明村	大日靈尊	九・六	稻荷社、神明宮、
			九・六	諏訪社、菅原社、
			九・六	八幡宮、鹿島社、
			九・六	西宮社、春日社、

社名	所在	祭神	祭日	境内末社
赤城神社	南勢多郡上細井村	豊城入彦命	三・七	八幡宮、天水分社、
星宮神社	南勢多郡下細井村	天御中主尊	八・三	八幡宮、赤城社、
諏訪神社	南勢多郡荒牧村	健御名方命	九・九	火雷社、八幡社、
神明宮	南勢多郡荒牧村	大日靈尊	九・九	水神社、菅原社、
八幡宮	南勢多郡荒牧村	菅田別尊	九・九	なし
赤城神社	南勢多郡関根村	豊城入彦命	六・九	八幡宮、菅原社、
大山祇神社	南勢多郡関根村	大山祇命	九・九	神明宮、星宮社、
八幡宮	南勢多郡関根村	菅田別尊	九・九	春日社、大山祇社、
八幡宮	南勢多郡関根村	菅田別尊	九・九	八幡社、稻荷社、
八幡宮	南勢多郡川端村	火産靈命	九・八	八幡宮
愛宕神社	南勢多郡川端村	火産靈命	九・八	赤城社、琴平宮、
神明宮	南勢多郡川端村	大日靈尊	九・八	八幡社、月読社、
菅原神社	南勢多郡日輪寺村	菅原道真	九・三	八幡宮、雷電社、
神明宮	南勢多郡日輪寺村	大日靈尊	九・三	八幡宮、雷電社、
八幡宮	南勢多郡北代田村	菅田別尊	九・三	八幡宮、雷電社、
神明宮	南勢多郡日輪寺村	大日靈尊	九・三	八幡宮、雷電社、
八幡宮	南勢多郡北代田村	菅田別尊	九・三	八幡宮、雷電社、
星宮神社	南勢多郡下細井村	天御中主尊	九・三	八幡宮、雷電社、
赤城神社	南勢多郡上細井村	豊城入彦命	九・三	八幡宮、雷電社、

菅原神社	南勢多郡上細井村	菅原道真	三・三三	稻荷社
熊野神社	南勢多郡上細井村	速玉男命、伊弉冉命、事解男命、素戔鳴尊	七・三五	なし
三柱神社	南勢多郡上細井村	素戔鳴尊、大日靈命、火産靈命	三・三四	秋葉社、阿夫利社
西堀神社	南勢多郡上細井村	豊城入彦命、菅田別尊	二〇・一九	秋葉社、諏訪社、大國社、阿夫利社、埴山姫社、津島社
新殿神社	南勢多郡上細井村	豊城入彦命、大日靈尊	二〇・一九	年神社、疱瘡社、塞神社、巖島社
神明宮	南勢多郡青柳村	大日靈尊	九・二六	秋葉社、日枝社、春日社、大宮社、八幡宮、巖島社、富士社
雀神社	南勢多郡青柳村	少彦名命	九・二六	八幡宮、竜神社、春日社、菅原社
八坂神社	南勢多郡青柳村	素戔鳴尊	七・二五	なし
神明宮	南勢多郡龍藏寺村	大日靈尊	二〇・二六	八幡宮、巖島社、埴山姫社、近戸社
八幡宮	南勢多郡田口村	菅田別尊	九・二五	八幡宮、巖島社、春日社、熊野社、赤城社、菅原社、大山祇社、愛宕社、貫前社、粟島社
諏訪神社	南勢多郡田口村	健御名方命	八・二七	市杵島社、琴平宮
菅原神社	南勢多郡田口村	菅原道真	三・三五	神明宮、大山祇社、巖島社
愛宕神社	南勢多郡田口村	火産靈命	七・二四	琴平宮、阿夫利社、菅原社、大山祇社
雷電神社	南勢多郡田口村	大雷命	四・二六	なし
橋水分神社	南勢多郡田口村	水分命	四・一八	水神社
市杵島神社	西群馬郡川原島新田	市杵島姫命	九・一九	稻荷社、琴平社、雷電社、少名彦社

		桂 萱			
社名	所在	祭神	祭日	境内末社	
星宮神社	南勢多郡西片貝村	天御中主尊	一・三三	早虎稻荷社	
神明宮	南勢多郡西片貝村	大日靈尊	九・二六	八幡宮、菅原社、村主稻荷社	
稻荷神社	南勢多郡西片貝村	倉稻魂命	九・一九	巖島社、琴平宮	
若一王子社	南勢多郡下沖之郷	榊御氣野命	二〇・一九	なし	
赤城神社	南勢多郡下沖之郷	大日靈命	二〇・一九	伊勢社、稻荷社、諏訪社	
菅原神社	南勢多郡下沖之郷	菅原道真	二〇・一九	巖島社	
赤城神社	南勢多郡三俣町	大日靈命	二・三五	なし	
菅原神社	南勢多郡三俣町	菅原道真	二〇・一九	菅原社	
赤城神社	南勢多郡幸塚村	大日靈命	九・一九	秋葉社、菅原社、琴平宮	
神明宮	南勢多郡上沖之郷	大日靈尊、大日靈命	九・二六	菅原社、八坂社、大山祇社、八幡宮、琴平宮、星宮社	
秋葉神社	南勢多郡上沖之郷	火産靈神	七・一八	なし	
六所神社	南勢多郡江木村	大國主命、伊弉冉尊、素戔鳴尊、瓊杵尊、布留御魂命	一〇・一九	大山祇社、六所社、秋葉社、八幡宮、白山社、石神社、伊勢宮、飛鳥社、雷電社、御嶽社	
菅原神社	南勢多郡江木村	菅原道真	二・三五	八坂社、稻荷社、曲社	
諏訪神社	南勢多郡江木村	健御名方命	八・二七	なし	
熊野神社	南勢多郡堤村	榊御氣野命、大屋津姫命、狐津姫命	二〇・一九	菅原社、八幡宮、雷電社、稻荷社	
赤城神社	南勢多郡上泉村	大日靈命	六・二五	菅原社、愛宕社	

神明宮	南勢多郡上泉村	大日靈尊	九・六	菅原社
八幡宮	南勢多郡上泉村	菅田別尊	八・五	稻荷社
稻荷神社	南勢多郡上泉村	倉稻魂命	二・五	大山祇社、秋葉社、八坂社
琴平宮	南勢多郡上泉村	大物主命	九・〇	なし
稻荷神社	南勢多郡石関村	倉稻魂命	九・九	菅原社、八坂社
神明宮	南勢多郡龜泉村	大日靈尊	九・六	菅原社
稻荷神社	南勢多郡龜泉村	倉稻魂命	九・九	八幡宮、鳴雷社、稻荷社、庖瘡社
赤城神社	南勢多郡龜泉村	大日靈尊	九・九	稻荷社、大山祇社、八幡宮
熊野神社	南勢多郡堀之下村	櫛御氣野命、大屋津姫命、狐津姫命	九・九	鳴雷社、絹笠社、阿夫利社、八坂社、八幡宮
赤城神社	南勢多郡堀之下村	大日靈尊	四・八	(破損) 大山祇社
八柱神社	南勢多郡荻窪村	多紀理姫命、依姫命、多紀命	〇・九	稻荷社、琴平宮、愛宕社、雨降社
神明宮	南勢多郡荻窪村	大日靈尊	〇・九	琴平宮、道祖社、八幡宮、猿田彦社、鳴雷社、菅原社、大山祇社
秋葉神社	南勢多郡荻窪村	火産靈命	八・八	なし
菅原神社	南勢多郡荻窪村	菅原道真	八・五	なし
神明宮	南勢多郡荻窪村	大日靈尊	九・六	なし
諏訪神社	南勢多郡荻窪村	健御名方命	七・七	なし

芳賀		南橋	
寺院名	所在地	寺院名	所在地
善勝寺	南勢多郡端氣邨字後原	觀音堂	南勢多郡上細井村字宿
福徳寺	南勢多郡小坂子村字川白田	阿弥陀堂	南勢多郡下細井村字宮前
		金剛寺	南勢多郡関根村字赤城
		日輪寺	南勢多郡日輪寺邨字宮本
		香集寺	南勢多郡上小出村字村中
		光運寺	南勢多郡上細井村字宿
		真珠寺	南勢多郡下細井村字宮前
		龍蔵寺	南勢多郡龍蔵寺村字寺前
		大興寺	西群馬郡川原島新田字台
		宝林寺	南勢多郡田口村字千手堂
宗派	天台宗	宗派	天台宗
本末関係	近江国滋賀郡坂本村延曆寺末	本末関係	同郡竜蔵寺村竜蔵寺持
本尊	阿弥陀如来	本尊	千手觀世音
			百番觀音
			阿弥陀如来
			不動明王
			聖觀世音大士
			阿弥陀如来
			虚空蔵
			阿弥陀如来
			千手觀音
			十一面觀音
			藥師如来
			弥陀如来
			十一面觀音

桂 萱

寺院名	所在地	宗派	本末関係	本尊
薬師堂	南勢多郡堤村字薬師	天台宗	同村正円寺持	薬師
薬師堂	南勢多郡上泉村字鑄物師皆戸	天台宗	同村宝禅寺持	十二薬師如来
仏神堂	南勢多郡上泉村字一瓦屋	天台宗	同村宝禅寺持	薬師如来
薬師堂	南勢多郡上泉村字西久保	真言宗	東群馬郡前橋芳町東福寺持	薬師如来
観音堂	南勢多郡上泉村字南勢多郡上泉村字出口	真言宗	東群馬郡前橋芳町東福寺持	観世音
薬師堂	南勢多郡亀泉村字宮久保	天台宗	同村如意寺持	三面薬師如来
地藏堂	南勢多郡亀泉村字本郷	天台宗	同村如意寺持	愛宕地藏尊
龍洞庵	南勢多郡荻窪村字宮本	真言宗	同郡河原浜村玉蔵院持	大日如来
相統庵	南勢多郡荻窪村字本屋敷	真言宗	同郡河原浜村玉蔵院持	延命地藏尊
玉蔵院	南勢多郡西片貝村字寺西	天台宗	那波郡山王村禅養寺末	阿弥陀如来

摩多利堂	南勢多郡関根村字内山	真言宗	同村金剛寺持	摩多利天
観音堂	南勢多郡日輪寺村字宮本	真言宗	同村日輪寺持	十一面観音
観音堂	南勢多郡下小出村字西竹政	天台宗	同郡竜蔵寺村竜蔵寺持	千手観音
薬師堂	南勢多郡上細井村字薬師	天台宗	同郡竜蔵寺村竜蔵寺持	薬師如来
観音堂	南勢多郡上細井村字宿	天台宗	同郡竜蔵寺村竜蔵寺持	千手観音 百番観音

西方寺	南勢多郡江木村字寺前	真言宗	同郡河原浜村玉蔵院末	観音
宝禅寺	南勢多郡上泉村字瓦屋	天台宗	同郡端氣村善勝寺末	阿弥陀如来
西林寺	南勢多郡上泉村字前浪花	曹洞宗	同郡前橋向町橋林寺末	阿弥陀如来
如意寺	南勢多郡亀泉村字本郷	天台宗	同郡端氣村善勝寺末	阿弥陀如来
正円寺	南勢多郡堀之下村字二子山	天台宗	同郡河原浜村応昌寺末	聖観世音
玉泉寺	南勢多郡上泉村	真言宗	大和長谷寺末	阿弥陀如来

# 第七章 石造物

芳賀地区

勝沢町

一、勝沢町勝城神社

⑥	⑤	④	③	②	①	番号
石灯籠	石灯籠	手水鉢	石灯籠	石灯籠一对	鳥居	名称
	216 78 79	50 75 42	160 58 55	215 47 44	280 24	高・巾・厚
(側面)大正八年一月十八日 (台座)奉獻(奉拝者二十六名の名前)	(側面)天保十五甲辰十二月吉日 (台座)願主(三名の名前) 世話人氏子中	(正面)献奉 (側面)安政三丙辰歳秋九月吉日 願主中根武兵衛		(正面)奉納御宝前 文化十一卯戌九月吉日」氏子中	(年号)安永四未歳	銘  文

⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦
猿田彦	石祠	道祖神	猿田彦	石額	御神燈	獅子一对
63 30 11	52 40 51	88 30 21	57 30 20	37 25	30 13 9	
(正面)猿田彦	(お札)金毘羅大権現	(正面)道祖神	(正面)猿田彦 上部欠損	(正面)徭祖宮		(台座)石工 神藤刀永

⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑
石燈籠の脚	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
63・20	106・58・74	56・34・58	57・30・52	73・40・56	85・33・62	46・33・48
(正面)奉納御宝前 (側面)寛延元戌辰歳十一月吉祥日	(お札)八幡宮 (台座)明和五歳子霜月「勝沢惣氏子石工善昭」	(お札)稻荷大明神 (側面)延享元年九月吉日「樫沢氏	(側面)享和三癸亥七月吉祥日		(お札)天王宮 (側面)寛政五年六月吉日「樫沢氏	(正面)一宮 (裏)文化十一甲戌季秋吉日 (台座)信州高遠笠添村石工赤羽根和吉「定毅」當村願主「五十嵐平右衛門(他六名の名前)

㉒	㉓	㉔
石祠	石祠	弁才天
71・34・58	76・39・70	105・48・13
(正面)明和七年庚「寅十月吉日」敬白 台の石は別で、宝曆十三五日「石工善照」寄進子□□有□村守願主順慶代とある。	(正面)天満宮「横山講中」 (側面)嘉永三甲戌年「九月吉日」	(正面)大弁才尊天 (裏)文政十三年戊寅仲秋吉日「富兆已需講中

神社南に猿田彦一基あり

### 小神明町

一、小神明町小神明神社境内

②	①	番号
燈籠 一对	燈籠 一对	名称
167・61	214・81	高・巾・厚
(参道西側燈籠) 諸願成就「天満宮尊前」 同日日立之亮海	(正面)常夜塔「 (側面)寛政七乙卯」 九月吉日	銘文
(参道東側燈籠)文化元年甲子十一月日「 奉納御宝前」 正一位稻荷大明神		

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
祠 鹿島神社石	石祠 若宮八幡宮	稻荷社石祠	石祠	石祠	燈籠	天満宮石祠	稻荷社石祠	燈籠 一對
55・37	52・37	64・40	53・37	54・39	153・63	84・37	87・39	150・62
(正面)鹿嶋大明神	(正面)若宮八幡宮 (側面)文化九壬申八月十五日 後藤氏子中	(正面)稻荷大明神	(右側面)文化十一甲戌歳 (左側面)四月大吉日	(正面)元禄六年 西九月吉日	(燈身側面)奉納御宝前 已待燈 寛政十一己巳歳 十一月吉日	(右側面)寛延二年 己巳四月吉日 (左側面)存須代 村氏子中	(右側面)存須代 (左側面)村中 寛延二年 己巳四月大吉日	(燈身部)御神燈壹対 寛政九丁巳年 願主 九月吉日 萩原十左衛門 從是七間敷石通 施主 御拜殿雨落拾三間共 右同

④	③	②	①	番号
燈籠	回国供養塔	筆塚地蔵立像	寒念仏供養六地藏石幢	名稱
119・45		1.9	151・49	高・布・厚
(燈身)文化十二乙亥年 奉納御宝前 十月吉日 小神明村 石原常助	(正面)秩父 坂東 百番供養塔 西国 (背面)文政八乙酉九月吉辰 願主 萩原十左衛門重保	(台石)筆子中 (台石)筆子氏名二八名、年号不明	(幢身)寒念仏供養 宝曆五 乙亥稔 十一月吉日 即泉代 古神明 惣村中	銘 文

二、小神明町靈園内

⑮	⑭	⑬	⑫
八幡宮石祠	石祠	諏訪社石祠	西宮石祠
44・28	52・34	56・37	56・38
(正面)八幡宮 (右側面)天明四年 辰七月日 (左側面)文舟代 村中	(右側面)天明七丁未年 十一月吉日 (左側面)施話人 當村中 孫右衛門	(正面)諏訪大明神	(正面)西宮大明神



端 氣 町

一、端氣町善勝寺境内

番号	名 称	高・中・厚	銘	文
②	六地藏	165 105	(正面)勿令氏且在三惠趣 七月〔歎善日〕 (側面)安永七戊戌天「權律師亮全」六月十日 二日「宝曆六」露觀童女「六月二十四日」寛延四辛未年「四月十四日」俗名「當邑」太左工門 (裏面)施主「鳥取村」平林	(地蔵背面)安永八己亥年現在未來天ハ衆我今怒勤付薦汝□大神通方□亮海代立之 (台石側面)石工「信務高遠」太平治「惣八」安左衛門「丸彫坐像」

番号	名 称	高・中・厚	銘	文
⑦	二十二夜塔	127 30 69	(正面)如意輪觀音像 (右側面)嘉永二庚戌年「四月吉祥日」 (左側面)二十二夜 (台石)當村中「発願主」念仏連中「十二人」世話人「後藤忠七」當院權律師善信「代建之」	
⑥	阿弥陀如来坐像	110 60	(台石)融通念仏「億百万遍」先祖供養 寛政十戊午年四月吉日	
⑤	燈籠	118 47	(燈身)文政六癸未十二月吉日 長岡藤蔵	

番号	名 称	高・中・厚	銘	文
⑥	二十三夜塔	61 40	(正面)明治二己巳年「二十三夜塔」九月吉辰日	
⑤	法華塔	186 121	(正面)法華萬部塔 (背面)享和三癸亥年万千部三十世亮海 六月十六日二百部三十一世亮海 五百部「山門」覺常房惠海「五百部」山門「要境房英蓮」五百部「十老」教王房邦蓮「二百部」学寮「十行房晃海」百部「檜戸」光明院充海「百部」上細井「光運寺仏海」百部「當寺」觀了房亮海「百部」十老「禮妙房長海」三十部「伴頭」常智房亮天「五百部」塚田「普光寺廣音」二十部「十老」皆成房寬蓮「三十部」学寮「高城房長圓」三十部「栃木」圓通寺義蓮「五十部」淺草「医王院長清」 (台座)普及於一切我等與衆生	
④	阿弥陀坐像	153 71	無銘 (近世後期の作)	
③	阿弥陀如来坐像	176 95	(台座)當院住八世「禎山聖順氏」回向之牌名「當尊取藏内」寛保三癸亥天二月大善日 (裏面)守屋利直「南和常信」作之	

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦
百番供養塔	庚申塔	馬頭観音塔	馬頭観音塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔
186 ・36 ・36	94 ・30.5 ・30.5	52 ・35	47 ・32	37 ・38	44 ・37	55 ・42	44 ・24
(正面) 百番供養 (側面) 安永四乙未天八月吉日一 上永菩提下化衆生 願主 當村 大谷外兵衛 同 吉右衛門	(正面) 庚申供養寶塔 (側面) 于時元禄七甲亥天霜月吉日 鳳信檀 主 (二十三人) (碑の上部に日月、下部に三猿を刻出。)	(正面) 馬頭観世音	(正面) 馬頭観世音 (側面) 角田氏	(正面) 丙戌天「塔」久八 (年号部分と上部欠損、庚申塔と思われる。)	(正面) 庚申塔「欠損」四月吉日 上部欠損	(正面) 庚申「滋野	(正面) 文政八乙酉歳「庚申塔」 十月吉日

⑲	⑱	⑰	⑯	⑮
石祠	対 石燈籠 一	道しるべ	道しるべ	馬頭観世音 塔
95 ・44	170 ・68	61 ・20 ・19	71 ・40	62 ・31
(側面) 當邑中「寛政七卯天」三月吉日	(右) 御神燈「願主」 文久二壬戌年「角田善兵衛」 九月吉日「同 寿兵衛」 (左) 御神燈「願主 角田善兵衛」 同 善兵衛 (日枝神社の正面に奉納されたもの)	(背面) 北 鳥取 赤城山 道 西 上細井 道 大胡町 道 五代村 道	(西関根 道) 東大胡 道 北山 道 南前橋 道	(正面) 弘化四丁未年「馬頭観世音」 九月吉日 横田氏

27	26	25	24	23	22	21	20
阿弥陀如来 立像	宝篋印塔	地藏菩薩立 像	鳥居	石祠	猿田彦神石 碑	馬頭觀音像	庚申塔
95・34	150・44	124・94	232・187	60・43	36・19	57・30	76・40
(近世中期丸彫像)	(基礎)百番供養「當院現住法印廣運謹書」 志村中 (土台右側面)安永四歲己未八月吉日 (塔身には四方仏種子を刻む) 寄進「六本木六右衛門」同 庄兵衛 信房伊奈郡「日影村」池上平七	(側面)奉造立供養地藏十六日念仏「数年巡 礼□世安樂也」享保四乙亥天十一月 十六日」	(社標)大神宮 (柱文化三丙寅年立之) 五月大吉 祿日 當山亮海 (日枝神社の鳥居となつてゐるが社標は大 神宮)	(側面)弘化四丁巳年「二月吉日」當村中	(正面)猿田彦大神「角田□」 (側面)明治二己巳天五月吉日	(正面)明治廿六年二月吉日 (馬頭觀音立像) 角田芳造	(正面)天保十四癸卯年「庚申塔」 二月十一日」 (側面)講中「七名の氏名略」

5	4	3	2	1	番号	28
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	名称	阿弥陀如来 立像
92・28.5 24	103 36.5 34.5	47 33 10	70 28.5 12	262 82 20	高・巾・厚	54・27
(正面)庚申塔」 (右側面)寛政丙辰年」 (左側面)霜月吉祥日 (上部に日月を彫出す。)	(正面)元禄七成年」 (庚申種子)庚申供養寶婆「十月廿六日」 (右側面)吉田五右衛門「片貝惣兵衛」 (左側面)吉田久衛門「片貝八郎兵衛」 高井小兵衛 (正面上部に日月と二鶏、下部に二猿を彫 出している。)	(正面)庚申	(正面)庚申	(正面)青面金剛塔」 (側面)世良田山五十五世僧正要順謹書	銘	(正面)南無阿弥陀佛 (立像)享保十六亥十二月朔日
一、五代町五代神社境内						文
五代町						

⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥
天王石祠	観音石堂	思兼神碑	甲子塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔
66 43.5 77.5	98.5 58 58	97 35 9.5	32 28 26	128 99 28	57 63 11	133 60 15.5
(背面)享和元辛酉歲 六月吉日「建之」 (台石背面)石工「信州高遠笠原邑」 赤羽好廣 (石祠側面にヘチマ、基礎に波と鬼を刻む。)	(正面)奉納観世音 (右側面)文化六己巳年 (左側面)十一月吉日 村中 (碑上部に唐破風の石堂型屋根をあげ、碑の上部一七纏、中部一四・五纏、下部二四纏で、下部を広げた衣を思わせる。傍に高さ八五纏の観音石像あり。)	(正面)思兼大神	(正面)甲子大黒天 (右側面)元治元季甲子一 三月建之「碧山敬書	(正面)猿田彦大神 世良田山五十五世僧正要順謹書	(正面)(庚申種子意) (碑は円版状で種子のみ刻む。)	(正面)庚申塔 (背面)世良田山僧正要順謹書

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲
秋葉神社石祠	十二様石祠	熊野神社石祠	無銘石祠	天照皇大神宮碑	狛石 一对	石燈籠 一対
94.5 53.3 86	68 45 71	73 37 53	62 30.5 46	62 30.5 46	57 24.5 48	154 61
(正面)秋葉宮 (側面)寛政十年天「五月吉日」當村講中 (石祠は流れ造)	(正面)十二宮 (右側面)寛政十一己未「九月吉日」 (流れ造)	(右側面)奉納熊野権現 (左側面)享保二辛丑天「施主」 八月十八日「杉山藤七」 流れ造。	(流れ造。)	(正面)天照皇大神宮 (背面)参拝記念「鹿野清之助」 吉田三代八 吉田周吉 吉田い志 昭和十五年三月吉日	(台石)昭和十六年三月廿六日 紀元二千六百一年 (台石には奉納者の人名十六人を刻む。)	昭和十二年十二月

②①	②②
札 五代神社棟	札 五代神社棟
94 ・ 23 ・ 0.5	93.2 ・ 23.3 ・ 0.5
<p>大工中川町」 飯塚弥右衛門」(裏面)者有衆生建立立宮殿」(人名多数略)」 上野國勢多郡惣氏子中」 来神」入於其中」</p> <p>遷宮導師」 良場山」善勝寺聖順」</p> <p>令千里内」五穀豊饒諸人快樂之處」 罪禍不生」</p> <p>導師弥勒慈尊 六月二十七日」 惣戒師积迦世尊」 (表面下段)五代村」持主六本木武右衛門」</p> <p>哀愍衆生者 小行事帝积天王 我等今敬礼」</p> <p>頭昌栄国家安全氏子繁茂」 奉再建鎮守赤城大明神宮殿拜殿献納神器社</p> <p>大行事梵天 戒師文殊大士 戒行師観音大士</p> <p>享保十五庚戌年」</p> <p>(表面上段)聖主天中天 迦陵頻伽聲</p>	<p>(正面)惣氏子中」 大願国主四位少将酒井河内守」 家中本田刑部左衛門尉」 (台石)五代村」弥左衛門(外十名略)」 沖村」(二十一名略)」 鳥取村」(二十六名略)」</p>

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
④	薬師如来坐像	74 ・ 55 ・ 29	(近世後期の作)	
③	地藏菩薩像	98 ・ 30 ・ 20	(近世後期の作)	
②	地藏菩薩像	102 ・ 35 ・ 21	(近世後期の作)	
①	六地藏菩薩像一对	203 ・ 49	(近世中期の作)	

三、五代町共同墓地

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	庚申塔	112 ・ 88 ・ 28	(表面)庚申塔」 (台石)右 米の」左 まへはし」 (裏面)寛政十二庚申年」 十一月吉日」講中台石の高さ四五 糶、巾一一三糶、厚さ六一糶	

二、五代町藤沢川淵

四、五代町木福様境内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
③	庚申塔	81・30・17	(正面) 庚申	
②	不動尊塔	88・78・5	(正面) 万延元庚申 安山岩の板状の石に不動の種子を刻む。	
①	異型板碑	113・66・55	(正面) (多孔質安山岩を三面加工し、正面に粹取りし弥陀三尊種子を刻んでいる)	

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
⑥	庚申塔	157・30.5・31	(塔身部) 庚申供養為現當 元禄三庚午年仲春下旬 片貝窓右門「梅原市兵衛」 片貝弥右工門「片貝五右門」 吉田作兵衛「片貝□右門」	(台石に「明和五戊子天九月吉日念仏供養施主卅四人」とある。石祠形庚申に後に台をつけ塔形にしたものか。)
⑤	二十二夜塔 (如意輪観音像)	88・36.8・33.2	(右側面) 寛政十二庚申歲 (左側面) 十一月吉祥日 (台石) 世話人「発願光西」 同勝之助 當所「女人講中」 石工「信州高遠」久保田伊左衛門	(正面に如意輪観音坐像を刻む。)

小坂子町

一、小坂子町小坂子町公民館

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
②	供養塔	121・34・28	(正面) 百番供養塔 (側面) 明和四丁亥天	八月吉祥日「氏名四名」
①	供養塔	56・53・30	(正面) 百八十八番供養塔	文化元年十一月

五、五代町岩久保橋西道路傍

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
②	馬頭観音塔	35.5・8.5・14	(正面) 馬頭大士 (側面) 天保二寅八月日	町田氏 (この塔の所在地の前の道は、近年まで宮城村方面から前橋への道で、かなり多く利用されたという。)
①	馬頭観音塔	92・50・9	(正面) 馬頭観世音 (背面) 昭和五年一月吉日	町田氏

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
④	常夜塔 一対	264・91	(正面) 常夜塔 (側面) 文化五戊辰年	十月吉日建之 願主 當軒中「台石高さ六七樞

嶺 町

一、嶺町 嶺小の西

番号	名称	高・巾・厚	銘 文
①	観世音菩薩	145・54・51	(正面)西国秩父坂東百處大慈大悲観世音菩薩是故供養造立観世音尊容岫塔結願所邑為眷屬慈父母願成佛界也為經施普自他同證佛乘□已福田弥左衛門謹書願以此功德普及於一切我等与衆生皆共成仏道 (側面)享保元丙申年冬中旬
②	石 祠	124・53・51	(正面)虚空菩薩 宝永八年吉日

番号	名称	高・巾・厚	銘 文
③	馬 頭	38・30	(側面)明和四 (大部分が土の中)
④	宝篋印塔	441・87・88	(台座)宝曆十一年辛巳初夏 石工信州高遠北原庄作法印有□代 願主信州休善
⑤	延命地藏二基	150240 26 37 16 26	
⑥	五十嵐和泉守の碑	170・70・25	(正面)(本文は別 (年号)延享二乙丑年七月二十二日 松崎永哉叟立 東郡井通照撰
⑦	百庚申 (公民館東)		七十五基を確認。元禄二年、靈元霜月大吉日、嘉永四年九月日、宝永六己丑年十一月、明和四丁亥天のものを確認した。

二、嶺町 嶺公民館

番号	名称	高・巾・厚	銘 文
①	庚 申	156・48・23	(正面)庚申
②	庚 申	現状 67・13・58	(上部欠損)
③	庚 申	73・31・15	(正面)庚申塔
④	庚 申	50・31・12	(正面)庚申
⑤	庚申像	現状 33・8・33	(正面)癸卯歲 吉日音木久

番号	名称	高・巾・厚	銘 文
③	二十二夜塔		(正面)二十二夜塔 (側面)弘化二年四月吉日

三、嶺町 大峯神社

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
石 祠	石 祠	石 祠	石 灯籠 一 対	石 灯籠 一 対	庚 申	庚 申	名 称
39 ・ 25 ・ 44	39 ・ 25 ・ 37	62 ・ 33 ・ 49	140 ・ 43 ・ 42	148 ・ 49 ・ 49	32 ・ 16 ・ 15	63 ・ 36 ・ 12	高 ・ 巾 ・ 厚
	(側面)文政□□六月吉日	(裏)生佐州大野村□報養恩寺一世□快端弟 子□□快鎮俗性長□□渡辺□□ (右側面)天明七丁未年 (左側面)五月吉日 (台座)男女水供中「法印快鎮代」	(正面)奉納御宝前 (側面)寛政二庚戌歲七月吉日 當所青木氏 左も同じ	(正面)奉納御宝前 (側面)寛政十一年己未七月吉日「當所氏子 中(左のものは願主池田氏、他は同じ)」	(正面)庚申	(正面)庚申	銘  文

⑰	⑱	⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧
猿 田 彦	庚 申	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠
50 ・ 31 ・ 15	34 ・ 35 ・ 19	57 ・ 35 ・ 58	48 ・ 22 ・ 33	60 ・ 29 ・ 55	66 ・ 37 ・ 52	43 ・ 29 ・ 47	57 ・ 28 ・ 48	56 ・ 33 ・ 49	48 ・ 29 ・ 39
(正面)猿田彦大神	(正面)庚申								



⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 燈籠 一 對
60 ・ 32 ・ 51	98 ・ 51 ・ 80	74 ・ 35 ・ 39	50 ・ 30 ・ 50	48 ・ 30 ・ 51	54 ・ 29 ・ 46	50 ・ 30 ・ 47		45 ・ 29 ・ 44	113 ・ 50 ・ 48
	(正面)貴船神社 (側面)世話人「青木松治」千治「佐□治」 氏子中	(側面)□月吉日「氏子中」 (台座)男女	(側面)文政九年「八月吉日」	(側面)文政九年「八月吉日」氏子中	(側面)明治八乙亥年「菊月」吉祥日	(側面)文政元寅三月「若宮八幡」	(側面)文化二乙丑歲「七月吉日」田邑氏		(正面)奉納御宝前「當所青木氏」寛政七乙卯二月吉日「左は年号欠」

②	①	番号
像 如意輪觀音	宝篋印塔	名 称
	220 ・ 86×86	高・巾・厚
(側面)當村女人講中「天保三壬辰年三月吉日」世話人「十五人氏名」 (台座)高遠石工北村万之助□徳□	(側面)大発願主法印尊秀「護持施主當邑惣檀那中」維宝曆二壬申宿辰文月吉日「如我昔所願今者已満足化一切衆生皆令入佛道」 (台座)石工 信州高遠郷北原庄兵衛「安右衛門」	銘  文

四、嶺町天沼薬師前

⑳	㉑	㉒	㉓	㉔
猿田彦	石 燈籠	石 燈籠	石 祠	石 祠
	205 ・ 33×33	162 ・ 60 ・ 60	53 ・ 27 ・ 42	51 ・ 31 ・ 43
(正面)猿田彦	(正面)奉納御宝前「氏子中」 (側面)延享四丁卯歲正月吉日	(正面)奉納御寶前「邑池田米蔵」 (側面)寛政十一己未歲七月吉祥日「願主當		

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
庚申塔	石祠	庚申塔	供養塔	供養塔	大日如来	馬頭観音	供養塔	青面金剛
125 ・30 ・22	60 ・30 ・40	153 ・61 ・17	80 ・30 ・29	113 ・30×30	81 ・40 ・24	215 ・70 ・30	150 ・70 ・42	190 ・70 ・30
(正面)奉造立庚申供養「宝曆七丁丑天」九 月吉日 (側面)(氏名九人)		(正面)庚申塔	(正面)百八拾八番供養塔 (側面)文化十年癸酉「正月吉日 田虎権吉」 (上部に阿弥陀三尊のキリーク。)	(正面)念佛供養 (側面)當邑講中「宝曆四甲戌十月吉日」 (阿弥陀の種子キリークが上部にある。)	(正面)大日如来「安永戊□五月吉日」	辰 (正面)馬頭世音大士「万延元庚申年十月良辰」	(正面)廻國供養塔 (側面)越後州頸城郡山戸邑「聖□」明和二 乙酉檢二月吉祥日	(正面)青面金剛 (裏)万延紀元龍集庚申

①	番号	名称	高・巾・厚	銘	文
石祠					
				(正面)天王様 (側面)文政元戊寅「六月吉日」嶺久保中	

五、嶺町久保公民館庭

天沼薬師の西側墓地の南には、庚申が三十基ほどある。

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
庚申像	庚申塔	青面金剛像	庚申塔	庚申塔	庚申塔
123 ・44 ・45	74 ・33 ・24	62 ・39 ・18	110 ・52 ・36	92 ・29 ・29	116 ・23 ・19
(側面)奉造立庚申供養「享保十五」庚戌天十 月日 (台)(氏名三人)	(正面)庚申 (裏)寛政十二庚申年晩冬吉祥日	(高)現状	(正面)庚申塔 (裏)延享四丁卯天十月吉辰「富邑 施主 (講中六人)」	(正面)庚申塔 (裏)延享四丁卯天十月吉辰「富邑 施主 (講中六人)」	(正面)奉造立庚申「延宝八」正月廿九日 施工「和南

③	御神塔	175 73 55
②	石祠	48 30 38

六、嶺町請地公会堂庭

②	道祖神	127 30 2.5	(側面)同月日
①	庚申塔	168 41 13	(正面)庚申塔「當邑講中」天保三辰三月吉日

七、嶺町嶺小学校西側

①	地藏菩薩	73 23 15	銘
	名稱	高・巾・厚	文

南橘地区

上細井町

一、上細井町細井神社

⑥	一燈 対籠	168 140 70 73	御神燈「文政八乙酉天三月吉日」 荒屋鋪
⑤	狛犬一對	87.0 64 33	納主 当村岡庭鶴吉「昭和十五年三月建之」 石匠 西村文徳「(向つて左)岡庭徳次郎」 (台石に「皇紀千六百年」とあり)
④	鳥居	251 206	細井神社 施主 惣氏子中 宝曆十年天十二月十日
③	水盤	62.5 103.5 61	納主 野田勇太郎「昭和九年十一月」 特別大演習記念
②	燈籠	190 56	端氣田講中「文政十丁亥歲」 季香吉日
①	燈籠	174 52.5	秋葉宮「文政八乙酉六月吉祥日」 御神燈

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦
石祠	八王寺宮	石尊	庚申	石祠	弁財天	弁財天	石祠	石祠 (稻荷)
51・27・49		61・68・62	98・65・91	78・50・76	69・49・71	79・49・78	46・30・54	72・33・53
文化四卯年五月「長谷川氏	明治十七甲申年十月吉日「八王寺神社	大天狗「石尊宮」小天狗	于時寛文五天巳十月十日「上叟勢田郡上細井村(二猿を刻む)	(無銘)	享保十八癸丑「九月吉祥日(弁財天カ)	奉納「石堂建立敬白」天保三壬辰曆九月廿一日(弁財天カワの梵字あり)	(無銘)	(無銘)
								稻荷大明神「新田中」文化十三年子二月吉日


⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖
石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
62・31・51	53・27・46	30・46	61・31・50	52・26・42	82・40・71	
寛政二庚戌歳五月吉祥日「長谷川氏(摩多利神の伝承あり)	文政四年九月吉日「内田氏	(台石に)本宿中(堂身欠)	寛政九丁巳天七月吉祥日	(無銘)	文化十一甲戌十月九日「荒屋鋪講中	湯殿三供「羽黒
						巖 文政三庚辰八月吉日「月山」

二、上細井町光運寺

⑤	④	③	②	①	番号
地藏	念仏供養	庚申塔	回国供養	馬頭尊	名 称
170 ・ 37 ・ 24		110 ・ 57 ・ 33	117 ・ 60 ・ 20	115 ・ 75 ・ 25	高・巾・厚
(台石)相川廣政聖富	巖三界萬一靈明和二乙酉天」寒念仏供養」 二月吉祥日」清譽浄生	庚申塔」寛政十二庚申歳三月吉日」金子角 左エ門」同光右エ門」 同義右エ門」岡庭兵七」 内田吉兵エ」同彦八 (碑面に日月を刻む)	百八十八番供養」文化三丙寅載大吉旦」 粕川廣當母	馬頭觀世音」寛政六甲寅稔五月吉日」 北代田村」青柳村中」下小出村 (追刻)軍馬之靈 昭和十二年より十九年に至る間多数の軍馬 の徵発を受け祖国に殉じた霊を弔う尚此の 墓碑は北代田より富士見鍛錬場へ移転した るも戦後荒廃せるを憂え大谷益長氏同志に 詢り二十八年春此の地に安置す	銘 文

⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥
二十二夜塔	回国供養	念仏供養	馬頭觀音	馬頭觀音	宝篋印塔回 国供養	回国供養	回国供養
150 ・ 60 ・ 58	150 ・ 55 ・ 55	88 ・ 44 ・ 33		53 ・ 25 ・ 17	304 ・ 98 ・ 99	93 ・ 34 ・ 28.5	100 ・ 33 ・ 28
養 天王 端氣田 本宿 新田 女講中	寛政三辛亥年」 (如意輪觀音像)六月吉祥日 (隣の台座に)願主 仰誉浄念二十二夜供	寛政三辛亥年」 奉納大乘妙典供養塔」六月吉祥日 (台座は二十二夜塔のもの)	文政六癸未天」馬頭觀世音」八月吉日 鈴 木氏	宝曆十庚辰天」馬頭觀世音」三月吉祥日	泰平 願主 修誉圓求」 宝曆四甲戌歳三月吉祥日	願主 金子角左衛門本高 百番供養塔」 文化二乙丑星五月吉日」 願主 金子角左衛門本高	奉納百番供養塔」 明和四丁亥天四国霊場」 中冬吉祥日」

三、上細井町字西堀金井家墓地

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	庚申塔	53・32・13	庚申塔「寛政十二年初夏吉日」	
②	石祠(念仏供養)		 奉造人□□人一結 (四人の名) 寛永九年壬十一月八日	

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
⑭	地藏	98・24・21	無縁地藏尊 昭和十三年十二月十七日 細井山光運寺兼 青柳興道代 願主金谷静謙	
⑮	石祠	84・44・44	享保二十年「九月廿」上細井村 鈴木兵吉	

四、上細井町字西堀

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	燈籠(石尊)	182・81	大天狗小天狗御神燈 天保十一年庚子年「六月吉辰建之」	

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
③	石造観音像	101・29・24.5	(台座) 願主 弘化乙巳年「金井頼左衛門」 (観音像) 同茂兵衛 四月吉日「同文五左衛門」同庄作 同逸八「鈴木常八」 椎名平右衛門「西堀中	
④	燈籠	156	(右)安永四乙未天願主 奉納御宝前「金井八郎治」 八月大善日	
⑤	燈籠	158	(左)宝曆十庚辰天「当村中」 奉納石燈籠阿弥陀如来御宝前 十月大善日「金井伝六	

五、上細井町字南灰俵長谷川

番号	①	②
名称	摩多利神	燈籠
高・巾・厚	97・48・82	123・52
銘	摩多利神「端氣田講中」	御神燈「天保十年三月吉日 願主岡庭氏」
文		

六、上細井町字荒屋敷

番号	①	②	③
名称	地藏像（念仏供養）	如意輪觀音像	燈籠（石尊）
高・巾・厚	167・30・18	106・31.5・27.5	157・80
銘	念佛供養「寛保三癸亥天九月吉日」求普	寛政二庚戌四月吉日「如意輪觀音像」女人講中	大天狗「天保庚子年石尊大権現」七月吉日「十二天狗」
文			

七、上細井町字天王

番号	①
名称	燈籠
高・巾・厚	170・85
銘	文政六癸未天弥生吉辰「御神燈」願主「天王中」
文	

八、上細井町字新田

番号	①	②	③
名称	六地藏	地藏像	燈籠（秋葉山）
高・巾・厚	101・44	195・37・24	
銘	丁安政四年「伏見地藏尊」巳五月吉日新田中「伏勝地藏尊」諸龍地藏尊「護讀地藏尊」無二地藏尊「禅林地蔵尊」六角塔	天文二稔丁巳閏霜月二日	奉獻「秋葉御神燈」文政十三庚寅年四月吉辰
文			

北代田町  
一、北代田町八幡宮境内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
⑤	石祠	68・34・62	(側面)寛政十二庚申天「八月吉日	
④	石祠	67・34・57	(側面)寛政癸巳年「四月吉日」講中	
③	石祠	49・29・39	(側面)當所住「福本長右平」十一月吉日	
②	石祠	93・58・80	(正面)天満宮 (裏)北代田村「願主」高野久右衛門「寛延四年辛未六月吉日	
①	道祖神	104・44・25	(正面)道祖神「安永四乙未歲」十一月吉日	

⑥	燈籠(秋葉山)	71	御神燈 文政八乙酉年五月吉日「源海居士(燈身のみ)	
⑤	馬頭観音像	75・32・13	明和八辛卯年「四月吉日」	
④	石尊		石尊宮 文政六癸未年四月吉辰「	

二、北代田町内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
⑧	馬頭観世音	55・33・12	(正面)馬頭観世音 (裏)寛政二申天「十月吉日	
⑦	馬頭観世音	44・25・12	(正面)馬頭観世音 (裏)天明八戊申「四月吉日」関口氏	
⑥	馬頭観世音	50・25・8	(正面)馬頭観世音 (裏)寛政二庚戌天「六月吉日」関口氏	
⑤	馬頭観世音	180・60・16	(正面)馬頭観世音 (裏)嘉永三年庚戌仲春「北代田村中	
④	地藏像	62・33・15	(側面)安永四「十一月吉日	
③	地藏像	85・23・18		
②	馬頭観世音	53・15・8	(側面)明治三十四年八月廿日「狩野岩右衛門	
①	石祠	50・28・43	(側面)天保五甲午五月吉日「狩野氏中	



⑨	供養塔	182 37 34	(正面)二十二夜供養 (裏)寛政十二稔歳次庚申仲秋□旦 (台)女人講中
---	-----	-----------------	---

三、北代田町内墓地

②	百番供養塔	115 28 23	(右側面)天保五年十一月吉日 (左側面)願主□□女
①	六地藏石幢	75・二面 の巾19・ (径)33	
番号	名 称	高・巾・厚	銘 文

下細井町

一、下細井町309付近

③	石祠 (秋葉さま)	85 47 47	(側面)天明六丙午歳 十月吉祥日 富村中 願主宝譽善林
②	道しるべ	58 22×20	南本村ヲ経テ桂萱村幸塚エ行一西北代田ヲ経テ前橋エ一東本村ヲ経テ芳賀村エ一北上細井富士見村時沢□□
①	石灯笼	137 100 15	(正面)石尊大権現献燈 大天狗 小天狗 弘化三丙午年七月朔日建之 願主村中
番号	名 称	高・巾・厚	銘 文

④	道しるべ	77 20×21	南前橋市道 地元下細井 懸崖約一里 東本村ヲ経テ芳賀村小神明道 西本村ヲ経テ北代田ノ道 北上細井経テ富士見村時沢道 ②の北に所在 旧赤城県道の道しるべ
---	------	-------------	---

二、下細井町203虚空蔵菩薩境内

③	菩薩像	105 42 18	(正面)寛政九丁巳天 七月吉祥日 鹽沢氏
②	石祠		(台座)水神御 (側面)昭和五年四月 水車組一同 (奇贈人四名の名前)
①	石祠	60 34 52	(側面)寛政八丙天四月吉日
番号	名 称	高・巾・厚	銘 文

下小出町

一、下小出町赤城神社

①	鳥居	350	(左脚)大正五年丙辰三月建立 (右脚)下小出青年会
番号	名 称	高・巾・厚	銘 文

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	⑤	③	②
石祠	道祖神	道祖神	水神火神	水神宮	摩多利神	石祠	石祠	灯籠	石碑
51・33・50		74・46・15	63・40・7	92・45・10	93・40・14	57・28・42		190	120・58・9
(正面)八幡宮 (裏面)明治三十年二月吉日「講中	(正面)道祖神 (裏面)寛永十二庚申年「三月吉祥辰	(正面)道祖神 (裏面)天明七丁未年「季□吉辰	(正面)奉天「水神」天祖□神御幸護「火神」 (裏面)丹津清太郎	(正面)大正拾年一月「水神宮」竹内宮島角田	(正面)摩多利神 (裏面)願主村中「天保十二辛丑」三月吉祥日「世話人」藤井七郎平(他四人)	(正面)秋葉宮 (右側面)明治三十六年「二月吉日」中曲輪中	八坂神社、四天王	自然石	(正面)鳥居之記「石工本間治八」文面は略す。

⑳	⑲	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱
道祖神	石尊宮	双体道祖神	山神堂	石祠	石祠	石祠	石祠
55・37・20	95・48・20	55・34・16	145・40・11	165・160・210	46・26・42	70・37・62	56・29・49
(正面)道祖神	(裏面)維時享和元辛酉稔「三月吉祥日」 (正面)大天狗「石尊宮」小天狗	(正面)(像あり)文化元甲子歳「三月吉日」上部が欠けている。	(正面)山神堂 (裏面)天保十二年丑年「三月吉良辰」願主村中「世話人」藤井佐治右衛門(他四人)	自然石を室状につんだもの。三峯神社		(右側面)弁財天講中 (左側面)安永二歳癸巳五月日 内部に三宝荒神の板あり	

上小出町

一、上小出町小出神社境内

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑦	記念碑	235 104 15	小出神社改築の碑「大正八年十月」大工棟梁大橋石松「石工下山亀一郎刻」(文面と寄進者名あり。)
⑥	鳥居	265 (脚径)23	(側面)宝曆十三癸未檢「重陽吉月十九辰日建之」 (額)小出大神
⑤	手水盥	76 60 102	(側面)大正八年十月十九日「世話人」 職工一同「(十町の十人の名。)
④	句碑		(藍澤無満のもの)
③	灯籠	162 56×58	(正面)石尊宮 (右側面)享和元年 (左側面)栗林彫 (裏面)村中
②	旗竿の石	230 27 32	(側面)大正八年十一月吉辰「当町氏子中
①	標柱	167 27 27	(正面)小出大神「上小出鎮座」 (側面)大正七年十二月十二日「石工栗林角藏

⑩	灯籠	162	(側面)文久二壬戌年「九月吉日」梁場中
⑨	狛犬一对		(昭和十年十月十九日のもの)
⑧	灯籠	215	(正面)御神燈 (裏面)大正八年四月 (台座右)梁場曲輪有志「十五人の名、左に十六人の名」 (台座裏)下山亀一郎刻
⑪	石祠		霜川神社「昭和四十四年十月吉日
⑫	灯籠	125 45×45	(正面)奉納御神燈 (右側面)維時三拾稔二月五日建之 (左側面)石工「藍澤辛三郎」
⑬	石祠	87 35 72	(正面)諏訪神社 (台座右)文久元辛酉年「林鐘吉祥旦建
⑭	石祠	90 38 64	(側面)享保十五年「十月日」 施主 文次郎(他九人天神か)
⑮	石祠	66 28 47	(正面)雷電神社 (裏面)明治三十丁酉年「二月吉日」梁場中
⑯	石祠	73 30 45	(正面)太腹宮 (左側面)万延元庚申年「十二月吉祥日」 (右側面)(四人の名)

⑳	㉕	㉔	㉓	㉒	㉑	㉐	㉑	㉒	㉓
石祠	灯笼	秋葉神	石祠型	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
73・30・49	155 40×40	90・62・30	110・75・95	73・34・52	45・27・39	89・38・69	76・36・64	58・28・45	65・29・48
(正面)秋葉神社「當邨中」 (右側面)明治十八年「酉一月吉日」	(側面)元禄九稔丙子四月吉日「當梁場中」 一對	(正面)秋葉神「 (右側面)文政四辛巳「転月大吉祥日」 (左側面)講中	三峰神社」石で家形に組んでいる。	(正面)河伯社	(屋根)天保十二年「十二月」藍澤氏	(正面)稻荷大神「 (台座)當村中」(世話人十七人)			(右側面)嘉永元年「 (左側面)□月吉日

⑤	④	③	②	①	番号
庚申塔	庚申塔	畜魂碑	庚申塔	供養塔	名称
100・44・15	78・40・24	99・46・9	86・34・10	102・43・40	高・巾・厚
(正面)庚申塔「 (右側面)寛政十二星庚申」仲冬吉辰」講中	(正面)萬延元庚申稔仲冬吉祥日「庚申塔」 八十五老□□□	(正面)畜魂碑「支那事变皇軍連勝而想軍馬 之劳功亦大」 (右側面)昭和十二年九月十七日「 長男逸大出征記念建碑」施主 平林逸次郎	(正面)宝永五年「奉造立庚申」子十月吉日「 吉左衛門(他六名) (右側面)上小出村	(正面)百万返供養「 (右側面)安永七戌戌年九月吉日」曲輪中	銘文

二、上小出町香集寺境内

28	㉗
灯笼	石祠
300	
	三峰社

⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥
道祖神	庚申塔	庚申塔	庚申塔	馬頭觀世音	馬頭觀世音	子權現	庚申塔
109 50 28	88 38 35	76 55 12	126 54 25	70 43 18	125 52 30	68 35 15	100 40 30
(正面)道祖神 (側面)秋七月吉辰建「宝曆十一辛巳年」	(正面)庚申塔 (裏面)干時當寛政十有二稔「庚申從輩三十 余寄合」為力□□今日建之	(正面)庚申塔 (裏面)寛政十二庚申歲 六月吉祥日「高橋定□(以下五人)	(正面)享保五庚子年「庚申供養」十月十七 日	(正面)馬頭觀世音 (右側面)明和八年 (左側面)卯十月吉日 (裏面)関口氏	(正面)馬頭觀世音 (右側面)慈時安永七戊戌年四月吉日 願主 (二十二)	(正面)子權現 (左側面)関口氏	(正面)庚申塔 (側面)寛政八辰年六月吉日

⑳	㉑	⑲	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱
庚申塔	庚申塔	六地藏石幢	灯籠	灯籠	薬師如来	二十二夜塔	宝塔
94 29 20	87 34 19	(径) 155 53	136 37×38	162 42×42	64 25	115 28 21 (総高)	254 64
(正面)享保二酉天九月吉日 庚申供養「橋爪五左衛門(他五人)	(正面)正徳元年「奉納庚申供養」十月吉日 (側面)三人「上小出村四人			(側面)元禄十三庚辰年「為菩提奇進者也」 十一月二十六日	(側面)文化十四丁丑三月吉日	(正面)如意輪觀音の像 (側面)明和三年七月建之 (台座)二十二夜尊「発起人堤みせ子(他十 人)	(側面)干時明和五戊子天初□□ 當山現住□□ 願主 當邑中 施主「荒牧村関根村山端村」 日輪寺青柳竜藏寺下□□

③⑩	②⑨	②⑧	②⑦	②⑥	②⑤	②④	②③	②②
聖観音	五輪塔	如来塔	石殿	十王像	五輪塔	石殿	青面金剛	庚申塔
56・27・10		60・40・9	80・60・47			106・90・59	86・40・12	96・37・19
(正面)(聖観音像)「百番供養塔」 寛政二(戌)六月吉日 (左側面)高橋氏	(一基)	(正面)如来塔 (裏面)昭和三十一年八月十五日 「招碑説計事一切」 独造願主 栗原秋□「号松風	(正面)三年 十二月七日	(高さ30cmほどのもの)	(高さ80cmほどのもの三十七基)	(正面)十二月七日	(青面金剛の像)	(正面)万治二「庚申供養塔」亥十一月十八日 (右側面)清右門(他五人)

④⑩	③⑨	③⑧	③⑦	③⑥	③⑤	③④	③③	③②	③①
念仏塔	大日如来	句碑	筆塚	句碑	馬頭観世音	如意輪観音	馬頭観世音	馬頭観世音	馬頭観世音
76・30・24	90・37・15	72・35・30	157・104・10	59・58・12	50・30・13	46・27・12	45・21・12	41・22・10	50・26・10
(正面)元禄八歳「南無阿弥陀仏」 十一月十八日 (左側面)宮下亦	(正面)大日如来	しばや君の「まま□□」とる 月夜かな「蕉祖」當庵社中「嘉永己酉冬霜月	(正面)枝鳴らす「かすむ」みやまの「おくも」 ふく「よし」よの中に「みみや」 お□□□「八十一老人無満	いづれに「あさはな」すむ「芭蕉翁」 梅の木「翁に」かまえぬ「すがた」かな	(正面)馬頭観世音像「文政三庚辰」八月二十三日「利川氏	(側面)安永八己亥天「十月十七日」利川氏	(正面)馬頭観世音像「明和五戊子天」十月吉日 (左側面)関□氏	(正面)馬頭観世音像「天保七丙申」七月吉日 (左側面)中嶋□	(正面)馬頭観世音像「明和八辛卯天九月吉日

龍藏寺町

一、龍藏寺町青柳大師南

③	②	①	番号
馬頭觀世音	地藏像	五輪塔	名称
170 30 16	130 35 20	190 90 80	高・巾・厚
銘			
文			

二、龍藏寺町公民館内

③	②	①	番号
石祠	双体道祖神像	道祖神	名称
82 27 53	61 38 18	80 40 25	高・巾・厚
銘			
文			

石祠

⑧	⑦	⑥	⑤	④
石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
66 31 54	103 60 88	86 43 71	73 30 50	79 33 55
銘				
文				

三、龍藏寺前の墓地

①	番号
石幢六地藏	名称
178 (笠巾)21	高・巾・厚
銘	
文	

四、龍藏寺町青柳大師内

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
地藏	馬頭観世音	馬頭観世音 像	馬頭観世音 像	石燈籠	狛犬一对	石燈籠(一) 対元三大 師献燈	名 称
49・25・11	52・30・13	58・27・28	53・32・15			230 78×78 (台高)62	高・中・厚
文政十三年「先祖代々」十一月日「茂八	文政三辰天「馬頭大士」九月吉日	享保元丙申天「八月吉祥日	天明八戊申歳「三月吉日	慶応四戊辰年「七月日	大正十二年のもの	(東のもの)明治二十六年十二月吉祥日「 信者中」(氏名あり) (西のもの)文久二年歳在壬戌仲冬吉日「 発揮人」今井泰蔵「成崑幸太夫」世話人「 渋川利兵衛(他八人)	銘 文

⑰	⑱	⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧
庚申	菩薩半跏思 惟像	観世音菩薩	馬頭観世音	庚申	庚申	石塔	馬頭観世音 像	馬頭観世音 (道しるべ)	馬頭観世音 像
76・25・22	46・20・13	56・30・13 (現状高)	47・23・12	79・34・25 (現状高)	74・45・24 (現状高)	114 35×35	56・25・15	72・32・20	69・33・19
宝永六己丑天「奉供養庚申」十一月吉祥日「 施主」敬白		(裏面)享和元辛酉歳「七月造立	文政十一戊子年「馬頭大士」三月吉日「今 井氏	寛政八年丙「孟春吉辰建」願	寛政十一己未天五月吉日	上州伊香保「木村喜兵衛愛旦」文化六己巳年 十二月	安永八己亥天「九月吉日	天明七丁未年「八月吉祥日」今井左衛門「 東をふこ(大胡)」北あかき「南まひ橋(前 橋)」西こめの	延享元甲子年三月吉日



青柳町

一、青柳町南橋団地南

①	番号	名称	高・巾・厚	銘	文
		道祖神			
			60・36・23		
				(正面)道祖神 (側面)寛政十年三月吉日	

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧
菩薩	馬頭觀世音	庚申	馬頭觀世音像	馬頭觀世音	地藏	馬頭觀世音像
44・17・10	38・23・13	105・49・18	47・28・14	52・24・14	57・28・18	136・27・20
観□□女」正徳四甲午天九月二日	天保七丙申年」馬頭大士」六月」施主」洪川氏	(裏面)文久元年歳在辛酉十一月」當村中	文政十三年」寅四月吉日	天明八申天」七月吉日」細野氏	奉造立村中」元禄十丁丑年	(裏面)寛保三癸亥稔」初夏中旬

二、青柳町雀神社境内

①	番号	名称	高・巾・厚	銘	文
		石鳥居			
			260・280・22		
				天明二壬寅年季秋吉日	

⑦	⑥	⑤	④	③	②
庚申塔	供養塔	庚申塔	観音	馬頭大士	道祖神
94・40・27	98・42・37	81・50・30		50・28・12	49・24・15
(正面)庚申塔」寛政十年九月吉日	(正面)念佛橋供養塔」安永四年乙未三月吉日建之」代表者(表に三人、裏に五人)	(正面)奉納庚申供養」(側面)享保二十年乙卯九月吉日」代表者(氏名三人)	(正面)秩父三拾四所観世音」(側面)文化元年甲子年」十一月吉日之建	(正面)馬頭大士」(側面)寛政三年五月吉日	(正面)道祖神」(側面)明和七年十一月吉日

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
石祠 (正々王宮)	石祠	石祠	石祠	石祠(山王 大権現)	石祠 (八幡宮)	石祠	石祠 (雷電宮)	石燈籠 (二対)
66・45・64 (台高)17	50・32・47 (台高)13	47・33・48 (台高)15	52・33・50 (台高)12	69・45・70 (台高)19	66・36・66 (台高)19	100・49・91 (台高)79	95・46・87 (台高)106	東のもの (高)206の (台高)104 西のもの (高)210の (台高)101
當村中		(右側面)元禄七甲戌□□建立 施主十一月十六日	(左側面)元禄七甲戌檢建立 施主十一月十六日	(左側面)安永九庚子「本田源六(他二名) (右側面)九月和九旦「内山定八(他三名)	(右側面)宝曆二壬申年「八月十五日 (左側面)内山重藤「内山定栄	當村中「文政二己卯檢「三月吉祥日」建立	當村中「弘化二乙巳歳八月吉祥旦「西曲輪」 世話人	献燈「伊勢講中」伊井善吉(他十八人) 世話人 岡田由太郎(他三人) 明治三十年十月吉日 献燈「川崎在住」昭和十二年四月二十五日 青柳出身者「紅林源三郎(他十名)

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳
石祠	石祠	石祠	石祠	石祠 (弁財天女)	石祠	石祠	石祠
49・29・50 (台高)8	50・34・47 (台高)12		52・32・47 (台高)5	59・39・49 (台高)8	65・40・43 (台高)15	73・38・74 (台高)26	45・28・42
(正面)十二宮 (右側面)享保□□ (左側面)九月吉日		(屋根なし)天津彦火速彥神「磐長姫神」木 花開耶姫神 (右側面)明治三十一年「第十月吉日」 (台)富士講社	(左側面)内山重藤「内山定栄」 (右側面)宝曆二壬申年「九月二十四日			(左側面)文化十癸酉年「三月吉祥日」再建 立 (屋根左側面)二拾五延奇進「岡田藤右門」 伊井幸八	(右側面)明治三十九年十月吉日「建立

三、青柳町雀神社東

①	石塔	高・巾・厚	銘 文
			(側面)南阿弥陀仏 明治三十四年四月建立」石川多三郎

荒牧町

一、荒牧町荒牧神社境内

③	旗竿支柱	高・巾・厚	銘 文
②	石標柱	高・巾・厚	銘 文
			(正面)荒牧神社」鎮座」 (右側面)明治四十三年三月建之」 願主」養田傳吉」 (左側面)源正風」拜書
①	道しるべ	高・巾・厚	銘 文
			(側面)北」八崎へ巷里」四町二十七間南」 前橋へ巷里二町廿四間」東」米野へ 巷里八町四拾間」荒牧村
			(右側面)明治四十壹年」 (左側面)十月吉祥」 願主」関口伴吉」栗林角蔵」小 黒留蔵

⑪	庚申塔	高・巾・厚	銘 文
			(正面)庚申」 (右側面)寛政十二庚申」仲冬」
⑩	巡拝塔	高・巾・厚	銘 文
			(正面)奉納百番札供養」 (右側面)安永六丁酉仲冬吉日」 (左側面)願主園田恭」
⑨	狛犬	高・巾・厚	銘 文
			昭和十六年十月」石工栗林留吉」 椹沢文次平(他二十四人)伊勢神宮参拝
⑧	灯籠	高・巾・厚	銘 文
			(正面)明治十年四月」 (北側面)御神燈」 (東台座)當村中
⑦	灯籠	高・巾・厚	銘 文
			(裏面)大天狗 (火袋なし) (正面)小天狗」 (右側面)石尊大権現」 (左側面)享和元辛酉禾」初秋吉祥日」當處 中」
⑥	狛犬	高・巾・厚	銘 文
			昭和三十二年十一月のもの
⑤	手水盥	高・巾・厚	銘 文
			(正面)清場」 (右側面)世話」當村中」 (左側面)明治十年」第四月良辰」 (裏面)願主」関口三代八(他十二人)
④	鳥居	高・巾・厚	銘 文
			(東脚)大正四年十一月」氏子中」 (西脚)御即位大典紀念」 (柱径)30

⑰	⑱	⑲	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱
石祠	石祠	石祠	大神宮	猿田彦	庚申塔	記念碑	記念碑	句碑	記念碑
80・37・73	97 (台座高) 96・35・62	61・35・45	50・36・20	38・29・17 (現状高)	80・50・15				
	(正面)雷電宮「當邨中」 (右側面)明治十四年四月良辰「再築	(右側面)奉造立石宮為□長久「 施主 長谷次郎兵衛」 (左側面)元禄四辛未三月吉日	(正面)大神宮	(正面)□□彦大神「 (右側面)□□永七甲寅」 (左側面)□□月吉祥日	(正面)庚申「 (右側面)養田豊作他五人」 (左側面)大正九年三月	伊勢神宮參拝記念「昭和四十一年十一月」 荒牧五十鈴組合	開墾記念碑「大正十三年十月」	昭和五十三年一月	開墾記念碑「昭和十年四月」 耕地整理組合「(碑文あり)」

⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕
百庚申	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
104 80 107 70 60 50 13 12 25	102 48 89		67 34 59	102 41 70 (台座高) 68	113 (台座高) 137 33 64
(91基を確認。高さ40cm前後。内四基を記述する。)庚申「天保七丙申仲冬吉辰」願主世話「當邑若者」 享保拾八年十一月吉日「庚申塔」萬延元年天保七丙申年三月吉辰「庚申塔」龍集年申仲冬吉辰「関口長吉(他八名)」	(側面)寛政七乙卯年「八月吉日」再建立「(秋葉神社である)」	昭和四十八年三峯講「(三峯神社である)」	(右側面)寛政八丙辰歲「九月吉旦	(右側面)維時「天保六乙未「霜月吉辰」建之 (左側面)世話人「堰方浮組中」 當村中「宮下茂登助」 (水天宮である。)	(正面)當邨中「 (右側面)文久元辛酉歲「清秋」吉祥日」 (内部)に天王宮の文字板あり)

日輪寺町

一、日輪寺町菅原神社境内

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑧	石祠	33・20・35	
⑦	石祠	35・20・36	
⑥	石祠	42・31・45	
⑤	石祠	40・26・45	(裏面)明治二十年「秋□□
④	道祖神	94・55・26	(正面)道祖神 (右側面)安永五丙申年正月吉旦
③	道祖神	42・30・14	(正面)道祖神 (右側面)文化五戊辰
②	馬頭観世音	26・15・8	(正面)馬頭観世音「明治三十九年五月」町田氏
①	鳥居	245 (脚径)21	(東脚)奉納御神前「天明三癸卯歲五月吉旦」 (西脚)當村願主萩原與九衛門當候

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑪	句碑	214・105・8	(正面)古池や蛙飛びこむ「水の音」 天野桑古書「明治二十四稔」四月良辰
⑩	石祠	35・19・28	
⑨	石祠	59・35・61	(裏面)寛政十二庚申十二月吉日 (正面)秋葉宮?

二、日輪寺町日輪寺境内

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑤	庚申塔	207・70・30 (台座高)39	(正面)庚申塔 (右側面)萬延紀元歲在庚申十二月吉日「當村中
④	石碑	141・61・30	(正面)宝永三丙戌稔「奉造立石碑為二世安樂也十二月吉日」施主當村「田子九兵衛
③	巡拝塔	111・75・37	(正面)秩父三十四番「奉納西国三拾三番為二世安樂」板東三十三番 (右側面)元禄七甲戌歲
②	石碑		蚕業報徳 木邨松太郎翁之碑
①	石祠	97・35・92	(裏面)弘化三丙午歲「四月大吉祥日」當寺現住宥潭「再建之」(弁財天である。)

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥
馬頭観世音	馬頭観世音	馬頭観世音	馬頭観世音	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	青面金剛
71・39・10	73・40・16	91・45・19	84・38・26	98・38・16	60・42・15	89・43・23	84・50・15	106・33・30	117・44・27
(正面)天保十二辛丑天「八月十八日」 馬頭観世音」当村萩原弥九郎」奉豎	(正面)馬頭観世音」 (右側面)田子忠兵衛」 (左側面)寛政十戊午九月吉日	(正面)馬頭観世音」 (右側面)安政三丙辰年五月廿九日」萩原祿九郎」建之	(正面)為駒馬安全建之」 馬頭観世音」七十七老人」 (右側面)嘉永癸丑夏正」願主」萩原威(他一名)	(正面)庚申」 (右側面)寛政十二庚申九月吉日」 田子九兵衛他五名	(正面)庚申塔」 (右側面)寛政十二庚申四月吉日」 石田忠平他五名	(右側面)寛政十二庚申四月吉日	(正面)庚申」 (右側面)寛政十二庚申十二月吉日」萩原嘉兵衛(他五人)	(正面)干時宝永三戊年 施主」 奉造立庚申供養成就」 十一月吉祥日」敬白」 (側面)(六名)	青面金剛の像

⑳	㉑	⑲	⑱	⑱	⑱
石燈籠	石碑	燈籠	宝篋印塔	石塔	甲子塔
190	130・65・14	240	360	225	85・35・22
(右)万延元庚申」五月良辰」香具商人中 (左)文久二壬戌歳十月十日建之」萩原泰賢	(正面)奉開帳」厄除観世音護摩供一千座」 院主照豊和尚」 万延元庚申歳三月十五日ヨリ十日 間」 (裏面)寄進物と、村の名がある。	(右)元禄四辛未年」 嶺村同伝兵衛」 施主 當村黒沢左衛門」 奉寄進石燈籠為二世安楽」同原之江」 品川七郎衛門	(左)元禄四辛未年」施主池田伝衛門」 奉寄進石燈籠為二世安楽」十一月吉日」 嶺村同伝兵衛	(台座)天明六歳」丙午」五月吉日」信州高遠」伊那郡藤澤行倉村」石工」藤原六郎次治郷	(正面)甲子塔」 (右側面)上元」元治元甲子年」五月甲子日」 (左側面)當村萩原嘉兵衛」建之

⑳	㉑
供養塔	供養塔
122 32 21	172 43 26
(正面)奉納百番供養塔 (右側面)延享天甲子天 (左側面)十一月吉日	(正面)百番供養塔 (右側面)天明二年壬寅歲六月廿八日 七十三歳為鳥川郎明書 (左側面)施主 當村秋原與左衛門當候

川端町

一、川端町薬師堂

②	①	番号
石仏	灯籠	名称
	150 43	高・巾・厚
(十体あり)	(側面)嘉永二己酉御神前	銘  文

二、川端町愛宕神社

①	番号
鳥居	名称
251 (脚径) 21	高・巾・厚
(左脚)文政十一戊子歳再建「四海泰平」 五穀成就「風雨順事」万民豊楽 (右脚)安永九庚子歳十二月吉辰	銘  文

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	②
甲子大権現	秋葉大権現	石祠	石祠	石祠	二十三夜塔	道祖神	灯籠
85 38 30	100 50 40	60 32 54	69 42 40	74 49 42	52 30 5	50 35 10	136
(正面)甲子大権現 (右側面)元治改元年歳左甲子冬十一月甲子 日建之「當村中」	(正面)秋葉大権現	(右側面)安永八己亥歳「十二月吉辰」 (左側面)品川庄兵衛	(寄棟)	(寄棟)	(正面)二十三夜 (裏面)明治三十年丁酉十月「願主金子」	(正面)道祖神 (裏面)□□月吉祥日 (上部)が欠けており、裏面も剝離あり	(側面)奉納御宝前(一対あり)

田口町

一、田口町福守神社境内

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑧	道祖神	73・43・22	(正面)道祖神 (東側面)施主小林氏
⑦	道祖神	78・34・18	(正面)道祖神 (右)安永九庚子年 (左)八月吉日
⑥	石燈籠	126 56×56	(東側面)献燈一 (西側面)嘉永五子稔 三月吉日 (台座)堂廊中
⑤	石燈籠	141 38×38	(東側面)安永八己亥年九月吉日 (西側面)天神久保氏子
④	石燈籠	156 46×46	(北側面)奉納御神前
③	石燈籠	90 (現状)	(西側面)寛政八丙辰年 (東側面)十二月吉日
②	石祠	31・20・27	(側面)文久元辛酉 金子與兵衛
①	石祠	77・36・62	(側面)天保五年稔 三月吉日 (へび神)

⑱	石祠	49・34・58	(西側面)且一切功德善□祖□一生福聚海無量寿□
⑰	石祠	42・30・54	(中に「嚴鳥」あり)
⑯	石祠	48・33・45	
⑮	石祠	46・21・16	
⑭	石祠	50・28・48	(側面)享保十八子九月吉日
⑬	石祠	49・32・52	
⑫	石祠	65・45・70	(東側面)安永二年 (西側面)西四月造立者也
⑪	石祠	38・24・41	(東側面)明和三年 三月吉日 (西側面)田口「新町」元造 久米郎 玄藏 清吉 下□
⑩	石祠	68・34・58	(東側面)元禄元辰稔 五月吉 須川太郎右衛門 (中に「金山」とある)
⑨	道祖神	106・42・31	(正面)道祖神 (西側面)文化七庚午 初春旦 (東側面)當村中



②7	②6	②5	②4	②3	②2	②1	②0	①9
石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠
	89 ・ 44 ・ 79	78 ・ 36 ・ 25	64 ・ 38 ・ 59	40 ・ 28 ・ 49	45 ・ 29 ・ 47			76 ・ 34 ・ 58
(西側面)奉造立「當寺黙光代」 (東側面)寛政五癸丑歲「一月吉辰且 〔天神宮〕とある)	(東側面)安永三甲午年九月吉日 (西側面)當所天神久保氏子中廿四人 芝崎又八(菅原神社)	(屋根と下は別のもの)	(西側面)當曲輪 (東側面)明治八乙亥歲一月吉祥日	(西側面)優婆塞「玄輝」願主 (東側面)石尊宮	(東側面)享保五年「子九月吉日」 田口村□□□	(屋根)粟島宮 (西側面)當所「願主」塩原権右衛門 (東側面)天保十五稔辰八月吉日(中に「粟 島宮」とある)	(西側面)明治三十一年四月吉日 (台座)願主「塩原清次郎 中に「大山祇大神」あり	(西側面)當村「高橋住衛門」願主 (東側面)天保五甲午年「仲夏吉祥日

③4	③3	③2	③1	③0	②9	②8
手水鉢	石 燈籠	石 塔	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠
52 ・ 60 ・ 41	216 ・ 76×76		57 ・ 29 ・ 46	75 ・ 43 ・ 69	79 ・ 37 ・ 59	108 ・ 55 ・ 91
(側面)奉納「天保十稔」亥三月吉日「當所」 願主「須河銀兵衛	(西)石尊宮 (北)天狗 (南)天狗 (東)天和三歲六月吉辰 (台座)願主「當邑中	(正面)田口小林山靈府尊 (東側面)昭和十四年一月七日「納人」文久 三年十月十四日生「祝當年七十七 歲」 (西側面)赤城風下利根の里誉も別ていちじ る志	(西側面)天保十三歲「七月吉日	(正面)水神宮 (東側面)寛政七乙卯九月吉日 (西側面)願主「堰方	(正面)天神「宝永四年」丁亥霜月廿五日	(「愛宕神社」とある)

二、田口町公民館

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	石燈籠	142 39×39	(南側面)天保十一庚天 (北)十月吉日 (東)願主□□ (西)奉獻	
②	石燈籠	102 50×53 (現状)	(北)八月吉日 (西)奉獻 (北)天保七丙申歲	

三、神社入り口

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	石燈籠	84 52×52 (現状)	(南)天保四巳稔 (北)八月吉日 (西)奉獻	
②	石燈籠	111 54×54 (現状)	(南)天保十一庚子年 (北)七月吉日 (西)奉獻	

四、神社入り口鳥居

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	石燈籠	56 64 40		(西)明治二十四辛卯歲「三月十日」 (東)當曲輪中「九十五翁」東岳主

五、田口町新町

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
②	鳥居	271 180 (徑)23	(額正面)橘神社 (額裏)文化八辛未歲「盛秋吉辰日	

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	耳だれ薬師	210 (台巾)96	(東側面)薬師講「新町中」田口村中「関根村中」荒牧村「横室村」真壁村「米野村」中箱田村「下箱田村」川端村「北側面」新町中「田口村」塩原前八「同又八」同久右エ門「大嶋武兵衛」竹之内折兵衛「関根邑」萩原市良治「同徳兵衛」高橋孫四良「同武右衛門」根岸軍蔵「根岸市蔵」横室村「井上新五右門」金澤田治「同忠兵衛」荒牧村「□羽田孫七」萩原杏良「宮下久浜」同藤吉「下箱田村」今井藤七「中箱田村」因	
②	筆子塚		(正面)賢良院瀧隆慎齋醫子 (台座)筆子連 (東台座)當田口邑「塩原助佐住」復瀬慎齋 干時嘉永五「壬子年秋」八月十三日「門生写取水口」干茲碑建	

③	庚申塔	94・60・9	(正面)梵字アーン
---	-----	---------	-----------

六、田口町新町の南端

③	石燈籠	183・88・80	(側面)石尊
②	石祠	79・47・64	(北側面)秋葉宮 (南側面)寛政四壬子歲「三月吉辰」 (台座)當町中
①	石祠	92・42・70	(北側面)文政三庚辰「六月大吉祥辰」 (台座)新町中

七、田口町417スタンド南の墓地

①	青面金剛塔	113・95・15	(正面)青面金剛塔「万延元庚歲中冬吉祥日」 (右側面)阿闍梨光疏書 (右側面)芝谷曲輪講
---	-------	-----------	--

⑧	百番供養塔	110・50・30	(正面)百番供養塔 (裏)寛政十一己未檢「中□□吉辰日」 須川太郎右衛門「塩原権右衛門」
⑦	青面金剛塔	170・40・6	(裏)万延元庚申歲「霜月吉祥日」高橋伴右衛門「大寫字衛門」同茂兵衛「芝田久藏」吉野加右衛門「大寫佐市兵衛」
⑥	庚申塔	108・45・8	(正面)庚申塔 (裏)万延元庚申季「霜月吉祥日」 小池及右衛門「小池佐兵衛」 吉野由兵衛「萩原礒吉」青木半藏 小池直吉
⑤	青面金剛塔	136・60・44	(正面)奉為青面金剛□主「曾從造立」 享保元丙申□□□□者「九月七日」
④	庚申塔	121・63・56	(正面)奉建立庚申供養塔「享保三戊成年」 施主市良右門「大空印」五十月吉日「 敬白」新左衛門「孫吉□門」
③	庚申塔	100・60・26	(正面)庚申塔 (裏)寛政十二庚申檢「季冬吉辰日」
②	庚申塔	103・54・30	(正面)庚申塔「十二月のこと」 (裏)寛政十二庚申年「臘月吉日」 (側面)砂川政八「同大七」 天野文左衛門「村田伊兵衛」 塩原清兵衛「同道意」

⑫	⑪	⑩	⑨
庚申塔	石塔	石塔	青面金剛塔
73 48 20	90 45 18	80 37 13	118 53 39
(正面)庚申塔	(正面)大日如来 (裏)願主「藤五郎」	(正面)南無阿弥陀佛 (裏)明和八年卯歲「十月吉日」	(正面)青面金剛位 <sup>2</sup> (裏)寛政十二年庚申歲「十一月吉良辰」 願主講中

八、田口町 949 金子孝夫宅

①	番号
石殿	名称
	高・巾・厚
(西側面)寛政十二年庚申十月吉日 (東側面)金山宮	銘 文

九、田口町宝林寺境内

①	番号
念仏供養塔	名称
134 30 25	高・巾・厚
(正面)念仏供養塔「須彌」建立 (西側面)文化七庚午歲 (東側面)三月吉辰旦 (北台座)當野「老若」講中 (東台座)當寺「九世代」	銘 文

⑤	④	③	②
地藏	十王像	石祠	石塔
197 40 24		83 55×55	102 27×27
(裏面)享保三年「延命地藏経日」百田旬内 無「難」其国人民念侍□□「施主」 天神窪「柴崎」延九月秋日		(寄棟 室町期)	(正面)普賢大菩薩 (右側面)寛政元巳酉歲仲夏日 (左側面)當寺現住黙光叟

十、宝林寺門前

②	①	番号
観音像	石塔	名称
112 37 20	80 39 20	高・巾・厚
(正面)元文二丁巳ノ天「秋月吉日」	(正面)大勢至菩薩 (裏)天保九戌戌歲正月吉日 願主「塩原氏」	銘 文

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
奪衣婆像	地藏	観音像	石祠	石祠	地藏	地藏	六地藏
46・29・12	49・24・16	70・29・18	61・43×43	64・36×36	79・32・19	27・13 55(現状)	91・22・13 91・22
	(側面)文政二己卯年壬四月吉日	(正面)從野堂「千手観音」 (右側面)享保五壬庚子四月吉日 (左側面)田口村「岩崎氏」	(側面)宝永六年正ノ二月日	(側面)宝永六年三月八日	(側面)己未「一延宝七年」三月八日	(右側面)宝永七寅「正八月吉日	正徳元年辛卯九月吉日 南方昼夜地藏為父母「左衛門」 東北方柁里地藏為父母「塩原門人」 北方里衣地藏為父母「塩原弥五衛門」 東方人福地藏為父母「小林八衛門」 西北方天月地藏為父母「塩原向人」 西方天華地藏為童子童女「竹内与衛門」

①	番号	名称	高・巾・厚	銘	文
石鳥居					
282・26					
		(額)赤城宮 (柱)安永七戊戌年季秋吉辰旦			

関根町

一、関根町赤城神社

十一、田口町政淳寺南  
 庚申塔18 庚申像1 馬頭観音像3 池田庄七 芝寄住 岩崎三郎兵衛  
 萬延元庚申稔霜月吉辰日當組中 岩崎宗兵衛千庚申供粮塩原権右衛  
 門(他八名) 天文二丁己大日九月日 明和八四月 享和□年二月吉  
 日

⑭	⑬	⑫	⑪
馬頭観世音像	地藏	地藏	地藏
50・30・12	24・10 40(現状)	24・10 37(現状)	54・21・25
(側面)寛政七□天「九月吉日	(側面)明和元年甲申四月吉日	(側面)施主「小池知助	(正面)地藏尊 (右側面)玉補童女 (左側面)享保六年壬二月十一日

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
石祠	鳥居額	石祠	石祠	石祠	獅子	石祠	石灯籠	石灯籠
75・36・63	(横) (たて) 57 45	87・40・72	85・70・43 (高) 現状	90・40・63		86・32・64	186・66	184・60
(中に正八の石板あり)	赤城大明神「八幡宮」諏訪大明神	(側面)天明五乙巳歳九月吉日	(側面)天保三壬辰年「三月吉日		(二対)	(側面)大山祇神社「昭和廿八年三月吉日」氏子中	(正面)御神前「中□氏」 (側面)天保八丁酉三月吉日	(正面)征露紀念 (側面)陸軍砲兵一等卒「勲七等萩原千八郎 (他八名氏名 大正二癸丑年) (もう一つには奉獻、氏名九名)

②	①	番号
青面金剛像	石灯籠	名称
82・31・20	107・45	高・巾・厚
	(側面)先祖供養「寛政六甲寅歳」 施主「萩原一家中	銘文

二、関根町十王堂霊園入り口

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
道祖神像	猿田彦	道祖神	句碑	石祠	石祠	道祖神	道祖神	石祠
66・38・23	80・46・20	90・65・30	109・38・28	100・30・78	85・38・64			
(正面)天明六丙午歳「霜月吉祥日	(正面)奉輓祖猿田彦尊「	(正面)道祖神「村中	(正面)寛政八丙辰年「仲秋大吉日 建之 三日月やゝ	(台座)文化庚午歳「村中」六月吉祥□	(側面)秋葉宮「寛政十二庚申」六月善日「 (台座)元祖根崎一家中			

⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
像 馬頭觀世音	像 馬頭觀世音	六地藏	庚申	馬頭大士	庚申塔	像 馬頭觀世音	庚申塔
75・34・15	70・30・15	112・30	78・45・23	32・23・7	67・30・18	46・22・15	76・50・12
(側面)九月吉日	(側面)安永七戌七月日「萩原吉太夫		(正面)庚申「(側面)願主」萩原清七同小市 (裏)寛政十二庚申卯月吉日	(正面)馬頭大士	(正面)庚申塔 (裏)寛政六甲寅中「萩原講中	(正面)昭和七壬申「四月吉日」當村中	(正面)庚申 (裏)万延元庚申天「九月吉日」(五人氏名)

三、関根町地内

③	②	①	番号
丸石	像 馬頭觀世音	大日如来	名称
上37 下の径 3015	49・26・15	74・47・15	高・巾・厚
二個重なる。	(側面)明和四丁亥秋吉日「□原氏	(正面)大日如来「寛政元己酉天」八月吉日	銘  文

四、関根町金剛寺

③	②	①	番号
像 馬頭觀世音	地藏	馬頭觀世音	名称
53・27・15	56・33・15	66・38・33	高・巾・厚
安永二癸巳天「八月吉辰」施主萩原氏		寛政五「癸丑十月吉日」石関氏	銘  文

⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	馬頭觀世音	地藏	庚申塔
55・28・17	51・33・15	52・30・15	50・32・17	43・32・17	42・33・14	67・31・10	54・26・15	55・31・15	39・26・15
						貞享三歲「安德」庚申塔奉建「福榮」四月十三日	寛政三 <sup>(四十五)</sup> 亥禾「十一月大吉旦」萩原氏		

①	番号	川原町	⑳	⑱	⑱	⑰	⑯	⑮	⑭
衣笠大神	名称	一、川原町 市杵島神社境内	宝篋印塔	青面金剛	庚申塔	石殿	庚申	庚申塔	庚申塔
104・60・40	高・巾・厚		台座高 268 73×73 49	165 120 25	111 30 13	77 49×49	74 47 16	77 44 20	61 40 21
銘文			下毛埜国都賀郡板荷村願主□□「安永七戊臘月吉日」	惟時明和二年乙酉季春吉辰「青面金剛明王」関根呂講中	万延元庚申歲「根岸利兵衛(他四名)」	日月と人物が彫られている。	萬延元年「庚申天正月」	享保四己亥天「信心施主」奉供養庚申之大金剛面「十一月廿二日」細井伊兵衛	安政七庚申年「二月吉祥日」茂木喜兵衛(他六名連記)



⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
天神	石祠	石祠	石祠	双体道祖神	百庚申	石灯笼一对	秋葉大権現	如意輪観音像
75・35・53	72・35・54	73・33・48	79・37・59	58・31・14	110基	161・59		148・30・27
(正面)南無天□大自在天神 (側面)嘉永二歳九月□□作			(尾根)琴平神社 (側面)大正三年十二月		(内訳)庚申庚申塔196 猿田彦大神1 金剛尊1 の面に青面金剛と庚申3 3 天保十四癸卯春三月吉日建 睡々子三敬表願主川原總村中 高崎山	(裏面)川原嶋氏子中 (側面)寛政三辛亥十二月 (正面)奉納御寶前	(側面)文化元甲子十一月吉日「川原嶋村	(側面)嘉永三庚戌弥生七日辰建立 (台座正面)女人講中

⑳	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱	⑱
石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
164・32・59	87・42・64	72・27・48	67・27・46	60・27・42	102・45・62	66・31・47	83・34・55	94・33・61	73・29・52
(側面)宝曆八歳寅十一月吉日「村中	(側面)宝曆九己卯六月十二日「願主	(側面)寛政十一未天中秋吉日「願主新井氏		(側面)元文二丁巳歳四月吉日「富村氏子	(正面)弁才天 (側面)寛永七庚午九月「	(正面)若宮八幡宮		(正面)神明神社 (側面)大正三年九月吉日	

二、川原町大興寺

②	①	番号
観音	観音像	名称
133 ・44 ・28	147 ・27 ・24	高・巾・厚
(正面)元禄九丙子天「六月吉日」	(正面)観音像(梵字サ) (側面)奉読誦普門品二万三千卷供養塔「 宝曆四甲戌四月吉日」永井寅衛門	銘  文

②⑥	②⑤	②④	②③	②②	②①
石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
84 ・32 ・39	80 ・39 ・59	73 ・37 ・60	62 ・31 ・47	72 ・31 ・56	79 ・34 ・63
(正面)御獄山「葉王大権現」 (側面)文化九年壬申八月日「川原嶋講中	(正面)二十三夜宮「 (側面)天明四甲辰九月吉日」□□新井氏	(正面)水神宮「寛永七庚午九月吉日」	(正面)住吉宮「 (側面)文化元甲子歳五月吉祥日」富村中		(正面)三峯神社「 (側面)明治三十五年三月「 川原嶋新田講中建之

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
庚申塔	二十二夜塔	供養塔	供養塔	供養塔	六地藏	地藏
132 ・92 ・51	202 ・70 ・67	121 ・31 ・25		112 ・50 ・27	110 ・28 ・18	167 ・31 ・19
(正面)庚申塔「高崎山□書」 (側面)寛政十二年仲冬「川原島村中」 (裏)十世堅者亮竟	(側面)二十二夜塔「文化十一甲戌五月大吉 祥日」 (台座)女人講中	(正面)百番供養塔「 (側面)安政三丙辰年十二月建」 願主 野上林造「青木善右衛門」 施主 永井宇八「永井忠次郎」	(正面)觀世音菩薩(種子サ) 秩父三十四番供養「 (側面)明和四丁亥天十月吉日」 施主「當村講中	(裏)奉納百番供養塔「 享和元年辛酉十一月吉日」 (側面)金古庄右衛門	(台座)弘化四丁未歳三月吉日建之	

三、川原町大興寺南

番号	名称	高・巾・厚	銘文
			⑦寛永五壬戌申四月吉日新井又右衛門 ⑧明治三十九年馬頭大士九月十二日新井氏 ⑨明治四十一年馬頭觀世音四月吉日永井氏 ⑩明治四十一年馬頭觀世音四月吉日永井氏 ⑪明治十八年馬頭觀世音十二月一日大山氏

⑩	⑪	⑫
一字一石塔	石塔	供養塔
190・55・55	165・94・22	125・69・42
(正面)大乘妙典一字一石寶塔 (側面)享保九甲辰天十月吉日 願主 當寺四代光須 信心助力惣村中 (裏)作師三沢貞七	(正面)三界万矣等(阿弥陀の種子キリク) 享保式年當寺二代「酉八月吉日」光須代	(正面)念佛供養塔 (側面)世話人二名(他に八名の女性の名前) (裏)十二世法印觀廣代

②	①
猫觀音	馬頭觀世音
	⑫文政二卯 (像)十一月吉日願主 永井音右衛門 ⑬寛政十一未天五月吉日 (像)施主 永井音右衛門 ⑭(像) ⑮明治十五年 (像)午□二月平石氏 ⑯寛政二□天施主□□ ⑰明治十一寅年三月建立 (像)願主 吉沢楨造 ⑱明治十三年 馬頭大士 三月吉日 野上氏 ⑲(像)平石氏 ⑳明治十二年馬頭尊二月願主 永井氏 ㉑明治五年十一月馬頭尊野上氏 ㉒(像) ㉓明治十二年馬頭觀世音四月吉祥日平石氏 ㉔馬頭觀世音佐藤氏 ㉕文政五年 馬頭觀世音 午六月吉日 平石氏 ㉖明治二十六年吉日 馬頭觀世音 井野氏 ㉗明治十八年十月馬頭觀世音 野上氏 ㉘大正十二年五月二日馬頭觀世音井野氏 ㉙明治廿三年十一月馬頭觀世音井野氏 ㉚明治三十年馬頭觀世音四月十八日 ㉛(像)

⑤	④	③
石灯笼	石灯笼	石灯笼
	146 65	
(側面)文政八乙酉十一月吉日「永井氏建立	(側面)天保十一庚子三月考吉辰「 永井一統寄進	(側面)文政七甲申二月吉日

四、川原町四八三一 永井氏宅

①	番号
石祠	名称
(奥) 87 45	高・巾・厚
(正面)南無阿弥陀佛「寛永五戊辰年四月立	銘
	文

五、川原町五四二近く

②	①	番号
石祠	道祖神	名称
60 31 58		高・巾・厚
(正面)雷電宮	(正面)道祖神 (側面)安永戊戌年春三月「 總氏子中建	銘
		文

③	石灯笼	130 88
---	-----	-----------

六、川原町五二四近く

①	番号
阿弥陀如来	名称
	高・巾・厚
(正面)南無阿弥陀如来「 阿弥陀の種子キリク」 (側面)文政元戊寅年七月造立之	銘
	文

桂萱地区

三俣町

一、三俣町二丁目三俣神社

④	③	②	①	番号
石祠(三峯)	道祖神	如意輪觀音 像	庚申	名称
84 39 74	63 29 20	124 27 24 (台座)	140 86 40	高・巾・厚
(右側面)寛政四壬午七月吉日	天明六年午 五月吉日「狩野氏	(右側面)文政五壬午歲二月吉日「 (左側面)二十二夜供養塔	嘉永元年戊申四月十七日「行妙書 (裏面)神村幸次郎(他十二人他に二十七人 の名)	銘
				文

二、三俣町二丁目内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	青面金剛像	63・34・15	宝永元年「甲申」十一月十四日	

三、三俣町三丁目共同墓地

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	二十二夜塔 如意輪観音 像	240・37・35	(右側面)寛政六甲寅年九月吉日 (左側面)二十二夜塔 (台座)富村女人講中「念佛供養」 (台石)石之施主徳沢「下田園八」石工「信州高遠」塩久村「久保田伊左衛門」切之	
②	庚申	137・34・29	万延元庚申歳四月吉日「諸連中	
③	青面金剛	225・45・15	安政五戊午歳二月庚申	

四、三俣町三丁目旧三俣公民館

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	石祠	161・57・54	疫除観世音「明治癸卯修繕上曲輪中」左側に 面に尊像□□(十二名の名、内に石像あり)	
②	地藏	118・28・18		
③	地藏	104・36・20		
④	石祠	99・50・45	天保三壬辰十一月	
⑤	地藏	52・24・15	天明七未 九月吉日	

上 沖 町

一、上沖町大国主命神社(神明宮)境内

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
①	石灯籠	210・62・73×73	(南の側面)御神燈 (北の側面)元治二乙丑歳 三月吉祥日 (台座)當所「願主」當田喜十郎	

⑦	⑥	⑤	④	③	②
石 祠	石 祠	石 祠	石 灯籠	石 灯籠	石 灯籠
62 ・ 32 ・ 60	68 ・ 31 ・ 47	45 ・ 24 ・ 45	223 ・ 75 ・ 60×60	115 ・ 80×80 ( <small>台座高</small> ) <sup>250</sup>	225 ・ 113 ・ 80×80
			(北)慶応元乙丑歳「九月吉祥日 (北下)當所「願主」角田政之輔「セハ人」 (西)本町「阿部宗兵衛」板屋町「栄屋さわ 石井村」中島清左衛門「五代村」村山 玉五郎「竜蔵寺村」武藤友造「前橋連 尺町」川端屋永造「本町」椛屋若造「 祠」小松屋吉左衛門「同山田屋安太郎」 □渡町「柏屋十右衛門」下沖「千木良 増右衛門」端氣村「角田専兵衛	(側面)昭和四年己巳十月良辰「御神燈」太々 御神楽 (北)「十三人」(北)石工「立川町」黛翠山「 (東)世話人九人」(南)伊勢講連「十四人」 (西)「十五人」	(側面)御神燈「太々御神楽」明治廿五年「 □□壬辰十一月良辰」 (台座)(地)宮城村(四人) (南)九人「(東)世話人(十四人) (南)伊勢講連(十四人)」(西)「十五人」

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑
巡 拜塔	巡 拜塔	二十二 夜塔	庚 申塔	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠	石 祠
145 ・ 29 ・ 14	51 ・ 23 ・ 20	155 ・ 36 ・ 74 34 ( <small>台高</small> )	46 ・ 22 ・ 10	118 ・ 60 ・ 38	94 ・ 43 ・ 72	49 ・ 27 ・ 42	79 ・ 36 ・ 60	96 ・ 43 ・ 85
(正面)奉納妙典神社佛閣順拝供養塔 (右側面)信濃国水内郡吉久保邑「行者」海 沼作之助 (左側面)文久二壬戌年三月二十三日「世話 人村中	(正面)百十八番供養塔「 (側面)文政十丁亥稔「四月吉旦」施主「八 木原□□	(正面)二十二夜塔「 (裏)寛政八丙辰年十月吉日」 (台座)念佛供養	(正面)庚申供養「 (右側面)十一月十五日」 (左側面)寛保元年仲冬「自然石	大□連	(正面)八阪神社「 (右側面)明治三年「十二月再建之」 (左側面)下沖組	(側面)明治五壬申年「三月十三日」建之	(右側面)寛政八丙辰年三月吉日「 (左側面)十二大神	

⑬	石造物(梅形)		前橋市榎町「神奈川楼」高野すみ「全町」 菊貝すし「相模亭」石渡菊「全町」川田屋「 横田ふさ
⑭	石造物(梅形)		前橋市立川町「中嶋稲太郎」全町山田屋「 重原熊吉」全町角「足袋商」廣井常吉「全 堅町」鈴木屋「廣井弥次郎

下沖町

一、下沖町若一王子神社

③	石灯笼	300 (脚径)29	(右脚)明治三十一年九月吉日 (左脚)當町氏子中
②	手水興	60・170・105	(側面)明治十三年四月大吉日
①	秋葉宮	76・30・19	(正面)秋葉山
番号	名称	高巾・厚	銘 文

片貝町  
一、西片貝町玉蔵院

①	如意輪觀音像	213・63・62	(背面)文化八年未歲閏二月吉日「 (台部)二十二夜念仏塔」西組中組女人講中
番号	名称	高巾・厚	銘 文

⑧	水神王	42・22・18	(正面)水神王「 (裏面)寛政十一年四月吉日」
⑦	庚申塔	73・35・33	(正面)庚申塔「 (右側面)天明四年辰歲「 (左側面)十月吉日」講中
⑥	道祖神	75・43・30	(正面)道祖神「天明八戊申三月吉日
⑤	石仏	現状高 42・31・13	上部を欠く、□□九丁□天八月吉日
④	如意輪觀音	77・30・21	(背面)□ <sup>(天)</sup> 明四甲辰年十月吉日「念仏講中
③	青面金剛王	62・30・20	(正面)青面金剛王「文政□□ <sup>(土)</sup> 亥五月吉日
②	地藏菩薩立像	203・40・22	(背面)享保十三戊申「十二月」念仏供養「西 片貝□□ <sup>(土)</sup>

二、西片貝町竜沢寺

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑥	庚申塔	50・30・23	(正面)庚申
⑤	二十二夜塔	77・24・18	(正面)秩父三十四番「弘法大師」 二十二夜塔 (右側面)明治三十四年五月九日建之 (左側面)鈴木やつ(外数名)
④	三界万霊塔	109・58・23	(正面)白「三界萬(地蔵菩薩の坐像)
③	六地藏石幢	(径)72 16	(側面)①と同じ。明治三十三年十一月建之 小沢善平
②	六地藏石幢	(径)40 18	(側面)①と銘文は同じ。年号はない。
①	六地藏石幢	(径)65 30	(側面)地持地藏菩薩「法性地蔵菩薩」陀羅 尼地藏菩薩「宝陵地藏菩薩」宝印地 蔵菩薩「鶏兜地藏菩薩」 (台部)嘉永四亥「施主 半沢伴七」石倉彦 市「十一月吉日

⑭	庚申塔	115・38・9	(正面)庚申 (側面)嘉永元年戊申年「四月吉祥日
⑬	二十二夜塔	91・33・28	(正面)如意輪觀音像 (裏面)大悲願力道情「如意輪中照碧空」 消滅女人深重罪「積名」念入「道」 (左側面)安永五丙甲天「種々重罪五逆消滅」 (右側面)十一月吉日「自他平等二世安樂」 (台石)廿二夜「念仏講」三組中
⑫	青面金剛	86・36・18	(正面)青面金剛「(側面)安永六酉年四月吉祥日
⑪	阿弥陀如来立像	93・37・16	(正面)奉供娘「陀之□一尊」各施主白「為二十□□□□□□樂土」元禄六年酉十一日十六日
⑩	地藏菩薩	114・61・38	(昭和十二年のもの。銘文あり。)
⑨	道祖神	84・50・35	(正面)道祖神「安永八亥年八月吉日
⑧	道祖神	66・32・32	(正面)道祖神
⑦	双体道祖神	88・70・26	(右側面)文政八酉歲「 (左側面)三月吉日」 (台部)北□□□□□東□□□□□ 南いせさき「西□□□□□



②②	②①	②⑩	②⑨	②⑧	②⑦	②⑥	②⑤
阿弥陀如来 立像	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔
64・39・17	79・72・4	64・38・18	81・32・28	57・47・28	60・34・24	43・30・11	90・40・23
(背面) 為念仏供養□□□□延宝三乙卯年 閏四月□□	(正面) 庚申「萬延元年庚申歲」曲輪中	(正面) 庚申「寛政十二年十一月」講中	(正面) 庚申塔「奉建立百庚申供養」寛政三 亥八月吉日「施主両□	(正面) 庚申「寛政三亥」八月吉日	(正面) 庚申「寛政三辛亥年」□□□□□□宮 内氏 三森氏 松本氏「中村氏」長沼氏	(正面) 庚申「寛政二□□□□」十一□□□□ (庚戌)	(正面) 庚申塔「 (側面) 寛政十二庚申歲」十一月吉日

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
地藏菩薩坐 像	如意輪觀世 音	庚申塔	庚申塔	如意輪觀音 坐像	二十六夜塔	六觀世音石 幢	地藏菩薩像	名稱
73・43・33	30・16 (総高) 80	55・28・12	40・24・10	60・20 (総高) 165	53・28・16	32・30 現状高 48	34 166 33 (総高)・	高・巾・厚
(台部) 子育「岩舟地藏」子授 昭和四十八年二月吉日		(正面) 庚申塔	(正面) 庚申	(台部) 天明四辰「十月吉日」化主即善「両 村」講中「善女	(正面) 二十六夜塔	(側面) 無量苦遍身「觀音□智力」能救世間 苦「十月吉祥日」化主即善「天明四 辰年	(側面) 寛政三辛亥年大呂吉日「 (台部) 西邑女十七人講中「願主」即心	銘文

三、東片貝町虚空蔵(片貝神社)

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒
石祠	大黒天	石祠	石祠	灯笼	石祠	灯笼	石祠	石祠	猿田彦命
65・32・50	30・20・7	48・22・27	60・35・42	160・68・68	95・65・96	122・52・50	72・58・95	73・55・89	74・23・27
(正面)□□大神	(背面)大正		(正面)山神折「戊申」 (側面)享保十三年□月吉日	(側面)享保元丙年九月大吉日「奉献」常夜塔「南島中	(側面)文化七庚午年五月吉日「願主」講中「惣世話」石工「河内吉太郎奉義」(八坂神社である)	(側面)文化七庚午年「講中四月吉日」 (一対のもの)	(正面)子権現「 (側面)⑩に同じ	(正面)秋葉宮「 (側面)文化六己巳年願主 講中世話人	(正面)猿田彦命「 (裏面)寛政三辛亥年南島吉日」石原平左衛門(他六人)

㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜
庚申塔	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠
50・30・18	45・28・34	75・43・54	48・38・43	78・48・57	50・28・32	82・46・67	80・50・57	59・32・48	73・40・53
(正面)庚申塔	(側面)嘉永三年四月吉日「天神宮である」			(正面)奉造立御宮諸願成就攸「 (右側面)元禄七年十一月吉日 (左側面)施主片貝村			(正面)奉造立御宮諸願「意攸」 (右側面)元禄七年十一月吉日 (左側面)施主片貝村		(正面)神明大神「 (側面)明治四十年四月中西前宿

③⑧	③⑦	③⑥	③⑤	③④	③③	③②	③①	③⑩	②⑨
天照皇大神	天照皇大神	出羽三山塔	猿田彦大神	猿田彦大神	普寛霊神	覚明霊神	出羽三山塔	出羽三山塔	御嶽講碑
116 54 10	123 55 12	147 126 13	31 14 2	49 32 10	52 22 7	62 23 13	132 62 10	120 82 11	185 76 12
(昭和十九年のもの。銘文あり)	(大正二年のもの。銘文あり)	(文政三年のもの、銘文あり) 湯殿山・月山・羽黒山大神「供養塔」文政三年庚辰年三月吉日	(正面)猿田彦大神	(正面)猿田彦大神	(正面)普寛霊神	(正面)覚明霊神	(皇紀二千六百年のもの、銘文あり、片貝丸尾講)	(昭和四十六年のもの、銘文あり)	(昭和八年のもの、銘文あり)

④⑧	④⑦	④⑥	④⑤	④④	④③	④②	④①	④⑩	③⑨
灯籠	灯籠	手水輿	虎石神	牛石神	灯籠	出羽三山塔	伊勢両大神	出羽三山塔	天照皇大神
148 65×65	130 80 50	86 122 67	60 72 35	67 72 44	180 64 64	110 64 8	126 62 5	82 61 11	130 60 10
(側面)御神燈「大正三年」長沼文治 村田龍司(一对のもの)	(側面)秋葉山神燈「安政三丙辰二月	(側面)漱盤「萬延二酉歳正月吉日	④④に同じ	大正十四年のもの。銘文あり	(側面)大正五年十二月吉日「常夜燈奉納」 村田龍司「母村田キヨ	(昭和二十一年のもの。銘文あり)	(明治三拾年のもの。銘文あり)	(昭和拾貳年のもの。銘文あり)	(大正十五年のもの。銘文あり)

四、西片貝町玉蔵院観音堂

番号	名称	高・巾・厚	銘文
③	地蔵菩薩立像	90・30・16	(背面)宝永六年「□□十一月廿三日」 (台部)子育地蔵尊
②	猫又大神	26・20・9	(正面)猫又大神
①	馬頭観世音	70・43・13	(正面)馬頭観世音「清水氏」寛政二戊歳當村

⑤③	出羽三山塔	80・90・15	(昭和五十四年のもの。銘文あり)
⑤②	鳥居	(脚径)38	(大正三年のもの。銘文あり)
⑤①	狐石神	60・40・14	(台部)明治四十五年一月「宮守」熊木豊心 奉納 前橋市細ヶ沢町「納主」飯島仙吉
⑤④	灯籠	160・93・76	(側面)御神燈「嘉永元申年四月吉日
④⑨	香炉	64・124・100	(側面)奉納「昭和四十八年三月吉日

⑬	石碑	57・72・8	(正面)奉納「永嶋」午翁「八十歳
⑫	手水盥	40・83・50	(側面)昭和十二年七月十日「献水屋水鉢」 野中かのこ(以下十三人)
⑪	聖徳太子	100・37・8	(正面)聖徳太子「奉建」永嶋亀吉「 昭和十七年十一月吉日」小柳町「 神垣菊二郎」百軒町「中山清吉
⑩	灯籠	115・径45	(側面)野中かの子他「昭和十二年七月十日
⑨	石碑	145・27・15	(正面)本尊聖観世音菩薩
⑧	地蔵菩薩立像	82・30・18	(背面)奉寄進子孫繁昌「元文四年己未」 三月吉日「福田佳重
⑦	庚申塔	40・26・10	(正面)庚申塔「文政十三庚寅年
⑥	薬師如来坐像	30・10 (総高)54	(正面)天明四年「甲辰閏七月吉日
⑤	道祖神	78・45・36	(正面)道祖神「寛政十一己歳四月吉日
④	馬頭観世音	70・40・25	(正面)馬頭観世音「寛政十一□」大沢氏「 大沢氏」戸神氏

五、東片貝町地内

番	名 称	高・巾・厚	銘 文
⑥	如意輪觀世音		(正面)遠近施入功德「文政八乙酉歲四月吉祥日」信州松本住「藤木廣光」作「(台部)兩村女人講中
⑤	地藏菩薩		(銘文なし)
④	水神宮		(正面)水神宮「(裏面)奉納願主」前橋市新町土木請負「橋本文治」東片貝「宮内仲次郎」大正十年四月廿日
③	金剛塔	50・34・10	(正面)北こめの「西□□□さ」みち「金剛塔」南いせさき「東大こ」みち
②	馬頭觀世音立像	44・25・15	(正面)寛政五癸丑年「七月吉日
①	不動明王	153・42・14	(正面)奉獻石尊宮「不動明王」大天狗「小天狗」(裏面)嘉永七甲寅歲三月建之「□□□□□□□□□□

番	名 称	高・巾・厚	銘 文
⑨	牛馬頭觀世音		(正面)牛馬頭觀世音「上岡村写」(裏面)明治元年戊辰十一月吉日「(台部)村中
⑧	地藏菩薩立像		(二)体ある 延命地藏尊という)
⑦	念仏塔		(側面)安永六丁酉「四月吉祥日」寒念仏講「願主」安禄貝心比丘尼「青岸一峰信士

上 泉 町

一、上泉町諏訪神社境内

番	名 称	高・巾・厚	銘 文
③	鳥 居	35 358・(徑)	東の柱に明治十五龍次壬午年六月吉祥日再建之とあり、この柱のみ新しく、他は古い
②	手洗盥	49・94・57	(正面)盥漱「(側面)世話人」高橋慶次郎他二十七人の名「裏面)嘉永元年戊申」林鐘吉祥日「行妙書
①	常夜灯	219・89・90	(側面)常夜灯「秋葉宮」(台座)享和三癸亥歲三月吉日「東講中」世話人「若者

④	③	②	④
石灯籠	石灯籠	石灯籠	狛 犬
210 ・ 61 ・ 62	173 (現状高) 53×54	175 (現状高) 63×53	77 (犬の長) 39 (犬の巾) 90 (犬の高) (総高) 225
(正面)御神燈 (左側面)嘉永七甲寅年 (右側面)二月吉日 (台座)願主當所(四人の名)	(側面)御神燈「七月吉日」願主「菅野茂八 天保十四癸卯年	(側面)文化九壬申年四月吉日「大神宮太々 講中」(世話人十八人の名)	(正面)伊勢太々講連名(四十人の名)コヤ ハラ「ツツミ」イシセキ (右側面)(二十四人の名)マエバシ (左側面)(二十四人の名)マハバシ「ウヘノ」 ヨコテ「ツルクウジ」コジンメイ (裏面)世話人田村庄作(以下十九人の名) (左の犬の裏面)太々御神樂奉奏「大正六年 二月廿日」 (右側面)(二十四人の名)エギ「コグレ」トッ トリ「五タイ」イシセキ「ホリコシ」 下ラキ「ホリノ下」 (正面)奉納「伊勢太々講連名(四十人の名) (左側面)(二十四人の名)三クデン

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤
石 祠	石 灯 籠	石 灯 籠	石 灯 籠	石 灯 籠
54 ・ 30 ・ 50	278 78×78	245 67×67	200 (現状高) 58×58	225 62×62
(朱がぬられている)	(左台座下)(二十三人の名) 名 (正面台座下)伊勢太々講中連名(二十人の 名) (裏台座)(世話人十五人)(二十三人) (追加入二十三人の名) (正面台座)太々御神樂 (裏面)明治廿五年第二月吉日 (正面台座)太々御神樂	(正面)太神宮 (裏面)明治八年二月吉日 (裏台座)(十一人の名)(世話人十四人の名) (右台座)(十八人の名) (正面台座)太々御神樂 (左台座)太々講中連名(十六人の名)	(正面)太神宮 (右側面)嘉永五壬子年正月吉日 (上面台座)両宮太々御神樂講中(十三人の 名) (右台座)五人の名(セハ人十人の名) (左台座)(世話人十四人の名)	(正面)大神宮 (右側面)文久二壬戌年正月吉日 (台座)太々御神樂講中連名(六十七人の名) アマカハ「ゴダイ」シモオキ「カミ ヲキ」イマイ「ヲホムロ

⑩	石祠	38・30・46	(側面)昭和四十一年十二月吉日 神村氏
⑪	石祠	(台高) 54・37・15 58	
⑫	石祠	65・33・55	
⑬	石祠	76・45・65	(天神か)
⑭	石祠	55・39・40	
⑮	石祠	68・31・52	(側面)文政三庚辰年九月吉日
⑯	石祠	130・41・76	(正面)講中 (左面)當邑世話人(七人の名) (石面)石関村世話人(四人の名) (裏面)天保十二辛丑年八月吉日
⑰	石祠	128・40・73	(右側面)世話若者中 (左側面)世話子供中 (裏面)嘉永二己酉年三月吉日

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑦	異型板碑	162・57・42	(正面)康永第四曆乙酉二月日「庵主覚明」 (市重文)
⑧	宝篋印塔	345・65×65	
⑨	二十二夜塔、如意輪観音像	210・33・23	(右側面)二十二夜供養塔 (左側面)文政五壬午年閏正月吉祥日 (裏面)七人の名
④	庚申塔	120・66・30	(裏面)天明八戊申天十月吉日 (左側面)村中
③	馬頭観世音	150・50・16	(右側面)文政五壬午年 (左側面)十月大吉日」講中 二つに分れている。
②	宝篋印塔	120 (現状高)	万且那祢□□」年二月十六日
①	道祖神	78・49・28	(右側面)天明八戊申天十月吉日

二、上泉町宝禅寺境内

三、上泉町西林寺境内

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
阿弥陀仏 (文字)	道祖神	廻国供養塔	地藏	青面金剛像	庚申塔	庚申塔	庚申	名称
124 73 25	52 37 22	165 31 28	38 13 10 (現状高)	50 31 15	60 27 20	86 32 26	72 40 29	高・巾・厚
(正面)万界阿弥陀佛」文政十一 「吉日」講中 戊子年九月		(正面)日本廻国供養塔 (右側面)寛政五癸丑歲」霜月吉祥日」 (左側面)願主當邑金子善兵衛			(側面)文政六未年正月吉日	(側面)天保六未天」七人の名	(側面)嘉永四辛亥年十一月吉祥日	銘  文

四、上泉町玉泉寺東

①	番号
馬頭觀世音	名称
30 20 11	高・巾・厚
(正面)馬頭明王」石田	銘  文

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨
石殿	石殿	石殿	石殿	石殿	石殿	馬頭觀世音
98 49 45	66 45 41	60 36 37	77 45 45	71 50 47	78 53 52	48 21 17
			(側面)貞享三年丙寅三月十三日	(側面)寛永八辛未年三月七日		



五、上泉町玉泉寺境内

⑥	⑤	④	④	③	②	①	番号
供養塔	青面金剛像	地藏	庚申	地藏	供養塔	地藏三体	名称
130 86 30	142 42 29	64	122 70 20	78 32 25	132 33 31	高 33 巾 35 厚 46	高・巾・厚
(正面)天明八戊申歳 供養「八月吉辰」 (側面)念佛講中	(正面)奉造立庚申供奉二世家業所「 元禄十六癸未天十一月十六日」 敬白□□		(正面)天明八戊申天「 庚申」十一月吉日「曲輪講中		(正面)三界万霊「 (右側面)七月吉祥日」 (左側面)明和八辛卯曜宿「覆海道運		銘  文

②	馬頭觀世音	58 27 28	(正面)馬頭明王「天明六丙午年九月十有五 日
---	-------	----------------	---------------------------

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒
五重塔	石祠	石殿(六角)	馬頭觀世音 像	庚申塔	庚申塔	地藏	地藏	庚申塔	地藏三体
191	69 36 13 53 (台高)	79 (二辺) 30		54 28 18	58 33 15	82	60	95 47 30	61 152 68
	(天神か)	(右側面)奉造立大日塔諸願成就所「 (左側面)宝永六己丑天十月日」 願主 永井兵八 敬白	(正面)天保八丁酉年「二月吉日			(側面)元禄十天二月十七日		(正面)天明八戊申天八月吉日「庚申塔」 (側面)西久保中	

②②	②①	②⑩	①⑨	①⑧	①⑦
馬頭観世音 像	馬頭観世音	馬頭観世音	庚申、道し るべ	道祖神	供養塔
52・25・17	46・22・12	61・27・20	117・45・12	100・44・26	150・62・27
(正面)天明五乙巳天 七月吉日	(正面)寛文七丁巳年 馬頭大土 一月□日	(右側面)文化七年庚 (左側面)午八月吉日	(右側面)(七八人十人の名)左駒かた二り (左側面)嘉永六癸丑年三月吉祥日 (八人の名)右前はし一り	(側面)文政三庚辰歳三月吉日 上泉村西而組	(正面)百番供養塔 (側面)安政二乙卯年 願主 菅野茂八 正月吉日

六、上泉町赤城神社

②	①	番号
狛犬	鳥居	名称
83	(脚径)26	高・巾・厚
(台側面) (十一人の名)	(脚部)昭和拾三年五月 菅野栄壽 奉納	銘 文

③
石祠
102・46・82
神社の本殿

一、亀泉町如意寺

⑤	④	③	②	①	番号
庚申塔	供養塔	庚申塔	庚申塔	馬頭観世音	名称
140	65・38・23	67・44・14	114・33・31	50・20・17	高・巾・厚
(別のものを組み合せたもの。 (軸部)奉造立庚申供養 元禄九丙子天 施主 傳左衛門他五人 六月十三日 敬白	(正面)寛政十二天 百万遍供養 申三月日 横堀□□	(正面)庚申塔 (左側面)寛政庚申 (下部)(関二□と二人の名)	(正面)庚申塔 (右側面)寛政第六星次甲寅 (左側面)皇月吉祥日 (台座)當村 横堀茂八他八人	(正面)馬頭観世音 (右側面)慶応二丙寅十一月吉日 (左側面)施主 関氏	銘 文

⑥	庚申塔	73・32・13	(正面)千時延宝五天「庚申為供養」丁巳十月十六日「氏名と人数あり」
⑦	大日如来	45・21・17	(正面)大日如来 (右側面)寛政十二庚申 (左側面)十二月吉日
⑧	庚申塔	118・43・17	(正面)文政六癸未年「庚申塔」五月吉祥日 (台座) (八人の名)
⑨	庚申塔	91・35・10	(正面)天保十己亥天 奉造立庚申供養「十一月十八日」 (下部に人名あり)
⑩	庚申塔	82・34・16	(正面)□ <sup>(元か)</sup> 禄八年 (不明)乙亥十一月吉日「(六人の名)」
⑪	二十二夜塔		(正面)如意輪觀世音像 (右側面)二十二夜塔 (左側面)文政十二己丑天十一月吉日 (台座)世話人四人 世話人「関嘉兵衛他四人」 女人講中「信州高遠石工」北原藤左衛門

番号	名称	高・巾・厚	銘	文
⑤	石祠			
④	灯籠	260		
③	手水盥	52・94・60		
②	灯籠	110・42×42		
①	鳥居	(脚径) 26		
			(左脚)大正十一年四月 (右脚)當町氏子中建之	
			(脚部)明治三十有三年「第一月吉祥日」 願主「當町」関富次郎	
			(側面)明治四十三年三月十四日「伊勢參宮記念」當村横堀徳次郎(以下十六人)世話人「岡田兼次郎(他四人)奉納	
			(脚部)明治拾三年「大神宮」四月吉祥日 (台座)木々御神楽「(三十五人の名)」	
			(二十基を確認)	

二、亀泉町赤城神社

荻窪町

一、荻窪町荻窪神社

番号	名称	高・巾・厚	銘文
⑥	猿田彦大神	100・30・10	(正面)猿田彦大神
⑤	記念碑	120・60	(正面)昇格記念碑「大正十一年三月十日」 大胡町「石工」中澤仲蔵刻
④	記念碑	146・63	(正面)伊勢参拝記念碑「明治四十五年一月八日参拝」 木庄三郎 「當町太々講中」講元「青
③	灯笼	235	(左)文久二壬戌年「清浄燈」 長月吉祥日「連中」セハ」 吉沢弥右衛門(他三人) (右)セハ」青木彦七(他三人)
②	地藏	70	(裏面)享保十四己酉年「九月十五日(頭部なし)
①	庚申		八十二基を確認。文字青面金剛一基、青面金剛像二基、他は庚申、かうしん、庚申塔、庚申供養である。内三基は、万延紀元庚申歲十一月、青面金剛、安永九庚子天十一月吉日、庚申塔、享保七壬寅歲九月吉日奉造立庚申供養村中

⑭	灯笼	170	(台座)太々御神楽
⑬	石祠	75・30・55	(側面)明治三十二年二月一日奉拝御神燈「大神宮」講中「講元吉沢勝造(他二十五人)
⑫	石祠	55・30・45	(正面)八坂神社」 (側面)明治三十年十一月吉日
⑪	石祠	50・23・40	(側面)青木氏
⑩	灯笼	160	(側面)天保九戊戌歲季春吉祥日「清浄燈
⑨	道祖神		(正面)道祖神」 (裏面)万延二酉年「三月吉祥元日」 踏石は米野、前橋、大胡を示す道しるべになっていたが、盗まれた。
⑧	猿田彦大命	190・21・34	(正面)猿田彦大命
⑦	猿田彦	45・15・8	(正面)猿田彦(上部を欠く。)

二、荻窪町地内

②	①	番号
石塔	馬頭観世音	名称
106・35・17	54・32・11	高・巾・厚
<p>(脚部) 巳九月吉日「奉造立二世安楽」 施主 塚越権八</p>		銘文
<p>(正面) 馬頭観世音像「安永九庚子天五月日」 施主 太田氏「汝是畜生癸菩提心」</p>		

②⑩	①⑨	①⑧	①⑦	①⑥	①⑤
記念碑	石祠	石祠	石祠	石祠	狛犬
	65・35・58	77・31・50	53・26・38	45・23・44	140・(像のみ)70
(正面) 明治神宮鎮座記念 大正元年十一月三日「荻窪青年会」		(正面) 愛宕山 (側面) 明治十五年「壬午」十二月吉日	(側面) 明治三己巳年「青木彦七」	(側面) 深津村「山田幸女」建之「嘉永二酉歳」極月穀旦	(右) 伊勢太々講「講元太田兼松(他十三人) 昭和九年二月六日」 (左) 副講元「江口忠太郎(他十三人)」

堀ノ下町

一、堀ノ下町正円寺

②	①	番号
巡拝塔	馬頭大士	名称
124・31・29	60・35・23	高・巾・厚
<p>(正面) 奉巡禮百番供養塔「 (右側面) 明和三丙戌十月吉日」 (左側面) 堀下村」大塚文右衛門</p>		銘文
<p>(正面) 馬頭大士</p>		

⑦	⑥	⑤	④	③
筆塚	石塔	阿弥陀如来	猿田彦大神	石塔
126	50・22	55・31	79・21	106・37・18
(台座) 筆子中「(計五十二人の名) 日」行年八拾五歳」 (左側面) 明治六紀癸酉年紀元十月二十六 (正面) 空明法印「不生位」	(正面) 弘化二乙巳年「十一月日」 願主「吉沢善兵衛」	(正面) 天保〇〇二月「信州川中島善光寺」 阿弥陀如来「如意輪観世音菩薩」		(側面) 寛永二乙丑四月八日

⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	馬頭大士	六地藏	阿弥陀如来 坐像	馬頭観世音 像	薬師如来坐 像
56・39・13	60・33・9	67・64・20	90・40・26	41・22・9	74	35・22・15	48・27・18	164
(正面)庚申塔	(正面)延宝□戊午年六月吉日 奉造立庚申供養塔□□	(正面)庚申 (側面)組、下部欠か	(正面)庚申塔 (側面)天保十三壬寅年二月吉日	(正面)慶心三丁卯二月四日馬頭大士 施主大塚由太	(内四体は頭部欠)		(正面)汝是畜生発菩提心 安永七戌戌歳十二月吉日	(台座)薬師如来念佛講中 文政二己卯年十一月吉日 世話人大塚忠兵衛同直八

二、堀ノ下町神明社

④	③	②	①	番号
石塔	石祠	石祠	鳥居	名称
75・40・9		78・35・62	(脚径)23	高・巾・厚
(正面)道嶽比古命「神明天照大神」 一心鎮宅靈神 (台座)講中一同 (裏面)教師(四人の名)発起人(九人の名)	(3基確認)	(側面)神明天照大神「昭和四十年六月吉日 氏子中大塚立雄他(八人の名)神 社の本殿	(左脚)戦勝祈願記念 発起人「當所大塚萬造」金壹百円也 大塚頼司 (右脚)昭和十二年十二月十日氏子十 人	銘  文

三、堀ノ下町熊野神社

①	番号
石碑	名称
95・76・40	高・巾・厚
(正面)世話人(十四人の名)	銘  文

堤 町

一、堤町熊野神社

④	③	②	①	番号
灯籠	猿田彦大神	鳥居	天照皇大神	名 称
	102・29・20	329 (脚径) 29	103・61・41	高・巾・厚
(昭和のもの)	(正面)猿田彦大神 (右側面)萬延紀元庚申歲十一月 (左側面)醫心□興謹書 (台座)十六人講	(右)大正三年十月建之 (左)氏子中	(正面)天照皇大神(他に四人の神の名) (裏面)天保十五甲辰仲春願主村中	銘 文

④	③	②
石祠	猿田彦	石碑
	35・18・10	110・120・30
(二十基確認)	(正面)昭和十一年六月「猿田彦大神」郷長	(正面)嘉永元戊申年十二月吉日「天照皇」 □忍穗耳命「援杵尊」彦火出 鵬鷄草葺村講中

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤
庚申	庚申塔	青面金剛王	石祠	石祠	手水盥	灯籠	絹笠大神	石祠	灯籠
60・30・15	86・47・27	236・40・18	59・30・48	77・39・60	(径) 37 53	135・46	182・87・14	74・32・52	135・44×44
	月大吉日 (正面)享保元歲庚申□ 奉納庚申供養為現世二世安楽十一月大吉日	(正面)青面金剛王 (裏面)延紀元歲次庚申十一月禎祥日		(台座)天明七丁未年十二月吉日 村中(天神か)		(側面)寛政九丁巳九月吉日「當村氏子中	(正面)絹笠大神 (裏面)明治三十四年九月吉辰「當大字氏子中	(正面)雷電宮 (右側面)村中 (左側面)嘉永六癸丑六月吉日	(右側面)文化七庚午年九月吉日「御神燈」 (左の側面)五十嵐太治良 文政十亥九月吉日(一對である)

⑮	⑯	⑰	⑱
馬頭大士	馬頭大士	馬頭觀世音	庚申
50・26・9	45・20・10	35・17・14	50・40・13
(正面)明治元歲戊辰年「馬頭大士」 十月二十二日「桐生善兵衛」	(正面)馬頭大士 (側面)享保十一年一月吉日「高橋芳吉」	(正面)馬頭觀世音 (右側面)大正十三年 (左側面)十二月建之	

二、堤町地内

①	番号	名称	高・巾・厚	銘	文
道祖神			82・55・35	(正面)道祖神「□□□□道」□□道 コマガタ道「桐生	

江木町  
一、江木町六所神社境内

①	番号	名称	高・巾・厚	銘	文
鳥居					
(脚径) 240 24					
(額六所大明神) (額裏)享保二十年「九月十三日					

⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②
石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	石祠	猿田彦	石祠
63・37・58	55・27・49	65・34・49	53・35・42	60・30・46	82・40・55	166・33・30	68 141 46 103 (台座高)
(本体後補)	(本体後補)		(東側面)文化四卯□ (西側面)十二月吉日		(北側面)天明八戊申「十一月吉日」 (南側面)上江木村「講中	(右側面)六人 (左側面)七人 (台座)石工「赤羽村」鎮義	(正面)山神宮 (側面)上エキ (地面)山講中 (南面)二十九人 (本殿)西文久二壬戌歲次二月大吉祥日 (台座)石工棟梁「五十嵐多次郎」 役人中「下エキ」 北爪源右衛門「早田勇久」



二、江木町南江木共有墓地

番号	⑥	⑤	④	③	②	①	⑩
名称	供養塔	庚申塔	如意輪觀音坐像	庚申塔	地藏菩薩立像	庚申塔	石祠
高・巾・厚	102・40・33	56・42・15	95・30・24	57・31・11	110・32・18	114・86・19	73・43・60
銘文	(正面) 梵字 (裏面) 施主當村「小乘菩提下化衆生」 (左側面) 奉納大乘妙典奠回向供養 (右側面) 明和三丙戌天十月吉日 (裏面) 施主當村「小乘菩提下化衆生」 (正面) 須藤甚五右衛門	(正面) 寛政元己酉年「庚申塔」六月吉日	(右側面) 安永九庚子天 (左側面) 十一月吉日當村上組中	(正面) 天明八〇「庚申塔」六月吉日	(背面) 享保四己亥元「為禪屋道專菩提也」 施主「町田足七」	(正面) 庚申塔 (裏面) 萬延元年歲春庚申〇月吉祥日 (台座) 上江木村(十二の名)	

⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦
供養塔	題目塔	層塔	如意輪觀音坐像	供養塔	五輪塔
113・28・26	92・61・16	九層 (総高) 350	(総高) 160	170・78	198・65
(台座) 念佛供養「摠村講中」護持施主 菩共成佛道 (左側面) 願以北切徳善〇於一切〇等與衆生 (右側面) 寶曆十庚辰天初冬吉日 (正面) 梵字	(正面) 寛延二己巳歲「四国西国」奉納南無觀世音菩薩「秩父坂東」九月吉日 當村「大嶋新五右衛門久利」	(西) 九輪塔再建「干時文久」壬戌年 三月大吉日「施主」〇〇〇〇	(南) 願主「北爪新五右衛門」當村「敬白」 (東) 西国四国「奉納供養塔」秩父坂東 (北) 寶曆九「己卯天」七月日 (西) 九輪塔再建「干時文久」壬戌年 三月大吉日「施主」〇〇〇〇	(正面) 百番供養塔 (右側面) 文政元戊寅年 (左側面) 十一月吉日「當村」願主「武田與七	(中世の五輪塔大日さまという)

⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
馬頭觀世音 立像	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	庚申塔	二十二夜塔	巡拜塔
64・28・14	85・56・17	57・25・14	58・47・15	210・45・15	74・50・9	163・29・29	133・36・25
(正面)文化三丙寅正月建「願主 北爪氏	(正面)萬延元年庚申「庚申」 庚申十二月吉祥日	(正面)庚申塔「 (右側面)天明六丙年」 (左側面)四月吉日	(正面)寛政元庚申「庚申塔」五月吉日	(正面)庚申「 (左側面)萬延元庚申年子月禰祥日 (台座)講中		(正面)二十二夜塔「 (右側面)安政四年歲次丁巳」 (左側面)十一月吉祥日 (台座)女人講中「大寫常七妻(他三人) (九人の名) (九人の名)	(正面)梵字「 (右側面)寶曆十一辛巳天仲冬吉日」 (左側面)上乘菩提下化衆生」 (台座)六回國供養「現住法印憲榮謹言」 大乘妙典六十「願主 信濃筑摩郡」 内田村湛然

④	③	②	①	番号
灯笼	大黒天像	地藏菩薩立像	鳥居	名称
103	(総高)148	60・26・18	(脚径)24 267	高・巾・厚
(脚部)寛政十一年己巳二月酉日	(台座)奉造立「子待」供養「武田與七(他四人)寛政第六甲寅年十一月大吉日		(脚部)弘化三年□丙午年三月吉祥日建之	銘 文

三、江木町天満宮菅原神社

㉘	㉙	㉚	㉛
庚申塔	馬頭觀世音	双体道祖神	道祖神
77・24・24	74・46・21	47・30・15	45・22・8
	(右側面)天保十亥七月吉日「 (裏面)世話人□□□□□□ 三浦銀造(他二人)		(正面)道祖神

⑦	⑥	⑤
石祠	手水盥	灯籠
	52・75・45	97
(小石祠を八十五基確認)		(脚部)北爪氏「寛政□巳年」常夜塔

四、江木町八坂神社

④	③	②	①	番号
石祠	菩薩	石祠	月読命	名称
62・46・64	48・20・5	60・30・48	67・14・5	高・巾・厚
(左側面)明治三十年再建「當村下組中」 (右側面)寛政元己酉年六月吉日「神社の本殿」		(正面)千手観音菩薩「 (左側面)大嶋徳多	(正面)月読命	銘文

小坂子町

地藏尊の由来

抑々地藏尊其先は徳川親氏幼名長阿弥と云ふ三州酒井村の邑長酒井五郎左衛門の家を襲く髪を蓄へて雅楽助親氏と名乗り是れ酒井家の祖なり親氏公長男酒井雅楽助廣親五代之孫雅楽助源正親三州西尾の城主是家康公の家臣の始也御白旗拝領正親の子河内守重忠其子酒井雅楽頭忠也夫より七代之孫從四位少輔雅楽頭忠恭の四男酒井駿河守忠温の妻に八重子と申者有り二十四歳の時初産に苦しみ医薬の効無く遂に死去したるに忠温公大に歎き時に五十嵐久長も時々見舞に行き此の死に合ひ共に歎き厚く菩提所へ葬り法名を智海院殿深譽春察妙廣大姉時に享保廿一丙辰年三月十四日なり其年五月改元して元文元年当時酒井家の侍二十数名會議の上石地藏を建立し十月吉日と記し元文三年駿河守忠温は酒井下野守忠告の養子と成り然るに久長は之を不便と思へ是を金仏に鑄さしむ之を古郷の向原に小堂を立替へ並に五十嵐和泉の由緒を天然石に刻し地藏尊を此に安置す時に延享二乙丑年七月二十二日駿河守忠温も来りて其時黄金二十兩を久長に与ひて帰る後久長は僧を置き年々金子五兩と白米二石五斗を与ひ仏像を守らしむ追録其頃より遠近の人々日々乘詣して大に盛なり其後十年を経て佐州の人善休と云ふ僧来りて此の堂に住む沐浴に身を清めて朝夕読経する事数年後に奉経塔を建立する時に宝曆十一年辛巳年なり念仏講中が又石地藏尊を建立し其時念仏老婦等二十名も有り文政五年延命子育地藏尊毎年七月二十二日年二回然る後明治十三年頃戸長等の談合の上御本体は戸長所に置石地藏尊は上の福徳寺へ移し置しが中には或る老人は何日しか村内に不思議事起りはせぬかと思ひ居りたる間も無く同十五年八月厄病流行し村内急に五六人死人を出すに至る病名コレラと云ふ後に村内の戸長及頭立る者集り議するに石地藏尊を此へ移したる故と一途に思ひ寺の住職尊宥を依頼し七日間読経せしめ後旧の所へ祭り置きたるに其後は何の災もなかりしと

以上は伊勢崎華藏寺所蔵の原本と村社八幡神社々掌田中義徳筆写し角田熊吉方に伝へられたる記録なり首肯し難き点或は誤字等を存するも今は原文のまま書写す昭和二十年八月五日当時の区長小林友太郎宅の戦災に伴ひ御厨子は烏有に帰したるも御本体には何等の異状を認めず不可思議の靈験は村民をして愈々尊崇の命を増進せしめたり区長小林孝一は村内に謔り厨子を新調し翌二十一年七月二十二日善勝、福徳両寺の住持を請して遷座の法要を数修せり

### 親鸞上人と阿弥陀如来の由来

抑々親鸞上人の由緒を尋ぬるに人皇八十代高倉天皇の承安四年上人生れ養和元年三月青蓮院慈鎮和尚の門に入り 建仁元年 法然上人の吉水の室に入り 建保元年諸国を経曆し 後東国を順廻し元仁元年 常陸国稲田に於て 浄土真宗を開き茨城郡西念寺は西山内村に有り上人開基の地たる稲田坊址あり嘉禄三年同国霞が浦にて獲たる一尺八寸の阿弥陀如来を其の笈に入れ負ひ都へ帰らんとする道傍嘉禎二年下野国芳賀郡大内庄柳島の専修寺を草創し此に居る事六年後上野へ至り大胡を経て小坂子へ来り時に仁治三年十二月此に住す事数月□厩橋妙安寺に行き上人自ら像を作り安置す後徳川家康之を京都東本願寺に移す建長二年信州水内郡芋井郷へ来り善光寺如来を拝し是れに居る事百日後都へ帰り弘長二年親鸞八十九才にて寂す  
後に見真大師と号す

阿弥陀如来の由来に仁治三年十二月親鸞上人小坂子へ移りたる時大雪に降り込められ其の頃月山に堂有り堂の裏に大胡より石井を経て沼田へ通う大道あり月山の西に熊野権現の社あり村の鎮守と尊敬して祭る近傍に人家十四五戸有り此の堂に上人立寄り住侍慶雲和尚厚く上人を招持し上人大に喜び寒さの事故来春迄居る可しと言ふ又村民も上人の凡人ならざるを知り阿弥陀如来の本像を作る可を願ひるに上人喜び時に仁治四年正月地頭役利左衛門始め村人百五十名同意し其の時今厩橋に鑄物師に源澤

と云ふ者あり又鍛治師

をあげ此の者を頼ミ上人指図して鑄さしむ村人は三四人ずつ諸方へ寄進を募り漸く銅鉄製二ヶ月の出来上り座像二尺八寸六分目方二十三貫四百目仁治四年二月日大勸進僧心禪為法界衆生平等利益也此の本像を堂に安置し上人慶雲供に経読する事七日間上人茲に留る事数月時に五月廿日慶雲始村民一同名残を措む遂に送別して上人厩橋に至りしと然るに其の後近郷の人立多く来り如来を拝せんと参詣したる者日に五六百人を数へ利益靈驗著しき事遠国等聞ひ又少し放れし道村民馬に乗り通行せしに必ず落馬す堂の前に塚を築き以て築山又後此の字を用ひ康元二年の頃より仏教大に盛なり村に七ヶ所の堂を建て元弘年中より国々大に乱れ延元三年閏七月新田義貞越前の藤島城に寄り足利勢と戦ひ遂に打死す其の一族十六騎の勇士篠塚伊賀敗走す上野へ来り東上野は新田氏に属したるにより端氣の寺へ入り住侍恵照を頼ミ潜匿したる尊氏一族氏満関東管領とし大に新田の一族を搜索する事敵なり遂に伊賀尋ね出され恵照も供に捕われ五代の東方なる道傍の山林に於て首を刎ね其の後寺は廃せられ永享三年寺院再興の際先住恵照及篠塚伊賀の霊を僧田裕始め近郷の人等相談して殺されし処へ記念を建立す又同年寺院再建徳取山恵雲院と云ふ天文年中長野左衛門良場山善勝寺と改称す

篠塚従士四人は小坂子へ走り築山の堂に匿れ居りたるを又も足利の手に堂を焼き払われ尊雲仏力を以て難を免れ四人は東の深田を越ひ山林に走り入り遂に生捕れ此に殺され村民之を四所に埋め四ツ塚と称す後尊雲又村民と共に小堂を建伊賀を始従士四人の冥勳を祈る茲に住む事数年応永の頃は築山に嘉応和尚住みて如来を守りたるも且々に因難して遂に行衛不明と成り寛正二年天下疫れい大に流行す人多く死す人民大に心配す応仁元年以来天下大に乱れ又も戦国となり諸国の人大に苦しむ事甚しく明応七年関東大地震人多く死す永正元年天下きん時の僧慶応和尚此の堂に住む事四年人民の助を得て居るも又も因難して自滅したと云ふ天文の頃より増々乱れ神社仏閣は自と破戒し目も当てらぬ有様なり永録二年築

山の破堂へ賊等入りて銅像を盗み負ふ走る途中足痛くして行く事能わず村の西南の深田へ入れ詫びして至りしと云ふ

五十嵐和泉及角田政房家系元龜元年織田信長越前を攻め近州姉川に捨て浅井朝倉と合戦す後天正二年信長又浅井朝倉を攻め遂に両家滅亡し朝倉義景の從臣に五十嵐莊左衛門後に和泉と云ふ者越前の朝倉家滅亡し浪人と成りて東國へ下り諸所巡歴の末始長尾氏後に上杉と改名す上杉管領の麾下に属して上野の漆原箕輪の両城に居る兵乱の為遂に破れ和泉又東走す慶長年間厩橋の城主北条景秀の從臣と成り時に景秀大に氣に叶ひ和泉も供に喜び遂に景秀の女子を娶り一男を生む幼名鶴千代と云ふ厩橋長昌寺に養われ景秀本国へ移り後酒井雅楽頭忠地厩橋の城主と成り時に莊左衛門も又忠也の家臣と成り阿波守忠行は忠也の子成り和泉の一子鶴千代と同年なる故友遊び致し居る百石を鶴千代賜ふ時に十五才元服して久和と改む和泉にわ領内小坂子八百石を下し慶長十九浪速で秀頼と合戦す雅楽頭の從軍成り功に依り百石を賜ふ元和元年より数度の合戦に功を得又三百石を賜わり今は一千二百石を下し置かれ西新井の城を守りをれり同三年二月雅楽頭殿には秀忠公の命を受けて播州姫路へ上使に行くに五十嵐和泉弓術の名人なる故殿の御供致して帰るに京都へ立寄り所々見物の末三十三間堂に参り堂の外側のあり之を射中て其の的当てたる者の額を掛しと云ふ莊左衛門歸りて後村民を愛撫し村人も又父の如く尊敬し和泉哉時は矢文を射て用事を致し村の内下竹田迄も射て樂ミをれり慶長十年村内に安兵衛と云ふ者あり此の者正直律義なる故莊左衛門之を召して庭掃き又は草履取りに召仕ひ居りける中忠勤なるに附苗字帯刀を免され室田(イマ)と性を受け後室田安兵衛と云ふ是れ室田の先祖なり

茲に不思議は元和五年四月二十三日の城の良の方に當る深田に芳生茂り其の中より光りを放つ事毎夜に及びければ村民始め元思儀なる可しと城主命じて之を捜らしめるに泥中に如來の銅像現われ如何にも不思議の佛像なりと村民に聞き合するに名主役紋右衛門此の如來の事に附昔よりの伝記ありと述べて書物を差し上げれば和泉之を一読し修り後如來の銅鉄

像を我が領内の中に堂を設け安置すべしと急に近傍へ寺を建立し茲に安置す時八月二十三日此の寺を以て我が菩提所と定め十月寺へ僧を置き之を守らしむ又田畑山林共三町歩を与ひ元和六年三月八幡大神を村の産土大神として近き山林へ祭り鎮守と尊敬し近辺に別当を置き大神の御守りとす田畑山林一町五反を与へ此の年八月厩橋城主雅楽頭殿も参詣す此の折り門に鳥居を建て両側へ杉を植はしむ

五十嵐家の子孫

莊左衛門和泉兄

久高一弟

幼名鶴千代

和右茂八

久勝

久慶

久長

久米七

久米八

幸内一弟  
久重二弟  
浅左衛門

久重は角田家へ養子又養子 文明年間伊達左京大夫為宗の從臣に角田將監と云ふ剛の者あり此の人の時奥州角田の里を賜わり三千石を領す地名を以て性とす代々此の地を領す後仙台領主政宗公の一字を下され五代の孫を政房と云ふ其の時政宗公の近臣に原田右馬之助と申す者あり至て自慢故同家中にて之を悪む者多く原田は五千石を下し置かれ或る日右馬之助と領地の争論より原田は持たる鉄扇にて政房の面を打政房大に怒り抜き打に屠へ切り拭け早座に殺して早速君へ自首して事の子細を申上げ領地を召し上げ 命を御取下されと言上しければ 政宗公にわ深く感じ身を捨るにわ乃ばず領地を捨て何國へ立退く可しと申附られ弟と共に國を出立し何地とあても無く上野へ来り時に慶長十年五月勢多郡樽村へ来り此に留ましり事四ヶ月弟を茲に置政房は善き地を撰び住したきと思ひ住

所定まらば知らせんと言へて又も茲を立出で小坂子へ来り五十嵐の元へ行き召仕ひん事を願ふ莊左衛門政房を一見するに剣道に達したるを觀察し乱世の時なれば早速承知して召仕ひんと曰ふに政房大に喜び供に語り合へ後城の東方へ居宅を造り茲に住せける然るに村内の少年等は乱せの習ひ農の外は剣道を学びたき由を城主に願ひたれば此の頃召されし政房の元へ行き学ぶ可しと言ふ少年は此の事を政房に告げしかば政房喜ぶ土地の少年の事なれば参り次第教へ可しと言ふに少年等は是に喜び農事の外又祭日などにわたりて稽古を致しければ近郷の少年も来りて学びける然る後十二年三月村人の世話で政房妻を貰ひ仲良く暮らす中女子を設け然るに元和元年浪速に戦ひ起り莊左衛門政房を連れ浪速へ行數度の合戦に功を現わし政房遂に深手を負ひ郷里へ早く送歸る此の戦ひの功に依りて政房に白金百兩を賜ふ其の後數月立ちて漸く全治す然れ共時より創所痛みて劍術元の如く教へ難く村人も時々来りて厚くいわり居れり然るに寛永二年二月病にかゝりければ又も村人不便に思ひ一女の房子は早十七才なればと地頭役又は名主とも云ふ権大夫の申よふ城主久和は二十二才此の君へ房子は如何かと述べれば政房大に喜び善きに計ひ給へと曰ふ権大夫の仲達にて久和と遂に夫婦に致しける寛永二年六月二十九日政房遂に卒す村民及久和之を近き空地場へ厚く葬り後政房の妻竹子は尼と成りて和泉殿及夫との菩提を弔ひんと領寺に入り年月を送りける又久和は房子と供に夫婦仲良く月日送る中男子二人女子一人を設け長男は吉勝次男房治女子は春子

寛永廿一年吉勝元服して相続し次男房治は角田を相続して長男を三大夫と云ふ其の子を庄大夫と稱す次子を勇衛門と云ふ西隣に宅を設け置是を西の先祖と云ふ

女子春子は城の前に伊左衛門と呼ぶ農民あり此の者に春子をやり其の家を立てさせ其の時分は土人性の無き者多く久和は角田の性を賜ひて後角田伊左衛門と名乗り夫より子孫伝へ今に至る

奥州伊具郡角田の里政房の家臣に天仲善衛門義成と云ふ者あり其の子に

善兵衛義明三代目の天仲秋造角田の里より尋ね来りて先祖の君政房を同向及石塔を建て歸りしと云ふ  
享保七壬寅年天仲秋造之す  
時に五十嵐久長の代

五十嵐右茂八久和は大願に依りて天神之石宮を下中川に建て時に寛永十四年八月廿五日に鳥居を建て両側に杉及梅を植へ又室田安兵衛に其の傍五畝歩を与ひ天神宮の御衛りとす延享年間酒井雅楽頭忠恭公播州姫路へ国替ひの節五十嵐久長御供したる時御手づから槍を賜わり其銘は表に播州姫路城主裏に延享四年とあり天明元年五十嵐久米八不幸にして火災に罹り其槍及弓矢を出す間なき故遂に槍の目釘より燃ひ折れ其後家を建てる時小刀鎧鎧地中より掘出し今で槍小刀は角田家にあり其後數代を経て角田浅造が領に入りてより十年を経時に明治十二年三月阿弥陀如来を善勝寺へ納めたきを浅造が名主へ願ひ入れたるに名主を始権之丈外二三名の者と相談の上願ひに任せられたれば金子五兩に田疇反五畝何歩を附て右如来を善勝寺へ納め三月廿日時に住持田中三条

浅造が領に入る迄は守り僧を置其時分は寺宅の中又は諸所に墓あり石塔は世の変遷につれ中にわ石塔が折れたるもあり遂に一所へ集め供ひしと云ふ  
祖父浅造が加要な古へ書き物が有るから移して置けと言われ早速書き移して置き志者なり  
維時明治三十四年三月  
熊吉三十才

### 念仏橋の北の石物

念仏橋供養塔

安永四年乙未三月吉日建立

代表者氏名 井伊 武右衛門 兼重郎の宅地の先祖

石田 豊七

〃 伊井喜和藏

石物の後に書いてある氏名

1 伊井善七

2 小金井総八

3 萩原常八

4 岡田林藏

5 白井喜左衛門

奉納康申供養

享保二十年乙卯九月吉日

代表者氏名 龜田元左衛門

〃 初化 清

〃 小金井

康申塔

寛政十年九月吉日

道祖神寛政十年戊午三月吉日

秩父三

拾四所觀世音

文化元年甲子年

十一月吉日之建

馬頭大土

寛政三年五月吉日

道祖神

明和七年十一月吉日

道祖神(念仏橋南下)

寛政十年三月吉日

### 五十嵐和泉守の碑文

五十嵐和泉守其先越州人属上杉管領麾下居上野州漆原城又与箕輪城輔車

相依是時敵国並作屠城略地箕輪漆原皆丘墟矣和泉守東奔厩橋其守将丹後守北条景秀厚遇和泉守異於宅人和泉守從小坂子邑而家焉娶景秀女生一男小字鶴千代為兒顯敏字書於厩橋長昌寺 太守雅樂頭酒井忠世君過長昌寺鶴千代陪其筵席 太守見而奇之廻問寺主曰是子何如寺主悉告其狀 太守曰為厚良家子必為国器賜食邑百石属 世子阿波守忠行君麾下称五十嵐莊左衛門從浪華兩軍是從□頗有戰功 太守賞之加賜百石其子孫相伝以至於今給事厩橋大守家百年矣爰以忌辰修造墓碣其銘曰

信誼之門保其家兮

惟茲德榮為国華兮

後人作孚庶乎不差兮

延享二乙丑

七月二十二日

松崎永哉叟立

東都井通照撰

## 第八章 民俗知識

### 一、しつけ・作法・禁忌

#### (一) しつけ

衣生活のしつけ しつけ糸を切つてから着る。(川端)

着物をたてる時は袖からさきに縫え。(関根)

足袋 足袋を履いて寝るな、親の死にめに会えなくなる。(嶺)

神棚 神棚の下を通りぬけるものではない。(嶺)

イロリ イロリに便所関係の材木を燃すな。(嶺)

ゴミをイロリの中に掃き込んではいけない。(嶺)

禁忌 から火を燃すな。燃すと隣が大尽になる。(鳥取)

鉤竹と鉤竹の間でものをやりとりするな。(鳥取)

鉤竹をゆするな、貧乏になる。(鳥取)

ごはんをこぼすと目がつぶれる。(鳥取)

砥石 カマを砥石にまたがせておくと砥石がおつかける。(鳥取)

ほうき ほうきを横にするな、ほうきをまたぐな。(鳥取)

#### (二) 作法

作法 盛りつけは二回以上しろ。(関根)

空湯をわかすな。(関根)

食生活のしつけ・作法など 木の箸と竹の箸を混ぜて使うな。(関根)

赤飯に汁をかけるな。かけると嫁に行くとき雪が降る。(関根)

赤飯に汁をかけて食べるな。嫁に行くときに雪が降る。(川端)

禁忌 水の中に湯を入れるな。(鳥取)

枕 北枕は仏様がするので、東枕にしる。(嶺)

禁忌 鉄びんの口を北に向けるな。(鳥取)

北向きに寝るな。(鳥取)

盛りつけはまねでも二回しろ。(鳥取)

赤飯 赤飯に汁をかけて食べるな。食べると犬にかじられる。(鳥取)

十五日粥 正月十五日粥を吹いて食べるな。吹くと田植の日に風が

でて稲がたおれる。(鳥取)

みそかそば 晦日ソバは、夜ソバを食べる。(五代)

家例 正月三日には、ソバ家例の家とイモ家例の家がある。(五代)

#### (三) 禁忌

葬式 友引の葬式は悪い。(鳥取)

社日 春秋の社日の十時前に土を動かすとよくない。(鳥取)

たてまえ 建前は甲子や末の日は良いが、申の日は悪い。(鳥取)

棟上げ 三隣亡に棟上をしてはいけない。すると近所両隣をほろぼ

すから。(鳥取)

禁忌 友引に葬式をするな。仏滅に建前はするな。(龍蔵寺)

人の一生に関する禁忌

妊娠中は火事を見るな、アザのある子ができる。



妊娠中は死んだ人の顔をみるな。(五代)

衣生活に関する禁忌

タテムスビをしてはいけない。(鳥取)

針供養の日には針仕事はするな。

左前に着るな

干したものをたたまずに着るな。

北向に干すな。(五代)

禁忌 死んだ人の着物を洗濯して北向に干すな。干すと成仏できない。

(鳥取)

新しい着物の仕立は日の良い日にしろ。(鳥取)

針供養の日には針仕事をするな。(鳥取)

衣生活のしつけ 一月八日に針仕事をするな。(龍蔵寺)

着物は左前に着るな(川端)

芸者の着物は申の日にほしてはいけない。(関根)

洗濯物は北向きにほすな。(関根)

洗濯のあとは、一度たたんでから着る。(関根)

干したものを着るときは一度たたんでから着る。(川端)

下駄 新しい下駄を履くときは、歯が抜けないようにツバをかけて

から履く。(鳥取)

衣生活のしつけ はきおろしは座敷からはいておけるな。(関根)

食生活に関する禁忌

盛りつけは三回ぐらいにしる

左膳にするな

たつ膳にするな。(鳥取)

箸はたてるな

嫁入前の娘は、赤飯に汁をかけて食べるな、食べると婚礼の日に雪

が降る。

チャワンやオヒツをたたくとオサキが来る。

箸と箸でものをとるな。お骨拾いと同じになるから。

食べてすぐ寝ると牛になる。(五代)

エビス様にあげたごはんを子どもが食べると出世しない。(関根)

正月三が日のトロロを食べた茶碗でお茶を飲むと中気になる。

(龍蔵寺)

トロロメシを食べた茶碗でお茶を飲むな。飲むと中気になる。(川端)

産婦の食事に関する禁忌

甘いものはいけない。乳があがる。

刺激の強いものはいけない。

なまものはいけない。(下小出)

あぶらものは産後二十一日まで食べてはいけない。(下小出)

玉子を食べるとピヨコピヨコ(ヒヨコ)ができる。

からいものを食べてはいけない。(下小出)

住居に関する禁忌

お稻荷様が日なたにできると良くない。

お稻荷様を日向にだすな。出すとその家が絶えてしまう。(関根)

お稻荷様は風通りの良いところに祀れ

東向の家は、家の不幸が絶えない。

西に入口があると運が良くない。

便所は辰巳の方向にしる

敷居を踏むな。踏むとその家の主人の頭を踏むことになるから。

畳の目を踏むな。

便所にツバをはくと歯が弱くなる。

空湯をたてるな。隣が大尽になる。



エンガをおいてくると縁が遠い。テンガをおいてくるな。それを盗んだ人が天下をとる。(龍蔵寺)

ノラにエンガをおいてきてもとられないが、テンガをおいてくると天にとられる。(川端)

田植え 辰の日には田植えをしない。(江木)

辰の日に田植をするな。すると人が死ぬ。善勝寺は辰の日に田植をする。(鳥取)

辰の日は田植をするな。辰の日になると、葬式のたつ頭が必要になる。(川端)

十五日の粥を吹いて食べるな。吹くと田植えのときに風が吹く。

(龍蔵寺)

小正月の小豆粥を吹いてたべるな。吹くと田植のときに北風が吹く。

(川端)

出産に関する禁忌

妊婦が火事を見るとカタワの子や青アザの子ができる。

妊婦が葬式をみると黒いアザの子ができる。

アザのある子を生まないためには、鏡を外に向けておくと防げる。

(下小出)

双生児 「ふたごのたちだから」といって、あまりよくないといつた。(小神明)

あざ 火事を見ると、あざの子が生まれるから、ふところの中に鏡を入れておけといわれた。(小神明)

禁忌 無縁仏の夢をみるとその人を頼ってくるので良くない。

(鳥取)

猫が死んだのをみてもかわいそうだなといつてはいけません。頼ってくるから。(鳥取)

へびや猫を殺すものではない。(鳥取)

ウツギははねるので燃すものではない。(ケヤキは目がしみるので燃すものではない。(鳥取)

クチナシ 悪い方向にはクチナシの木を植える。(鳥取)

ビワ ビワを植えると人のうなり声が絶えない。(鳥取)

ノイチゴ ノイチゴはへびのイチゴだからさわつてはいけません。(鳥取)

シキビ シキビは葬式に使うから使うな。使うと仏を呼ぶからよくない。シキビは墓に植える木(嶺)

グミ グミの木は臭いが悪いので燃すな。(嶺)

グミの木は人のうなり声を聞きたがる。(鳥取)

ケヤキ ケヤキは目がつぶれるので燃すな。(嶺)

イチヨウ イチヨウは居間に寝ている人より大きくなると良くない。(鳥取)

サルスベリ サルスベリの木は寺や神社外に植えるな。(鳥取)

ヒバ 火(火事)を呼ぶのでくしにしない。(関根)

ビワの木 家に植えてはいけません。(川端)

屋敷にビワを植えると病人がたえない。(関根)

桜の木 庭木にはよくない。(川端)

## 二、医療・衛生・保健

### (一) 薬物療法

ドクダミ おできができたならドクダミの汁をつければよい。(嶺)

ドクダミは土用の丑の日にとり、かげ干ししたものは、毒をくだす。

(龍蔵寺)

土用の丑の日のドクダミを干してせんじて飲むと良い。(下小出)

ドクダミを飲むと毒くだしになる。(川端)

デキモノにドクダミをぬると良い。(川端)

ドクダミの葉をたたんでむせば、はれものに良い。(下小出)

はれものができたらドクダミをむしやきにして患部にはればよい。

(龍蔵寺)

神経痛のときは、ドクダミをすり、小麦粉といっしょにまぜたものを患部にはると良い。(川端)

ドクダミの風呂は汗にも良い。(川端)

センブリ センブリは腹くだしに良い。(下小出)

ユキノシタ ユキノシタは氣を失っている人の鼻につけてやるとい

い。(嶺)

井戸の石壇の下のユキノシタは、やけどをしたときに、葉をもんで

使えば薬になる。(下小出)

耳が悪いときにはユキノシタの汁をしぼって耳につけると良い。

(下小出)

中耳炎 中耳炎のときは、セミの出からの黒焼きをつめてやればよ

い。(嶺)

はれもの もぐらの黒焼きは乳のはれものに効果がある。これは嶺

城主の家に伝わる薬。(嶺)

寝小便 イモリの黒焼きは寝小便に良い。(鳥取)

薬 モグラの黒焼きは痔の薬になる。(鳥取)

あつけ あつけのときにはハツカをぬる。(鳥取)

あつけのときは、草を塩でもんで体をこするとなる。(川端)

うめほしをこめかみにはるとあつけが去る。(川端)

痔 痔のときは、いちじくの葉をあぶって患部に三回ほどはりつけ

ればよい。(鳥取)

痔のときは、洗面器に熱湯を入れてそこにネギを入れ、しばらくし

たらそのネギを患部にあてるとよい。(鳥取)

イボ イボができたら、ナスのヘタをしぼってその水をつけるとよ

い。(五代)

イボができたらヘビのぬけがらでこすると良い。(川端)

ハトムギの粉を飲むとイボには良い。(川端)

イボのときは、ナスのヘッタでこすってそれを下水のところ埋め

ればよい。(龍蔵寺)

頭痛 頭痛のときは梅干をこめかみに貼ればよい。(五代)

頭痛のときは、こめかみに梅をはれば良い。(龍蔵寺)

虫歯 ムシ歯のときは、ハツカをムシ歯の上にとらす。(鳥取)

脱脂綿にハツカを浸して、それを歯につめてかんでいると痛みがと

まる。(五代)

歯の痛いときには梅干をはる。(下小出)

歯がいたいときは、はつかをつけて、ゆだれをだらだら流せばなお

る。(下小出)

虫歯のときは、ビワの葉をかんでいれば歯の痛いのはおさまる。

(川端)

高血圧 高血圧にはサルノコシカケがよい。(五代)

蜂にさされた時 蜂にさされたら、もち草をもんで汁を出しそれを

つけるとよい。(嶺)

蜂にさされたら焼酎をつける。(五代)

できもの デキモノができるとき、ドクダミをあぶってはりつける

とよい。(鳥取)

デキモノができるときはドクダミをせんじて飲む。(五代)

あせも あせもは桃の葉をお風呂に入れて、その葉でなでるとなる。(五代)

あせもにはドクダミを風呂の中に入れて、湯でふやけさせたものをこすつてもよい。(鳥取)

柿の葉は汗にもよい。(龍蔵寺)

土用の丑の日にとった桃の葉は、あせもに良い。

桃の葉は風呂に入れてはいると、アセモに良い。(川端)

のどの痛み のどの痛いときには、ねぎをきざんで布に包み、のどにあてるとよい。(五代)

ボタンキョウ・スモモを梅酢の中につけたものはのどの痛いときに良い。(五代)

かぜ かぜをひいたときは、酢と玉子を混ぜたものが良い。(下小出)

かぜには玉子酒。(川端)

かぜのときは、ネギやシヨウガをすつて、砂糖や味噌を入れたものを飲むと良い。(川端)

せき せきがでるときは、焼きねぎを紙につつんで、のどのまわりにすれば良い。(下小出)

鼻つまり 鼻がつまったら、ネギの白いところを焼いて、それを鼻のところにはつておくと良い。(川端)

鼻血 鼻血がでたら、あおむけになり、頭の裏をたたけば血がとまる。(下小出)

鼻血のたときは頭の下をたたけばよい。(川端)

下痢 この辺にはないがキハダを焼酎の中に入れてものは腹くだしのときにはよい。(五代)

下痢のときは、ゲンノシヨウコやセンブリが良い。(五代)

下痢のときは、ニラや玉子の入ったおじやが良い。(下小出)

結核 ニラ、ネギは結核に良い。(下小出)

てんかん てんかんのときは鹿の角を少しけずり、それを飲むと良い。(川端)

ミミズ ミミズは熱さまし。(川端)

ムカデ ムカデを食用油につけておいたものは、傷口にぬるとよくなる。(川端)

鳥目 夜めくらは八ツ目うなぎ(龍蔵寺)

蜂さされ 蜂にさされたら小便が良い。蜂にさされたら塩をぬる。(川端)

馬の病氣 馬の糞つまりには、エサを少しやらないでおいたり、エ

サをやわらかいものにしたたりする。エサをやわらかくするとき、玉子と井戸水をまぜてする。(鳥取)

馬の皮膚病には、夏の夕方川で洗つてやる。(鳥取)

馬の具合が悪くなつたときは、黒砂糖をなめさせた。馬の皮膚病は、オキシドールを薄めてぬるぐらい。馬の糞つまりは、腸のあたりをこすつてやった。(下小出)

馬のかぜは塩水を飲ませる。(川端)

馬の病氣のときに玉子酒を一合ぐらい飲ませると良い。(龍蔵寺)

馬がアブにさされたときは、さされたところに石油をぬると、カサブタができてなる。(川端)

馬のかくらん 馬の霍乱には水をかける。(嶺)

馬のふんつまり 馬の糞つまりのときは、石けん水を解いて竹筒に入れて、それを手に持ち馬のしりにつつ込んで、糞をかき出す。このとき馬が荒れるので柿の木にしばつておく。(嶺)

## (二) 呪術医療

虫ふうじ 虫ふうじは寺で拜んでもらう。(嶺)

ほうそう除け 疱瘡になったら、ウツギの新枝を編んで棚を作り、

そのまん中に赤い御幣束を立てる。そしてそこに赤飯をあげて、後で

三本辻に送り出す。(嶺)

ほうそうのときは、ウツギの木をあんて、赤い色紙を幣束にして三

本辻においておく。そしてなおつたら赤飯をふかしておく。(下小出)

蜂さされ ハチササレのときは、歯クソをつける。(鳥取)

ハチササレのときにはボクソ(着物のたものほこり)をつければ

よい。(鳥取)

ひきつけ 子どもがひきつけをおこしたときは、井戸で大声で「オー

イ、オーイ」と呼ぶといい。(下小出)

てんかん テンカンの痰をふりかけられるとテンカンが移る。

(鳥取)

テンカンのときは草履を頭の上のせておけ(鳥取)

てんかんのときは、額にゾウリをのせると良い。(川端)

てんかんは額にワラゾウリをのせる。(龍蔵寺)

神経痛 神経痛は、ゲンノシヨウコウやドクダミがよい。(鳥取)

うちみ 打ち身は、バレイシヨをすつてうどんこを入れてすりこめ

て、それを布や紙につけて、患部にはる。(鳥取)

鼻血 鼻血のときはちんげのうらをたたけ(鳥取・嶺)

イボ イボができたなら、伊勢崎の連取のカサマツの石宮に拝みに行

く。(五代)

夜泣き 夜泣きは端気町の善勝寺に連れて行って拜んでもらう。

(五代)

夜泣きのときは、流しにニワトリの絵を描き、逆に貼る。(五代)  
子供の夜泣きを止めるのは、紙に何か(不明)書いて、枕の下に入  
れて寝かすと止まる。(龍蔵寺)

夜泣きのときは、キヨツパシを屋根にあげる。(川端)

夜泣きは、青柳の石塔に生玉子をあげる。(龍蔵寺)

鼻血 鼻血のときはちんげを抜くと良い。(五代)

あつけ あつけのときは、おてんとうさんの方を向いてまんじゅう

笠をかぶり、その上から井戸神様の水を三回かける。(鳥取)

あつけのときは、菅笠をかぶせて水をかけると良い。(五代)

あつけのときは、スゲ笠をかぶせ、その上から水をかけてもらい、

その水をのむと良い。(下小出)

ノドの骨をとる 台所の稲の穂(オカマサマの穂)でこする。(片貝)

コウデの治し方 しょうじの穴を通して、末の女の子に糸でしばっ

てもらう。(片貝)

こうでのときは、手首を丑年生れの人に糸でしばってもらうと良い。

(川端)

ものもらい ものもらいは、井戸に半分カサをかぶせてなおしてく

れば全部みせるといい。(嶺)

井戸にメケエを半分見せる。直したら全部見せるといい。(片貝)

目かご(ものもらい)ができたなら井戸に行つてミケを半分かぶせて

なおつたら全部みせますという。(五代)

やんめ大安売り 目の病気のときには、「やんめ大安売り」と紙に書

いてはつておくとやがてなおる。(下小出)

やんめのときは、紙に「やんめ大安売り」と書き、それにやんめの

やんをつけ道端においておくとよい。(龍蔵寺)

やんめに小便をつけると良い。(川端)

薬師様 目の悪い人は、薬師様に「め」「め」と書いた額をあげると良い。(川端)

めかいご めかいごができると、めかいを井戸にかぶせて、半分動かして井戸にみせて、なおつたら全部みせますというが良い。(龍蔵寺) かごをかぶるとめかいごになる。(川端)

馬の病氣 馬の病氣を防ぐために、一月八日に日輪寺の観音様におまいりに行き、お札をもらってくる。(川端)

馬の病氣のときは、嶺の請地にある観音様にお札をもらいにいく。(嶺)

馬の風邪は背中に筵をつけておく。(鳥取)

馬が病氣のときは、絵馬を作つて石山様にあげてくる。(鳥取)

### (三) その他

デキモノ デキモノのうみを出すときは、ヒルに血を吸わせれば良い。

やけど 火傷したら味噌をぬれ。(嶺)

やけどをしたら味噌をつける。(関根)

ヤケドをしたら、水で冷してから油をつける。(下小出)

やけどのときは、ジャガイモをすつてつけると良い。(下小出)

やけどをしたら馬の油をつける(関根)

中氣 桑の箸を使うと中氣にならない。(嶺)

中気にはおきゅう。(嶺)

シビレ シビレには、額にシビ(稻ワラのカサカサした所)をはれ

ばよい。(龍蔵寺)

とろろ 三が日にとろろを食べると風邪をひかない。(鳥取)

乗り物よい 乗り物酔のときは梅干をへソにはる。(鳥取)

のどのとげ のどのとげは、ごはんを大口にしてどかんと食べる。(鳥取)

冬至 冬至のユズ湯のユズで肌をなでると肌のきめがよくなる。

(鳥取)

冬至にとうなすを食べ、ユズ湯に入るとよい。(鳥取)

冬至のカボチャは中気にならない。(五代)

冬至のコンニャクは胃袋の砂をとる。(五代)

トロロメシ 三カ日のトロロを食べると風邪をひかない。(五代)

大晦日のトロロご飯は中気にならない。(五代)

三カ日にトロロメシを食べるとカゼをひかない。(川端)

正月三カ日にトロロを食べれば中気にならない。(龍蔵寺)

風呂 土用の丑の日に、ドクダミ・ヌイカズラ・モツツミをお風呂

に入れてはいるといい。(五代)

かぜ かぜにはねぎのみそ汁が良い。(五代)

かぜのときは玉子をとる。(五代)

かぜのときは梅干を粥に入れて食べる。(鳥取)

かぜのときは、ネギをこまかく切つてみそをまぜて、そこに熱湯を

入れてたものを飲むこのときにニンニクを少し入れればさらによい。(鳥取)

(鳥取)

薬屋 富山の薬屋の熊の胆は胃や腸の具合の悪いときに飲む。

(五代)

食い合わせ

ウナギと梅干し

スイカと天ぷら

(スイカは川原でよくできた) (川原)

ウメにウナギは中毒を起こす。(嶺)

天ぷらとすいか

うなぎと梅干

生玉子とところてん (鳥取)

ねんご ねんごをしたときは、小麦粉と酢をこねたものをはると良い。(下小出)

水虫 水虫のときは、水に酢を入れた中に足を入れればなおる。

(下小出)

歯 下の歯が抜けたときは屋根に投げ、上の歯が抜けたときは流しの下に投げる。(下小出)

家伝葉 下痢のときは、川原の梅津の家伝葉を買ってきた。(川端)

### 三、ト占・まじない

家例 正月一日、かぶを便所の中で食べる家例の家があった。借金で困ったことがあった例として言われた。(片貝)

ツバメ ツバメの来る家は縁起が良い。(龍蔵寺)

クモ 朝グモは縁起が良い。殺さないでエビス様に持って行く。

(鳥取)

夜グモはドロボウが入るといい、殺してしまう。(鳥取)

朝蜘蛛は縁起が良い。(龍蔵寺)

早蜘蛛は縁起が良い。(川端)

早蜘蛛がでるとお客が来る。(川端)

夜蜘蛛がでるとどろぼうが入る。(川端)

耳 病気の家畜の耳を触って冷たければ見通しがいい。(鳥取)

熱いものを触れたら耳をさわれば良い。(鳥取)

夢 ウロコのある魚の夢はいいが、ウナギなどの夢は悪い。(鳥取)

良い夢は午前十時前に他人に話すな。(鳥取)

葬式の夢をみると人が大勢寄せるようなことがある。(鳥取)

商いの夢で、男の客だと商売がうまくゆかず、女の客だと良い。

(鳥取)

日の出の夢は、栄えて縁起が良い。(鳥取)

夢は逆さま。(鳥取)

高い山の夢は縁起が良い。特に富士山は良い。(鳥取)

墓地の夢をみるので、墓籍をみて、宝暦年間の先祖の墓碑をかいでもらったら墓の夢をみなくなった。(鳥取)

夢占い

田植えの夢は病気になる。

蛇の夢はお金かたまる。

こけのない魚の夢は縁起が悪い。(龍蔵寺)

田植えの夢は大凶。

大水の夢は大凶。

へびの夢はお金を拾う。

うろこのある魚の夢はいい。

うろこのない魚の夢は悪い。

朝の夢はまさ夢。(川端)

猫の死 猫が死んだら三本辻に捨てると良い。(鳥取)

へび除け 蛇除けにはお線香をたくといい。(鳥取)

二十日粥を家のまわりにまくと蛇除けになる。(川端)

ネズミ除け ネズミに繭が食われたときはお諏訪様にお参りに行く。(鳥取)

モグラ除け 小正月の小豆粥のなべを洗った水を家のまわりにまく

とモグラが来ない。(龍蔵寺)



渴水期 大正用水以前は、嶺まで水をもらいに行く。このときもめぐとも多かった。また全員で赤城や榛名へ水をもらいに行つて村の鎮守に納める。(鳥取)

願いごと 流れ星の尾をひいている間に願いごとを唱えればよい。

(鳥取)

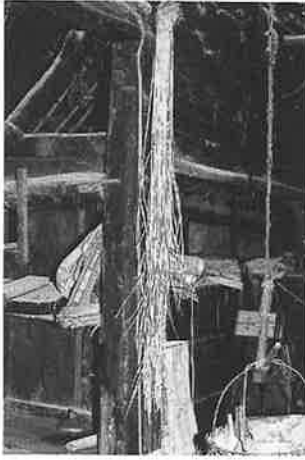
失せもの 家で物がみつからないときは、鉤竹をしぼり、みつからたらほどくというの良い。(嶺)

イロリに関する俗信 ものがみつからないときは、紙にみつからないものがみつかりますようにと書き、それをたたんでイロリのカギ竹に結びつけば、ものがみつかる。(関根)

なくし物があるときは、紙でこよりを作り、「○○○(なくした物)がみつかりますように」と唱えながらイロリの縄のところにしぼるとものがでてくる。(下小出)

イロリ 主人は東向きに座り、おかみさんは西向きに座わる。イロリではクワゼや松枝・松葉をもす。イロリのはじに幣束をさしておいたり、鉤に幣束をしぼりつけおく。(嶺)

白 暮に白はモチつきのあと、しめをはった。底を使つて、なわなの台にした。(端気)



オカマサマの穂 (竜蔵寺町)

オカマサマの穂

一年に一本流しの柱にかけておき、屋根のふきかえの時、ぐしに入れる。

(龍蔵寺)

流しの柱にかけておく。魚の骨がのど



泥棒除けの縄 (竜蔵寺町)

につかえた時、この穂でこすると下がる。(龍蔵寺)

火事 近所に火事があると、屋敷

稲荷様に水をかければよい。(鳥取)

泥棒除けの縄 近所の人が左なわ

になつてくれたものを、一年に二巻、

天井のはりにまきつけておく。

(龍蔵寺)

馬 戦前はどの家でも一〜二頭馬を飼っていた。馬は馬屋に入れるが、馬が荒れるので固い栗の木でなければ馬屋がつぶれてしまう。(五代)

鳥鳴き 人が死ぬ時には、鳴き声が違う。(小神明)

前ぶれ 女の人が死ぬとお寺のお勝手で水の音、男の人が死ぬと、屋根瓦の音がするという。(片貝)

蚕 どんど焼に使った竹を切つてはしを作りそのはしでおかいをつまむとおかいこは病気になるらず丈夫に育つといわれた。(上小出) 不幸

墓場で転ぶとよくない。

でかけるときに鼻緒が切れると出先の人に何か悪いことが起きる。

針が折れると身内の人が亡くなるような悪いことが起きる。

カラス鳴きが悪いと、カラスの尾っぽの方向の家に不幸がある。

(五代)

厄おとし ナニワ節を、厄おとしの人が主催してやったことがある。

(小神明)

雷 田植とか田の草取りをしている時、雷(ライ)が来ると、危い

ので家の中に逃げた。ライをバカにして避難をしない人に落ちるといわれていた。(龍蔵寺)

#### 雷除け

雷のときはカヤの中に入れ、雷はカヤを嫌うから。

畑にでているとき雷が鳴ったら、金物を捨てて「クワバラ、クワバラ」という。

雷が鳴ったら、仏様にお線香をあげて「クワバラ、クワバラ」という。

節分の豆をとっておき、初雷のときに自分の年の数だけたべればよい。(龍蔵寺)

畑仕事中の雷除けは、刃物を捨て地に伏して「トオクノクワバラ、トオクノクワバラ」ととなえる。(川端)

かみなり除けは、かやをつり、お線香をあげて中に入る。(川端)

害虫防除 節分にイワシの頭を焼く。(龍蔵寺)

魔除け においが強いしょうぶを屋根にさし、軒下にもよもぎとしようぶをさす。(日輪寺)

六三除け あつけのときは六三除けをすれば良い。(川端)

厄年 厄年に生まれた子供は丈夫に育たないといわれ、上小出地区には三十三の厄年に生まれた子を捨てる風習があった。

三十三の厄年に生まれた子は、お七夜がすまないうちに、近くの丁字路(三本辻)に捨てた。「み」の中に「さんだわら」を置いて、赤んぼうをその上にのせた。あらかじめ拾う人を決めておき(多産で子供が丈夫に育っている家の人)、その人は、かげにかくれて捨てるのを見ていた。捨てたのがわかるとすぐに拾い、家に帰り名前をつけた。捨てる時には姉や弟が大声で捨てないでと泣きさげんだ。拾った人は、名付親となり捨てた人の家へ子供を返しに行った。

丈夫に育って欲しいというわが子の成長を願って行われたものだそうだ。大正時代の末期までしていたらしい。(上小出)

茶柱が立つと縁起が良い。(川端)

茶柱が立つたら、それがたおれる方角をみる。その方角から誰れかがくる。(龍蔵寺)

#### 四、天文・気象

天候に係ることわざ

「十三夜の月に笠がかかると小麦がはずれ」

「赤城の夕立ち雲はやってこない、榛名の夕立ち雲はやってくる」

「甘楽小幡の三束雨」(川原)

雷よけ 雷がなっているときはかやの中に入れ(鳥取)

天気 赤城の入道雲はでも流れるからこちらに雨がこない。(鳥取)

御荷鉾の三束雨(鳥取)

赤城の鍋割と荒山にしもがかかるとあくる日は雨(鳥取)

お月様に輪がかぶると雨(鳥取)

青大将が日当りにでてくると、二日ぐらいに雨が降る。(鳥取)

正月の三蓋松が、十四日前に雪がからなければ不作、かかれば豊作。(鳥取)

雪が多い年は豊作。(鳥取)

正月三カ日に雪が降れば豊作。(鳥取)

地震 地震のときは、クワバラ、クワバラと唱えれば良い。(鳥取)

地震のときは竹やぶに入れ。(鳥取)

午前中の地震は、三日たてば雨になる。(鳥取)

六ツ、八ツの雨は天気になる。(鳥取)

北の方に雲がなくなれば明日は静かな日。(龍蔵寺)

日のひっこむ方に雲があると次の日は風が吹く。(龍蔵寺)

神経痛のはげしいときは天気が悪い。(川端)

あかぎれが痛い翌日は風。(龍蔵寺)

夏の北風、三日ともたない。(龍蔵寺)

ケヤキの芽がたいらなら霜がふらないが、ムラだと霜がふる。

(龍蔵寺)

ケヤキの芽がムラにでると、晩霜の恐れがある。(川端)

竹のでの悪いときは、大水になる。(川端)

蜂の巣の少ないときは大嵐になる。(川端)

蜂が土手ぎわの草の中に巣を作るときは風が多い。(龍蔵寺)

蜂が高いところに巣をつくると風は少ない。(龍蔵寺)

地震予知 キジがなくと地震になる。(龍蔵寺)

地震 地震のときは竹やぶの中に入れ。(龍蔵寺)

地震がきたらやぶにかけこめ。(川端)

氣象予知

榛名の方にもこもこした雲がでると雷

末の方角に雲がでると三束雨

赤城に雲がでると、雨は少ないが大きな雷になる。(龍蔵寺)

雪が多いと豊作(関根)

六月の麦刈りのときには、「小幡の三束雨」といわれ、南西の方向に

雨雲ができるとすぐに雨になる。(川端)

七夕 七夕は悪病除けの日。(鳥取)

三隣亡 三隣亡の日に、もちをつけて夜中に欲しい地所に埋めておくと、その地所が自分のものになるという。これを防ぐためには、猿

田彦をまつればよい。(川端)

三隣亡の日に、建前のグシ餅を隣の家に埋めるとその家の財産が入ってくる。(川端)

## 五、数 理

数 十個まんじゅうを持っていくと、仏様じゃねえといわれる。奇数がいい。(片貝)

三足一間という。

旅の行程は一日十里という。これは足の早い人の場合。ふつうは、一日八里という。一時間一里ともいう。

手鋏の柄は四尺五寸、ムギまきのさくたてのとき、はじめは、手鋏の柄の幅でさくをきり、そのあと、それを二分するさくを切る。それがふつうのさくの幅であるという。

さつまいもとか馬鈴薯をうえるとき、種と種の間隔は、足の長さとした。

肘の長さは一尺とした。

親指と人さし指をひろげた幅は五寸。

にぎりこぶしの幅は三寸。

両手を左右にひろげた幅が六尺。このときは、胸を張れといった。それで縁の長さはかった。この長さを一ひろとした。

一駄というのは、米、麦は二俵で一駄。桑束とか稲束などは六束で一駄。なお、稲束をはげかけ(稲架)にするときは、百束で一駄とした。

縄は、こぜなわが四十ひろで一房。ふつうの縄は二十ひろで一房。竹の一束は、太さが九寸以上は一本で一束とした。五寸は七本、四

寸は十二本で一束。三寸以下は三十二本で一寸。それは、下から三節のところまで測った太さによる。

一年の保有米は一人二俵半。犬も一人前。猫は数えなくもよい。鼠をとって食べるからいいのだという。(荻窪)

## 六、動物・植物

ドクダミ ドクダミを乾かし、せんじて飲めば、せき病や胃弱によい。  
(鳥取)

センフリ センフリをほして煎じて飲むと胃によい。(鳥取)

ゲンノショウコ ゲンノショウコを日陰で干したものを煎じて飲めば、下痢に良い。(鳥取・嶺)

ドクダミ ドクダミは万病の薬(鳥取)

ニワトコ ニワトコの木は胃の薬(鳥取)

野イチゴは毒イチゴ(下小出)

ソバ ソバはまくのは八十八夜過ぎ。(鳥取)

# 第九章 芸能・娯楽

## 一、神楽・獅子舞

### (一) 峯太々神楽

大峯神社は、嶺公園へ向かう道路の右手下に、あたかも甲州街道沿いにある谷保天満宮のような趣きを呈して鎮座する。その風情は赤城の幽山を象徴するかのような静寂さであり、新緑の頃眼下に鄙びた神楽殿を発見すると、強く心惹かれるものがある。おそらくは神楽隆盛の往時は、近郷近在の人々の参詣の賑いと神楽囃しがその静寂の縞を唐突に破り神と人と自然の混然一体となったお祭り気分が村中を浮かれ立たせたことであろう。



大峯神社太々神楽 (嶺町)

社の由来は、本殿右に掲げられた額によると次の通りである。

村社大峯神社 芳賀大字峯寺 寺間鎮座

健御名方命

菅原道真公

譽田別尊

大山祇命

相殿 倉稻魂命

由緒 不詳明治四十年四月

二十四日許可字請地無格  
社八幡宮同境内末社二社

(菅原神社、諏訪神社)

字東公田無格社若宮八幡

宮同境内末社菅原神社

字天沼無格社大山祇神社

同境内末社二社(菅原神社

稻荷神社)を本社(元

諏訪神社)に合併し

村社大峯神社と改称せり

社殿 本殿 幣殿 拜殿

神楽殿 社務所

田寺反貳畝九歩畑八反七畝七歩

宅地貳百參拾八坪

荒無地壱町八反壱畝拾七歩

山林壱反五畝貳拾歩

有価証券壱千百円也

預金七拾八円拾八錢二厘也

氏子 壱百五拾七戸

境内神社 八坂神社 植山姫部社 稲荷神社 琴平宮 神饗幣帛料供進指定 明治四十四年九月一日

例祭十月九日

奉仕神職

社掌 勲八等田中權之助

これによつて、この社を今尚、お諏訪様と呼ぶ人がいることも首肯できるし、かつては豊穰を感謝する秋祭りであつたことも知ることができる。今その祭礼は八十八夜の日と定められ地元保存会の人々により神楽が奉納される。芳賀村誌四一六頁によれば、この神楽は徳川時代末期から始められているということである。現存する古文書によると明治十六年に御嶽神社（現東京都下）の神楽管掌である豊穂教会から神楽の許可が下つている。

御伺

先般其御講社へ入社任教法仰致し三条の御教憲遵守都て御規約相守決して邪教に不入御講社盛大に立至り候様尽力罷有爾来社中の徒依頼に於ては説教並里神楽執行仕度此段運署を以て御伺申上候也

明治十六年八月十九日

群馬県上野国南勢多郡嶺村

豊穂講社

- 世話掛 田中源一郎  
 田所藤八郎  
 池田伝平  
 小暮征三  
 木暮文造  
 青木久平  
 磯田定八  
 福田藤五郎  
 小林常造  
 小見奈良  
 小見市郎平  
 田所金八郎

教道職試補 中講長

- 田中筆吉  
 田島福弥  
 木暮善三郎  
 海野丑太郎  
 福島定吉  
 福島善太郎  
 池田英太郎  
 池田文平  
 池田照三郎  
 小暮虎平  
 小野里磯松  
 小野里嶺造  
 田中専五郎

県社武蔵国西多摩郡御嶽山

御嶽神社豊穂講社御中

右伺之趣聞置候事

但里神楽執行の際は最寄警察署へ可届出事

埼玉県武蔵国西多摩郡

式内御嶽神社

豊穂講社 本局

明治十六年八月二十二日

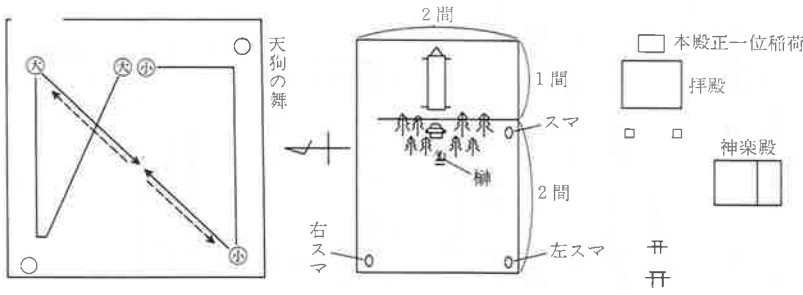
これによると記録上はこの年に神楽が始められたことになる。これは幕末に神楽が行なわれたという芳賀村誌と合致しない。しかし北橋村下南室赤城神社では幕末の頃神官金古常陸が、武州御嶽から学んでこの地に神楽を伝えたという。（勢多郡誌七五九頁）嶺の神楽はこの下南室の系譜に属すると思われるので、おそらくは認可以前に既に神楽

が奉納されていたのであろうと思われる。また御嶽神社の所在地がこの文書では埼玉県と記され、「前橋の郷土芸能」中には神奈川県とされているが、これは廃藩置県以来、多摩郡が何度か編成替えされていることによるものである。現在では東京都西多摩郡となっている。

神楽殿正面には昭和十年拾月九日

(旧祭礼日付) 武蔵国御嶽神社の掛軸

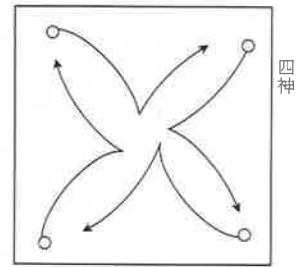
が下げられ、掛軸前に二段重ねの神饌、その両脇に四列二段に幣が置かれ、さらに神饌の前に神が置かれている。神楽執行前に保存会長が水干を着けた権称宜姿で神饌の前に着座し祝詞をあげ神を持って四方拝を執行する。これによつて神楽が始るのである。



天狗の舞 笏を持った神職が二人で神前を拝し、スマと右スマに着座する。その後、鳥かぶとの大天狗と小天狗が採り物舞いを舞い対角上に向かいあつて左足払い前傾にて中央へ進んですつくと立つ動作の繰り返すのである。

終ると笏を持って入るが、この時には、右足先行であった。

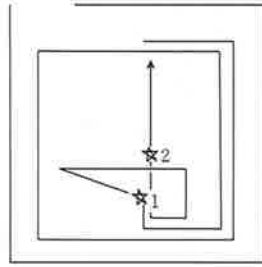
四神 笏を持って直面鳥かぶとの青衣、赤衣二人ずつが神前に拝し幣、鈴を持ち青衣赤衣各二人が交互に入つて四隅に配し、左手に幣右手に鈴を採り物として、順に回りながら手を上げ、



手を縮めて中央に寄つては散る。非常に優美な舞いである。時に阿知女作法的に四隅を払う足振りがある。終ると神前に並び幣鈴を戻して笏を持って入る。

細女(細女) 紫衣にて左手に幣右手に鈴を持ち両手を同時に右左に振り腰をかがめながら順に三巡する。四隅にて反問あり。☆1で細女が

伊勢の国 天の岩戸を押し開き  
万世までも うぶく栄える  
また ☆2では  
春は花 夏は卯の花 秋は菊  
冬は紅葉の 色ぞめできた



と唱え、三巡してまた中央で  
鶴亀の 海をならせし 御代なれば  
ことぶくまでも うぶく栄える

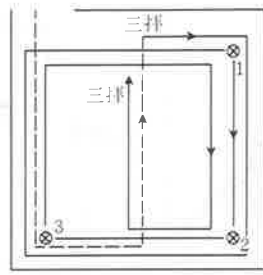
と唱える。その後扇を採り物とし、乱拍子にて入る。(1)うぶくは池田嘉藤氏(明治三十八年生)の伝によるが正しくは、座子(氏子と同意)であろう。

岩戸 乱拍子にて、鳥かぶと赤衣の田力男が笏を持って出る。神前にて三拝し、左手に岩や戸の作り物を持ち順方向へ三巡、途中⊗で岩戸を押し開く所作があり⊗で岩戸が開く。神前で三拝の後、右手に鈴を加えて嬉びの舞になる。○では古格を思わせる優雅な膝行の舞いとなる。蛇行のある変則三巡がすむと、神前で両足を左右に開きすつ

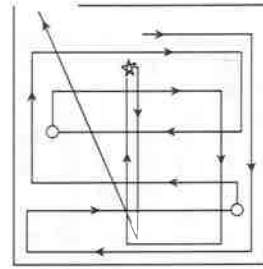
岩戸作り物



岩戸前段



岩戸後段



くと立つて、両手を大きく一杯に拡げて悠長に舞い、正面に戻ると乱拍子で左足を二度踏んで楽屋に入る。

鯛釣り おなじみかつ最も子供達に人気のある神楽である。これについては詳細はいらなからう。登場人物は、侍、河童それに火男二人で、途中で果物や菓子釣糸の先に付けて子供に与えたり、舞台上から撒いたりする。愛嬌舞い（本来は間狂か）の代表とも言つてよからう。

小屋根 青衣の白色尉、老女の舞いである。尉は左手に霞扇を持ち右手に鈴を持って厳肅に舞う。順に三巡して左スマで膝行の舞い、また三巡して右スマからスマへ対角に進んで再び膝行の舞いを舞う。これは古代の神事神楽を思わせる品格のある優美な舞いで、出色のものであろう。

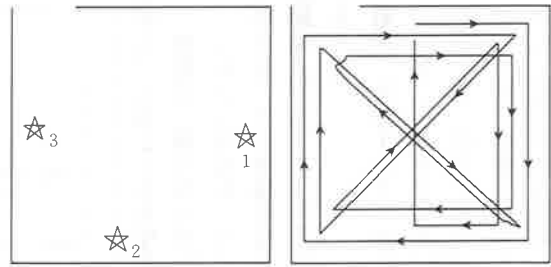
尚、小屋根は住吉様のことであるという。（池田氏談）

鍛冶屋 鳥かぶとの鍛冶屋の親方と火男二人。新刀を鍛造し、製作後にそれを採り物として舞う。火男は左手に幣、右手に鈴を持ち、足

を踏み返して舞う。入羽は左手に大槌右手は扇である。

火の神 神楽の終りには必ずこれを舞う。鳥かぶと赤衣の素盞男が鈴を持って出てくる。神前に鈴を置き右手に鈴、左手は腰に当てる図のように舞う。そして神前で左手に幣を加え、順に巡つて☆で膝行の舞いがあり、さらに神前で幣を鈴に替えて順の舞いを舞つて納める。

以上が昭和六十年に演じられた神楽の演目である。その他に鬼神があり、さらに現在では演じることのできない種蒔き、両刀舞・造木の三演目を加えると十二座の神楽であったことが知られる。池田氏の談によると造木には長い詞章があり、それゆえに廃絶し、本来はこの造木が神楽の締め練りの曲であったと言う。また河童も、以前は



オーサイヤ く

で始る三番の詞章が入ったが、今はそれもなくなったとのことである。ここにあげた順番は、当日の演目順であったが、本来は神隠し・天狗の舞・四神・岩戸開きがあり、夜が明けて興舞の鍛冶屋・鯛釣りと演されるものであるという。

隆盛期には五代を除いて芳賀地区各地を巡り、遠くは吾妻箱島、伊勢崎稲荷町、苗ヶ島、市の関と出張り、明治三十六年には伊勢神宮へ神楽の奉納をしている。その折の旅館の領取書等は今も面や衣裳とともに保管されている。笛の旋律は二の宮の神楽に似るといふし、市の木場



の笛の影響を受け梅の木で一管を作っているという。富士見村誌九八七頁によれば、梅の太笛は祇園囃しの名手、横室の萩原元治によつて初めて作られたものという。

全般的にみて、この神楽はよくその当初の形態をとどめて居り、鄙びた境内のたたずまいとの調和が素晴しく、いつしか昔日の面影に融合し、脇を走る自動車の音と大空からの鳥の音にふと現実に呼び戻される。そんな雰囲気浸りに浸り込むことができた。

## (二) 片貝神社太々神楽

神社の由来 江戸時代には星宮とよばれ神社であるとともに虚空蔵様も祀る。神仏混淆であった。明治の神仏分離により神社は片貝神社となり天御中主命を祀神として東西片貝の総鎮守となった。一方虚空蔵様は東に隣接して堂を建立して安置するようになった。

片貝神社(旧星宮) 社殿の建立時期は不明であるが、茅葺屋根の葺替の際垂木として使用されていた竹に、寄進者の名と年号が記されていた由。それによれば、元禄の年号がありそれ以前から建立していたことが知られる。(尾崎先生調査ずみとの事)また、銘のある竹材は虚空蔵様の堂に保管されている。

太々神楽の由来 片貝神社太々神楽保存会長長沼氏の話によれば、明治の初頭に総社神社から伝えられたという。そのいきさつを記す記録はないが、初代からの舞子連名簿があり保存会長が保管しているとのことである。

その他記録類で目にふれたものは、面、衣装を保管する長持の身の内側に初代の舞子連が連記されている。そこに「明治二十年二月」の年号がみられる。また、神社拝殿、神楽殿に太々神楽の奉納額がかかげられているが古いものに

明治二十一年 伊勢太々連下向

明治三十一年 奉納

明治三十八年十二月吉日 奉納

明治四十四年三月吉 伊勢太々神楽

などがみられる。明治二十一年の伊勢太々連下向は伊勢から太々連が来たことを示すものと思われる。これからすると総社神社の太々神楽だけでなく、伊勢太々神楽の影響も受けているものと思われる。

### 太々神楽次第

神事 拝殿において神主を迎え執行

大幣 神楽殿にて執行

神招

太々神楽

### 太々神楽の座

(昭和五十三年四月十三日に奉納された太々神楽)

伊佐奈岐命

伊佐奈美命

天ノ岩戸ノ舞

天照皇太神

副女

戸隠

翁

猿田彦大神

御供

種蒔

狐

作頭

火男一

火男二

両刀

八幡大神

御状

「種蒔」の狐から焉蔵までの内  
種蒔は狐、作頭、火男一、火男二  
からなり、次の両刀は峯神社の  
太々神楽の例からして一つの座で  
ある。従って、もう一度保存会長  
に問い合せる必要がある。

峯神社、春日神社の太々神楽の座と比較すると  
次の様な座が考えられる。

- 八幡大神
  - 御状
  - 御供
  - 片鉾
  - 釜戸
  - 嘉古舞
  - 全
  - 一本刀
  - 焉蔵
  - 釣場
  - 恵比寿
  - 火男一
- 1 伊佐奈岐命、伊佐奈美命の舞
  - 2 天ノ岩戸の舞
  - 3 猿田彦大神の舞
  - 4 種蒔の舞
  - 5 両刀の舞
  - 6 八幡大神の舞
  - 7 御状の舞
  - 8 片鉾の舞
  - 9 釜戸の舞
  - 10 嘉吉の舞
  - 11 一本刀の舞
  - 12 焉蔵の舞

火男二

河童

扇の舞

金山彦命

火男一

恵比寿

大黒天

大蛇の舞

稲田姫

翁

大蛇

須佐王男命

有志

玉軛

鬼

火男一

火男二

恵比寿

となつてゐる。この座の中でどの様な場合でも太々神楽を奉納する  
時は「伊佐奈岐命、伊佐奈美命」「天ノ岩戸の舞」「種蒔」「釣場」「大  
蛇の舞」の五座は必ず舞わなければならないものとされている。  
太々神楽の奉納日 開始以来から昭和三十年頃までは、一月十三日、  
三月十三日の祭日に奉納されていたが、以後三月十三日は風が強いこ  
とから四月十三日に奉納されるようになり今日に至つてゐる。  
なお一月と四月の十三日には、虚空蔵様のお祭りも行われている。  
舞子連等の組織と舞の伝承方法 連の構成者は、総社神社から伝承

した後、東、西片貝に住む長男が舞子となり、女子や婿、養子、次、三男等は舞子連に入ることはできなかつた。さらに大祭の時に舞子連は、一週間前から精進潔斎をし婦女子から遠ざかり竜沢寺（時に玉蔵院）に起居を共にして神への奉納のため練習に励んだという。しかし、昭和の初頭頃からそれもだんだん緩和され、特に、第二次世界大戦で男子がいなくなる中で、長男のみで舞子連を維持することがむずかしくなり、青年だけでも参加するようになった。

今日では、青年団が中心となつて継承し、さらに後継者の育成にあつている。特に昭和四十八年に市の重要無形文化財に指定されると片貝神社太々神楽保存会を組織し伝統芸能の保存に努めている。

太々神楽の組織は、二十四名からなる舞子連と三名からなる世話人とから成つている。

舞子連の二十四名は、舞い方、囃子方も行う。世話人の内、綺羅世話人は特に重要で面や衣装の保管をしている。戦前は、五年で連の構成者は新旧交替していたが、戦後になつて三年交替となつた。

交替した旧連の構成者は、師匠となつて新しい者の指導にあたることになつている。

### 太々神楽の面衣装等

面 二十面

衣装

お囃子の道具

笛（カエデ製）

太鼓

### (三) 上泉獅子舞

上泉の諏訪神社境内で、毎年十月十七日に最も近い日曜日に、古式



上泉の獅子舞（上泉町）

豊かな獅子舞が奉納されている。伝承によれば、九世紀前半の承和年中に始まり、神陰流の祖・上泉伊勢守もこの神楽を奉納しており、これが今に伝えられているというのである。

#### 証

このことを伝えるために、

- 一、獅子 三頭
- 一、笛 四本
- 一、太鼓 三個
- 一、花笠 二個
- 一、ササラ二組

右鎮守祭器具ハ 養和年中上泉伊勢守ノ奉納ニシテ 其証タルハ先季紛失セシト雖モ 正器今ニ残レリ 毎歳七月廿七日 定祭典ニシテ 獅子舞奉納一曲モ 欠ク事ナシ 早魃ノ年ニハ 此獅子ヲ鎮守神前ニ於テ舞ヲ奏シ 雨ヲ請フ時ハ則時ニ具驗アリ 依テ今般此証ヲ再認シ 為後証記録スルモノ也

の証文が、伍長頭取役場の協議会議員の二十一名によつて、明治十九年七月に書き改められている。

この記録の日付からも知れるように、本来は旧暦七月二十七日の祭祀であつたが、明治半ばからは新暦の十月十七日に変わり、さらに四年前からは、この日に最も近い日曜日に行なわれるようになった。

獅子は一人立ち三人で、中央が雌獅子、向かつて右に法眼、左に雄獅子の形で舞う。獅子頭は桐製で、黒と朱の漆塗りで、頭にとりの毛を飾りつけ、後にトブサを付ける。そして顔の部分は「水ひき」と呼

ばれる薄い赤いきれでかくす。装束は、手甲、脚半にたっつけ袴にわらじばきで、腰太鼓をつける。

また、つけ人として、花笠のかぶりものをした子供二人が竹ザサラを持って、拍子を取り、囃し手として笛四人が加わる全体構成となっている。

舞いは緩かやで、すり足と蹴返しの繰り返しで、ヘンテの法と言われる舞い方である。このヘンテの法は、古く宮廷御神楽に伝わる阿知女作法を受け承ぎ、悪霊を大地に封じ込め、その場を清める返閑（ヘンベともヘンバイとも言われる）が伝承され、ヘンベが訛ってヘンテの法と呼ばれているものと思われる。

これらのことと、次に記載する舞い唄の句構成から見て、この獅子舞いは風流系一人立ち獅子舞いであると考えられる。

現今の舞いは、公民館で「古参呼び」と言われる長歌「庄屋殿」など一庭十四番を舞い、ついで神主、自治会長、ササラ、笛、獅子、古参の順で諏訪神社まで行道し、神社で二庭奉納する。終わると獅子に子供を噛んでもらうまじない等があり、古い形の下から上への村回りの行列が、五穀豊稔と厄病除けを願って続く。また本来の獅子行列に加えて、山車と御輿がこの後に続く。

明治十九年の文書には、早魃の年に鎮守さまで雨乞いのために獅子舞いをしたと記録されている。

上泉獅子舞い奉納順序

- 本調子
- 一 水引おろし
- 二 ひやらとろ
- 三 みこの舞
- 四 しのび
- 礼ざさら
- 一 水引おろし
- 二 岡崎
- 三 岡崎のかえし
- 四 礼ざさら

- 五 神楽
- 六 くりい
- 七 ふちかけ
- 八 たち休み
- 九 京から
- 一〇 休み
- 一一 長歌
- 一二 廻り歌
- 一三 小歌
- 一四 雨

- 五 くりい
- 六 ふちかけ
- 七 たち休み
- 八 京から
- 九 休み
- 一〇 長歌
- 一一 廻り歌
- 一二 小歌
- 一三 雨

- 一〇 休み
- 一一 長歌
- 一二 廻り歌
- 一三 小歌
- 一四 雨

- 一〇 休み
- 一一 長歌
- 一二 廻り歌
- 一三 小歌
- 一四 雨

◇長歌

庄屋敷

○庄屋どの 今をさかりと うちみればお手に 算木 算木を常にたいせつ 参りきて

○まいりきて このの社を ながむれば黄金 社が 九十九社

○この宮は 何たる 万丈ぼしちゆうが建てたやら四方四隅が くさび一つ

仲だち

○仲だちは 京が生れで 伊勢育ち

腰に咲いた 咲いたは 伊勢のおはらい

◇廻り歌

天神林

○天神林 梅の花 つぼみばかり

曲うちかけて くるなれば

黒雲

○黒雲が かたうちかけて くるなれば月も日も たまるまい

深山の兎

○深山の兎 なにみて はねる

十五夜お月を みてはねる みてはねる

向い小山

○向い小山の 節子竹 節をそろえて

きりこあわせ きりこあわせ

◇小歌

春

○松にからまる つたの葉は ぎんがつけばあいあの葉たよれ

あのはたよれ

○山からは 山をはなれ 里にくんだり

これのお庭で 羽を休め 羽を休め

○天じく天の 丸三日月は みする

小うまをいれて 廻せば ロリホ ロリホ

○きりがりす きりがりす 見いする

こうまをいれて 過せば ロリホ ロリホ

この獅子舞いは、神事として非常に厳格な別火精進をとっていたことが次の記録によつてわかる。

上泉町獅子舞奉仕者行事

十月十日朝八時より、区長以下区吏員一同が獅子役者（現役）の家を訪問し、本年のお祭りの獅子舞をよろしくお願ひしますと改めて廻った。午後一時、現役（笛三人、獅子三人）が稽古場（公民館、それ以前は別当宝禅寺）に集り、御幣を切り、注め縄を張つて稽古場を

浄めてから、稽古中の主食の用意、風呂の用意をする。午前中、区吏員の人達が獅子頭の保管してある長持を出し、頭を飾つて、食器等も洗つて用意を調べて呉れる。獅子役者は会場の準備を終つてから、古参（獅子舞の笛、舞等に参加して既に卒業した方）の人の生存者宅を訪問、「例年の通り今晚から、獅子の稽古が始まりますので宜敷く指導の程をお願いします」と西久保から太郎三迄、挨拶廻りをした。午後六時、夕食を自宅ですませ、寝具を背負つて稽古場へ集る。

八時、区長以下区吏員が神酒老升と笛を持参し、宜敷く頼むと挨拶があり、稽古始めとなつた（笛は紛失といたむことをおそれて、区長が大切に保管して置くのであつて、この晩持参する）。

十月十一日・十二日・十三日は、毎夜古参の人達が指導に出掛けて呉れ、厳しい訓練を受けた。この三日間が稽古の中心で、午後は真剣な練習をして、判らない処を夜に古参の人の指導を受ける。毎夜稽古が終ると夜食を戴き、風呂で身を浄め、神社詣りに行つた（因に昔の人は桃木川でみそぎ（行水）したと伝えられている。もつとも祭礼が旧暦七月二十七日となつていた）。このお詣りは雨が降つても欠かすことが出来なかつた。風呂に入る順序等は、古い者からの順が固く守られている。

十四日、この日は仲祝いといつて、大昔から古参全員が稽古場へ神酒式升を進上し、区からは区吏員一同が肴とお萩（ぼた餅）を一箱持参し、獅子に上げて、「皆様毎晩遅くまでご苦労様です、今晚は仲祝いでお目出度うございます」と区長から挨拶があり、お祝いの酒席に移る。この席は古参が古い人順に席に着き、酒等も順序を乱さず注ぐように習慣づけられていた。（日本古代からの先輩者を敬う形式が守られていた）今晚は獅子頭を冠る（着物は正式のものを着るが、たつつけ、手甲、水引等はつけない）。一庭正式に舞つて仲祝いは終了。区吏員一

同は帰る。古参の人達から、十日からの稽古の状態また今晚の舞の状態について厳しい批判があり、手とり足を引き腰の落し方を詳しく教えて呉れ、尚その人の苦勞した芸を見せて呉れ、夜の明け方まで稽古が続けられる。夜食をすませ、お秋を古参共々一同で別け、古参は帰り風呂をすませ、お詣りの時は明るくなるのが毎年であった。尚、獅子をする三名には地下足袋、笛とビンザサラ計五名には座敷足袋が支給（十六日の晩）されるので、各自の文数を区長が聞いて帰る。

十五日、獅子の買物という日で、年々予約をしてある横山町の鶏卵肉問屋の鳥留商店に行き、獅子頭の頭を飾る黒い羽根（この店で年間集めて置いたもの）を買ったり、十六日の朝祝いの肴等を調べて帰る。昨晩遅かったのと、明朝早いので軽く一庭稽古をすませ、風呂・お詣りをすませ十二時頃床に着く。昔は、上泉中の男の子（十二、四才位）が各家を廻って鶏の羽根を集め、稽古場へ持参して呉れた。この時代は、色はかつ色で俗称芝鶏といつて、尾羽根等が真黒の鶏を各戸で三、四羽宛飼って居た。九月十月は丁度換羽期で沢山集った。

十六日、棟上げ祝なので六時には全員起床、朝食のご飯を炊いてお初を獅子頭に進げ、茶碗に一杯を取る。これは練ってソクイを作る。温い内に真吹が、板の上で棒で練つてのり状とする。これは獅子の頭に飾ってある鶏の羽根の根元につけて差し込む時に使う。この準備をすませて、朝祝いに軽く一杯すませて仕事にかかる。八時には区から新しい麻を紺に染めたものが届く。これを真吹が分割して草鞋の紐を造る。真吹が七本の法眼の緋い別け、中吹が雄獅子の五本の緋い別け、番吹が三本の緋い別けを作り、三尾の獅子の尾にも毎年新しい麻を足して下げる。獅子を冠る役者は先ず頭を修理し、新しい羽根を足して顔を化粧し、耳と舌とは新しくして水引を付け、晴の祭典の用意が出来上る。朝七時頃毎年同じ人が人足として出席し、ビンザサラの笠の

張り替え、笠に飾る花（この本数は古参全員、真役の獅子の三人を除く五人分で、数に制限があった）を新しく造ったり、神社の張り替えの注め縄造りをする。夕方六時頃、酒・肴を用意して区吏員一同が見える。この時はビンザサラの子供も集る。獅子に神酒を進げて後、一同乾盃して化粧をすませ、水引きを付けたり、お祭り用の着物を着て、たっつけをはいたり、手甲まで着ける。ビンザサラも花を着けた笠を冠り、所定の場所に着席し、本番の舞を舞って棟上祝は終了。この時は本式の舞を行うので多数の参観人があった。

十七日祭典日、午前十時、区長宅へ紋付袴で参上、奥座敷で接待を受ける。中ばで十一時頃、古参呼びと称して（五分おき位）三回渡拍子の笛を吹く。これを聞いて古参の方達が集って来る。この時、笛の三人はそれぞれ受持の獅子の腰紐にお祓いを結び付ける。三本がそれぞれ違ったもので、獅子の長歌にある伊勢のお祓いで毎年新しく造ったもの。この用意が出来て仲食を戴き、仕度万端調え区長宅の庭で、庄屋殿の長歌で一庭舞って、区長の祝福を祈って終る。最後の渡拍子に移ると、神主・村長（幣巾具進使）・区長・区吏員・ビンザサラ・笛・獅子・古参の順の行列で神社へ向う。西の区長の時は西の祭旗（浪花橋の北に立てた）、東の区長の時は天神橋の南側に立てた間を通ることになっていた。神社では祭りの儀式が厳修され、庭で獅子舞を舞う（これは神社の神楽殿で行われるお神楽に等しいもの）。この舞の終了と同時に祭典の儀式も終了する。ここで区側獅子関係者でお神酒を戴き、獅子はまた一庭舞ってから、区長を先頭に、本殿の周囲に合併で集めた木造のお宮、石宮を礼拝して廻る（上泉一区の薬師様・稻荷様、二区の赤城様、三区の八幡様・金刀比羅様、四区のだいづりゅうりゅう様等。明治四十年頃までは、この神社各境内で各一庭舞ったもの）。周囲の神々の参詣をすませて、境内を出発して来た時と反対の旗の間を通っ

て村廻りを行う。これは一区から五区までの主要道を、悪魔払いと厄病除を兼ねて廻って区長宅へ行上げる。この時は日が暮れて暗くなる。区長宅では風呂を湧かして置いて、獅子から順に汗を流して、区吏員と合同のお大儀振舞いということでお祝いの座敷となる。祝の中ばで獅子方から「お肴を申し上げます」と長歌三曲を合奏する。終ると区側から謡曲や歌等の芸も出て、一同それぞれ得意のかくし芸を出して十時頃散会となる。

十八日、上泉では春祭りを行わないので、続けてこの日も祭典日として獅子舞を継続し、神社を賑かにした。獅子役者は午前六時集合で、一区から順に古参宅（生存者）を訪問して「昨日はお目出度うございました、また色々お世話になりました、本日も宜敷く」とお礼とお願いに廻る。午前十一時区長宅へ集り、仲食を戴いて獅子を冠って神社へ行き、二庭舞って、引き続き古参の人も入り混じって数庭舞った。この日が現役の人には充分の稽古が積める日であった。またこの日は、今年上泉へ他村から来た嫁さんは、姑と一しよに必ず参詣する習慣があったので、女性と子供で大勢の参詣人があった。日暮と同時に終了。獅子頭・着物・笛等を区長に返して一同散会。

十九日、獅子の行事一切が終了したので、十日から費用一切を精算して、明細書を作り、区長宅へ持って行き、代金を頂いて酒屋・穀屋・荒物屋等の支払いをすませる。前橋市のそばやで一杯呑んで食事をし、万払いをすませ一同解散。

・獅子役者の特殊語

シャリ（白米）、バックレ（豆腐）、ヘダマ（里芋）、ダナ（茄子）、ドデボウ（牛蒡）、オミキ（酒）

## 附記

その年の祭礼に参加する役者がブクを着た時（子供が生れて三週間以内、近親者が死亡して四十九日以内のもの）は、参加を遠慮し、替りは新しい古参とした。

以上行事は筆者が真役の代に実行されたもので、桃木川のみそぎと古い稽古場は、古老から聞き伝えによるもの。

七十七歳 都丸貞作 謹記

行事記作成参加者 田村正作 笛木恒茂

大島 吉 藤沢勝義

※資料は全て前橋市教育委員会他の「上泉獅子舞」(昭和五十三年刊)による。

## (四) 堤の獅子講

神社へ集まり、お祓いを済ませると、村の下の方から上へ向かって、獅子が戸づつ回って厄除けをする。前年に不幸のあった家は除く。

各家では、お米やお金を与え、これが子供の実入になる。子供は先触れの太鼓を叩いて歩く。獅子は成人の役で、この日獅子は何をやっても良いとのことである。(堤)

## (五) その他

勝城神社 十月一日例大祭（現在は十月十五日）大正九年十二月十五日に焼失したが、かつて太々神楽があった。(勝沢)

## 二、歌謡

### (一) 田植唄

田植唄 田植唄をうたって田植えをした。(荻窪)

平植えの際に田植唄を歌う。(勝沢)

〱おらが苗まの水口に植えつる松は

何松ホラヨイヨイナ苗まの水口に

植えつる松は何松

ホラ太郎次と田の神のおん腰掛けの五葉松

ホラヨイヨイ太郎次と田の神のおん腰掛けの五葉松

ホラ五葉松の根本より泉の酒が湧くとなホラヨイヨイ 五葉松の根

本より

泉の酒が湧くとな

ホラ白銀の銚子盃飲めど汲めどつきやせぬホラヨイヨイ 白銀の銚

子盃飲めど汲めど尽きやせぬ

〱夕暮に浜ホーイべを行けば

千鳥鳴くイヤマダマダいやはの千鳥鳴く

千鳥鳴く鳴けホーイ鳴け千鳥イヤマダマダ

いやはの声くらべ

〱ほらおめでたやおさなぶり

来年ござれ田の神

ほらよいよいおめでたやおさなぶり

来年ござれ田の神

〱ほら田郎次は左座に田の神ソーラ様は

右の座にほらよいよい田郎次は左座にホーイ

田の神様は右の座に

〱ほら田郎次と田の神はおんさかホラもりを

めされるほらよいよい田郎次と田の神はホーイ

おん酒盛りを召される

〱ほら扇拍子で手拍子で来年ソーラござれ

田の神ほらよいよい扇拍子で手拍子でホー

来年ござれ田の神

〱ほら栗毛駒に打ち乗りて来年ホーラござれ

田の神ほらよいよい栗毛駒に打ち乗りてホー

来年ござれ田の神(小坂子)

〱朝露に髪ホーイ結び上げて

いやはの花摘めば

花摘めばおとホーイこが招く

いやはの花はたまらぬ

〱利根越えてやわホーイいたの

森のいやはの八重桜

八重桜八重ホーイには咲かず

いやはの九重に

〱日照りともみのホーイ笠持って

いやはの二の宮の



二の宮の根ざホーイさの露は  
いやはの雨と立つ

〱今日の田の時ホーイ打つ鐘は  
いやはのいくつうつ  
いくつうつ七ホーイつも八つも  
いやはの九つも

〱葦あしの根のそよホーイめく中で  
いやはの寝たいもの  
寝たいもの花ホーイござ敷いて  
いやはの寝たいもの

ハーマダマダーイ  
〱鎌倉の八つ棟造り  
いやはの何で葺く  
何で葺くひのホーイきとさわらの  
いやはのこけら葺き

〱夕暮に浜ホーイ辺を行けば  
いやはの千鳥鳴く  
千鳥啼け又ホーイ啼け千鳥よ  
いやはの声くらべ(亀泉)

〱朝露に髪ホーイ結び上げていやはの魚つる  
いや取れ花ホーイ花摘めばいやーの

花はたまらぬホーイ

〱今日の日の時ホーイ打つ鐘はアーマダコイ  
マダコイトいやはのいくつ打つ  
いくつうつななホーイつも八つもハーイソウトモ  
ソウトモいやーの九つもホーイ

〱夕暮に浜ソリヤー辺をゆけばアーマダコイ  
マダコイいやーの千鳥なく  
千鳥鳴け鳴けホーイまた鳴け千鳥よ  
ハースートモソートモいやーの声くらべホーイ

〱恵比寿様やわホーイ(俵カ)の上で  
アーデンボコケデンボコケトいやはーの魚つる  
魚つるえびホーイと鯛をアースートモ  
ソートモいやーのつり上げたホーイあー  
目出たい目出たいと

注 唄は恵比須様やわらの上で  
であるがやわらは俵の伝承違いと思われる。  
注 離子詞のデンボコケとはうそつけの意の方言(東片貝)

## (二) 麦打唄

麦打ち唄 (三人ずつ相むかいで)  
〱おらが隣の みそ玉娘

嫁に行くとして 洗たくまでしたが

へそが出べそで やれ嫌われた

やれ ぶっこめ ぶっこめ

へ浅間山から 鬼がケツつんだして

ナタでぶつきるような 屁をたれた

ア、ぶっこめ、ぶっこめ

(青柳)

収穫した麦を庭に広げて打った。暑くて汗をダラダラ流しながら、次のような歌を口ずさみながら打った。

へウチの隣のミソ玉娘、ソーレブッコメ、ブッコメ (10回)

へアカギ山から鬼がケツ出して、へをこいた、そーれ…… (10回)

(北代田)

へ伊香保出てから水沢までも アーブッコケブッコケ

雨も降らぬに どっこい袖しぼる

アーブッコケ ブッコケ

へどこで干しましょ この袖つまを

アーブッコケブッコケ 泊まり泊まりの

どっこい宿で干すアーブッコケブッコケ

へ墨と硯は仲良いけれど アーブッコケブッコケ

人が水さしゃどっこい 薄くなる

アーブッコケブッコケ

へ墨の上書きどっこい、薄くとも

アーブッコケブッコケ 中にこいじが書いてあるアーブッコケブッコケ

へ馬鹿にしやんすな 枯木じゃとても

アーブッコケブッコケ つたがからめば

どっこい青芽だす アーブッコケブッコケ

藤がからめば どっこい花が咲く

アーブッコケブッコケ

注 ブッコケ 扱こくに接頭語のブツがついたもの

注 こいじ 濃い字と恋路の掛詞(鳥取)

へ可愛いお方と羽織の紐は

固く結んではどっこい

胸に置く アーブッコケブッコケ

へ雨は降ってくる庭のまきはしみる

背中がきや泣く

釜のめしはこげる ハーブッコケブッコケ

へ来なよな毎晩 立たせておかぬ

寄ればな お茶も出す

おこたもあるよ アーブッコケブッコケ

へ俺が隣のみそ玉娘 嫁に行くとして

洗濯までしたが、へそが出べそで  
あほんとにきらわれた アーブツコケブツコケ (萩窪)

(三) 馬子唄・草刈唄

馬子唄 今ほうたう人はいないが、昔うたつたのを聞いたことがある。(萩窪)

馬子唄の権沢芳月は、この地に出稼ぎに来て、そのまま結婚し定住した。(上泉)

赤城馬子唄

へ上州名代のあの赤城山

君と臣との契り松

へ話聞くより一度はお出で  
群馬のつつじの咲いた頃

へわたしや榛名の沼辺のわらび  
うぶな心で主を待つ

へ春の一夜は短かいものよ  
主と二人で伊香保のお宿

へ主は赤城でわしや榛名山  
ちよいと儲けた子持山

へ嫁さん何処ゆくお里かい  
お重は何だい赤飯かい

へ雨が降りやこそ松井田泊り  
降らにや越しましよ坂本宿へ

へハー本陣何処だい問屋の前だよ

問屋が貧乏で長持ちや軽い

へ越後でる時や涙で出たが

今じゃ越後の風もいや

へハー上州お人は口こそ悪いが

お腹ほがらか春の風

大正初期には、三河万歳、越後の誓女・祭文語り等の旅芸人が頻繁に各村を巡って来たようである。そんな風土の中で、小坂子の大野西松さんが習い覚えた祭文と、赤城馬子唄は前橋市郷土芸能大会で披露され、その録音テープは前橋市教育委員会文化財保護課に保管されている。今では聞くことのできぬ貴重な資料といえよう。

朝の出がけにどの山見てもよー

雲のかからぬ山はない

はいはいはいはいと

浮世離れて赤城の山じゃよ

みのわ越えれば一杯清水よ

「一杯清水で一息入れて一ぶく吸っていせいよく」  
上る峠は新坂峠よ

四十七角ほくほくのほりゃよ  
上りつめれば新坂平

「馬の背中に氷をつんで  
上り八里に下りが八里」

「馬喰峠を馬のたずなをがっちり持って」

馬よころぶなげがなどするなよ

下りつめればみのわを越えてよー

一の鳥居もいつしか越せばよ

前は前橋一目に見えてよ

製糸工場は煙を上げてよ

昼夜休まず糸操りなさる

日光街道で蟬がセックスして

片足もち上げていつくらいいがなじーんじん

はいはいはいはいと

やればまだまだこの先が

たとと続いてあります

どうやら定時の時間となりましたので

皆さん方に来年も

またの開会あるまでは

あつさ寒さに気をつけられて

どうかお身体大切に

はなはだご粗末でございました（小坂子）

### 草刈り唄

へ山で床取りゃ 木の根が枕

落ちる木の葉は 夜具となる（勝沢）

### （四）念 仏

天道念仏 テントウネンブツ。彼岸のお中日にやった。念仏をする  
おばあさんの組がありやった。（三俣）

人が死んだ夜の念仏 人が死ぬと、となり組が集まって、念仏を唱  
える。年寄りがリーダーとなって「ナムアマダブツ」を十回唱える。

助手は、何回歌ったかを数えている。念仏が終わると、「キヨメ」で酒  
を飲む。九十才以上の人が亡くなった場合には、「ダンゴ」を食った。

（竜蔵寺）

百万遍念仏 これは純粹に信仰であり、芸能の範疇には入れ難い。  
毎年七月十六日に修法される。中央に

奉唱念仏百万遍家内安全五穀成就祈願之偈と墨書された十三仏の掛  
軸の前で地元のお婆さん達が線香をたき鉦を叩いて、珠数を繰りなが  
ら



お念仏（荻窪町）

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

と唱え続ける。かつては、專業の念

仏婆さんと呼ばれる修法者がいたそ

うであるが、時代の推移に伴って、

いまは姿を消したという。小坂子の

地藏祭り修法には、今もなおこの念

仏婆さんのお勤めが行なわれてい

る。（小神明）

七月十七日に、百万遍念仏が行な  
われた。四、五人の念仏婆さんがい  
て、座敷いっぱい珠数で、「ナンマ  
イダンボ」と唱えて最後に村はずれ

へ珠数を捨てた。昭和四十二年頃まで行なわれていた。鐘の銘は、明和九壬辰年七月日と入っている。(片貝)

天道念仏 閻魔堂前の座敷で天道念仏が修せられた。(上泉)

三十数年前に、天道念仏が修せられたことがあった。(上泉)

百万遍念仏 明治初期に疫病が流行り、七月二十五日の午の日に百万遍念仏が修せられた。(勝沢)

#### 御念仏

南無功名返上実法世界念仏致上施志不积(ママ)

南無阿弥陀仏(ママ) (以上鐘張りが唱える)

一、南無阿弥陀仏 (六回ずつ十回唱える)

南無阿弥陀アア南無阿弥陀南無阿弥陀

仏南無阿弥陀南無阿弥陀仏南無阿弥陀

二、十三仏様 (十三回唱える)

南無不動、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒みろく、药师やくし、観音、勢至、阿弥陀、阿閼あかん、大日、虚空蔵

南無十三仏南無阿弥陀仏。

三、十王実体 (三回づつ十回唱える)

十王実体南無阿弥陀アア十王実体南無阿弥陀アア

十王実体南無阿弥陀。

四、道の端の六地藏 (十回唱える)

道の端の六地藏をお唱え申したおいとくとく尼十六

世紀を逃れ給え南無阿弥陀仏

岩橋堂の御地藏様をお唱え申したおいとく尼

四十八世を逃れ給え南無阿弥陀仏

五、西は西方生死が池 (十回唱える)

西は西方生死が池のはち蓮のれんげを 一編申せば一本開いて極楽浄土え輝き渡れば即ち仏にうたがひ無し融通念仏南無阿弥陀。

(以上一より五まで唱え終り) (青柳)

#### 念佛順序

一、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛…… (十遍)

二、十王十体南無阿弥陀…… (十遍)

三、西が西方しようじが池のはちすの蓮華一遍申せば一本開いて極楽

浄土に輝きわたれば即ち佛にうたがひなし融通念仏南無阿弥陀…… (十遍)

四、一日 十四日 二十四日のお念佛に 八万四千の血の池を

申し上げるよ南無阿弥陀…… (十遍)

五、南無不動、釈迦、文殊、普賢、地藏、弥勒、药师、観音、勢至、阿弥陀、阿閼、大日虚空蔵、南無十三佛南無阿弥陀…… (十三遍)

無常盡々無明の法役

せんもんごうりをあいのうことごとし

われ今けんもんしじゆをすることを

得たり

願わくば野郎犬しんじゆつ

じようげしたてまつる

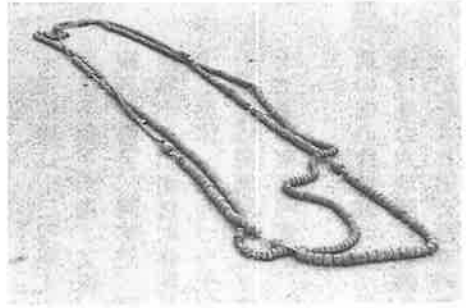
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏



百万遍の数珠 (荻窪町)



念仏の鉦 (荻窪町)



十三仏の掛軸 (荻窪町)

光明遍照十方世界念仏衆生  
撰取不捨

南無阿弥阿陀仏南無阿弥陀  
南無阿弥陀仏南無阿弥陀

繰り返し (9反)

光明遍照 十方世界

念仏衆生 撰取不捨

十王十体エンマ大王

しよはんの念仏南無阿弥陀

繰り返し (7反)

光明遍照 十方世界

念仏衆生 撰取不捨

道の端の六地藏唱え申す御威徳に

しよくせきのがるる南無阿弥陀

繰り返し (13反)

光明遍照 十方世界

念仏衆生 撰取不捨

融通念仏南無阿弥陀

南無阿弥陀仏南無阿弥陀

繰り返し (10反)

注 三人が唱えている間もう一人が「二日、二日、二日、十四日……」  
の句を同時に唱えるが聞き取り不能

光明遍照 十方世界

念仏衆生 撰取不捨

高時地藏のなさせ給う念仏は  
おくり六体六観音の 六方浄土に  
弘法薬師 こちの如来 十万億土の  
七十三仏 三世のしようしやく  
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀  
繰り返し(八反)

光明遍照 十方世界  
念仏衆生 摂取不捨

西は西方極楽浄土の おじが池(マ)の蓮の蓮華は、一反申せば三本開いて  
みしま高野へ輝き渡れば すなわち仏に疑いなし  
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀  
繰り返し(八反)

光明遍照 十方世界  
念仏衆生 摂取不捨

西国三十三番よ 板東が三十三番よ  
秩父が三十四番の観音 あわせて百番  
大悲くゝの観世音  
南無阿弥陀仏 南無阿弥陀  
繰り返し(六反)

光明遍照 十方世界  
念仏衆生 摂取不捨

南無不動釈迦文殊 普賢地藏弥勒薬師  
観音勢至 阿弥陀阿闍 大日虚空蔵  
南無十三仏 南無阿弥陀  
繰り返し(十二反)

光明遍照 十方世界 念仏衆生 摂取不捨

オン アバキヤベ ロシヤナ マカボサラ マニハンドバ ジンバラ  
ハラ ハリタヤ  
繰り返し(六反)

オン アバキヤベロシヤナマカボサラ  
マニハンドバピジバラハラハリタヤ ウン(荻窪)

(五) その他

子守唄

へねんねん ねこじまの 白うさぎ  
ねんねん子守は 楽なようで つらいもの  
雨風吹くときや宿はなし 他人ひとの軒端で目をくらす

へほらほら畑の西瓜の皮でも あつたらつけときな お正月あた  
りの酒の肴に結構なものですよ(関根)

かぞえ歌

へひとつつひとめおばおひとのおかおがたよるね  
あらあれらんこれらん  
へふたつふねやさんおおきなおふねがたよるね

あらあれらんこれらん

へみつつみそやさんがみそすりばちがたよるね

あらあれらんこれらん

へよつつよしわらおきやくさんがたよるね

あらあれらんこれらん

へいつつおいしやさんがおくすりばこをたよるね

あらあれらんこれらん

へむつつあつひにはむぎわらぼうしがたよるね

あらあれらんこれらん

へななつなつきりぼうちようおかあさんがたよるね

あらあれらんこれらん

へやつつやおやさんはてんびんぼうがたよるね

あらあれらんこれらん

へこのつこうやはこうぼうさんがたよるね

あらあれらんこれらん

へとおでのさまおきなごもんがたよるね

あらあれらんこれらん (日輪寺)

### かぞえ唄

へ正月とせ 障子あければ 万才が

鼓の音やら 歌の声 おや歌の声

へ二月とせ にんだらまんだら寺参り 明日は彼岸のお仲日

おやお仲日

へ三月とせ 桜花よりおひなさま

飾って見事に内裏様おや内裏様

へ四月とせ 死んでまた来るお釈迦様

竹の子びしゃくでお茶かけろ

おやお茶かけろ

へ五月とせ ごんごんばやりの前掛けを

かけずになくしてお腹立ち

おやお腹立ち

へ六月とせ ろくに取らない田の草を お米がないとてお腹立ち

おやお腹立ち

へ七月とせ 質に置いたり流したり

質屋の番頭さんが忙しや

おや忙しや

へ八月とせ 蜂にさされて泣く子供

姉ちゃんお薬頂戴ね

おや頂戴ね

へ九月とせ 草の中よりひきがえる

姉ちゃん一匹頂戴ね

おや頂戴ね

へ十月とせ 重箱さげてどこ行くの

明日はお恵比須講で買ひ物に

おや買ひ物に

(荻窪)



### 群馬県の歌

晴れたる空に舞う鶴の、  
姿に似たる上野は、

下野・武蔵・岩代や、

越後・信濃さかいして。

群馬県庁置かれたる、

国の中部の前橋と、

西に間近き高崎は、

ともにしせいはかる土地。

群馬が二つ、勢多や利根、

吾妻・碓氷・北甘楽、

山田に新田、多野に佐波、

邑楽合わせて十二郡。

まず前橋を訪ぬれば、

県庁・市役所・裁判所、

師範学校・中学校、

勢多郡役所ここにある。

生糸の取り引き、とりわけて、

四・九の市日のにぎわしき。

(亀泉)

※ この歌は、六十年くらい前に蚕仕事をしながら歌ったものだという。なお、「しせいはかる」とは、兵隊検査のことだという。また、

毎月四日と九日は前橋市の生糸の市日であった。ちなみに、伊勢崎市では三日と八日、大胡町では五日と十日が生糸の市日であった。

### 七草がゆ

七草なづな

唐土の鳥が

日本の土地へ

渡らぬ先に

打ちたたけ 打ちたたけ

### 八木節

はーさて一座の皆さん方よ

上州自慢の八木節踊り かたく清らに育てるうちで

優等前橋市民の集い 心明るく平和な町よ

郷土いとしむその情熱を 前橋自慢の音頭にのせて

はー春は前橋権現様の桜吹雪の

舞い立つ空は厩橋 お城の角の御殿

女中の思いが香る

土手のぼんぼりほのかにゆれりや

めぐる唐傘足取り軽く 花の宴にふけゆくこよい

はー夏は前橋大利根川の 清い流れに

若鮎おどる 水に色増すアカシヤ木陰

そぞろ歩きに咲く月見草

夜の帳おり立つ頃は わしは七色ネオンに映えて

夜店帰りの素足も白い

はー秋は前橋紅葉の錦めぐる 田んぼのその村々は

黄金花咲く稲穂の波に 祭り太鼓や笛の音高く

櫓まわって音頭にのせて いきな手拭い豊年踊り

ちよいと微笑えむ 耳もと赤い。

(青柳)

はー冬は前橋赤城の山に シャンツエボーゲンスキーにくれる  
リフト登って頂上踏めば やわい処女雪対する奥の  
遙か彼方に浅間がそびえ 裾に開けた平野の中に  
いと我が町絵のよに見える

はーもつと自慢は前橋娘 風光明媚で育ちも清い  
てんできれいで働きの者で 竹を割つたように良く気がきいて  
きめも細かく情も深い 嫁にするなら前橋育ち  
嫁を貰うなら前橋娘

はー踊りははずめば音頭もはずむ  
はずむ心でまた明日からの はずむくらしに輝き添える  
郷土いとしむその情熱を

上州自慢の八木節踊り 前橋自慢の音頭の中に  
またの御縁で伺いますがおーいさね(小坂子)  
木遣り唄

いやーよいやれよー  
よーいや許せこれはせよーいえんやらえ  
えいやーやれせー今日の良き日にこれはせ  
よーらよいえんやらえーりやらえーい  
目出度く棟上これはせーよーい  
えんやらえーいーやりやーえーい  
宝入船これはせーよーい  
えんやらえーいーやりやーえーい  
郷土芸能これはせーよーい  
えんやらえーいーやりやーえーい

おくに自慢がこれはせーよーい  
えんやらえーいーやりやーえーい  
供に栄えよこれはせーよーい  
えんやらえーいーやりやーえーい  
お手を拝借これはせーよーい  
(田口)

### 三、門付け芸他

万才 戦時中まで、二人で組んだ三河万才がきた。(小神明)  
正月の門づけ

万歳。ーおつつみをした。

座敷万歳は中でていねいにやった。

台所万歳は少しやっておいわいもらった。(三俣)

三河万才 二人できた。門付けした。米をやった。それをどこかで

金にかえて行つた。(上細井)

三河万才が正月に来た(勝沢)

三、四月頃三河万才がやって来た(下細井)

ござ 年に一回、ござ(三味線、うた)がきて、決まった家に泊まっ  
た。(大沢忠次郎宅) 銭や米(米は銭にかえた)をもらった。四人から  
六人で盲の人が多かった。(川原)

泊める家は決まっていた。越後からきた。五十〜六十年前まできた。  
荷しよいがわずかに見え、それにつかまって盲人がついてきた。三味  
線をひき、ござ唄をうたつた。それを聞くと蚕があたるといった。

(上細井)

大正時代まで、新潟から来た。三人くらいで組んできたが、そのう  
ちの一人が目が見え、他の盲目のゴゼを引きつれてきた。ヤドに人を

集めて、ゴゼの三味線と唄を聞いた。それを聞くと、蚕が当たるとい  
った。唄を聞いて、銭をいくらかやった。(小神明)

大正時代まで来た。新潟から、三、四人でやってきたが、一人が目  
が見えるのみで、あとは盲目の女性であった。宿がだいたい決まっ  
ていて、その晩は近所の人が寄り集まって、ゴゼの三味線と唄を聞いた。  
唄を聞いた者は二、三銭の喜捨をした。(五代)

新潟の西蒲原郡から来た。くるとくへ宿をとつたから来てくれと案  
内があった。一つ唄っては「おごつとくれ」といい、お金をやると、  
またうたつた。目が見える踊りゴゼは、芸者のようだった。(荻窪)

よくゴゼ唄を聞きにいった。目あきの手引きが、つれてきた。二つ  
く三つ唄うと、おごつとくれといって、お金を要求した。踊りゴゼは  
七人くらいできた。目が見えたり、芸者みたいできれいなので、どこ  
に行くにもあとをついていった人もいた。(荻窪)

警女が良く来た(勝沢)

越後から警女が来た(下細井)

警女が来た(上泉・片貝)

警女、祭文が来た(関根)

祭文 祭文は横山仙平さんがうまかつた(下細井)

大正の初期には祭文語りが来た(勝沢)

ほら貝を吹き、錫杖をふって、「デロリン、デロリン」とやつた。宿  
が決まっています、そこへ人を寄せて、皆で聞いた。(五代)

芸人 祭文語りが来た。チョンチョログといった。(荻窪)

デロレンデロレンデロレンデロレンデロレン

へされば今この場のお客様方へ

これよりうかがう原題は 上州生れは

榛名ねごしの仲の町の生れにて その名をば

榛名の梅吉とて 仲の町の抜き読みをば

いかなりますか 御時刻まで一生マタ懸命ニヤ

努めましょう デロレンくくくく

あ<sup>へ</sup>の板鼻の渡し場で 泣いて別れた常川様は 皆屋敷も再興せしか  
また二つには

角海老よりの娘の身受け 安否聞きたや

知りたさに ぎず持つ脛の草三郎 忍び忍んで吉原の

デロレンくくくく

大<sup>へ</sup>門くぐれば 仲の町 中に桜を植え並べ 左右に見上ぐる二階に  
は紅提灯をば釣り並べ 金短冊や銀短冊が風に舞い ちらほらな  
びかれる デロレンくくくく

色<sup>へ</sup>の港と良く言うた 入り舟あれば出舟もあり 碇おろして 遊ぶ  
お客の数知れず

この里ばかりが月か夜か 智者も学者もせんじんも 百万石の殿様  
も 下町人に至るまで 寺の出家が着ていた衣や 手にする珠数  
や はげた木魚も質屋にまげて  
やれこらさんよの どっこいしょのしよと浮かれて遊ぶ 里のつれ  
デロレンくくくく

そこへ乗り込む草三郎 久方振りに角海老に 上<sup>あが</sup>って かねて知り  
あいの女術の源七を呼んで そつとようすを窺<sup>あが</sup>ってみまするていと

どうやら御主人常川の半三郎様は娘を身受け致し 今では皆屋敷も再興致したと 聞いて嬉ぶ草三郎ホイもうこの世に思い残すことはない と その夜はあつさり切り上げまして 花魁と二つ枕で寝所に着た

甲 一個が初夜で 二個が四つ 三個夜中も過ぎるなら 唯音するは 摺り草履の音ばかり 破れ按摩の笛の音に 夜鷹そば屋のリンの音 衣さくような子供の声で「須磨や明石や淡路島 通う千鳥の恋の辻 占」

ウツーオワンワンワンワン犬のまた 遠吠えあいこのすぐく  
デロレンくくくくくく

途端に開いた唐紙襖このたいりよう

もみてを使いましたる女衞の源七

「申し旦那、梅吉さん」

「誰だと思つたら源七 この真夜中に何事だ」

「旦那 悪い事は申しません どうやら張込みの奴らしい 気が着くのが遅くなった

早くこの家をお立ちなさいまし いやさお逃げなさいまし」

「おう 良く知らせて呉れたなあ源七 縁と命があつたなら また会うこともできるだろうが 旦那様には会わないから 宜敷く言つてくんねい」と 直ぐさま仕度に取りかかった

このいでたちを見てやれば黒縮緬の庄二郎頭巾 黒手黄八丈の細き 縞根の小袖には

梵天帯に茶柄の大小ぶち込みまして そつと表に出た時は しかも 文政三年の月は弥生のなかば頃 雲間に潜んで 朧月夜のもの凄く  
デロレンくくくくくく

浄土明のこなた来かかることならば、あなたに五人こなたに二人 田町の役人二十人「御用だ 上意」と 十重 二十重 中に挟まる 草三郎 泰然自若と控えたり せくな急ぐなあわてるな じたばたすれば日でありあげくで埃が立つ わしは榛名の梅吉で まこと安中 草三郎 逃げも隠れも致しはせぬぞと 自うお手をば 後にまわしや 町会所より北町奉行 堤伊豆守のお白洲で 悪事の数々露見すりや 直ぐに入牢となりまして 明くれば文政四年の年 しかも 霜月末つかた すんで名題の小塚ヶ原に於きまして 土で三尺木で 三尺 六尺高い木のそらで 槍の仕置を受けるといふ 哀れなるかの 遅れ咲き 榛名の梅吉 まこと安中草三郎の仲の町の抜き読みでした 御後は木遣と交替致し またのご縁で会いましょう デロレンくくくくくく 大野西松(小坂子)

芸人 物もらいか乞食のような警女や、万才、猿まわし、春駒(ころがし万両)、越後獅子が来た。(上細井)

春駒 正月に馬形にまたがって来た。どこから来たかわからない。

(五代)

春駒が回って来た(下細井)

馬の形をしたものを持って、正月にまわつた。(荻窪)

春の始めに 舞い込む駒は年もよい年 お祝い申す

アーハネコメ ハネコメ(荻窪)

芸人 春駒は二人で組んできた。獅子舞は獅子頭を持ってやってきた。万才は三河万才で、つづみと扇子の二人が来て、座敷に上つてやった。街にマルイチという興業師がいて、舞台でやっていた。初市にもでていた。(片貝)

芝居見物 榎町の「いろは」で、琵琶や芝居見物をした。(下細井)

芸人 祭文・義太夫・浪曲・琵琶（薩摩琵琶の守田鉄造）等を厄除けのために呼んだ。曲輪ごとの単位で、青年団が中心となった。（上泉）  
浪曲語り 伊勢崎の方から来た。宿でやった。ハナが多く入った。  
厄年（二五・四二才）の男が浪曲師を頼み、厄おとしとした。前に、後厄の者もいっしょにやることもあった。皆に共同で施すことから厄おとしになるのだという。厄おとしには川崎大師や青柳大師へ行く者もあった。（五代）

浪花節 大尽の家に浪花屋辰造が来た。（下細井）

浪曲 箱田や新田は浪曲が来た。（上細井）

猿まわし 一人で猿をつれてきた。門口で猿をはなす。餅をやる猿がとって、猿まわしの肩にのつた。

初絵売り エトの絵を売りにきた。物もらいみたいな人だった。

祭文売り デロレン、デロレンといっとうなった。

うたうたい 号外が出ると、その内容をうたった。ひとつとせをかたりましょなどといった。

獅子舞 門口を入ってきながら「おめでとうございます、あくまっばらい」という。子どもがいれば、頭をかじった。かぜをひかないという。獅子頭を持って、座敷にあがった。

万才 三河から来て、行く家は決っていた。安くない。あまり見なかった。

春駒 二人で、馬の人形を持ってきた。鈴がついていて、振ると鈴がなった。モチを二〜三きれ、くれてやった。「春のはじめにはねこむ駒は、年もよい年おいわい申す はねこめ はねこめ」といった。

（萩窪）

ものもらい（乞食）

ほっぺたはたき

錫杖で、ものもいわずに自分のほっぺたをぴしゃりとたたく。

テンチョウ

着物のすそをめくって 男性のシンボルを見せる。

イザリ

稲里から来て、尺八を吹いた。（萩窪）

やくおとし 大晦日に厄落しが来た。（下細井）

謡のけいこ 冬、謡のけいこをした。正月十日になると始めた。師匠が若い衆を集めてやった。（端気）

謡の練習 正月の一週間と、御祝儀の前にやった。（小神明）

謡 謡の練習は青年団で毎晩、団長の家でやった。しまいにはなわない講をして、二十五まとして町に出し、その費用で謡をやった。（小神明）

## 四、地芝居

地芝居 赤城南麓一帯は、かつては地芝居＝農村歌舞伎の宝庫であった。全国的にみても、三原田の歌舞伎舞台、横室の歌舞伎衣裳等第一級の文化的遺産を有している。このことに関しては、勢多郡誌、富士見村誌に既に詳細なる成果がまとめられている。特に横室の衣裳貸出帳は単にその所有する衣裳を知るに留まらず、近郷に於ける地芝居のありようを適確に把握する上で欠くことのできない格好の資料といふことができる。

一般に農村歌舞伎は三都（京・大阪・江戸）の歌舞伎を模倣したと考えられがちである。「尾陽劇場事始」の明暦・万治の記録、「松平大和守日記」の寛文八、延宝二・六・七年の記事は、これをうなづける三都の役者の地方興行の記録を示すものである。

しかし、三都の芝居の題材がその初期に於て、信仰や民俗を採り入れたものが比較的多いことなどから、地方から歌舞伎に与えた影響も、あながち無視することもできないであろう。

このことに関しては、郡司正勝―烏山「山揚げ」祭記録文献について―で、「すでにこんな地方にかぶきがあんなにも普及していたとすれば、驚嘆すべき発達がなし遂げられていたのは、たんに三都のかぶきの展開と進歩が、かぶき独自の歩みとばかり考えることは危険で、都市ならびに地方城下町などにおける祭礼の発達と、かぶきの関係にまで考察を進めるべきであろうとおもう。」と記していることから分明しよう。岐阜県の「久津八幡宮祭礼日記」と若干の註釈―守屋タケシによれば、宝暦、天明期から幕末にかけて農民の手になるかぶきの上演が全国へ波及して行ったと考えられていたが、久津八幡では宝永、正徳と云う時期に、早くも地狂言が行なわれていたという。ここでは、まず獅子舞があり、脇狂言・神楽・続き狂言という組立の特異な上演形態を持っているが、ここでは一まずそれは置いておく。

横室歳代記によると

宝暦二年（一七五二）当村踊此の年より初め候也

と記されているから、地芝居としては一般的な初期に横室でも地芝居が始まったと考えてよいであろう。必然的に近隣諸村も同時期に踊りすなわち歌舞伎狂言が行なわれたものと考えられよう。しかし注目すべき事に、宝永元年（一七〇四）横室村五人組帳の前書に

一他領に罷越し相撲繰見物類一切無用仕るべく候事

と記されている一文がある。他領が何処であるか知る由もないが、久津八幡で地狂言が行なわれていた同時期に、文面から察すれば農民達は自領から出て相撲や繰り見物をしていた。推論の域を出ないが、こ

の時に芝居狂言を見ていたとしたら、この目新しさゆえに早速人々の口の端に乗りもて囃されるようになるであろう。その結果が村々に地芝居を興す一如になったかも知れない。そして村人達の好奇の目は、驚くべき速さで、初演からわずか二年後の明和九年には神靈矢口渡が上演されている。寛政七卯年、装束初り今年踊幕装束少し出来とあり、横室がこの年から衣裳を整えはじめたことがわかり、文化元年には道成寺が踊られたことさえも知られる。これは専門的に稽古に明けくればなければ、不可能とも言える大曲であることから、為政者でなくとも厭農とまではいかなくとも、農事に携る時間が削られてしまうのではないかと、余分な心配をしてしまう。

ともかくも横室の歌舞伎衣裳貸出帳から判断すると、

弘化三年 峯

嘉永二年 勝沢

安政三年 五代 峯

勸農祭地芝居では

明治四年 峯 勝沢

明治三十二年 峯 一月十日 衣裳数一八二点 幕数十九幕

との記録がある。これから判ずると芳賀地区では峯・勝沢・五代で芝居が行なわれたことがわかる。

今でも、小坂子の福徳寺に組立式の舞台が保管されているが、残念乍ら組立ての経験者はいないようである。舞台は六間であるとの談であった。松崎茂「日本農村舞台の研究」中の図表でも、間口六間奥行三・五間床高四尺で、代表的な六・五間×二間の舞台収納屋があることを記している。下座が左右につくのが一般的舞台構成であるが、小坂子には、この下座を飾る見事な上り龍・下り龍の彫刻があり、毎年八月十二日の地藏祭りには本尊地藏金印の左右に立てかけられてい

る。この龍は水を呼ぶのに長け、雨乞いに流用されたという。大正三年八月八幡様の祭りにこの龍の飾り物を使ったが雨にたたられ、それ以後は使われないという。

衣裳は当然横室からの借り物であるが、幕は区長さん宅に保管されているとのことである。

五代にもかつては組立式舞台があったようであるが現存しない。一口に「横室の衣裳 五代の幕」といわれる如くここには芝居の幕があった。また勝沢にあった若宮神社は芝居の神様と呼ばれ、六間の舞台があり柁沢平三郎（明治三十二年生）が小学校三年の頃丸一があり、二十才の時に三日間程役者を頼んで芝居があったが、以後途絶えたという。「時沢と勝沢は兄弟」であるとの云承の如く間口五間一本虹梁舞台は大正六年時沢の不動様に収納され、道具は勝沢で神社もしくは正覚寺に保管しあったという。

峯の場合、舞台は小坂子から借りて来たという。

上泉のまわり舞台 昭和四年、神社の大改修の時、ここでしばいをやったのが、最後だった。神社の北西を五反借りて舞台をくみだてた。松を材にし、むしろを集めて作った。東京から役者をよんできた。

（上泉）

田舎芝居 富士見村でよく観た。東京でえらい役者の古い衣裳を買った。小屋作りは竹でわくを組み、仮の舞台を作りむしろをしいた。

（日輪寺）

村芝居 大正初年まで、郷倉の前に屋台を組み、まわりにサジキを作って、芝居をやった。村人が役者係・風呂係・自転車係・ふとん係・接待係などにわかれ、東京から役者呼んでやった。役者係は役者の世話、風呂係は役者が入る風呂を焚いた。ふとん係はサジキの座ぶとんを調達したりした。木戸を設けて、いくらか銭をとって、見物させ

た。ずいぶん多くの入りがあったものだった。舞台は板をつなげ、むしろをはって作ったもので、背景の松の木を山から切ってきてとりつけたり苦労したものだという。そういう労力のいる仕事はワケエシがやった。出し物は仙台萩や勸進帖などが喜こばれた。昭和三年の上電の開通式のとき以来やっていない。（上泉）

田舎芝居 現在公民館が建っている位置には、昔大きな舞台があり、村人による素人芝居や芸人を招いての田舎芝居が行われていた。テレビやラジオ等のない娯楽の少ない時代だったので、村人は喜んで観賞した。芝居の開催は、農閑期を選んで行われた。公民館には、昔、この芝居に用いた衣や小道具等が収納されていた。（北代田）

芝居 東の若宮神社は芝居の神さまと呼ばれ、間口六間の舞台があった。春の祭りの時に三日程役者を頼んで芝居をやった。その後五十年程この習はない。勝沢はもとも芝居が好きな土地で、「時沢と勝沢は兄弟」といわれ、舞台を大正六年に時沢の不動様に収納し、道具を勝沢の神社もしくは正覚寺に保管した。その後芝居はない。（勝沢）大正六年二月に、神社の前の田んぼに小屋をかけ、大間々から馬で役者を連れて来て、衣裳を小出から借りて来て興行芝居をした。（上細井）

上泉神社で、片貝の丑寅祭りのあと一週間芝居をやった。組立式廻り舞台は、今でも郷倉の中に保管されている。（上泉）

影絵 昭和二十二年「女左近」と呼ばれる、ガラスに絵を描いて写す影絵が来た。（上細井）

## 五、灯籠まつり他

地藏まつり 八月十二日の夕刻から公民館で、厨子に入った小さな

地蔵様を開帳し、経を唱え、念仏婆さん達による念仏が上げられて供養をする。左右には地芝居の時に使われた上り龍、下り龍の彫り物や掛軸などが飾られ、参詣人にお札を配る。外には灯籠が飾られる。(小坂子)

虚空蔵まつり 三区では宵に灯籠をつけて虚空蔵様を祀る。かつては子供達が各戸を回って、「つらぬきくんない」といって、燈明錢を貰って歩いた。(小坂子)

小神明燈籠祭り 記録によれば、慶応元年、明治五年、明治十三年、明治二十四年に行なわれている。特に明治二十四年の記事は芳賀村誌に詳述され、一口に、「小沢の花火、小神明の燈籠」とうたわれた様が、手に取るようにわかる好資料である。

近年の土地改良の波に洗われ、神明宮も一部手を加えられ、燈籠小屋は取り壊され、弁天池も埋め戻され昔日の面影は失なわれてしまった。今その地にこれを記念して、近藤義雄の文になる次の碑文が建立されている。

#### 小神明燈籠祭り由来記

小神明の地は平安時代以来伊勢大神宮の神領細井御厨に属し、古来より伊勢神明宮を勧請し村の鎮守としてきた。神宮文書には細井御厨は伊勢国二見郷来迎院相伝の御厨となつてゐる。小神明の地名の由来もこの御厨の関係から生じたものである。

神明宮境内にかつて弁天島と呼ばれる小山あり、周囲には清流を引水した池があつた。干魃に悩まされた先人はこの島に弁財天の石祠を祭りその加護を願つた。石祠には神明宮の別当存須の代に村中氏子相謀り寛延二年四月の吉日を選び造安したとある。基礎石には波間に浮ぶ弁財天の化神の大蛇が刻まれている。この弁財天の祭りは神明宮祭日に続き、十月十七、十八日の両日とされ数年毎に大祭

あり。慶応元年明治五年同十三年同二十四年の記録がある。

明治二十四年の記録によると十月一日から村民挙げて燈籠作りが開始され村内四組の出しものは弁天組の弁天様の玉取り、宮西寺西両組は相對して富士の巻狩、中間に廻組の川中島合戦とある。各組毎に燈籠とそれに入れる人形を作り、弁天の池に浮べた。流水に浮ぶ燈籠人形は巧みに操られ、見物人は東京方面からも訪れる程であつた。大祭で消費する油は前橋の油相場にまで影響するといわれた。

昭和六十年三月小神明地区土地改良事業に伴い当地境内地も整備され、弁天島はその姿を消した。人々にこの燈籠祭りの盛時を後世に伝えんとし、ここに由来の一端を記した次第である。

昭和六十年五月吉日

#### 小神明町民之を建つ

燈籠 二十基程道端に立て、燈明を使った。小学五、六年から高等一、二年の子供が参籠し、「おこわもつて来い」と叫び、太鼓を叩いた。中学ができてから少なくなる。(勝沢)

千体薬師に春四月十五日と秋十月十五日の二回の祭りがあり、灯籠を掲げた。(下細井)

一、二年の子供が参籠し、「おこわもつて来い」と叫び、太鼓を叩いた。

中学ができてから少なくなる。(勝沢)

千体薬師に春四月十五日と秋十月十五日の二回の祭りがあり、灯籠を掲げた。(下細井)

一、二年の子供が参籠し、「おこわもつて来い」と叫び、太鼓を叩いた。

中学ができてから少なくなる。(勝沢)

千体薬師に春四月十五日と秋十月十五日の二回の祭りがあり、灯籠を掲げた。(下細井)

一、二年の子供が参籠し、「おこわもつて来い」と叫び、太鼓を叩いた。

中学ができてから少なくなる。(勝沢)



が回る。直径二米、桐の木で作った大きな珠数を右まわりに七回半まわしながら、「ナンマイダンボ、ソラマメダンボ」と唱え、各戸をまわる。村境では、「おぼけだぞー」と言つて珠数を捨て、一目散に逃る。(日輪寺)

地蔵まつり 昭和三十年まで、四月十七日に麦わら地蔵(やきもち地蔵)をまつた。頭、小頭を置き、現存する珠数をまわして「ダンボイ」と唱えながら珠数回しをした。カンケイ(金)と小麦わら・竹を持ち寄り、灯籠をつけた。家庭では、あん入りやき餅を作つた。これは病気をやき払う縁起ものであつた。(荻窪)

青柳の根っ子祇園 「そら根っ子だ、根っ子だ」と叫んで歩いた。佐々木寅蔵が、新百姓と旧百姓の融合を企図するため、東京から御輿を買つて来て始めた。御輿祇園が延寿院にあつた。六尺の通りを、九尺の角祇園が通つた。歩いて、囃子がついた。(青柳)

青柳のお囃子 静かなはやしで、松平大和守が氣にいつて本丸によんだ。(青柳)

根っ子祇園・幌祇園 荷車を二台つないで、その上に舞台を作つて祇園囃子をした。世良田の囃子と同じ。(上細井)

祇園 岡庭吉雄宅の蚕室で幌祇園を復活したが、三年で終つてしまった。(上細井)

西窪に、祇園の屋台があつた。菅野家が道具を預かつている。(上泉) 明治初期に、波志江から祇園囃子を習い、さらにここから渋川へ伝えた。明治四十二年頃、四台の山車があつた。大正八年頃、旧市内の町から四台を譲り受けた。九月十一日頃から山車がでた。(上泉)

木福さま 前橋へ行くのに、ここを通つて行つた。ここのお祭りはにぎやかで、芸者も来たくらいだ。このまつりの時、流行歌が入つてきた。バイオリンひきの石田石松が来た。角帽にマント姿で三人で来

た。一つ唄つては歌の本を売つた。一冊十銭だつた。(荻窪)

盆踊り 八幡宮の境内では、毎年八月九日、十日には盆踊りが行われた。盆踊りは、納涼祭のメーンで、男女が知り合う絶好の機会であつた。この盆踊りをキツカケとして、結ばれたカップルも村内にはかなりあつた。(北代田)

手おどり、文句は「端氣の善勝寺のお寺の前で」というものだつた。(端氣)

虚空蔵様 片貝を語ることは虚空蔵様を語ることであると伝えられている。虚空蔵様は、もと細井の金山にある虚空蔵山にあつたが、かつき出されて玉蔵院で休んだところ、動かなくなつて、この地に留まつたという説と、細井から流されて池上(幸塚)でつかえ、さらにこの地で留まつたという説がある。五大虚空蔵の一つに数えられ、元禄十四年に百五拾両で厨子を作り、三日がかりで江戸から運んだ。祭りは盛大で、大正十三年には、十三間の松ではね木の小屋がけをした。西と東の片貝に別れ、小屋の中に、丑と寅の張りボテをそれぞれが作つて、その出来映えを競つたと言われる。大正十五年の祭りには、カマス一杯の賽銭がいくつもあつたという。寅の年の祭りは別格で、村はずれから神主を先頭にし、剣をさした若者組の露払いや、神樂の囃し方と舞い子達が、片貝神社までお練りする。道中の辻では、悪魔払いのため、剣を抜いて

たいをもつて たいとす

太刀をもつて 太刀とす

一劍摩利支天の妙術なり

魔道退散

と唱えて、剣を振り、悪霊を払いながら社へ向かう。

神社の鳥居前では、

そもくこの太刀といっぱ  
きつきき（万事は）水がしら

しのぎの高さは摩利支天

表の目貫は金剛界

裏の目貫は胎藏界

今回（にゆう）を供したり

神の前には（神事）宝剣

仏の前には悪魔調伏の利剣これなり

悪魔五つ七つに切り散らし

（みつの地）にや下しおく

御敵を結ぶ命の（しらち）にや

（あたこ）摩利支天 八幡大神

二万八千軍神

魔道退散

と唱えて境内に入る。

この行事は片貝神社祭礼と共に行なわれ、この後神前でお祓いを受け、神樂が演じられる。

## 六、その他

### (一) 獅子舞・競馬

獅子舞 今百歳くらいの人がやったくらいで、もうやらなくなっている。新井氏が神主だった。北橋村中箱田に教えた。頭三太鼓一つづみ、笛などがあつた。（川原）

明治末頃まで行っていたが、戦後、道具を燃してしまった。（川原）  
安政年間、箱田の明神さまにここの獅子舞が伝えられた。獅子が三

人、太鼓、かねで舞つた。（川原）

獅子 新田で、二月十五日にやる。伊勢参りの留守に家がやけてしまったら、お獅子は、隣りの家に移したので、裏んちへ行っていた。まわりもちにしようとしたら、隣の家が焼けた。その後、その家に固定した。獅子は各戸を、厄除けのためにまわる。（上細井）

新潟から、獅子頭をもつてきて、舞つた。（五代）

前橋市内のテキヤによる獅子が回ってきた。（下細井）

新田では、桑原五助宅を宿として、悪魔つ払いの獅子祭りが二月十五日にあつた。時計回りで曲輪中を回って歩いたが、獅子頭を他所へ預けたら、その家が火事で焼けてしまった。（上細井）

神樂（獅子頭）をかぶつて悪魔払いをする獅子舞が来た。また、村内で櫂の木で獅子頭を作っている家があつた。（上細井）

競馬 小神明の神明宮の西に競馬場があつた。昭和四年頃は二月六日が開催日で、にぎやかだつた。ふだん農耕で使っている馬で、あちこちから参加者が来て、馬を走らせたり、見物したりした。五代でも小神明がおわつたあとにやつた。（小神明）

現在の公民館のすぐそばの田んぼに、競馬場があつた。農家の農耕馬を競走させて楽しんだ。もし自分の持ち馬が勝とうものなら、その夜はみんなでお祝の大騒ぎとなる。開催期は、農閑期で、娯楽の少ない中で、数少ない村人の楽しみだつた。（北代田）

農閑期には、農耕馬が出て競馬をした。代田では、田んぼを馬場にした。（北代田）

明治四十一、二年と昭和十七年に、八幡山の下を馬場として、競馬が行なわれた。（上細井）

(二) 遊 び

まりつき まりつき唄としては、県づくり、町づくりを歌った。

(青柳)

石けりをして遊んだ。(青柳)

まりつき歌

いちばんはじめは一の宮

には日光中善寺

さんは桜の宗五郎様

よんは信濃の善光寺

いつつ出雲の大社

むつつ村々の鎮守様

ななつ成田の不動様

やつつ八幡の八幡宮

ここのつ高野の弘法様

とおは東京心願寺(下細井)

一―伊勢 十一―東京

二―新潟 おわり―尾張

三―三河

四―信州

五―江川

六―武蔵

七―名古屋

八―函館

九―九州(日輪寺)

手まり 山からマワリグサというコケのような植物を採ってきて乾

燥させ、これを芯にして手まりを作った。

遊び

元は芝居があり、浄瑠璃芝居や浪花節もあった。将棋が強かったが、そのために身代を終わした人がいた。田んぼへ将棋盤を持っていき待っている弟子が、その人の田を耕したりの仕事をしたという。

(三俣)

楽しみ

夜あそび、浪花節を聞く、大胡町へ映画を見に行くことくらいだった。夜、宮城の柏倉や、荒砥の泉沢まで遊びに行き、帰って草刈りにいき、寝ていたことがあった。(荻窪)

とつこあそび

(紋つきあそび) 天神講や正月のあそびで、らつかせいをかけてあそんだ。一つかけてあたると、五つもらえた。商い屋で売っているくじで、表面に鶴、三升、独鈷、矢羽、柴田、仙の六つの紋が描かれている。両端のくじをひいてかけた紋で同じ紋が出れば、あたりだった。(三俣)

子供の遊び

男は戦争ごっこ女は手まりなど

(てまり唱)

むこう山のなく鳥は、ちゅうちゅう鳥かめん鳥か

しょうざぶろうのみやげ なにゅう なにゅう もらった

ぎんのかんざしもらった

やぶのかげへおいたらば

ちゅうちゅう ねずみが ひいてった

どこから どこまで ひいてった

かまくらかいどうのまんなかで

いちぬけ にぬけ さんぬけさくら

ごようまつ やなぎ

やなぎのしつた(下)のぼうさんが

はちに ちんこをさされて

いたいともいわず かわいいともいわず  
ただなくばかり

まずまず いったん かしました(くり返し)

(なかのなかのこんぼうず) かごめかごめ形式のあそび  
なかの なかの こんぼうず にしやなんで ちっちゃい(外の輪  
の子)

おっかさんが さんばいめし くんねえ なにしよつてとおる(中  
のおに)

もちごめしよつて とおる(外)

おんに いっしょう くれや(中)

やだで やだで(外)

けちんぼ けちんぼ(中)

けちんぼ だつて いいや(外)

しやんぼ しやんぼ(中) 注しやんぼ↓けちんぼ同じ

しやんぼだつていいや(外)

ねこのばけたのおつけるど(中) ねこでも何でもよい

おっかなかないや(外)

犬のばけたんおつけるど(中)

おっかなかないや(外)

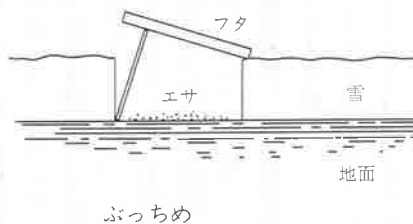
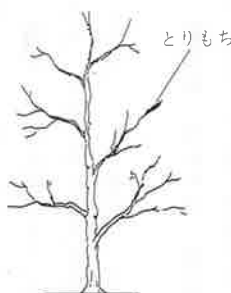
——のばけたのおつけるど(中) (てきとうに何でも言う)

おっかなかないや(外) (何回くり返す)

○○○のばけたのおつけるど(中)○○あるものの名前を言うと、外  
の子がこわいと言ってにげる

おっかない(外)

中にいたおにがにげた子をつかまえる。つかまった子が次のおに



子供の遊びには次のようなものがある。  
十五夜に柿をつついて取り食べる。  
魚とり、ハヤ・フナ・ドジョウなど。ドやおきバリを使った。  
棒・石の投げ合い 青柳とは仲が悪かった(對抗意識があった)の  
で、よく棒や石の投げ合いをした。水あび場などは青柳にあるのだ  
が、一人では通れなかった。  
野球 四角ベースといった。

(上小出)

タコ上げ 寒くなるとやった。龍蔵寺  
の前の田んぼで、多い時は二十も三十  
も上った。疲れると、糸を家の広縁の  
柱にくくりつたりした。

お寺には畳一畳位の二重坊主の絵が  
描かれた大きなタコがあり、尾も二十  
尋ひろのものを二本つけていた。

タコを持つ人一人、なわ二人と大人  
三人で上げた。

メンコ 普通メンコというと、ロウを  
紙に浸み込ませた、直径1.5cm程のもの  
で、大きな円形のもののは風おこしと言  
った。四角いのはカードと言った。

ぶっちめ 雪が降ると、部分的に雪を  
除き地面を出して、鳥のエサをまく。  
鳥が来てエサを食べる時に、フタが閉  
って鳥を獲る。

ゴムカン パチンコ

○とりもち 木の枝にとりもちを付け、枝に似せかけて、木に取りつける。鳥がとりもちにつき、鳥を獲る。

○田んぼに石をほうる。

○水あそび 白川は水が少いので、青柳の桃木川の寄居で泳いだ。体が冷えると、田の水に体を浸して暖めた。

○水口を壊す。

○白川の土手をすべり下る。(龍蔵寺)

あそび 兵隊ごっこ、たがまわし、たこあげをした。たがまわしは、鉄のたがを、竹の枝の先を二俣にしたもので押してまわした。(端氣)

### 子供の遊び

ナワトビ (ホソビキで)

マリツキ (ゴムマリで)

オテダマ (小豆・エゴを入れて)

一番はじめは一ノ宮

～ 1～9まで他と同じ

十は、東京博覧会

ケツトバシ (イシケリ) (青柳)

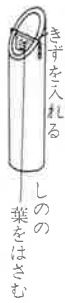
### 子供の頃の遊び

お手玉、まりつき、おはじき (十コだし・五コだし)・石けり

おはじきは自分で作り、エゴの実を入れたまりつきが間違わずにできると「一コ貸した」という。

麦わらで、六角・四角・三角のかごを編んで、中に小さい石ころを入れて鈴にした。しの竹を十cm位にななめに切り、笛にした。

(日輪寺)



きのすを入れる  
しのの  
葉をはぎむ

子供の遊び かくれんぼ、竹馬、めんこいぶつつけ・石けりいぶつつけとぼし等をして遊んだ。芝居の話をよくおじいちゃんから聞いた。

(下細井)

子どものいたずら 十二月十五日又は二十三日の稻荷祭の「魚とり」

(いわし等の供物を取る) や十五夜の「だんご突き」など、大人たちは、子供たちが取りに来るのを知っていて、わざと取りやすいようにしておいてやる。子どもは、大人の目を上手にかすめて、魚やだんごを取り、スリルを楽しむ。(日輪寺)

正月の遊び 紙もらい (二月一日で、半紙を折ったものをくれた。その半紙で習字をした)・かるたとり。(北代田)

子供の遊び(大戦中) 戦争ごっこ・めんこ・竹馬・竹とんぼ・水鉄

砲・シノ棒倒し・鳥とり (ネバネバするモチを使った。(北代田))

ぶつつけ(メンコ) おはじき、お手玉、まりつき、竹馬、かんづめ

のポックリ、竹馬、竹トンボで遊んだ。(勝沢)

あそび 独楽回し、ねつくり、ぶつつけ(メンコ) 竹馬、兵隊ごっこ、ちゃんばらで遊んだ。また、くるま(上図)を作って、乗って遊んだ。(田口)

日月ボール(ケン玉)・けつとぼし(石けり) 四角

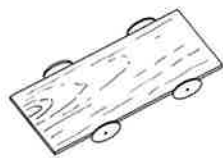
ベース・ブツケ(メンコ)・せんぎよかき(ケンケン)をして遊んだ。

ブツケとメンコは大きいのと小さいので呼び方を別にした。(堤)

お手だま(おたま)おはじきをした。お手だまは、楠正成のうた「桜井の別れ」であそんだ。(端氣)

お手玉 「青葉茂れる桜井の……」や「大楠公」「高師直の大軍」な

どを唄いながら縁先などで遊んだ。(端氣)



エゴの実や小豆で作ったお手玉で遊んだ。「一つとや……」の教え唄をその時に歌った。(青柳)

### 十一月十日の夜

十日夜 もぐら棒 夕飯食っちゃ

腹だいこ

と言いながら各戸を回って歩いた。(上泉)

たがまわし 樋のたがを棒で回して遊んだ。(端氣)

縄とび 細びぎで縄とびをした。(青柳)

娯楽 大師様のまつりがあり、食べ物屋がたくさん出た。前橋で映画や芝居(柳座)を見たりした。若いもんは力だめしに、地藏かつぎなどをした。(龍蔵寺)

芝居小屋 前橋電気館の裏に小屋があり、芝居をやっていた。木戸銭は五銭で、映画は当時十銭だった。(上泉)

娯楽 前橋に映画を見に行った。大渡橋のたもとにカフェが二、三軒あり、行った。(川原)

石かつぎ 三十二貫の石が力だめしとしてあった。また、米俵に一升か二升南金袋に入れたものを付けてかつぐ。一升楯の上でかついだり、「いちようがえし」と呼ばれるかつぎ方などがあった。(関根)

力だめし 寺の前に「ずぼうとう」と呼ばれる力だめしの石があった。(下細井)

すもう 観音様・秋葉様・勝城に土俵を作り、相撲を取った。お祭りの時は、しょつきりをした。(勝沢)

日露戦争に勝ったときには、八王子神社の境内で青年すもうをやった。(荻窪)

大人のタコあげ大会 大正時代の頃、大人のタコあげ大会が河原で行われた。いろいろな形のタコが出て、実施された。(北代田)

凧あげ 藤づるを使ううなりだこ(端氣)

## 第十章 人の一生

### 一 産育儀礼

#### (一) 子授け

子授け あまり表面には出ず、こつそりと行くことが多く、子ができてから「行つた」と言つた。(嶺)

南橋の田口の福守さまに行つた。小さい福守さまを借りてきて、おなかにだいておいた。子ができたあと、福守さまを倍にしてかえした。

(勝沢)

下大屋の産泰さまに、オサゴとお金をもつて行つた。(嶺)

モライツコすると生まれる。養子をもらうと生まれた。ヤキモチツコといわれる。(小坂子)

産泰様に行き、祈禱をうける。そして、子供ができた時に底のないひしゃくをあげた。ある家からお米をもらつてきて、食べるとよいと言つた。(石関)

産泰様に行き、願つた。伊香保などの温泉に十日くらい行つた。

(堀之下)

南町の淡島様や産泰様にお参りに行つた。(川原)

産泰様にゆく。医者がかりをする。神参りをして、授つたらお礼をする。夫婦で温泉に行つてあたたまる。南の淡島様の月参りに行つた。高尾山に病気とお産のお参りに行つた。(北代田)

特に苦勞はしなかつた。(田口)

産泰様にお参りした。(関根)

「辰巳蔵の米をくれると子ができる」と言つた。一人はできる。もううといいい、買つてはダメ。例はあまりない。一升はもらう。(東片貝)

#### (二) 妊娠から出産

妊娠を最初に話した人 最初にダンナさんに言つた。(嶺・勝沢・五代・島取)

最初に姑さんに言つた。(小坂子)

妊娠のことはなかなか言えず、少し大きくなってから親が気付いた。

(五代)

さんばさんに話し、婚家の親に話をした。(石関)

母親に話をし、夫に話をした。(堀之下)

なかなか言えなかつた。ダンナに話をした。「あるものがねえからはじまつたみてえ〔みたい〕」と言つたら、ダンナは「それはよかつた」と言つた。(荻窪)

夫に「子供がはじまつた」と言つた。(川原)

実家の両親に話をした。(北代田)

実家の母に話をした。(下細井)

母に話をした。わかるまでは言わなかつた。(関根)

妊婦の呼び名 ハラミオンナ。(鳥取、小坂子)

ニンブ。(勝沢)

ミモチ。(五代)

「おながが大きい」と言った。(石関)

ハラミオンナとかニンプと言った。小学生のころ、「リュウセンケイ(流線形)」と言った。(堀之下)

「ハランでいる」。「みごもった」。「ミモチ」と言った。(荻窪)

ミモチという。(北代田・上細井・関根)

安産祈願 産泰神社にゆき、底ぬけびしゃくあげる。うまれてから

お札にひしゃくあげる。(鳥取・嶺・小坂子・勝沢・五代)

氏子になっている神社にゆき、オサゴあげる。お札にもオサゴあげる。(鳥取)

子育て地蔵に、生まれてから赤いズキンとおかけと、お賽銭あげた。

(小坂子)

「子育て地蔵」と呼ばれる地蔵さまがあり、そこにおまいりした。

「安産ならば、一把線香あげます」と言ったり、「安産できれば、石の

お地藏さまあげます」という人いた。帆形を奉納した。(鳥取)

「お便所きれいにするといい」と言い、のち便所は塩できよめる。

(鳥取)

鶏がはじめてうんだ初卵を食べるとよい。(五代)

お葬式の六地藏のローソクもらっておき、痛くなってからつけると

すぐに生まれるといった。短いのがいいと言われた。(勝沢)

産泰のひしゃく奉納をした。それは水がぬけるほど軽く生まれるか

ら。(小坂子)

仏様にお灯明あげて「ぜひ安産に生まれてほしい」と言う。灯明の

消えるまでに生まれる。(鳥取)

三カ月くらいになったら産泰神社に行った。(石関)

産泰さまに行き、底のないひしゃくで水をくんだ。「馬のものをまた

ぐとお産が重い」、「大工さんの砥石をまたぐと砥石が割れる」と、きつく言われた。(堀之下)

産泰さまに歩いて行き、底ぬけびしゃくをあげた。(荻窪) (三俣)

産泰様には産前、産後にお参りした。(北代田)

産泰様に底ぬけひしゃくをあげた。(下細井)

貴船様に願をかけた。産泰さまに底ぬけひしゃくをあげた。これを

あげるとお産が重くない。ニワトリの初産の卵をいたくなった時にの

ませると、楽にのめっこ出る。(田口)

貴船様の入口にある「アカヤの十二様」にお参りに行った。産泰様

に底ぬけひしゃくをあげた。(関根)

長生きしてなくなった人の六地藏にたててあるローソクで、なるた

け短くなったものを、人に見られないようにもらってくる。それをつ

けるとあかりの消えないうちに生まれる。(田口)

産泰神社(下大屋)に行った。(荻窪)

産前に産泰神社へ参り、産後、無事に産まれたことを感謝して、「お

礼参り」をする。その際、ヘッタ(底)のないひしゃくを奉納した。

(北代田)

安産祈願のために産泰さんにお参りをした。腹帯をもらってきた。

(日輪寺)

安産の神様。産泰さまでお札をうける。五ヶ月目に岩田帯で腹帯を

まいた。(小神明)

産泰様 つわりがあると、ダンナか家の者が産泰様までお札をもら

いに行ってくる。この札は、帯の中に大切にしまっておく。(下小出)

妊娠中の禁忌・諺 火事を見ると生まれる子に赤アザがつく。葬式

に参列すると黒アザがつく。そのため、懷中に人に見せないようにし

て鏡をいれてゆく。(嶺)



高いところに手をあげるとよくないという。乳がきれるという。

(小坂子)

重たいものをもたない。腹帯をしつかりまくこと。火事や葬式をみてはいけない。シルシツ子ができる。「鏡は妊娠したらはなすな」と言った。(勝沢)

火事を見ると赤アザが、葬式を見ると黒アザができる。ミモチになったら、腰ヒモに4〜5cmの小さい鏡をつけておいた。(五代)

葬式は黒いアザ、火事は赤いアザができると言ひ、話を聞いてすぐにふところに鏡をいれた。(石関)

葬式に行く時には、腹に鏡をいれておいた。死人や火事を見て自分の腹をなぜないことと言われた。その部分に、死人は黒アザ、火事は赤アザができると言った。遠くに行く時にも小さい鏡をいれておいた。

(堀之下)

重たいものをもつなといった。「ハラミオンナは火事を見るな」と言ひ、「火事を見るとアザができる」と言った。鏡をむこうにむけていれておいた。「葬式の時は、鏡を懐にいれておけ」と言った。(荻窪)

火事を見てはいけない、アザのある子ができると言ひ、外には出られなかった。また、葬式には赤ん坊をつれていってはいけないと言った。(三俣)

重いものをもつな。火事を見ると赤アザができる。フタツゴまでは葬式の鐘を聞かせない。葬式は見せないで、ふところに鏡を入れておいた。(川原)

冷やしては良くない。庭がすべるので、しぐれた時には外に出ないように、出る時は爪立てるようにして歩く。「しったあ(少しは)動くように」とも言われた。(北代田)

高いところに手をのばすなと言われたが、仕事をしていてはできな

かった。(下細井)

火事を見ると赤いアザができる。火事を見てさわったところにアザができる。ホトケさまを見ると黒いアザができる。(田口)

手をあげるとチズナ(乳綱?)が切れる、流産すると言われた。飛びおるな、重いものさげるなと言われた。火事を見るとよくないの、何かをあてた。(関根)

火事を見るとよくないといってふところに鏡を入れた。あざができるのをよけられるという。

仏様(死人)を見てはいけないともいった。やはりふところに鏡を入れてよけた。

産後の人には、油ものを食べると子供の目に悪いといって、油ものをさけ、鯉節におしんこくらの食事だった。産後にお餅やお赤飯を食べると、乳が張るからといって、餅などはやらなかった。張る時は、もみほぐしてやった。(三俣)

年子のお産 昔はなかなか年子が産めなかった。というのは、お産の後なかなか月経が来ないので、どうしても三年ぐらい年があいてしまう。(荒牧)

胎児の見分け方 前におなかが出ると男(ツノになってる)、横べつたりは女。(鳥取・嶺・勝沢)

顔がきつく男型になると男、反対は女。(鳥取・五代)

おなかの動きがはげしいと男、ヨメとダンナの年(数え年)をたして、二で割って割りきれると男、ちがうと女。ヨメとダンナの年(数え年)に一(子の年)をたして、三で割れると男、われないと女。わりきれないのを「イトチガイ」と言う。親が若くして死ぬと、子が二人とも「イトチガイ」で親がまけたという言い方をした。(五代)

顔がやせると男、腹がサキゴにやせると男、横に出て女と言った。

(石関)

やつれたから男と言った。ムナゴと書いてお腹が上にでる人と、ハラゴといい下に出る人がいた。前につき出ていると男の子と言った。

(荻窪)

男の子のほうが動きがはげしい。胎動がはげしい。お腹がでつぱつて、とび出しているのは男、下に出ているのは女。顔の形がきつくとやせてくるのは男。(川原)

子供が五人で三番目のみが男だったが、ツワリは、女の時は感じなかったが、男の時ははげしくてはいた。(北代田)

顔がやつれて男ではないかと言った。(下細井)

男の子は手足を荒く動かすので、一生懸命なせた。顔がきつくなり、シミができてやつれた。(田口)

顔がけわしくなり男げになると男。やさしいと女。腹がとび出すと男。(関根)

腹帯 五カ月目の戌いぬの日に実家の母が用意し、姑がしめた。

(鳥取・嶺)

五カ月目の戌の日に実家の母が用意し、自分でしめた。(小坂子)

五カ月目の戌の日に姑が買い、自分でしめた。(勝沢)

五カ月目の戌の日に自分で買い、自分でしめた。(五代)

五カ月目の戌の日にしめた。一回目はサンバさんがしめ、あとは自分でしめた。サラシは自分で買ってきた。腹帯をしめるというのは昔はかくなすほうであった。(石関)

戌の日にサンバさんがしてくれた。端に寿の字をつけてしめた。

(堀之下)

六カ月の戌の日にしめた。自分でしめた。サラシは買ってもらった。

(荻窪)

三カ月目くらいからした。戌の日にした。(三俣)

五カ月目の戌の日にしめた。サラシを一丈、自分もしくは夫が買い、かくれてしめた。朱で三つ、犬の字を隅に書いた。(川原)

五カ月目の戌の日にサラシをしめた。婚家で呉服屋から用意し、お産婆さんに教わってしめた。(北代田)

五カ月目の戌の日に自分でサラシを買い自分でしめた。(下細井)

五カ月の戌の日にサラシをしめた。犬はお産が軽いから。産婆さんが印をつけた。ダンナが腹帯を一回しめてからさらしをしめるとお産が軽くなった。サラシをしめないと大きくなりすぎてお産が大変であった。大きくなると、田植え時にはお昼食べるとごめなかつた。

なかには背バラミと言いおなかの大きくならない人もいた。(田口)

三月みづかの戌の日の大安の日にしめた。お産が軽いつた。(関根)

臨月の妊婦への配慮 かわりなく、作業をしていた。作業をしているほうがお産が軽いつた。夫が妻を早くに家に帰したため、姑が気嫌が悪いことがあつた。(嶺)

仕事は同じにやつた。動くほどいい、お産が軽くなるつた。

(五代)

生まれる日まで仕事をした。いくらかは加減をしたが、時期ならギリギリまで使われた。(石関)

農家では生まれる日まで仕事しなければならぬ。さく切りは大変であつた。(堀之下)

生まれるまでしていた。百姓はいそがしいので、その晩にできることが多い。一人目はわからないが、二人目からは生まれるころがわかるので、同じに仕事をしていた。(荻窪)

生まれる日まで仕事をした。婚家で一人目も生んだので、その日まで仕事をしていた。(三俣)

生まれるまでは仕事をした。それまで仕事をすると安産だとか、子がしつかり育つと言われた。痛くなるまではふだんと同じに仕事をした。(川原)

生まれる前まで仕事をした。三人目の時は、前日にはうまれるとわかったが、口に出せず、小麦刈りとウドンぶちをして、髪を洗い、その日の午前二時に生まれた。一人目の時は一カ月前に帰り二十一日目にもどった。(北代田)

生まれる当日までしていた。仕事は同じにした。仕事をしているほうが軽いと言われた。(下細井)

なるべく仕事をしろと言われ、軽く生まれるからとその日までした。田植えをしていて痛くなり、すぐ軽く生まれた。(関根)

田植えも麦ふみもした。田植えや苗とりが大変であった。(小坂子) 苗とりでは大きいおなかで大変で、コジョハン食べると、体がまげられなくなるので、ダンナさんによつて、食わずに仕事した。(五代) 力仕事や高いところのものをもつことはいけないと言ったが、実際には加減しなかった。おなかが大きくても、コヤシくばりやフリマンがなど普通にした。半日もするとつらかった。(石関)

お産 初産は実家でした。三人目位から産婆さんに手伝ってもらう。お産はオクリで行った。三年おき位に産んだ。(下細井)

出産 明治時代は、近所で器用なトリアゲバアサンとかオサンバサンと呼ばれる人が、子供をとりあげた。(下小出)

部屋は家によって異なり、特にどの部屋でなければいけないということはなかった。部屋のたたみをもちあげて、むしろを敷き、布団をおいた。(下小出)

出産前後の妊婦の食事 出産前は、家族と同じ。(各地区) 産後、一週間は、鯉節と梅干とお粥であった。(嶺)

焼き塩と味噌にカンピョウの汁であった。実母が姑で鰯の缶詰をたべさせてもらった。(小坂子)

産後はお粥に鯉節と味噌であった。初子の時は焼き塩であった。食がすすみ、三回の食事を四回にした。仕事をはじめると食事はまじくなくなった。甘いものは毒といわれた。おさつはアトバラが病めないと言われ、ヤキイモを間食にして食べさせてもらった。イナゴをいっただものはアトバラが病めないと言って食べた。実母散を煎じて飲んだ。

産後は、お粥に焼き塩と鯉節味噌。カンピョウ汁か味噌汁で、豆腐がつくことがある。良い家は鰯の缶詰がでる。甘いもの、油ものはだめだった。(五代)

妊娠を実家に知らせると、母がカオミセに来る。その時に、米(チカラゴメ・サトゴメ)と鰯の缶詰や、鯉節、カンピョウなどをもつてくる。米は三升くらいもつてくる。せめて米はたくさんたべられるようにもつてくる。(勝沢・五代)

カンピョウは良いといわれ、味噌汁の中に入れた。産婦といっても満足なものは食べさせてもらえず、鯉節の味噌は上等の食べ物であった。(下小出)

前はほぼ同じで、後は三日間お粥を食べた。姑がいなかったので自分で作った。(石関)

前は同じ。後は一週間お粥に鯉節味噌であった。油ものは目が悪くなるといった。固いものはだめであった。丈夫な人は一週間おきてお勝手(台所仕事)もするが、それまではお勝手をいじったり、水に手をいれてはいけなかった。(堀之下)

前は同じ。後はお粥に鯉節味噌であった。うまいものをくれると乳が出ないと言った。油つけ、肉は悪いと言った。お粥は一週間続いた。

酔の入ったものは百日は食べなかつた。鰯の缶詰は古い血が下るといい食べた。カンピョウも食べた。(萩窪)

後は一週間はお粥で鯉節味噌にカンピョウのおつゆであった。二十一日間は御飯で鯉節味噌であった。油ものはいけなうと言つた。三日目くらいからおきたが、普通は一週間くらいねかして、二十一日間は仕事はさせなかつた。(三俣)

生まれてからの食事は、一回目が焼き塩のお粥で、二回目が鯉節味噌をませたお粥。男十九日、女二十一日目まではお粥であった。少なくとも一週間はお粥で、間に卵が入ることもあつた。鰯の缶詰は、古血をおろすといい、一週間すぎに食べさせた。梅干は酢が冷えるといい、油のものは、目が悪くなるといい、毒であると言われた。生まれると体が弱り、百日近く生理のない人もいた。一月九日に生んだが、そのために三月の節句は酔をぬいた鮭を食べた。甘いものもダメで、お見舞いのもので食べられなかつた。オボヤあけは、男十九日目、女二十一日目で、その日から御飯はふつうになる。(川原)

出産前は、食事は変わらないが、ヒキワリメシだがおいしく感じ、食はずすむ。生まれて二三日目に力米チカラコメが三升と鯉節が届く。鯉節味噌でお粥が一週間続いた。鰯の缶詰は古い血をおろすと言つたが、酔は血がさわぐと言つて食べさせなかつた。油気は百カ日は良くないとやつて厚揚げもだめであつた。ほうれん草もだめで、ミカンも血をさわがすので良くないとやつた。イモも白ガラが良いが、サトイモ、ヤツガシラ、トロイモは良くないとやつた。産後しばらくは血が定まらないためという。(北代田)

生まれた後は、お粥に鯉節が床にいる一週間続いた。サトイモは「カイカイ」ができるから良くない。トウガラシもよくない。梅干、油っぽいものもだめで、コンニャクもイゴイゴからだめであつた。仕事は二

十一日目からで、針仕事を早くはじめると目が悪くなると言つた。力がつくように、実家の母が米を一升もつてきた。(下細井)

出産後は、梅干、酢、油つけのものは百日だめであつた。食べたのは、上層の家で鯛味噌、鯉節味噌はふつう、生味噌のみの家もあつた。おつゆの実は、青いものは赤ん坊が青いウンチをするので、カンピョウや麩などをいれた。カボチャなども生り物ができるので百日はダメであつた。粥が二週間続くこともあり、二十一日間、二合の米を粥にして生味噌ですごしたこともある。(田口)

生む前は食事は普通である。生まれた後は、トリーナスを食べるとはれものができるといい、食べなかつた。トロイモもだめであつた。十日間ほどは、お粥と鯉節のみであつた。ネギを食べると子の目が悪くなると言われた。栄養が良すぎると乳がはつたり、乳線がつまると言つた。動物の肉もだめであつた。(関根)

出産時に用意するの オムツ、サラシの産着(嶺)

オムツ、下着、筒袖(裏はウコンの地で、表は麻の葉の文様)のはだ着。ウコンは丈夫に育つといわれた。(小坂子)

古い浴衣の洗つたもの。布団(高く積み、そこにおつかかつて産んだ)。(勝沢)

オムツ、はだ着、ジupan(麻の葉の着物) オムツは布団皮をぬつたものや、浴衣の古いもので作つた。昔は一重でぬつてあり、動きが悪かつた。上にもれないようにカッパをまき、さらに都ミヤコ腰巻をまいた。そのため足はほとんど動かせず、手も胸のところ動けない具合になつていた。(五代)

脱脂綿・ボロ・オシメ(布団皮の古いもの)・肌着。(石関)

布団・タライ・肌着・オシメ。床をしいたが、下に二〜三本でもワラをしいた。これは神代のころに、ウガヤフキアイズのコトが屋根

のできない前に、ワラの上で生まれたのでそうする。「ワラの上で生まれた」と言った。束髪もワラでしばった。産婦は頭がいたくならないように麻でしばった。(堀之下)

タタミをへがし、ワラをしき、薄い布団をしいた。ポロを用意した。おばあさんがポロの用意をはじめると「もうそろそろ」とみんなで言った。(荻窪)

たらい、手桶。釜で湯をわかした。おむつは子供がはじまるとしたくした。お産部屋は、畳をひつ立てて、布団皮の古いものにワラをいれて敷いた。シビブトンと言った。私生児のことを「あの子はワラの上からもらわれてきた」と言った。ワラの上から引き取ったのでそう言う。布団の上に油紙をしいて、蚕座紙一枚をしいた。(ふだんはまるめておいた。)広げて、使ったあとは、のちのものと、うめ場所にいった。子が具合悪いと、のちのもののうめ場所が悪かったという。(川原) 蚕座紙の上に布団皮の新しいものをしく。油紙をしき、洗ったきれいなポロを用意する。肌着三〜四枚とオムツとサラシ・ネルのジユバン、麻の葉の模様の広口の着物を用意した。オムツはゆかたの古や、布団皮のこわしたものを使った。(北代田)

布団をしいて、油紙をしいた。サラシのジユバンにオシメ、夜着を用意した。(下細井)

畳をあげて、古いものをしき、敷布・布団皮をしいた。(田口)  
布団の上で産んだ。昔は畳をあげた。(関根)

### (三) 出 産

出産場所 奥の部屋。(鳥取)

ナンド。(初産は家に帰ること多い)(嶺)

オクリのネドコ。(小坂子)

オクノマ。(勝沢)

コザ・オクリ。(五代)

オクリの部屋。フトンの上で新聞をしいたくらい。(石関)

コザ(奥の南の部屋)。(堀之下)

ナンド・ヘヤで出産した。(奥の北の部屋戌亥の方角なのでいいと

いった。お産部屋を「ヘヤ」と言った。(荻窪)

「ヘヤ」ができたわけは「ヘツピリヨメゴの話」による。(荻窪)

北西の部屋。オクリの間と言った。産小屋はなかった。(川原)

オクリの部屋。(北代田)

納戸。(下細井)

オクの部屋。チブク、ブクを着たためその部屋になったという。

(関根)

お産は奥の部屋で産んだ。家によっては、畳ではなく太い丸竹で、お産で使ったお湯や、口減らして死んだ子を、この部屋の下の土の中に流したり、埋めた。(北代田)

一番目の子は、実家に帰って生んだ。二番目以下は、婚家で生んだ。一番奥の部屋で生み、近所で経験のある人に頼んで、とりあげてもらった。(小神明)

お産の方法 畳をとり、ワラをしき、ゴザをしき、布団の薄いものをしく。頭のほうに、布団の折って大きい枕状にしたものをおき、よりかかって、うつぶせで産む。(昭和のはじめころまで)(鳥取)

しゃがんでいきむと、そのまま生まれた。障子の棧せきにつかまる人もいた。生むのに楽なので、ほとんどしゃがんだ形でつかまらないで産んだ。(小坂子)

布団を高く積み、おっかかって産んだ、腰をたてて少しいきむと産まれた。(勝沢)

布団におっかかって産んだ。一人目と二人目。(昭和元年生まれと三年生まれ)三人目はお産婆さんをたのみ横になり産んだ。(昭和六年生まれ)(五代)

お産婆さんがうしろからしぼりだすようにすると生まれた。(勝沢)  
寝産であった。赤坂のサンバさんからの指示があった。二〜三年

長の人は座産であった。布団をまるめておっかかった。(石関)  
親の代にはサンバさんは頼まず、布団をまるめてしていた。

(堀之下)

昭和四年の時にコタツヤグラにつかまってお産をした。(荻窪)

うつぶせのお産。大正12年の時、夜の布団を四つ折にして、それにおっかかって産んだ。(出身は上細井)(川原)

寝産だった。一人だけうつぶせだった。(男の子)。麻で頭をしばってくれた。(北代田)

寝産でして、お産婆さんがきた。(下細井)

ワラの丸太をこしらえ、枕もとにおき、布団の皮をかぶせた。おすわりをして、しがみついて産んだ。力があるとのことと、とりあげてから足をのばした。七十年くらい前まで。(田口)

昔はコタツヤグラにおっかかった。トリアゲバアサンの時はこのやり方。腰に力が入ってよいと言った。産婆になって、寝てやった。「ワラの上からもらってきた」という。(関根)

実家で出産するのが習わしだが、実家で出産が重なる場合は嫁ぎ先

で産んだ。とりあげ婆さんの助けを借りる場合はよつんばいで産んだが、産婆になつてからはあおむけで産んだ。(青柳)

お産に立ち会う人 実家の母、婚家の父母、夫、近所のおばさん(トリアゲバアサン)(鳥取)

姑、お産婆さん(昭和から)・トリアゲバアサン(大正のころ)(鎌倉のオチカバアサンという人がいた。)(嶺)

お産が楽であったので、生まれてからオツカサンが来たのみ。トリアゲジイサンという人がいた。(小坂子)

姑さま。「ダンナは入るものではない。お産が長びく」と言われた。(勝沢)

一人で産んだ。年寄りに腰をなでてもらうくらい。初産が寝産だと、お産婆さんをたのみ、だんなさんが手をもってくれた。(五代)

サンバさんが立ち合った。(石関)

サンバさんと親。(堀之下)

家の人と年寄りのオバアさんが二人。(荻窪)

つきそいの人は近所の人を頼んだ。(川原)

姑さんや本家のおばあさんがつきそった。回りについていて、はげましたり、頭をなせてくれた。生まれると、「ウブタテのメシを食べてくれない」と言った。(北代田)

姑さまや産婆さん。(下細井)

一人で産んでしまった人もいる。オバアさんが寄らないので、一人で篠の切ったものを口にくわえて、産部屋に入った。(田口)

産婆さんと母親。(関根)

お産を取り扱う人 近所の人。戦後専門家に。(鳥取)

トリアゲジイサンという人が小暮にいたらしい。(嶺)

トリアゲバアサン。(素人の器用な人)(勝沢)

オサンバさん（五代）

サンバさん。（石関）

トリアゲバアサン。（荻窪）

サンバさん。近所の上手な人に頼んだ人があり、トリアゲバアサンと言った。（三俣）

お産婆さん。荒牧のカナイさん。国道ぞいにあつた。いないと田口へ行つた。植野の大谷さんにも行つた。（川原）

トリアゲバアサンと言つた。赤城県道の辺にいた。（北代田）

狩野外科の反対側にコグレさんという人がいた。別にトリアゲバアサンもいた。（下細井）

トリアゲバアサンがいた。近所のバアサンを頼んだこともある。ノチノモノがおりにくいので、前橋の産婆を頼んだ。（田口）

お産時の夫の役割といい伝え 来た人へのお礼をする。屋敷稲荷にお礼をする。（鳥取）

お湯をわかす（嶺）

外に出されて何もしない。（じゃまあつかいされた）（小坂子）  
仕事はない。話に、白をかついで家のまわりまわつたと聞いた。

（勝沢）

障子の骨（棧）の見えるうちは生まれない。（勝沢・五代）

障子の背が見えなくなれば生まれる。（鳥取・小坂子・嶺）

天井に絵をはり、見えるうちはまだ。霧がかかるようになると生まれる。（鳥取）

特に夫の仕事はない。石白をしょつて家のまわりを走つたとの話は聞いたことがある。

障子の棧が見えるうちは生まれないと聞いた。お産は体がすつとぶほどで、生まれると体が軽くなり楽になつた。（石関）

お湯をわかつた。話に「『オツカアが大変なおもいをしてるので、オレもアセかく』と言つて重いものをしょつて歩いてまわつた」とある。（堀之下）

仕事はない。いない時に子ができる。「白をしょつて家のまわりをまわつた」話はある。（荻窪）

夫は家にはいてはいけないと言ひ、近所にやつてしまつた。（三俣）

障子の棧が見えるうちは生まれない。裾のほうが開く気がすると思はれる。夫の役割は、白をしょつて家のまわりをまわつたことが話としてこのこつてゐる。男は湯をわかすくらいでおいはられ、のちのものしまつをした。（川原）

夫は生まれる時に、仕事に行つてゐた。人数がいれば手つたわらない、少ないと手つたをいした。障子の棧が見えるうちは生まれないと言ひ。（北代田）

夫はお湯をわかすくらいが仕事、産部屋に入るものではないといわれる。「男親がいと母ちゃんがわがままを言う」ともいつた。昔から

シニボクよりチボクのほうをよろこんだ。障子のめが見えるうちは生まれないとも言ひが、人によりけりである。（下細井）

男はお産部屋には寄らない。（田口）

話として、ダンナさんが、石白をしょつて家のまわりをまわつたといふのがある。「お産はイノチのサグメだからしつかり産め」と言われた。障子の棧と畳のめが見えるうちはできないと言つた。夫は近所にはいた。六地藏のローソクをともし、もう消えるまでに生まれてくれば」と言ひと生まれる。（関根）

相手が大病のとき、自分のおなかに子があると主人は助からない。

カラツバラならいいが、子が身軽になるので夫は死ぬ。（田口）

お産の時、夫は白を背負つて、家の廻りを回つた。自分の女房が苦

しんでいるから、自分もともに苦しみを分かち合おうという意味。

(北代田)

ウブタテメシ ウブタテのごはんをすぐに煮る。来ている人が少しづつ食べる。(鳥取)

ウブタテのメシといい、夜中であっても、生まれるとすぐに炊く。サンバさんにも食べてもらって送っていった。神棚、産土<sup>ウケスナ</sup>さまにもそなえた。(嶺)

ウブタテのゴハンという。近所にくばった。クルワじゅうにくばった。四角膳で神さま、産土さまにあげた。夜中に生まれてもすぐに作った。(勝沢)

ウブタテのメシという。家中の仏さまにあげる。お七夜までは神さまにはあげられない。(小坂子)

ウブタテのゴハンという。(五代)

作り、家でたべた。神棚に灯明をあげた。(石関)

すぐに御飯を作り、来た人に一杯ふるまった。神様にそなえた。「大人数でたべたほうがよい」「いろいろしができる」と言った。(堀之下)

子ができるとすぐに炊いた。神棚にあげた。(萩窪)

子供がうまれると、すぐに一つかみのアズキをいれ「アカノゴハン」を炊いた。ウブタテのゴハンとも言う。神さま・仏さまにあげ、お膳を作り子供の分とした。サンバさん、近所の来た人にも食べてもらった。(三俣)

なし(川原)

ウブタテのゴハンといい、生まれてすぐに炊いて、家族・となりのオバアさん、産婆さんにやった。神だなにそなえ、女の時は刃物、男の時鎌を一しよにそなえた。(北代田)

ウブタテのゴハンと言い、本家・新宅に食べてもらった。神だな、

仏様にもそなえた。(下細井)

ウブタテのゴハンといい、神様にそなえた。(田口)

ウブタテのゴハンといい、神様にあげ、産婆さんにあがってもらった。(関根)

後産<sup>ムシゴ</sup>の処理 ノチノモンといい、墓にいった。場所は不定で、お線香をそなえた。(鳥取)

ノチザンといい、自分の家の墓へもっていった。寺にうめるところがあり、そこにいった。家の墓にもっていった。(小坂子)

ノチザンといい、蚕座紙につつみ、方位をみてアキのカタにいった。麻でしばった。オジイサンがした。(勝沢)

お産婆さんが処理した。方位をみて、穴を掘って、産湯もすてた。(五代)

ニザンといい墓地に埋めるところがあった。自分の家の墓のそばにうめた。(石関)

ノチノモノは墓に埋めたり、家のすみにうめた。(堀之下)

ノチノモノは墓地にいった。トボ<sup>トボ</sup>口の近所に埋めた時代もあった。(萩窪)

方角をみて屋敷内にいった。(三俣)

方位を決め、その年により決まる。そこにすてる。屋敷内にすてるが、鬼門の方角はすてるものではない、きたなくするものではないと言われる。(川原)

つつんで墓のすみにすてた。(北代田)

方角をみてうめた。畑へ。(下細井)

墓のすみのほうにうめた。(田口)

墓にいった。昔はイナいけ場があつて、そこにいった。荒牧ざかい



の沼のほうにあった。(今は群大の内) (関根)

墓地にいける。(小神明)

方位を見て屋敷うちですてた。使ったお湯もすてた。(三俣)

後産は、屋敷の南のすみが方向が良いのでそこに捨てる。捨てたあとはむしろをかぶせておいた。墓地にもつていった人もいた。(下小出)

産湯の処理 自分の家の畑のすみに、手桶にいれてもつて行った。

すてに行くのはだれでもよい。(鳥取)

庭先にすてる。産湯はお産婆さんが、一週間くらい来ていれてくれる。(嶺)

桑原のはじめに穴を掘つてうめた。天道さま(太陽)にあてるともつたいないと言ひ、棒二本かけて上にムシロ、シナガワをかけておいた。

(小坂子)

タメオケにいれた。手つだいの人がすてた。産湯はお産婆さんがいれてくれた。(勝沢)

親が用意をして、サンバさんがいれてくれた。使った湯は、コヤシのタメにいれた。オムツを洗った水も穴を掘つておいて、オボヤがあげるまでいれた。便所の裏に一尺角の穴を掘った。穴の上には蓋をした。それは、日にあてるとケガれるとかバチがあたるとか言った。親のよこれは陰ぼしをした。(石関)

夫が用意して、サンバさんが使わせた。庭で日あたらない所に穴をほり、へんなものを一週間すてるところとした。日あたるところには蓋をした。(堀之下)

夫がわかし、トリアゲバアサンがタライでいれた。使った湯は「日陰にあけてこう」と言われた。(荻窪)

のちのものすてるところですてた。次はタメにすてた。(川原)  
屋敷のすみの穴にすてた。(一週間以内の使った水と産湯)。棒をわ

たしておき、ゴザをかけておいた。陽のあたらないところ。(北代田)  
屋敷の鬼門をさけてすてた。(猫・犬にじゃまされないように)

(下細井)

方角の悪いほうにすてると丈夫になれないという。(田口)

家でタメ・オオダメにすてた。(関根)

臍の緒の処理 トリアゲバアサンが切った。神棚にあげた麻をとつておいて使用した。へソの緒をしぼり、裁縫用のハサミで切った。白紙二枚の上におき、つつんでタンスにしまった。乾燥してから神にそなえた。魔除けになる。大病の時にそなえるといひ。(鳥取)

へソよりひとつかみ半はなして切る。のこりはノチザンとすてる。のこしたところは、七〜八日もげる。かわくと紙につつんでしまつた。使い道は不明。(小坂子)

ハサミで切り、麻でしばつておく。(勝沢)

オバアサンがテイツソクに切つた。のこりは一週間でもげてとれた。はじめは麻でしばつておいた。お産婆さんと桐の箱にいれてくれる。

へソの緒は、◎お稻荷さんにあずける。(病氣の時にのませるといい。)

◎ふまれないように、御稻荷さまの裏にうめた。◎オジイさんがかたいで、人のよくふむ玄関にうめた。(勝沢)

お産婆さんが麻でしばつた。(このころ髪は麻でしばつた)。九死に一生の時にくれるといひ。ここで使った麻はとつておき、コウデ(手の痛い時)にしぼるとよい。(五代)

サンバさんが切り、もらい、嫁に行く時にもたせた。特に使わなかつた。(石関)

サンバさんが切り、命名の紙にくるみ、麻でゆわえた。嫁に行く時にもたせた。のこりは坪山の南天の根にいけた。(天が難をすくつてくれるという)(堀之下)

ヒトニギリをしてハサミで切った。切ったヘソの緒は針箱にしまっておいた。(荻窪)

サンバさんが切ってくれた。ムシがわくといい、処置してもらった。

(三俣)

両端を少し間をあけてしぼり、まん中をハサミで切った。一週間でもげた。ボールペンくらいの太さで、嫁にゆく時にもたせた。しまっておくだけ。(川原)

五〜六日でもげた。ふまれるほうがいいので、玄関の入り口にうめた。とっておいて、嫁に行く時にもたせたこともある。かわかして、半紙につつんでおいた。麻でしぼっておくと自然にとれた。(北代田) 麻でしぼり切った。神棚にあげておいた。(下細井)

しまっておいて(桐の箱)、戦地に持つてゆくと生きてかえれると言った。うめた家もある。助からない病の時に、のませると助かる。水引きでしぼってしまったてある。端をふたにぎりのこして、麻でしぼり、切る。一週間でもげた。(田口)

白い麻でしぼり、つつんである。(関根)

子どもが弱い時、せんじて飲ませると丈夫になる。(小神明)

ヘソの緒は、粗末にすると出世しないとわれているので、半紙にしまつて桐の箱に入れておく。(下小出)

新生児の呼び名。双生児の呼び名。アカッコ、アカゴ。

(嶺・小坂子・勝沢)

フタツゴ、フタゴ。(鳥取・嶺・小坂子)

アカッコ。(石関)

アカゴ。(堀之下)

アカンボ。(荻窪)

双生児はフタツゴという。(石関)

アカッコ・ナナシのベンケイと言った。双子も同じ。(川原) アカッコ(北代田・関根)

異常分娩(児) サカサッコ。(足から生まれた。ひじがつかえて難産になる。サカサゴとも言う。)(鳥取・嶺・小坂子・勝沢・五代)

メンザン。(顔から生まれた) (勝沢・五代)

ケサカケゴ。(ヘソの緒をまいてでてる) (勝沢)

ブドッコ。(赤ん坊にならず、ブドウの房のようになってる。母の

肥立ちが悪い) (勝沢)

サカサッコ。足から出た。(堀之下)

逆に出るのがサカサッコで難産である。(荻窪)

サカサッコ。臍の緒を巻いた子は弱いと言う。(川原)

ころがるとケサッコになるという。(北代田)

サカサッコ・ケサッコという呼び名のみこのころ。(下細井)

サカサッコ(足からの子)。(関根)

初めての授乳 何か町の薬局で買ったものをくれてから。(嶺)

赤い布(絹)の玉をつくり、一日くらいほっておいたあと、その玉

で乳の入っている杯の乳をしゃぶらせた。二日目くらいから乳をの

せた。(小坂子)

きれいに乳をふいてからくれた。(勝沢)

マクリをくれた。小さい袋入りで、お湯にひたしてくれた。薬局で

買った。悪水ワルミズをはらうのいい。(五代)

はじめに砂糖湯の家があり、親は苦い実母散を飲ませられた。

(小坂子)

乳首をもみ、出した。乳が少ないとミルクの配給があったが、サン

バの許可が必要だった。月にミルク八本と砂糖一貫目、栄養剤をもらっ

た。(石関)

乳首をもんだ。モチ類を食べたり、鯉コクを食べると乳がでた。ヤギの乳は強くて、ポツポツができると言った。(堀之下)

特にない。二日目の夕方ころから乳が張ってきて、すわせた。子が泣いていると、聞こえなくても乳が張ってきた。(川原)

乳の目があかないので、消毒ぐらいをした。(北代田)

チズケのオヤのとなりのオバさんに頼んで乳をくれてもらった。(まだ出ないので) もんで出るようにした。(下細井)

熱い湯でもんでくれた。初産の時は乳の道があかない。サミズミたいなのが、はじめ出る。体内の毒がそれでおきる。はじめからすずにのませた。(田口)

鯉を食べると乳が出ると言う。お湯でふいてもらった。(関根)

乳不足 米をよくといて、粉にひいて、につめて、砂糖をまぜてやった。(鳥取)

乳がでる人(乳母)からもらい乳をした。乳兄弟というものがあつた。ミルクを買うのは大変で、小暮に乳をもらいに行つた。五く六人生んでも乳が足りない人いた。ヤギを飼つてヤギの乳をくれた人もいた。(嶺)

お米をひやかして、すつて砂糖をいれて、鍋で煮てすわせた。

(小坂子)

タオルを熱くして乳をもんだ。鯉を食べると乳がでるといつた。しかし、食べすぎると「つよい」と言われた。(勝沢)

鯉をたべるとよいと言つた。(五代)

お産婆さんがもんでくれる。(川原)

食べ物で、餅類を食べるとよい。(北代田)

甘酒のんだり、鯉こくを食べると乳が出る。(関根)

乳が出ない時、まくり(赤ん坊にくわえさせる乳首の形をしたもの)

をくれた。重湯を脱脂綿にふくませて、口に入れる。

そのうちに乳が出るようになる。(小神明)

母乳がでないときは、乳をもんだり、しつぶをしたりして出した。それでも出ないときは、米をすりつぶし煮てつくつたすりゆ(え)を飲ませたり、もらい乳をする。(下小出)

母乳がですぎるともつたないので、松の根元に捨てた。(下小出)

出産後の禁忌・諺 二週間は仕事をしない。(鳥取)

着物を反対にほす。(表を南にしない)(嶺)

一週間十日(大事にされた家)は仕事をしなかつた。三日目にもう自分の着物を洗えといわれて、仕事についた例や、二十四日に出産、二十七日に蚕を掃いた例がある。お勝手にはゆけず、囲炉裏のそばにはよれなかつた。(小坂子)

着物を一週間陰干しにした。(小坂子)

三日目にお粥を作らされた。仕事をさせられると肥立ちが悪かつたが、寝ていられなかつた。(小坂子)

オシメは川で洗い、田のそばの土堤に干した。(小坂子)

出産が楽だった人の中には、お腹がせいせいして、働きたくてたまらない気持ちになつた人もいる。(五代)

オボヤキまでは気をつけた。出産後一週間は針仕事をすると目によくない、つめたい水に手をいれると産褥熱が出ると言つた。(堀之下)

オボヤキ(男十九日・女二十一日)までは仕事はなかつた。軽い仕事はした。オボヤキにはコワメシを作り、近所や見舞の家にくばつた。それまでは見舞いがきた。オボヤキまでは囲炉裏と井戸には寄つていけないと言つた。(萩窪)

出産後、ホーレン草は血をさわがす、サトイモ・トロイモはかゆくなる。と言つた。また「お産をしたら柿の下はくぐつても毒」と言つ

て、柿は冷えると言った。サバは良いがマスは「三年前の古傷をおこす」のでよくないと言った。(石関)

出産後二十一日間は神棚の下には行かず、橋もわたらないきまりがあった。また日にあたってはいけないと言ひ、下着はふだんから裏にほした。日にほす時は一〜二枚でも木の葉を置き「日陰」とした。

(三俣)

初産は一週間寝ているが、次からは早い。白米のお粥だけで、あとはない。(川原)

人によりけりで、二十一日くらいから。肥立ちによる。一週間たつと、オムツは自分で洗った。(北代田)

子が生まれて、オムツを干す時は、日陰干しにした。オテントウサマにもうしわけないといった。仕事はじめは、女二十一日、男十九日から。(下細井)

出産後二十一日は、テントウサマに顔を見せてはならない。(笠をさして出る)。神だなの下を通ってはならない。(田口)

オバキキまでは神様に行けない。二番目からは十日も寝ていると、仕事をした。ふつうはオビヤキから仕事をした。それまでは、外に出るのも笠をかぶった。(関根)

神棚の下をくぐってはいけない。お粥と梅ぼし、鯉節をまげて食べる。百日間髪を洗ってはいけない。血がのぼるから。産婆さんが一週間は来てくれる。嫁いだ時に持ってきた新しいたら桶で産湯を使った。生ぐさいから産後はお客にお茶を入れてはいけない。二十一日間はお風呂にはいってはいけない。おうどんを食べるとよくお乳が出る。お餅は強過ぎる。(日輪寺)

カナババ(赤ん坊の胎便) 黒い便で、紙につつま墓にしまった。(ノチノモノと同じ)(鳥取)

紙にくるんで便所へ(嶺)

桑原の穴にすてた。(小坂子)

タメオケにいられた。(勝沢)

安産の例 十時ころ便所に行った。(オジイさんがまだ風呂のあとおきていた)。「どこに行くのか」と聞かれ、「便所」と答えた。そのかえり、様子がおかしいので土間(電気がなくて暗かったので、指でさわつたらだいたい平らだったので)に、二枚のお腰のうち一枚をしき、まっ暗のなかで生まれた。ニザンがおりないので、そのままにしていたら、オジイサンが来て、「何をしているのだ」と聞いたので、これこれこうと説明したら、姑さんがすぐに湯わかしてくれした。その日は前橋にゆき、庭のかたづけ、ウドンブチした。風呂も入ったあとで、陣痛もなかった。子供五人とも産婆さんの世話になつていない。おつかさんとダンナさんが世話をしてくれた。(小坂子)

トイレにゆき、様子おかしいので、脇によけたら生まれた。すぐに舅シユウシユウがあわててきた。(今の人が聞いたら想像できないでしょう、今の人は神さま仏様みたいなものだ。)(小坂子)

避妊や中絶 間引きは、話に伝わるのみである。納戸の床板がとれるようにしてあり、すぐうめたとのこと。百年以上昔のこと。(嶺)

生めよ、ふやせよの時代であった。(小坂子)

戦前はなし。(石関)

医者による中絶があった。(堀之下)

桑の根をせんじてのむとくだると言つた。また鯉をたくさん食べる

とくだるとも言つた。(萩窪)

ウワサで、生まれたのを簀ササ巻にして、川に流したというのがあった。甘草の根となにかを煎じてのむと中絶になった。桑の根は、流産する癖くせをつけた。(川原)

なし。(サズカリモノ)と言った。(下細井・北代田・関根)

避妊や中絶はしてはいけない。(田口)

死産の場合 ミカン箱に置いて墓へ。土の山くらい。特にせず、名もなし。(鳥取)

そのままで式はしない。共同墓地のあいているところにいった。(嶺) 何もせず墓にうめた。(小坂子・勝沢・五代)

ウチウチでかんたんな式で墓にいった。(石関)

かんたんに坊さんよんで式をして、ミカン箱でいった。(堀之下) ある程度になつているとかんたんな式で墓へ。墓に「幻」の字がある。(萩窪)

特になし。(川原)

坊さんをたのみ、名はつけず、そつと埋めたこともある。(北代田) 例なし。(下細井)

死産だったが、泣いたので寺で名をもらった。墓にいった。妊娠五カ月は墓にいった。(田口)

墓地のはじにいった。(関根)

妊産婦が死亡した場合の供養(流れ灌頂)

特別のものはない。

(鳥取)

式はふつうと同じである。子を生みながら死んだ人や難産で死んだ時は、赤布を川におき、色あせるまで水をかける。また、二人死んだ時はワラ人形をお棺にいれる。(嶺)



四本柱をおき、赤い布をつける。ヒシヤクで水をかける。そうすると早く成仏するという。字はない。妊婦の棺に人形をいれるのは話としてはあった。

(小坂子)

二度あることは、三度あると言い、おひな様をそ

ばにいった。産みながらなくなると、細い堀に赤い布(川の中で四すみに竹の棒)をおき、ひしゃくで水をかけた。白くさめると成仏するといわれた。(話者が小学校のころ)(勝沢)

川に赤いサラシの布を四角に張り、ヒシヤクで水をかけた。白くなれば成仏したと言う。子供のころ堀之下の大胡県道下にあった。棺に人形をいれて三つにした。それから「人形はいけるものではない」と言う。(石関)

川の端に赤い布と竹のヒシヤクがあった。そうしないとかばれな

いと言う。四〇五十年前、三俣にあった。(堀之下) 川に赤い布をおき水をかけた。昭和十年ころまではあった。一年に二人死んだら棺にワラ人形や古いひな人形をいれた。「二つあるのは三つある」と言った。盆中の葬式の例はないが、仮埋葬にして、「はたかれるのでシラジをかぶしてゆけ」と言った。(萩窪)

特別のことはしなかった。(川原)

四本の棒に赤い布をつけたものを川のふちにおき、一週間くらいの間水をかけた。六十〜七十年前にあった。最近も見かけた。妊婦と赤ん坊が死んだ時は棺に人形をいれた。

(北代田)

妊婦と赤ん坊が死んだ時は、人形を棺にいれた。また流れ灌頂と言って、一週間以内に死んだ嫁さんの供養をした。(下細井)

お産で苦しんで死んだ時は、ワラの台に三本足をつけ、赤いキレをつけ、川のそばにおき、通る人に水をかけてもらった。早く白く

(田口)

川に赤いキレを四すみをつつておき、水をかけた。(関根)

川流れの死者が、胎児をもつ場合、赤い絹の布を棒に張り、往來の人が水をかけ、かわかぬようにする。水をかけると成仏すると考えた。

(荒牧)

川に赤い布をおいて、水をかけて消えると成仏する話を聞いた。

(小神明)

産毛 うしろの毛をチンケと言う。そこをのこし頭のまん中を丸くそつた。四く五cmくらいで、トリアゲバアサンがやった。頭が気持ち良くなる言い、紙につつんでとつておいた。(鳥取)

何日目にそつた。首すじに近いところの毛(チンケ)をのこす。

カゼひくと一本ぬくとおるのが早いと言つた。また、ころんだらそこをつかんでおこすとも言つた。あとで毛をどうしたかは不明。(嶺)  
お七夜でそり、とつておいた。チンケは十本くらい二cm角くらいのこし、鼻血の時にぬくとおるといわれた。(小坂子)

毛はそのままであつた。(勝沢)

一回はそるもので、お七夜にそつた。毛はすてた。(五代)

産毛はのこすものでない、お天道さまにあてるものでないと言ひ、自分でカミソリできれいにそつた。(石関)

坊主にそつた。チン毛をのこした。チン毛はぬくと鼻血が止まると言つた。そつた産毛は坪山にかけた。お天道さまにあたつてはいけな  
いと言つた。(堀之下)

ヒトヒチャたつてからそつた。チン毛をのこした。鼻血がでるとチン毛をぬけと言ふ。産毛はグミすて場にすてたらしい。(萩窪)

女は二十一日目、男は十九日目にすつた。のこす所はない。産毛をすらないともつたないとお日さまにあてられないと言つた。(三俣)

一回すつた。首のうしろのくぼつてゐる所にチン毛をのこした。鼻血が出たらチン毛を抜けばなおるといわれた。(川原)

一回すつた。オビアキもすつとすんでからで、寒い時は間をおいた。する時はチン毛をのこした。鼻血が出たらチン毛を抜くといひと言つた。(北代田)

女は二十一日目、男は十九日目にすつた。チン毛をのこした。強い虫がたかつて声を出す子は、早くにすらなかつた。(下細井)

二十一日目にはすりおとした。あと、いい毛がはえた。人の踏むところにするといひと言つて、道のはたにすてた。チン毛をのこした子もいた。イロリにおちた時に、神がひつぱつてくれる。五く六才まで伸ばした人もいた。「チンケク」とのアダナの人もいた。(田口)

一年近くそらなかつた人がいた。(関根)

新生児の命名 親がつけたり、近所であつてくれる人がいた。名は紙に書いて、神棚にはつた。(鳥取)

夫婦でなく、じいさんばあさん(夫婦には権限はない)や堅い人。嫁さんのじいさんばあさんも加えて決めた。近所に名つけ上手な人がいた。つけてもらうと丈夫といわれた。名は座敷の外來者の見やすいところにはつた。(嶺)

神社や寺であつてもらつた。いくつか作りお稲荷さまにあげ、ひいた。ひいじいさんが作つた。名は神棚のところにはつた。(小坂子)

稲荷さまに五つくらいあげ、入つてゐる一升杓から子供がひいた。五つは家で考へた。名は座敷のみえる梁に半紙に書いてはつた。(勝沢)

本を見てつけた。実相院で六く五作つてもらひ、子供にひかせた。お稲荷さまにあげ、子供にひかせた。(五代)

本をもつてゐる人に画数により作つてもらつた。名は目立つところにはつた。(石関)

親や年寄りが屋敷稲荷に二〜三考えてあげ、子がひいた。易者の所に行つたことがある。古い人の名を組んだり、先祖の名をとることがあつた。便所で生まれて「オトシ」、これ以上できないように「トメ」とつけた。名は表屋敷の玄関を入つた長押に東向きにはつたり、神棚の下にはつた。(荻窪)

親や神社でつけた。(三俣)

父さんや物知りが三つつけ、よつて、稲荷さまにあげ、子供がひいてくる。名前を柱や長押にはつた。漢字を一字もらう例がある。(川原)

家族で相談した。三本作り、ひいた。神棚の下にはつた。(北代田) 姑さまが考え、屋敷稲荷に名を升にいれておき子供にひかせた。床

の間においてひかせた例もある。決まつた名は神棚においた。(下細井)

おじいさんが三つつけ、稲荷にあげて、兄弟がひいた。名、生年月日、干支などを書いた。長男、二男にあわせた名をつけた。(田口)

家中で考え、稲荷にあげて、子にひかせた。出世した人や長生きした人の名をとつた。名付けの親がいた。「サンシャのジイサン」と言い、「サンシャ」とは、三者とも算者ともいつた。萩原禎助といひ、東大医学部の先生をした人。他に、タモンキンヤという和算・漢文の先生がいた。この人は藍沢無満の弟子で上小出の人であつた。(関根)

伊勢参りに八回行つたので、名前が伊勢八という名になつた人がいる。(端気)

子どもの名まえは戸主や神主などにつけてもらう。良い名がいくつかできたときは、紙にそれらの名を一枚ごとに書き、一つ一つよじり、くじをつくる。そのくじを稲荷様に持つていき、そこで子どもにひかせる。名が決まると半紙に書いて神棚にはつておく。これは二十一日まではつておく。もし名まえ負けて体が弱いときは、呼び名をかえるといひ。(下小出)

出産祝(お七夜の祝い・出産見舞い・新生児の初外出) 七日たつと

赤飯をたいて、トリアゲバアサンと実家の母に届けた。また、神社には夫か母がもつていつた。便所まいは、お七夜すぎすぐで、近所三軒に、オバさんがつれてゆく。特別のことはしない。(鳥取)

オヒチャという。赤飯をたくがあまり式は大きくない。実家の父母とお産婆さんをよぶ。のち、「チカラゴメ」が一斗くらい実家から届いた。お産で力がぬけるので、力つけるようにもつてきた。お便所まいは、名をつける前に三軒くらい行つた。大正のころは、橋をいやがり、途中に橋のない隣りに行つた。着物着せて行つたが、顔に字は書かなかつた。(嶺)

赤飯をたき、塩できよめをする。産婆さんと呼ぶ。三日目に便所にまいるがつれてゆくのみ。ミツカマイリという。だれがつれて行つてもよい。オサゴをおく。(小坂子)

三日目にお産婆さんがお便所につれてゆく。三軒まわるが、石橋を通ると乳が細くなるという。(勝沢)

赤飯たき、近い人をよぶ。お七夜に名をつける。ベンジョまいは、男は墨、女はおしろいつけた。三軒まわり、オサゴをもつて行つた。

「お便所かしてください」と言つた。また、「橋わたると乳がでない」とか、「石橋はよくない」と言つた。(五代)

お七夜には、兄弟、オジ、オバを招いた。赤飯を親もとにおくつた。見舞いはキレ一丈をもつてきた。赤子用の柄。八尺の家もあり、それは小さいジュパンを作つた。三日目に額に「戌の字」か、..をつけて三軒の便所まいをした。姑さまがつれてゆき、オサゴをあげた。(石関)

便所まいは額に筆のウラで男女ともに赤いホシ..をつけた。またおしろい、紅をつけた。姑さまがつれてゆき、オサゴをあげた。お七夜は内々で赤飯をたいた。男十九、女二十一日目のオボヤキまでに

お祝いが届いてくる。着物の布一丈（赤ん坊一人分の着物作れるくらい）か、お金の人もあった。（堀之下）

三日目にナベスミでホクロをつけ、三軒くらい便所まわりに行った。けがしないようにとか近所の仲間入りとか言った。オサゴをなげた。

お産見舞は反物一丈で、子供の着物用であった。おかえしは赤飯の重箱であった。（荻窪）

一週間目に便所まわりがあった。家の中の便所三カ所を回った。（屋敷がひろかった）お七夜はお稻荷さん、鎮守さまに行った。額に紅の二つの印をつけた。橋は渡らないものだった。（三俣）

お七夜に小豆のごはん食べた。たきこわめし（おこわ）で、煮た小豆をいれごはんにしたもの。ヒトヒチャといった。ごはんはウルチを使った。釜でたいた。十九・二十一日目に近所にお祝いをかえした。

お七夜までに小豆を食べると耳が遠くなると言われた。お七夜には便所まわり（セツチンまわりとも言）に三軒行つた。姑さんがつれてゆき、オサゴをおいてきた。（川原）

赤飯をふかし、神棚にあげた。お産婆さんや世話になつたおばあさんと呼んだ。三日目に便所まわりをした。隣のおばあさんがだき、まめに育つように豆を便所内にまいた。お姑さんが近い家を回つたこともある。（北代田）

三日目に便所まわりをした。近所の二〜三軒をお姑さんがつれてまわり、便所内で、きよめにオサゴをそなえた。（下細井）

一週間目のお七夜に小豆ごはんをたき、産土様ウツスナにそなえる。芳賀の五代では、一週間目に床の間に刃物と筆をあげた。そして力御飯をそなえた。三日目にお産婆さんが、近所三軒の便所をかりて、オサゴをおひねりにしてそなえた。（昭和十年くらいまで）（田口）

一週間目に、セツチンまわりと言つて、近所三軒にオサゴをもつて

行つた。おばあさんがつれていった。お産婆さんを頼んでからはなくなった。お七夜には小豆の御飯（小豆飯）をたいた。産婆さんや近い親類にたべてもらった。親元からはオムツと肌着が届いた。（関根）  
生まれた時に、鯉節二本くらいと、米三升（力米）が届き、お粥にして食べた。（田口）

お産婆さんに取りあげてもらつた。生まれるとすぐに、木刀を枕元にそなえた。また、小豆を入れたごはんをたいて、お産婆さんに食べてもらつた。（三俣）

産後、三日目にお姑さんに連れられて、向こう三軒両隣のお便所をまわつた。（下細井）

自分の家を含めて、三軒をまわる。屋敷稻荷と便所につれていく。（三俣）

産後三日目にお便所参りと、近所参りをした。お便所参りには紙に包んだ米をあげた。また、橋（石橋）を渡らないようにと言われた。女兒は二十一日目、男児は十九日目に産着を着せてお宮参りをした。一年目には誕生もちをついた。（青柳）

お便所まわりを近所五軒程にした。おばあちゃんが抱いて、米つぶをお便所にまいて回つた。（日輪寺）

三軒の便所をつれてまわつた。（小神明）  
子供が生まれて七日目、近所の便所を二〜三軒まわる。墨を鼻の頭につけた。（片貝）

お宮参り オボアキ（男十九日、女二十一日）の次の日に行つた。産婦と母で神社にゆき、オサゴをおそなえした。また、赤ん坊だいて、重箱の一つずつ、おみまいもらつた家へ行つておかえしする。（鳥取）  
産土さまにゆく。日は選んでゆく。（嶺）

十九・二十一日目に八幡様が鎮守さまにゆく。（小坂子）



お姑さんが赤ちゃんをだき、嫁さんとで神社にゆき、オサゴ、赤飯をあげる。(勝沢)

昔はしなかつた。(下細井)

七五三は、川のそばにエダマ様があり、そこにお詣りした覚えがある。(下細井)

男は十九日、女は二十一日目につれていった。お宮参りがすむと、実家に帰してもらった。お宮参りまでは、石の橋を渡つてはいけないういわれた。(三俣)

産婦の床上げと就労 七日後に床あげするが、仕事になるのは、十九・二十一日すぎ。(鳥取)

十九・二十一日が床あげで、それがおわると仕事についた。「農家の嫁は夏お産するものではない」「冬お産する嫁がいい嫁」と言われた。(嶺)

床あげがすむとすぐ仕事をした。家によると早くに仕事をした家がある。お産後に重いものを持つとナス(子宮)がさがるので、もつなといわれた。(勝沢)

オボヤキに赤飯をふかして、お産見舞いのおかえしとし、実家に行った。生活はふつうになった。赤ん坊のものも日なたにほすようになった。(石関)

仕事は徐々にはじめたが、オボヤキまではあまり仕事はしなかつた。自分で取りあげ、そのまま次の日から仕事の人もあった。(荻窪)

#### (四) 子供の成長と祝い

出産祝(オビヤ) オボヤキの祝いと言い、神社に行った。すむまでは橋をわたるなどといった。(鳥取)

オビヤキ前によそいきの着物をもらった。祝いに、赤飯にスルメつ

けてかえした。(嶺)

実家からお宮参りまでに、お宮参り用の産着二枚とオムツが届き、赤飯をかえした。(小坂子)

オビヤキのお祝いとしては、親類が、「お産見舞」として晴れ着をくれた。(勝沢)

オビヤキ(床あげ)という。十九・二十一日目で赤飯・オカシラつきにする。キレをもらうが、くれる家で半反くらい。実家からは産着を重<sup>カネ</sup>てくれた。男は袖をツツ<sup>筒袖</sup>ポリーにしてあり、女は元禄(元禄袖)であった。その日に、お産見舞のお返しに、赤飯とスルメ(五く七枚)つけてかえした。(勝沢)

実家から産着がくる。それをかけてお参りする。メリンスのかさねとじゆばん。良く育つように、下着は富士絹で上着は羽二重を使った。くれたものは、メリンス・油・ネルなどであった。(五代)

オビヤキのおいわいといい、「お産見舞」を親類がくれた。晴れ着をもらった。(嶺)

男十九日、女二十一日には赤飯をたいた。親がきた。オボヤキ前は、よその家にゆくものではないといわれた。(五代)

オボヤキはお部屋アキからきているが、妊婦が初めて部屋から出る日。男児だと十九日、女児だと二十一日で、お宮参りも一緒にした。お祝のお返しには、赤飯・魚・するめ等をした。皆さんにつかわれるような人になれと、よくつかわれるものを返



お宮参り (川原町)

した。(日輪寺)

実家より産着をもらった。(男女のはじめての子のみ)その産着をかけて地元の稲荷様に行った。(石関)

オボヤキの日にお宮まいりをした。姑さんと実家の親と本人で行った。里からの着物をかけた。産泰様か村の神社・稲荷様であった。その後実家に行った。(実家からは生まれるとすぐに、オムツ・肌着、力米(三升)が届いた。)(堀之下)

オボアキと言ひ、内輪で赤飯と煮しめでいわつた。おじいさん、おばあさんと呼んで一杯飲んでもらった。近所の人は「お茶呼び」をした。まめに育つようにいりまめをおひねりをつつんでくばつた。実家よりは着物が届いた。大袖のお宮まいりに使う紋付きである。他に産着が近所や親せきから届いた。一丈くらいで、近所は人絹やメリンス、親せきは羽二重や富士絹で、たくさんたまつた。おかえしは赤飯にスルメ五枚と酒の四合一本であった(実家へ)。他のおかえしは重箱に赤飯を一つずつで、今はタオルになった。オボアキまでは家にいるべきと言われ、外に出る時は菅笠をかぶつて出た。オボアキの十九・二十一日目にはお宮参りをしてオサゴをもつて行つた。姑さんと夫がつれていつた。重箱に赤飯をいれてきて、近所の子供にくれた。(川原)

赤飯をたいて、鯛かゴマメをつけた(オカシラツキ)。実家からは産着と反物が一丈く半反くらい届いた。おかえしは、ゴマ塩の赤飯に南天の葉をおいたものをかえした。お宮参りは、まだ嫁さんはけがれてゐるとのことだ。姑さんが行つた。(下細井)

二十一日目に産土参りと鎮守さまに來た。おばあさんがつれて行つた。橋の渡りぞめは聞いたことがある。(田口)

十九日と二十一日目ウブヤキ(オボヤキ)と言つた。赤飯をたき、魚を焼き、煮しめをこしらえた。嫁の実家の親がきた。紋の入つた産

着をもつてきた。おばあさんがお宮参りにつれてゆき、嫁さんは行かなかつた。ウブヤキには赤飯をごちそうになり、子供をだききた

(アカダキという)。お祝いはオボアキの前にした。オボヤキがあけるのですぐにしようと言つた。おかえしは、赤飯にスルメ五枚と鰹節一對をつけ、南天の葉をつけてくばつた。かえすものは、おつつみにより差がついた。(関根)

オビヤキには姑さんが赤ん坊をつれて、産着を着せて神社にお参りをした。嫁さんはお宮にはオビヤキがおわるまで行けなかつた。お産みたいもらつた家に、赤飯のお重とスルメ五枚をかえした。お産見舞いには、実家から産着、他よりサラシの半反など。メリンスの一丈は良いほうであつた。(北代田)

出産後、男は十九日、女は二十一日たつてから赤城神社にお参りに行く。このとき赤飯をふかして持つて行き、そなえてくる。このとき姑・婿・子がそろつて行く。(下小出)

子どもが生まれたお祝いで、男には破魔弓、女には、羽子板をもつてきた。(小神明)

産婦の里帰り 二泊する。夫が送つてゆく。(鳥取)

実家に行つていて、帰るのがオビヤキの日。婚家より実家へ赤飯とスルメ届けた。夫が送つてゆき、二〜三泊した。(嶺)

お宮参りのあと実家に行つた。ダンナか姑が送つてゆく。一〜二泊するが、家による。(小坂子)

オビヤキの日にお姑さんが送つてゆく。赤飯とスルメをもつてゆき、二晩くらいとまる。(勝沢)

オビヤキの日にゆく。二晩くらいとまる。自分で荷物をもつて行つた。赤飯をもつて行つた。実家からは、子供が生まれると、力米・鰹節・カンピョウ・麩が届いた。(五代)

オボヤキの日に二日くらい泊った。赤ん坊をしょい、赤飯とオムツを持って行った。姑さんが送ることもあった。(石関)

夫が送って行った。一〜二泊した。赤飯を持って行った。(堀之下)  
オボヤキの日にダンナが送った。赤飯をもってゆき、二晩くらいとまった。(荻窪)

オボヤキをすませて、その日か、その次のいい日(大安)に夫が送って行った。三晩くらいして帰る。初産の時は実家に一カ月くらい帰っていた。二人目からは婚家で産む。(川原)

だんなさんが送ってくれた。二晩くらいとまった。(北代田)

オボヤキがおわってから行った。送ってくれる人はいろいろ。一〜二

晩。産むのは初めの時は実家だが、そうでない例もある。(下細井)

オボヤキがすんでから一〜二カ月。初子はほとんど実家へ。一〜二カ月は行っている。(関根)

拾い親 なし(鳥取)

親のどちらかが厄年やくどしつ子の時にする。近所の人に道でひろつてもらった。(嶺)

弱い子。三本辻にすてて、近所の人にひろつてもらう。(小坂子)

話し合いをしておき、「キヨッパシ」(俵わたの蓋)の上におき、三本辻におさめ、ひろつてもらった。(勝沢)

生まれてから十カ月目に、歯が一本きりはえないと、その歯を「トウバ」と言い、その子を近所の人にひろつてもらった。やく年の子もヤクドシッコといい、同じく家のそばの三本辻でひろつてもらった。

(五代)

子供の歯が一本はえて、二本目がなかなか出なかつたり、子供が容易に育たない時に三本辻にすてた。(石関)

歯が一本生えた時、オニッコと言い、チョッパシの上へのせ、七色

菓子のをせ、三本辻にすてた。それを近所のオバさんにひろつてもらった。(堀之下)

体が弱かったので、三本辻にすててひろつてもらった。その時にそのお礼をする程度である。(荻窪)

厄年やくどしつ子(父二十五才か母が三十三才の子)は三本辻にすてる。拾う人を決めておいてすてた。生まれてすぐにすてた。(川原)

厄年やくどしつ子はすててひろつてもらう。(北代田)

女の子の中の男子なので、丈夫に育つようにすてられた。辻でみんなに見てもらい、赤飯を食べてもらった。近所のオバさんにももらった。(下細井)

三十三才の子で、ヤクドシッコと言い、三本辻にすて、ひろつてもらった。「すてたのでよろしく」「もらうていきます」「よろしくおねがいします」と言い、ひろつてもらい家につれて行った。(田口)

厄年やくどしつ子は三本辻にすててひろつてもらう。(関根)

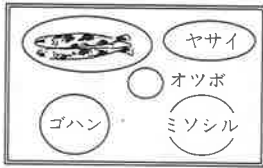
出生後十カ月で歯がはえてくる子をトツキトウバといい、この子をキヨッパシの上へのせ三本辻に捨てる。捨てた子を拾ってくれた人を拾い親という。(下小出)

オニッコ(歯がはえて生まれた子) なし。(鳥取)

オニッコという。すてたことはない。(嶺)

オニッコという。歯の生え方による。(小坂子)  
話に聞いただけ。オニッコという。すてるのはない。(勝沢)

食カツい初めの祝い 婚家の母がそろえた。百十日目。鯉カマツ節に味噌をませたものに、御飯まぜてくれた。婚家の母がしてくれた。(鳥取)  
オクイヅメといい、百日目にした。歯がはえて



からした。オツボにはマメに育つように豆のにたものがあつた。茶碗は自分の家のもの。食べさせる人は決まっていけないが、母かシュートがした。(嶺)

百日と十日でした。道具は、実家でみんな買つてくれた。料理はあまりたいしたことはない。口に入れても食べなかつた。(小坂子)

百日日を食べい初めという。ウドンを食べると長生きすると言われた。昔は、その家でお碗を買い、箸で食べさせるまねをした。実家からくる家もある。(勝沢)

百日日にした。お膳・茶碗は親もとで買った。昔は茶碗一つもらえば上等であつた。(五代)

百日日目。家だけでした。口に一粒でもいれるとよかつた。道具は家族でそろえた。(石関)

百日日目。道具は実家の親が用意した。家族でそろつて行ない、一口いれた。(堀之下)

百日日。その家のお膳でした。箸、茶碗は買った。近い一番年よりの人が食べさせるまねをした。(荻窪)

百日日目。箸・茶碗・お膳などはその家のおばあさんが買った。食べさせるまねをするだけ。ごはん、煮しめ、魚(鮎・鰯など)などが出た。(川原)

百日日目。茶碗は親かおばあさんが買った。ごはんを食べさせるまねだけ。(北代田)

クイズメといい、百日日目にした。茶碗を買い、男親がごはんいれるまねをした。(下細井)

百日日目。お膳を用意した。おばあさんが口の中にいれるまねをした。お膳のはじめに石をおいておく。(田口)

百日日。(百日のクイズメというが、十日むこうになっている)膳・

碗を一揃い買った。箱膳を作つた。一口でも口にいれるようにした。(関根)

出産後百日日後にする。このときは一人前のお膳を用意する。(下小出)

生児へのお歳暮 実家・嫁さんの兄弟から掛軸がきた。金太郎の絵などかいてあつた。正月にかざつた。おかえしはなし。(鳥取)

足袋や掛軸が届き、正月にかざつた。男は清正や初日の出。女は神宮皇后の絵であつた。おかえしはなしで、十四日のオカザリカエ(カザリカエ)にしまつた。(嶺)

キレや金もあつたが、掛軸が多かつた。男は、鎧、冑の絵で、女は羽子板の絵であつた。二十日正月までかざつた。(小坂子)

掛軸をもらつた。女はまりつきの絵で、今は羽子板の絵である。暮から正月にかけた。十四日のカザリカエまでかけた。お産見舞をしてくれた家は全てくれた。(勝沢)

掛軸がきた。男は鍾馗さまや武士。女は高砂やお引き摺りの絵で、正月にかけた。(五代)

掛軸(今は羽子板)。男は虎に清正の絵で、女は藤娘などであつた。一月十四日くらいまで家の中にかけておいた。(石関)

掛軸。男は清正で、女は墨絵であつた。今は羽子板になっている。シメ正月の二十日までかざつておいた。(堀之下)

掛軸が届いた。男は武者絵が多く、清正や金太郎の絵であつた。女は藤娘の絵などで、たまに羽子板があつた。正月中かざつてあつた。戦後もいくらかあつた。(荻窪)

男には、おじいさんなどから破魔弓が届け、女には羽子板が届いた。形だけはしている。近所の人から掛け軸が届いた。おかえしなしで小正月までかけてあつた。一緒に書き初めもかけておいた。(川原)

男には清正や鍾馗さまの掛け軸で、女の子には羽子板が届いた。親戚・近所からもらった。正月の十五日までかけておいた。(北代田)

女の子には羽子板、男の子には掛け軸が届いた。絵は一の谷の合戦や金太郎の絵で、かけきらないほどであった。暮れから正月いっぱいかけた。かけておくと「アレ、ここんちは初節句かい」と言われた。二〜三年はかけたが、安いので一〜二年でこわれた。(下細井)

十二月に、女の子には羽子板、男の子には掛け軸や弓矢をおくった。男女の人形の絵など書いてあり、正月いっぱいかけた。(田口)

男の子には破魔弓や掛け軸で、女の子には羽子板が届いた。掛け軸には武者絵が書いてあった。暮れから正月にかけてかけた。近い親戚から届いた。(関根)

女の子は羽子板、男の子は破魔弓をもらった。(三俣)

初節句 桃の節句は四月三日にやり、お雛さまをもらい、赤白の餅をおかえしにした。五月五日の祝いは、のぼりをもらい、柏餅をかえした。(鳥取)

催促餅はなかった。三月三日は実家と兄弟からお雛さまが届いた。小さい座り雛がたくさんで、共同して大きいものを買うのは最近である。五月五日には、武者人形と轆（ろく）をもらった。絵と紋があり、上に婚家の紋、下に実家の紋をいれた。初子が男のときは、吹き流しをくれた。鯉のぼりは、大正十年ころよりはじまった。三月三日のおかえしは、紅白の餅を節句がえしにくばった。五月五日は、おかえしに柏餅を作った。アンコと米の粉で作った。柏葉を赤城山にとりに行った人もいた。アンピンでくばったこともあった。(嶺)

三月三日は、お雛さまが、親戚、実家、隣組から届いた。実家は内裏様で、他は上下の座り雛であった。人形だけの箱なしで、オカッパ、下は三角形であった。箱入りは昭和から。おかえしは、紅白の餅をか

えした。五月五日は、実家から吹きながしや幟（しほ）がきた。幟にはみんな「乳輪（ちゅうりん）」を二〇つけた。「ハタチ」ともいう。二五もあると大変であった。また、竹の「クルリ」をつけた。おかえしは柏餅を家で作りかえした。(小坂子)

三月の節句には内裏さまをもらい、桜餅をかえした。五月の節句は幟か馬簾（ばれん）を二本一組でもらった。「乳」をつけるのが大変であった。おかえしに柏餅を作った。(勝沢)

三月三日にはお雛さまをもらった。五月五日は、幟か馬簾をもらった。サラシで「乳」をつけるのは大変であった。「乳はその家でつけるもの」といわれた。(五代)

三月。実家から内裏さまが届いた。紅白のアンピンの餅を作ってくばった。おいわいをもらった家に一重箱(三十個)。三升ついた。五月。実家より吹き流し、のぼりが届いた。みんな乳をつけた。柏の葉を買い、柏餅を作った。(石関)

三月。実家・親戚から人形が届いた。紅白の餅を重箱に一つかえした。五月。鯉のぼりか、鍾馗さま・神宮皇后の絵の旗が届いた。紋を二つつけた。おかえしには紅白の柏餅を重箱に一つかえした。(堀之下)

桃の節句。オヒナさまが嫁の里からきた。おかえしには紅白の餅をくぼる。親元へ菱餅をくばった。端午の節句。吹きながし(昭和二年生れの人が一番早い)。のぼり旗は鍾馗の武者絵のもので、粋があり、紋が入っている。おかえしには柏餅と鱈の干物をつけた。(荻窪)

桃の節句―実家よりおひな様が届く。端午の節句―吹き流しが届いた。(両方の家紋をつけた) おかえしに餅をくばった。特に祝いはない。餅をつくのは両親そろっている家の息子に頼んだ。その家にいれば二丁ぎねでついた。(川原)

催促餅はなかった。桃の節句―実家からおひなさまが届いた。オビヤキの時に祝いする家にはおかしに紅白の餅をつけた。端午の節句―柏餅をくばった。干鰯をつけた。鯉のぼりをもらった。

(北代田)

桃の節句―実家から内裏さまが届いた。おかえしはふつうの餅。菱餅は結婚後のはじめての里がえりにもつてかえった。端午の節句―家の中で祝いをした。男の子のいわいで、柏餅をくばった。(下細井)

桃の節句―実家から内裏さまが届いた。(女の子の初子の時) 紅白の餅をつき、何かつけてかえした。端午の節句―鯉のぼりが届いた。長男には馬簾がじいさんばあさんから(六十年くらい前)届いた。武者のぼりもあつた。のぼりには鍾馗さまや清正があり、近所の人がくれた。乳をつけるのが大変だった。おかえしに柏餅をつけた。(田口)

桃の節句―実家から内裏さまの一对が届いた。一般からおひなさまの小さいもの(すわりびな)が届いた。アンピンモチか紅白の餅をかえた。端午の節句―鯉のぼりと吹き流しが親元から届いた。親類からのぼりが届いた。弁慶などがかいてあつた。柏餅をくばった。その昔は餅であつた。(関根)

誕生祝い(誕生餅) なし。(鳥取)

ふつうの大福を作り、しよわせた。一升餅しよえれば丈夫。(一升餅をアンピンにまるめたもの)。あとでわけた。重箱に一つ実家に届けた。近親にもくばった。(嶺)

餅をついた。誕生餅はアンピン餅をしよわせることで、重箱に五つ入れた。なかなか立たなかつた。昔は仕事のじやまになるので、手足は動かさないようにした。手も袖に出さず、胸であわせておいた。祝いにはあまり人は呼ばない。嫁の家くらい。あまりやりとりもなかつた。初子の時くらいで、二〜三番目ではしなかつた。今の子供は神様

仏様の扱いである。(小坂子)

誕生餅はアン入りで、甘くみられないように塩アンのももあつた。すぐ立てるように、誕生がえしに履き物をくれた。餅はつんでしよわせたが、親が餅をもつてやつてやつとたてるくらい。(勝沢)

餅をついた。両隣と実家にやつた。実家からは靴もらつた。餅はたとえ三つでもしよわせてあるかせた。(五代)

祝いはあまりなかつた。餅はアンピンを五〜十個しよわせた。十五個しよ子もいた。嫁の家にはモチを送つた。(石関)

家族でお祝いをした。嫁の実家でも来た。餅をついてしよわせ、わざとひつくりかえした。(堀之下)

誕生餅を作つた。小さい餅にしてしよわせた。「つぶれるまでしよわせろ」と言う。(荻窪)

餅をついてお重に五〜十くらい入れてしよわせた。一年三カ月くらいまではあるけなかつた。(三俣)

誕生餅(塩アン入り)を作つた。甘くみられないように塩味にした。おばあさんからは靴がおかしにきた。(川原)

家により行なつた。誕生餅を作り親元にもつて行つた。近所にもくばつた。あまり多くはない。総領っ子の時は、重箱に一つ入れてしよわせて歩かせたり、風呂敷にくるんでしよわせた。(北代田)

餅をついて、しよわせた。(下細井)

餅をついて、箕にいれてしよわせた。重箱に七コ餅をいれ、あるかせた。誕生餅は、産婆さん、おばあさん、近所の家にくばつた。おかえしは、おばあさんより履物がきた。お金でもらつたこともある。

(田口)

塩アンの誕生餅を作つた。一つかみ塩をいれた。近い人には四〜五个アンピン餅をくばつた。早生の子にはしよわせた。一升餅をしよえ

る子はえらかった。(アンピンで二十個以上)。晩生の子が昔は多く、歩けなかった。(関根)

餅をつけて食べるくらいで、あまりやらなかった。節句は、長男、長女だけはやった。(小神明)

子供が一歳のお誕生の時に、丸い一升餅をしょわせる。(小神明)  
餅一升を二つに分け、一つを赤く、もう一つを白にした。二つ重ね。まず一つをしょわせ、大丈夫なら二つにした。一升をしようと、ふつうはフラフラして歩けなかった。(三俣)

初めての誕生日には、誕生餅を重箱に入れて、それを背負わせる。

(下小出)

子守りと子守唄 「ねんねんころりよおころりよ」と唄った。モリッコはおばあさんが多く、おじいさんもした。サラシの六尺帯でよかった。(鳥取)

子守りは長男ならオジさんの下の人をした。やとわれて、十才の子がおぶって学校に行ったことがある。待遇は良くない。座敷にはあがれなかった。口べらしの形で子守りをした。広い帯だけでよかった。

「ネンネンヨイコダ」と唄った。(嶺)

年寄か、子供が七才になるとしよさせた。小三くらいでは毎日しよって学校へ行った。モリッコオビでしよった。冬は上にハンテンを着た。ネンネコハンテンはよそいき。モリッコバンテンはスツポのそでになつており、大きく作つてあつた。子守り専門ではないし、仕事しながらしよっていたので、仕事が大変で唄はなかつた。農繁期には、クラスで十人はしよっていた。小三以上では、米一つかみ、畔の草一つかみでも刈れといわれ、学校にゆけず仕事させられた。(小坂子)

木綿の紐でしよっていた。一本帯とか、ユツケオビ、オブイオビとあった。上の兄弟がしよつたこともあり、学校にそのままゆくこともあつ

た。(勝沢)

年寄りが子守りした。箆に座布団をしき、いれた。唄はない。(五代)  
「ヒボ」で姑さまがしよった。サラシの並幅のもので一丈使う。

(石関)

モリッコオビでオバアさんが子守りをした。広幅の一丈二尺くらいのもので使った。(堀之下)

モリッコオビにネンネコバンテンで子守りをした。モリッコバアさんが子守りをしたがオジイサンの例もあつた。子供が学校から帰ると子供が子守りをした。田植えや稲刈りの時には学校にしよつて行く子もいた。(萩窪)

オブイヒモにネンネコバンテンで子守りをした。(三俣)

帯(特に名なし)でしよった。しよるのは兄弟か近所の子供かおばあさんだった。特に唄はなかつた。(川原)

一丈のオブイオビで背負つた。シンをいれた。えんじの綿の帯を使い、おばあさんか次に大きい子供が子守りした。唄は、「ネンネンコロリヨ」の唄だった。(北代田)

未っ子はネコのシツポと言ひ、唄のしめくりは、「——ネコのシツポほどなおかわいひ」といった。負うのはオブイオビ(木綿の一反)。おばあさんが多く(おじいさんも)、長兄、長姉もした。(下細井)

ユッコオビを使つた。背にユツけるからでシンをいれて作つた。今はオブイオビを使う。オバアサンが子守りすることが多く、モリッコバアサンと言われた。別に子守りには、イジメという箆があつた。ワラで作り、和紙をはつてあつた。座布団がしいてあり、そばでゆすつて子守りをした。(田口)

オブイオビと言つた。柑のものや、天竺の広幅のものを使つた。オブイオビは、丸いもので直径一寸くらい、オバアサンが子守りをした。

(関根)

おばあちゃんが子供の面倒を見た。(下細井)

七・五・三の祝い なし(鳥取・嶺・小坂子・勝沢)

七才でオビトキいわいをした。(小坂子)

なし。二十年くらい前からはじまった。(石関)

上の二人くらいにした。着物を作り祝いをした。(堀之下)

やる家、しない家があった。やる家も昭和十年に入ってから。オビ

トキも同じであるが例はあまりなかった。

昔はしなかった。(川原・北代田・下細井・田口)

七五三をしたが、しない家が多かった。松竹梅の着物を着た。(関根)

一家で、七・五・三がそろうとめでたすぎるので、裏目がでないよ

うにやった。(川原)

昔はなかった。(小神明)

幼少年期成育過程の習俗、習慣 なし。(鳥取)

四才で新田町の反町薬師にゆく、太田市の呑竜<sup>ダリネウ</sup>さままで七ツ坊主にす

る。学校のころにはのぼす。(嶺)

地藏さまに賽銭<sup>サイゼン</sup>あげる。(小坂子)

呑竜さまにゆき、四才まで体の弱い子は坊主にする。(勝沢)

四才で反町薬師さまにゆく。七才で八幡さまにゆく。(五代)

弱い子は呑竜さままで七ツ坊主にした。また弱い子には三十三軒よせ

で布をあつめ着物を作った。反町薬師や前橋市百軒町の(現在の朝日

町)高岑院におまいをした。(石関)

呑龍さままで五ツ坊主にして願をかけた。話で、三十三軒の着物を布

をそろえて着せた例があった。大人でも同様にしてチャンチャンを

作った。(堀之下)

四才で呑龍さまや反町薬師に行った。着物を持って行きおがんでも

らうとよい。(荻窪)

三才になると太田の呑竜様に行った。話に体が弱い時にした、三十

三軒よせがある。(川原)

半年目くらいに産泰に行った。旧の四つの四月に金山の呑竜様に

行った。頭をすった子があつた。反町が遠いので、百軒町の高岑院に

旧正月の四日に四才になると行った。(北代田)

青柳の雀さまや高尾山に行った。(下細井)

呑竜坊主があつた。七才まで毛をのばさなかった。おまいをして

のばした。女の子で、育たなかつたので、箕<sup>ハシ</sup>の中に入れて三本辻です

て、近所のオバさんがひろつたことがあつた。その子が学校にあがる

まで、正月に餅をつくつと、水引きかけてお礼に行った。女の子にも呑

竜坊主があつた。弱い子には三十三軒から小キレもらつて着せるとよ

いといつた。三十三軒着物という。広口着物である。「ナベ」という名

をつけると丈夫に育つと言う。生まれてすぐ新しい鍋をうちやぶり子

をそこをくぐらせるとよいという。トラ、クマなどきつい名は丈夫に

なる。(田口)

七ツぼうずにして願をかけた。(呑竜様に)三十三軒よせのキレをつ

ぎあわせて弱い子に着せた。(関根)

## 二 厄年・年祝儀礼

### (一) 厄年・厄除けと呪法

幼少年期の厄年と厄除け 前橋市百軒町の厄除け薬師に二月四日に

行った。祈禱料おさめた。虫封じになる。四才の男女が行つた。(鳥取)

日赤そばの高岑院に四才の厄除けで行つた。(嶺)

数え四才で、前橋百軒町の厄除け薬師に行った。一月四日に行つた。



四月十八日の産泰の祭りは子供をつれて行った。レクレーションになる。あるいて行った。昔は一里二里はあるいた。大胡でマンジュウ買うなどと言つては子をおかした。(小坂子)

四才で百軒町の薬師さまに行った。(勝沢)

四才の厄除けに反町薬師や高岑院に行った。夜泣きの子は太田の呑竜さまに行った。夜泣きや弱い子は桐生のヒジリ地蔵に行った。(石関)

四才で反町の薬師に行った。(堀之下)

かぞえ四才に反町薬師に行った。旧の正月四日。もしくは、朝日町の高岑院。(川原)

百軒町の高岑院に行った。(虫除けもした。)太田の呑竜さまに行った。

(下細井)

四才の子は前橋の高岑院に行った。お腹をこわさなかつたり、いたいのを封じる。四才で行くが、旗をもらい、おがんでもらつた。(田口)

反町の薬師様に行った。(関根)

病氣に対する呪法 夜泣きは、本の呪文となえてもらい、神棚に水をあげておがむと次の日にはなおつた。(鳥取)

虫封じは大胡の長善寺に行った。カンの虫は鶏の絵かいて、さかさなにさげた。ホウソウがおわつたおいわいに、卯木で台を作り、赤い紙

につるし、上に赤飯をおいて観音さまにもつて行った。日射病を軽くするには、敷居をまたぎ、菅笠をかぶり水をかけた。足の裏にアカザを塩でもんですりこんだ。ハシカは青柳の雀神社にゆく。(嶺)

ホウソウは卯木の板で台つくり(十五cm四方)、七色菓子をおいた。

六道にあげたり、百庚申にあげた(近くなので)。西の方の人は八幡さまにあげた。荻窪で、荒神さまで、さげると虫ふうじになるものをくられた。あつけにあたると、玄関の敷居をまたぎ、菅笠をかぶり水をかけた。

(小坂子)

夜なきは、雄鶏の絵を書き、流しの下にさかさにはつた。カンの虫は、親が大豆をかねで、生ぐさければそうだし、でなければなおつた。あつけは、菅笠をかぶせ、ひしゃくで三杯水をかけ、その水を茶碗にうけてのむといい。おまじないの言葉を言った。(勝沢)

夜泣きは、鶏をさかさに書いて、流しの下におく。大胡神社の下の夜なき石におまいりにゆく。カンの虫は救命丸。ハシカがなおりかけると、卯木で神つくり、天井にかざる。なおると川にながす。ホウソウ神には御飯をあげた。(五代)

虫封じ—太田の呑竜さま・堤のホウソウさま。

夜泣き—おがみ屋さんに四方にお札のはりものをしてもらい一週間水をあげた。

ハシカ—竜蔵寺の雀さまにおまいりすると軽くすむ。

ホウソウ—特になし。

カクラン—玄関をまたぎ、菅笠をかぶり上から水をかけた。(石関)

夜泣き—大胡城の夜泣き石や桐生のお地蔵さまに行った。

カンの虫—桐生のお地蔵さまや、四才で反町の薬師さまにカンの虫封じに行った。

ハシカ—特になし。

ホウソウ—ホウソウ神を作つた。紙をおき菓子・金をおいた。

カクラン—アツケにあたるといい、入口で菅笠をかぶり、ヒシヤクで水を三つかけるといいと言う。(堀之下)

夜泣き—近戸神社の入口の石におまいりをした。

カンの虫—神をおがむ人におがんでもらう。

ホウソウ—ホウソウ神をまつた。卯木をのみ、三角のキレをたて、オコワをそなえた。石尊さまにも行った。

カクラン—菅笠をかぶり、トボ口をまたぎ、井戸水をかけ、むる(濡

る」となつた。

カゼー正月二十日にカザリ棚の下で東向きにすわり、頭にシラジをかぶり、モグサを焼く。(荻窪)

ホオズキをなめさせると虫封じになる。(荻窪)

夜泣き↓夜泣き防止の石塔があつた(今は不明)。七色菓子をあげた。

線香一輪に豆腐をあげた。

ハシカ↓青柳の雀様にゆく。

ホウソウ神↓神社に、棧俵ツツバに赤い旗をつけ、まん中にキヨツパシをつけたものをあげた。

日射病↓霍乱コレラとも言い、暑気アツケにあつたもの。雨だれのところに立ち、菅笠をかけ、ボロを着て上から水をかけると効めがあつた。ボロ笠をかけたこともある。(川原)

ハシカ↓よけるには、キヨツパシ(俵の蓋)に旗をたて、ひもでつり、道端におく。

ホウソウ↓卯木の木を箸の長さに切り、麻でしばる。四隅をつり、色紙で御幣を作りさした。

夜泣き↓駒形の夜泣き地蔵の赤いおかけをかけると良いと言つた。

あとで新しいおかけをかえた。半紙に雄鶏をさかさに書きさかさはつた。

カンの虫↓生の大豆をかませて、生ぐさいと虫がいるとみわけた。

(北代田)

夜泣き↓流しのゴミの出口に、鶏をさかさに書いてはつた。

また、米野の夜泣き地蔵から赤いオカケをかりてきた。

虫歯↓歯の絵を書き、痛い歯に印をつけておがんだ。

カンの虫↓目の玉の白目が青い子にはいる。関根の金剛寺コングに前夜の肌着をもつてゆき、おがんでもらう。そして、それを水引きにかけて

もつてきたものを着せた。青柳の雀さまに行く。みけんの渦巻のところに、おがんでからお灸をすえる。それを、時沢におばあさんでする人がいた。

あつけ↓トボ口ツチに菅笠をかぶり水をかぶる。「雪の下」を塩でもみ、足の下にはると暑気の熱がさがる。蓼シロとキュウリの葉でもよい。

ハシカ↓特になし。

ホウソウ神↓ホウソウ棚をあげる。三本辻に、卯木の木で二〇cmくらいのもの。キヨツパシに灰を山にして三本辻におく。六三よけという。(田口)

ハシカ↓四月二十五日に雀さまにおまいりする。

夜泣き↓米野のお地藏様のヨダレかけをかけるとよい。カマドに鶏の絵をさかさに書いてはる。

カンの虫↓青スジのつく子は虫が強いといった。

ホウソウ神↓雀さまでした。ワラをしばり、台を作り、赤い色紙つけ赤飯あげた。

アツケ↓菅笠かぶり、上よりひしゃくで水をかける。アツケにかかっていると水がむる。その水をのむとなおる。(関根)

生涯の厄年と厄除け 男四十二歳、女十九歳。水沢観音に行つた。

(鳥取)

男四歳・二十五歳・四十二歳。女四歳・十九歳・三十三歳。川崎大師に行く。同じ年で浪花節をした。寄付があつた。嶺から嫁もらつた人は「ハナをくれる」と言い、寄付をしてくれた人もいる。(嶺)

男二十五歳・四十二歳・女十九歳・三十三歳。四十二歳で浪花節を五人くらい頼んでやつた。寺や蚕室ササでやつた。ほどこしをすると良いので。最近はおまいりにゆく。(小坂子)

男二十五歳・四十二歳、女十九歳・三十三歳。貴船キフネさまや、竜蔵寺

の大師さまに行った。男は浪花節大会した。伊勢崎からセミプロに来てもらった。(勝沢)

男二十五歳・四十二歳、女十九歳・三十三歳。浪花節を頼んだ。(五代)

男は二十五・四十二、女は三十三(数え)で、神様に身につけたものをもつて行った。(石関)

女は十九・三十三、男は二十五・四十二歳である。川崎大師・高尾山・成田山に行った。浪花節をひらいたり、義太夫をひらいたりした。

(堀之下)

男は二十五・四十二、女は十九・三十三である。お参りには行ったり行かなかつたり。女は三十三歳の時に鱗ウナギの文様の帯を買ってもらった。お参りは養林寺(大胡)や青柳大師、香集院に行った。厄おとしに浪花節を呼んだことがある。昭和十二〜三年ころまでした。同じ厄の人が集まり寄付をあつめて開いた。寄付金の額は十倍に書いてはつた。(荻窪)

青柳の竜蔵寺に行く。または正月に浪花節を頼む。厄男が「はな」をいれた。厄年の男が集まって主催した。(川原)

男は二十五・四十二、女は十九・三十三。竜蔵寺で大護摩ゴマをたいてもらった。男の二十五歳の厄年の人が主催して浪花節をした。(北代田)

村の青年会で、浪花節の達造を呼んだ。竜蔵寺で節分の年取りの護摩をたいてもらう。(下細井)

浪花節・義太夫をした。(田口)

浪曲をした。(主催する)(小坂子)

浪花節をみせて厄おとしをした。(五代)

初潮 特にいわない。(鳥取)

十四〜十五歳で昔はおそかった。内緒であった。(嶺)

十四〜十五歳。祝いはなし。(小坂子)

学校卒業から十六〜十七歳ころ。はずかしいほうであった。(勝沢)

十五〜十六歳くらいで、むかしはかくした。(石関・堀之下・荻窪)

中二くらいでは早いほう。かくした。(川原)

十五歳くらい。祝いはなし。(下細井)

近親者でお祝いした。(三俣)

一人前の条件 小学校卒業で仕事のでつたいをさせられた。女は織物、ワラ仕事させられた。一人前の条件は特にならない。(鳥取)

男は半俵かつげること。畔ツツ一反ぬれる。女はウドンブチができること。(嶺)

親からみると子供はいても子供。条件はない。兵隊検査になると一人前で、酒・タバコ可になった。(小坂子)

男は六十kgの米俵かつげること。(勝沢)

兵隊検査が成人式がわりになった。(五代)

二十すぎくらいで仕事の量が一人前できるようになる。(石関)

女は針仕事、機織り、田植えができること。十七〜十八歳くらい。男は、畑のうなえること、桑畑うない、読み書きのできること。(堀之下)

数え十七歳で若連ワカヰに入ると一人前である。米俵もそのころにはかつげた。それまでは半人ハジメであった。(荻窪)

(女性) 学校をよすと碓氷ウヰ社に糸引きに行った。(川原町出身)。十

二月〜四月は裁縫をした。あとは農作業をした。(南橋出身)。(男性)

兵隊検査がおわると一人前であった。帰りに一人前になったと女郎屋に行つた。昔、おじいさんのころは力石があつた。一升枡の上で俵がかつげると一人前であった。(川原)

十八歳で村人足ムラヒツとして区の仕事にでた。十五〜十六歳は一人前でない。徴兵検査は二十歳であった。神社にあつた二十貫の石で青年団が

力だめしをした。馬鋏ウマガおし。むずかしくて、十八ではじめ、二十で

きるくらい。(北代田)

女は特になし、兵隊検査で一人前であった。(下細井・田口)

石をかついだこともあったらしい。十二山、米野にかつぎ石があった。重さ三十数貫。百姓婿は力があれば良い婿であった。(関根)

兵隊検査がすんで、数えて二十一歳になると成人になったとみなした。春に大麦一俵(十五貫五百)、秋に米一俵(十六貫〓六十kg)をかっければ一人前といった。(三俣)

## (二) 年 祝 い

男、女の年祝い なし(鳥取)

七十七。吹き竹を作り、二本組にしてくばった。八十八には赤いズキンに布団を作った。(石関)

年祝いには赤飯をふかした。七十七には火吹き竹をくばった。八十八歳には赤いズキンとチャンチャンコを作った。(堀之下)

七十七。「吹き竹の祝い」と言う。吹き竹を作り、近所にくばった。

「悪いものを吹きとばす」と言う。孟宗竹<sup>モウゾク</sup>ではだめ。米寿には赤いチャンチャンを作った。(荻窪)

昔はなし。(川原)

七十七は火吹き竹を近所に贈った。二本作り、紙でつつみ、水引きをかけ、お盆をつけ引き物とした。赤飯をふかした。八十八歳では赤い帽子に、袴<sup>かま</sup>、羽織、紋付きでお祝いをした(先代もそうした)。酒・サカナでお祝いをした。お盆をおかえしにした。オバアサンは赤い着物にした。あまり、そこまで生きる人はいなかった。赤い帽子は、前に八十八のお祝いをおくった家で、かわりにくれた。(北代田)

六十のお祝いはなかった。すると早死にするといっせせず、しなかった。(関根)

めつたにない。七十七の祝いは吹き竹をもらった。火事の時吹くと、

火事がそつちに行くといっせ。おじいさんが作った。二節をつけ、最後のところに穴をあけた。コタツの火をおこすのによかった(田口)

八十八の祝いは、赤い着物・帽子・チャンチャンで神社に行った。

喜寿の祝いは吹き竹を作り、のし紙をかけて配った。(五代)

米寿の祝いは赤いチャンチャンとぼうしを作った。親戚があつまった。(勝沢)

赤い着物・ずきん・オコシ・チャンチャンを作った。実家の祖父の赤い羽織を細かく切ってお守りにくばった。(五代)

## (三) 余暇と娯楽

大人の娯楽 町に映画を見に行ったり、地区をまわる地芝居を見に行った。映画は十銭で手近かであった。男は有志で浪曲や八木節をした例もある。(石関)

六十〜七十年前まではゴゼさんが来た。デエロン(セエモン)も村にまわってきた。子をつれ旅じたくで回った。大尽の家のみとまり、その家にジイサン、バアサンがあつまった。(堀之下)

お日まちで年に二〜三回飲むことがある。(荻窪)

夜あそび むすめまいりをした。姿を見るくらいであった。町にゆくの時代が新しい。ジイサン、バアサンの代には山でバクチをした。川原町には鳥小屋のところ市場があった。小さい八百屋が、小さい農家から出た野菜の並べてあるのを買いにきた。そこで八百屋がバクチをしていた。夜寒いので酒をのんで体をこわして四十代で死んだ人が多い。小四までの学校があり、五〜六年は日輪寺の学校に行った。昔は獅子舞・灯籠<sup>トウロウ</sup>があった。昔は頭<sup>かしら</sup>が三〜四あった。灯籠は七月十三日で、農休みにした。(川原)

八木節、素人芝居をした。浪花節・草競馬をしたこともある。草競馬は大正五年に一回だけした。神社の前でした。一カ月前より木を切り、田畑に棧敷<sup>サジキ</sup>を作った。敷島には常設の馬場が昭和のはじめころにあった。(北代田)

八間通りにあそびに行つた。十銭までは持ち出せた。金魚すくいなどもした。帰りにきんつばを食べた。町では楽士がバイオリンで歌い曲集を売つた。曲集は十銭で、高いのが二十銭であつた。曲は熱海の海岸ものであつた。電気館の裏の熊野神社で、毎日お熊さまの浪花節があつた。八幡さまにもあつた。帰りには氷水をのむか、弁天通りの井戸で水を飲んだ、ここの井戸の水は冷めたかつた。雨が降ると相談をして町に行つた。着物・下駄<sup>ゲダ</sup>をかくしておいて、さるまた・裸足でゆき、途中で着て行つた。マンジュウを食べ、映画が割引になると入つた。師範の夜学に通つていた時は帰りにクサズの湯に入つた。そこで先生の背なかをながしたことがあつた。(下細井)

村の祭りに行つた。十日夜の餅つきや、十五夜に柿をとりに行くこと。「ガツタン」という、石にひもをつけておき、遠くからひっぱつたあそび。石塔かつぎ、石塔をたおして力じまんをした。前橋へは活動を見に行つた(電気館)。(田口)

夜あそびに行つた。行く行かないはグループの差である。明治のはじめころ芝居をして貧乏になつた。仕事をしないで地芝居をした。今でも舞台小屋という地名がある。わるさとして、店の看板のつけかえ(呉服屋・八百屋など)や便所を運んでしまつたり、大ダメの中身を玄関にまいたりした(娘が思いにならないで)。夜学に行つて、そのま

ま夜あそびをした。(関根)

八木節をする。浪曲を聞きにゆく。競馬をすること。競馬は「ハグサケイバ」と言い、各村でした。ふだんは田で、その時だけ馬場を作つ

た。今の集会所の南の地区。一カ月をかけて、山から木を切り、クネを作つた。半月かけて片づけした。賞品を出した。一着はタンスなどであつた。十月と三〇四ころにした。まわりに店が多くでた。二日間行ない、前の日は予選であつた。二〇三百頭が参加をした。競馬師もきた。本番は十頭で一勝負の、百頭が出た。区長が主催をしたが、一村では大変だつたので、「ツキアイソン」といい、小坂子村とした。小坂子は嶺とした。(鳥取)

二十五貫の石をかついだ。墓の坊主の石塔をかついだ。芝居をした。地芝居で、ひまな時期に道具があり、自分でおどつた。みとれて夫婦になつた例がある。夏には八木節をした。遠くまで自転車でもかけていつた。粕倉、鼻毛石、箱田あたりまでゆき、帰りは午前一時ころになつた。(嶺)

清水で競馬があつたときに、八幡さまの前で地芝居をした。(大正からはない)(小坂子)

前橋の比刀根橋の柳座の松本錦枝の芝居などを見に行つた。片貝の虚空蔵さまに一週間くらい芝居がきた。梨木、四方、湯之沢、老神に行つた。(五代)

子供の娯楽 オタマ(おてだま)作り。草(ハズミダマ)をとりあそぶ。春は桑畑でドドメをとつてあそんだ。縄とび。(石関)

ナワとび、石けり(ケツトバシ)、竹馬、山でスベルベッタをした。カルタ。(堀之下)

トウゴマでコマまわし。ブツツケ。メンコ。タコあげ、タマッコロガシ、縄とび、あやとり。ネツクイ(木をとがらせて、さしてあいての木をたおす)、竹トンボ、水でつぼう、シノの笛。オテダマ(オタマトリ)はマリウたをうたいながらした。手まりうたという。(荻窪)

兵隊ごっこ、ぶつけ、ビー玉(冬)、ガス鉄砲(竹にカーバイトいれ

火をつけた)。松の木の皮で舟を作った。笹の葉でも舟を作った。女の子はお手玉、キシヤゴ、鬼ごっこ、かくれんぼをした。冬雪が降るとブッチメあそびをした。カツ糸と桑の木でワナを作り、雀をつかまえた。(川原)

兵隊ごっこ。夏は魚とり、カニとり、ドジョウすくいに、冬はカクネシヨ(かくれんぼ)をした。柿の実をとったり、十五夜、十日夜には竹の先にクギをつけ、オテマルをとりに行った。女の子はオテダマをした。また、金をあつめ、道祖神講や天神講をした。墓にクジをおいて、ひきにゆく(度胸だめし)。水あびにはよく行った。人差し指と中指を動かすとその合図であった。ずいぶんまわりからおよぎにきた。ついでにキュウリ・ナス・スイカを食べた。利根川のむこうの川原の桃・梨をたべた。(遊べなかつた人の話)——あそんではいられず、子守りと仕事をした。高小には半分しか行けなかつた。女の子で、夏水あびやドジョウとりに出ていると、天秤棒でたたかれた。小二〜三で桑つみをさせられた。金をもらう賃づみをした。(関根)

子づかいは二〜三銭もらえば大きいほうで、十五銭で活動が見られた。鉄砲玉というアメを買ったり、一銭のネジリ棒というカリントウを買った。男の子は、ブツツケ、ネックイ、コマ、竹トンボ、兵隊ごっこ、竹馬、タガまわし(樽のタガのこわれたものをまわす)、坂落とし車(車に乗って、福守様の山からかけおきた)、これは家の道具を使った。また篠で竹鉄砲を作った。十日夜の夜は大騒動であった。イモのカラをいれたワラ鉄砲を作りたい。女の子は、マリツキ、オタマ、羽根つきをした。その他、梨モギに行つて手ぬぐいでしばつてもつてきたり、ドドメをつんで食べたり、桃をぬすみに行き、サルマタのスソをしぼりいれてきて、川で流されたり、竹鉄砲作り松の実をとばしたり(のち、ゴムカンになつた)した。水あびも、八月下旬は

さむいので、田んぼのぬるい水に入った。(田口)

タコあげ、コマ、竹馬、麦笛。(鳥取)

ネツキ。これは、木の先をとがらして、地面にさし、あいてのさしてある木をたおしたりとばしたりするあそび。ブツケ(メンコ)。ニチゲツボール(大正のころ)。ケン玉のようなあそび。(嶺)

コマ、タコあげ、ケン玉、ぶつつけ、羽根つき、羽子板、お手玉。学校に入学の年に「紙もらい」と言つて、子供が近所をまわつた。正月の一日にまわつた。半紙五〜六枚とミカン二個もらつた。「紙もらいきたよう」と言つた。正月には「書きぞめ」を書いた。ヨリツキにさげておいた。そして、オジイサン、オバアサンのところにゆくと、オコズカイもらえた。オジ、オバさんもくれた。(小坂子)

女の子は、オタマあそび(オテダマ)やキシヤゴ(オハジキ)をした。男は、コマまわしや、タコあげ、ぶつつけだった。仕事につかわれることが多かつた。(勝沢)

お手玉や人形わるさ(ボロキレで着物を作つた)。けつとばしやビー玉は男の子。キシヤゴ(オハジキ)や正月にはマリつきをした。男は他に、コマやぶつつけ、竹馬をした。(五代)

### 三 婚姻儀礼

#### (一) 青年期の動向

青年団 学校卒業で入つた。半強制である。十四〜十五歳で入り、二十六才くらいまで。青年会と言ひ会費は月に一〇銭であつた。会長・副会長・会計などは指名されることが多かつた。会の仕事としては、剣道や、畑一反五畝の手入れ(月一回)、野菜作り、桑の葉売ることがあつた。また、旅行として、伊香保へ「強健旅行」というあるきの旅

行をした。地下足袋<sup>タタキ</sup>でゆき、夜明け前に出発した。あるいて行っても、  
渋川では夜が明けなかった。(鳥取)

青年団と言った。高等小学校卒業後のかぞえ十六歳の四月から二十五歳まで入った。村のこをするので半強制であった。団では、旅行として、あるいて迦葉山<sup>カハヤ</sup>まで「行軍」をした。会長・副会長・幹事がいた。大堤<sup>オホツツ</sup>の土堤の改修に行つて金をかせいで、団費にした。軽子<sup>カサゴ</sup>二つはかついだ。(嶺)

青年会と言った。高等小学校卒業後全員が入った。二十五歳くらいまで入り、兵隊にゆくと、自然におわりになった。会では、地藏様のお祭りの主催をした。柔道の寒げいこもおこない、夕ダで教えてくれた。また、図書をあつめ、図書館作り、週一回貸し出し日をおいた。青年会長・副会長・区の責任者等の役員があり、会長は指名や選挙で選ばれた。(小坂子)

青年団といい、道ぶしん、運動会参加、雄弁大会などをした。(五代) 運動会に参加した。番小屋で回り番をして、まわったことがある。青年畑を村の土地(共有地)にもつており、作物を作つて売つてもうけた。入会は入金だけで、退会は記念品をもらったが、それには金をとられた。寺の前のゲートボール場が青年畑のあとである。(石関) 青年団は百姓の子弟で入った。つとめは外した。十六歳で入り二十五歳までであった。自由に参加だがほとんど入った。学校卒業くらいである。仕事は墓地そうじや運動会のでつだいをした。運動会では大字<sup>オホジ</sup>対抗もした。桂萱<sup>カキカ</sup>の十三大字ごとに支部があり、支部長―副支部長―会計―幹事がいた。西片貝は団員が八十人くらいいた。支部長は仲間うちでおされて出た。桂萱でまよつて連合青年団となつており(本団ともいう)、十三人の支部長と前連合青年団長で推選し、支部総会で決まった。支部長選も同様で「ミズ」がまわつてきた。団長は地区も

考えて決められた。上泉よりむこうの東の方、中の方、西の方にわけ、団長が東なら中と西は副団長になった。仕事は、春秋二回の青年団の運動会があった。普通の日に学校をかりてやった。生徒も見学していた。また、年一回農産物品評会をした。自家製の醤油、大根、里イモなどが出品された。優等から四等までつけて賞状を出した。農業技術員が審査をした。必ず一人一品出すことになっており、出品表には出品者と価格、番号を書いておいた。会の最後の日に売り、青年団の資金になった。それは運動会の収入にもなった。青年団には補助金も出た。青年団は土地を一反ほど借りており、支部の経費にした。墓地のそうじを毎月一回と神社のそうじを十月十七日のオクンチの前の日にした。出征兵士、帰還兵の送迎会をした。十一月三日の明治節に甲種合格の人には赤い帽子がくるので、在郷軍人会と共催で歓送迎会(送別会)をした。祭は村のほうでした。(東片貝)

青年団は学校卒業後二十五六歳まで入つていた。二、三男でもよかつた。公共事業の道路の修理をした。炭ガラをぬかるみにしていた。三俣の青年団は辛塚までで、三十人くらいいた。会長と副会長・幹事がいた。運動会や観音流の謡のけいこもした。(三俣)

若連<sup>ワカレ</sup>といい、数え十七歳の正月の二日に酒一升をもつてきて入った。みんなに披露されて一人前である。三十歳まで入った。長男が入るがそうでなければ二男であった。一戸一名である。仕事は近隣の町とのつきあい、町の祭り、結婚式の主役であった。祭りでは秋葉さまの旗をたてた。正月や秋祭りの旗たてもした。秋祭りの旗立ては十間近いもので、年下の人がのぼつてロープをつけた。その他、春祭りの余興や屋台引きに行つたこと、はね舞台を作つたこともある。また、謡のけいこをした。これは結婚式に使つた。一月一日にはけいこをして「ウタイゾメ」と言つた。もう三十年近くしてない。式での謡は四海波

よりははじめた。うたいながら送ってきてうたいこみ、「つきにけり……」ですわった。

東荻、西荻は別に若連があり、西荻は昭和三十二〜三年ころまではさかんであった。家での式では謡はした。東荻と西荻は公民館の西の南北の道で切れた。西は前橋藩主で東は大胡藩主であった。西荻は三十人くらいで全体では五〜六十人であった。

役員は、三十歳に近い世話人（一人）と会計がいた。世話人は年の順になり、同一年で一番生まれの上の人になった。その人が農業研修の担当をした。お諏訪さまの山を桑畑にしたり、公会堂の前に田があり共有財産として管理し、収入を会の資金にした。

旅行では四万（四万温泉）に行った。提灯をもち十二時おきで、途中まではトラックで行った。毎年研修を兼ねたものをした。

村では村の行事の中心であった。村では娯楽はあまりなかった。村には「ツキアイムラ」があった。荻窪と上泉。近接した村でつきあいをした。片方で祭の時に片方で応援をした。小坂子をたのむこともあった。

祭りの小屋がけは、昭和四年が最後であった。お諏訪さまの裏の田に作った。良い屏風もあった。回り舞台をかりてしたこともある。小坂子からもかしてくれた。そこで地芝居をした。その後かりずに西荻では春祭りをやるようになった。（荻窪）

青年会と言ひ、昭和はじめころに団になった。自由に入会だが、ほぼ入った。長男が入り、二、三男は他所へ出ていった。高等二年卒業の数え十六歳であった。市場のところまで剣道をしたり、運動会に参加したり、寺のところの一反くらの畑と敷島公園の一反〜一反五畝の畑を経営した。また、大みそかに集まって、ゆでアズキの食いつこをした。ひとかかえもあるいれもので八杯で優勝した。満二十六歳でお

わり。（川原）

青年団といい、十六歳（高小二年卒業）でたいがい入った。四万まで歩いてゆき二泊した。二時に集合で十一時についた。会長の考えで行事をした。盆おどり、神楽殿でよそに頼んで神楽を行い、ついでに会興をした。（大正のころ）。畑を作り、収入を得て、外に出るたしにした。十五人くらいで自転車で迦葉山に行った。三人くらいはパンクした。結婚するとおわりになった。（北代田）

青年会といい、のち青年団になった。高等二年の十五〜十六歳から三十五歳まで。会員は三十歳まで、あとは後見人という特別会員であった。これは下諏訪のみで、他は二十五歳まで。畑をうけおい、金をためた。旅行で江ノ島、鎌倉に行った。夜寝ないで迦葉山に行き、一晩とまって帰った。くたびれて湯の中でねてしまった。（下細井）

戦中は青少年団といった。団長は校長で、副団長は教員や地域の人であった。軍馬の草刈りをして駅にもつていたり、八幡山でかけあしをした。本の輪読会をした。戦中は大政翼賛会の一翼になった。

自転車（一台五円）で旅行をした。昭和十年が日光で、十一年が江ノ島、行きが半日、帰りに半日かかった。一晩とまった。その他、妙義・迦葉山・松井田・磯部・一宮に行った。一宮ではみそぎなどした。大正の初期は、青年会、処女会といった。のち、青年団と女子青年団になった。南橘郡一県（社会教育課）とつながっていた。十七歳で入会（高等二年卒）、二十五歳で卒業であった。会費は二十錢くらいであった。体育・講習や道路普請、道しるべ作り、橋作り田畑の耕作をした。講習では一宮にゆき座禅を組んだりした。町内より三人ずつ行った。日本青年館にも行き、泊って研修した。運動会はさかんで、すもう講習会にも代表を参加させた。橋作りは町内の事業で、仕事は青年会がした。四尺の石の板二〜三枚で作った。畑は三反くらいあり、夜、町



内に販売して金を得た。また、青年会では手押しのポンプをもつており消防に使い、手つだいをした。ガソリンポンプもあったが良く動かなかった。(下小出)

大正末く昭和のころは田口青年会といい、のち青年団になった。一年に一回総会を開き、講演を聞いた。軍事的な話が多く、ユダヤ人のことなどを聞いた。旅行は強健旅行と言ひ、歩いていった。昭和二年の十月一日には日光に歩いていった。零時に出発し大沼に向かった。小沼で明るくなり朝食とした。水沼へおり、水沼く間藤は列車で行った。足尾からはハダカで行った。めつたに人に会わなかった。あるきで中禅寺湖にゆき、馬返しから日光は列車にのつた。日光では上州屋にとまり、半日、日光見学をして帰つた。三十五人くらい参加したが体力の差があり、三く五人ずつの小グループになった。一時間の差がついた。したくは地下足袋に着物の軽い仕度で、シリパシヨリで、弥次喜多の旅みたいであつた。出る時に二食分のオニギリをもつてゆき、食べながら行つた。いろは坂は直路があり通つたが、足は大変だつた。おそい人は終の電車にやつとまにあつた。日光からは汽車で前橋に行つた。翌年の昭和三年は四万に歩いていった。三十五人ほど参加、足がくたびれて階段がおりにくかつた。翌日後閑に行き、列車で帰つた。昭和三年は御真影を運んだ年で、人力で運んだり、旗をつけたトラックで運んだ。入会は高等卒業の十五・六歳く二十五歳くらいで、二十五歳までは独身が多かつた。厄年すぎでの結婚がいいと言つた。十九く二十の早い人でひやかされた人があつた。(田口)

処女会 十四く十五歳で入つた。入るのは自由。嫁にゆくまでの二十四く二十五歳まで入つた。料理のことなどをした。(鳥取)

処女会といつた。高等小学校卒業後のかぞえ十六の四月から、結婚するまでの二十二く二十三歳まで入つた。毎月一・十五日の朝食前に

神社のそうじをした。(嶺)

大正のころは処女会と言ひ、のち女子青年会となつた。運動会にてつだいをしたり、伊香保に男女であるいていった。(小坂子)

旅行、講習、墓のそうじなどをした。貴船さまなどへ千社まいり、百社まいりをした。(五代)

処女会と言ひ、学校卒業から結婚する二十五歳くらいまで入つていた。まだ丸まげの姑さんいたので、髪結いの講習もした。他に、料理講習、カルタ会、お花などやつた。会長は選挙で選び、他に部落ごとの役員がいた。男女青年団員くらいで、道ぶしんをしたり、輪読会をした。(勝沢)

処女会と言ひ、十七く十八歳から結婚するまで入つた。募集はあるがすすめられて入つた。二十く二十一が年上になり役員となつた。役員は投票で決めた。手芸で着物をぬつたり、学校の運動会に参加したりした。(石関)

女子青年会といひ、学校卒業後の十五く六歳から嫁に行くまでの二十五歳くらいまで入つていた。仕事は墓のそうじや青年と畑の草むしりや陸稲作りをした。また青年と新年会をした。(堀之下)

女は処女会で、のちに女子青年会になつた。十六く二十五歳まで入つていた。墓地のそうじなどをした。運動会は見にきたのみで、「あばれるんじやない」といわれた。また講習会があり着付け、料理などを習つた。(東片貝)

青年会に対して処女会と言つた。春と秋に道ぶしんを青年会と一緒にした。今より雪が多く通学路の雪かきをした。また危険物を収集して道路に深く掘つてうめた。

旅行はだんだん一緒に行くようになり、歩きで伊香保に行つた。米野街道で女の子がくたびれて、手ぬぐいでひっぱつたりおしたりした。

午前一時ころ出発した。また実習地で作物を作った。夜なわないをし  
て会費の積み立てにした。一人前二十五ボーズつ。一ボーズは二十尋。  
太ナワは二十尋で、細ナワは四十尋。夜、ムダツパナシをしつつ作っ  
た。早くなえれば夜あそびに行った。(荻窪)

入会は青年会と同じ、二・三女もよかった。年に一度手芸の展覧会  
をした。(川原)

処女会といい、高小卒業から結婚するまで入っていた。製糸の碓氷  
社に糸引きに行く人も多かった。裁縫の練習や絹ばたをやって、高崎  
の五、十の市に白絹を売りに行った。(北代田)

処女会といい、のちに女子青年団となった。十五、六歳から入った。  
暮にあみごとをした。(下細井)

元は処女会で、戦中は女子青年団になった。高小をよしてから結婚  
まで入った。女学校の人はいらなかった。講習をした。男、女とも  
に高小へ出る人は少なかった。(関根)

処女会が長く、昭和十二〜三年ころに女子青年会になった。処女会  
はあまり活動がなく、女子青年団は戦争のつたいをした。高等卒業  
から結婚するまで、数えの二十三くらいであった。運営費作るのに  
人の田の稲刈りをした。運動会をした。仕度競争というのがあり、モ  
ンペ・前かけ、その他をつけ、提灯をつける競争をした。年に一回講  
習があり、洗たくの講習で固型の石けんの使用方やズボンのほし方、  
アンマ法で、年寄りのかたもみの講習、料理講習でキンピラの作り方  
を学んだ。(田口)

夜あそび 各地の青年会でやった盆おどりを見に行った。おどりを  
して、賞品ももらった。お金をつつんでおどりへの参加申しこんだ。芳  
賀地区での盆おどりには、地区内からあつまった。桂萱、上沖、上細  
井、荻窪、滝窪にも行った。浴衣・カラカサをそろえてゆき、ハチマ

キをしめた。八木節をおどった。(鳥取)

富士見・石井まで自転車で行った。ムスメの家に行った。自転車は  
道路におくとワルサされるので、墓においた。家へは、ふつうのあい  
さつで入ったり、石をなげて知らせて入った。昼は女の子もくる。お  
茶のみなどをする。その家に先手がいると、うしろがヤケになり、墓  
で石塔のかつぎつこなどをした。グループで行くこと多く、夕飯食べ  
たのちに行った。家族もいるが、安心するとひっこんでしまう。

こんな話。先客がいて娘と話をしていた。「麦刈りのあとで、デゴシ  
の下で手をたたくとポタモチを三つくれる。」そこで先まわりをして  
もらってしまった。

小坂子は学校が一緒でわかつていて行きにくかった。山をこえてゆ  
くので東には行かなかった。(嶺)

神社の祭典に行った。娘の家まわってあるいた。宮城・大胡・富士  
見・新里まで行った。夕飯食べて行き、帰ると夜が明けた。それでも、  
その日の仕事はした。家に入らず草刈りに赤城山に行ったことも  
あった。(小坂子)

女の人の夜あそびはなく、夜はカルタをしたり、お蚕のつたいを  
した。冬は裁縫学校に行った。(勝沢)

浪花節、祭りなどの娯楽を夜見に行った。若い人さしがしもあり女性  
も行った。一里四方くらいは行った。女性が行く時は一人はある程度  
の年の人(男)をいれた。(石関)

上泉・富田・上野の祭りにグループでのして歩いた。縄ないくらい  
で用がなかった。町へは歩きで堀川町まで一・五時間かかった。タモ  
トの着物で袴で行った。映画や焼キトリの縄ノレンに裁縫のかえりに  
よった。雨がふると電車がかえることがあった。(堀之下)

目標をつけた村をまわった。なじみや縁故で入ったり出たりした。

約束して映画に行ったりした。相手のオヤジにどなられたこともある。仲間に「あの子をとりととう」ということあった。夏祭りや盆おどりのあるのを聞いてでかけた。映画も、男席、女席、同伴席があったが同伴席には行けなかった。大和館や帝国館に行った。木瀬地区の長磯・野中にも世話する人のひっぱりで行った。

市街地はおつかない、ひどい目にあつたとの話がありこわかった。「ドンビヤがきた」と言われた。町へは歩いて行つた。

雨がやめば行つたが、朝日町の交番で、三人組で行つたらとがめられたことがある。

仲間のウチによつて着がえて行つた。パイオリン・マンドリンなどを持って行つた。石田の魚屋にはだれかいたのであつまつた。表札の裏にキントンポグループ集会所と書いておいた。キントンポとは、仲間が頭テカテカの油をつけたのでその名にした。

仲間は一町以上の百姓の息子で中以上の資産があつた。ある父親より「こいつらデタラメしているだろうが西片貝の内閣を作る」と言われた。

三丁目に集まつて行つた。一〜二丁目は桑原で家がありません。桑は良い桑がとれた。帰りに薄暗いと野ダメにおちたこともある。「ウンがついた」と言つた。(東片貝)

夜あそびは遠くまで行つた話がある。金丸にも行つた。昭和より八木節がさかんになり兼ねて遠くに行つた。追いはぎに会つて家によりこんだり、粕川に行つてケンカしたり、嶺の盆踊りに行つて石をなげられたりした。大胡の明舞飾館に行つてその後宮城の大前田や柏倉に行つた。宮城から滝窪まで浪花節に来たこともある。(萩窪)

国分から小神明まで、下駄ゲダのあるきで行つた。帰ると夜があけた。妙見さまにも行つた。夏の祭りのころは活動館にも行つた。男女がふ

れる機会がなかった。(川原)

旧市内く芳賀まで一里四方にでかけた。青年団の八木節のあるときに行つた。十一月く三月は夜なべでモシキとりの縄ないをした。雨の日は若い人があつまり縄ないの競争をした。昼は料金所の辺まで、モシキとり、篠刈りに大八車で行つた。冬でも汗をかいた。(関根)

娘の家をまわつてあるき、のぞきに行つた。大正から丸登製糸にゆき、一緒になる人もいた。祭りには桂萱から富士見まで行つた。山のモシキとりに行つて土地を知つており、あそびに行つた。モシキを相手にくれたこともある。十日夜に夜あそびにゆき、朝帰つたことがある。世良田・少林山・雷電様は講があり行つてお札をくばつた。昔は帳面ナガトがあつた。三峰も古い帳面はないが講があつた。おこもりをして、長瀬ナガトであそんできた。上・中・下組で一人ずつ行つた。(下小出)

先代の人は行つた家の干し柿をとつたりもした。お勝手からのぞいていて下水におちたり、二階をみながら歩いていてタメにフンゴンだりした。種屋のタメは蚕のチョーをいれておいてくさかつた。南には行かず、富士見の方に行つた。渋川の半田のコーエー館に行き、板東橋ですずんだことがある。帰ると夜中であつた。上箱田は遠かつたが芝居小屋があつた。米野の道は松の太い根が道に出ており、自転車では大変であつた。パイオリンやマンドリンを使った人もいたが、ハモニカの時代で、吹きながら行くとなむくなかつた。しかし、昼はくたびれてねていることもあつた。朝の草刈りは大変な仕事で、早くゆかないと草がなくなつてしまつた。弁当はジリ焼きで、赤城山に行つた。馬に乗つたりしている間や帰りに食べ、仕事中は食べられなかつた。お盆すぎは草が固くなるので萩の花をさがし萩を刈つた。ほしておき、冬くれた。早く出たので、米野を通るころはあとを見ても見えないほど暗かつた。九く十時ころには帰り、あとは昼寝になつた。(田口)

恋愛 ナレアイ。あまり多くない。(鳥取)

デキタ・クツツイタとかいう。いい評価はなく、頼まれ仲人をいれる。あまり多くない。(嶺)

クツツキアイ、批判的にみられた。(小坂子)

クツツキアイ、良く言つて恋愛。(勝沢)

恋人ができたと言ふ。まず親に反対された。心中もけつこうあつた。それを歌本に作つて売つてあるき、モデルの家の前で売りみんな買つてもらつたことがあつた。(石関)

クツツイタと言ふ。まわりでみとめなかつた。(堀之下)

クツツキアイとかできあがつた仲とかいい、頼まれ仲人をたのんだ。

(東片貝)

ナレアイとかクツツキアイとか言い、白い目で見ていた。(荻窪)

デキアイといった。(三俣)

クツツキアイといった。例は少ない。(川原)

イイナカ・クツツイタといった。盆おどりなどで知りあつた。昔はあまりなかつた。昔は夫婦でも明るいとこを歩けず、道の両側を歩いた。(北代田)

イイナカになつたという。仲人たのみ式をあげた。(下小出)

クツツキアイといった。例は少ない。女性と話をしただけでも呼ばれておこられた。(関根)

クツツキアイといい、変な目で見てバカにした。例は少なかつた。

(田口)

村祭りは、別名「縁引き」という。婚姻関係の範囲は、村内に限られることが多かつたため、祭りは、男女が知りあう格好の機会であつた。明治の末頃からは他村との結婚も始めた。大戦後には「村内」という枠が完全にくずれ、村外からの婚姻者が圧倒的に多くなる。

## (二) 婚姻の条件

(北代田)

結婚適年齢 男二十四〜二十五歳、女二十二〜二十三歳。(鳥取)

男二十三〜二十四歳。女二十二〜二十三歳。男の二十五はおそい。

(嶺)

男二十五歳はおそい。兵隊検査後。女は二十五歳は売れのこりと言われた。(小坂子)

男二十五〜二十六歳、女二十二〜二十三歳。二十五歳は厄年で二十六歳になつた。(勝沢)

男二十五〜六歳、女二十二〜三歳(数え)。昔は早かつた。家にも伊勢崎機がをするくらいで結婚するしかなかつた。(石関)

女は二十二〜三歳、男は二十五〜六歳であつた。(堀之下)

男は二十三〜四歳で、女は二十歳くらいであつた。兵隊検査が二十歳で、体格が良くなって検査に合格しないと早かつた。女は男の二〜三歳下であつたが、一つ年こえた嫁は「メマス」と呼ばれ、金のワラジをはいてさがしてもできないと言われた。(東片貝)

男は二十二〜三歳で、二十五は少しおそく、十七〜八は早かつた。

二十三歳の三月までは夜学があつた。女は二十一〜二歳くらい。(荻窪)

二十二〜三歳で式、二十五歳ではおそかつた。二十すぎるとオエビスコウといった。(エビス講は二十日なので)(三俣)

女は二十二〜二十三歳だが、二十二の並びはよくないとされ、二十

一か二十三〜二十四歳で、数え二十五をすぎるとおばあさんであつた。

男は二十五の厄年はさけて、二十四か二十六〜二十八までで、男女は二歳の間をあげた。(川原)

男、二十四〜二十五歳で、二十五歳をさけて二十〜二十二歳の人も

いた。女は二十三〜二十四歳。(北代田)

男は二十五歳前後で、女は十八〜二十二・二十三歳くらいで、二十歳前後が多かった。(下小出)

女は二十二〜二十三歳くらいが中心で、男は一〜二歳上であった。

(関根)

「地盤」が決め手。みんながみて、それでいいだろうで決めた。十人のうち九人賛成ならばよい。(堀之下)

本人の承諾はなかった。財産をみた。財産は神社の寄付のみ。寄付には上・中・下があり地位並で出すので、寄付の額で財産をみた。

学歴の差はだめで、高小の人には高小の人、青年学校の人には青年学校の人にした。その後本人の評判を聞いたり、仲人の家に二人よせて話合わせたりした。(東片貝)

昭和十年ころは見合いもなく、かくれて見に行けばいいほうであった。話で決まった。カネとりのある家を選んだが、「仲人がオッパメた」と言うこともあった。相手は親が決めたが、式までに会うことはなかった。相手の家は家のまわりを見てくれなかった。薪がきちんとつんであるか、丸太がきちんとつんであるかみた。親が事前に調べて「行って見てこお」と言われた。むこうの家で「ウチのほうがいいソバができる」ということは「米ができない」ということである。近所で聞くとわかった。まるつきりの他人でなくたどっていることがあった。

(荻窪)

つりあいを考えて決めた。(川原)

仲人が似たような家であるというのを見当して世話した。仲人がみつくるってくれる。(北代田)

仲人が、身上・家のみはからった。(関根)

仲人が家のつりあいを基本に考えた。財産の程度。少しちがうと、

七デンプで同じくらいに言った。嫁は少し低くてもよかった。家のま

わりを見て、クワデ、薪がたくさん積んであるとよいとした。モシキがたくさん積んであると良い家で、商人もそれを見た。台所に米俵がたくさん積んであると良い家なので、娘の多い家はぬかを俵につめておいた。ぬかは軽いし、湿気止めになるといった。(田口)

「嫁をもらうなら下からもらえ」と、昔は言った。上からもらうと身上がくずれると言った。(田口)

嫁への格言 「敷居をまたいだら帰って来るな」と言われた。

(上細井)

見合いの方法 近所の家を借りてやった。女の人があつていて。そこで紹介をした。あとで仲人が両者の話を聞いた。(鳥取)

仲人の家や、どちらとも関係のない家を使った。夜そつと男をつれて見に行くこともあった。家ではむかいあつてすわつた。日がたつてから仲人が聞きにきた。男性側が先に言った。戦後、見合い後に高崎の観音様にゆくと、見合いがこわれるとの風説があつた。(嶺)

見合いは昭和初期からで、大正ころはなかった。親の話のみで、翌朝になってわかつた。イトコカワセもあつた。方位もみた。決める時に「墓をみる」といった。墓の様子、戒名をみた。(小坂子)

見合いなしでの式が多かつた。お茶をいれるくらいであつた。三三九度まで会えなかつた。親の話で行くことが多く、判断は親がした。

(勝沢)

大きい農家だったので、親はみないで、本人の腕をみた。働く様子みて結婚した。親同志で決めた。(五代)

見合いはなかつた。仲人が親に談判して決まった。決まると子に話をした。内緒で見にゆけらしい。(石関)

なし。親が言つてそれで決まり。(堀之下)

二人をよせてお茶を出し、話し合いをさせた(遊びに行かせる)。結果を聞いて、「いつてもいい、もらつてもいい」はよく、「考えさせてくれ」はだめであった。(東片貝)

昭和のはじめまでは少なかつた。形だけ仲人の家であつたり、嫁さんの家にゆくだけで仲人と親まかせであつた。(荻窪)

なかなかしなかつた。座敷のある家に本人だけで行き、お茶を出してもらつた。のちに仲人↓親↓本人と承諾をえた。(三俣)

見合いなしで結婚の例が、前の代まで多かつた。昭和初期にはなく、その後できた。下川からきたが、板東橋を渡り、ここらであきらめなければと思つた。

見合いは嫁さんの家か、仲人さんの家で行つた。お茶が一杯出ておわり。手足動かしているので大丈夫と思ひ、お茶をこぼしたので粗忽(ソッコ)と思つた。口ひとつきかなかつた。あとで仲人が聞きにきた。(川原) 見合いなしで式になつた。式まで会わない。

(北代田・下細井・関根町・田口)

仲人の家でした。また、仲人が男を女の家につれてゆき、茶をのんだ。マンマ食つたり酒のんだらもうものと決まつたものである。のち男の家、女の家への承諾を得た。両方知らないうちに決まることがあつた。縁故者で決まつた。近場(チカバ)の人とするので、親戚が地区内に多い。いいなずけもあつた。(下小出)

イトコカワセ ある(各地区)

結婚はおつきあいがあるもので、親類がふえなくていい。(嶺)

御祝儀 仲人は、ぞうりきらしといったが、あまり遠くまではいかない。近くの村までで、まとめた。親戚関係で話がまとまることもある。(三俣)

仲人の条件 世話好きの人、人柄の良い人、話上手な人。仲がよく

なつて結婚する時に頼まれ仲人を頼んだ。(鳥取)

上手な人(口のうまい人)(嶺)

骨おしまないで親切な人。(小坂子)

話上手な人(五代)

婿取り 苦勞が多く、「コヌカ三升あれば婿にゆくな」と言われた。

家にいるので仕事のアラが見られた。女(姑さん)は目がこまかい(一緒にいるので)ので。(石関)

仲人のことわざ 仲人のゾウリキラシ、仲人ナナデンボ。ナナデン

ボいわなければまとまらない。あまり正直ではまとまらない。(鳥取) ナコウドナナデンボという。仲人は七つまではウソはゆるせる。(嶺)

仲人はゾウリキラシといわれる。(小坂子)

仲人ナナデンボという。ハメられたと言つた。(勝沢)

仲人のゾウリキラシ、ナナデンボという。(五代)

仲人の好きな人がいた。商売にしている人がいて百組以上する例があつた。昔のほうが、出た、入つた話は多かつた。結婚がいやおうなして小姑が多かつたので実家に帰ることも多かつた。

世話好きで、押し出しの良い人。二人がよくなつた仲の時に頼まれ仲人が必要となつた。昔は「仲人のナナデンボ」と言つたが今は通じない。(堀之下)

仲人ナナデンボと言うが、ウソを言つても必ずばれた。一生ウソを言わなければならなくなる。仲人をたたくさんすると、アナバタがにぎやかでいいと言う。(東片貝)

縁続きでどちらかの家を知っている人がした。知らない人は少ない。好きな人で百組以上の人もいる。仲人のゾウリキラシとかゾウリキラカシとか言う。しげく行つてもうまくゆかず、おっぱなすまとまることがある。(荻窪)

信用されるような人になった。その家に関係ある人がなった。仲人のナナデンボと言いうそでまとめた例がある。仲人のゾウリキラシとも言った。頼まれ仲人は、二人ができてしまつて仲人が必要になつて頼んだ。(三俣)

仲人は、仲人のゾウリキラシ、ナナデンボと言われた。世話好きで、親戚の様子わかる人。社会奉仕の気持ちでないといけない。恋愛の時には頼まれ仲人があつた。(川原)

気のおける世話好きの人。昔は言つたが、今はデンボはきかない。ナナデンボ、ゾウリキラシというが、自分でこしらえたのだからゾウリキラシでやつた。まとまるまで大変だつた。(北代田)

信用ができて世話好きの人。仲人のゾウリキラシとかナナデンボと言つた。手銭テジでゾウリきらすのでゾウリキラシと言つた。(関根)

懇意な、世話を頼める人。自分で考えてさがして、自分からする世話好きの人。(田口)

### (三) 婚姻の成立

婚約の成立 口がためといい仲人が話をするだけ。次は結納になつた。(鳥取)

口がため・樽立てをした。近親のみあつまつた。オジ・オバくらい。仲人が一升酒もつてきて、昼に女の家、夜に男の家に行った。のちに一升ずつになつた。(嶺)

仲人さんが酒一升さげていった。兄弟がよつた。(小坂子)

口がためといった。樽入れと同じ。近所の人、近い親戚を呼んだ。

仲人が酒一升もつてきて半分ずつ使つた。昼は嫁の家に行った。長くなるようにウドンができた。夜は婿の家に行った。夕飯にウドンが出た。(勝沢)

「口がため」と言う。仲人と両親が集まる。酒一升をまずクレ方に半分もつてゆき、次にモライ方に半分もつてゆく。モライ方がクレ方の次にのむことで、もらつてきた形になる。(堀之下)

「口がため」とか「樽だて」と言う。口がためをすると断われないと言うが、断わつたこともある。これを「仲人のハラキリ」と言う。

口がため、まず仲人が嫁の家に一升もつてくる。(一生(升)くずれないように) 全部はのまず半分のことす。半分をむこさんの家にもつてゆく。口がためを兵隊検査の前におき、「検査後に披露すべえ」とのことあり。(東片貝)

口がためと言う。まず嫁方にゆき、酒を半分のむ。のちモライ方に行き残りをのんだ。(荻窪)

口がためと言ひ、仲人が酒一升をもち、昼ごろにクレ方に行った。半分を使い、晩にモライ方に行った。残り半分を使つた。話者は一升ずつ使つた。集まつたのは、オジさんオバさんなど。(三俣)

口がために一晚とまりにきた。(荻窪)

樽たて(今は口がため)。ここで、結納などを決めるが、ここでかわれることもある。着物など、〇〇がほしいなどが原因になる。仲人が酒を一升、樽(朱ぬりの)で持つて行つた。一升ずつあげた。昼ごろはじめにくれ方に行き、夕方もらい方に行つた。仲人のもつて行つたものを冷酒で一杯のんだ。お爛爛をしたものも飲んだ。(川原)

口がためと言ひ、近い親戚を呼んだ。一日で行なつた。樽入れに同じ。はじめに女の家で、しまいが男の家。一升ずつか、一升の半分ずつをわけた。仲人礼は二升もらえた。(北代田)

酒一升を、嫁方と婿方でわけた。のち仲人のところに一升ずつもつてゆく。(下細井)

口がためと言つた。一つの樽を両方にもつて行き、一升ずつくばつ

た。それ用の朱の漆ぬりの樽があつた。半分ずつわけてのんだ。近所親戚に樽たての酒だといって飲ませた。神棚にあげて、親戚一同にのんでもらい、のこりをもらい方にもつてゆき、飲んでもらった。祝儀の日の空の樽を二つ祝い樽としておいておいた。(下小出)

口がためという。樽たてとも言った。仲人が酒を持っていつて一杯やつた。昔は一升を半分ずつのみ、今は一升ずつになつた。おじさんくらいの近い親戚を呼んだ。総領の口がためはていねいで、隣保班を呼んだこともある。

口がため(樽たて)といい、仲人が両方に一升あげた。嫁さんの家から、婿さんの家に行つた。近くにいろおじさん、おばさん呼んだ。方が一のことを考えて近所の人二人を呼んだ。(組内の人)(田口)

仲人が酒一升上げて、昼、くれ方へ行く。くれ方で食事をし、酒五合をとつくりに移し、神だなにあげ、嫁にのませる。夜、五合をもつて、もらい方へ行き、口がため、樽入れをする。(小神明)

仲人が一升もつて、くれ方に午前中、もらい方に午後、一緒になるといつて、半分ずつ飲む。(三俣)

結婚式の日取り 寒い時。仲人が中に立つて決めた。(鳥取)

吉日にした。家でしたので春のひまな時にした。夏はしなかつた。

(嶺)

農閑期にした。吉日を選んだ。(小坂子)

寒いころにした。三月中旬までで日を見て決めた。(勝沢)

モライ方、クレ方が相談して、嫁さんの体の具合で仲人が中をとる。

その時に結納金を決めた。(堀之下)

樽立ての日に決めた。勤めの金も親にとられたほどで、全て親がかかりであった。大安の日であるが、金が入つた後にした。例えば米が売れた、晩秋蚕の後、麦が売れた後など。「今年を決めたけど晩秋がはず

れたので米ができるまでまつてくれ」とのこともあった。日としては、麦・蚕の後の五月とか、米の収入後の三月とかであった。(東片貝)

仲人が行つたり来たりして、暦をみて決めた。体の都合があるので女のほうから決めてゆく。(三俣)

四月半ばまでの大安に決めた。女の体の都合のいい日で、生理をはずした。式は秋から四月半ばまでなので、年ごろの娘がいると、四月になると、「アア、今年もダメか」という。(川原)

暦をみて、女の体の都合を聞いて決めた。二月〜四月ころまでで、四月の末ころは、蚕がはじまつていそがしかった。(北代田)

仲人と施主、嫁さんの体の都合による。秋、春にした。(関根)

口がためどころに暦をみて決めた。秋の十・十一月〜三・四月ころ。春に口がためで秋に式、秋に口がためで春に式であった。準備が大変で、着物やふとんを作り、畑を売つたりする家もあった。タンスをあけて見せることもあった。嫁さんに体の都合を聞いた。(田口)

結婚式は、秋から冬にかけてが多い。農閑期だけしか行わない。夏の結婚式など考えもつかない。第一に夏では着物が暑くてかなわない。

(北代田)

婚家への出入り 式までは行かない。(鳥取)

口固めから出入りできる。親によつては好まない人もいた。手つた

いはしたが、よほどでないこととまることはなかつた。(嶺)

口固めが、「道あげ」「カドイレ」と言う。婚家に行けるようになったが、あまり行つた例はなかつた。(小坂子)

式の三カ月前にはなると「カドイレ」をした。てつだいはしないが、自由に出入りができるようになつた。時に一晚とまつた。(勝沢)

式のとから。(各町)

なし。(川原・北代田)



口固めと一緒の「カドイレ」をして、はじめて入れるようになる。

カドイレは、仲人がきてしてくれる。ごちそうをした。父・兄が嫁になる人をつれてきた。二三日とまり帰った。蚕の時にひっぱつてきた。カドイレが口がためから何日目からは不定。労働力として手伝ってもらった。それからは嫁の実家と親戚扱いになった。(田口)

式の前に嫁に入ること。事情で、式の前に子ができる時や、離婚の場合もある。半年くらいは行っている。(小神明)

アシ入れ婚 飲み食いを一緒にして、そのまま「とまるんだぜ」ととまった。特になければ、とまらなかつた。(嶺)

足いれ結婚というのがあつた。口固めの日、嫁さんをつれてきてとまらせた。いやで一晩ねない人もいた。(嶺)

なし。(各町)

カドイレの後は何かあつたら行けるようになる。(荻窪)

結納 お金は十円くらいだった。仲人が酒を一升もつてきて、結納ぶるまいに使つた。半分をわかつて使い、半分は婿の家に来て使う。

近所の人二軒と近親の人をまねいた。ウドンが夕飯でた。タンスと鏡台を持って行つた。(鳥取)

祝儀の前日が結納おさめといつた。江戸棲の着物の披露があり、タンスにいられて持つて行つた。他に酒の樽を二つ持つて行つた。結納金は二十〜三十円であつた。当時の米二俵分(四十年前)。その他、昆布・鯉節・スルメ・柳樽・麻(ともしらがの意)・扇子(未広の意)を受け取つてもらつた。すると酒がでた。受けとりには「右の品々、めでたくひさしく受納つかまつりさうろう」と書いてあつた。(嶺)

結納金は家によりまちまちであつた。近い人で兄弟やおじなどを呼んだ。結納には着物や髪の道具をつけた。着物の他に、長じゅばん・帯・帯揚・帯止め・下駄があり、祝儀の前の日まで、八畳の間に白い

紙をおいて広げた。御祝儀としてタンスの上に柳樽がおいてあつた。

(小坂子)

結納は式の少し前。着物と結納金もつてきた。参加者は口がためと同じ。昭和六年ころは三十円であつた。(二十円もあり)。今とちがい袴がえしはなかつた。(勝沢)

鯉節・スルメと目録をつけた。口がための時にしてしまふ人もいた。結納金は昭和十年ころに女は三十〜五十円、男は七十円であつた。

(堀之下)

式の前日に結納ぶるまいをした。隣保班(組)の人、近親、仲人が集まつた。結納金は三十円がふつうであつた。五十年前に五十円が高いといわれた。五十円は一蚕分である。十貫目十二〜三元で五十貫目五十円くらいであつた。鯉節とスルメをつけた。字は当て字で「寿留目」「勝男武士」と書いた。衣装・タンスも目録にあげた。喪服(紋入り)もつた。(東片貝)

式の前日に結納おさめをした。近所の人を熨斗をおつたり書いたりした。目録を作り、送り名と父の名を書いてもらつてくる。うけ取つた時は送りと照らして領収書を送つた。(荻窪)

式の前日にした。兄弟やオジさんなど集まり結納いらいをした。着物と結納金・化粧品一式・タンス・蛇目などを目録に書き領収ももらつてきた。金は昭和四年に五十円くらいであつた。着物にはいろいろ細かいものを足してもつて行つた。(三俣)

結納おさめという。お昼ころにして、三時ころには近所の人をみる。仲人と、タンスが車ひきときた。利根川のむこうは、着物だけで、タンスは金をつけてよこして買つてもらう。その家のものになるのだから自分で買つてくれということ。勢多からくると、タンスに鏡台・夜具・タライをもつてきた。タンスは、競馬のタンスのようなガタガタ

は困るといった。今の総合競技場の東の原が競馬場で、上細井の競馬場だった。(賞品にダンスがでたが、安ものでこわれやすかった。)

(川原)

御祝儀の前の日にした。結納おさめという。すこし前のいい日にする家もある。口がためと一緒にした家もある。納めるものは目録にしておいた。扇子・スルメ・昆布・着物・ダンスなどで、床の間においた。仲人さんも行き、近い人が立ち合つた。判をかわす。近所の若い人が、リヤカーで車ひきをした。車引きをした人は、一杯、座敷でこちそうになった。(北代田)

式の当日、モライ一見でゆくとともに、一緒に目録ともつて行つた。

品物は、昆布・スルメ・麻・江戸樓・長じゅばん・白むく・ダンス・長持ち・結納のお金・祝い樽で、のちに黒の紋付や帯止めを作つてもらつた。品物は番頭さんか近い人が引いていった。(田口)

前の日に結納おさめをした。仲人だけでゆき、一杯のみ、金をおさめた。その金は親と仲人が相談して決めた。(関根)

御祝儀の前の日にやつた。仲人が柳樽を持ち、もらい方で半分のみせたあと、くれ方へ行って、残り半分の酒をのませた。(荻窪)

仲人まわり 組は、式の前の日にまわり、手ぬぐいを一本ずつおいていった。(鳥取)

なし(嶺)

近所まわつた。(小坂子)

なし。(勝沢)

仲人が樽立ての時に近所をまわつた。「○○に○○を世話する○○です」と言つた。(東片貝)

仲人はまわらず式の時にてつだいの人にあいさつをする。(三俣)

樽たての日にまわる。施主が、嫁をもらうとか嫁にくれるとか言い、

手ぬぐい一本もち組内をまわつた。親戚があればそこにも行つた。

(川原)

施主が仲人をつれて近所をまわつた。「娘がこの人のお世話になりませう」とあいさつをした。昔はまわつたが、今は近所の人を集めてちかづきをする。(北代田)

樽たての時に近所、隣りをまわる。(下小出)

特になし(関根)

もらい一見の時に、紋付き、袴ハカマで行き、組内だけまわつた。仲人は台所から入つた。近所の人が煮物などしているので、仁義をきつてから入つた。でないと、意地の悪い人が文句を言つた。口固めの日にまわつたこともある。(田口)

結婚が許されない場合 例なし。(鳥取)

カケオチをした。許されてもどり、式をあげた。(嶺)

心中をした例があつた。鉄砲による。(小坂子)

例なし(勝沢)

あきらめた。(堀之内)

別居をした。子ができるともどつてくる。祝いはなかつた。子ができると「月が進まないうちに披露しよう」と相談する。親に反対されるのはクツキアイが多い。仲人が入つたのは反対は少ない。(東片貝)

だれかが親代わりでもらうけたり、一特別に住んでいたりする。孫でもできれば家に入る。(荻窪)

あきらめたり、にげたりした。(三俣)

昔はなかつた。あきらめた場合が多く、かけおちなどはなかつた。

後にはあつた。(川原)

勇気がなくて、言い出せなかつた。(北代田)

にげてしまった例は少ない、意見されてあきらめてしまった。(関根)

女の人をつれてにげたり、心中した人がある。板東橋からとびおりたり、下の堰から川に入った。(田口)

通婚圏 地区の内外でいろいろである。夜あそびの範囲くらい。(四五kmくらい)。(鳥取)

柏倉・北橋くらいまでであった。大間々の例がある。(嶺)

一つおいて隣の村(富士見・大胡)では遠かった。子供つれて半日の行程くらいまで。桂萱・南橋くらい。(小坂子)

富士見が多かった。(勝沢)

桂萱が多く、嶺も多かった。(五代)

近辺が多い。伊勢崎が遠いくらい。(堀之下)

鬼門からはもらわない(北東→南西)。無理するとうまくいかない。早死にしたり特別な死に方をしたりする。(東片貝)

利根西は習慣が違うので、赤城南麓が多い。村の条件が同じようなところで(不足村は不足村と、南傾斜の村は南傾斜の村と)。仕事の内容が同じであり、風習が似ているところにした。(萩窪)

桂萱から芳賀・富士見であった。その年の方位によって決めた。縁故があれば遠くても来た。(三俣)

元は群馬郡であり、利根が東だったので、国分、吉岡村が多い。

(川原)

勢多郡内が多い。(北代田)

富士見・芳賀が多い。(関根)

群馬郡の半田、漆原や、勢多郡の北橋村や富士見村、横野村、芳賀が多い。縁故があると、スジひっぱってあると遠いこともある。(田口)

前橋や富士見村が多く、前橋の町場は少ない。(小神明)

#### (四) 結婚式

結婚式の多い月 正月〜四月初ころ。寒いところか農閑期。(堀之下)

暮〜春先。十二月〜四月中ばまで。そのあとはいそがしくなるので。

(萩窪)

正月〜春の四月までくらい。(三俣)

結婚式の呼び名 ゴシユウギ(各町)

式では世話になる家は一家で来てくれるように「ウチジユウ呼び」にし、「主人呼び」とは包みがちがった。(東片貝)

結婚式 結婚式の宴は、三日三晩も続けられ、一回結婚式をすると身上が傾くと言われる。酒は一樽があくほどのみ、村内のどんな衆は、飲めるのを楽しみにしていた。花嫁でさえ、しまいには台所に駆り出されてしまう。どうしてそんなに派出にするかと言えば、一つには、質素にすると後で人から批判される(隠口)、第二には、他がやっているのだからという「見栄」だと考えられる。(北代田)

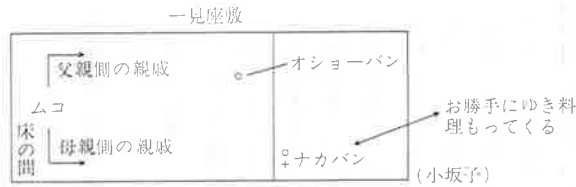
結婚式で自分の結婚相手に初めて会うという例が多かった。親同志が知り合いで、話をどんどん進めてしまった。恋愛結婚というのは、ほとんどなかった。(日輪寺)

結婚式当日まで相手には会ったことがない。くつつきあい(恋愛)

はまれであった。(下細井)

嫁入り 大正のころは馬で行った。中荷ナカゴののつてきた。宮城村に雪の中行ったときは歌のようであった。十二時近くについた(大正八年の例)。人力車で行ったのは明治四十年代の人の例。(嶺)

嫁迎え 一日目には「ムカエイチゲン」がゆく。兄弟やおじが六〜七人で嫁さんの家にゆく。そこではお膳でおかずと酒が出される。そして夕方五〜七時ころに帰ってくる。この日が式。二日目には「アトタ



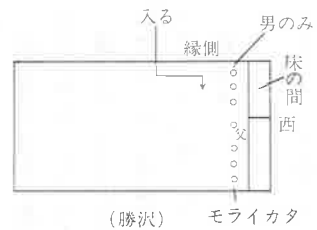
一日目にモライ一見に行く。十時〜十一時ころに兄弟・仲人・おじ・おばが行く。一見さまが帰ると、次にオクリ一見が嫁さんをつれてくる(親戚の人)。中宿により、暗くなつてからつく。オクリ一見は十時ころまで飲む。(小坂子)

前日には、キンピラとサトイモの煮ものを作る(オカズ作り)。四角膳にオヒラで魚をのせた。当日は、イチゲンが十一時ころ来て昼をたべた。近親と兄弟、婿が来た。一見座敷では、はじめに「おちつき」として鮓が二かけくらい出され、次にお茶、次にごちそうと酔の物やキンピラが出た。次が紹介で近所の人に婿の紹介があつた。クレカタは紹介のみ。夕方になり嫁が島田でやつてきた。中宿によつた。提燈チヨウテンできた。次々日は「ムラマワリ」があり、嫁さんがまわる。この日の朝早くカ

ズネ」がある。嫁さんの兄弟やおじが六〜七人で午後一時ころにやつてくる。そして二〜五時間ほど滞在する。お酒とお膳におかずが出される。おかずには、サトイモ・コンニャク・ニンジン・ゴボウ・アツアゲがでる。三日目には「サトガエリ」がある。嫁さんが実家に行き、ごちそうになりとまつてくる。(鳥取)

一日目は一見がお客にゆく。十時ころ兄弟とおじ、仲人がゆく。ごちそうになり、二〜三時ころ帰る。その日に式となる。二日目は、翌朝早く(早いほどいいと言う)カネツケのいわいの赤飯を届ける。この日にはアトタズネがある。女衆(嫁の兄弟、母など)六〜七人が来て、ごちそうをうけて帰る。三日目には若夫婦の里帰りがあつた。

(嶺)



一見の時には、まずお茶が出て、次にオチツキとしてソバが出る。次にタカアシの膳での宴会になる。ネギヌタがでるとおわりになる。「ネギヌタがでたから夕飯ごちそうになつて帰ろう」といった。引きもには、鯛のミジンコの折りと、スルメがあつた。(小坂子)

むこ、おじさん、父母の兄弟で行つた。一日目は一見が来て帰つた。昔はご祝儀三日といい、一〜五樽、酒を使った。十一時ころにゆき、となりの中宿にゆき、袴ハカマをつけ、嫁さんの家に十二時ころ行つた。中宿ではお茶とオチツキ(手作りののりまき)を少し食べる。嫁さんの家では、床柱のところに婿さん、さらに北側に父方のおじさんと並ぶ。南東の隅に仲人とオシヨールバン役(元老)がいる。オシヨールバン役は一杯に強い人で、お勝手との連絡をした。その北に嫁のおじさんがいるが、すぐにおばさんか女衆にかわる。オシヨールバンは「楽にして下さい」といつて、座をくずして一杯すすめる。三〜四時ころまで。式の翌朝カネツケをして、マユをおとす。おばさんなどと、手ぬぐいを持ち、近所まわりをした。昔は二日目にアトタズネがあつた。今はその日にくる。送り一見は、歩きで来て、中宿により、シリツパシヨリをなおす。ワタぼうしをツノカクシの上につける。来るのは、父、おじ、

ネツケのお祝いの赤飯をおくる。三日目は里がえりと女一見がある。(勝沢)

一日目、一見には吸い物を出す。モライカタは兄弟と身内の人がかかる。中宿にやつてくる。夜になり、辻に木や竹をもしておく、菅笠をさしかけて(上を見るな)の意味)高砂でうたいこむ。(五代)

一見の座敷はネギヌタがでるとおわりになる約束。(鳥取・嶺)

嫁さん、姉の相手など。(川原)

九時ころにモライ一見が兄弟・おじ・おばなど十人くらいで出る。向こうで昼をもらつて嫁さんをつれてくる。オクリ一見は三時ころに出る。(堀之下)

縁故・親戚が家に集まり隣保の人が料理を作った。一見(新客<sup>シニキヤク</sup>)「嫁方のおじ・おば」のもてなしには隣保の人が、さしみ、キンピラ、サカナなどのものを作った。一見の客は式には出るが座敷は別であつた。式の招待者には青年団が入つた。青年団は嫁むかえやしたくの中心であつた。青年団が村境まで行くと、例えば南橋の青年団が嫁を送つてくる。それを境でひきつぎをする。むこうの青年に酒一升をわたし、むこうからも一升もらう。家には新客がまつており、仲人が先頭でゆく。座敷でのオシヨウバンは隣保班長で、まかないの参謀をした。

(東片貝)

仲人と婿に近い人が六く七人くらいが一見(新客)として行つた。一見の人数は「ヒトザシキ」と言い、決まつていた。会席膳が一、座敷は十人と決まつていた。クレ方が近いと昼ころにつく。三時間くらいごちそうになる。その間にむこさんは近所の人の案内で手ぬぐいをもち、近所への「チカツキ」に行く。お客の披露もある。帰りに嫁さんをつれて帰る。次ぐ日に送り一見(あとたずね)がくる。嫁さんと一緒にくるのは略式。三日目に女一見がきて、里がえりがある。(萩窪)

暗いうちに嫁さんをもらいに行つた。モライ一見と言つた。膳が出て、盃をかわした。オクリ一見が嫁さんをつれて行つた。中宿でやすんだ。あるきであつた。(石関)

婿、仲人と、モライ一見という親戚が、むかえにいく。くれ方であいさつをし一見のごちそうになる。嫁と一緒にきて、中宿に入る。お客のオクリ一見には、ここで待つていてもらい、嫁が先に中宿から出

る。ここから綿帽子をかぶつた。取り結びがすんだあと、中宿にお客をむかえにいき、くれ方の一見を接待する。(三俣)

式の段取り、順序 一日目は結納おくり、その夜結納ぶるまいがあり、集まつて近所にふるまいをする。二日目は、もらい一見にゆき、中宿で、すしなどのおちつきを食べ(送り一見で送られてきて)式になる。三日目は、カネツケのいわいと、里がえりがある。(下細井)

前の日に準備として、キンピラやカライリを近所の人が作つた。また、高砂の島台を作つた。膳の上に、鶴と亀、松と竹をたてた。当日は十く十二時ころに、もらい一見がゆく。人数を決めておき、婿さん、おじさんが行つた。施主はゆかず。中宿に入り、のち嫁さんの家に行つた。座敷に入ると、おしよばんが世話やきでやつてくれた。座敷は、家の奥座敷で、床の間に婿と仲人などもらい方が並び、反対側にくれ方が並ぶ。料理はもらい方のみ。オシヨウバンをする近所の世なれた人が席を決め、近づきに出たくれ方の親戚を紹介する。送られてきた嫁さんがカイドウの長い竹の棒をまたいで、入ってくる。麦ワラで、たき火をしておく。座敷に入る時は、婿の母がだきあげる。「高砂や……」の謡はカドツケで入る時にうたう。入つて取りむすびになる。仲人が婿、嫁さんの取り結びをする。のちに近所の人の仮仲人が親子のさかづきをする。謡は三回あり、そのたびに杯をかえる。三回目の四海の波の謡の時に、婿さんはたつてしまふ。「婿さんめつけてこい」で散会する。取り結びののちに、座敷にお膳をおき、あとたずねをする。くれ方の親戚がいるところにもらい方が入つてゆき、くれ方を仲人が、もらい方を仮仲人が紹介する。その日のうちに両一見をした例と、送り一見をあとした例がある。取り結びは九く十時ころが多いが、十二時く二時になることもあり、朝までの例もあつた。(下小出)

青年会が主体でとりしきつた。正月に、謡の練習をした。一日目、

近所の人が準備をした。膳、碗の準備、料理の用意をした。二日目は当日。もらい一見がゆく。行ってすわるのが昼少しすぎ。兄弟やおじさんが行く。両方の人数はそろえた。仲人が紹介した。座敷は、むこうのオシヨウバン（近所の年配の人）が指示をした。くれ方の親戚は紹介のみ。ごちそうの間に、嫁の近い親戚が、婿さんをつれて近所まわりをする。仲人があいさつをしておわる。嫁さんをつれて帰る、もしくは送られてきて、取り結びになる。三日目、くれ方の一見がまたくる。中宿により、夕方くる。おばさんなどは一見に行けなかつた。夜まで飲んでゐる。服装は一番良いもの。順に、「一見、葬礼、火事見舞」と言った。仙台平に袴。（関根）

式は昭和になつては一日になつた。大正のころ、一日目は、もらい一見がゆく。おじ、兄弟、義兄弟など。くれ方が十人ならもらい方が十人とそろえた。十二人近いこともあつた。仲人が人数を決めてくれでそろえる。昼に行つて夜まで飲んでゐた。嫁さんをつれ女仲人とくる。夜、三三九度になる。村の人がした。一晚とまる。二日目、嫁が、嫁のしたくで村回りをしてゐる間に、嫁の親戚が、送り一見にくる。村回りは、近所の人か、おばさんが一緒に回る。手ぬぐいをくばる。それには名前が書いてある。十く十二軒まわり、おわりに神社をまわる。昼か一時ころおわる。送り一見は昼か一時ころくる。オシヨウバンが親戚の紹介をする。嫁さんはしたくをかえて、給仕をする。三日目には里がえり、親が送つてゆく。もらい一見は昼にゆき、三々四時ころきた。駒下駄にチヨーチンをもつて帰つた。袴をしょつてきて、中宿ではいた。（北代田）

昼前後にモライ一見がゆく。本人・仲人・おじさんで、人数と時間をは打ち合せておく。座敷の床の間側に親戚が並ぶ、一番南に婿、次に仲人で、一番北が近いおじさん。東南の隅にオシヨウバンがいる。お

茶を飲み、おちつきを食べた。おちつきはオヒラにのりまきの鮭か、モチのころはアベカワである。近い兄弟とおじが紹介する。ごちそうが出る。オシヨウバンは酒の飲める人で、しゃべれる人で、気のきく人、座の責任を負い進行する。ごちそうは、ネコアシの膳に。オヒラにシオビキの切り身、大根・人参の酢のもの、につけたものを五々七色。サトイモ、昆布、スルメ、ゴボウ、シイタケなど。御飯と汁（はじめは伏せてある）。豆の煮たものがおつぽにいられてある。婚家でのごちそうには、ヨメゴのお膳にはらみばしという太いはしがついている。あと、先は細くなつてゐる。ごはんも高盛り。オカラ、キンピラ、カズノコのミツモノが一つの皿に盛りわけてある。おすいものがつく。クレ方で三つ出ると、もらい方で五つ出すぎまり。トロロコブ、卵、三ツ葉など。飲みおわつて、トロソバがでる（長くつづくように）。もらい一見には引き物がつく、鯉節の折りやミジンコのお菓子。菓子は松、竹、鶴、亀、海老など七つで一折りになつてゐる。鯛が一番大きい。モライ一見の座敷ではむりに飲ませた。飲ませるのはオシヨウバンの腕。気持ちよく飲んでもらう。モライ一見の人が「十分にいただいた」と言うとソバがでた。ソバを食べてゐるころにお中間が荷物を引きはじめ出発する。お中間にはモライ方でおつつみをする。モライ一見が帰るとすでに荷物はついている。そこで、「もう荷がきたから」といつて準備をした。モライ一見は帰り、仲人と嫁が一緒にくる。組内の近いところの中宿をもうけ、仲人、嫁が休み、お茶、菓子が出される。そこで嫁が前帯にした。婚家の準備が済むと迎えにきた。中宿から家の間に道謡をした。「道ずれ」という謡。タイマツに火がたかれ、竿をまたいで入つた。アガリハナに、ウケウタイが二人いて高砂を謡つた。「ハヤスギノエニツキニケリ」とうたう。母が手を引き入つた。床の間にはじめは並んですわり、三三九度をした。近所の子供の雌蝶、雄

蝶がお給仕に出た。子供は羽織、袴で、男の子が嫁へ、女の子が婿さんに給仕した。のち婿さんは南東の隅にすわった。進行は若い人がした。(田口)

三三九度が終ると、若い衆座敷になった。謡ははじまり、鶴、亀などの謡をした。正月の二日に謡ぞめをしたところもある。座敷に入り三つの謡をした。若い衆が、サンザの下、千秋楽をした。前日は練習が大変である。二つ終ったところで、婿さんが逃げ、普通の仕度になる。嫁さんも仕度をなおし、若衆座敷にお茶をいれる。嫁のおみやげとしてお菓子を近所の人にくばる。かわりの婿さんがすわる。逃げるのは自然にする。宴は夜中まで続く。(田口)

大正十一年が謡い込みが変る時で、一月二十九日の時は謡い込みがあった。二月二十二日には、祝文しゅくぶんといって文をよむだけになった。この時は初めてだったので、なれずに失敗したが、二日後の二月二十四日の時はうまうまいった。門を入ると、火がたかれ、たらいに水が入れられてあった。竹の棒をまたいで入った。若い衆が両側で謡をうたって謡い込みをし、高砂の謡で縁側から入る。とてもにぎやかだった。嫁と同じ姿の待ち女房が二人いて、その人が手をとって縁側からいれた。母親が嫁に笠をかぶせ、抱き上げた。待ち女房が二人いることでも力になり、頼りにした。中宿は隣で、仕度を整えた。仕度を一度ほいで、前帯にし、てぬぐいをかぶらされ、つのかくしはしなかつた。実家の近くの神社におまいりしてから、荷物を馬にのせて歩いてきた。後あとたずねといって翌日一見(実家の方の親類)が来る。たいそうなごちそうを作ってもてなした。池から鯉を上げて活造りをした。男の人が料理を作り、大樽が二つも三つも並んだ。その後ゴタイギブルマイといって、手伝ってくれた近所の人を全部よんでごちそうした。家のものが、ダブルマイした。座のまん中に、そろばんの上に蓬来山

の飾りを若い衆が作って置き、まわして見せた。男と女の象徴をのせた。式の中で、新郎、新婦の二人だけが、オタカモリを食べることがあった。(小神明)

日取りは仲人が決めた。大安吉日で、花嫁が生理でない日を選んだ。口がためは足入れともいった。えいのう(結納)金は、嫁の持つてくる道具と見合わせて決めた。昭和八く十年で三十円位だった。

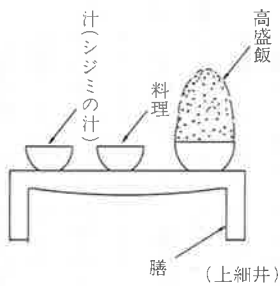
前日、料理などの準備をした。うしろ前の近所や親戚などに手伝わってもらった。

本日(当日)は一見といつて婿の叔父、兄弟が仲人と一緒に嫁の家に、嫁をもらいに行く。

花嫁衣裳は婿の方で用意し、一見の時、付人が持つて行つた。昭和九年頃アサヤで用意したら百二十円程かかった。

付人は一見待遇といつて、一円位の祝儀が嫁家の方からもらえる。嫁が髪を結ったりして身仕度をしている間二〜三時間位待つてい

る。花嫁が婚家へ入る時、庭で竹棒にワラをまいた松明を青年がかかげる間を通り、青年が両端を持った竹棒をまたぎ、縁側から家へ入る。その時、村の青年が高砂を謡う。



家へ入る時、姑が大きな編笠を花嫁の頭上にかざし、笠の上から水をかけて清める。

式では謡・三三九度、親族の紹介の御飯食(直会)を行う。(上細井)

口ききがあつて、親が決めた。見合いということではなかつた。姉と妹をまちがえたこともある。あとつぎと他では差が

ある。親類結婚といって、いとこ同士が、よく知っているからということ、一緒になることがあった。(小神明)

たかきごやのときに婿さんを逃がしてしまふならわしがあつた。嫁ごは縁側からあがつた。姑が嫁ごに笠をさしかけた嫁ごをもらつた次の日、かねつけの祝というのをした。かねつけ―お齒黒のことらしい。今の年よりのおばあさんはつけていた。嫁ごは富士見、北橋出身が多かつた。たんすひきというのもあつた。嫁ごは、とつぐときに実家を出てから新しい家に行くまでの間に中宿といわれる家で休んだ。四月三日の桃の節句には、菱餅、草餅をつくり嫁ごに家に持ち帰らせた。嫁ごは区長といつしよに宮まいりをした。お七夜の時には、神社、稲荷さん、便所をまわつておがんだ。(上小出)

婿取りはステバのオンバコといって、いいたい放題、かたり放題だといつた。荻窪で、西荻は婿が逃げたが、東荻は逃げなかつた。三三九度のお酒をつぐのは、オキジッコといつて二人いた。門口で、竹の棒を持つのはキュウジッコといつた。その竹をまたいで、嫁が入ってくる。若い衆の仮仲人が菅笠をかぶせて、謡をうたつた。縁側につくまでに高砂をうたいおえるようにした。姑が嫁をだきあげて家に入れた。嫁は中宿でしたくをして、待ち女房と一緒に来た。(荻窪)

嫁の選び方 上細井から四km位の範囲。勝沢や小坂子からもうのが多かつた。財産が同じような家から選んだ。恋愛はクツツキアイと言われて良く言われなかつた。百人中三〜五人位が恋愛だつた。仲人は、クデンボ仲人のゾウリつべらしといつて、両家の間をうまく取りもつた。見合では、相手に会うこともなく、わからないのでぬすみ見に行つたりした。見合結婚はうまくいつた場合が多い。(上細井)

嫁が実家を出る時の作法 特になく、縁側より出入りする。(鳥取)  
特になし(嶺)

お稲荷様、組や近所にあいさつする。(小坂子)

縁側から出る。かえらないように、ホウキではく。(五代)

あいさつのち縁側からほうきではき出される。(堀之下)

竹をまたいで出てくる。近所の人が見送つた。クレ方では近所の人同士が飲んでいる。婿の時でも嫁はかくなし、中宿にいってもらい、婿さんがついてから家に入る。(東片貝)

玄関から出た。(三俣)

縁側から出る。ほうきではき出す。(川原)

屋敷稲荷におまいりして、あいさつをして玄関より出た。(北代田)

あいさつをして、両親が、カドまで送り出した。泣きながら出てきた。(田口)

あいさつをして玄関より出た。(下細井)

あいさつをし、近所の人にもあいさつをした。(下小出)

嫁入り行列 嫁(あるき)・仲人・おとも三人・兄弟二人できた。(鳥取)

親、兄弟が十人くらいで来る。(堀之下)

ニセモノでない証拠に青年と一緒に来て、弓張り提灯をもっている。(東片貝)

オジ、オバと一緒にくる。モライについてそのまま一緒にくる(両

一見)。あくる日に親戚(二見)が来る(アトタズネ)と半々であった。

両一見はいそがしく、帰るのが十二時になった。(あるきで行けるので)荷物は前の日に運んだ。タンス・鏡台・下駄箱、夜具があつた。(堀之下)

六〜七人からもつと多いこともあつた。年寄りが入つてはいけない。組内にはだれか年長者で幹事くらいの人がいいてあいさつをしてもらった。大八車にふくさかけた。二人が提灯をもち、嫁さんは人力車で



きた。行列の規模は当時の金融恐慌の影響があつた。(東片貝)

荷物は先に付き人が二人ついて出た。馬車・荷車で運んだ。(三俣)

道具披露 嫁入り道具、着物まで持ってきたものを近所の人に披露した。作業着、地下足袋まで作って持ってきた。(端気)

中宿 中宿は隣の家であつた。嫁を一たん仲人がその家につれてきて休ませる。そして仲人が嫁家にゆき「嫁もらつてきた」と言う。告げると仲人はかえる。その家で準備ができると仲人に来てもらい、つれてきてほしいと言う。そして仲人がつれてくる。(鳥取)

隣の家(中宿という)に入る。その間に準備をする。(嶺)  
通りこさない手前の家に入り、準備までまつ。(五代)

チューヤドといい、近い家か親戚の家を使った。お茶を出してくれた。(堀之下)

休み場。隣保班長さんの家を中宿にした。新客が来て、袴をはく。

お茶は「オチャ」になるので少なく、桜湯を出した。(東片貝)

近所であり休んだり、仕度を整えたりした。(荻窪)

途中の家を使った。その家で嫁さんは綿帽子をかぶつた。親戚が休んでいる間に嫁さんは式に行った。(三俣)

近所もしくは自分の家の離れ、隠居屋でもよい。お茶を出すくらい。仕度をするところ。(北代田)

隣りの家か、近親で頼める家。お茶を出す。(下小出)

近所で、頼んで、休んでいった。(小神明)

化粧なおし、衣装なおしをした。待ち女房は二人で三十歳代の女性。

(下細井)

御祝儀の服装 男 羽織、袴。女 普通の着物(江戸樓)(鳥取)

男 紋付き、袴。女 江戸妻で大正のころは「綿帽子」をかぶつた。

(嶺)

男 紋付き、袴。女 江戸樓の柄なしの無地、黒が多かつた。紫は、はでといわれた。(小坂子)

男 紋付き、袴。女 江戸樓、留め袖。(五代)

女は江戸樓・留そで、内掛けに帽子をかぶつた。男は、縞の紋付に袴。(堀之下)

紋付に袴。女は江戸樓。参列する人は和服で黒紋付の羽織、下は御祝儀用の縞。エリの黒い長じゅばん。(東片貝)

婿さんは紋付、袴、嫁さんは江戸樓に扇子、島田を結び、ツノカクシをつけた。親戚は、紋付、袴と黒の着物。(北代田)

取り結びは正装で。嫁さんは江戸樓に高島田とツノカクシ、婿さんは紋付。一見の人は紋付。(下小出)

花嫁 丸まげ・内かけ(?)角隠し・白ムク(?)(従順家風になじむ)

花婿 紋付き・袴・白の扇子・侍のまね、口元を隠す(北代田)  
婿のあいさつまわり もらいに来た時にまわる。仲人と、手ぬぐいを持って組合五く六軒ぐらい。(鳥取)

ムカエ一見で行つてまわる。ごちそうの間に手ぬぐいをもって、組の長の人とまわつた。婿だけで、あとで嶺の村全部(百九十軒)まわつた。(嶺)

一見のあいさつ、ごちそうの最中に十軒ぐらいまわつた。(小坂子)  
親や近所の人をたのみ組合をまわつた。(五代)

モライ一見で行き、宴会の間に手ぬぐいをもって回る。それから宴会。(堀之下)

嫁さんのむかえの時に、一見と仕度の間にまわつた。(三俣)  
モライ一見の間にまわつた。まわつて手ぬぐいをくばつた。(北代田)

あとたずねの時に一緒に帰り、仲人と手ぬぐいをもって回つた。

(下小出)

モライ一見の時に回る。近所か親戚の人がつれてゆき、手ぬぐい  
名を書いておいてくる。(田口)

嫁が婚家に入る時の儀式、作法 御祝儀の晩、カイドに弓張り提灯・  
松明をたてる。竹の棒をわたして、またぐ。その時に待ち女房が菅笠  
を頭にかぶせる。竹の棒またいで、縁側にゆき、菅笠をとり、お母さ  
んにだきあげてもらい、座敷に入る。(鳥取)

松明をケイド(街道)にたく。男と女の子供が持つている。また、青竹(三  
〜四m)をもつていて、嫁が通ったあと持ち上げた。ハランでくると  
またげないので、教育の意味があった。縁側からお母さんがだきあげ  
る。その時に笠をかぶせる。(嶺)

青年団が松明(小麦のカラ)をあげ、またぐ。縁側から入る。オッ  
カさんが菅笠をかぶせ、だいて入る。(上を見るなという意味)

(小坂子)

松明たいておく、菅笠かぶせて、姑がだきあげる。嫁さんは菓子もつ  
てきて、近所の人にくばる。(勝沢)

たき火と竹の棒があり、またいで入る。入る時に姑さんが笠をかぶ  
せて上をむくなの形をとる。(堀之下)

カド火をたく。カドの両側に松葉・竹をわたし、竹をまたいで入っ  
てくる。その時に謡(高砂や……)をうたう。入る時にお姑さんが菅  
笠を両手で上にかぶせる。これは、これ以上上を見るなと言うこと。

のち、嫁の手を引き縁側より入る。(東片貝)

カドに松明をつけ、竹の棒をまたいだ。左からまたぐと男ができ、  
右からまたぐと女ができると言った。座敷には廊下から入った。姑が  
編笠をかけながらだきあげた。上を見るときりが無いということ。

(荻窪)

オクリコミと言った。松明をたき、竹をまたいだ。たとえ火の中水  
の中ということ。縁側から入った。そこには嫁に来た若い人が二人待  
ち女房としていた。上を見てはいけないうことで菅笠をかぶせら  
れた。(三俣)

待ち女房が二人待つていた。(おなかに子のない人)。大尽の家でし  
た。入る時には竹の棒をおき、両側に提灯をおき、縁側より入った。  
姑さまが上から菅笠をかぶせた。(これより上はみるな)。かかえてあ  
げる。(石関)

クワデで松明を作り、麻でしぼる。近所の人を持つていて、そこを  
またぐ。「たとえ火の中、水の中」ということ。縁側に入る時に姑さま  
が菅笠をかけ、手を引いてあがる。(川原)

クワデで鳥居を作り、くぐす。竹の棒をまたぐ。縁側に入る時に、  
菅笠をかけ、手をとりあげる。(北代田)

昭和十二〜三年ころまでは、クワゼをくぐり、麦ワラを両方でもし  
ている竹の棒をまたぎ、菅笠をかぶせ、姑がだきあげた。(下細井)

松明をもし、竹の棒をまたぐ。オフクロがだきあげ、縁側から入る。  
高砂の謡のおわる時にすわるようにする。(関根)

若い衆が、竹の棒を地面に横にしておき、上をまたがせる。縁側か  
ら上がる。女親が、抱き上げて入れる。(小神明)

結婚式の部屋に入るとき、花嫁は、菅笠をかぶり、もらい手の女親  
がだきあげる。戦時中ぐらまで続いた。菅笠は、上を見ずに従順  
であれという意味があり、「つの隠し」と同様である。もらい手の女親  
が抱き上げるのは、今日から母と娘の関係になるという一つの「区切  
り」をあらわす。(北代田)

門にかがり火。高砂を謡う。縁側から床の間へはいる時に、姑さん  
が抱き上げて、頭上に菅笠にひげがついている笠をさす。―天狗にな

つてはいけないという意味。三三九度は婿や姑さんとかわす。近づきをしてからお膳を食べる。近づきが終つてから床入れ。(下細井)

嫁が婿の家に入るにあつては、仲人が嫁を迎えに行く。婿の家では、迎え火をたき、嫁は縁側から抱き入れられる。この時、組の者が謡を歌う。(青柳)

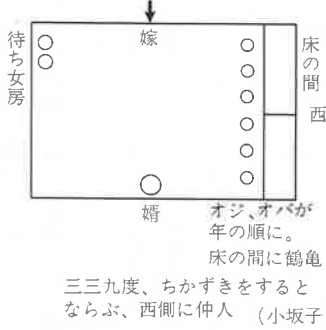
嫁が庭に入る時、竹を横にわたしておき、またぐ時、上にあげた。

縁側から入る時、親が笠をさしかけ、だいて入れた。上を見ないようにするためという。蓬来山を作るのは、若い衆の仕事。(端気)

謡 御祝儀の時、門口からケードーを入れる時には、たかさごやくとうたう。取り結びの時は、四海波静かにて。終りには、千秋楽をうたつた。おじいさんと孫で謡をしたこともある。(端気)

御祝儀 青年団が嫁をつれていく。高砂の謡い込みで、縁側につく時にうたいおわるようにした。嫁は竹の棒をまたぎ、婿の母親が菅笠をかぶせ、手をひいて縁側からあげた。取り結びの最後に、婿がにげて仮婿がすわると、おひらきになった。(三俣)

待ち女房 四十〜五十才くらいの近所のオバさんを頼んだ。帯を前にむすぶ。式の時、客、嫁をつれてきた。あとはすわっていた。



(鳥取)

嫁さんが入る時に傘をかかげる。嫁さんの手を引いて家に入れる。嫁さんに似た仕度で、帯を前にする。当時四十〜五十の人がやった。現在八十くらいの人が経験がある。(嶺) 二人の待ち女房が、前帯で手前にしてすわっていた。特に何もしな

い。(小坂子)

式の間二人すわっている。嫁が家に入る時に両側に待ち女房がいる。戦前のみあつた。嫁と同じようなしなく。嫁の話し相手の形で嫁の両端にいる。前帯にしている。(堀之下)

特に用はないが堅い家はした。オシヨーバンさんの奥さんや嫁さん。嫁さんの世話で、髪の毛をなおしたり、帯をゆるめたりしめたりした。普通の着物。(東片貝)

二人いた。近所の既婚者で、帯は前帯で手をかくしていた。座敷ではすわっているだけ。(萩窪)

二人が嫁さんの両側に、江戸襦、前帯にしてすわっていた。頭は普通。三三九度の間、すわっているだけ。(川原)

帯を前にして二人いた。(下細井) 取り結びの時の十五〜二十分間の間に、近所の人で、羽織をかけるくらいの人すわっていた。(下小出)

近所の嫁さん(オカミさん)が二人、江戸襦にして、帯を前にして、帯に手をいれてすわっていた。(関根)

嫁の両脇にいた。丸マゲ、江戸襦で、帯はうしろ、すわっていただけ。三三九度がおわると嫁さんと出た。嫁が家に入る時に、待ち女房が大きな菅笠をさしかけてくれた。(田口)

式に二人いる。丸まげで江戸襦を着ている。座の両端にひかえてもらう。前にたらしめた帯をしめている。(三俣)

嫁の道具送り おともがりヤカーではこんだ。タンス・長持ち・鏡台・張り板・タライ・洗たく板がはいっていた。(鳥取)

元は当日はこんだ。おともが二人で荷車でもってきた。馬のこともあつた。お勝手の道具・タンス・タライ・張り板で、長持ちのある人は大尽。洗たく板くらいの人はフロシキヨメゴと言われた。(嶺)

式の当日に持つて行った。リヤカーや大八車ではこんだ。オチユウゲンとかオトモと言った。運ぶと別の座敷でおいわい(寸志)と一見と同じごちそうがでた。大正末ころはせんたく板・張り板・布団・ねまきで、大尽は長持ちやつづらがあつた。(小坂子)

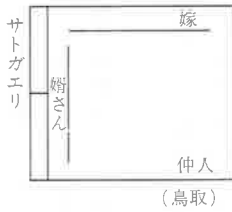
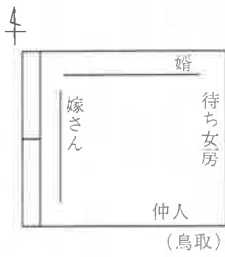
近所の人があした。御祝儀をつつんだ。別の部屋でもてなした。持つて行ったのは、張り板・裁ち板・アイロン・下駄箱・タライなどで、タンスもつてくるのはいい嫁と言われた。(勝沢)

嫁さんと一緒にきた。嫁さんの近所の人と縁故の人が運んだ。新客と同じ扱いをされた。引き物が軽いだけ。お金をつつんだ。(荻窪)クレ方で送つてきた。車ひきの人には一見の末座にすわつてもらつた。(北代田)

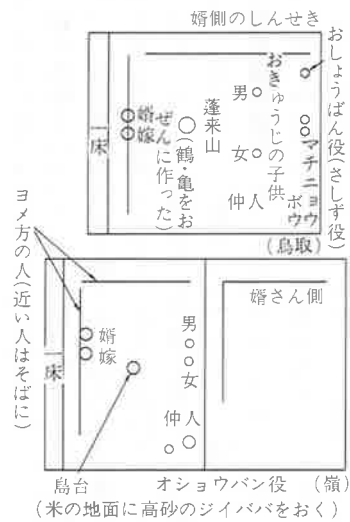
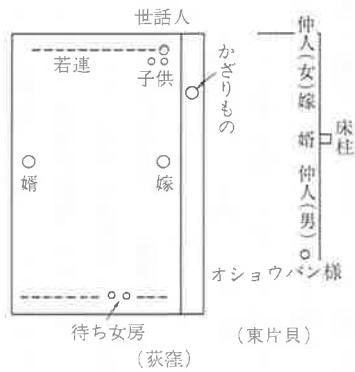
送り一見とオトモもつてくる。オトモは近所の若い人で、一見の座敷にすわつた。タンス・長持ち・鏡台はつきもので、他に下駄箱や自分の使うものをもつてきた。一見が次々日の場合は、オトモのみが当日きた。別座敷でもてなした。(下小出)

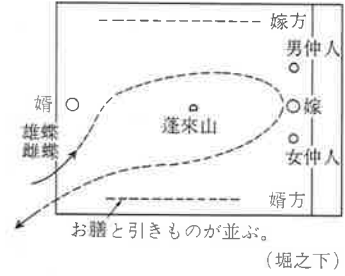
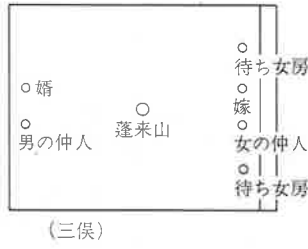
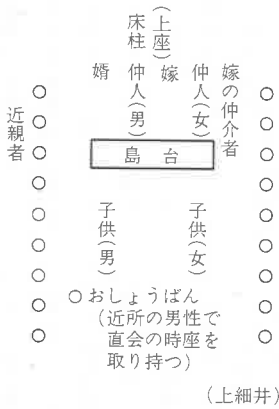
おひろめ 嫁入り道具の披露は、来る時と、来てから両方でやつた。(荻窪)

一見座敷の配列



婚礼儀式の配列





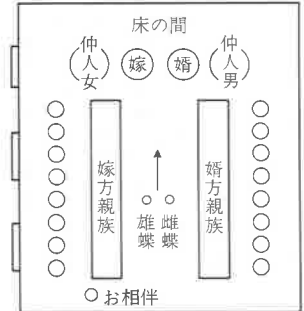
蓬来山はお膳の上に折り紙をおく。下地は米をおき、青のりで岩を作った。鶴亀は大根で作った。甲羅は書き、ニボシで頭とシツポを作った。(三俣)

(上細井)

(堀之下)

式の最中に、男と女の道具を大根で作って出し、床の間にかざった。男と女の子が酒をいれたが、その給仕の仕事で五銭もらった。(大正中期)(小坂子)

高砂の謡で、カドから部屋の内に入り、「ツキニケリ」のところに席につく。入る時に菅笠をかぶせる。謡がはじまる。「シカイ、ナミシズカニ、クニノオサマルトキツカゼ」とうたい、三三九度になり、謡になる。謡は若い衆組が冬の間に練習をしておいてやった。式の支配権は若い衆組にあった。謡の切れ目で、決まっただけで、婿がにげた。カゲにゆくだけであり、部屋をはずすだけでも、家族と隣にいてもいい。そして、代わりの婿を若い衆組(十〜十五人)のうちから選ぶ。「ひとさわぎ」になるが、その場で決まる。のろまなものが決まる。服装はふつうの着物。あとは続く。嫁さんはそのあと、待ち女房の案内で床の間へ。家族だけになってからオチカツキの盃をした。婿がにげるのは度胸だめしだらうとのことであった。若い衆には一戸一人で年よりも入っていた。(嶺)



(北代田)

役が、婿、親戚を紹介する。次に仲人が嫁さん側を紹介する。酒を一杯ずつのむ。三三九度へ。(鳥取)

花嫁は、徒歩で式へ向う。中宿に寄って身なりを整え、式場へ入る。中宿は式場のすぐそばの民家である。花嫁が式場につくと、お相伴が親族を紹介する。「謡」(高砂等)の中で、三三九度等ひと通りが行われる。嫁の花嫁道具は家の中に飾られる。(北代田)

座敷には仲人とオシヨウバンさんの指定ですわる。はじめに婿側で名のりをあげる。「婿は○○、家は○○、オジは○○、オバは○○……」。次に嫁方で、仲人がオジ、オバの名を読む。これは別に新客名簿を配ってかわりにする家もある。名のりあげの後に取り結びの盃（三三九度）を行なった。近所の人には別に座敷を設けた。（東片貝）

嫁が座敷に入ると近所の若い衆がすわりこむ。世話役の音頭で進める。仲人は用なしで別のところさがつてしまふ。近所の人が仮仲人で進める。そして嫁さんをひやかす。二度としたくないと思うように次に三三九度の子供が出てくる。床の間にはお膳の上蓬来山が作つてある。ダイコンで男と女の道具を作つてある。毛はキリコブで作つた。おわると嫁さんはさがり、近所の人にお菓子をおみやげとしてあいさつをする。家族には別にみやげを用意する。送り一見がくる。昼すぎに来て三時間くらいいる。座敷はオシヨウバン役の腕しだいで酒の飲ませられる人がよかつた。つぶれるほど飲むのがよかつた。近所の女の子に言つておいてオシヨウバンには酒のつぎ方をかえて少しにした。仲人二人と親戚五く六人が来た。オシヨウバンには飲む人を伝えておいた。（荻窪）

若い人の座敷（青年座敷）は隣の家になることもある。六座敷が客でいっぱいになった。オテツダイの人の座敷で台所も使うことがある。

（東片貝）

蓬来山の鶴亀は作物で作つた。大根で女衆の持ち物を作り、里イモのシンボルを作つた。かざりはヒロハバのお膳の上に松竹梅をかざり、里イモを切つたりして高砂のジイサン、バアサンを作りかざりにした。三三九度に組内の適当な子供（小学校入学前後の男女）二人で取り結びの酒をつぐ。この時に謡をした。おわると「めでたく取り結びおわりました」「おめでとようございます」「オラクザでおねがいます」と

言い、ハカマをぬぐ。ハカマは近所の人たたみ、嫁方、婿方でまどめる。のち「のめ・うたえ」になる。三三九度で、おじ、おばと盃をすすめ、末座に両親がいて「おさめ」の盃をする。これが親子の盃になる。（東片貝）

青年の人が司会をする。雄蝶・雌蝶が盃についだ。謡があり、途中で婿がいなくなり、仮婿ができる。のち婿はもどる。「おめでとようございます」でおわる。取り結びの後に親とあいさつをする。（三三度）

取り結び。床の間の前に婿と嫁。二人の両側に仲人。北側に二人待ち女房がいる。親戚は両方で十く十五人で、夕飯食べたくらいで帰る。青年会の若いものが司会をする。はじめのあいさつ、三三九度。三三九度は男女の子供（雄蝶、雌蝶）が行い、次に親に杯を順にまわす。謡は四海波「イッケヒラクレバ……」などをする。中央には、島台の上

蓬来山オクラを作り、笹と松の上に、鶴と亀をおいてある。謡の最後の四海の波の辺で、婿さんが逃げる。一通り進み、おわりのあいさつとなる。その最中に親戚は飲んで、食べているが、早くに帰る。あとは仲人さんに頼む。婿とりの時は、嫁さんがあとですわる。また、嫁さんには蛭シメのすいものをのませる。すると流産をして、オミヤゲッコをくだすという。取り結びののちは、若い衆座敷になる。嫁は仕度をかえて、酒をつぐ。（関根）

式の時、床の間の中央やや北に婿、その北に男の仲人、北の列に親戚、北東の隅にオシヨウバン。中央のやや南に嫁、両側に待ち女房、その南に女仲人、南の列に兄弟など、東の中央に小三く四年の子供が二人いる。（北代田）

床の間の中央に、婿と嫁、南西の隅に両親、北の中央に近所の人と待ち女房、東の中央に雄蝶、雌蝶がいる。式は、はじめに若い衆の謡い込みで、高砂をうたい、クワデを麻でしばつたものを持つている間

を通つて入る。待ち女房は、前に帯で、タイコの中に手をかくしている。江戸樓。緋の帯のことがある。これは家柄により、「今日の待ち女房は緋の帯ツキでいいねえ」といった。四海の波静かに三三九度になる。近所の小さい子供が行う。次に両親に盃がくる。この間、送り一見は中宿にいる。婿の逃げるのではない。上細井では蜷のツユスえと言つた。飲むとオリルので、飲まないと思はれた。「ためし」にした。お色直しになり、嫁さんがお茶をさし、お茶菓子を出す。座敷はわかるが、同じこともある。一杯のんでおわりになる。長くかかる例では、前日が、キンピラ、ソバ作り、当日が婿の一見、二日目御祝儀(十一時〜三時)、三日目、カネツケと近所まわり、四日目、里がえりとかかつた。(川原)

取り結びは参加は近所の人のみで、近所の人が進めた。謡の高砂をうたつた。庭から謡つてきて、嫁さんが入つてすわるまでです。取り結びがおわると親戚が中宿より入ってくる。取り結びがおわる時にはまた謡をうたう。三三九度の次に披露宴となる。むこの親戚は、送り一見の後には帰つてしまい、披露宴には参加しない。近所の人だけ。迎えの一見にゆかない人で披露宴に参加した人がある。三三九度の時に婿がにげた。婿はにげると言われ、嫁は「にげるぞ」と言われた。「代わりの婿がくるぞ」と言われ、本当ににげたと思つた。(北代田)

カドイレで、カドウタイとして高砂の謡をうたう。「ツキニケリ」ですわるようにうたう。のち取り結びで、オチカツキをして座敷をひろげ、中宿にむかえが行つて送り一見が入ってくる。オシヨバンが進行する。

前日は食べるものの準備をした。当日は、高砂がおわるころに、一見が来た。当日中宿にいてもらつた。引き物はクレ方よりも多くする。若い衆座敷がおわつてから一見の座敷がはじまる。十二時ころからは

じまり、四〜五時ころ帰つたこともある。三日目、嫁さんのしたくが変わり、昼くらいに里がえりがあった。オバさんが女一見で、江戸樓でゆく。もてなしは同じ。近親や女衆とのあいさつがある。一杯でる。膳の内容は同じ。四日目は、嫁さんの近所まわりがある。区長さん、寺など回る。墓まわりに行く事も。髪結いして、丸マゲにし、二時ころ夕方にかけて回る。歩いて回るので、親戚が多いと大変であった。五日目は膳椀の片づけをした。ぬるま湯で二回洗い、張り板にワラをおいてすべらないようにしておいてかわし、絹でふいた。近所の人にはその夜に飲んでもらつた。(田口)

**披露宴** オラクザになると施主の父がふだんのだくになり近所の人をもてなす。青年の座敷には嫁さんが仕度をかえたりしてもてなす。おしゃくをする。そこで青年とおひろめになる。そこへは仲人かオシヨバンがつれてゆく。「〇〇ですけどよろしく」と言う。のちに近所の人にあいさつをする。「チューアイギ」という少し気のきいた服着物)になる。取り結びがすむとその家の娘なので、一番下でせわをした。(東片貝)

披露宴になると青年が加わる。高砂などの謡をした。途中で婿はにげて空席になる。(堀之下)

座敷には新客のみ入る。仲人がこちらの親、兄弟、親戚の紹介をする。嫁さんは仕度をかえて給待をする。次に青年団と親戚の座敷になる。次に近い人の座敷となり午前三時ころまで続く。(三俣)

青年団が三役をした。カミザ・ナカザ・シモザに正装ですわり、婿がわり、婿ドンがわりを取り結びの時にした。順は決まっています、自動的に進んだ。三人が謡の、高砂・四海の波・千秋楽をうたつた。オシヨバンは宴会のほうの司会をした。三三九度の時に婿がいなくなる。三役は「金のワラジでむかえにゆくかい」とか、「奥さんどうする」

「オレがすわるべえか」とか言う。婿さんはすみにさがっていればよい。婿さんをもたらった場合は逃げることはない。三三九度の二度はいるが三度目にはいない。三三九度は子供の雄蝶・雌蝶がついだ。

(小坂子)

結婚式を見に来た人への振る舞い 特になし。(石関)  
見に来た若い衆に樽を外に出してふるまった。しないところくなことをしない。(荻窪)

庭先で酒をすこし出す。(鳥取)

酒をふるまった。「施主が気づいてはいけない」と言われる。(嶺)

なし。(小坂子・勝沢)

なし。(川原・関根・田口)

ことばではある。(嶺)

床入れの風習 仲人が枕もとで、二人に一ぱいずつ酒を飲ませて、「ここで休め」といった。(鳥取)

明治のころにはあった。ふいた紙をびょうぶの外になげると仲人(女性)がまっていた。(嶺)

仲人さんが酒をついで、飲ませてくれて、布団をかけてくれた。

(勝沢)

寝酒を二本おき、飲ませて仲人はそれで帰った。(石関)

酒をついでくれる。それで帰る。(堀之下)

床入れの盃という。仲人さんが寝床作り、酒もつてきて二人に飲ませる。(東片貝)

特になし。(荻窪)

女仲人がしたことがあり、二人が夫婦になったか、床に入ったかたしかめた。(川原)

話にある。チリ紙をなげて、夫婦になったことを知らせた。仲人は

屏風のむこうにいる。なげられると安心した。(下小出)

話にあるだけ。(関根)

二人を寝かせて、床杯をした。飲ませて帰った。予告はなかった。

(田口)

仲人が嫁、婿に酒を飲ませ、懐紙をフトンの下に入れ、兩人を床につかせる。(上細井)

仲人が布団を敷き、脇に新郎、新婦をすわらせて三三九度をした。

(荻窪)

専門の料理番 近所をよくやっている人がした。男。(鳥取・勝沢)

隣保の人で作った。(石関)

業者にたのんだ。(堀之下)

近所の人が作った。(東片貝)

近所の人と、新客へは魚屋の指揮で作った。(荻窪)

近所の人の手作り。サシミは魚屋がした。(川原)

男衆がして、味見もした。女の人は手を出さない。良く知っている年かきの人指図した。女衆はもてなし、ウドンを作る、並べるなどの仕事をした。(下小出)

男衆が、キンピラ、すいものつゆ、カップシケズリもした。(田口)

本膳 キンピラ、ゴボウ、カライリ、イモ。サシミはなかった。

一見にはメデタイ付。一人五円くらい。(堀之下)

(石関)

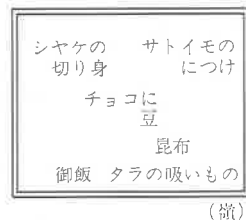
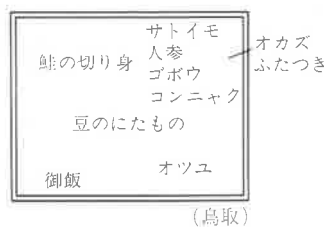
仲人をするサシミが食べた。カマボコに鯛のオカシラ付き(焼き魚)と酢のもの、お吸いもの(気のきいた家で、タラの切りこみ)。

はじめにおちつきで、お茶とおスシが出た。吸いものが三通りに鯉

(東片貝)

の丸料理など七十一品(多い人)が出た。特定のものはない。最後に





ネギヌタが出た。これが出るとおわる。

(荻窪)

豆腐類、ネギは祝儀には使わない。そこで豆腐のオカラ(別名キラス)を使う。これは庖丁を使わないので、ネギヌタが出るとおし

まいになる。一見の人にはオカシラツキが出る。ふつうの客には鯛の菓子がつく。(三俣)

ソバは良いものとされ、ジゲンジのソバや川原のソバが良いと言った。一の膳にはサシミ・酢の物・御飯・煮魚・吸いもの。二の膳に口取りに鯛、蛤ハマグリがついた。これが出ると終りのものがあり、コブタラの吸いもの、松茸の吸いものと出て、松茸の吸いものでおわりになる。

(川原)

まずお茶がでる。桜のお茶がでるのはいい家。おちつきには鮨や生菓子が出る。鮨が多い。酒の座敷になるとネコアシの膳が出る。煮魚・酢の物、フタツキのオヒラに煮たもの、キンピラ、カズノコ、カライリ、吸いものが出た。鯛は折りでつけた。ネコアシの膳に魚がつくことは少ない。つける時は煮魚のところにつけた。(下小出)

一見の食事は、キンピラ、カズノコ、カライリ。一つの皿に「ミツザカナ」で、近所の人を作った。吸いものは、かたい家では、昆布、タラ、卵、トリなど出した。引き物は、ミジンコのお菓子、スルメ、鯉節(大尽の家)、鮭の切り身であった。(関根)

本膳は、会席膳で、引き物をのせた。二の膳に、おすいもの、サシ

ミ、煮魚があった。(田口)

ミジンコ

鮭の切身

カンピョウ・干しイカ

キンピラ

豆

豆腐のから

大根・にんじんのなます

さといも・れんこん

主食は細く長くつづくというのでウドン、ネギヌタ(ネギ・酢・砂糖)が出るを終了。近所でまねかれた人は、家族ぐるみで来て、台所でムシロを敷いて飲食した。(上細井)

### (五) 婚礼後の習俗

嫁の村廻り 式の翌日か、里がえりのあとで、嫁じたくで近所の人と隣保班を回った。(嶺)

二日目に姑さんか本家のダンナと、神社、区長さん、組合をまわった。(小坂子)

女の仲人さんや近所の人と、近所や村の役員の家をまわった。勝沢では村中まわった。(勝沢)

姑さんと手ぬぐいをもって、村の三役の家をまわった。(五代)

式当日に仕度を替えて、給仕をする。顔みせになる。また、式の仕度で仲人につれられて近所をまわる。てぬぐいを一本ずつ名をかいてくばった。昔は村中まわった。親もまわった。(堀之下)

三日目に嫁の仕度をして、神社、区長、近所を回ってから里へゆく。てぬぐいなどをくばる。今は隣保班を回る。(荻窪)

翌日近所まわりをする。近所と親戚をまわる。(三俣)

取り結びの後のナオライの間に仲人か隣保班長(オシヨールバン)が嫁さんをつれて近所を回る。手拭をくばる。(東片貝)

その日に、嫁のおみやげとして、菓子折りをくばる。翌日、近所の女衆の前で、姑・本人があいさつをする。(関根)

翌日にまわった。(田口)

結婚式翌日に近所まわり、神社まわりを花嫁衣装を着て行う。嫁のお茶菓子といって近所の人へのふるまいはたくさん程よい。親、兄弟へのお土産は反物や帯。末長くという意味をこめて、近所の人の本膳として鮭の切り身をのせた。(日輪寺)

(ヨメの父と)

ヨメ

ムコ

結婚してから一週間以内の決まった日に、

ムコの出身地の村

ムコ

村人への挨拶回りを行った。嫁方・婿方双方ともそれぞれの父を伴って回った。

(北代田)

カネツケの祝い 祝儀の次ぐ日に赤飯をたいて、嫁の家に持っていった。その時に、「カネツケの祝いです」と言った。(鳥取)

明治のはじめころまでであった。酢に鉄をつけてしていた。(嶺)

現在七十〜八十の人のおばあさんの代にはカネツケをした。カネツケのお祝いは翌日にオコワを「サンニチのお祝い」と言って実家に持っていった。(小坂子)

していたのは先代の人まで。カネツケの赤飯をお祝いにしして、おかえしは、梅干しと麻だった。(勝沢)

次ぐ日にカネツケのオコワを、むこさんかその他の人が持つていった。おかえしに梅干しと麻をもらった。姑さまは歯をそめ、眉をおとしていた。(五代)

カネツケは三代くらい前にはあった。式の翌朝に嫁の実家に赤飯を

もって行った。(石関)

「カネツケの祝い」と言い、赤飯をふかして持つて行った。それには梅干しをいれてかえした。「シワのよるまでいっしょにいる」との意味。カネツケは小さいころにおばあさんがしていた。(堀之下)

翌朝近所の人赤飯を作り、嫁さんの家に届けた。「サンニチのいわい」と言った。ホカイにいれてもって行った。隣保班長さんの家の息子が持つて行った。おかえしには魚や豆をくれた。魚は生ぐさいもので、坊さんにきらわられて長生きするように、豆はマメにくらせるようにとの意味。カネツケは嘉永六年生れの人をしていた。オバさんは一日しただけ。(東片貝)

翌日嫁の里へ赤飯を「カネツケの祝い」として届けた。カネツケは聞いたことがあるくらい。(荻窪)

「カネツケの祝い」と言った。次ぐ日に赤飯をもつて行った。梅干しをいれてかえした。(三俣)

明治の末、話者のオバアサンの代までであった。次の日に重箱にオコワをもつてゆく。(実際のカネツケしなくても)、実家でもふかして近所の若い衆にくばった。(川原)

カネツケのオコワはのこつていた。祝儀の次の日の朝早くくばった。ついていた人は、十二〜十三歳のころに五十代の人。(北代田)

次ぐ朝、赤飯をふかし、カネツケの祝いとして重箱につめ、嫁の家にもつていった。実際にカネツケをしていたのは、若いころの年寄り。明治二十年代くらいか。(下小出)

赤飯ふかして、嫁さんが、嫁さんの実家に持つて行った。カネツケの祝いとした。フタがなく、重箱を二つあわせてもつていった。(よくあわさるように)。先代の方は、マユをおとし、一年間くらい歯を黒くした。大正二〜三年まで生きていた人。鏡台も、丸い手鏡のついたよ

うなものを使用していた。カネツケは台所のスミからとってきた。

(田口)

式の翌日は、カネツケの赤飯を届けた。朝早くゆく。盛り方で、姑の根性がわかる。けちかどうか。婿とりでもした。おかえしは梅干と麻で、トモに白髪になるまでという意味(関根)

女の子が人妻になったときに、ホケイを祝いに贈った。明治時代のこと。(上小出)

結婚して三日目、婿が嫁の生家へ赤飯を持っていく、大きい重箱にしないとけちくさいと言われる。(下細井)

翌朝、赤飯をふかして、里へ持つていく。カネツケ祝いという。

(荻窪)

御大儀振る舞い 苦労かけた近所の人に、一晚ごちそうする。ごたいぎぶるまいと言った。(鳥取)

オタイギブルマイと言ひ、里帰りの留守の三日目に、同じものを出した。(嶺)

式の片づけの時に赤飯を食べてもらった。(堀之下)

式の翌日に、のこった女一見(女新客)が来た。本日は男が中心。

婿方では「ミツメ」(三つ目)三日目に嫁が里がえりをした。婿のオバさんがつれて行った。もうよその人なので上座になった。(東片貝)

嫁さんの里がえりの後、内輪で、手つだつた人に宴をつくる。夕飯ごちそうする。

嫁の里帰り 三日目には婿が嫁をつれて帰る。五日目には嫁が客に行き泊ってくる。(婿は行かない。)(荻窪)

八朔節句にはシヨウガを一株もつてゆく。おかえしに竹のメカイ(メケエゴ)カゴをくれる。五月五日は「若夫婦鼻をそろえて初節句」と言う。オコワとヒダラを二枚もつてゆく。三月三日には菱餅を持って

行った。一月四日は「婿の御年始日」と言い、嫁の実家にいっしょに行った。実家には嫁の兄弟がきていた。一月十五日はヒマを出す形であそびに出した。初めてのお盆のころは、「生き盆ぶるまい」と言つて嫁さんが帰った。新しいユカタを着せて帰した。嫁の家からウドンを持ってゆき披露した。秋あげのころにボタモチを持って行った。オクンチには呼ばれて行った。(嶺)

一月四日は一尺まっ角の四角い餅を持って行った。一月十五日は、鬼の首もゆるされるといわれる日で、ゆつくりできて泊れた。三月三日には菱餅を持って行った。五月五日には赤飯とタラの干物を持って行った。八朔には赤飯と葉付きのシヨウガもつて行った。かえりに、ミカイ(メカイ)のザルをわたされた。これはいたらないが大目にみしてくれとのこと目荒い。(小坂子)

正月には角の餅を五枚もつていった。実家からは少し小さい餅を三枚もつた。三月の節句には菱餅を五枚もつていった。実家からは菱餅を三枚もつた。五月の節句にはタラの干物と赤飯もつて行った。農休みには干しウドンを持って行った。八朔節句にはシヨウガと赤飯もつて行った。実家からはメカイをもらつてきた。(めをかけてもらうため)アキアゲにはオハギを作つてもつて行った。あとは、お歳暮とお盆に帰つた。はじめての年はとまるものではない、蚕がはずれると言われた。(勝沢)

八朔の節句にはシヨウガ(シヨウガナイ)と赤飯もつて帰つた。かえりに、メカイ(おおめにみてくれ)をもらつてきた。(五代)

三日目はヒザ直しと言つた。二人で帰り、手拭いをくばり村を回つた。正月四日はジンギ。とまらず帰つた。大判の餅三枚と小さい餅を持って行った。小正月の十五日には、何か持つて泊つた。初午にはあそびに行った。泊らない。節句には行った。九月一日の八朔にはオコ

ワを持って行った。ゴボウの節句と言ひ、シヨীগがゴボウを持って行った。秋あげには秋ボタモチを持って行った。アナツブサゲと言ひ、麦をまいてその穴がふさがった祝い。歳暮には鮭をもつて行った。盆と彼岸には線香と砂糖折りをもつて行った。地域の祭りには帰った。

(堀之下)

三日目には丸マゲにして「オサトガエリ」をした。女親がついて人力車で行った。近所の人が寄つて待つており、手ぬぐいをくばつた。この「ミツツメ」は泊まらないが、五ツ目は一晚泊る。あくる日母が送つてきて、近所をあいさつにまわる。(三俣)

実家の祭の時に手作りの物をもつてゆく。蚕あげの時は祝いをもつて帰る。正月の四日には嫁とむこが大判の餅をもつてゆく。嫁、婿の御年始日という。正月十五日は何年かたつとゆく。三月の節句には菱餅を三枚ゆわえてもつてゆく。五月の節句は、タラのひものと赤飯を、八朔の節句には、シヨীগと赤飯をもつてゆく。お歳暮は、鮭を持つて行った。だんだん小さくなり、のちシャツになつた。女一見はなく、ヒザなおしが五〜七日目(三日目の例もある)にあり、姑さん、お嫁さんがゆく。嫁の母が送つて帰り、近所をあいさつして回る。「ふつつかな娘だがよろしく」と言う。(川原)

婿の御年始日は正月の四日。その他、節句などのモノ日にゆく。

(関根)

お歳暮のころには鮭をもつて行った。祭りにも行った。九月一日のシヨীগの節句には、葉付きのシヨীগ、タラのひもの、赤飯をもつて行った。(シヨীগがネエということ)。麦まきがおおると行った。アナツブサゲと言う。(田口)

三日目、姑様に言われたものを持っていった。(下細井)

結婚して初めての夏の盆休みに、実家に新しい着物を着て、婿と一

緒に帰った。恥しくて、離れて歩いた。生き盆と言つた。(下細井)

三日目に親戚の女の人と、泊らずに実家に帰る。(女一見)。五月五日に塩だらを赤飯にのせて里帰り、九月一日に葉つきしょうがを赤飯の上にのせて里帰り。(日輪寺)

本席の翌々日、日帰りで嫁、婿一見に行けなかつた親類、近所の人などが嫁の実家に行った。菓子などのみやげを持って行った。嫁や婿もそれぞれみやげを持って行った。(上細井)

式の翌日は嫁の近所まわり、三日目は里がえりをする。泊つてこられない。五日目、一泊できた。(三俣)

式の五つ目に帰る。(端氣)

仲人礼 お金をすこしと、お酒一升もつて、二人で仲人の家に行つた。(鳥取)

お金は相談し、むこ六嫁四の割合にした。あとのつきあいは人によるが、一生ついてまわる。三年は塩鮭もつて行った。(嶺)

お金にお酒をもつて行った。結納の何割かであった。くれかたが六四で多かつた。(小坂子)

酒とお金でした。婿さんは高く、ふつうが三十円のころに、五十〜百円した。(五代)

三年間は、節句、歳暮、御年始した。(五代)

お金でした。(今は三〜五万)はなむけによる。その後のつきあいは、三年間は親のところと同じように、節句、八朔、お中元、お歳暮、お正月とした。仲人が死んだ時は子として夫婦でおとむらいに行った。(石関)

おちついたところに、仲人礼に婿方と嫁方の父が行つた。樽立ての一升の借りがあるので、二級酒なら一級酒へ、一級酒なら一級酒二本を持って行った。仲人はあとまで責任があり、子にはお産見舞い、節句

にはおひなさま、入学の祝い、七五三の祝いをした。仲人した子が死んだ時は仲人子として扱われた。(東片貝)

現金と酒。両方からなので二升になった。なくなるまで親としてのつき合いをした。三年間はお中元、お歳暮をした。(荻窪)

お酒とお金。クレ方三分でモライ方七分でわけた。(三俣)

両方で仲人に一升ずつとお金。モライ方が七分とクレ方が三分か、六・四にした。金は少ない。(川原)

時代によるが、お金を少し、モライ方七分でクレ方三分。両方で行った。(下小出)

金と酒一升。金は結納金の額による。式の費用も、モライ方六分でクレ方四分で出した。(関根)

お金と酒二本くらい。結納金五円の時に、二十〜三十円。酒は一斗樽で二本使い、全部で二百円くらいかかった。(田口)

結納金の上書きに、五十円と書き、三十円のみ現金をいれた。(体一つで来てくれということ。)(田口)

離婚 ハダンになったと言う。(鳥取)

エンキリと言う。ゴケとかオトコゴケとか言った。(嶺)

エンキリと言った。(小坂子・五代)

ボッコレタ・エンキリという。話し合いで決まり、くれたもののみ

(白ムク・家具など)もってゆく。デモドリという。(東片貝)

エンキリになったという。(荻窪)

エンキリ。嫁さんの場合は、タビツケエリと言った。(川原)

ほとんどなし。(関根)

ほとんどなし。(田口)

逆縁 戦死、病死の時に弟と一しよになる例があった。(嶺)

再婚 弟と結婚して家を継ぐ例があった。(堀之下)

弟と兄嫁の式があった。それほどの式ではなく披露だけ。姉が行き、死に、妹がまた行った例がある。式はした。ナオツタという。(荻窪)

式は一見がなく、式だけであった。(川原)

## 四 葬送儀礼

### (一) 葬式の習俗

葬式の呼び名

ソーレイ。(鳥取・小坂子・勝沢)

ジャンボン。(嶺)

ソーシキ。(石関)

オトムライ。見送りには一戸一人出た。区長さん中心に村中に触れを出した。今は百八十戸だが触れ板のころは三十八戸。のち五十戸になった。(堀之下)

ジャンボン。(荻窪)

ソーシキ・オトムライ。(三俣)

ソーシキ・ソーレイ(昔)。(川原)

ソーシキ。(北代田)

ソーシキ。(子供のころジャンボンと言った。)(下小出)

ジャンボンかトムライ。ソーレイとも言った。(田口)

ソーレイ。(関根)

死の予兆 カラスがさわぐと人が死ぬ。(鳥取・嶺)

カラスが鳴く。自分の方を向いて鳴くと、自分ではない。シツポを向けると自分。シツポを向けて鳴いている人にはその声は聞こえていないと言う。(小坂子)

カラスが尾をひいて鳴く。(勝沢)

ヒトダマ。星が流れるように、六〇七cmのものがフワフワとびきえた。葬式で墓に行ったら会った。(鳥取)

ヒトダマは二十歳前に見ればあとでも見るけれど、二十歳前に見ないとずっと見ない。(嶺)

なし。(石関)

カラス鳴き。二人死ぬと三人目が死ぬ(必ず三人になる)。友を引くと言う。朝見る夢は正夢で父が半月前に夢に出た。

ヒトダマ。十才のころと十七才のころに見た。寺の方にいった。ヒトダマは若い時に見なければ年とっては見ないと言う。ヒトダマが出た時にオバアサンが死んだ。

寺。女の場合は水をくむ音、茶碗を洗う音がする。雨の日は傘かささして、カタカタ下駄の音をしている。男の場合は玄関で男の道具の音で、歎なげの音がガタガタとする。

仏様のものがかけると人が死ぬ。梅干しがかびると人が死ぬ。その家に変化があると言う。(堀之下)

カラス鳴き、夢見が悪い。夢枕に立ったことがある。(荻窪)

カラスの鳴き声。ヒトダマ。近所の人がなくなった家に行った帰りがけに、家から出てなくなった人が生まれた家の方に行ったのを見た。

(三俣)

カラスが鳴く。ヒトダマ。生きている人が夢枕に立つ。(川原)

カラス鳴きが悪い。(北代田)

カラス鳴きが悪い、梅干の味が変わる、いたむと何かある。正月に梅が黒くなったら父が死んだ。ツバメが来なくなると何かある。女衆が、一番はじめのクチアケに死ぬとその年は葬式がたぐさんある。

(下細井)

カラスが鳴く、鳴き声が悪い。(下小出)

カラスの鳴きによる。たぐさん鳴くとよくない。かすれたりする鳴き方により、ケガ、火事、死があった。大正六年に子供が死んだ日もそうであった。(田口)

カラスの鳴きが悪い。シッポをむけて、むけた方が死ぬ。カラスが家のまわりをあるく時に、なくなる家の人は声がわからない。(関根)

カラス鳴きが悪いといった。誰か死ぬんじゃないかという。口で知らせて尾で家を知らせるといふ。他人には聞こえても、家族には聞こえない。その人の鼻筋がまがると、もう長くないという。(三俣)

魂呼び死水 井戸に向かって大声で呼ぶと生きかえってもどつてくる。(嶺・小坂子・勝沢)

古い井戸に向かって「助けてくれー」とさげんだ例がある。結局助からなかった。(石関)

井戸に向かつて大声で名前を呼んだ。「肺炎で寝ていた時に、奇麗な花のあるところにいた。オバアさんが『シゲ・シゲ』と呼ぶのではつと生きかえった。」「寝ていて天国が見えた。『ホレみる、あんなにきれいだ』と言った。」死水は綿に水ふくませて口にふくませぬらすだけ。(堀之下)

あぶなくなると、地獄で引かれるので、耳のそばで「呼びもどし」をした。死水は口を布でしめらした。(荻窪)

井戸に向かつて大声で叫んだという話がある。(三俣)

竜蔵寺でおがんでもらった。丈夫になるならだんだんもどるが、だめならすぐに死ぬ。死水は、綿で口に水をつけた。死ぬ前はのどがかわくと言った。(川原)

井戸で大声で名を呼ぶと生きかえる。死に水は、脱脂綿に冷たい水をしめしたもので行った。(北代田)

なし。(下小出)

枕もとで、母が子の名を呼んだ。生きかえった。(田口)

死にそうな人にむかつて大声で呼ぶ。(関根)

死んだ時、井戸の中に名をよぶと、よみがえるという。(三俣)

死後の対応 神棚に竹の葉をあげる。その家の総領が北枕にする。

布団の上に刀かナタをおく。(鳥取)

ブクをきるといい、神社まわりや行事はしなかった。枕なおし(北向き)にした。刃物・キレモノをおいた。神棚に笹をおくが、それは

他人の第一訪問者がするきまりである。(嶺)

笹の葉を神棚の前においた。枕を北向きにして刃物をおいた。手を

組ませた。(小坂子)

北向きにして、刀(男)とか刃物(女)をおいた。仏壇、神棚に笹をあげた。「後生願いは北枕」と言った。(勝沢)

北向きにする。花・線香・ローソクをおく。布団の上に刀物を置く(キレモノならば可)。仏・神ともに笹でかくす。(石関)

北枕にして上に刀などの刃物をおいた。これは猫がとばないようにである。猫は魔物だから死んだ人が生きかえる。棺にクギぶつてから後、おがんだ後は声をかけてはいけない、帰ってきて返事することがある。無言でみせることになっている。

北向きにして、手を組ませ、体の上に刃物をおく。猫が死人の魂にはいりこむから。さらに近所の人に来てお茶を飲む前に笹をひく。仏壇は十三仏をかける。稲荷までのあちこちの神に笹をおく。(荻窪)

身内の人が枕直しをする。わき見をせずに一本で行くように花も一本。御飯をたき、山盛りでハシを一本たてる。手を組ませる。刃物を置き魔物よけにした。刀は半分ぬいておいた。神棚は紙に「宮川」と書いて貼った。(三俣)

刃物をのせておく、手を組ませ、アゴは口があかないようにてぬぐ

いでしぱり、オムツをかけた。昔は湯カン後、出るものをすいとるよ  
うに木灰を厚くしいた。すべての穴に綿をいれる。神棚に笹葉をお  
き、仏壇をしめる。(川原)

枕なおしで北向きにする。魔よけで切れ物をおき、顔に白いキレを  
かぶせる。ネコがまたぐと生きかえるという。神棚は、近所の人  
の葉をおく。半紙に「宮川」と書いて神棚にはる。仏だんはしめてお  
く。(北代田)

神棚に竹の葉をあげ、仏壇はしめる。北枕にして刃物を上にあげて  
おく。(下小出)

手を組ませ、北向きにする。刀か鎌などの刃物を上におく。鎌はも  
う使えないのでいい鎌はおかない。使った鎌はすててしまふ。血縁で  
ない人が竹の枝を切つてわたす。「笹をわたす」「オカミガクシ」とい  
う。一週間とする時は家族がする。仏壇は四十九日か三十五日までは  
開けない。他の神ではない。四十九日までは手をあわせない。(田口)

手を組ませ、北向きにする。神棚に笹をしき、仏壇はしめる。魔よ  
けで刃物を体の上におく。(関根)

遺体には、刀をのせて魔よけにした。何もなければ鎌でもよい。女  
の人ははさみでもいい。刀はさやからちよつと光つた所を出しておく。

神だんには、笹をおいてかくし、仏壇には、ふたをしてしまふ。入り  
口に、白の絵をさかさかさに貼る。(三俣)

死者への供物 玄米を煮たものを茶碗にもつた。お膳に玄米の御飯  
と、澄まし汁、枕団子を九個のせておいた。(鳥取)

まん中のくぼんでいる水のみ団子を十二個と玄米の御飯のオタカモ  
りにしたものに箸をたてたものと味噌汁をお膳にのせてそなえた。

玄米御飯に箸をたてたものと、径六〜七cmの団子をおき、一本の線  
(嶺)

香たてた。(小坂子)

枕団子は六コ。玄米(クロゴメ)の飯は高くもった。粉つくる白は左まわしにした。四十九日まで、使ったナベは外においた。(勝沢)

玄米の枕団子を六つと、玄米の御飯をそなえた。御飯には上に箸をさした。御飯は外で、三本足の台でたいた。(五代)

御飯の山かけにした。団子は神葬祭でなし。(石関)

死んだ時は御飯のみで、箸をさした。水と線香をおいた。また、茶椀に六つ大きな団子を作り祭壇の前においた。別に四十九の団子を竹の棒にさし、さらにワラの束(十五cmくらいの高さ)にさした。団子は作ってから半分にして棒にはりつけた。外側が団子に見えるのでよい。四十九団子は戦後なくなつた。今は筆で紙に書いている。(堀之下)

お膳に団子の山盛りと御飯と線香をおいた。団子は重箱にいれ、墓にかけた時に「カゼをひかないように」と食べた。本人の使った茶椀に御飯山盛りで箸を二本さした。(荻窪)

花一本、御飯山盛りで箸を一本。団子を七つおいた。そのうちの三つは四角はまん中のへこんだ水のみ団子である。これを毎日、一週間作つた。(三俣)

丸い団子四個と、つぶした水飲み団子を六個皿の上におく。一輪花とお膳をおく。子が来ると枕なおして北枕にする。つゆは団子のゆであお湯に波の花をおいたもの、洗わない玄米を一杯分とり、煮る。近所の年寄りがした。(川原)

線香をたく、お膳に玄米をたいた御飯をおき、箸をたてる。茶椀に小さい団子を五個おいた。式のあと、水飲み団子を五個(五く六cm)を茶椀におく。(北代田)

団子をおく、大きいのが三個と小さいのが六個。六個のうちに水飲み団子が入る。ないと仏が泣くという。水をのむ団子という。玄米の

飯を作り、箸をたてる。体の上に刃物をおく。(下細井)

枕団子を茶椀に三く五つ入れる。近所の年をとった人が米の粉をひいて作った。上に箸をたてる。御飯の時は上に箸をたてる。(下小出)

玄米の粉で大きい団子(枕団子)を六つ、つゆの椀にいれた。御飯は大盛りで、箸を一本さしておく。湯灌をするまでは団子をおいておく。花は一輪さして、線香は四十九日まで一本。湯灌がすむと、祭壇におかれ、普通の並べ方のお膳になる。水のみ団子は葬式の日に十二コあげ、ヒトナノカごとに四十九日まであげる。煙のあがるうちはあげる。すぐ墓にかけた時は、墓にそなえる。(田口)

机を出して花を一本あげる。茶椀に一杯分玄米をとがずに煮る。大盛りにして箸をたてる。団子は大きいものを六個おく。(関根)

通夜 身内の人が一晩「オツヤ」をした。(鳥取)

近親の人のみオツヤをした。お通夜の晩にとまると、その人は一週間しないと言われない。(嶺)

オツヤは近親のみで、交代で線香をたやさなかつた。オカミさんの時に、ダンナがだいてねた例があつた。(小坂子)

オツヤは近親の人がした。組の人は途中まで。(勝沢)

あまり例はないが、一晩中線香をあげた。三晩はそばにねるものと、一週間はそばにねるものと言われた。(五代)

オツヤという。親戚などがくる。二時間くらい。昔は夜食を用意した。(石関)

オツヤ。昔はなし。親戚の人のみ。昔は前うしろのオジイさん、オバさんがきた。清めをして一晩中マクラモノになる。一緒に寝た。施主が一番近くに寝ている。(堀之下)

オツヤという。ある時刻までにはいる。子供などはその晩とまる。その寝はない。(荻窪)



オツヤという。添い寝はないが、夜ふかしをして話をしたり、子供や、つれあいが、その夜そばで寝ることはある。(川原)

同じ部屋に近親者が寝たもので、線香を断やさずあげた。(下小出) 昔は腕もとに寝た。子や孫。酒盛りはよく、夜明かしたこともある。(田口)

生前の事を話し合った。線香を断やさないようにした。(関根)

湯灌 近所の人の進行で、家の人がシキビの葉をゆでて、その湯でハンカチしめらせてした。親戚もした。のこりは川へ流した。(鳥取) おい、めいくらいまでの親族がした。昔は川に行つてみそぎのまねをした。湯灌する人には施主がフンドシを出した。フンドシでした。

酒を口にくんでふきかけ、シキビの湯をわかつて脱脂綿でふいた。

(嶺)

はだし、下着でした。冬でも川で足を洗うので、すそまくりは寒かった。湯灌の桶はもう使わないので、すて場にすてた。(小坂子)

はだかで、ジュバン着てやった。洗つたあととはだして川に行つた。

洗う湯はシキビで作つた。のこつたのはふてた。(勝沢)

酒ふきかけたあと、シキビで作つた湯でふいた。(五代)

子供と親戚でした。着物は袷で白いものを使った。昔は着物はサラシでいいぬいにぬつた(糸のシリは結ばない)。体は酒でふいたが昔はシキビで作つた湯でふいた。湯は、三角棒で炉を作り、いらぬ古い鍋で作つた。体をふく時はサラシの小ぎれで、シリハシヨリをし、線香をたきながらした。のこつた湯は、川に足洗いにゆき流した。(石関)

血を引いた身内のいとこくらいまでがした。三本の台で、鍋をむだにして、シキビを外で煮た。はだかにして洗つた。洗う方は男はフンドシ一つ、女はシリハシヨリ。のちに、寺沢川(オッキリ川)に手と足を洗いに行った。天候に関係なくはだしてはだかであった。のこつた

湯は畑に処分し、鍋は四十九日まで使えなかつた。その時の鍋はその他には使えずおいておいた。(堀之下)

兄弟や子がした。仕度はフンドシだけのはだかで、寒い時はシャツを着た。一坏清めを口にふくんでからした。体は、シキビをにて、ぬのをしめしてふいた。体には酒をかけた。のこつた湯は墓にすてた。のち川へはだして行き、きよめた。(荻窪)

線香を一輪つけておいた。酒で体をふいたが、前は三本の棒組み合

わせて鍋を下げ、ニワトコの葉を入れた湯で湯灌をした。のち川へはだして行き、波の花で手足を洗い清めた。のこつた湯、布団もすてた。(三俣)

(三俣)

近い人を行つた。庭で三本柱で鍋つるして、シキビの葉を煮た。今は酒。やる人はフンドシ一つで、終つたあととは近所の川にゆき、手足を洗つた。のこつた湯はその辺にすてた。(川原)

三本棒をたてて、鍋をつるし、シキビの葉を煮る。その湯でふいた。したくはフンドシで、着物のシリハシヨリ。畳をあげ、板の間にし、酒をふきかけてからガーゼで湯をつけてふいた。湯はしよい樽にいれ、ふいて樽の中で洗い、次の人に送つた。あとで川にすてに行つた。(北代田)

(北代田)

身近かの人がシャツで行つた。昔は帷子カケビロでした。しよい樽ツルに、シキビの葉を鍋に煮たてた湯をいれ、なくなつた人をふいた。手ぬぐいを切つたものでひたいをふいた。使つたものは桃木川にはだしてながしに行つた。(下小出)

三本の竹を組み、縄で古い鍋をつるした。鍋にシキビをいれ煮た。あとでその鍋はすてる。その水で体をふいた。水の中に湯をいれてちようどよくした。また蓋はしなかつた。そこで、「水の中にお湯はいれるものでない、湯灌の湯にしない」と言つた。蓋しないものは縁起の悪

いものといい、「どんな少しでも蓋はするもの」と言った。ふく時ははだかになってした。風呂をたき、死んだ人を洗ったものだが、今は上着をめぐり、ふくだけ。洗った人は川に洗いに行った。煮た鍋は一週間は使わずで場ですてに行った。そこには何でもすてた。三敵ほどあり、馬の死んだものもすてた。今は草の原になっている。(田口)

三本柱をたて、シキビを鍋で煮て、体をふいた。経帷子に着かえていた。(関根)

昔はしきびの湯をわかして洗った。わらをしいた上に寝かせ、ひしゃくで湯をかけて洗った。(小神明)

**死者の装束** 帷子はサラシで近所のオバさんが作った。背にナムミヨウホールンゲキヨウと書いてあり、子供が着せた。白たびは左右反対にはかせ、ワラジと手甲をつけた。おさいせん(文久銭を十個くらいまで)をいれた。(鳥取)

ひたいに三角の布をつける。経帷子をきせた。紋付きの着物を着せる時は、帷子を上にかぶせた。帷子はずつたいの人がサラシで作った。そそうにぬうものと言う。手甲に脚絆、ワラジをつけ、わからないようにかくし銭をつけた。(嶺)

ひたいに三角のキレと、手甲、帷子、ワラジ、足袋(左右反対)をつけた。帷子はひきぬきにするので、玉をつけずにあらくぬう。

(小坂子)

帷子は年よりがサラシでぬった。糸には結び目を作らなかつた。手甲、才腰、ワラジ(今はゾウリ)をつけた。かくし銭は下褌につけてもたせた。(勝沢)

帷子はサラシで、玉をつけずにぬった。子のいる人はぬえず、団子も作らなかつた。子供を産まなくなつた人がした。手甲、ワラジ、足袋はひつくりがえしにした。お金をもたせた。親より先に死んだ人は

左前にした。身近かな人も三々四人三角のほうしをかぶつた。新盆に、三角ぼうしに米をいれて寺に持って行った。帷子などぬつた針は若い人にやると縫い物上手になる。(五代)

年をとつた人がぬつた。お膳を持つ人用の三角のきれも作つた。

(石関)

サラシの着物で上に自分の着物をかけた。サラシの着物は昔は念仏バアさんが作つた。糸にはむすびをつけず、返し針をしない、ぬい切つたらポツンと切る。長い針でぬつたが、その針でぬい物をするぬいものの腕があがつた。着物以外には手甲、脚絆をサラシで作つた。その他にワラジ、足袋をはかせた。足袋は左右逆であるが、年をとつた人は「天寿をまつとうした」としてそのままはかせた。着物も普通に着せた。帯はみんなしげらないで置くだけ。さらに頭に三角のきれをつけ、ふところに二十円くらいもたせた。七十〜八十からは本膳に赤飯をたいた。(堀之下)

通夜の前に経帷子をサラシで作つた。ぬう時に結びはつけなかつた。ダンナの時は奥さんの三角の頭巾も作つた。その他、手甲(返し結びでなく、ひきぬいた)、脚絆、頭の三角のキレ、ワラジを近所の人を作つた。親より早い人は着物を左前にした。年寄りには普通に着せた。着物のすそに六道の辻にいる餓鬼にわかる金(紙の金)をぬいこんだ。わけないと通れないと言う。(萩窪)

装束は年寄りがぬい、上に自分の着物をかけた。結び目はしなかつた。三角の布も昔は作つた。着物は左前にし、足袋はほぐして底なしのものにした。さらにワラジ、手甲、脚絆をつけた。また左のすそに一〜二銭つんだ。(三俣)

旅銭を札か一円で、裾をつつみ、麻でしばつた。死装束は近所の年寄りが、麻の細い糸でぬつた。糸のシリはむすばない。サラシのエリ

なしで作った。(川原)

ゆかた、経帷子カケヒラを着たが、脚絆、手甲、ワラジとも葬儀屋から来た。

(北代田)

サラシで作った。麻で縫い、結ばなかった。経帷子に足袋、額の三角のキレ、脚絆、六文銭をいれた。六文銭は本物の寛永通宝をいれた。十個で一銭の価値があった。(下細井)

ゆかたの上に、サラシで着物を作った。足袋は先のほうをほころばせて、足を出してはかせた。カクシゼニを十銭玉などを六個、着物をかけ、下褌ツツにかくしてしばっておく。「小づかいに困る。」と言った。

(田口)

昔は旅じたくで、旅銭をつけた。はぐれた時に困るのでつけた。カクシゼニと言った。(関根)

納棺 たて棺が多かった。まわりにはモミぬかの袋をいれた。大きさは、たてよこ一・三尺〜二・五尺で高さは四尺で松板を使った。寝た形で死んで固くなれば寝棺を使った。大尽は壺ツボを使った。(鳥取)

たての棺を使った。ハヤドウグといい、近所の大工さんが作った。大尽は前橋で買った蓋付の水甕ツボを使った。(嶺)

すわり棺であぐらをかくようにしていれた。棺は買ってくるが、元は近所の組合の人が木を買ってきて作った。まわりに紙をはった。ヌカ袋をすきまにいれる。愛用のキセルなどをいれ、三途ミチの川のわたし質の六文銭をすそにこっそりいれてしばった。(小坂子)

たて棺であった。手を組ませ、ひざをおっていれた。ふだん使っていたものを一緒にいれた。(勝沢)

たて棺で、松の木で大工さんが作った。壺は腹膜炎でおなかの大き

くて死んだ人用を買ってきたことがある。(石関)

昭和四十年まで土葬であった。三尺の深さであぐらをかかせて、立っ

ていれた。病気でオオヤミした人は寝棺であった。棺は大工さんに頼み、上に宮ぶたをつけた。内にはメガネとタバコ入れ、紙のふくろにいれたヌカをいれた。甕ツボの棺あり先々代(明治中ごろ)に使用。茶褐色の土器であった。蓋に石を使うところもある。かついだ人には六尺のフンドシとワラジをくばったが、運ぶのがりヤカーになり、ゴムゾリをくばるようになった。(堀之下)

たて棺で、松の木で作った。大きさは「六尺の四ツ切りでいい」と言い、六尺の板を四つに切った尺五寸の大きさであった(小さいもので)。足を上にもちあげて入れたが、体の大きい人は、家族より「大きいのを」との注文があった。墓はせまく、ほとんど掘りかえしがあった。寝棺は戦後になってからである。甕ツボの人はたまにあった。土焼きのものであった。(荻窪)

土葬でたて棺を使った。水がわくので甕ツボの棺を使ったことがある。木の蓋をした。甕ツボの中はきれいな水になる。(三俣)

はじめは、買ってきた甕ツボに曲げていれた。のち木のたて棺になった。買ったり、組合の人が作ることもあった。のち寝棺になった。

(川原)

たて棺は松の木で作った。高さ三尺、たて・よこ二尺×二尺で、葬儀屋でヌカマクラをいれた。財産家は七十〜八十cmの甕ツボを使った。蓋をした。(北代田)

二尺八寸四方で、六分板を作ったたて棺。病気で長く寝た人は寝棺を使った。甕ツボの棺は大尽の家で使った。明治四十年代ころは、松の木の蓋の上に二寸五分の石をおいた。のちにあげたら、きれいな水になっており、白いきれいな骨になっていた。骨は日にあてたらくずれた。甕ツボがこわれていたものでは骨がベッコウ色になっていた。(下小出)

たて棺は大工さんに頼んで作った。松材でかわかし、紙をはった。

甕はマレであった。タテ棺はたて・よこ二尺に高さが四尺なので、「四間・二間の家は作るものでない」と言った。絹の着物を着せていれたら、おじいさんがちゃんとしていた。(田口)

たて棺では、入れやすいようにすくになくなった人の足を組ませた。甕棺もあり、石の蓋をした。(関根)

土葬の時は、たて棺で、大工に造らせたり道具屋で買ったたりした。蓋は、石で釘を打った。(小神明)

準備と告げ 準備は近所の人が分担を決めわりあてる。告げは組合で分担して、二人でゆく。出棺の時刻と来てもらう時刻を書いたものをわたした。(鳥取)

告げは隣保班で二人でゆく。「いく日に死んでいく日に式」と告げる。しきたりとして、「うけた方では清めを出す。ハラップサギとして御飯を一杯食べてもらう。」の二つがある。(嶺)

告げ―二人で告げに行った。告げが来たら食べさせるきまりがあった。道具は隣保班で作った。(石関)

係は隣保班で決定した。お膳は奥さん、位牌は施主、着物は……。告げは二人ずつ行った。大正昭和は自転車で行った。隣保の人がゆく。来たらアガリハナで座敷には上げずに御飯を食べさせるきまり。

湯灌・式・出棺の日時を言った。(堀之下)

隣保班長と近所の経験者が中心に、買い物、作る物を決めた。だいたい作る人は花籠など特技で決まっていた。告げには近所の若い人が二人ずつ行った。「…が死に…日に葬式で来ていただきたい」と言った。告げに行ったら「時間に関係なく最初の家を出してきてくれたものをごちそうになれ」と言われた。告げが来るとすぐに御飯を煮た。そこで、たきたてのメシは「告げのメシと同じ」と言った。告げに行った人に酒を出す地区と、弁当代を金で出すところがあった。近くは歩きで、

遠くは赤城村・敷島村まで自転車で行った。若い人は遠くであった。正月に行つてごちそうを食ったこともある。(荻窪)

寺の庭に建物作りを納めた。近所で組み立てた。台と屋根がついており、三回り半してから棺をそこにおいた。寺で葬式をしており、そこでお焼香ののち墓に行つていけた。(川原)

告げは二人で、歩きで行った。「亡くなったので、いつから式の執行とか、何時出棺とか」言った。役割は施主と組内で決めた。坊さんや市役所への届けは組内の人が行つた。棺は松の材木を買つてきて作つた。「ハヤドウグ」と言い、早く作つた。(下小出)

告げは若い人が二人ずつ組になつて行つた。告げがゆくと、その家では食事のしたくをして食べてもらうきまりで、まわつてゆくと、しただけで止められてしまう。赤城村や北橋村まで、半日がかりで歩いていった。告げの残つた人が道具作りをしたのでいそがしかった。六地藏・灯籠(大工さん)・天蓋(作つてもらつた)・花籠(作るのは大変だった。できる人をたのんだ)。年寄りで長寿の人の葬式の時は、ゴエンがあるように花籠に五円をたくさん入れた。(田口)

告げは組の人が二人で組になり、葬儀の事を連絡に行つた。行くごちそうしてくれた。生ぐさを添えて冷酒を出し、芯があつても米を炊いて出した。(小神明)

ある家で不幸があると、告げと呼ばれる葬儀の使者が出た。電話も電報も無い時代だったので、何人もの告げが何方面へも出た。徒歩や自転車で行くのでパンク代としていくらか金ももらえた。朝八時三〇分頃出発した。葬儀する家に近縁がある家へ、お昼ごろつくようにまわつた。わざわざ知らせに来てくれたということで昼飯を食べさせてくれた。ただ、告げ飯といつて告げが来てからすぐにたたくのごはんは熱くて、こわくてまずかつた。酒も出してくれた。(上小出)

葬儀の連絡は二人一組の告げが行なった。訪れた家では、ごはんを必ず出して、お酒もつけた。一人では手落ちがあるからという。(三俣)

祭壇 昔はなかった。(鳥取)

昔はなかった。棺にカンマキのぬのをかけ、前に位牌、お膳、両側に花(最近)。施主花(作り花)くらい。大正七、八年ころ。(嶺)

昔は棺の前にテーブルをおき、おそなえ程度で写真はなかった。

(小坂子)

机に線香と一輪ざしとおそなえをおいた。時に寝棺だが、カンマキをまいた。上に宮をおいた(おかない人が多かった)。竹の棒でしよつて墓地に行った。(勝沢)

机に線香と果物をそなえた。花を一对そなえた。(五代)

棺の前に棚がおいてある。戦後祭壇がハデになった。(石関)

茶布台の上に広い布をおき、上に線香くらいをおいた。戦後の四十年代ころから立派な祭壇になった。(堀之下)

棺があり、前に小さな机とそなえものをした。裏に十三仏の掛軸をかけた。棺はそのまま見えた。夏などにおうことがあり、その対策にまわりにぬかをかこった。(荻窪)

祭壇はなく、花と線香のみであった。(川原)

かざり付きの宮蓋があればよいほうで、花・線香のみであった。

(北代田)

ゴザをしき、棺をおき、手前に花をおいた。棺には紙をはり、カンマキの布をはった。(田口)

チカラメシ 棺の出るときに少しずつ御飯を近所の人にくれた。名は不明。(嶺)

デバの御飯といい、棺の出発の時に重箱に入っているのを一口ずつ食べた。(小坂子)

デバの御飯をくれた。年寄りは赤飯にした。(五代)

列が出る前に作り、持って行ってもらい、墓地で食べた。(石関)  
作っておひつに入れておき、穴回りのあとで一箸ずつ食べた。焼き場ではニギリメシが出るが、持って帰るものではないと言う。

(堀之下)

立ち合った人に一口ずつくれた。つめたくなっている。青い竹の箸を使った。かぜをひかないようにと言った。(荻窪)

野辺にでるときに、おひつから一つかみずつ、近所のおばあさんがくばった。(川原)

穴掘り アナボリといった。組合の人と他に一人いれ四、五人で掘った。順はなく、方法も特になかった。(鳥取)

アナボリと言った。組により、てっだいの人でやる形と、組合で交代で行ない、他の組合に行つて掘るものの二つの形があった。二つ目の形は、A組のアナボリはB組でおこない、B組でアナボリするときにはA組がする形。道具はかりてゆき、墓なおしまではかえさない。他と重ならないように深く掘った。(嶺)

穴掘りは組合でやった。酒を一升もつてゆき、穴を清めた。つまみはキンピラくらいで、酒はのこしてはいけななし、家にもちこまないきまり。施主の近い人の指示で掘った。(小坂子)

近所の人が掘った。穴掘りには順があった。トーフで清めをして掘った。施主が場所を指示した。(勝沢)

その時の担当で決めた。若いものが掘った。(石関)

隣保は家の仕事をして、隣りの隣保が掘った。組み合わせは決まっている。アナッポリで使ったシャベルは土のかかったままで持つてくる。道具は一週間は使わなかった。場所は施主が決め、清酒を一升つける。

(堀之下)

元は掘る順が村中にあつた。ある組の時はある組で掘ると決められていた。今は近所の人が掘る。場所は施主が指定する。墓地管理者に墓の台帳があり、図面により位置・深さを計った。掘る場所には掘る人が酒をまいた。その他、酒とサカナを持って行った。大きさは二尺角で深さ六尺に掘った。道具は墓なおしまでドロのついたままそこに置いてきた。掘りかえしになつたものは出しておき、一緒にいけた。

(荻窪)

隣の組の人が掘った。組み合わせは決まっていた。(三俣)

アナツポリという。近所の人が、酒とオツマミをもち、掘る所の四隅に塩をおき掘る。終るときよめをする。ヒヤヤツコと酒で、ツマミにコウナゴ。スコップの丈は掘った。(川原)

近所でした。交代でした。三組で式の時四組で掘る。シャベルの土は、はらわれないで家にもつてくる。四十九日は使わなかつた。団子を作つた鍋も四十九日使わなかつた。その他の道具も七日はおいておき、そうじをしない。掘る人は、そこに酒をまく、おわると、豆腐と酒で、そこで飲んでもらった。(北代田)

そのクルワでない、違ふ組の人がした。当日に掘つてうめた。掘つておくものではないという。豆腐と清めの酒をもつてゆく。(下細井)

クルワの人が分担をした。当日に掘つた。トメアナを掘らない。朝、掘りに行った。前日は道具を作つた。深さは五尺掘つた。背まではシャベルで掘り、あとは竹でついた。竹を切り、四つに割り、縄でしばり、土をはさんで外に出した。ついている間にだんだんひろがる。国道の西は竹が土をかまないので中に入る。「いつてくらいなあ」といつて入つて掘る。東は土が竹でつくだけでるので入らない。掘る人は、一升の酒をもらった。もちかえらないことになっている。四く五人で一升もらつても困つてしまい、道通る人にもませた。祝いではない

ので酔つては困る。今ほどは酒はのまなかつた。昔は、酒が清めと穴掘りに二升あれば間にあつた。(田口)

組内の人がした。六尺掘り、場所がないと、ほりつかえしもした。

(関根)

六十歳以上の葬式の時、本膳の時に赤飯をつける。親戚にもくぼつた。また、仲人をした子がホカイに赤飯をもつてきた。餅米をつめてもつてきた人もいる。棺箱のそばに、ホカイがたくさん並ぶと、仲人の多い、人徳のある人と言つた。(田口)

野辺の送り 庭まわりはしなかつた。縁側より外に出た。盆中は葬式はしなかつた。葬列は、六地藏・旗・竜頭・トーガイ・お坊さん・位牌・奥さん(おぜんをもつ)・仏衣もち(寺におさめる)・棺・子供・塔婆・長旗の順で、年寄りの葬列には花籠が入る。(鳥取)

庭は三まわり半まわる。墓へは「スグジはしない」(近道はしない)。お盆月になくなつた人がいたらシラジ(ゴマをする瀬戸もの)をかぶせる。(嶺)

送りは大通りを通る。近道(スグジ)はよくない。また葬式にころぶとよくないとか、家畜を鳴かしてはいけないと言う。天蓋の上の赤布は魔除けになるので、小さくさいてわけ、馬のたてがみにつけた。

隣組で仏具を作つたが、それに使つた道具は一週間は使わないきまりで、道具の清めをまずした。(小坂子)

葬列は、六地藏(遠いしんせき)・灯籠・竜頭・シカバナもち・花籠・膳もち・位牌・写真・弓ひき(兄弟か、子の一番上)が並んだ(一部順不明)。棺のうしろには、めい、おいと親戚が続いた。長命の人の葬式では紅なしの赤飯もらつた。(お祝いなので)(勝沢)

列は、六地藏・四本旗・灯籠・花籠(孫のない人はしない)(お金をいれる)・位牌(跡とりがもつ)。天蓋(近い人がもつ)・棺の順。盆中

に葬式のとときにはシラジをかぶせた。これは、「みんなお客に来るのに、来るものか」と石ぶつけるので。(五代)

松明(子)、六地藏・長旗・弔旗・膳・遺骨(子)、親戚の順に行つた。(石関)

六地藏・竜頭・花籠(お金入り)、お棺、位牌(長子)、お膳(奥さん)、兄弟、おじ、おば、一般の順で列を作つた。

縁側から出て三回り半回つた。一つの籠の金を出した。一つは昔は墓でまいたが、今は道でまく。ニードラをジャラジャラボンとならす。ジャンボンと言う。

葬式は正月の三が日と十四、五日にはしない。友引にはしない。盆の葬式はふつうであつた。一軒で二人死んだ時は人形をいけた。

(堀之下)

六地藏・高張提灯(あれば)・四本旗・竜頭・花籠・シカ花(今は生花)・香炉・お膳・位牌・つえ・弓・棺・天蓋(日がくし)・墓標・供物・弔旗・花輪。三回り半庭を回る。(穴まわりと言う)。回るところのある墓もある。花籠には金をいれ、まいて子供がひろう。ジャンボンならし列が出てゆく。(萩窪)

鉦を鳴らす。一番鉦は、お焼香にくる時に鳴らし、近親も仕度する。二番鉦は家を出る時、三番鉦はでてゆく時にならす。順は、六地藏・四旗・竜頭・戸主・天蓋・位牌・棺箱(名前は呼びあげられるが、実際はついていて代理でかつぐ)。カンツキという。(組内の人)がゾーリではこぶ)・お膳持ち(嫁)・カブリギモン(次男の嫁か娘がもつ。次ぐ日に寺まいりに行く時、着物をもつてゆく。今はお金)・香箱・シカ花・親戚。一年に二回葬式があると、ひな人形などの人形をいれる。「二度あることは三度ある」と言う。帰り道は別にする。十三仏が四十九日すぎないうちに動くと葬式が多い。(川原)

出る時に、庭を三回り半回り、坊さんが鉦をならす。近所の人がオイダシ念仏をとなえ、鉦と太鼓をたたいた。順は、六地藏(古い新宅の人で縁の切れる人)・灯笼・竜頭・四本旗・弓(一番長女の夫)。盆中に葬式はない。一年に二回式があつた時は、もう一つ土の山をこしえ、オヒナ様などをいける。「二度あることは三度ある」と言う。

(田口)

葬列は、灯笼・六地藏(提灯)(二人)・竜頭(四つ)・棺・棺にさしかけて天蓋・弓・位牌・お膳・写真・五色の旗・花(こまでは近親)・花籠(孫のある人がもち、出棺の時にゆさぶり金をまいた)。庭で三回り半まわつた。墓でまわるのが本当で、親戚がたもとからお金をあげた。(下小出)

女の人は白ムク、近い女の人(嫁さんなど)は三角のズキンをかぶつた。男は紋付き。順は、六地藏・花籠(孫)・弓・坊さん・位牌・写真・膳・カムリ着・棺・天蓋(内々のものか、新宅の人がもつ)・シカバナ。

(関根)

列は、三回半左回りにまわる。六地藏に灯明二本・竜頭・弓(総領息子が屋根にむけて家を出るときに一本うつ、さらに墓で一本うつ)・棺ツキは孫。お膳(オカミさん)・位牌(長男)・花籠(孫が二本)。

(北代田)

六地藏・灯笼・四本旗(旗の上に竜頭)・棺・天蓋(仏に意見のできる人が、うしろかよこからさしかける)・弓(婿さんか総領で、鬼門に弓をうつ)・お膳・位牌・花・花籠(孫)・シカ花(竹を割って紙をつけたもので、持ちもののない人がもつ)・墓標。(下細井)

棺は故人の子ども四人がかついで墓にいく。六地藏、四本柱、位牌を持っていく。花籠の中にお金を入れて、半分は家を出る時、もう半分は墓に着く時まく。家の庭で七まわり半まわり、墓の近くの三本辻

などで、七まわり半まわる。(小神明)

念仏 葬列が出かけると、家の方でじいさんばあさんが、念仏をした。葬列が、墓につく頃までとなえた。(小神明)

香奠と香奠返し 香奠はお米二升かウドン粉二kgを重箱にいれて持ってきた。線香をつけた。このときはおかえしはなかった。(鳥取)  
新盆にウドンの五〜十本と線香をもってきた。これには、あらたまったものはかえさなかった。香奠にはウドン粉や、米を重箱に入れてもってきた。(嶺)

親戚は灯籠をもってきた。近所の人は、金か、重箱で米を出した。その近所の人には本膳とマンジュウをだした。(小坂子)

お金が多く、近い人は品物だった。引きものはマンジュウかお茶だった。(勝沢)

重箱にお米をいれてもってきた。(五代)

昭和のはじめは三十銭くらい、品物はなかった。おかえしはマンジュウをくばった。(石関)

昭和はじめは一〜三円くらい。おかえしは昭和はじめはマンジュウ一箱で、のちにコップや皿になり、四十〜五十年代に毛布ブームがあった。六十年代はお茶、のり、コーヒースェットなど。(堀之下)

お金が多かった。他人は五十銭。(昭和はじめ)。近い人は二〜三円であった。昔は一般会葬が少なかった。香奠返しはマンジュウがついた。(荻窪)

お金が多く、お返しはお茶、布団皮をかえした。(三俣)

香奠はお金だが、三十五日・四十九日にはウドンがきた。お盆も干しウドンであった。香奠がえしは、九個の箱入りマンジュウで、盆はおハギであった。(川原)

お金だが、古い先は、金でないことがあった。(下細井)

お金と線香。引きものは、サラシなどの反物か砂糖。(下小出)

お金は、オジイさんの時は五銭が多かった。次のオジイさんの時は五十銭〜一円くらい。ソーレイマンジュウを五〜七個かえした。ソーレイマンジュウだけ金がないとこまるぞと言った。モミジの焼き判をつけた。来た人には子供にもみんなくばった。(田口)

葬式の服装 黒の紋付。(鳥取)

一見・葬礼・火事見舞いといい、順にさがる。火事見舞いはたいしたくないもの。もっているもので、いいものを着て行った。(嶺)

黒の着物で参列の人も同じ。(石関)

親戚の人は黒で、参列の人はふつうのしたく。(堀之下)

黒紋付。会葬の人はふつうのしたく。お膳持ちの奥さんは白いキレをかぶった。奥さんが白ムクを見たことはある。(荻窪)

昔、女衆は白ムクであった。昭和初期から今の服装がはやってきた。男は黒の紋付と袴、近親は紋付、羽織、他はふつうの仕度である。(川原)

## (二) 墓 制

葬法 土葬で火葬はなかった。(鳥取)

土葬。(嶺・五代)

火葬は火葬場ができてから。昭和十五年に訳あって火葬にしたことがある。(石関)

病気の人は火葬にした。土葬が多かった。(堀之下)

土葬であった。伝染病の人は火葬にした。「焼き場」というところがあった。(荻窪)

土葬であった。(三俣)

火葬は山に行つて焼いた。石を並べて焼いた。伝染病の人であった。



昭和二十九年からは、みな火葬になった。火葬した所は、今の群馬学院のあたり。(川原)

火葬はなかった。(下小出・田口)

土葬の方法 棺箱の下に縄の網をおき、四すみに縄をつける。縄を子供が長兄より切つてゆく。鎌で切る。(鳥取)

棺係が長兄より切つて行つた。穴掘りが、オダテモッコというモッコを作り掘つた。「オダテモッコには乗るものではない」と言われた。棺の四本の縄は、長男が一人で、エンキリで鎌で切つた。そして長男がはじめに、一つかみ土をいれた。そして、ほかの人が一つかみずついれた。このときに、仲人をたくさんしておく、アナバタがにぎやかになるといった。(嶺)

穴掘りの人がモッコを作り、四すみを長くした。のせておろし、長男がエンキリ縄を切つた。親戚が一つかみずつ土をいれた。一日仕事で、子供も含め、家中でてつだいをした。朝弁当をつめてもらい、みんなたべた。(小坂子)

縄で網をあみ、いれてから土をかぶせる。長男が縁を切るといい、網を切る。砂をかけ、組合の人が山にした。次ぐ日、墓なおしをして、土を盛つた。(五代)

四つ角に縄をつけて入れる。縁切りで鎌で切り、鎌は内にいれた。息子が切つた。(石関)

縄をはり、のせ、長男(当主)が「親子の縁を切る」と言い鎌で四隅を切り、土を手でつかみ入れた。組合のものが山を作り、竹で犬が掘らないように「カッパジキ」を作つた。カッパジキは墓なおしとてり、野位牌をもつてゆく。毎日墓に行き、位牌の下についているものを一枚ずつとつてくる。(堀之下)

棺を「もっこ」にのせる。最後に長男が縁切り縄を切る。そこで「オ

ダテのモッコにはのりたくない」と言う。その後、近親がひとつかみずつ土をかけ、近所の人がうめる。上には宮蓋をおく(全部ではない)。竹でくねをゆう。子供はハジキを作つた。まわりに杉の葉で土がみえなくらいにかこつた。(荻窪)

跡取りが、縁切り縄をナタで切つた。その後で土をいれた。犬はじきのまん中に麻ヒモで石をさげた。のち、作つたもの、御飯をうまけた。(川原)

五尺の穴を掘り、縁切りは長男が行い、ナタで縄を切つた。一本だけ切れば、のこりは近所の人が切り、棺はおろる。土を少しづついれる。(北代田)

モッコを作る。それに棺をのせ四方に縁切り縄を出す。それを鎌で切つた。少し切つたまねをすることもある。(下細井)

モッコを作り、それで穴にいれた。縄は、長男が縁切りで切つた。モッコ用に必要なので、「いつも二房(二十m)の縄は用意しておけ」と言う。(田口)

墓つくり 墓なおしは、ひつぎをもつていった人がやった。形をととのえた。(鳥取)

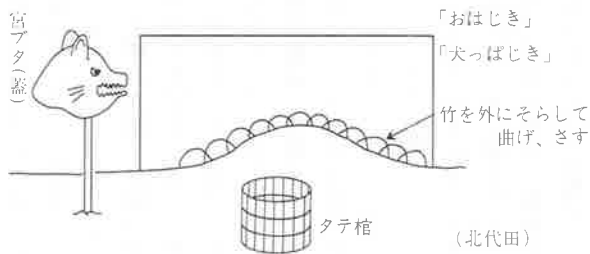
次ぐ日に行なつた。墓なおしという。石をのせた。施主の考えで、メハジキやみこしをおいた。墓なおしは近親者がした。(嶺)

墓には、組合の人が、かついだ竹を割つて犬はじきを作り、クネを作つた。大尽はお宮をおいた。(小坂子)

次ぐ日に、近所の人が墓なおしをした。スコップは七日くらいおいであり、形をととのえ、花をさしかえた。(勝沢)

親戚で土をかぶせ、組合の人がきれいにした。竹をわつたものでまわりをかこむ。宮蓋にのせて墓にゆき、土マンジュウの上においた。

(石関)



土マンジュウで、上にお膳をあげた。前には花で、うしろに墓標。めはじきはない。(三俣)

まん中に石を置き、花カゴをわって、ハジキという竹を四隅においた。(川原)

竹でパツチンをくれる。竹を弓とは反対に皮を表にして作り、いく重にも重ねる。(北代田)

宮蓋をおいた。「死んだら宮蓋ぐらいつけてくれ」と言う。さらに、棺の竹やトツカントツカンの竹(穴を掘った時の竹)で犬はじきを作った。(田口)

次ぐ日に墓なおしをした。いい家は宮蓋をおいた。竹の棒を割ったものをさした。(関根)

盛りあげて、竹を割ったものを、犬が掘らないようにさした。葬式のもの、御飯などそこにおいた。作ったものは、三十五日か四十九日に墓でもそなえた。(下小出)

墓は、土葬。竹を外に「反返し」、「犬つばじき」を立てる。犬などが来て、遺体を掘り返さぬように立てた。棺はたて棺なので、棺穴を掘るのは大事だった。また、すぐそばに宮ブタを立てた。(北代田)

墓の上にもがり板をおく。まわりに立てる竹は、犬つばじきという。石を置いておき、おまいりで石をゆすると仏にお参りが通じるという。(小神明)

幼児葬法 十歳以上は坊さんたのんだ。以下はいけたのみ。(鳥取)

家庭によるが、小さくやった。(嶺)

学校前の子供は葬式はなかった。(五代)

野辺送り後の本膳 出したり、出さなかったりであった。出すときは、ハラフサゲテいってくれと言った。御飯とおつゆ、ひじき(油あげ入りはいいほう)で、葬式マンジュウがついた。(嶺)

浄めの塩 空タライをトボグチにおき、塩を皿にいれておき、塩で体を清めた。(鳥取)

その場で一ぱいのむ。のちタライで足洗うまねをし、塩をまいた。「白を横にした絵」を書いておき、その前でした。(嶺)

タライで足洗うまねをし、塩を清めた。紙にモチツキウスを書いて、横にしてはった。(小坂子・五代)

タライの上で足を左まわしにした。白の絵をおいた。(勝沢)

白を横にして、タライで洗うまねをして塩をまいた。(石関)

白の絵をかき、タライを置き、上で洗ったまねをする。塩をまき、家に入る。(堀之下)

白が横に書いた絵があり、タライの上で足をまわし、塩で清めた。(荻窪)

葬式から帰り、たらいに足をいれるまねをする。そばに、白を横にした絵を書いておく。(川原)

玄関に塩をおいておく。白を横にした絵を書いておき、たらいに水をくみ、上で足を三回まわす。(北代田)

白の絵を書いておき、下にたらいをおき、足をまわすまねをした。そして塩をふる。(田口)

たらいに水をいれ、半紙に白の絵を書き横にしておく、たらいの上で足を洗うまねをする。塩をおいておき、「はらいたまえ、きよめたまえ」と言い、ふる。(関根)

葬式のあとの清めは、タライに足を入れ、塩で清め、足を洗うまねをする。(小神明)

白の絵をさかさにはる。(小神明)

### (三) 死後の供養

法事 七日、三十五日、一周忌とする。オハギを作る。近い人が来て墓まいりをする。新盆には白い提灯でゆく。(鳥取)

四十九日には、位牌分けと、形見わけをする。新盆の時に盆棚を新調することができる。他にはするものでないといわれる。(嶺)

葬式の次ぐ日に、お寺まいりをした。二〜三人子をつれていった。

お金と米一升もつていった。(勝沢)

三十五日か四十九日に法事した。新盆には白い提灯を使った。

(五代)

神葬祭で、十日目にふるまい、五十日でもふるまいと位牌をくばった。

お盆はウドンを出した。(石関)

四十九日はオタナアゲで隣保、親戚の人へオフルマイがあつた。新盆・お彼岸、一周忌にした。新盆は知人が多く来た。盆棚では一つ低い段にあり、おがんで上にあがる。略式では前においておく。(堀之下)

初七日後はオタナアゲ。家の人は七日おき。四十九日には「四十九日たないと死んだ人の魂が家の棟を離れない」と言う。位牌、ユズリをうけた。百カ日は由緒のある家はした。四十九日とほぼ同じにした。一年忌もした。(荻窪)

昔は初七日までは、毎日来た。オハギやゴモクなど出したので大変であつた。法事はミナノカくらいまで、あとは四十九日にした。今は三十五日がふえている。盆か、彼岸には近所の人と親類がくる。ホシウドンが三〜五つ、きて、お客に出すのもウドンだった。(川原)

昔は、ヒトナノカから七日ごとに四十九日まで墓まいりをしたが、今は一緒になつてゐる。四十九日に念仏をする。今は三十五日にすることが多い。(下細井)

その日と四十九日に行い、あとは一周忌にする。(田口)

七日ごとに行い、近親がよつて墓まいりをした。(関根)

念仏供養 七日念仏をした。今はヒツケエシナノカと言つてその日にやる。十三仏の掛軸カケマタをかけた。(鳥取)

七日目にするものをその晩にやった。(嶺)

出念仏は棺が出てすぐにした。念仏バアサンが四〜五人はどこにもいて、念仏をした。埋葬のおわつた知らせがあるまでやった。その日にナノカの念仏をした。念仏バアサンが専門でした。念仏バアサンは組があり、教本とジユズを持つており、一人やめると代わりをいれた。今は後継者がいない。(小坂子)

当日に、追出し念仏がある。これは棺がゆくときに「ナムアミダブツ」のみをくりかえす。(勝沢)

出たあとでヒツカエシ念仏をした。(石関)

ナムアミダブツを十回、十三仏をいった。(荻窪)

念仏バアサンがいた。葬式の出たあとに念仏をした。組合でおぼえてした。彼岸にも念仏供養をした。(三俣)

なくなった日と七日目に、鉦カネたたきつつ念仏をする。一回ごとに水をあける。次ぐ日にその水をもつてゆく。中休みがあつた。近所と親戚が集まつた。(川原)

葬式の日にはナノカ念仏をした。近所の人があつた。昔は念仏バアサンが五〜六人いたが、今はいない。(北代田)

なくなった晩に、八畳の間に、二まわりのジユズをひろげ、まわしながら念仏をする。近所、親戚が念仏を行う。五種くらい言い、十遍

した。ジュズは桐でできており、小が三百二十八コと大一コ、中一コである。小は手作り形はいろいろ、大は太陽、小は月をあらわすという。タイコとカネもある。鉦かねに銘はない。数を数える小さい板があり、十三仏の名がある。大正三年の念仏帳もある。タジリのクルワのみ行っている。そのジュズは、それがあると災害がないと言われ、ある家が火災にあったことはない。念仏は夜行ない、ムスビを一つずつくぼった。今はマンジュウである。(田口)

念仏はあらためて近所、親戚をあつめて行つた。念仏講があり、念仏ばあさんが五く六人頼まれて行なつた。念仏ばあさんのみが念仏となえた。(関根)

初七日に七日念仏、四十九日に「おたなあげ」をして、仏壇に入れた。今は三十五日になつた。(小神明)

初七日 ヒトナノカは兄弟があつまり、墓まいりをして、花、水そなえた。(鳥取)

子供が線香をたてにきた。(嶺)  
念仏を念仏バアサンにたのんだ。(小坂子)

ヒトナノカは墓まいりを行つた。(勝沢)

ヒトナノカは来る時に粉を重箱の一つ、米の人もあつた。近い人が中心で、ウドンにオハギを出した。念仏をしてマンジュウをくぼつた。

(石関)

ヒトナノカまでは御膳と水をおいた。ヒトナノカには七日念仏をした。念仏もうしは念仏バアサンが中心になつてした。今は坊さんの法事だけである。集まるのは子が中心でふつうの夕食、マンジュウをつけた。(堀之下)

近所の人がヒトナノカまでは線香をたてにくる。ヒトナノカ後に七本の塔婆を持ってゆく。七日ごとにもつてゆく。ヒトナノカには七日

念仏をした。念仏もうしの人がいってした。今はその日のうちにする。

ヒツケエシナノカとしてしまふ。毎日墓に行き、夕方灯籠に火をつける。食べものは特別のものはない。ポタモチが出た。(荻窪)

水掛け着物 ホトケさまの布団は子供が洗うものといわれた。子供が北側にほした。(小坂子)

北向きにして、水をかけておく。そうしないとむこうにいけないと言つた。近い人が洗つた。(五代)

着物を洗つて日陰に北向きにおく。その着物に水をかける。「サカサミズ」という。亡くなると水がのめないなので、水をかけるとスソから水がのめると言う。(石関)

一週間、着物に水をかけて、しばらく日陰ほしにする。仏様が行けるところに行くように。(荻窪)

なし。(三俣)  
フトンの日陰にほして、毎日水をかける。早く仏になれるようにした。(堀之下)

なし。(川原・北代田)

洗つておいて、かわくまで日影にほした。(田口)

着た着物を洗つて裏がえしにして、日あたらないところにほした。娘がする。(関根)

形見分け ゆずりは、葬式がたつてから兄弟などでわけた。(鳥取)

ユズリは四十九日におこない、この日に位牌をわけた。(小坂子)  
三十五日か四十九日にした。(勝沢)

近い人に、位牌分けと、ユズリをした。(五代)  
五十日(神葬祭)。着物、反物に位牌をつけて子供に分けた。(石関)

四十九日にした。子供、知人にした。着物は形見分けにしたが、早く分けると後生が良いと言う。位牌分けもした。(堀之下)

四十九日にユズリをした。(荻窪)

オタナアゲの時に行った。位牌をもたせる。位牌はハダカでさむいので着物をつけてやる。跡取りの嫁や姉さんが相談してわかる。(川原)

四十九日にした。兄弟に施主がする。(北代田)

ほしいものがあれば四十九日にした。(田口)

ユズリといい、四十九日にした。今は新しいものをわける。(関根)

喪中の禁忌と忌み明け 葬式の最中は、子供もかけつてはいけない。

「馬を鳴かせるな。エサをくれておけ。鳴き声を聞かせるな」という。

「ブク」は自然にあける。四十九日(今は三十五日)(鳥取)

「ブクを着ている」と言う。神社には四十九日まで行かない。

(小坂子)

五十日間は神社には行かない。(神葬祭)仏壇、神棚も同じ。当日以外は仕事はするがブクを着ていると言う。(石関)

ブクは百日間と言う。神まいり、他の家への出入り、赤飯、餅はしない。四十九日ではじめてモチを使った。(堀之下)

ボクを着ると言う。四十九日間。一年間は暮の餅をつかない。四十九日は危険な仕事はひかえ、神まいりもしない。昔はあけると、あととりが村中を「お世話になりました」と回った。(荻窪)

四十九日をすぎれば、もう正常になる。それまでは、宮参りしない、

大勢のところに出ない、旅行ひかえる、近所のつきあいひかえる。食事はふつう。(川原)

一年間、宮参りはしない。正月に餅をつかない。他の食事はかまわない。(北代田)

三十五日(本当は四十九日)に、イミあけとして、世話になった近所を手ぬぐいを一本くばる。(関根)

七本塔婆 小さい塔婆があり、七日ごとに裏かえした。(鳥取)

七日ごとに一本ずつ塔婆を墓にもってゆきあげた。今は略して、あげっぱなし。七日までは、毎日、墓にある提灯のローソクに夕方火をつけた(すぐ消す)。六地藏のローソクという。六地藏のローソクをもってくるとお産が軽くすむと言う。(小坂子)

一本ずつ七日ごとにもって行った。今はくつついてある。そして、水のみ団子を七こずつ入口の六地藏にそなえた。(五代)

七日七日においた。(川原)

寺で書いてもらい、七日ごとに墓においておく。(田口)

寺でかいてもらい、七日ごとに墓に行く時にもっていった。(関根)

年忌 一年忌と十三年忌二十三年忌をした。近い人呼び、酒を出した。(鳥取)

一年忌は盛大にして、お坊さんをよび、近親者をまねいた。三、七年忌でおわりが多い。(嶺)

(嶺)

十三年忌くらいまで。ていねいな家で十七年忌まで。念仏バアサンにおねがいして、位牌を寺にもってゆき、おがんでもらった。(小坂子)

十三年忌くらいまで。三十三年忌でしまいが、あまりしない。年忌では、お坊さんをよび、墓まいりをした。(勝沢)

一、三、七、十三、十七、五十年でおわる。(神葬祭)(石関)

一年忌は隣保の人、親戚、友達がくる。金や着物を分けた。あとは、三、七、十三、十七、二十三、三十三年にした。三十三年忌でおわる。

三十三年忌は他と同じ。十三年忌でおわることが多い。五十年忌は親をするが、例はあまりない。(堀之下)

一年忌、七、十七年忌をした。三年忌よりはなかなかできなかった。一年忌は坊さんの念仏をして、塔婆をたてた。三十三年忌をするところはない。親の三十三年忌をする人はほとんどない。(荻窪)

三年(やる家・しない家)・七年・十三年であとは兼ねる。三十三年

忌には葉付きの塔婆をたてる。杉の葉を麻でしばりつける。(立ち木を切り作る)(川原)

一・三・七・十三・十七年で、三十三年でほぼおわる。三十三年は(親が早死にでもないかぎり、子がいなくなるので)しにくい。あげ念仏をする。ほかの年忌よりやや大きくする程度。(北代田)

三・七年忌まで。三十三年忌は他とかわらない。先祖代々の供養と同じ。(田口)

年忌はあまりせず、シニツパライが多かった。(関根)

#### (四) 死 霊

死霊 四十九日。家の棟にいる。(鳥取・嶺・小坂子・五代)

神葬祭では五十日でのぼる。(石関)

百日(ヒヤツカンニチ)で離れる。四十九日までは屋根で下を見ている。だんだん上にゆき離れるという。(堀之下)

四十九日に離れる。(荻窪・三俣)

四十九日まで屋の棟たてにいる。(川原・下細井・関根)

四十九日までいる。(北代田・田口)

死者は生まれかわるか 生まれかわりとは言う。(嶺)

特になし。男が死に、男ができるとそう言う。(石朝)

ある。死んだ子の足の裏に字を書いておくと近所の子の足に字がのこって出てくる。消す時は墓でこすること。手首をしばったり、首かざりをしておいて棺にいれると、次に出てくるのですものではないと言う。(堀之下)

言うこともある。(荻窪)

孫がその年に生まれると、生まれかわったという。(川原)

生まれかわるといふ。(北代田)

特になし。(下細井)

相手が死んだあとには必ず男の子が生まれる例があった。(田口)  
似たような子ができると言う。あの子はオジイサンの生まれかわりだという。(関根)

## 第十一章 年中行事

### 一 月

初もうで 氏子総代は、朝五時にいって準備する。六時〜八時が多い。御神酒か甘酒を出す。お札とみかんを、来た人にわたす。(荻窪)  
正装して、神社へお参りに行く。区長の年頭のあいさつがあり、お神酒をもらう。その後、地区内の親しい家に年始参りに行く。

(上細井・日輪寺)

正月一日に、村社にいった。十二時をこえると、どんどん行つた。そのあと若水くみ、初湯、おそなえ、朝食となつた。食事のあと午前中に寺まわりをした。このあたりは中の寺といっている竜沢寺へ行く人が多く、玉蔵院は少なかった。(片貝)

赤城神社や青柳大師などに行く人が多かつた。(五代)

初参り 一日の六〜七時ころ、家族で村の神社に行った。(三俣町)

元 日

若水 三が日、年男が若水を汲み、炊事に利用する。(芳賀地区)  
年男が、おけに水をくみ、神棚や仏壇にあげ、煮たきを利用する。

(上細井・日輪寺)

おきたらすぐに、手、顔洗う。(手ぬぐいは新しいものを用意しておく)。のち主人が井戸水をハネツルベで手桶にいれる。それをナベにい

れわかす。それにダイコン、イモをいれ味をつける。それを神様にあげる。のちオミキを神様にあげる。さらに御飯をたいてあげる。朝、夜にモチ、ダイコンをあげた。同じく御飯も新しいのをたいてあげた。これは三日間続く。御飯は順にかさねてのつけてゆく。御飯をのせるのは白いハチで、毎年新しいものをそなえた。

若水の唱えことはない。

はじめのダイコン、イモをにるところまでは主人の料理。(三俣町)  
正月元日から三日まで、三日間は家の主人が井戸水をくみにいく。

朝食のしたくも女衆に手を出させない。すっかり用意してから、女衆をおこした。もち家例の家では、「メンバ板を出すな」といって、十三日まで、そばが食べられなかつた。もらつて食べたり、他で食べるのは良い。(片貝)

その家の主人がその年最初に水を汲むこと。元日の朝、行なう。この水を使ってその日の料理をする。(片貝)

朝湯 五、六軒の隣組が廻り組で朝湯をたて、朝八時頃までにお湯をもらいに行った。(上細井)

朝早く起き、隣組が廻り番で朝湯をたて、主人が朝湯をあびる。午後になると、女性も入りに行くところもある。(五代)

元日の朝、その年々で決まっている家で風呂をわかし、近所の人達が湯にはいりに来ていた。大体は隣保班ごとで行なわれていた。(鳥取)  
オタキアゲ 炊いたご飯を小鉢にたくさん盛り、神棚にあげる。こ

れは男が行う。(日輪寺)

元旦の式 子供達は、この日、学校へ行って、元旦の式に臨んだ。

(上細井)

### 一月一日の行事

- 1 太陽に向かつて拝礼(二拍手一礼)
- 2 若水をくむ(井戸水をくんで風呂をわかして入った)
- 3 神棚を拝む
- 4 朝飯をくう
- 5 神明宮(行く。拝賀式)
- 6 寺まいり(龍蔵寺)

家例、食事 三日間は仏壇をしめてそなえものはない。三十一日の晩はソバは作らずゴハン。

オニギリを十二個(ウルク年は十三個)作り、ドンブリにいれそなえた。

七草までの神棚にあげるものは男の人が作った。三が日は朝ゾーニだが、男の人が作り神にそなえ、のち女の人が味をととのえモチをいれた。夕食は御飯であった。(三俣)

吉沢家では、正月はソバだった。赤飯の家もあった。五日まで餅は食べなかった。(荻窪)

### 藤井家の正月の家例

三日間、朝はソバ

四日、朝、オゾウニ(下小出)

### 船津家の正月の家例

一日、ソバ縁起

二日、ゾウニ

三日、ゾウニ

夕食はごはん

夕食はごはん

夕食はごはん(下小出)

正月の食事 三が日の朝はソバを食べた。三が日の間、供えた飯は

さげないで四日にオタナサラシと言って雑すいを作って食べた。神さま・仏さま・井戸神さま・イナリさまに飯を供えた。神棚には飯のほか、トウスミ、サカキを用意した。サカキは水もちがよいので毎月一日、十五日に替えた。(青柳)

野上家のそば家例 野上家では大みそかと、正月三が日の朝はそばを食う家例がある。三が日の昼はモチ、夜は飯を食った。また、三が日に一度はとろ飯を食った。以下二十日迄食い物が決まっている。

四日 雑煮(野さい、なると、ちくわ、もち)

五日 飯

六日 雑煮

七日 七草がゆ

八日 飯(夜そば)

九日 雑煮、蔵びらき

十日 飯

十一日 雑煮

十二日 おまい玉(ミズクサ、柳の枝にかざる) 小正月のもちつき

十三日 飯

十四日 雑煮

十五日 あずきがゆ

十六日 おまい玉をはずして、しるこ

十七日 飯

十八日 十五日の残りのあずきがゆを水でうすめてモグラよけに屋敷のまわりにまいた。また、あずきがゆにもちをいれて食った。

十九日 飯



二十日 朝 お頭つき、飯 夜 そば

お恵比須講、縄ない、縄うちをした。

二十八日 しまい正月お赤飯（アワ御飯）（川原）

正月行事、食事 歳徳神様、お正月様とも呼ぶ。松飾りは三がい松を山から取ってきた。しめ縄はごぼうじめで上りかまちに飾る。元旦の朝若水をくむのは世帯主の行事。しめ縄は新しい稲のわらで作った。門松に朝晩しやもじにのせて食物をそなえる。三ガ日だけ。めんや御飯等。若水は井戸から、さかきをさした手桶でくみ、神様にあげる。正月のオシメのわらの長い所を苗とりの時に苗をしぼるのに使った。ごぼうじめのわらを使うと豊作になるといふ。正月はお餅とおそばを食べた。おそばは朝、若水で打つ、三升程三ガ日。若水で朝湯をたてて、近所の人にはいつてもらった。初詣は上細井の八幡様に参った。下細井の虎空蔵様は片貝にとられた。目の悪い人は薬師様に参った。一月一日には一つのクルワの中を一軒一軒、新年の挨拶にまわった。大正月のお飾りは四日には取り除く、正月のお飾りの松を神棚や屋敷稲荷に供えた。前の年の神様は古い社の中に入れ、新年の神様をまつる。大晦日には桑の木の大きな根っ子をいろりに置いて、火を消さないようにした。四日は婿が餅を三枚重ねて実家へ年賀として持っていく。十五日には、嫁が実家へ餅を持ってお客へ行く。（女正月ともいふ）（下細井）

おしめを張った手おけで若水をくみ、神だなにあげる。新湯に入る。てぬぐいから下着まで新しくする。その後男が三ガ日の調理をするが、家例により、三食ともそば、うどんという家がありおそなえも同じだった。あちこちにそなえてから家族で食べた。朝早く、初絵売りが来た覚えがある。（三俣）

町中が神社に集まって、御神酒と灯明をあげた。若水をくみ、朝湯

に入り頭からかぶる。男が料理をした。大島、斉藤は三ガ日はそば、町田はぞうにの家例だった。そばを食べるのは、質素にやることで、たくわえるためだと言われた。門松にごはんを上げる。おかまさま、大神宮、荒神、えびす、歳徳神には、三ガ日だけ、新しいうつわに、たつぷり上げる。上げたそばとうどんを四日におろし、湯の中に入れて食った。（江木）

互礼会 荻窪神社に氏子総代、自治会長を中心に集まり、年始のあいさつを行なう。朝早くからとされ、現在は午前六時になっている。

あいさつ回り 紋つきを着て、近所で互いの家を訪ね合う。訪ねた先の家で「紙をもらいに来たよ。」と、半紙をもらって来ることもあった。子供のある家では、二日に行なう書き初めにこの紙を使った。（荻窪）

家例 三ガ日に食べるもの、特に主食については家によって家例があった。その例を数個挙げると、  
三ガ日は、朝はゾウニ、夜はソバとする。  
三ガ日はソバ。

三ガ日はモチを食べてはいけない。四日から食べて良い。

三ガ日は、モチを食べるとオデキができるのでモチを食べてはいけない。ソバを食べる。

三ガ日はウドンを食べてもいけない。（片貝）

おそなえ 門松にそばとぞうにをかけた。家の中では皿にのせるが、外のものには直接だった。一週間重ねてあげ、七草の朝、おろしておかゆの中に入れて食べた。（片貝）

二 日

青柳大師の厄除けと御年始日が重なっていそがしかった。この日の夜十二時にいって一番まいりをする、「今年が一番まいりをしたからいい年になる」などといった。(龍藏寺)

初買 前橋の町へ、茶わん、手ぬぐいなどの日用品を買いに出かけた。五十年位前は、村内で品物を仕入れてくる人がいて、その人が村人に売っていた。(日輪寺)

前橋の町へ衣類や砂糖、日用品などを買いに出かけた。

年始回り 三が日に行く。隣保は三が日の一日の朝かんたんにした。九日のダルマ市が年始日で親戚、客が来て夜ダルマ市に行った。年始用の菓子があり、もらいものを回した。手ぬぐいを名刺がわりにした。

(三俣)

ウタイゾメ 二日の午後、集会所で謡い始めがあった。数えて十七歳から三十歳の男性(ワカレン)が集まった。この日の集まりは、新しくはいる者の紹介を兼ねるものだった。(片貝)

三 日

青柳大師の縁日 夜明けを待って、青柳大師にお参りに行った。この日は、ウケ日と言って、親せきの人が年始参りに来た。(上細井)

出店がたくさん出て、とてもにぎわう。二日の夜中から出かけたたり、三日の朝早く出かける人が多い。

ムコの年始の日(堤)

正月三ヶ日 剣道のけいこをした。(小神明)

正月のはし 正月十五日までは、柳の木のはしで食事をとった。人数分作って使った。(三俣)

四 日

四日はお寺の年始日。朝、仏壇をあけ、仏壇のオニギリをさげる。七草にいれるわけ。高岑院の縁日。(三俣)

坊さんの年始の日である。(小神明)

初ヨメ 嫁が夫と一緒に実家にあいさつに行った。行くときにはオパン三枚重ねの餅をもって行き、帰りにははき物をもって来た。

(堤)

お寺の御年始日であり、嫁の里帰り日だった。新しい嫁さんは、泊ると、その年の蚕がはずれると行って泊れなかった。次からは四日、五日と泊って六日の年取りに帰ってきた。(三俣)

御年始日 片貝では十三日、前橋市街では九日の初市の日だった。

四日はお寺の御年始日で、各だんかをまわり、ぬい針、はし、シヤモジ、曆を持ってきた。(片貝)

山入り 自分の家の山で、式をする決めた木の所にいった。

小魚 切りもちを半紙の上において供え、幣束をあげた。

草を刈り払い 十二様に手をあわせて祈った。この時、小正月のツクリモノに使う木を切ってきた。ニワトコ、ヤマクワ、サルスベリ、ナラの木を切り、かごに入れて、持ってきた。日陰においておいた。(荻窪)

おたなさがしといって、神さまにあげたものを、トウジルという湯の中に入れてもどして食べた。もち家例の家はこの日からもちが食べられた。(江木)

仕事始め 縄をない、鎌で草刈りを行った。(上細井)

タナサガシ(オタナオロシ) 正月三が日までに供えたものを下げる。下げたものは、七日までとっておき、七草がゆにまぜて食べる。

ムコの年始日 花嫁が実家に年始に行く日。大きな四角のもち三枚を重ね、半紙に包み、水引をかけてもって帰る。実家と、仲人の家にももっていった。

五日 日

仕事始め 正月五日は仕事始めで、半日かせいで半日休んだ。(川端)

六日 日

七草の草入り。(三俣)

山はじめ 小正月のおかぎりの枝をとりによく。また、六日は「六日年」と言つて女性の年とりの日であつた。(青柳)

消防の出初式をした。(小神明)

山へ、米一つかみもつて行き、おきごをあげ、お神酒をナラの木にかけてくる。(上細井)

仕事始め 正月六日、山の仕事がないので、山入りの行事はしない。マツを折つて進ぜ、三サク切る。(片貝)

山始めで、イワシとモチ、おしめを持って山に入り、境木の篠の所にそなえた。竹を切つて、中に酒を入れ、持つていつてそなえた。

(江木)

一月六日は、山はじめといいおそなえもちをもつていき、それをそなえてから、もし木集めをした。

六日年 馬の年取りとも言う。(上細井)

この日、六日年と呼ぶが、ご馳走をつくつて食べるくらいで特別なことは行わない。仕事始めの日であり、焼いたもちを畑にもつていつて供えて、仕事をする。(勝沢)

七日 日

七草 セリ、ナズナ、ダイコン、里イモ、ニンジン、ゴボウのそいだものにダシとしてコブの細く切つたものをいれた。オハチに入れ神棚にいれた。(お棚さがし)のものをいれるが、「そまつにしないで食べる」。(三俣)

正月七日にやる。(荻窪)

「七草ナズナ、唐土の鳥がわたらぬうちにたたけ、たたけ」といながらきざんだ。(片貝)

前日の六日に取つておいたセリ、ナズナを入れた七草ガユを作り、食べる。食べたカユの残りや洗い水は、右回りに、母屋の周りにまく。このときに「七草 ナズナ トウドの鳥が 日本の国に 渡らぬうちに」と唱えた。(川原)

七草ガユ 正月にお棚にあげておいたものと七草を入れ、かゆをつくる。七草は「一夜ゼリはとらない」と言つて五日の日にとつておく。七草を切る時には、「七草ナズナ、唐土の鳥が」という唱え言をする。四日の棚探しで下げたものと七草(六日に取つておいたもの)を入れカユをつくる。七草をきざむ時、昔は「七草ナズナ唐土の鳥が渡らぬうちに早く切れ」と唱えた。七草ガユは、年棚や門松に供えた。

正月七日に食べた。(下細井)

七草がゆを作つた。(江木)

七草粥を作つた。七草は、真夜中、零時をすぎできざんだ。はかまのしたくでやつた。

「七草なずな、唐土の鳥が、日本の国へ渡らぬうちにストトコ、トントン」といつてきざんだ。(三俣)

七草ゾウスイ 七日につくつて食べた雑炊。七草として、決まつた

言い方はあったが特に入れるものは決まっていなかった。(細井)

お棚探し お棚探しと言ひ、正月棚から供えものをさげた。モチはとつておき、七草ガユにいられた。(三俣)

シゴトハジメ 一月七日はシゴトハジメの日で、松の枝に半紙をキリハギしたものを添えて、畑の中央に立てる。そして幾さくか一〜二メートル程、麦さくをきりかえず。冬場のヒナタサクになつてゐるサクをヒカゲサクにする。(田口)

八 日

サクハジメ 畑にはいつて、その家の主人がさくを一つ切る。門松と同じサンガイの松をさすこともあった。(川原)

九 日

前橋の初市の日であり、御年始日だった。(三俣)

十一 日

日輪寺の馬頭観音に馬を連れて行つておがんだ。(龍蔵寺)

鏡開きで、しるこを作る家がある。蔵開きも行ふ。クワダテで仕事始めとする。田にヘイソクを立て、三さく切りなおし、おそなえをする。このヘイソクは、大黒柱に打ちつけてあるものを持つていく。

(三俣)

蔵開きで、幣束をそなえた。畑に行つて三さく切つた。(江木)

鞆だて 一月十一日は鞆だての日で、テング、モチを切つたもの、松の小枝に御幣を飾つたものを持つて田に出かけ、田の中央に松を飾り供えものをし、サク切りを行う。サク切りは、ヒナタツサクからヒカゲサクに切り返す。(川端)

鞆はじめ 一月十一日にした。初めて畑へ出る日、蔵開きとも言つた。松の枝を切つてかざりを作り、桑畑にかざりと切りもちをそなえた。てんがで三作きつてその日の仕事はおしまい。(青柳)

オクワデテ 正月十一日の蔵びらきの日はオクワダテの日でもあつて、松・モチ・イカをもつて畑にかざつた。(川原)

サクタテ・クワダテ 正月十一日に行なつた。正月のオタナに供えてあつた四本の松のうち一本を折り、田にさした。サクを三つ切り、ゴヘイを立てた。「豊作をお願い申します。」と唱えた。(日輪寺)

くら開き 正月十一日に麦畑にさくを切つて餅とかごまめをさしあげる(三さく程)。家の親方がくらのお払いをする、どこの家でもお蔵があつた訳ではない。(下細井)

正月十一日にやつた。(荻窪)

正月十一日に餅をかげ干して揚げた。(下細井)

オシルコを作る。特別の行事はない。(三俣)

蔵を開けて、お神酒を入口にかける。蔵の前に一対、松をたてる。

(上細井)

さく立て 門松の頭の部分を切つて、田へ行き、さくを三本切り、松の枝にシメを結び、さくの真中に立ててくる。供え物をして五穀豊穰を祈願した。

観音様のお祭り 夜明けから、馬をもつてゐる家は全て、馬に乗つて日輪寺山門から観音様のまわりを一まわりする。観音様にある右のさおの先に家で作つてきた馬守り……梵字が書いてあるをさし、オサゴをつつみ、おさい銭を投げてお祈りをする。(日輪寺)

十三日

片貝神社の春まつり 太々神楽の奉納がある。親せきの顔あわせの日。(片貝)

片貝のご年始日、という。神楽が行なわれていた。近在に住む親が集まる日でもあった。赤飯をつくった。

十三日は虚空蔵様の誕生日にあたるといわれる。(片貝)

かざりかえ ドンドン焼き。主人がはずし、長い棒にしぼりつけ、組んでから川の端で火をつけた。今の踏切のそば。リヤカーで子供があつめた。子供には菓子あげ、五銭くらいくれた。モチを焼いたり、コンニャクをにたりした。(三俣)

小正月 一月十二、十三日はモチをつく。十四日はメエダマ飾りをする。桑のかぶつにさした十六個のメエダマと、十二個のモチとを十二畳の座敷にかざった。晩にはドンドン焼きをした。(川端)

お飾りがえ、十三日に餅をついて、小さく切つて、木の枝にさした。まゆ玉は米の粉で作った。(下細井)

小正月は一月十四、十五、十六日と決まっていた。十三日にモチツキをしてマイダマを作り、ミズクサの枝にさしザシキにかざった。十五日にはドンドンヤキをして、お札を焼いた。(田口)

まゆだまを水草にさしてかざる。

ドンドン焼き (正月のかざりものを焼く)

あずきがゆを吹いて食べるとぶんなぐられた。吹きながら食べると田植えに風がふくと言った。(青柳)

マユ玉飾りを作った。十三日に作り、十四日に飾りかえをし、二十日に下げた。十二、十六を飾り、この上にモチを細く切つて、飾りの上においた。へびの形みたいだったという。(龍蔵寺)

小豆粥を作った。かゆかき棒でかきまわした。この粥は、あつても、吹いて食べると田植に風が吹くといつて、がまんして食べた。

十五日の粥の洗い汁を家のまわりにまいた。もぐらがもぐらないようにといった。(荻窪)

小豆粥をつくつて食べた。ケークキ棒(かゆかき棒)でかゆをかきまわした。ケークキ棒はニワトコの木の子二十七〜三十cmくらいに切つたもの。皮をむき、小口を十字に割りおそなえの小さいものをはさんだ。

かきまわしたあと、神だなにあげておいて苗間の水口に立てた。

小豆粥のおかまを洗った水をまくと虫除けになる。(江木)

小豆粥を作つて食べた。熱くても吹いて食べなかつた。吹くと田植で大風が吹くといつて、がまんして食べた。

太いニワトコの木、二本の小口を十字に割り、小豆粥でかきまわし、半紙で包んで水引でしぼり、苗代のくろにさした。(三俣)

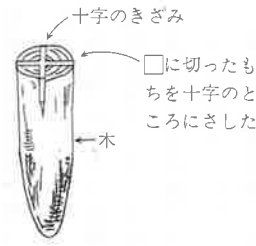
一日中お飾りを飾るのに使われた。ごちそうを食べた。十五日の粥は、なるべく早く煮るものだという。ニワトコの木を用意し、小口を四つに割り、もちをはさんで、お粥をかきまわした。水引で二本しばつて神だなにあげ、田植の時に田の水口に立てておいた。(小神明)

小正月のツクリモノ ニワトコでケズリバナを作った。ミズバサの木をマユダマ木にし、マユ玉や四角に切つたもちをさして、八畳間の四隅から飾つた。まん中に垂れるようにした。マユダマ木にケズリバナをつけて、飾り菓子を下げた。(小神明)

ハナ ニワトコの木を割りばしより少し長いくらいに切り、上から下にけずつた。五〜六本くらいチヂレが出るようにした。

小さな専用のナタがあり、売りにきた。マユ玉木にかけた。一緒にかける花菓子も売りに来た。(三俣)

はな はなは、三段の大きいもの、小さいものと十二段のものを作つた。大きいものは外、小さいものは家の中にかざつた。(荻窪)  
かゆかき棒 ニワトコの木で作つた。皮をむき、皮方の小口を四つに割り、もちをはさんだ。



さした。(上小出)

はなを供える所 神だな、年神だな、仏壇、えびす様、釜神(荒神)様、井戸神、墓地の入り口、馬頭観世音、屋敷いなり、オシラ様、便所、馬小屋、門口、納屋、倉。(荻窪)  
小正月のキリソバ 十六本作つて、飾つた。神だな、二本荒神(三)、オソデンさま、エビス、ダイコク、オカマ、納屋、小屋(西、東)、便所、蚕室、井戸イナリ。(龍蔵寺)

#### 十四日

飾りかえの日 ミズクサ(ミズキ)の木にマユ玉をつくつてさした。まゆ、米、お金の形をした菓子やをさげた。はらみばしも作つた。

朝か晩に村内の田でドンド焼をした。(三俣)

朝からもちつきをして、あいまに、小正月のつくりものを作つた。庭にごぞをしき、ハナカキ、千手、ナタを使って作つた。(荻窪)

正月飾りから小正月にかえた。モチをつき、柳の根、桑の木の根か

ら出た枝に、モチをきざんでつけた。アラレカザリといった。店で買つてきた飾り菓子やを下げた。

ニワトコの木に三カ所削りを入れたハナをかいた。ハナカキナタは売つていたのを買つてきて使つた。

オマツを抜いたあとに、門松のしんをまたさした。ミズブサの木にモチをついたものを進げた。(片貝)

ニワトコをハナカキという刃物で削り、花カザリにした。これを門口の門松の後に置いた。その他に、オイナリサマ、井戸、便所に花カザリを置いた。家によつては、家畜を飼つているところ、池にも置いた。

この日は、アズキガユを作つて食べた。これを吹いて食べると田植えに風が吹くと言われる。このアズキガユは二本のニワトコの木でかき回した。このニワトコは、二本合わせて半紙にまき、水ひきをつけ、苗代に使つた。(片貝)

まゆだま 暮のうちに、米をひいて粉を用意しておいた。二晩くらいはひいた。十四日の日にふかして作つた。すべて同じ大ききだつた。

(荻窪)

お飾りかえ この日の夕方にはドンド焼でもやした。この火でモチを焼いて食べるとかぜをひかない。なるべくこがして食べた。(片貝)  
おかざりかえで、もちをついた。ナラの木にマユ玉をつけて、座敷にかざつた。まゆ玉は、もちのものと、団子のものがあつた。

古い桑の木の根を切つて、枝に十二と十六のもちをつけた。十二は十二ヶ月、十六は家中の神様の数が十六あるからという。

ニワトコで三段のハナをかいて、神様の所にあげた。墓まで上げた。ミズナラの木でも作つた。ハナをかくのは、専用の小さいナタがあつた。

この日、村のまん中で、ドンド焼きがあった。(江木)

モノヅクリ 山からとってきたミズナラの木に、マユ玉をつくり、さして飾る。ニワトコの木を小刀でけずってけずり花をつくり、マユ玉と一緒に飾る。

ハナかき 山からニワトコの木を売りにきた。買ってかざった。「ハナ」と言う。(三俣)

カユカキ棒 ニワトコの木の手先を十字に切り、そこに餅を小さく切ってはさんだもので、正月十四日に作って飾っておいた。十五日には、それをおろして、あずき粥をかまわした。(荻窪)

オカザリカエ 古い門松等全てとりはずす。

ドンド焼き 子供達が、家を廻り、正月飾りを集め、十四日の晩に行う。飾りをもつて行き、焼いて食べる。ドンドン焼きで焼いた竹を家にもつて来ると、かいこが当たると言った。(上細井)

マユ玉 木に米の粉のダンゴをさした。木はミズクキという赤い木。ダンゴはふかして作った。作物の豊作を願った。ダンゴは小判型、イモ型、丸形、マユ型、米型とあった。年神様へ十二と十六コのものを作っている。オカザリと言った。

マユ玉は十六日にとり焼いて食べた。マユ玉をとることをマユカキと言った。(三俣)

どんど焼 一月十四日の晩にもやした。若い衆が出ておかざりをあつめてもやした。(荻窪)

一月十四日に行う。八畳位の広さで炉をつくり、正月のお飾りを飾る。高等二年の子供が親分となって作る。下は小一位まで。一週間位かけて作る。

つらぬきといって、お飾をもらいに行った時に、五〜十銭位のお金をもらい、それでおしるこやおでんを作つて食べる。

十一時頃燃す。

モチを焼いて食べると風邪をひかない、桑の木でハシをつくるとカイコが良い、と言われている。

前田んぼで作つて燃した。(上細井)

一月十四日に行った。

一月八日から十三日まで準備を行った。高等小二年の子供が親方(リーダー)となつて、小学校三年以上位の子供達が協力して準備した。

竹、縄、松葉(枯れた松葉はよく燃える)や古いダルマや古いフダ、また、一月十二日が正月のお飾り替えなので、正月の飾りの松などを集めて作った。

火をつけるのは、一月十四日の朝五時頃で、その前から子供達は集つて、大人を起すため太鼓をたたいて村を練り歩いた。その時、「どうぞそじんがもえますよ、はや夜が明けますよ。はや夜が明けますよ、どうぞじんがもえますよ。」と叫びながら行った。

大人が皆出て来て、燃えるのを見守つた。その時焼いたモチを食べると、風邪をひかない、と言われた。

場所は田んぼで行い、上・中・下とそれぞれが作った。

戦後は、この行事が絶えていたが、昭和五十三、四年頃、子供育成会により復活した。(川原)

一月十四日に行った。高等二年(今の中学二年)位の子供がリーダーとなつて、三、四日前から竹などの材料を集めた。一月十三日には、お正月のお飾りを各戸に集めに回つた。その時、心づくしのお金もらえたので、それで茶菓子などを買った。

龍蔵寺の前の田んぼに、西、中、東組と三つ作った。

一月十三日は、用意した竹やワラで作り、お飾りで、色々飾りたて

た。

一月十四日は小供が作った小屋に集まって、お菓子を食べたりして過した。大人が差り入れに来ることもあった。

どんどん焼きは、夜十時か十一時頃焼いた。大人も集まって来た。どんどん焼の日は、少々の火あそび（土手に火を点けるなど）をして、大人からしかられなかった。（龍蔵寺）

正月十四日すぎるとやる。十四日か十五日。上、中、下のそれぞれの曲輪でやった。集めてまわると、三〇五銭のお金が出た。

竹を組んで小屋を作り、おかざりを集めた。モチを焼いて食べると、できものができない、かぜをひかないという。まつ黒になるまで焼いた。習字をやすことはなかった。（端気）

門松、しめ縄等、正月飾りを下げ、子供たちが各家を集めて回り、夕方、田んぼの中で山にして燃す。

餅をもっていつて焼いて食べたり、火にあたったりすると、一年間病氣にならず、健康でいられるといわれていた。

お飾りかえの後だから正月十四日（？）一昨年の古い神様のお飾りを焼く。（下細井）



どんど焼（小神明）

一月十四日の早朝、前年のしめ飾りや、お礼、だるま等のえんぎ物を燃やした。年の小さい子供たちは、桑の枝れた根を集めてくるのが役目だった。火の辺りで、おでん・みかん・コンニャク（おで

んか？）食べた。（北代田）

昭和の初め頃にやっていたが、子どもが焼け死んだ事件があつて中止になった。（上小出）

正月十四日に、田んぼの中で、ドンドン焼きをやった。餅を持って行き、竹の先につけて焼いて食べると、できものができないといった。

正月十四日に、おしめ・門松を集めて、ドンドン焼きをやった。子どもがサイ銭をもらつて歩き、その金で菓子を買った。集金は一番ガシラ・二番ガシラがやったが、それを会計といった。あいている田で小屋をもちした。（荻窪）

小正月。もとはお墓で小屋を燃した。竹とクラで作り、小屋のまわりから火をつけた。（堤）

正月十四日の晩、おかざりをもやした。この火でもちを焼いて食べると、かぜをひかないという。（江木）

正月に供えたカドマツやお供えは十三日までに下げておいて、十四日の夕方ドンドン焼きにした。集落のはずれにある空き地や荒地地を場所に使った。積み上げたお供えがくずれないように、周りにナガシノを立て縄をまきつけた。ドンドン焼きの準備は小学生前後の子ども達が行なった。家々から、燃やすものを集めるときと、燃やし始めるときには、子供達が拍子木を叩き、村中にサタを回す。

子供達には、大人がコンニャクのヒツパタキ（オデン）を振るまつた。

ドンドン焼きの燃え残りを家に持って帰るとカイコがあたると、言われた。（堤）

小正月のモチつき 十四日の朝についた。ふつうのモチ。小さく切り、ミズキにつけ、倉、井戸、入口、お稲荷、便所においた。おそな



えと同じところ、今でもしている。(三俣)

おたきあげ 正月十四日の晩、おはちにごはんを山盛りにして上げた。男がやる仕事で、男が炊いた。この日に二回あげた。(荻窪)

## 十五日

十五日かゆ アズキがゆを作った。吹いて食べると田植えに風が吹くと言う。(三俣)

いい温度でさし出すのが嫁のつとめ、遅く起きるとかゆを吹いて食べなくてはならず、家に風が吹き、縁起が悪い。(下細井)

小正月十五日のアズキガユは、吹いて食べると、田植えに風が吹くという。カユカキ棒でかいて、それを田んぼの水口にたてた。ニワトコで作り、頭に十字に刻みを入れ、モミをはさんだ。十四日のオカザリカエのとき、マイ玉やモチバナといっしょに作った。アズキガユのナベを洗った水をヤシキにまくと、ムカデやマムシなどの毒虫除けになった。(堤)

モチとアズキでカユをつくる。ニワトコの木のを十文字に割ってカユカキ棒をつくり、お粥をかきまぜた。あとで苗代の水口に立て稲の成育を祈った。お粥は吹いて食べてはいけない。吹くと、田植えに風が出るといわれた。

正月十五日。あつくても吹いて食べてはいけない。吹くと田植のあと風が吹くといわれた。ニワトコの木を削って、カユカキ棒を作って、粥をかきまわした。田植をする前の代かきを意味しているという。

四ツ割りにして、切りもちをはさんだ。かきまわしたあと、水引でゆわえて神だなにあげておき、苗代にさした。その木に苗の品種の名をつけた。(片貝)

小正月 九日に作っておいたマタダマを、ミズナラ、ミズクサの枝

にさして飾った。(端氣)

藪入り 一月十五、十六日。番頭さんが休みをもらう日。鬼の首も許されるという日(江木)

休み日 一月十五、十六日は番頭の休み。二月十五日は作番頭の休みの日で、ウメワカといった。

盆の十五、十六日は、鬼の首もゆるされるといった。(片貝)

## 十六日

ヤブ入り 鬼の首も許されると言って、嫁や番頭、丁稚などが実家に帰れた。(上細井・日輪寺)

まゆかきの日 まゆ玉木からまゆ玉をとり網の中に入れた。このまゆ玉は、いって、正油と砂糖をつけて食べた。(三俣)

## 十八日

おたなさがしといつて、小正月の供えもの飾りものを片づけた。もせるものもやした。

十五日の粥をとっておいて、足して粥を作った。

まゆだまをとり、入れものに入れておいた。干して油であげて、さとうをまぶして食べた。

この日、馬屋肥を出した。(荻窪)

十八日ガユ 十五日のアズキガユをとっておいて、その残りを水でうすめ粥をつくる。その粥を家のまわりにまくと、悪い病氣、もぐらが入ってこないといわれた。

成木ぜめ 十五日のかゆののこりを「十八がゆ」と言い、カキの木などの成り木にナタでキズをつけたところにつけた。また、そのかゆを家のまわりにまくと「ナガムシ」が入らないと言う。(三俣)

二十日

二十日正月 休みになりぞうにを作った。奉公人は休みになる。

(三俣)

この日は一日、仕事を休んだ。

二十日正月と呼ばれ、正月が終わる。正月棚を片付ける。

二十日正月と言って、遊び日である。(三俣・江木)

エビス大黒を祀る日。エビスと大黒で夫婦であるという。お膳に、

一升マス、タワラ、カシラツきのサンマ、またはイワシを供えていた。

家によつては古い天保銭も供えていたところもあった。また、家族の

もっている金銭を供えておき、「倍にしてください」と願った。

(荻窪)

エビス講 夜、恵比須様を座敷にもつてきて、供え物をする。供え

る物は、物差し・そろばん・財布・金と白飯・生さんま(二匹)・昆布

巻。

恵比須、大黒様を出し、新しい俵の上にあげて、高盛りの飯、さん

ま、けんちん汁(または、うどん、そば)などを供える。

二十五日

天神講 毎月二十四日に子供が習字をした。一食分くらいの米をあ

つめ、食費をあつめ五目飯を親が作った。(三俣)

天神まつりといって、天神講をした。二十四日の晩に習字を書いた。

家によつて、ぼたもちや五目飯を作った。まわり番で宿に泊りこんだ。

昔はこもり堂があった。女屋や、二之宮からも人が来た。(江木)

子供達がヤドの家に集まって、一泊泊まりで習字を書いたり勉強会

をする。書いた習字は次日の早朝、人に見られないように、天神様の

石宮あげに行く。(勝沢)

二十八日

しまい正月 正月二十八日はしまい正月で、これをきつかけに夜な

べのワラ仕事が始まった。また、この日を「不動のざばらい」といっ

て遊んだ。(川原)

しまい正月といつた。(三俣)

昔は、この日にうたう歌があつたという。(上細井)

行事の日取り 旧暦でやっている。(片貝)

松の内 門松をかたづけないうちをいう。(片貝)

一月

一日

二郎の朔日

ジロウのついたちと言う。二月なのでジロウ。奉公人は休みで、モ

チをつき、ごちそうをした。(三俣)

二郎の一日。餅をついたりした。(下細井)

次郎のツイタチといって、変りものを作って食べた。甘いものや、

赤飯、もちなど。(三俣)

次郎のツイタチといつた。(片貝)

次郎のツイタチ。朝、アワメシを食べた。(堤)

ジロウのツイタチ。マンジュウを作って食べた。(鳥取)

デカワリといつて、奉公人の入れかえの日だった。十二月に契約し

て契約書を取りかわし、二月一日〜一月三十一日までを一年として働

いた。(江木)

アワゴワメシを炊き、神棚に供える。遊び日である。この日は、丁稚、番頭の出がわりと言つて契約の書き替えを行った。(上細井)

アワコワメシ(赤飯の中にアワを入れる)を炊き、神様に供える。赤飯をたいて子供がじょうぶに育つように祈つた。(青柳)

### 三 日

節分 「福は内」を二回、「鬼は外」を一回いう。神だなの前から豆をまきはじめて、各部屋をまわり、イナリさまの前でまく。

この日、ひいらぎの枝にいわしの頭をさしつばきを吹きかけて「虫の口をやく」と言いながら焼く。

家の中にまいた豆から、年の数だけ食べて年取りをする。のこした豆をお茶に入れて飲む。福茶という。とつておいた豆を初雷の時に投げた。(三俣)

豆がらをもやして、大豆をいった。ヒイラギにイワシの頭をさして豆がらで焼く。トボ口とぼくちにさしておくとと魔除けになる。(田んぼの虫の口を焼く)といいながら焼く。

豆まきは、神だなの前からはじめて、床の間、居間へとまわる。家の中では「福は内」だけ言い、玄関を出たとき、「鬼は外」と言う。外では「鬼は外」という。屋敷内だけまけば終了。まいたのをひろつて、年の数だけ食べ、福茶とつて、豆茶をのんだ。

初雷の時、神だなにあげておいた豆を食べた。(片貝)

神だな前——中の間——奥の間——屋敷神の順にまいた。福は内を三回、鬼は外を二回言う。(青柳)

「福は内、鬼は外」といいながら豆をまいた。神だなから始めて、神さまの所をまわり、最後に座敷の縁側で「鬼は外」とつて戸をしめた。それから屋敷の中のイナリ様などでまいた。井戸には入れない。

山に行き、二股の木を切り、イワシの頭をさしてイロリの火で焼く。始め「五穀の虫の口を焼く」といい、次からは、自分の作っている作物の名をいって、「〴〵の虫の口をやく」という。最後に「ナス、ユウガオの虫の口をやく」という。

一つとなえては、つばきをかけて焼く。夕食のあと、豆だけの福茶をのみ、年の数だけ豆をひろつて食べる。のこした豆はお茶袋に入れておき、初夕立にまく。

イワシの頭は、家によつて豆の上のせたり、お釜さまにあげたり、とぼ口にさしておいたりした。(江木)

主人が豆をいって、まいた。神棚、表座敷、お稻荷さまの順にまいた。福は内二回と鬼は外一回を言った。その後イワシをさした。また、豆茶(福茶)を作つた。

イワシは「作物の害虫の口を焼く」とつて三匹やき、頭をマメガラにさし、ヒイラギにつけて入口にさした。イワシ、ヒイラギの木、豆の入つたますはじめに神棚にそなえた。(三俣)

豆を炒る時となえごとを言う。豆は一升まずに入れ、神棚・台所・中の間・奥の間と順にまいた。「福は内」を三回称え、「鬼は外」を二回称えた。(青柳)

イワシを焼きながら、「ナス、ユウガオの虫の口を焼くなり」と唱え三回つばをはき、ヒイラギの枝(大豆の枝でも可)にさして玄関の外へ飾る。

豆をいる時、半分ずつ二度にわけている。最後に一緒にいる。神棚にあげる。『福は内』を二回、『鬼は外』を一回言う。

夕飯は、お頭つき、ケンチン汁を食う。(川原)

ひいらぎにいわしの頭をさして厄除けをした。豆をまいた。自分の年の数だけ豆をひろつて食べると、一年元気に過せる。豆をとつ



青柳大師の節分会（龍蔵寺町）

といて、初の雷様の時に食べる。

（下細井）

ヒイラギにイワシの頭をさして、となえ言をしてからつばをかけた。

（龍蔵寺）

大豆をホウロクでいり、年男が家の内外に大きな声で豆をまく。また、いわしの頭を二股の豆がらにさして焼き、トポロにさす。害虫を防ぐためと言われた。また、福茶と言って豆と梅干しを入れたお茶を飲んだ。節分にまく豆は枅に入れ神棚に供

えた。夕食をすませてから、豆をまいた。まく順序は、奥の座敷、表座敷、納戸、勝手口、オイナリサマ、井戸、便所、としていた。

ウマガミ様のところには豆をまくな、と言われた。馬に年を取らせないためだという。（堤）

大豆をホウロクでいって神棚に上げ、年男が風呂に入り身を清めてから、豆を神棚や座敷にまく。

いわしの頭をヒイラギにさし、ツバをつけながら焼き、ヤカガシをつくり、トポロや便所にさした。疫病が入ってこないようにという願いである。

二月の節分で、豆まきをして年をとったという気がした。正月は年が改まったという気分だった。（片貝）

イワシの頭をヒイラギの枝にさし、焼いたものを門口に置く。ムシのムシのクチ焼きという。「田畑の虫のクチを焼く」と唱えて焼いた。

（川原）

## 八 日

コトヨウカ メカイにヒイラギの枝を入れたものを、庭に立てた高ざおの先につけた。（堤）

針供養といって、この日は針仕事は休んだ。（片貝）

針供養 この日はハリヤスメと言い、裁縫はしなかった。（三俣）  
おことはじめ さおにメカイを立てて、庭にかざった。

ヒイラギの葉を切り、メカイに入れ、竹の棒につけて立てておく。（江木）

ケエドウにかごをさかさしておく。（龍蔵寺）

初午 二月の節分の日から最初の午の日。白米を石臼で挽き藪の形をした「おまい玉」を作り柳の木の枝に飾り、床の間に置く。（川原）

この日は、マユダマを作つてミズキ・ナラの木・桑の木（根からとつて）の枝にさし、かざった。また、フナ（二匹）やハナガシを供えた。

アズキガユを作つたが、口で吹きながら食つてはいけなうと言われた。（吹くと田植に風が吹くと言った。）

二月十五日には家の周りに、アズキガユをまいた。（青柳）

おまい玉を作つて供え、キヌガサさまの掛軸をかける。（川原）  
日頃と違ったものを食べる。二月は休息の日。いろりのそばで野菜

着等を縫う時期（下細井）

マユ玉を一升マスにもれるだけもつて床の間にしんぜた。（小神明）  
二月八日頃。竹ざおの先にかごをつけ、かまを入れておいて庭に立てる。天から金が降ってくる。かごの中にたまっていると聞いた。

（片貝）

まゆだまを作つた。大きいまゆだまを作つてマスに入れ、オシラサマにあげた。マスの四隅にワラを立てた。（荻窪）

マユダマをかぎった。ダンゴをふかして木の枝にさした。(片貝)  
マユ玉を作り、一升枧に山のようにいれて神棚にそなえた。この日には蚕の神の一本木稻荷に行った。そこでは蚕の道具を売っていた。

(三俣)

マユ玉を作る。升に入れてかいこ神にあげる。ワラの中に入れる。マユ玉を食べると病気にきく。歯痛にきく。モチをつくが、あんこを入れたもちは、あんこが蚕の病気のナダレみたいなので作らない。

丙午のときならない。初午には仕事をするなという。針仕事をする  
と「火に立つ」——火事になるといふ。(江木)

米の粉でマユ玉をつくり、ミズクサの木にさし、座敷に飾る。

(上細井)

一斗枧に山盛りにマユ玉をのせて飾る。嶋村の稻荷様にお参りに行った。(日輪寺)

米の粉でマユ玉をつくり、神様に進ぜ、翌日、下ろして食べる。

(小神明・勝沢)

馬に飾りをつけ、石山の観音様にお参りに行く。(勝沢)

マユダマを一升枧いっぱい盛り、神棚に供え、オシラサマを祀った。(鳥取)

## 十五日

休みの日。百姓の休み日といった。(三俣)

シシマツリ 村の若者がシシをかぶって、各家をまわる。お札を一枚ずつもらう。(上細井・新田地区)

## 三月 月

### 三日 日

お節句 四月の節句の親戚と交換しておすしを作った。お礼によばれていく。(三俣)

四月の節句はしまい節句といった。

早く人形を出して、早くしまう。遅いと縁遠くなるという。(片貝)

ひしもちをそなえた。紅や草を入れた色もちをついた。里へつけ届けをした。古くなったりねずみに食われたりした人形は、大川に流した。(江木)

ヒナ祭り 女の子ができると、ヒナさまを親類がくれた。親王は向かって右にかぎったような気がする。祭りの二、三日前にかぎって一週間程でしまった。

紅ベニを使って紅白のヒシモチを作った。親類にはモチにイカをつけて配った。嫁いだ最初の正月には実家から内裏さまが送られた。

(青柳)

節句 ヒナ祭りは三月三日で親せきからヒナサマをもらった。ヒナ

サマは前橋で買った。

結婚した時に、実家から高砂の対を持たせてもらったものを飾った。紅白のひし餅をあげる。米をよくひいて、砂糖、酒を入れて白酒を作った。いただき物が増えたら、家で段を作って飾った。(下細井)

## 十五日

春まつり 三月十五日は春まつりで、子供達が社殿に一晚泊まった。六・七十のトウロウを作り、この晩はトウロウ大将(高等二年まで)

が采配をふるった。(川端)

春まつりの日 旧三月十三日十五年ほど前から四月十三日に変更した。神様をやるのに寒いのと、節句に近いため。(片貝)

梅若 梅若と違って、番頭、女中の休みの日だった。草もちをついて遊びにやった。梅がさくころで、これから忙しくなるので中休みさせたのだという。(江木)

### 二十三日

彼岸の中日で、天道念仏をした。縄をなつて、大きな輪を作る。まん中に念仏錠をおきたきながら「ナンマイダ」といい、縄を持つたまま、子供たちがまわった。夜明けから夕方まで休みながらやった。座敷に念仏ばあさんがいて、念仏をとなえる。十三念仏をとなえた。このおばあさんにせんべいなどのおみやげを持つてくる。

子どもが三時ころまでやり、「天道念仏」と刷ったお札と花菓子、ツラヌキ(おさいせんを寄付すること)の家に配った。(三俣)

彼岸 走り口に墓まいりをする。(江木)

中日にはオハギとダングを作った。入り口に特に行事はなかった。墓参りに行くのは家の都合による。(三俣)

入り口——御先祖を墓へ迎へに行く。朝は小豆のご飯を食べる。

中日——おはぎを作る

はしりっ口——送りに行く日。米の粉で団子を作り、仏様に進げる。

おねじっこ、あまねじを作る。(川原)

おはぎを作った。墓詣り。(下細井)

ぼたもちなどをつくり、墓参りに行く。寺へ行き、セガキをもらい、塔婆を墓に立ててくる。(上細井)

### 社 日

社日 コザル(かいこ用のざる)を売りに来たので買った。(上細井) 墓参りに行く。おはぎ・だんご等を作って進げる。ボタ餅を作って進げる家もある。(五代)

かいこを飼う家は、かいこの道具(かご・ざる等)を買いに行く。(五代)

彼岸の入りにはカンマシメシ(まぜ御飯)をつくり、また、中日には、ボタモチをした。墓参りを行なった。

春の彼岸から、「米粒一つずつ日が伸びる」と言われた。(片貝) コザル(かいこ用のざる)を売りに来たので買った。(上細井)

かいこを飼う家は、かいこの道具(かご・ざる等)を買いに行く。(五代)

社日ザルという蚕の道具を売りにきた。(三俣)

### 二十五日

祭日 この日は天神さまの祭だった。(江木)

### 四 月

### 三 日

節句 一カ月遅れの四月三日にしていた。近親からヒナ人形が贈られた。

ヒシモチをくばった。四十〜五十cmのものの三枚がさね。家例でツバキの花はいやがり、紅も使わなかった。赤い花かざりもしなかった。そこでみんな青の紅のモチにした。子供の祝いでも紅は使わなかった。

おすしに草モチを作った。

おひな様をしまう時は何か作った。(三俣)

オヒナ様を飾る。オヒナ様は初節句の時に嫁の実家や親せきが贈つてくれる。餅をつき、ひし餅をつくり、嫁はこれをもって実家に帰った。

オヒナ様は、七日たたないうちにしまえと言われた。

オヒナ様を飾る。餅をつき、菱餅をつくる。

初節句 初めての節句には、嫁の実家からヒナ様が届けられた。当日は、お返しに青白赤の菱餅に水引きをかけて届けた。

## 八 日

花祭り 町有のお釈迦様の人形があり、甘茶をかけた。銅製のものがあつた。屋根は子供が作った。目が悪くならないようにと願つた。

(三俣)

お釈迦さまの日。甘茶をかける。(片貝)

お釈迦様に甘茶をかける。(江木)

子供をつれて香集院や呑竜様に行った。呑竜様は毎月八日に行った。寺で甘茶をくれた。(三俣)

## 十三 日

十二年にいつべんの御開帳で片貝神社の建物のふしんをした。丑寅の年にあわせた。(片貝)

## 十五 日

春まつり 町内で祭りがあつた。(三俣)

赤城神社の春まつり 神社は元は天神さまだつた。今は三俣神社に

なつた。(三俣)

アナツプサゲ 麦を刈りおえた頃、ぼたもちを作った。(荻窪)

春祭り 四月十四日晚、若者が神社にこもる。コワメシを炊き、重箱につめ、お参りに行った。新鮮な野菜と白い目隠をした鯉を神社にあげ、神前で鮭を切り、鯉こくをつくって食べた。(上細井)

地区によって日が異なる

四月十五日(勝沢)

十六日(小神明)

十八日(五代)

二十五日——天神様(五代・天神曲輪)

## 五 月

八十八夜 年取りより八十八日目。

八十八夜の別れ霜。シモヨケモチをつき、前の晩に、すし、もちを重箱に入れ、外に出して、霜が降りないようにと祈つた。(上細井)

八十八夜の別れ霜。この月をもって霜が終わる。シモヨケモチをついて食べる。神宮が来て厄除けをするところがある。

「八十八夜の別れ霜」と言つて、霜が降りやすい。霜よけ餅をついた。(川原)

初節句 のぼり旗をもらつた。それには乳を二十コつけた。二十になるとハタチと言つた。カシワモチをくばつた。節句には赤飯を作つた。(三俣)

## 五 日

お節句 鯉のぼりや吹きながしは最近のもので、鍾馗や頼光、清正

の絵ののぼり旗を立ててあった。(三俣)

のぼりばたをあげた。(片貝)

五月の節句は近所の人に集まってもらい芳(杉)を立てノボリバレン(吹き流し)をかざった。(田口)

風呂はシヨウブ湯にした。屋根にシヨウブとヨモギをさして魔よけにした。(三俣)

モチつきは、他家の両親そろっている息子を二人頼む。自分の両親がそろっていれば自分でついた。(川原)

しょうぶ湯をたき、かしわ餅を食べる。実家へは赤飯を炊き、干だらをのせて持つて挨拶に行く、内飾りはカブト、外飾りはこいのぼりに吹き流し。

初節句には親せきからカブトを貰い飾った。(下細井)

五月の節句には、シヨウブとモチグサを屋根の三とこにさした。こうすると蛇が入らないと言われた。

また、かしわもちを作り、ふきながしをかざった。ふきながしは、サラシをこんや、(紺屋)に運んで染めさせた。(くれた家と自分の家の家紋を入れた)(青柳)

男の子の節句。のぼりを立てた。

男の子の節句。武者人形を飾ったり、のぼりを立てたりした。餅をつき、里方や近所、知人などに配る。

シヨウブの葉、モチグサを軒先にさした。神棚にヨモギを供えた。

また、この日はシヨウブ湯にはいった。これは、魔よけになるといわれる。(片貝)

## 八 日

シヨウブ湯 シヨウブ、ヨモギを組んで屋根に三カ所さす。シヨウ

ブ湯に入る。

シヨウブの木を風呂に入れ湯に入る。この湯に入ると体が強くなると言われた。シヨウブとヨモギを組んで屋根、屋敷稲荷それぞれ三カ所ずつさす。

赤城の山開き 人によって行ったりする。赤城山の日で、夜に行つて朝つくようにした。(三俣)

赤城神社の大祭とともに、赤城大洞の山開きの日。若者は、ほとんどが行つた。

近所の人で集まって、弁当を持ち、遊びに出かけた。(荻窪)

オシヤカ様の日 寺ではオシヤカ様を出して生花で飾る。村の人達がお参りに来て、子供達は甘茶をもらいに来る。自分の年令だけオシヤカ様に甘茶をかけてくる。(日輪寺)

## 六 月

田植え 辰の日は、寺の田植え日に当たるため、田植えをしてはいけない。

オサナブリ 田植えが終わった時、赤飯を炊く。田の水口から七株とつてきて、それを箕の中に並べ、そこにお供えをする。その株は、しばつてオカマ様のところに下げておく。ものがのどにつかえてしまった時その穂でのどをなでると良い、と言われている。

## 七 月

田植えの初日 はじめての田植えの日には赤飯をたいて食べた。

(堤)



準備は六月二、八日より始めて、七月十日ころまでにはおわった。朝来て田植えして、十時ころ朝飯でニギリを食べ、昼は赤飯であった。

苗取りは四人。一人五畝は植えた。四時ころに終わった。人は、六月三十日に苗取りに四人来ると、一日に広いところを植えるのに八人、二日に苗取り三人、三日に植える人七人というように来た。年中三人は来ていた。麦刈り、麦ボウウチ、田植え、稲刈りと続いた。

ストメは男六十銭で、女四十銭、三食で酒一本をつけた。五十五、六十年前は日当は日一円ヒイチリョウと言った。八十銭くらい。(三俣)

オサナブリ 七月三日か四日に行った。おさなぶりを行い、苗を二つカマドに供えた。また、馬鋤を洗い、御神酒をかけた。(川原)

田植えのあと、水口の苗を五株持つてきて七株にふやし、箕の上にならべて南向きにおく。マンガを前に置いて食べ物をしんぜる。

親せき中におどん、いんげん、ナスを持つて配る。煮物をつける。田植えを手つだつてもらった家にも行った。(江木)

マンガ祝い 田植のあと、七株苗をそなえ、ごちそうをしんぜる。道具を清めた。(三俣)

マンガアライ 七月三日にした。オサナブリと言った。働いてもらった人に酒を出してのんでもらった。マンガに酒をかけた。(三俣)

## 七日

七夕 七月七日に行い、竹を切つて飾り、赤飯をたいたり、ふかしまんじゅうを作つたりして供えた。サツマイモなども供えた。(龍蔵寺)

七夕かざりは作つた。飾り物は白川に流した。(下細井)

芋の露で墨をすつて字をかけた。習字が上手になるといった。笹は田にさして納めた。水口にさす家もあった。この日までに田植えをおわらせたいと言った。(江木)

## 中旬

農休み 七月十三・十四・十五日と野休みをした。青柳のおぎよん(祇園)に行つたりした。おぎよんは上・中・下宿と三台の屋台が出てにぎやかだった。

青柳のおぎよんは、特に中心はなく、町全体がにぎやかになった。

(龍蔵寺)

毎年七月十四、十五、十六日はノウヤスミで一切に農作業を休んだ。この日にノウヤスミをしない家があると近所のモンがその家に集まつて仕事を手伝つた。すると後で酒肴を出さなければならなかったので、この日はノウヤスミにした。

若い頃はマエバシに映画(デンキカン)(トッキー)を見に歩いて行った。帰りにソバを食つて帰つた。(田口)

ふかしまんじゅうを作つた。この日には農休み勘定といって、田植えを頼んだ人にお金を払う日だった。(三俣)

七月十四、十五日で、集まつて一杯飲む。田植。草取りが終つて、一段落ついたところで、日取りは変えないでやつている。(片貝)

七月十四、十五日。天候によつて十日おくれの時もあった。区役場と相談しておくませた。(江木)

七月十五日が休み。田植えがすむと休み。(三俣)

十四、十五、十六日は農休み。米、麦、うどん粉などでゆでまんじゅうを作り、たくさん食べる。馬に一番最初にやる。(上細井)

十四、十五、十六日は農休み。ふかしまんじゅうを作つて骨休みした。

七月十四、十五、十六日 農休み

子供のミコシ祭り 七月十四日子供が神輿をかついで村中を回つ

た。そのときには、神輿をかついだまま家の中に入りこんでいいとされた。(片貝)

祭 七月十四、十五日。八坂神社のみこしをかついで、村中をまわった。百姓、農家、キュウリの神様という。虚空蔵様に合祠していたが、また復活した。(片貝)

百万遍 七月十五日、稲ワラで輪を作り百べんまわる。一軒一軒まわる。今のイタイスパーの所へもついでいき、最後に焼いた。桃木川に流したところもあった。

まわる先頭には、サンダワラに三本の幣束を立てた子がおり、鉦を二人でかついであとをついていった。どこでもどろだらけで回り、にくまれた家は中まで入った。座敷に上つても文句はいえなかつた。(三俣) 地藏さま 高等二年(十七歳)が親方になつて子ども中心でやつた。カンケイというお金を集め、とうろうの紙やお菓子を買った。旧曆の七月二十五日だった。(荻窪)

## 八月

### 一日

カマの口あき 一日が地獄のカマの口あきといい、お盆のはじまりと言った。ふかしまんじゅうを作った。(三俣)

釜の口あけの日といった。(三俣)

八月一日の釜の口あけの日には、じりやきやまんじゅうをつくった。

(関根)

地獄から開放されて仏様が出かける日、だと言う。(上細井)

お盆様が帰って来る日、だと言う。(日輪寺)

あんこ入りの焼きもちをつくる。

赤飯、やきもち、ふかしまんじゅうなどをつくり、神棚に上げて、食べた。

### 七日

盆の準備 前の日に用意をした。墓掃除は七日に行った。また七日にはチガヤをとつてきて盆棚を作った。ナワは左ナワではなかつた。棚にはササをかざり、ホーズキをつるした。(三俣)

七夕 子供が竹を切り短束をかざった。おわつたあとは川に流した。

(三俣)

子供が色紙の短冊に願いをかき、若竹に飾る。終わつたら近くの川に流した。また、里芋の葉にたまった水で字を書くと言われ、と書かれた。

笹のついた竹に、子供が願い事を書いた短冊を結びつける。里芋の葉にたまった水滴で字をかくと字がうまくなると言われた。七夕が終わるとその竹を川に流した。(勝沢)

盆だなを作る。チガヤをなつて二ヶ所まく。それに杉葉をさげる。掛け軸をひもから下げる。(片貝)

八月七日は七夕の日である。この日には庭先に新竹を二本立てる。

新竹には、川の名を書いた色紙をつける。また、縁側へ卓袱台を出し、その上に赤飯やうどん、ナス、キュウリ、トマト、トウモロコシなどを供える。

子どもがカネヅカ川で七回水あびをした。この日里芋葉の露で墨をすって字を書くと言われ、手があがる(上手になる)といった。(三俣)

三丁目のとうろう 八月七日は地藏さま、十七日は、十一面北向観音のとうろうだった。(三俣)

十一日

二丁目の薬師さまのとうろう。目の神さまという。子どもが絵を書き、中にカンテラの火を入れた。(三俣)

十三日

盆迎え 盆は一カ月遅れである。十三日に墓地に行き、火をつけ、チヨーチンでもつてきた。(三俣)



盆むかえ (小神明)

迎え盆 かいど(門口)でムギワラをもす。提灯を持って墓へ行き、帰りに火をつけ、家へ帰ってきてろうそくにをつける。

十三日の夕方、風呂に入り体を清めてから墓へ行き、墓地に線香をあげ、提灯に火を入れ、家までもち帰る。かいど(門口)でムギワラをもす。盆の期間中は草刈りをしてはいけない、草刈りをするとう様様の足を刈ることになる、と言われた。

をあげる。家で火をたく。(片貝)

中旬

お盆 八月十三・四・五・六日クワクレ台を使ってボンダナをつくる。これに位牌、時季の野菜・果物・水のはいった器を供えた。一年以内に亡くなった人の位牌は新盆にあたるので、ボンダナの中心にす

える。

十三日、墓参りをして、そこがかがり火をたく。家にもどつて来て、門口で迎え火をたいた。

十六日、門口で送り火をたく。このとき、なす。きゅうりで作った馬をサトイモの葉をしいた上にのせ、門口におく。(日輪寺)

七日は、お墓のそうじをした。

迎え盆で、迎え火をたく。お寺にいったあと、門口で麦ワラをもやし、おたきあげをする。線香をもやす。

送り盆には、ナスで馬を作る。トウモロコシの毛で尾を作る。ナスとキュウリを小さく切つてエサにする。三本辻に持つていくのが本当という。墓に今は持つていく。(江木)

毎年新しい茶碗を十個買う。十三日には水飲み茶碗をおく。また、ドンブリにミソハギをゆわえて入れる。お茶をあげる。

十四日朝はなるべく早くオハギを作る。十個作り、ミソシル、お茶をあげる。これをさげて、昼はウドンになる。十個あげ、ナスとインゲンのおつゆとお茶をあげる。これをさげて、晩は御飯をたいてあげる。その後お茶をあげる。十五日も同じ。(三俣)

八月十三日から八月十六日まで、お盆棚を組立て、仏様(位牌)を全部出して並べた。盆のぼたもちとおはぎを作つて供えた。八月十三日は迎え盆。お寺に仏様を迎えに行く。忙しい時は、この日も仕事をしているので、迎えに行く時間は自由。

朝はボタモチを食べ、昼はウドン、夜はご飯とうなす汁を食べる。

八月十四日は休んでも、仕事をしていても良い。

八月十五日は休んでいる。

八月十六日は送り盆。お盆にまつわる言い伝えには次のようなものがある。

送り盆の時、野良で仕事をしていると、仏様がお墓に帰る道すがらに「ぼたモチ一つこしらえなかつたので」今、子供をイロリに蹴り込んで来た。」という仏様の声が聞こえた。

お盆の時は、イロリをよくそうじしろ。

ヤケドは仏様のバチあたり。

送り盆の後、仏様がお墓で、家でもてなしやごちそうについて話し合う。

盆おどりは八月十五、十六日に神明様の境内で昔やった。もう七十年程前。

四角い灯籠を境内にかざした。

雀様（青柳町神明宮雀大神）で大正末まで盆おどりがあつた。お神楽と屋台が出てにぎやかだった。（龍蔵寺）

八月十三日は迎え盆で、麦ワラを門口で燃し、提灯をもつて墓へ行つた。盆棚は竹四本を使って骨組みを作り、盆花でかざつた。また、果物を供えた。（青柳）

八月十三日の朝、盆棚をつくり門口で小麦のカラを束にしたものに火をつけ、迎え盆にでかける。家によつては三本辻に小麦の束をたて火をつけた。この火で提灯の火もつけた。

十四日の朝はボタモチを作つた。

十六日は送り盆で、門口に小麦のカラを束にしたものを立てて火をつけ墓にかけた。（田口）

盆の迎えはお寺さんからろうそくで、火をもらつてくる。座敷に盆棚をつくる。四本の竹を立てて飾る、チガヤの縄で四方を結び、新しいごぎを敷き、お供え物を飾る。

畑で収穫されたもの、食事を三度あげる。供え物は送り盆の時に墓に持つて行く。お盆様になす、きゅうり、とうもろこし（尾）を牛や

馬にみたてて、仏壇に飾つた小麦の上にのせる。盆の中日にうどんを打つて、荷縄にした。

沿道すじに、野菜をきざんで里いもの葉にのせて馬や牛が食べるように並べた。（竜蔵寺）

石尊様に線香をあげる。子供でも大人でも夕方になると町内順番に絶え間なくあげた。

八月十三日——迎え盆

八月十四日——新盆で親せきがおまいりにくる。

八月十五日

八月十六日——送り盆（下細井）

七日はお墓そうじで小豆飯を作つた。十三日は迎え盆で、麦ワラに火をつけた。家紋のついた提灯を持つて墓に行き、ろうそくに火をつけて持つてきた。十六日が送り盆で、キュウリやナスの馬をつくり、サトイモの葉にのせた。トウモロコシの穂を尾にした。

盆の間、鬼灯ほおずきを下げた。

朝おはぎ、屋うどん、夕ごはんだった。

盆だなは、四本柱で、チガヤの縄を二段に巻き、杉の葉を下げた。無縁さまのたなを、盆だなの下に作つた。（三俣）

ナスで馬を作つた。しつぽはトウモロコシで作り、ナスキュウリのきざみを桑の葉の上においた。

ワラを二たば用意し、一たばを墓でもやす。墓で背おう形をして御先祖さまをつれてきてもう一たばをかど口でもやす。せんこうをあげる。（龍蔵寺）

盆棚 竹四本で棚のわくをつくり、チガヤで縄をない横に張り、杉の葉を三つ下げ、その間にほおずきをつるす。新しいごぎを敷き、仏壇から位牌を出して並べる。盆花、生花を飾る。果物、おはぎ、うど



盆の送り火 (小神明)

んなどを供える。

**盆棚** 盆棚をつくり、仏壇から位牌を出して並べる。盆花、生け花を飾り、果物、水、おはぎなどみ供える。棚のまわりには、軸物やちょうちんなどを下げたりした。

**新盆** 新しい白い提灯を下げる。ごごを新しくする。(龍藏寺)

**送り盆** 十六日をボンガラと言う。ムギワラを皆所でもし、お墓へ行く。ボタモチ、果物、水、花などをもつて行き、供えてくる。また、ナ

スとともろこしの毛でつくった馬を置いてくる。

盆棚から提灯に火をつけ、墓へ行く。ナスの胴体、シツポはともろこしの毛、四本の足をつけた馬を置いてくる。皆戸でムギワラをもつ。

家から提灯に火をつけて墓に行き、消す。十六日朝に御飯と新しい水をそなえてから送る。ナスとキュウリでウマを作り、ごちそうをつけて送った。(三俣)

**盆の期間** 昔から変ってきている。九月一日〜三日、八月二十四日〜二十五日、七月二十四日〜二十六日、八月十三日〜十六日と変わったが、七月が比較的長かった。これは農作業の都合による。(江木)

墓まいるのみ。火をたく。馬を作つて置く。(片貝)

**ポンプチ** 盆迎えの日、お布施をもつて寺へ行き、その代わりにお茶をもらってくる。盆の期間中、その茶をお盆様に上げた。(上細井)

**盆踊り** 盆期間中の二日間、神社の境内にやぐらを組み、若者が歌つ

て踊った。明治の末年頃までであった。(上細井)

**盆中の食事** 魚、肉は使わない。精進料理でインゲンをにた。十三日。朝、昼御飯で午後むかえに行く。十四日は朝オハギ、昼ウドン、夕方御飯で十五日も同じ。トーナス、イモも出た。(三俣)

**十五夜** オテマルを十五個作る。果物、野菜をつける。カヤをとつてそなえた。オテマルは表に出しておいたが、皿ごととられたこともある。(三俣)

旧暦の八月十五日に行つた。また、その前の十三夜が晴れると麦が良く穫れると言われた。片まつりはいけない、と言われて十五夜を行うと二十三夜も行つた。

二十三夜は月の出が遅いので、月が上るまで待った。若者などが良く二十三夜待ちをした。上の方では皆が寄つて行う場合もあった。

(龍藏寺)

八月十五日は、ススキ・米の粉を丸めた団子十五個、果物を供えた。この供物を子供がとつてもおこられなかった。

九月十三日は、ススキ・米の粉を丸めた団子十三個を供えた。(青柳)

旧八月十五日。柿ぬすみや、団子つきに子どもがいった。取つても文句はいわれないし、盗まれると縁起がいいといった。竹の棒の先に釘をつけて、さして取つた。(三俣)

旧八月十五日。萱に団子をそなえた。篠の先をとがらせて、団子をさしてとつた。さがれば縁起がいいという。十五夜の日にはラッキョウをまくと、十五倍ふえるという。(片貝)

オテマルを十五個、ススキを十五本、あるいは五本、他には時季の果物をお盆にのせ、それを縁側の台の上におく。供えたものは、近所の子どもがさげに来ていた。(片貝)

八月十五、十六日 水車を休んで、米をつかせなかった。(片貝)

ダンゴ突き 十五夜にはダンゴがそなえられる。そのだんごを他の家の子供が手作りの道具で突きにやってくる。家の人も慣れたもので、わざわざ突きやすいように障子を開けておいてやる。突く子供も、突かせてやる大人の方も楽しい行事になっていた。(北代田)

天神さま 八月二十一日、神社でトウロウをつけた。

ヨシズをかこい、各団体の長に甘茶をせたいしてお金をもらおう。そのお金でまんじゅうを買ってきて食べた。(片貝)

二十一日

地藏様のお祭り 子供組が燈ろうをつけて、道すじに立てる。

(上細井)

二十四日

とうろう 二丁目の天神さまのとうろう。ツラヌキでお金をあつめて道具を用意した。(三俣)

二十六日

とうろう とうろうをつける。(江木)

二十七日

お諏訪さま へびの神さまで、へびがいっぱい出た。(江木)

お二餅 蚕がニワで休んだときについた。オコアゲ祝いにも餅をついた。八十八夜にも蚕の祝いといって餅をついた。(関根)

## 九月

一日

八朔の節句 ショウガの節句。嫁が赤飯の上にショウガをのせて、里に行く。メカイ、箕を里からみやげに持って帰る。

「ショウがねえ嫁だ。」——「大目に見てくれ」の意味だという。

(三俣)

ショウガの節句とも言う。はじめての嫁さんがとまってゆく。葉にメが荒くあんである。(三俣)

九月一日に、初めて嫁に来た女性が、ショウガと赤飯を持って実家に客に行った。その日に帰って来るため、朝早く出かけた。

嫁いだから三年間位は行く人もあつたが、子供が生れたりすると行かなくなつた。

嫁ぎ先の家では赤飯を食べたが、特別なことはしなかつた。ショウガの節供とも言つた。(龍蔵寺)

九月一日はショウガの節供で、嫁が嫁ぎ先からショウガをもって実家へ帰つた。里ではメカイを娘に持たせて戻した。メカイは目をあら

く編み、「おおめに見てくれ」の意味をもたせた。(青柳)

しょうがを葉をつけたまま赤飯にのせて、嫁が実家(客に行く、実家はメカイを持たせて帰す。嫁に少々至らない事があつても大目に見

てくれという意味。)(下細井)

嫁がしょうがをもつて実家へ行く。しょうがない嫁という意味。めかいをもらつてくる。めをかけてくれという意味。(堤)

ムコの子アゲ節句、シヨウガの節句ともいう。ミケエをもって、ムコとヨメが里にあいさつにいくと、ミをみやげにもらった。嫁を大目に見てくれという意味という。メケエ、ザル、ナエトリ台などをくれた。(片貝)

しょうがとこわめしを持って里へ行く。メカイをみやげに持たせて帰す。(江木)

嫁が実家に、赤飯と葉ししょうがを入れ、里帰りをする。帰りにメカイをもらう。メカイは目が多く、子供が多くできるようにと言う。

(上細井)

はじめて作物ができる日だと言う。さといもやとうもろこしなどの農作物を神棚にあげる。(五代)

この日は、嫁が実家に帰る日である。手土産として、赤飯を重箱につめ、葉ししょうがをのせてもっていく。帰る時には、メカイをもらう。

その年取れた新しい粉でつくったまんじゅうを、神棚に供えた。

この日は嫁が実家に帰った。葉ししょうがと赤飯とをみやげに実家に行き、帰りにメカイをもらって来た。嫁ぎ先に「メコボシをしてくれ」「オオメに見てくれ」と頼む意味がある。(上泉)

## 上 旬

二百十日 嵐の日だと言われた。この日を過ぎると、水田の水をきつてもいいとか、魚をとつてもいいとされた。(片貝)

九月七日。とうろうをした。(江木)

九月八日。薬師さま。(江木)

魚取り 二百十日頃までは、まだ田の水を使っているが、この頃になると使わなくなるので、カネズカ川をせきとめて魚とりをした。

ナマズ、ウナギ、ハタラケ、ギギョツタという魚がとれた。朝六時

から七時ごろやった。(三俣)

## 中 旬

十五夜 九月に行つた。

お供物

おてまる 玄米を粉にしただんご。

さつまいも

かき

カヤ十五本

ふかしまんじゅう(上細井)

十三夜 旧九月十三日のこと。(三俣)

「十五夜にくもりあれども、十三夜にくもりなし」と言われた。この晩くもつて月が見えないと、翌年の夏は雨が多い。(片貝)

十三夜には縫い物が上手になるように、縫っているものを仕上げる。

十五夜はお団子を米粉で十五個作り供える。すすきも一緒に飾る。

(下細井)

縁側にオテグマ十五個、カヤ十五本、さつまいも、さといもなどをお月様に供える。子供達は、竹の棒に釘をさしたもので、オテグマをつけてまわつた。オテグマをとられるとかいこが当たると言う。

(上細井)

縁側に机を出し、オテマル十五個つくり、すすき十五本、果物などを供える。

子供達は、木の棒の先に釘を打つたもので各家を廻り、オテマルをとつた。

お彼岸 九月二十三日。秋の彼岸の中日。天道念仏があつた。春と同じ。(三俣)

彼岸で、墓まいりにいく。(江木)

九月二十日頃が彼岸の入りで一週間ある。九月二十三日は秋季皇霊祭でぼたモチを作つて祝つた。(龍蔵寺)

## 十月

秋まつり 十月には秋まつりが八幡さまであつて、家では赤飯をたいた。(田口)

秋まつり 十月十六、十七日。オクンチといつて秋まつりの日だつた。十七日が祭日だが、十六日の晩はとうろうをし、子供が社務所に泊つた。赤飯をふかしたり、里芋、こんにやくの煮物を持ってきてくれて、それを食べた。

上三俣は、小石神社から神主が来ていた。神社整理で、小石神社に合祀された。小石神社も敷島へ移転した。(三俣)

## 十七日

オクンチ トウロウをつけた。小学校三年生以上が神社に泊つた。リヤカーでフトンをはこんだ。赤飯を進ぜたものを食べた。

世話人は小学六年生がなつた。卒業後はウシロミ(後見人役)として、一年くらいはいる。まわつてきて注意するくらいだつた。寝ぞうが聴いと、腹に丸印を書かれたりした。

中学へは、一学年で一〜二人くらいだつた。(片貝)  
神社に赤飯をしんぜる。(江木)

## 十九日

神社の例祭日。(江木)

秋の祭り。子供達が前夜、神社に灯籠をつける。朝、赤飯を重箱につめ、産土神に進せてくる。昔(五十〜六十年位前)は、若者が前夜からおこもりをした。(上細井)

神社の祭典。素人すもうが催される。前の晩、若者が社務所に泊まる。青年団が中心となつて行つた。(五代)

神社のお祭り。神主がやつて来て、おがむ。(小神明)  
秋のお祭り。(勝沢)

## 十一月

## 十日

十日夜 十一月十日は、ワラの束をイモガラでしばつて庭をたたいてまわつた。昔は歌を歌つた。

十日夜く

十日の晩にや寝らんねエ

大飯食つちや腹だいこ

十日夜の行事で秋も終ると言われた。(青柳)

十一月の十日夜にはモチをついた。ワラデツポウを作つて、自分の家だけでなくよその家の庭もたたいてまわつた。昔は歌を歌つた。

トウカンヤ ワラデツポウ

十日の晩にや 寝エらんねエ

大飯食つちや 腹だいこ

十日夜の晩は十五夜の晩と同じように子供達は夕方から外へ出るの



が楽しみであった。(田口)

ワラデッポウ

新しい稲藁でワラデッポウを作り、唱え言を言いながら子供達が庭をたたいてまわった。もぐらを打つのだと言う。

十日夜もち

もちをつき、大根のからみもちで食べた。

旧の十月十日。モチをついた。(三俣)

十日夜、十日夜くとうたつた。二メートルくらいのとウカン棒をワラであんでまわした。しつぺえげえしといい、ピーンという音がする。(端気)

ワラに芋がらを包みこんで、庭の地面を打つ。みんなで声をそろえて、

「とうかんや、とうかんや、十日の晩にはねえらんね。大メシ喰ちや腹ダイコ」と声を出す。

毎年秋に行われ、モグラ退治の意味がある。(北代田)

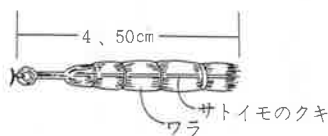
十月十日に行った。サトイモのクキを芯に、まわりをワラでまいた四、五十 cm 位の棒を作り、子供が集り家の回りの地面をたたいて各家を回った。

モグラが出ないと言われている。夜六時頃から始めた。

十日夜モチといって、モチをついてカラミ大根で食べた。

かけ声「とうかんや、とうかんや、とうかんやのぼんにはねえらんねえ、ゆうめしくっちゃ、はらでえこ。」

旧十月十日。イモガラを中に入れて音を良くしたワ  
(上細井)



ラ鉄砲を作り、地面をたたく。六尺の竹の柄をつけた所もある。

この日、隣町の清王寺と、佐久間橋でけんかをした。この日は大根の年取りという。三俣は大根の産地という。

「トウカンヤ、く夕飯食つちや腹ダイコ」といいながらたたいた。

(三俣)

旧十月十日。イモガラを入れたワラツトツコで地面をたたいた。モグラヨケという。

「十日夜、十日夜、十日夜の晩はねられない」とうたいながらまわった。

この晩、上泉、野中を相手にして、けんかをした。(片貝)

新しい藁でワラデッポウを作り、子供達が地面を叩いてまわる。「トウカンヤ、トウカンヤ、十日の晩には寝られねえ、夕めし食って腹でいこ」と唱えながら、モグラ退治になった。

ワラとイモガラでハタキボウを作り、子供達が村中の地面を、これではたいて回った。モグラがもぐってこないようにするためだという。(トウカンヤ、トウカンヤ、オオメシクツチャ、ハラダイコ、トウカンヤ、ネランネ)と歌いながら、地面をはたいた。この日は、「大根の年取り」ともいう。(日輪寺)

## 初旬

イナリ祭 旧十一月一日に村で集まって一杯のむ日。東片貝町は北、南、東の三つのクルワに分かれていて、そのくるわごとに、当番の家を宿にして集まった。公民館ができたあとの、四十六く七年からは、一つにあつまってやるようになった。(片貝)

七五三 あまりしない、稲刈りの最中で暇がない。(下細井)

十五日

屋敷マツリ 十一月十五日、それぞれの家に祀つてある屋敷稲荷の宮ガエを行なう。赤飯、いわし、油揚げを供えた。供え物は子供達にさげに来た。どこの家の供え物をさげてもよいとされた。(堤)

二十日

えびす講 十一月二十日。(三俣)  
エビス様を出して、お菓子を買ってかざつた。ケンチンじるを作つた。(三俣)

十一月二十日に行つた。エビス様は大黒様との対のものを、お酉様などで買って来た。台所の茶だんすに東向きに祀つた。大盛のご飯と生のサンマを供えた。大概、若者がそれを下げた。(龍蔵寺)

十一月二十日にえびす様。正月二十日にもした。昆布巻き、けんちん汁、赤飯をつくる。けんちん汁に秋に収穫した野菜を入れる。

泣く子もだまるえびす様、べろべろの神様とも言う。ゴヘイを作つて、竹にはりつけ、神様にあげる。(下細井)

① ごちそうを食つた

朝 ごはん

昼 おはぎ

夕 五目、ケンチン汁

② 金をあげる

マスの中へ入れる

└─→ マスマス繁盛

③ 供物には、いわし、果物、サンマ等々。(日輪寺)

恵比須、大黒様を出して、お膳を供える。

正月二十日にお願いをし、十二月二十日には感謝をするのだという。

正月と同じくお膳を供えた。お札を供えると倍になるといわれた。

(鳥取)

二十四日

天神講 十一月二十四日は天神講で習字を書いた。子供達の最年長の家が宿になり、五目飯をたいて呼んだ。一人一合ずつ米を持ちよつた。(三俣)



旧十一月十四日

木福さま 旧十一月十四日は、五代の木福さまのおまつりだ。ふだんは土の中にうめてある石をほり出して、かざる。昔は前橋の町から芸者が人力車にのつてきたり、出店がたくさん出たりして、にぎやかだった。(五代)

旧十一月十四日 木福様は生き物の神様、また女性の神様であると言う。神社の境内に石宮がある。出店が二百軒ほど出て、当日はお札を売る。女性、特に芸者が多く参拝した。

また、この日は福守様のお祭りも一緒にする。福守様は男の神様で、ご神体は土中に埋めてある。(五代)



木福さま (五代)



男石 (五代)

その他

るす神 オイナリさま。十一月の神のいない間にオイナリさまの祭りをした。(三俣)

ネズミフサギ 家ごとにモチをつき、ねずみふさぎの行事を行った。十一月ごろだった。(川原)

十二月

十二月の行事 屋敷稻荷を暮に赤飯をたいてまつた。(十五日)

すす払いをやった。(二十日過ぎ)

餅つきは三十日にやった。正月料理は三十一日に作った。とうふ、こんにゃく、魚位を買った。

一日

山はじめ 十二月一日は山はじめて、木の葉かきが始まった。山が近いので歩きでいった。山は松が多いので堆肥になりにくく、燃料用にした。京ヶ島のワラと交換したりした。(川原)

二日

神送り 総社の明神様にお参りに行く。(勝沢)

油もち 十二月二日に作った。(川原)

十二月二日は、あぶらもちをついた。夫婦もちとも言つて二うす、紅白とした。嫁は実家にもちを持って帰った。(川原)

四日

お稻荷様 長谷川、岡庭の家では十二月四日に行ったが、他は十二月十五日。屋敷の乾いぬいの方向の隅にまつた。

お供物はトウフ、米、塩、イワシ(夜あげにいった)。七色菓子、赤飯、けんちん汁

三峰様にもお供えをした。

「お稻荷様が日向に出れば貧乏する。」「稻荷様が日向ぼっこする。」などと言った。(上細井)

十五日

稻荷祭り 十二月十五日、ルスンギョウという。赤飯にオカシラを

あげ、ワラ宮を作りかえた。(三俣)

新しい藁、竹でお宮をつくる。しめ、へいそくを飾り、いわし、赤飯、オサゴ、塩を供える。供物がなくなると良いと言われた。供物をしたら後ろを振り返ってはいけない、神様が食べるのを見ては失礼だから、と言われていた。(上細井)

屋敷稲荷を祭る日。竹とわらでお宮をつくる。へいそく、しめかざりをし、お膳にお神酒、赤飯、いわし二匹のせて供える。次日までに供物がなくなると運が良いと言われた。(そのために子供達が供物をとって廻った。)

十二月十五日にやった。赤飯の湯気に幣束をあてるものだった。

(小神明)

イナリマツリの日に早く寝ると白髪がふえるといった。(荻窪)  
ワラで仮宮を作る。たいがい寒い日だった。箕の中にイワシを入れてあげた。

あげると同時に子供が下げた。早く下げられたほうがいいという。あげたらうしろを見てはいけないといわれたので、おまいりしたらすぐ帰った。(三俣)

## 二十一日

あぶらもち 十二月二十日はあぶらもちをついた。紅白のもちをついて、神さまに供えその晩食った。なぜ、あぶらもちというかは知らない。(青柳)

恵比須講 十二月二十日は恵比須講でごちそうを作った。この日まではたぎをはいてはいけないといわれた。(三俣)

## 二十二日

冬至 冬至トウナスといって、かぼちゃとこんにやくを煮て食べた。ケンチン汁を作り、ユズ湯に入った。(片貝)

十二月二十二日。トウナス(カボチャ)とこんにやくを食べる。

(江木)

こんにやくに砂はらい(腹の中の砂が払える)、トウナスにちゅうぎにならない、を食べる。

トウナス、コンニャクを煮て食べる。

冬至湯に入る。

二十二日。何をしてもいいと言う。トウナスとコンニャクを食べた。

冬至とモチつき(二十八日)の間にしめかざりを作った。(三俣)

チュウキにならないようにかぼちゃを食べた。

トウナスやコンニャクを食べる。中風除けになる。(川原)

## 二十四日

天神講 二十四日、まぜめしを炊き、半紙に「天満大神宮」と書き、天神様(掛軸)に供える。子供達はヤドの家に集まり、会食した。

(上細井)

正月さま 伊勢の皇太神宮のオフダを神主(昔から塩原さんが神主であった)が、十二月二十五日か二十六日、氏子に配り歩く。そのオフダをうけた時『お正月さまがきた』と言った。

オフダはザシキカオクザシキにまつてある神棚にあげた。(田口)

## 正月の準備

ススハキ 地域によって日は異なるが、二十三日頃が多い。家財道具を全部出して、竹の笹ぼうぎですす払いを行う。また、養蚕をする家では、夏、たたみ上げておいたので、この日にたたみを入れる。

ススハキが終わるとススハキ祝いを行い、魚とかご馳走を食べる。

二十日ころにした。(三俣)

十日く十五日頃行つた。竹の棒に笹の葉をつけたもので家中をはく。

古いお札はもやす。

ススハライ 冬至からもちつきまでの間にやつた。(江木)

十二月の二十日前後に行つた。竹や篠でもつて天井のほこりを落と

した。(堤)

オオソウジ 十二月の末になると必ずオオソウジをした。

餅つき 三十日に行う。

門松 三十日に山に三蓋の赤松をとりに行き、カイドの入口、便所、

蔵、井戸、屋敷稻荷などに飾る。

三十日の日に三蓋の赤松をとつてきて、二本ずつ、神棚、門口、物

置、屋敷稻荷、墓などに飾る。

門の前と、入り口の前の庭に立てる。不幸があれば、立てない。

戦後、松を使わないようにとのふれが出て絵が代りに使われた。

(片貝)

正月棚 神棚の下にしめかざりを下げ、下のかざりに松の芯をさす。

上に幣束を五本さしこむ。棚にはおそなえをおく。(三俣)

ナカザシキに恵方に向けて棚をつくる。しめ縄をはり、お供え、み

かん、するめなどを供える。

六尺ほどの板を買つてきて、オモテザシキに恵方に向けて年棚をつ

くる。しめ縄をはり、へいそくをつけ、昆布、みかんなどをつるす。

神様を並べてお供えをあげる。

しめなわ作り 十二月二十八日か三十日に作つた。

ユズラといって、二本のワラをさげるものと、オカゴカクシ、オカ

オカクシといって、七本さげるようにつくるものがあつた。(片貝)

十二月三十日にしめかざりをつくり次の場所にかざる。門口、坪  
山、米を置く処、家畜のいる処、井戸、おいなりさま、道祖神、便所、  
風呂場、かまど、道具(てんが、うす、水くみおけ) (川原)

おしめをなつた。みかん、柿をつけて作つた。(上細井)

長しめ、小じめをワラで作り、神さまの所にあげた。歳徳神には、

一番大きいものをあげた。

暮の三十日に飾りをして、正月十四日の朝までかざつた。(江木)

棚かざり お正月のオタナを家の中央にあたる部屋につり下げた。

新年のエトに合わせたアキの方にオタナを向けた。オタナには、歳徳  
神、天照大神の札をのせ、おみき、ロウソク、オカサネ、そしてその  
家のカレイに合わせた食べ物を供えた。カレイがオカユであれば三元  
日に供えたものを次々と足していき四日の朝、改めてオカマやオジャ  
に混ぜて食べた。これをオタナサガシといった。(堤)

カドマツ 屋敷の入り口にカドマツをかざり、コマツは家の入り口

にかざつた。(田口)

カドジメ 風呂、かまど、神だな、庭、倉、川(川原)へあげた。

多い家は十五く六本あげた。(小神明)

正月飾り オタナをかざる。二十八日か三十日に、もちつきをする

のと一緒におたなを作つた。一夜飾りはするものではないといつて、  
三十一日にはしなかつた。

座敷の中心の天井に、アキの方に向けて、回転するたなを据え、か  
ざつた。天照皇太神宮、歳徳神、片貝神社のお札をあげた。すべて片  
貝神社から出してもらう。お札と幣束は、十二月二十五日までに注文  
をとりまとめた。

氏子総代が集計し、二十六日く二十八日にお札を配つた。ヤタラベ  
イといつて、八本の幣束を受けた。大正頃で、天照皇太神宮と歳徳神



正月飾り (東片貝)



歳神棚 (東片貝)



正月飾り (東片貝)

十二月三十日にもちつきをした。おそなえは十五組つくって次の場にあげる。

- 神棚 七組
- 仏様 二組
- お勝手 一組
- 便所 一組
- 屋敷神さま 二組
- 道祖神 一組
- 井戸 一組 (青柳)

おかざりは十二月三十日にかざった。もちつきは二十八日か三十日で、かがみモチ、アソビ、雑煮用とした。三十一日は、ミソカ

そば、たきたての飯、ケンチン汁を用意した。(川端)

は、お札一枚で十銭くらいだった。幣束は五銭だった。(片貝)  
正月用のおかざりは十二月二十五日に作った。おしんべを作り、松を用意した。

松は赤松(女松)が良く、黒松(男松)は使わない。松かざりは、神棚・玄関・入口・屋敷神さまへそれぞれ二本ずつかざった。(青柳)  
お正月さま 恵方からお正月さまが来るので、正月棚を恵方に向けてかざった。正月棚は回るようになってる。正月棚には、海のもの、山のものを供えた。(柿・栗・スルメ・昆布・いわし・みかん等)

もちつき 二十八日。(三俣)

三十日に行く。量は、家によって一うす、三うす、など奇数ついた。

十二月二十九日に正月用のもちをついた。群馬郡と一緒である。  
三十日に餅をつく家が多い。二十九、三十一日にはつかない。特に、二十九日はクンチモチといって嫌われる。(鳥取)

正月さまのオフダ 昔はオフダを十二月三十日にあちこちにあげた。

屋敷イナリさま・カマド・イド・ベンジョ・ウマゴヤ・ツボヤマ(庭)カワダナ(蚕具を洗ったり、顔を洗ったりしたシンボリ川のカワダナにあげた。)(田口)  
大そうじにもちつき。五代のほかうら、松を売りにきた。この日お

かざりもした。一夜かざりはできないという。天照皇大神宮のお札を神だなにあげる。(三俣)

もちつき 三十日。早い家で二十八日。お飾りをした。一夜飾りはしてはいけないといわれた。(江木)

大晦日 年越しそばを食べる。家のまわりを掃く。この晩、囲炉裏の火は絶やしてはいけない。

三十一日の晩に仏だんはしめて、おそなえはしない。そばは作らずごはん。別にオニギリを十二個(ウルウ年は十三個)作りドンブリにして仏だんにそなえる。(三俣)

十二月三十一日の晩はソバを食い、三ガ日の朝はソバを食った。昼と夜は特に決まっていなかった。お宮参りは八幡さまにでかけた。

(田口)

そばを食べた。元日には残っていてもたえず、新しいそばをつくった。(江木)

夕タミをスク 晩秋蚕が十月四日か五日にあがるので十二月になると夕タミをスク。

年神様 床の間にモチをおく。神さまは神社からお札をうける。モチは一臼分作り、大一つと小七つ作り、のこりで大きなみつがさねを作る。小七つはナナカサネ。七つを年神様、神棚、お稻荷、三本荒神、御不浄、倉、井戸においた。(三俣)

初もうで 十二月三十一日の深夜から一月一日にかけ、二年がかりでお参りすると良いと言われ、貫前神社、三夜沢赤城神社等へ出かけた。(川端)

正月飾り 十二月三十日に正月飾りを作つて飾る。正月一日におそなえをあげる。(龍蔵寺)

書き初め 親せきに持つていって配ると、お金をくれて、お年玉に

なつた。暮の二十五日には書いておいた。

お歳暮を配る時についていって、書き初めを配つた。そこでもらう金が楽しみだった。

二銭、十銭、五十銭といろいろだった。(片貝)

年末の買物 年末には、魚屋やその他の店が寺の境内に出張して、買物をした。(日輪寺)

## 第十二章 口頭伝承

### 一、昔話

したきりすずめ　むかしむかし　おじいさんとおばあさんとあったとき

おじいさんが　すずめをとつてきて大事にかつといたら「春のいい日だから今日は　はり事すべえ」って

のりをいっばいにといたんだって。

ところが、おじいさんが　のらへ行っている　るすに　おばあさんが　ちよつとるすにしたら　みんなそののりをなめちやつたんで　おばあさんな　やけおこして　舌を切つて　にがしてやつちやつた。お

そこへ　おじいさんが　おひるに帰つてきて

「ばあさん　すずめはどうした」ときいたら

「こういうわけで　のりみんな　にといたのりをたべちやつたから

舌切つて　にがしてやつた」

そうしたら　おじいさんは　はりあいがわるくつて　つぐ日

「舌切りすずめ　お宿はどこだ

舌切りすずめ　お宿はどこだ」

と訪ねてつたら　やぶの奥に

「おじいさん　こちら　おじいさんこちら」

つたんで　おじいさんな　すずめの家に通してもらつて毎日　すず

めおどりやなんか　めしてもらつて　楽しく遊んでいたんだって

そしたら　おじいさんは　もうあきちやつて

「はあ　さんざお客したから　帰るべえ」って

そしたら　すずめが

「おじいさん　みやげは　何がいい」って

「何でも　くれてくれるものならいい」って

そしたら

「おもてえんがいいかい　かりいんがいいかい」

おじいさんは　よくがないから

「おらあ　年とつてるから　かりいんがいい」って

かりいつづらを持つて　うちへ帰つたら　おばあさんが待ちきてたんで　あけてみたら　金銀小判やいろいろなものが　はいつてたんで

おじいさんは　よろこんじゃつて

そしたら　ばあさんも　けなるくなつて

「舌切りすずめ　お宿はどこだ」

って　訪ねてつた

そしたら　おばあさん

「おばあさん　こちら」

って　また　すずめが　ゆつた

すずめの家に通してもらつて　おどりがなんか　みしてもらつて

「はあ　あきたから　けえらい」



って言ったら

「かりんがいいかい おもてえんが いいかい」

よくふけえから ばあさんな

「どんないいおもてえんだか おもてえんがいい」

って どんないいものが はいってんだかな思つて

うちに いぐに こらえきれねえで 途中であけてみたら 一つ目や

へびやら いろいろなものか いっぱい でたんで ばあさんは

うったまげて たおれちやつた

ほうで おじいさんが むかえに出たら たおれちやあいるんで

そいで 大きわざやつて 家にいれたつて(鳥取)

かねがへびになつた話 むかし おじいさんが かねをうんとため

て持つてて よそへ出るときには どこへしまつて 出るべえつて

思案にくれて かねにいられておいたんだつて

そして

「かね 人が見たらへびになれつて おれが帰つてきて見たらかねに

なれ」つて

おじいさんな 毎日毎日 そういつちや出るんでとなりの若い衆が

「ここんちのおじいさんな 通るたんびに 何か言つていくけど 今

日は 聞いてやるべえ」つて

草刈りにいぐに 今日日は 聞いてやるべえと思つて そこんちな

通つた時に

おじいさんが

「おめえ 畑に行つてくるから 人が見たらへびになれ おれが見た

ら かねになれ」つて

ようく いいきかせて いった

そいで おじいさんが のらへ行つたら その若い衆が そうつと

そのうちに入つて かねのふたを 取つてみると かねが入つてると

で へびを取つてきて へびをかめの中に入れて ぜにを自分で取つ

て かくねているてえと そこを おじいさんが 帰つてくるんで

おじいさんが また かねがめの所へ行つてみると

「おれが帰つてきたんだで かねになれ かねになれ」つて

いくら いつししょうけんめい言つたんだけれどいつくら かねにな

れつて言つても へびだからかねになんねんで おじいさんは なき

だしちやつたら

そこへ となりの 若い衆が 見てたんが出てきて

「おじいさん なんで なくんだい」つて

こういうわけで よそへ行く時は へびになれ おれが 見たら

かねになれつていつたんに なかなか なつてくんねえんで かなし

くて ないてんだ」つて 言つたんだ。

「じいさん おれ 魔法使つてくれるから おれが目をあいていいつ

ていうまで 目をつぶつてな」つて

そいで 正直なおじいさんな 目をつぶつてしていると 何かとなえ事

を言つて

「はあ おじいさん こんだは かねになつたから見てみな」つて

おじいさんが かねを見たら かねになつていゝんで大よろこびで

あにいは 魔法を使うのが 上手だなあつて よろこんで その若い

衆と おじいさんは なかよしになつたつて(鳥取)

ばけもの話 きこりが 山へ入つて 仕事をすんでしよう。そんな

時に ちよんまげに かみさまのこよりで もとどりを しばつてい

くと まものに つかれないつて。

きこりが 山にいつて とてもあつ日だもんで つい ひるねし

たんだつて ふたりして。

そしたら でっかいもが出てね こよりで ちよんまげを しばつてがねえ方の男に やたら くもが来て 糸をかけるんだつて そばにいて ちよんまげ こよりを しばつていったんで その人は、ねつかれねえんだつて ひるねしたけど 何か ちよかちよかして ひかつてね

そいで となりの人に くもが やたらしてるんで「おきてみろや」つて

そして その人が 火ばし こさえて くもの糸をかけた でっかい ねっこにも つてつちや しばつて くつつけたんだつて

ひときりたつたら めりめりつて音がして、でっかい ねっこが沼の中に ひきずりこまれたんだつて それで こよりで しばらなかつた男は 助かつたんだつて (鳥取)

うば皮 昔 おじいさんとこに 三人娘があつてね  
いっとう末の娘は かえるを 助けといたんだいね。

おじいさんが そば刈りにいったんだつて 夏そばで 夏のあついで

「こんなあついに 誰かきて 刈つてくれればいいなあ おらちには 三人娘がいるから 一人くれるがなあ」

と ひとりごとを言ったんだつて  
そしたら 山のおっちゃんが ちよこちよこときてそばを刈つてくれたんだつて

それで 昼になるんで うちに行つたら

「おじいさん あつかつたんべ ゆでも茶でも わかすべえか」つて  
「ゆも茶もいらねえが 山のおっちゃんがとこへ 行つてくれねえか」つて

ところが 娘は

「おじいさん 何ゆうんだい」  
つて 言ったんだつて

そして 次の娘が  
「おじいさん ゆでも茶でも わかすべえか」つて

「ゆも茶もいらねえが 山のおっちゃんのとこへ 行ってくれ」つて

やっぱし  
「おじいさん 何ゆうんだい おらあ 山のおっちゃんにとこに行くのは やだよ」つて

そして こんだは いっとう末の娘に

「おめえは ゆも茶もいらねえが 山のおっちゃんところに 行ってくれねえか」

「それじゃ おじいさんが いうことなら どんな言う事も聞くよ 山のおっちゃんのとこにでも行くべえ」つて それで その娘は 嫁にいぐことになつて

「おじいさん 山のおっちゃんところに 行ぐんだら きれいな服は いらねえ おしろいの代りに すみでもぬつていぐべえ」

ほうで 顔に すみをぬつて 山のおっちゃんが 相手なんだから すみぬつて

それで 山のおっちゃんが もらいにきたんで ついていったんだつて

それで そのうちに 春がきて おせつく もつていくんだが

「おじいさんのところにせつく もつていくんだが」  
と 山のおっちゃんがいうと

「おらちのじいさんな もちは つきながらいかねえと やがるから あの つきながら いくべえ」つて

ほうで つきうすを しよわせえ それで もちをつきながら 奥山から 来るんだって

そうしたところが そのころで でっかい川があつて 花が きれいにさいているんだって

「おらちのおじいさんな 花が好きだから とつてつて くれてえな」

と娘が言つたら

「それじゃあ 花なんかとるのは わけねえ」

といつて うすをおろして のぼるべえとすると

「そのうす じべたの上におくと つちくせえつておじいさんがいってやがるよ」

「ほいじゃ しょつて木にのぼるべえ」つて

そいで しょつて 木にのぼつたんだつて。

そしたら あの枝がいいか この枝がいいか 川へのり出している方のでっかい川が下にあつて でっかい川の中に うすしょつているから おもみがついて ほちゃんとおつかいてね 山のおつちちゃん 流れて 死んじゃうんだつて

はあ こりゃ こまつたな うちにな いけねえし 日はくれるし娘は思案にくれてるんだつて

そうすると その きたねえ でっかい かえるがくるんだつて

「娘さん いまっから いくと このむごうの山にやおいはぎが出るんだつて。 おいはぎが出るけど おら こうこう こういうわけでおめえに助けられたことがあるから この うばっ皮を着て あの山通るほうがいい」つて

かえるのうば皮という でっかいのをくれてね

そして その娘にさせて それで娘は もらつて着て そして 山道を行くと おいはぎが 出たんだつて

おいはぎが出て

「あんな きたねえばあ 何も もっちゃいねえや こんなの かまうこたあねえ」つて

おいはぎを 通りぬけちゃつて

まあ よかつたと思つて だんだん だんだん行くと 一軒家が あつて ありが 見えるつつうんだいね 遠くの方から

そこで

「こんばんは こんばんは」といふと

家の主人が出てきたので

「こんばん 一夜 こんなにおそくなつて 家に帰れねえから ぜひとめてくれ」つていふので

「どんなとこでもいいから とめてくれ」つうんで

「はあ かわいそうに とめてやるべえ」つうんでこの家に とめてやるんだつて

それで 次々朝になつて 目がさめると 主人に「ぜひ にわはきばあさんでも 何でもいから ここんちで 使つてもらうわけには いくめえか」つて

そしたら「おらちも いねえことだから 使つてやつても」いふつていふので そこんちで 使つてくれることになつてね

そこで にわはきばあさんに そこんちに はいつたんだつて

そしたら そこんちは お針つ子が いくたりも きてるんだつて

そして 夜になると その娘は きれいなつちやお化粧もしてね

あんどん部屋に 勉強してるんだつて

それで うちの若い衆が見てね

「なるほど きれいな娘がいる でも 言うことはできねえな」  
と思つてみて 見のがしておくんだけ

そうすると そのうちに 親が

「よめさんを もらわなくちゃならねえが うちはお針つ子が いく  
たりもきてるから どの娘をもらつたら よかんべ、こういうのが  
いいんじゃないか」つて 若い衆に言うつて

「池があつて 池の向こうに きれいな梅の花があつて 糸の橋をこ  
さえといつて 橋こえて 糸の橋わたつて その梅の枝を うぐいすが  
とまつてるつてを にがさねえで とつてきたものを 嫁にすること  
にすべえ」つて

そうすると お節句の日がきて みんな娘が よべれたんでくるん  
で あの娘がいいか この娘がいいかつうんで わたらしめてみるべ  
えつて

この池の糸の橋をわたつて あの梅の枝を うぐいすを にがさね  
えで とつてきたものを うちの嫁にすることにすつて

どの娘も みんな 気が立つてきて 糸の橋わたつていぐと 糸の  
橋がきれて ばたんとおちて どの娘も

しかたねえな それじゃ うちの にわはきばあさんでも よんで  
やらせたら どうだつていうんでそこで にわはきばあさんな よん  
できたところが

「わたしみてえな こんなにわはきばあさんが お嬢さんがたが わ  
たつたあと どうして わたれべえ」

それでも 何でもいいから わたつてみなつていうんで しかたな  
しに

「そんじや 少しまつてくれ」つて  
それで 着物きかえて お化粧してきたら おさいほうにくる娘より

美しい いい娘になつてね

ほうでわたつたら 糸の橋わたつて うぐいすのとまつてる枝を  
おつかいて 主人のところへもつて

それこそ うちの花嫁だちゆうんで いい嫁さんになつて 幸せに  
くらしつて

だから 親孝行は すべきもんだねえ(鳥取)  
かいこの話 むかし たまやの姫といつて うばに育てられて  
おつかさん死んじやつて

大事にうばが育てたら 後妻のおつかさんが たまやの姫が 馬を  
その家がかつてて 馬をかわいがつて うばと二人してかわいがつて  
ところが おつかさんは それが にくらしくて たまやの姫を  
亡きものにすべえつんで

付けのうばを つかにだして たまやの姫を 下郎につれ出させ  
て うばすて山へつれてぐべえと思つて

うばをしいにやつて その留守 たまやの姫を 馬にのせて 下郎  
にひかせて うばすて山へつれてつて

そこへ うばが帰つてきて

「お嬢さんを どうしたんですか」つてきくと

「たまやの姫どうしたんだ」つてきくと

たまやの姫 どつかへ あそびに行つたつて うそを言つて  
それで うそがしたんで うばすて山の方へ行くと黒いけむが  
立つてると うばが

「たまやの姫 たまやの姫」

よんでると そのけむが まつくろにかたまつて まつくろにあがつ  
たんで そのたまやの姫は けむになつちやつた

そのけむをたよりに行くと 野原の上に 桑があつて その桑に

けむがおりると そこへ行つてみると こまかい 小せえ虫が たくさんいるんだいね

それがたまやの姫だつて、大事に育てると つれてきて その葉を多く食べるから その葉っぱとつてきてくれといたら

たまやの姫が こんだ皮を脱いだつて またうばが なくんだつて そうすると 初眠二眠三眠四眠と かわを脱いでそのうちに 白い巢の中へはいっちゃんたつて うばがないて それをくりかえし くりかえし

たまやの姫を紙の上にあげると 卵をうみつける

それを くりかえし くりかえし したんが かいこのもとで これが 立派になつたんだつて (鳥取)

そして 祭りになつたんだつて (鳥取)

芋畑へ行こう 昔、嫁にきたが少しも相手にしてもらえず、わざと「さぞかしでかいモノをもっているんだらう」といつてそそのかした。芋畑へ行つて、やることになつたら、芋の葉をつきやぶつて芋みたいなでかいのがでてきて、それでやつた。それから亭主は、すぐに「芋畑へ行こう」というようになった。(堤)

赤堀道元の娘 赤堀の「しょうでんじ」に娘がいた。脇の下に苔みたいなものがあつた。大きくなつて、十六歳になつたとき、「お母さん、今日、赤城山に行きたいので連れていつて下さい。」といつた。母は「そうか。」といい、連れていつた。その日は五月五日のことであつた。大沼のそばに行つたら、「お母さん、水が飲みたいよ。」といつた。母は「じゃあ、ここで待つているから飲んできなさいよ。」といつた。母は待つていた。そしたら、大蛇になつて、「もう家に帰らない。」と母に告げた。そして、母は家に帰つてきた。一年、二年たち、「お母さん、客にきました。」と、娘は島田まげになり、奇麗になつて帰つてきた。その晩、

家に泊まつた。そして、夕飯を食べ、寝た。母が部屋に入つてみると、蛇になつて寝ていたと。だから、「十六歳になつたら、赤城山に行つてはだめだよ。」と聞いた。赤堀では、五月五日に赤飯をもつて池のそばにいくと、いつのまにか赤飯がなくなつたという。(亀泉)

赤堀道元の娘が十六歳で、赤城登山をして小沼に沈んだ。お盆のとき、赤堀道元の家では、赤飯を炊いて舟のせて沼の中心まで行くとき、その赤飯が沈んで色物だけが浮いて出るつて。(嶺)

水不足をすくうために身を沈めたという。(江木)

赤堀道元の娘が十六歳になつた時、赤城山に行きたいと言つた。そして、娘が水が飲みたいと思ひ湖に行くと思ひ込まれてしまつた。それが、大蛇となつて現れた。命日、親御さんがおこわをふかして、盆の上のせて小沼に供えると盆が沈んだ。しばらくたつとそれが空になつて浮かんできた。この地区の女性達は十六歳の時、赤城山に行つてはいけなと言われた。(下沖)

小沼から流れる川が赤堀道元の屋敷のすぐ近くを流れている。それで、川から流れてきた蛇が娘に乗り移つた。それで、大人になり、沼に帰りたいので娘が沼に行きたいと言ひ出した。そして、沼に行つたという。(下沖)

赤堀の大尽の箱入り娘が、どうしても赤城にお参りしたいつていうんで お籠に乗せて小沼の近くに行つたら、籠担ぎがここで休もうつていうんで、休んでいる間に籠の中から蛇になつて小沼に入つたんだつて。(嶺)

へつぷり嫁御 ある家でお嫁さんをもつたんだけど、三日たつと顔色が悪くなつて元気がなくなつてきたんですよ。お母さんが「なんで、お前はそんなに青い顔しているんだ。」ていつたら、「へをしりたいんだけど、できなくて我慢して、元気がなくなつてしまつた。」といつ

たんですね。そしたら、「そんなこと心配することはない。一つ元氣よくへをしてみろ。」といったんですよ。そしたら、嫁さんが尻をまくつてプウとしたんだ。すると、お姑さんが天井へ吹き飛ばされちゃったんですよ。そしたら、これほどひどい嫁は家におけないからと、実家に送って行くことになったんですよ。途中で、栗をもちでいる人に会ったんですよ。「そんなところで何やってるんだ。」と嫁さんがいったところ、「栗をもちでるんだ。」といったんだ。そしたら、「栗を手でもぐなんて暇のかかることはいらないじゃないか。そんなものへをすれば落ちてしまう。」と嫁がいったんだ。「本当か。」っていったら「本当だ。」っていうんで、「やつて見てくれ。」というんで嫁さんがへをしたんですね。そしたら、栗が見事に落ちたんですね。それから、嫁さんのお母さんは考えて、「これほど役に立つなら、へをしても家の嫁にしておこう。」ということでもまろくおさまつて、めでたし、めでたしってことなんです。(嶺)

ある所に「へ」がうんと出る嫁がいた。ある時、盗人が入ってきて、様子を窺ったところ「うてうて」という声が聞こえてきた。また、「うてうて」といったので、慌てて逃げたという。しかし、それは「へ」であつた。(下沖)

ぼたもちの話 旅人が来て、ぜひ今晚泊めてくれっていうんですね。そうすると、親切な家だから泊めるんですね。すると、「お客さんだから なにせ半殺しにすべえ。」とかいったんだ。客はそれじゃあたまんないから、逃げ出したんだって。しかし、半殺しとは「ぼたもち」のことだったんだ。(鳥取)

おば捨て山 母が六十歳になると息子が背負つて捨てて行く。帰り道が分からなくなるから、母が枝を折つたそう。帰るとき、それを目当てに帰ればよいといったそう。(下沖)

男も女も六十二歳になると、息子が山へ捨ててに行かなくてはならぬいんで、息子とその子供と二人でおじいさんをもつこに乗せて急な山を登つていった。そして、おじいさんを捨ててもつこも捨ててくるかと思つたら、子供がもつこを持って家に帰つてきたんで、「お前、そんなものいらぬから捨ててこい。」といったら、「いや、おとつあんだつて六十二歳になるときがあるんだから、その時までよく閉まっておく。」といったんだつて。それを聞いた息子が急に悲しくなつて、「山へ捨てたおじいさんをなんとかしなくちゃなんねえ。」ていうんで、夜の明けないうちに一日ごとにおむすびを持って山に運んだんで、どね。そうしたならば、まだおじいさんが生きてる内に、殿様が「灰で繩をなつて持つてきたならば、ご年貢米を免除する。」といったんだ。だれも、灰で繩をなつて持つてきた者はいなかつたが、山へおむすびを持つていった息子だけが、殿様の前へちゃんと灰の繩を出したそうです。殿様が感心してその者呼んで、「お前、どうやって繩をなつたんだ。」といったら、息子は「実は、いっちゃなんだけど、山へ捨てたおじいさんに聞いて灰の繩をこしらえて来たんだ。」と。そしたら、「何箇月も前におじいさんを捨てたのもう生きてゐるはずがない。」というんで、「実は申し訳ないけど、親を殺すわけにはいかないから、毎日おむすびを運んでいたんだ。」と、そして、おじいさんに聞いたら、「灰で繩をなつたつて灰でなつてできるもんじゃないから、繩をくずれないように火で燃やして灰にすれば、灰の繩ができる。」つていうんだ。だから、年寄りというのは、大事なことを知つてゐるんだということになつて、年寄りを粗末にしてはいけぬということになり、山へ捨てさせることを止めさせたということだ。(嶺)

## 二、伝 説

寛永の絵馬の伝説 絵馬の中の馬が夜になると絵をぬけ出し、山門から出て、田畑を荒らす。そこで困り果てて、馬に手綱と草を書き加えたところ、出歩かなくなったとの事。(日輪寺)



如来像 (小神明町)

萩原重左衛門 御用金を前橋さまへ納めたほどの金持ちだった。彫刻が上手で、霊園の中の阿弥陀像をほったという。像もほって、今に残っている。(小神明)

火縄鉄砲と火事 重左衛門の息子が、屋根の上に鳩がとまったんで、それで火縄鉄砲を持って

重左衛門つう人は、撃つなといったんだけど、子どもがあんまり利口でなかったんかもしれないけれど

撃つたら、石にあたって火が出て、ここんちが火事になり、うちのほう全部もえて、鳥取まで行って二軒、五代までいって一軒もえた。神明の大火事という。(小神明)

鎌倉坂の由来 北条時頼が、諸国行脚の途中で、端気の善勝寺へたちよった。酒屋があつたんだそうです。当時の住職はカワザンといった。渡しがあつて、そこへ行く途中、風景が、鎌倉にいてるところから、鎌倉坂の名がついたという。(端気)

五代の地名の由来 ある将棋の好きな若者がいて、赤城山に行った

んだいね。その時、そこに仙人と将棋をさしている人がいた。その人も将棋が大好きなんで、一緒になって将棋を夢中でやっただ。年の過ぎるのも忘れ、将棋をやったんだけど気がついて家に帰つたら、家では五代過ぎていたんだってね。それで、五代というんだってね。(五代)

鳥取の地名の由来 昔、天皇に魔をなす鳥がいるので、四国方面からこつちへ追っ掛けてきたんだとき。それで、この上州の地のこの場所、その鳥を打ち取ったということで、鳥取村と名付けられたということだとき。(鳥取)

王渡し 昔、赤城の王様が利根川のむこう岸にいたきれいな姫のところへ夜々通つたので、王渡しというようになったという。(上小出)

新田塚 新田にゆかりのあるものかという。(萩窪) 寄居 赤城神社のあるところは寄居といって、堀に囲まれた古い屋敷がある。(関根)

死体山 六所神社の南の墓場の所で、元は山だった。斉藤家の持ち山だった。首塚があり、供養のため石祠をたててとむらったという。

上杉以後の戦いで死者が出たものを、ほうむった所という。(江木)

大日さま 大胡の牧野の娘をあずかった。牧野が長岡に国替の時、できの悪い娘をあずかったという。上泉の白山の五町分をやしない料としてもらった。今の中学の西の小字である。一本松があつて、神さまがまつつてあつた。普通のたたみの座敷では住めず、格子の入った座敷だった。毎日風呂に入れたが、二人がかりだったという。男ぐせがわるかったという。あずかり賃だったので、明治維新で村におさめた。(江木)

イワシツカ 十二月十四日の晩、十五日のイナリ祭り用にイワシを売りに魚屋がやってきた。嶺で田所に断られ、小坂子で織間に断られ

荻窪まで来たところ、追いはぎに出会って、身ぐるみはがされて殺されてしまった。無縁でおおむって、天びん棒をさした。それから芽が出て杉の木になった。切って根を掘ったあとが、最近まであった。そこは共有地で最近まであった。田所、織間は十四日にイナリ祭をやっている。(荻窪)

**鰻 仏** 荻窪の北、清掃工場の東の方で、魚屋が杖をついて、亡くなった所という。後産をすてにいった所。(荻窪)

**河童** 上泉の竹の花ブールにはかっぱがいるといわれた。川と水がつながっていた。上電の経営で、上電の客はただだった。(片貝)

**カネズカ** 元はカノエズカといった。庚申様のつかがあり、その辺から供養塔がたくさん出てきた。(三俣)

**オツキリ川**(明治のころにあった) 昔、日光ジョード院の坊さんが宝物をもつてにげてきた。寺から寺へと逃げてきて、庫裡の隣におしこめておいたが、ばれてしまい切られてしまった。坊さんは金の仏を持っただけのまま首を切られた。首がとんだ。「切り通し」の地名になっている。そこには六尺坊主が出る。今九十六の人より少し大きい人が子供の時に見た。寺に桐の紋の長持ちがのこっている。区長は大変な目に会った。(堀之下)

**一本松** 前橋・芳賀線通りに一本松があった。昔、大みそかに一人だけを切つても許されている家があった。大みそかに通りがかつた人が切られた。切つた人は権力があり、名主に片付けておけばよいといったという。(下沖)

**大宝寺** 昔、下沖に大宝寺という寺があったという。地名にも大宝寺というのがあり、その寺の名を採っている。桃の木川に架かっている大宝橋はその寺の名を採つたという。(下沖)

大宝寺は洪水かなにかで流されたという。再建もできず、それぞれ

本家が流された墓石を拾って自分の地所に墓地を造つたという。だから、この地区は墓地が無数にある。(下沖)

**庚申塚** 須川宅前に庚申塚という塚があるが、これは昔、弘法大師が病気で休んだ所という。だから、今でも弘法大師を祭っている。(下沖)

**赤城と日光の話** 赤城様と日光の神様が戦場ヶ原で戦って、赤城様が負けて赤城の沼が真っ赤になった。だから、アカギ様と言うようになった。(下沖)

赤城様は大蛇である。ムカデという話は聞いていない。(下沖)  
赤城が石を投げた。男体山は赤城に向かってバラを投げた。それで、赤城にはバラが多い。男体山には石が多い。(下沖)

日光の男体山と赤城山がケンカをして、男体山はバラを投げたんだと。赤城山にバラが多いのは。(嶺)

**赤城と榛名の争い** 赤城と榛名が喧嘩をして、榛名の方はバラを投げて、赤城は石を投げた。だから、赤城山にバラが多いんだって。(嶺)

**池** 亀泉の村に池があった。その池は「地藏尊」という池があった。なにをしたってというわけでもないが、その池がいつの間にか消えてしまった。その池は入ると出られないといわれていた。(亀泉)

**後藤弁造** 石づみの名人で、田の石積みやムロ作りをした。渋川の金井の生れ。(川原)

**後藤家の話** 先祖は、北群馬郡の子持村小白井の出身という。元、村の端に住んでいたもので、真中に住みたいと移ってきた。お供が二人いて、勝沢においできて、ここに土着したという。(小神明)

**女堀** 明和幼稚園の裏の山からつづいて下に来ていて、端気の滋野さんの裏にも女堀が続いている。裏山が女堀で、小神明から続いている。

女堀 明和幼稚園の裏の山からつづいて下に来ていて、端気の滋野さんの裏にも女堀が続いている。裏山が女堀で、小神明から続いている。



る。(小神明)

神明岩のあと 萩原喜代治宅であるという。古い家が残っている。

山田郡萩原村から馬に乗ってきて、土着したという。乗り鞍と位牌が残っている。前に堀、東が川で背にもまわっている。(小神明)

湯之氣曲輪 角田武士さん宅の裏の川で、お湯がわいていたので、名前がついた。白く湯の花がついていたという。勝沢の人が馬の死んだのを入れてから、出なくなった。(小神明)

お茶屋 神明宮の裏にお茶屋があった。神明の人は昔バクチが好きで、女もいたらしい。飲んだり食ったりして、金を使つてしまい、金を借りたので、土地をとられてしまった。(小神明)

### 三、世間話・怪異

おとうかの嫁入り 夜、提燈の灯がたくさん見えた。区長やると一反ずつ減る。(下細井)

オトウカ憑き 近所に、なかちゃんという自分より三歳年上(三十才位)の男性がいた。三、四月行方不明になったことがあった。群馬町の親戚や、渋川などに行つて探したがいなかった。こうさん(なかちゃんの父)が、三峰が山犬の神様だということで行つてお詣りをした。三日目に帰つて来たが、足が傷だらけだった。げんちゃんちのヤブの中を歩いていたので。それから、夜になると外に出たがるので、寺(龍蔵寺か?)のじいさんが泊りに来た。細びき(細いひも)をなかちゃんの足とじいさんの手に結んで寝た。なかちゃんが夜、外へ出ようとすると、じいさんの手が細びきで引かれるので外に出られなくなった。なかちゃんの発作が起ると、おそのさん(なかちゃんの母)が助けを求めに来た。きつね憑きは腋に毛が生えているはず

だというので「おい、今日は正体を見せる。」とどなったところ、座敷で仰向けに寝て腕をちぢませて、体を硬くしてあえいだ。油と赤飯を供えれば、きつねが逃げるといわれたので、家のものが供えたが逃げなかった。きつねが離れたら死んでしまった。三十才中ごろだった。なかちゃんという人は、派手で遊び好きな人だった。ある時、暗くなつてから、なかちゃんと二人で娘を嶺まで送つて行つたことがあった。帰り路は下りで、石がゴロゴロしていて大変歩きにくかったが、なかちゃんは鳥打帽に懐中電灯をくくりつけて、白い背広にマントといういでたちだった。おじょうとくらという娘がその家にはいたが、おじょうは家で死に、くらも自殺した。(龍蔵寺)

オトウカの明り 嫁が時沢の出なので、時沢の嫁の実家へ行き夜までしゃべつていた。小雨の降る晩だった。時沢から龍蔵寺に帰る時、大変暗く、路を踏みはずして田畑に足を踏み入れてしまふほどだった。時沢の松並木のところは特に暗かった。松並木にさしかかった時、青く明るい玉が巽(南東)の方向から乾(北西)の方へ動いてゆくのが見えた。県道のジャリが見えるほど明るいので、この間は足を踏みはずすことなく道を歩くことができた。明るい玉はお墓の方へ行くのが見えた。その後、時沢の義父さんの所で話をしたところ、ムジナかオトウカがそういうことをすることがあると言われた。ヒトダマなら尾をひくのだが、青く明るい玉だった。(龍蔵寺)

オトウカの嫁入り 畦に小さい赤むらさきの灯が十ぐらい浮んで続いていた。(龍蔵寺)

狐の嫁入り 突然、雨がパラパラと降つてきてすぐ止んだ場合、狐の嫁入りという。(嶺)

オトウカ火 利根川西岸の崖つぶちに、十ぐらいの火の玉が見えた。それが、利根川の水面を渡つて来た。(川原)

オトウカ山 西原にあった雑木林。くずかきをしていてキツネを見たことがある。また、化かされた話として、「おふくろの呼ぶ声が聞えるので、山に入って行くと、違う方向から聞えるのでその方向に行っているうちに迷ってしまった。電線を見つけたので、それをたどって家に帰りついた。」とある。(川原)

江木にあった。塚だった。(堤)

白川橋を東に渡り八幡山南橋聖靈廟の東の付近をオトウカ山といった。オトウカ山の付近は皆さけて通った。(龍蔵寺)

狐にだまされた話

下細井から上細井に行く田道に明かりが見えた。夢と思いつつそこに行ってみると、ふと道が分からなくなり、行けども行けども方向音痴になってしまった。たまたま、電気の明かりが見え、我に返ったという。武井氏の母の話である。(下沖)

おとうかにだまされた話

私が独身のときだから、今から五十年くらい前かねえ。私は、おとうかにだまされているところを見たんです。夕方、私が山の中の田んぼにいたら、田んぼの道を小学生がどんどん歩いていっています。見たことがない子が行くなあて思ったらね、そうだねえ、約10mかそれ以上離れて後ろから狐が続いていったのを見たね。はじめは犬かと思っただけですが、追っかけてみると逃げちゃったけどね。(嶺)

お化け

矢端 貞(72才)さんの妹は、二十才のとき肺炎で亡くなった。その人が死んだ後、お寺の門にたまたま住職がいると、

「遠い国に行かなければならないので、あいさつに参りました」

とその妹さんが訪れたという。但し、住職は、妹さんが、その女の人と同一であるという事は、自分がそのお宅(矢端さん)に呼ばれて初めて知ったという。(荒牧)

怪異 アズキトギババアが出る。

「アズキとぎましょか、人とって食いましょか、ごしごし」といって、アズキをとぐ音がした。

河童が出た。

狐にばかされた。

狐火(オトウカッピ)がついたのを見た。ヒトダマが飛ぶ。(荻窪)

小豆とぎばあ いつまでも遊んでいると、小豆とぎおばあさんに捕まってしまう。だから、夕方早く家に帰るようにいわれた。(下沖)

早く帰らないと「小豆とぎごうか、人とって飲もうか。」といったんだ。

だから、早く帰れと、いわれた。(亀泉)

子供が寝付かないでぐずっているとき、裏に小さい川があつて、ちよつと落差があつて水がザアザアと落ちるわけ、そこへ小豆とぎばあがでてきて、小豆といでるんだって。だから、早く寝ろなんていわれたもんだ。(五代)

お地藏さん 亀泉のお地藏さんは、小僧になって水番をしていた。

上泉の人達が「やろう、今夜もまたいたな。」といって、あさ歟で耳を切ってしまった。それから、昔の人は、上泉の人と縁組をさせないといったそうだ。(亀泉)

小次郎葉師の話

私の先祖ですけど、若いうちに佐賀村のお女郎買いにしばしば通ったんで、親にしかられたんですね。それで、自殺してしまつたんです。若くて十八歳くらいですかね。で、親があんまり叱るんじゃないか、かわいそうだっていうんで、仏像を作り墓地に堂を造つてお祭りしたんです。その祭りが大正の初めまで絶えていましてね。嶺町の寺間の部落の若いご主人がやたらと亡くなるんです。なんのたたりだろうってことで、霊能者のばあさんの所に聞きにいったんです。そしたら、嶺の寺間の墓地は小次郎様つてのがいたはずだと。しかし、そのお祭りをしていないだろう、といわれたというんで

す。それで、村人と相談して、今年から盛大にお祭りをしようじゃないかといつて、現代まで続いているんですよ。それが四月十五日ですかね。(嶺)

カッパの話 お盆に作ったおはぎをね。仏壇に供えて、それを食べてから川に泳ぎに行くと、カッパに引き込まれないから、川に泳ぎに行くならば、仏様へ供えたばかりを食べてから行きなさいってことをよくいわれたね。(嶺)

大火事 明治四年の春大火事があった。ちようちんの置き忘れて火事になったという。(川原)

#### 四、その他

よく聞いた文句

有っても蚊かがなく龍蔵寺(金があつても出さない。地味)

細井学校ポロ学校 おまけにつつかえ棒が一三本

桃川学校ポロ学校 おまけに生徒がジャガイモ(龍蔵寺)

ふんどしがしけると雨

夏の北風は長雨がふる

北風 三日ともたない(田口)

横室おどりに

原喧嘩

子供のあぶない川端町

光り輝く日輪寺

青柳火事に

代田くじ

水害に苦しむ龍蔵寺

鳥取・小坂子・嶺・小暮・勝沢残せばもつたいない。(勝沢)

はやし唄

鳥取、小坂子、嶺こずれえ(小暮)

勝沢のこして もつたいねえ

小坂子やつこに嶺ぎむらい(端気)

田口田の中、米の中、チンチン電車の通る道、光り輝く日輪寺

嫁にくるのは下細井はおよし(白川の氾濫で貧乏だったから)

昭和十四、五年位には百戸程しかなかった。(田口)

横室踊りに原げんか、子供のあぶない川端村、光かがやく日輪寺、

青柳火事に代田公事、水害でなやむ龍蔵寺(青柳)

「横室おどりに、原げんか、子供のあぶない川端村、光り輝く日輪寺、青柳火事に、代田くじ、水害でなやむ龍蔵寺」(青柳)

縁起が良いこと

茶柱が立つこと

朝、お茶を飲むこと(龍蔵寺)

縁起が悪いこと

カラスが鳴く

寺の周りでカラスが鳴く

はしが折れる

ゲタのハナ緒が切れる

家を出る前に針を使うこと

一杯メシ(龍蔵寺)

カラス カラスが鳴くと縁起が悪い。寺の周りでカラスが鳴くと不

吉。家の内で不幸があるとき、不幸のある家の者にはその鳴き声が聞

こえない。(龍蔵寺)

言いならわし

光輝く日輪寺

川原の粟つ喰い (日輪寺)

群馬郡の三大名物

川原のそば

船尾の滝

慈眼寺のしだれ桜

川原のそばは名物だったので死ぬと「エンマさまに、川原のそばを喰ってきたか」と聞かれた。喰ったと言うと極楽、喰わないと言うと地獄にやられた。(川原)

四足門

萩原氏は、赤城山で鷲の子を拾い、前橋の殿様に献上した。

そのほろびに四足門を許された。時次にも一軒あるという。(小神明) 堤沼 西、中、東と三つある。干魃に悩まされて作った。西堤沼の西に富士塚という塚があり、富士浅間神社が祭つてあつた。(小神明)

吉野屋 旧前三の西で、倉が七つもあつた大尽の呉服屋のこと。

(端気)

動物 今年(昭和六十一年)九月に山王の畑でタヌキを見た。野ウサギもいて作物などを荒す。ウサギは、人が棄てたのもいるらしい。

(龍蔵寺)

八幡山 忠霊塔のある所で、板碑が出た。(上細井)

鉄砲馬場 県道の西側、お墓があるあたりのこと。今は畑になつて

いる。(上細井)

塔の堀 沼があつて、そこに水をひいた。(荻窪)

城 城あと。古城ともいう。(荻窪)

力じまん 一升ますの上に立つて、庚申の石を持ちあげた。(川原)

寺子屋の師匠 永井宇八という人がやつていた。(川原)

桑の木の話 蚕が上手な家の木を盗んでくる。大根を盗んでくると、

蚕があたるといわれた。根をとられて、台サゲになると、若い枝が下から出てくるので、逆によかつた。(荻窪)

夜泣き地蔵 子供が夜泣きを止むように、お願をかける。夜泣きが

止むとお礼に行き、よだれかけをかけてやつた。(下沖)

えぼ地蔵 えぼがある人は小石をとつてえぼを撫でて、それから地

蔵にお願してその石を上げておく。すると、えぼが自然ととれると

いう。(下沖)

雨乞い 馬の骨と牛の骨を持って、赤城の沼に行き、それを投げ入れると、赤城様はお腹立ちになり、すると帰る途中で雨が降るとい

う。(下沖)

大正十五年五月五日に村人十八人で、赤城の小沼に行つて水を貰つてきた。それを寺沢川に流した。(亀泉)

下沖の話ではないが、雨乞いのため、汚物を大沼に投げ入れたら、

そのせいで舟が転覆し乗つていた人達は死んだという。(下沖)

上沖は旗本の持ち分で、下沖は前橋の殿様の持ち分であつたので下沖でバクチをすると前橋から調べにきたが、その時、上沖領に入つて

難を逃れたという。(下沖)

下沖では村芝居が盛んであつたが、手入れがあるとき上沖に逃れた。

(下沖)

赤城山の話 赤城山の鈴ヶ岳に毎年一回博徒が集まつて大開張する

という。(下沖)

赤城神社(三夜沢)では五月八日に武芸者が集まつて試合をしたそ

うだ。(下沖)

うなぎを食べない話 片貝では鰻を食べなかつた。そのため、片貝

堀には鰻が多く、下沖の人達はよくこれを食べた。(下沖)

疫病田 疫病田といって動物の捨て場にした田があった。その田にはなにも作らなかつた。(田自体の立地も良くなかつた)(下沖)

夜泣き子供 夜、子供が泣くと、鶏の絵をかき竹竿にさして屋根の上上げると、子供が泣き止むという。(亀泉)

おん鳥の絵かき、逆さにして鳥小屋に吊しておくと言つて夜泣きが止むといつた。(亀泉)

「奥山の小笹の中に棲む狐 昼は泣くとも夜は泣くなよ。」と三回いうと夜泣きが止むという。(亀泉)

「いよいよん寺」に庭があり、「七兵衛ムジナ」というのがいて、人を化かしたそつだ。(亀泉)

赤ん坊の夜泣きを治すには、流しの下に鶏の絵を逆さにしてはると夜泣きが止むと聞いていた。(五代)

護摩正月 昔、田中城(嶺城)があつた時代、伝染病がこの嶺地区にえらく発生して、何人も死んで、今の大林地区に持つていつてずいぶん焼いたつていうんですよ。その時、村人が頼るのはお寺の和尚さんで、したら伝染病を絶やすのに護摩をたいてあげようつて。七月二十四日に護摩をたいて、護摩正月つていうお祭りをするようになったつていうんですよ。(嶺)

かくれんぼ 神様につれていかれるから、あまり、夕方にかくれんぼするもんじゃやないなんてことは聞いた。(五代)

きふく様 仙人だかなんだか知らないけど、その人が杖をついて何十年いたんだか知らないけど、その杖がくさつちやつて、それでその人を祭つたのが「きふく様」だと。(五代)

ブッチメ しの、桑の木を使つて作り、うさぎや雀をとつた。雪の降る時にかかりやすい。(龍蔵寺)

変りもの

マンジュウ——十三夜、十五夜の時。

モチ——正月、小正月、トウカンヤ、お節句(四月三日)

ボタモチ——お盆

ウドン——オッキリコミ、ニコミなどで夕食にした。

赤飯——田植え、お祝い、節句(五月五日)オクンチ(十月十五日)

ヤキマンジュウ——町へ行つたおみやげで年に三〜五回くらい。またオコアゲの祝いで買つた。

ヤキモチ、ジソヤキ——コジョハンなどで。

鮎——油を多く鮎を焼いた。油がしみて甘い。(龍蔵寺)

食事 盆、正月、節句の時は、銀メシといつて、白米だけのごはん

だつた。また、職人がくると、その分だけ銀メシをたいた。(屋根、鍛冶、大工、いかけ)サラシの袋の中に米を入れ、麦の入つたかまの中

に入れていた。カンソウイモも食べた。(龍蔵寺)

主食は米七、麦三のひきわりで、おかずは佃煮、なつば、たくあん、

みそづけだつた。みそ汁には、大根やなつばを入れた。(龍蔵寺)

フロ ふだんは家の中においたが、蚕の時は外に出した。雨の時は

横に棒を立て、カサをしぼりつけた。(龍蔵寺)

草競馬 春の二〜三月頃やつた。賞品に旗、タンスなどが出た。近

所の人が応援した。(龍蔵寺)

家の中の神さま 東照宮、神明宮、天照皇太神宮、歳徳神、オカマ

さま、オソデンさま(下大黒の北)ヤブ神さま(龍蔵寺)

植物 昔、子供の頃に河原に「カワラチゴ」というガーベラのような

花があつた。花卉が五つで色はエンジ。白い毛がある。その白い毛

に水などをつけ、「筆」のような形にして遊んだ。(北代田)

郷倉 二間三間の郷蔵があつた。樺の一枚板で四尺六尺の戸を作り、

今は芳賀公民館の倉庫の戸になつている。(勝沢)

村人足 石井県道や白川の改修の時、村人足のフレが出た。白川は一夏に三々五回くらいで、雀神社の上、白川橋の上、細井小の所だった。川の改修では、ナガシをくれると行って、くわぜに竹をしぼったナガシを使った。(龍蔵寺)

近所の貸し借り みそ、しょうゆ、道具、自転車を貸し借りした。

風呂も近所入り、「湯が立ったよ」と子供がふれあるいた。(龍蔵寺)

青年会 学校を卒業して入会し、二十五才まで入っていた。結婚しても二十五才までは入っていた。祭の時自転車あずかりをして一台五銭もらった。他に寺の警備や下足番をして活動資金にした。旅行は、伊香保、水上、四万などに行き、会から補助金が出た。迦葉山へは自転車であった。(龍蔵寺)

禁忌 上細井の金子家はキュウリが作れない。田口の塩原家は、暮のもちがつかない。つくともちが赤くなる。(龍蔵寺)

青柳大師 節分の時、神楽があつた。戦前の話だ。中に「丸一の寅さん」という人がいたが、地元の人かどうか知らない。舞台があつて、地芝居をした。(龍蔵寺)

雀神社 ハシカの神様で、四月二十五日が祭の日。おまいりすると軽くすむ。小さい子をつれていった。昔はにぎやかで、雀まつりといった。花火をあげた。銃剣術、神楽の奉納があつた。(龍蔵寺)

龍蔵寺 龍蔵寺は元、青柳町、雀神社の北にあつた。そこで青柳山という。(龍蔵寺)

フゴ 目のつんだザルで、天秤につけて肥料を運ぶのに使った。

産育 五カ月で腹帯をしめた。戌の日のお祝いだった。お産の神さまは、産泰さまで、お願いと、お礼まいりにいった。「高い所へ手を出すな」「重い荷物をもつな」「ふところから鏡をはなすな」「太陽を見るな」「火を見るな」―「ふところに鏡を入れて見る」などと言った。初

めての子の時は実家で生んだが、二、三番目は、とつぎ先で生んだ。荒牧にお産ばさんがいて、一週間はお湯をあびせにきてくれた。ヘソノオはかわかしておき、おなかの痛い時はけずって飲んだ。お祝いはお赤飯で、ウブアケは女は二十一日、男は十九日だった。名付けは、実相寺で聞いてきた。三つあげて、誰かにとりにかせてきめた。他には、コウアンさまに聞いたり、名前の本でつけた。渋川家の相続人は「吉」、今井家は「郎」とつけた。「すえ」「また」「とめ」などと、子供がこれ以上できないように考えてつけた名前もあった。ふたごのあと先は、あとが兄、先が兄と両方あつた。父親が厄年の子は、三本辻において、ひろつてもらつた。百十日のお食いぞめには、猫足の膳にふだんの膳を嫁方で買ってそろえた。誕生祝いには、一升もちをしよわせた。(龍蔵寺)

御祝儀 見合いで一緒になった。口がための時は、一升の酒を五合ずつ分けて持つていった。昭和二年で二十円の結納金だった。式は四々五日かかった。三日目に里帰りした。イチゲンは六々七人で、もらい方は昼から夕方までいた。くれ方は、もらい方に嫁をつれて来た。嫁は出る時にあいさつをした。チュウヤドは、時間調整で休んだ。嫁は入り口で竹をまたいで入る。えんがわから上る時、マチ女房がスゲ笠をかぶせる。謡でうたいこむといい、「高砂や」と謡をした。親せき紹介、三三九度の杯のあと、むこが逃げる。「むこさんはどうした」「知らないうちに逃げた」「俺が代りになる」といったやりとりがある。嫁は着がえ、近所の人とおみやげを持つてお茶をのむ。イチゲンさんのおひらきまでつづいた。この時、オシヨウバンが相手をする。このオシヨウバンは近所の酒の強い人を頼んだ。鶴、亀のラクガンがついた。嫁入り道具の披露では「嫁は群馬郡」からもらえといった。長持ちまで持つてきた。近所の人にはタンスくらいだった。(龍蔵寺)

## 第十三章 民家

### 一、総論

#### (一) 調査の目的

最近になって竹下総理大臣の提唱している「古里創世論」は、私達民家研究者にとつて、なぜか寂しく哀れに聞こえてくる。その大きな理由を考えてみると、昭和四〇年代以降における経済最優先の政策が社会の近代化・産業化を全国の津々浦々にまで押し進め、ひたすら効率化・画一化の方策に重点を置いてきたため、全国の津々浦々に至るまで特徴のない画一化した街並みになってしまった。その結果、最近になって多くの特徴ある美しい故郷が無くなってしまったことに気が付き、それを嘆いて出てきた言葉のように聞こえてくるからである。

事実、私達の身のまわりを見ても、永年にわたつて農民の生活を支え殺伐とした都会人の心に故郷の情念を抱かせ、彼等の心を和らげてきたあの美しい草葺き民家も急速に減少し、今やこの前橋市内から消滅するのも時間の問題となっている。こうした時期に、残り少なくなつてしまった伝統的な民家を取り上げ、民家にまつわる由来及び平面と構造の変遷過程を具体的に記録し、後世の市民に提供しなければならぬのは、私達民家研究者に与えられた緊急の責務であろうと考える。民家は地方によって多くの形式があり、その地方の気候・風土に合った独特の形式を造り上げてきた。どんな不便な土地であれ、厳しい自

然環境であれそこに人間が生きる限りあらゆる工夫をこらし、それぞれの環境にあった住まいを追い求め、永い年月を経てその土地の条件に合った自らの住まいの形式を造り出してきた。

ここに収録した民家は、どれも私達の祖先が永い間追い求めて造り出した血と汗の結晶であり、自然と風土と祖先の心が融合して有形化したその土地固有の大切な造形作品であるといえよう。伝統的民家が地域の環境に潤いを与え、その土地の個性を豊かにしてくれるのは、数千年にわたつて追い求めてきた祖先の血と汗の結晶がそこにあるからであろう。また、都会人が伝統的民家に心をひかれ、故郷を思い浮かべる不思議な情念を抱くのも、まさにそこでは、祖先の永年の思いが凝縮しているからにほかならないからであろうと考える。この報告書が、こうした滅びゆく伝統的な民家を少しでも見直す一助になれば筆者としてこの上ない喜びである。

#### (二) 調査対象民家

この調査で対象とした民家は、芳賀・南橘・桂萱の三地区における江戸時代から昭和初期（戦前）までに竣工した農家・町家・武士の家・本陣・脇本陣等の広範囲にわたるものとした。しかし、このたび実際に調査することの出来た遺構は、農家三九棟、町家一棟の合計四〇棟であった。そして、農家遺構の場合一九世紀以降になると、養蚕の盛行した地方らしく随所に養蚕の影響を受けた造りとなつていた状況を

実際に調査することができた。

### (三) 調査の方法

この調査は、第一次調査と第二次調査の二回に分けて実施した。第一次調査は、土地の古老より聞き取りした遺構を文化財保護室でリストアップし、それを基にして筆者及び事務局員が調査地域内をできるだけくまなく歩き、遺構の外部と土間部分などを直接拝見させていた。聞きながら、建造に関する簡単な聞き取り調査をおこなった。こうして第二次調査遺構の四〇棟を選定した。ここに、第二次調査遺構を選定した際に留意した事項を掲げておくとつぎのようである。

- ① その土地で特に古いと伝えられている家。
- ② 昔から由緒のある家
- ③ 建築手法や意匠等の特徴のある家
- ④ 古くから養蚕を沢山行っている家
- ⑤ 旧街道に面した古い家
- ⑥ 以上の1〜5に該当し、復元可能な家

ここで第二次調査の内容について記しておく、主家については現状平面図・痕跡図・断面図等を採用し、また屋敷全体の配置図も必ず採取した。写真は屋敷構えを始め、主家の外観及び内部等を一棟当たり約三〇枚程度撮影した。しかし、古文書等を残している家では、極力それらも写真に収めたので、写真資料の枚数はさらに増加した。

聞き取り調査の内容は、竣工年代、移築年代、各種の改造年代、建てた人の名前、各室の名称及び各室の昔の使われ方、柱や各部材の名称、屋内における神祭りの場所・種類・その方法、禁忌作物、正月三日の食べ物及び正月神へのお供え物等数多くの種類に及んだ。

## 二、農 家

### (一) 平面の形式

このたび調査を実施した三九棟の農家は、総て大小の修理及び改造を行っていた。そして、修理及び改造の特徴を概観すると、多くの遺構が建造当初より室数を増し、しかも間仕切り境の壁や柱を取り除くなどして解放的になっていた。だが、吉沢佐四郎家のように土間(デードコ)の大部分をもぎ取ってしまった遺構もあった。しかし、このような例は極めて珍しく、今回の調査で他に類似した例を見なかった。以上のような調査遺構は、痕跡を頼りにして建造した当初の姿に復元すると、次のような七種類の平面形式に分類できた。

- ① 二間取りの民家
- ② 三間取り(広間型)の民家
- ③ 不整形田字間取りの民家
- ④ 喰い違い四間取りの民家
- ⑤ 整形田字間取りの民家
- ⑥ 多間取りの民家
- ⑦ 特殊な間取りの民家

### (二) 編年の指標

第二次(本)調査を実施した三九棟の農家遺構のうちで、普請帳・棟札・墨書・あるいは裏付けのはっきりした伝承等によつて、建造年代を明らかにすることができたものは、太田林平家・須田繁家・山田秋一家・関丑之助家・渋川広吉家・池田一家・角田栄家・小川登美雄家・柴崎二郎家・今井福二郎家・後藤貞良家・木村安造家・木村正



一家・横堀栄一家・品川喜右一家・長谷川隆治家・高橋滋信家・小林寿明家・佐藤一三美家・田子武男家・菅野茂八家の一一棟であり、約五三・八%をしめた。

そこで、これらの遺構の原形に見受ける各種の特徴と建造年代の不  
明な遺構の原形に見受ける柱間装置及び構造を始め細部の示す各種特  
徴等と比較、検討して編年の指標を求め、調査民家全体を平面形式別  
に区分し、かつ階層差を考慮に入れて編年の系列をつくと表一の  
ようになる。

前述したようにこの調査では、全調査民家の半数を越える遺構につ  
いて建造年代を明らかにすることができた。従って残る建造年代不明  
の遺構については、一世紀を初期・中期・末期の三期に等分して建造  
年代を推定しておいた。

表一に示したようにこのたび調査した農家遺構は、間取りの形式  
(平面形式) によって七つの型に区分できた。以下においては各平面  
形式別に、各調査民家の建築的特徴や伝承等を推定建造年代の順に  
従って記すことにする。

なお、各形式の復元平面図に記してある室名及び各部の名称等は、  
その家の呼称を尊重して発音に忠実に記すよう心掛けた。従って同じ  
位置の室名でも家が異なれば呼び方も異なる場合があることを、あら  
かじめお断りしておかねばならない。

### (三) 二間取りの民家

#### 1 はじめに

この形式に属す民家遺構は、一棟を調査しただけであった。それは  
下田薫家であり、復元平面図は図一に掲げた通りである。次にその  
建築解説を述べることにする。

#### 2 調査遺構の建築解説

##### 下田薫家(写真一・図一)



下田薫家(田口町) 当初は平家であった。



下田薫家  
〔図一〕 二間取りの民家  
(復元平面図)

を示していた。また、外観は二階造りになっている。しかし、当初は  
平屋造りであり、上手側の二室も後に増築したものであることが実際  
の調査結果から判明した。

そこで家人に建造についての話を聞くと、当遺構は薫氏の三代前の  
先祖文太郎が建造し、初めて当地に住み着いたものという。そして、  
文太郎の長男友太郎(明治一四年生)が大正時代の中頃に上手二室の  
増築及び二階を設けたものであったことを聞くことができた。以上の  
ようなことから、当遺構の当初の平面(間取り)は図一の様になり  
その建造年代は、明治初年頃と推定した。

なお自家の正月家例を記すと、正月三カ日はソバを食べ、正月神に  
もソバを進げる習わしであるという。しかし、いつの頃からか知れな  
いが暮れの三〇日には、餅を搗く習わしになっていると言ふことであ

る。

#### (四) 三間取りの民家

##### 1 はじめに

第二次調査を実施した三九棟の農家遺構のうち、この形式に属す遺構は最も多く一五棟に達し、約三八・五%を占めた。これら一五棟の農家遺構の示す復元平面図・復元断面図は、図-3に示したようである。次にこれらの遺構について、建造年代の古い順に建築的解説を行うことにしよう。

##### 2 調査遺構の建築解説

##### 長谷川芳衛家(写真-2、図-3)

当遺構は一五棟の三間取り民家の中で、柱間装置・柱の仕上げ・架構の様子等から最も古い遺構であろうと推察できたものである。遺構の規模は、桁行き約十間梁間約四間半である。



長谷川芳衛家 (上細井町)

建築の特徴についてみると、まず土間(ダイドコロ(1)と呼称する)が大変広いことである。すなわち桁行き十間のうち、過半数の五・五間までを土間が占めている。そしてこの土間内に、上屋柱をほぼ一間ごとなたてている。そして、トボグチの内側三尺のところには今でも袖摺り柱(写真-3)を残し、またこれと対応するダイドコロの裏側では釜柱(写真-4)を残し、いずれも表面を手斧仕上げにしている。このように土間内に袖摺り柱・釜柱を残す

とし建具を嵌めていなかった。ザシキの表側は中間に柱をたて、この下手側を敷居・鴨居とも三本溝とし、この上手側をサマゴにしていた。三本溝の使い方は、表側の二本溝に板戸(雨戸)二枚を引き違いに嵌め、一番内側の一本の溝に明かり障子一枚を嵌めて使用するものがある。従って三本溝の開口部に明かり障子一枚を右あるいは左に引き込んで、その開いた所に明かり障子一枚を引き立ておくものである。このように使用する二本溝の開口部は、一間の開口幅をもつてもその半分の半間しか採光幅を確保できず、極めて効率の悪い開口部であった。またそれゆえに、比較的古い開口方式であるといえるのである。



ダイドコロ裏側のカマド  
近くにたつ釜柱



トボグチのすぐ内側にたつ  
袖摺り柱

遺構は、最近においては極めて珍しく、それを残しているだけで一八世紀中期以前の古い遺構とみてよいほどである。

大黒柱を見ると四面を手斧で仕上げられており、逃げもない。床上の室は三室であり、土間に接した大きな室をザシキと呼称し、このやや裏側土間寄りにイロリを設けていた。ザシキ

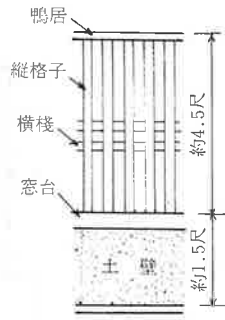
の土間側は解放状態

とし建具を嵌めていなかった。ザシキの表側は中間に柱をたて、この下手側を敷居・鴨居とも三本溝とし、この上手側をサマゴにしていた。三本溝の使い方は、表側の二本溝に板戸(雨戸)二枚を引き違いに嵌め、一番内側の一本の溝に明かり障子一枚を嵌めて使用するものがある。従って三本溝の開口部に明かり障子一枚を右あるいは左に引き込んで、その開いた所に明かり障子一枚を引き立ておくものである。このように使用する二本溝の開口部は、一間の開口幅をもつてもその半分の半間しか採光幅を確保できず、極めて効率の悪い開口部であった。またそれゆえに、比較的古い開口方式であるといえるのである。



サマの痕跡を残すザシキ  
表中央にたつ柱

ザシキ表の上手側開口部にあるサマゴとは、どのような開口部であろうか。ザシキ表の中間にたつ柱（写真―5）及びこの柱と対応するザシキ・コザ境の柱に



〔図-2〕 サマゴの復元図

残る痕跡によって復元すると、サマゴと呼称する開口部は図2のような窓になる。即ち、幅一間の開口部の下側に約一・五尺の高さまで土壁を設け、この上端に窓台を据え、窓台の上には外側に格子棒を嵌め、内側には明かり障子二枚を引き違いに入れたものである。サマゴとはサマのことを指し、漢字を当てれば「狭間」と記し、狭い間隔の格子棒を入れた窓を指すものと考えることができ、図1・2に示した窓を極めて端的に表した言葉であることを、痕跡を根拠にして復元図を示すことによって具体的に明らかにすることができた。

また、三間取り民家におけるザシキは、なぜ広大な空間を必要としようとして、土間（ダイドコロ）との境に建具を嵌めなかつたのであろうか。これについて少し検討をしてみよう。

三間取り民家におけるザシキの機能は、裏側の壁に接して仏壇を置き、その上部に棚を釣りこを神棚にし、また少し裏側寄りにイロリを設けていることなどから推察して、まず家族の回らん及び食事室で

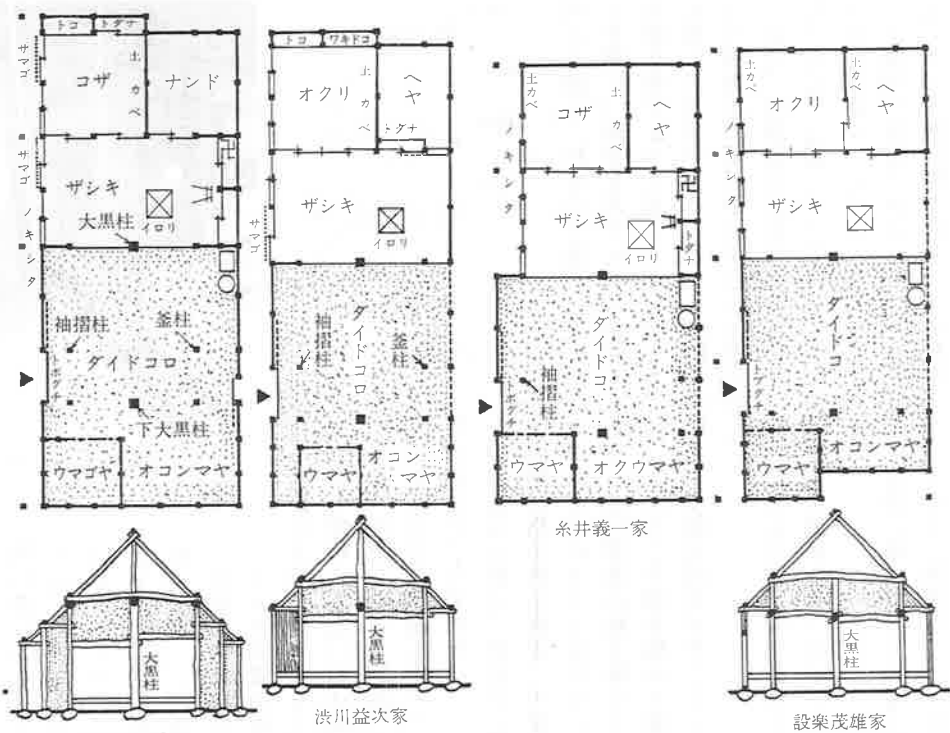
ザシキ表の上手側開口部にあるサマゴとは、どのような開口部であろうか。ザシキ表の中間にたつ柱（写真―5）及びこの柱と対応するザシキ・コザ境の柱に

あると同時に、日常の軽い来客に対する接待等をおこなう室でもあった。しかしそればかりでなく、稲や麦の収穫時には土間で脱穀や粃摺りを行った後、ザシキに粃・玄米等を山積みして一次的に保存しておいたのである。また養蚕の時などは、主にザシキと土間（ダイドコロ）を使用した。以上のように三間取り遺構におけるザシキは、ダイドコロとの間に床上と床下（土間）という差を有しているものの、屋内農作業を行う場合などの際には、作業上連続した極めて密接な関係をダイドコロとの間に持っていた。このような理由により三間取り遺構におけるザシキの多くは、ダイドコロとの境に建具を嵌め込まなかったものと推察する。

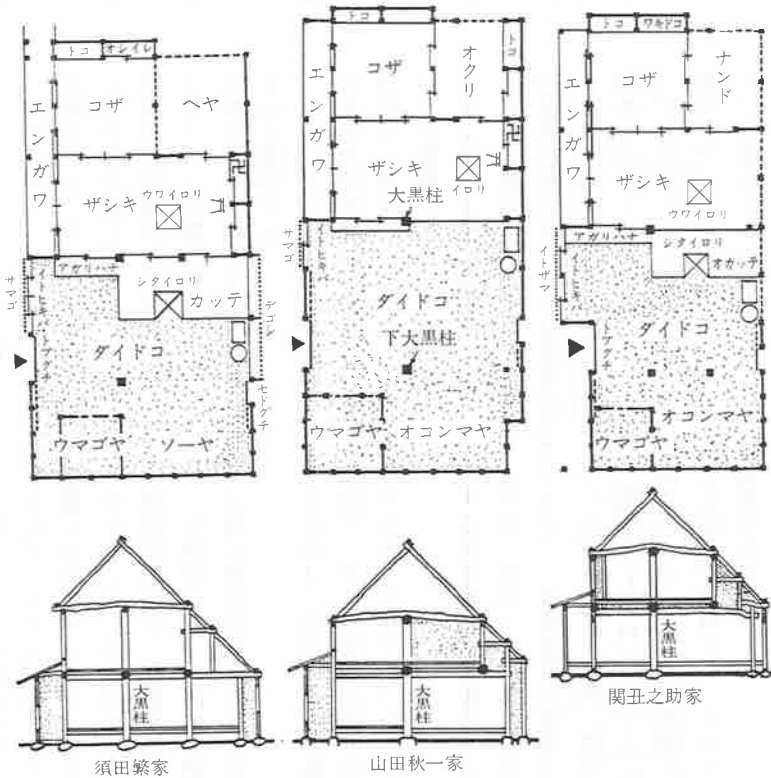
また、ザシキが広大な空間を必要としたのは、前述のように数種類の居住空間的機能を兼ねているのと同時に、多くの種類の作業空間的機能をも兼ねていたという、いわば雑多な兼用空間であったためであろうと推察できるのである。

ザシキの上手には表側にコザと呼称する室を配し、裏側にナンドと呼ぶ室を設けている。コザと呼称する室は、貴人・客人等の接待室及び彼等の宿泊時における寝室に当てたもので、普段家族の使用することのない極めて上等な室と位置付けていた。従って、室内に畳を敷き詰めるのもこの室が最初である。また冠婚葬祭及び村人の集会の時は、コザを主室として儀式や話し合いを取り行った。なお、当遺構の場合未だコザにトコを設けていない。しかし時代が下降して、トコやワキドコを備えるようになるのもコザが最初である。

家族の寝室に使われた室は、ナンドである。この室への出入口はザシキ側に開いていた。従ってナンドは、ザシキ側に開いた出入口の他を総て土壁で閉鎖していた。ナンドには藁や干し草を部厚く敷き、この中に潜って寝たものと推察する。この干し草や藁が、室外にはみ出



荻原喜代治家



〔図-3〕三間取りの民家(復原平面図・復原断面図)



さないようにするため、また暗く静かな方が安心して就寝できることなどから、四周を土壁で囲ったものであろう。

このように、ナンドは周囲を土壁で囲っているものの、戸を少し明けておけば、朝になるとザシキのサマゴから障子を通して、柔らかな光が差し込んでくるので、寝ながらにして夜明けを知ることができたことであろう。

当遺構は、建造年代についての伝承等、何も残していない。しかし、当地では最も古い家という。そこで当家の保存している初代及び二代と伝えている位牌を拝見すると、次の様である。

位牌に残る初代夫婦  
 「浄法源清居士」元禄一二年十月九日(没)  
 「法岳妙善大姉」宝永二年八大晦日(没)

位牌に残る二代夫婦  
 「茲山道観居士靈位」享保一一年九月五日(没)  
 「脱風妙清信女位」寛保三年七月一七日(没)

そこで、平面・構造・細部等の示す建築的特徴から、当遺構の建造年代を推察すれば、当遺構は前述の位牌に記されてある初代が建造したものとみてよさそうである。従って当遺構の建造年代は、一七世紀末期頃と推定しておけば妥当であろうと考える。

吉沢佐四郎家(写真16・図13)

当遺構は桁行き八間半、梁間三間半の規模である。このうち現在は土間(デードコと呼称する)の下手三間半を、もぎ取ってしまったている。しかし、これより上手の部分は、建造当初の様子をよく今日に伝えている。

当遺構の規模は、桁行き・梁間とも前述の長谷川芳衛家より一回り小さいものになっている。痕跡等を参考にして、建造当初に復元した床一部分の柱間装置を見ると、ザシキの表側は下手にサマゴを設け、上手を三本溝の開口部にしていた。また、コザとザシキ境の間仕切り



吉沢佐四郎家(荻窪町)

では、中央部に柱をたてていた。コザの表側でも中央部に柱をたて、この上手を開口高さ二尺五寸のサマゴとし、この下手は幅一間の中間に間柱をたて、この間柱の下手を三尺幅の土壁とし、この裏側に板戸(雨戸)一枚、明かり障子一枚を引き込むという古い方式にしていた。

ナンドは、ザシキ側に開いた幅一間の出入口の他総てを、土壁で囲っていた。そして、ナンドへの入口は痕跡によれば、敷居を床面より六寸



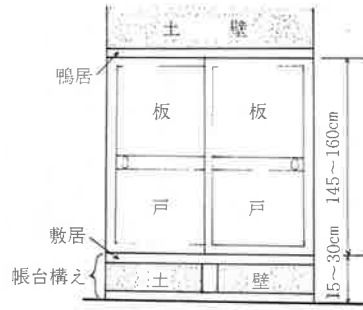
残る柱の間に柱の痕跡を残している。柱の痕跡を右手の柱を左手の柱を入口の構造に「帳台」と対し高さ

(約一八寸)程高い位置に据えていた(写真17)。これは「帳台構え」といい、古民家の寝室の入口に見受ける一つの特徴である。

る。

即ち、長谷川芳衛家でも述べたように、古くは寝室の床に干し草や稲藁を分厚く敷いていた。この干し草や稲藁は、今日の布団代わりをしたもので、農民は昼間の衣服を身に付けたまま、干し草や稲藁の上に横になり、あるいは干し草や稲藁の中に潜って寝た。就寝中に寝返りを打ったりした際に、干し草や藁が室外にはみださないようにする

ためには、四周を土壁で囲う必要があった。また、寝室を壁で囲う他の理由は、夜具などに恵まれない昔の農民にとっては、夏の暑さより冬の寒さの方が問題であったことによるものであろうと推察する。



〔図-4〕帳台構えの様子

なるに従って次第に敷居を低く据えるようになる。そしてやがて他の室境に見る敷居と同じ高さに据えるようになってゆく。

その大きな理由は、古く遡るほど敷き布団も掛け布団もなく、干し草や藁の中に潜って寝たので、干し草や藁を部厚く敷く必要に迫られたことによるものであった。しかし、時代が下降するにつれて、次第に綿が普及し入手し易くなると、農民層の間にも綿を入れた布団が徐々に普及してゆく。それでも初めのうちは、綿を入れた布団を使えるのは掛け布団だけであり、下に敷いたのは相変わらず干し草や藁であった。こうして干し草や藁の中に潜って寝ることから、干し草や藁を敷いた上に寝るようになると、敷き藁の厚さも以前より薄くて済むようになり、従って帳台構えの高さも以前より低くなっていったものと推察している。

次に、当主佐四郎氏（明治四一年生）に聞いた各室の昔の使い方を

このような寝室には、一個所だけ背の低い建具を入れた図4に示すような出入口を設けていた。このような出入口を「帳台構え」といい、本県の場合にはそれがあただけで、一七世紀にまで遡る古い民家の示す特徴の一つになっている。この「帳台

構え」は一般に、古い遺構ほど敷居を高く据え、新しい遺構に

記しておこう。

まず、デードコで行った主な仕事は、次のようであった。

- ① 収穫した稲や麦の脱穀をした。子供の頃は「カナゴキ」と称して、鉄製の歯の間に穂を引っ掛けて、茎を引っ張り脱穀した。
- ② 丸く網んだ竹製の枠の中に泥を詰めて作ったスルス回して、糲摺りをおこなった。
- ③ デードコの表側では、イトヒキ（糸曳き）もおこなった。
- ④ 縄を編んだり、草履を編んだりするための藁ごしらえを行った。
- ⑤ ゴザを編んだりした。
- ⑥ 養蚕時は桑置場になった。  
なお、オコンマヤは米俵を積んでおいたり、味噌樽・醤油樽・漬物樽等を保存しておいた場所であった。  
ザシキでは、次のようなことをおこなった。
- ① 梯子の上に細めの丸竹を数本ゆわえたものを、適当な高さの台の上に置き、これに麦の穂をうち付けた。これを「サナブチ」といいデードコでもおこなった。
- ② ユルリの廻りでチョッパシ（ワラツパシ）をつくった。一晩で「居丈立つ丈」（背の高さのこと）作れなければ一人前の男ではないといわれた。
- ③ 俵は「カマブチ」（ザシキと土間境の框かまのところ）に座ってデードコの方を向いてあんだ。こうしてあむと、床の高さの分だけけい垂れ下げてあむことができた。
- ④ 縄もカマブチであんだ。床の高さの分だけ沢山デードコへ落とせるので、便利であった。
- ⑤ ユルリの廻で藁草履をあんだ。
- ⑥ 養蚕の時は主にザシキを使用した。

- ⑦ 家族が食事をとった。
- ⑧ 家族の団らんの場（居間）であった。
- ⑨ 近隣の軽い訪問客の接待場所であった。
- ⑩ ユルリで食事のための煮炊きもおこなった。
- ⑪ 脱穀した粃を一時的に山積みしておいた。
- ⑫ 粃摺り後の玄米を俵に詰めるまでの間、一時的に山積みしておいた。
- ザシキは、以上のように多くの機能を受け持つ場所であった。従ってこれらに対応するために、広大な空間を必要としたものであろうと考える。また、ザシキとデードコとの境は、建具を嵌めず解放状態にしていた。その大きな理由は、作業を重視した場合デードコとザシキは非常に密接な関係をもっていたので、ザシキとデードコ境に建具を嵌めるわけにはいかなかったものと推察する。
- コザでは、次のようなことをおこなった。
- ① 主に冠婚葬祭時の儀式を取り行なった。
  - ② 村人の集会を取り行なった。
  - ③ 大切な客人の接待と宿泊室に用いた。
  - ④ 浪花節・踊りゴゼ・漫才師などが来た時は、コザに上げて芸をさせ、集まった村人はザシキで参観した。
- 以上のようなことから推察すると、コザは対外的な役割を受け持つ最も上等な室として位置付けられていたことを知ることができるのである。いわば、民家のもつ公的な接客空間（ハレの間）として位置付けてよいであろう。
- ナンドは、次のような機能を受け持っていた。
- ① 主人夫婦の寝室であった。
  - ② 子供を生むときの室であった。



渋川義一家（竜蔵寺町）草葺き屋根であったものを昭和45年に現在のよう  
に改造した。

3) 渋川義一家（写真―8・図―3）  
当遺構は桁行き八間半、梁間四間の規模である。昭和四五年に桁より上部を大改造し、それまで草葺きであった屋根を瓦葺きに改めた。また、大黒柱より下手の土間部分（ダイドコと呼称する）は新建材を用いて室を造ったりして、全く様相を変え

③ 死人の湯灌を行う室であった。  
以上のようなことから推察すると、ナンドは民家の中でも極めて内  
向きの室（ケの間）であったといえる。  
ところで当家の屋敷地は、「字三元屋敷」と呼称し、俗に「内出」とも  
いい、中世における荻窪城の本丸跡にあたるのだという。なるほど屋  
敷から少し離れた所には、今でも明瞭に空堀を残している。なお当  
家は、江戸時代に名主を務めた由緒ある家柄である。そして、当地に住  
む吉沢姓の本家と称されていることから、今でも屋号を「ホンケ」と  
称している。また、当遺構は初代によつて建造されたものと言ひ伝え  
ている。

当家に伝わる位牌によれば、当家の初代は俗名を「市良右衛門」と  
称し、戒名は「勝月道宥居士」と記して元禄一二年七月二四日に没し  
ている。従つて当遺構は、この初代によつて一七世紀末期頃に建造さ  
れたものと見ておけば、復元した平面・構造等の特徴とも合致し、年  
代的にも妥当であろうと推察す  
る。



ている。しかし、大黒柱より上手の部分は、昔の様子を良く残している。そこで、建造当初の柱に残る痕跡を頼りにして、建造当初の平面図を描くと図13の様になるわけである。

ここに図13の平面図を見ながら、建築的な特徴を見ると次のようである。

- ① 床上の面積より土間(ダイドコ)の面積の方が大きい。
- ② 裏側の上屋柱を一間間隔で土間に露出している。
- ③ 表側の外壁はこれまで下屋柱に付けていたのを上屋柱の位置まで後退して設け、下屋柱と上屋柱の間に初めて土間庇(ノキシタ)を設けている。

④ ザシキの表側にサマゴを設けている。

⑤ オクリ(コザ)の表側は半分を土壁にしていたと推察できる。

⑥ オクリ(コザ)とヘヤ(寝室)の境は土壁で閉鎖していた。

なお、当遺構のヘヤの面積は、四畳大という狭小な空間になっている。これは梁間四間のところの前面にノキシタを設けたため、その分だけヘヤの梁間が狭ばめられたことによるものである。このように寝室の面積を犠牲にしても、ノキシタを設けたのはどの様な理由によるものであろうか。それは、ノキシタの機能を考えて見ればわかることである。そこでノキシタの機能を取り上げてみると次のようである。

① 台風時の様な南からの横なぐりの雨が、壁や建具に吹き付けるのを防ぐ。

② ちよっとした農器具置場に便利である。

③ よく農家は庭にゴザを広げ、この上に穀物を並べて天日乾燥する。これらを一時的に取り込む場所として便利である。

ノキシタの効用は主に以上のようなようであった。そして何よりも便利であったのは、庭先での天日乾燥中に夕立があった時である。この様

な時などは、いち早くゴザをまるめてノキシタに収納することができるので大変便利であったことであろう。こうして当地方の民家にノキシタの出現を見るのは、遺構より推察するところによれば、当遺構が最初のことであった。そして、当遺構の建造年代は、およそ一七世紀末期頃まで遡るものと推察できることから、早い例の場合その頃にはノキシタの出現を見たものであろうと考える。

当家に残されている古い位牌によれば、初代は「第一世渋川権右衛門成行(戒名：炎徹浄圓居士)」とあり、承応三年(一六五二)六月一九日に没している。そして八代目の頃から医者を排出し、特に九代目の杲庵(天保十年没)は医者として厩橋城主松平侯に仕えた。以後十一代杲庵(俗名茂十郎・明治四一年没)まで代々、医者を家業とした。そのため地元では現在でも、当家を「コーアンサマ」の屋号で呼んでいる。

#### 青木昇家(写真19・図13)



青木昇家(荻窪町)

当遺構の規模は桁行き九間、梁間三間半である。当遺構は前述の三遺構と比較して、次の様な新しい特徴を示している。

① 土間内に建つ上屋柱が少なくなっている。

② ザシキ表のサマゴが消滅している。

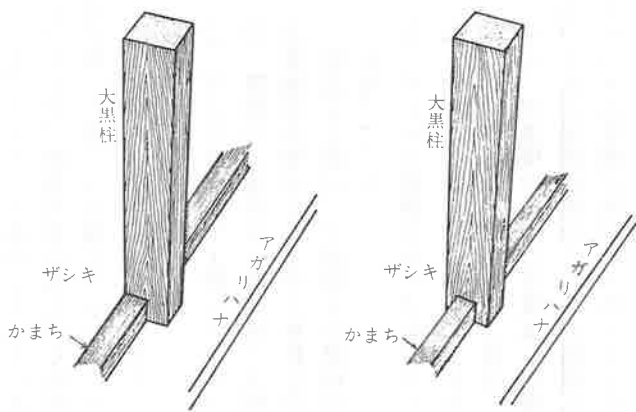
③ コザ表の土壁が消滅し、コザ表を総て解放し建具を入れていく。

しかし、相変わらず古い特徴も持

ち合わせており、それを挙げると次のようである。

- ① 大黒柱をチョウナ仕上げにしている。
- ② 大黒柱を「逃げなし」の状態に据えている。
- ③ コザとヘヤの境を土壁で閉鎖している。
- ④ ゴシキの内法幅が二間(二二尺)よりかなり広く二・七尺もある。

以上の四つの古い特徴は、どれも前述の三遺構が示していたものである。ここで②に掲げた大黒柱の「逃げなし」の状態について解説しておこう。



〔図-6〕大黒柱の「逃げあり」〔図-5〕大黒柱の「逃げなし」の図

まず、②の大黒柱を「逃げなし」の状態に据えているとは、図-5に示すような大黒柱の据え方をいう。これは、大黒柱の芯と<sup>かまち</sup>框の芯を一致させて据える技法で、ゴシキに畳を敷き詰めるようになる前の古い技法と推察できるものである。これに対し、ゴシキに畳を敷き詰めるようになると、図-5のように大黒柱がゴシキ内にはみ出るのは都

合が悪いので、図-6の様に最初から大黒柱を土間(ダイドコロ)側に逃がして据えるようになる。こうすれば大黒柱に接する畳を欠くこと無く畳をうまく敷き詰めることができ、好都合となる。これを一般に大黒柱の「逃げがある」といい、前者より新しい建築技法と認識するものである。では当地方において、大黒柱が「逃げなし」の状態から「逃げあり」の状態に移行する時期は、いったいいつ頃であろうか。少ない調査遺構ではあるが、調査遺構から推察するところによれば、その転換期はおよそ一八世紀末頃であろうと推察することができる(表-1)の「大黒柱の逃げ」の項参照)。



畳と敷居の間に「イタダタミ」を用いている。これは当初この室に畳を敷き詰めていなかったことを示す証拠である。

(青木昇家のゴシキ)。

イタダタミを有することから、建造当初は畳を敷かず板張りのまま使用したことを窺い知

ることができる訳である。

当遺構は、建造年代についての伝承を一切残していない。従って復元した建築の各種特徴及び、細部に見受ける各種の建築的特徴等から推察すれば、およそ一八世紀初期頃に建造した遺構と見ておけば妥当であろうと考える。

荻原喜代治家(写真―11・図―3)



荻原喜代治家 (小神明町)  
正面の屋根を切り上げたのは後の改造によるものである。

当遺構は桁行き九間、梁間四間余りの規模である。そして桁行き九間のうち、下手側の五間までを土間とし、ダイドコロと呼んでいる。以前はトボグチを入るとすぐ鼻先に「ソデスリバシラ(袖摺り柱)」がありまた、裏側のこれと対応する位置に「カマバシラ(釜柱)」を建てていた。これらの両柱は昭和二一年に、養蚕をするために邪魔になるとい

ことで取り除いてしまったものと言う。ここで当遺構に見受ける古い特徴の主なものを挙げると次のようである。

- ① 袖摺り柱・釜柱を残していること。
- ② 大黒柱をチョウナで仕上げていること。
- ③ 大黒柱は「逃げ」を有していないこと。
- ④ ザシキの表側にサマゴを残していること。
- ⑤ ザシキの表側にサマゴを残していること。
- ⑥ コザとナンド境を土壁で閉鎖していること。

① ザシキの内法桁行き幅を二・六八尺と広く取っていること。  
次に、当遺構に見受ける新しい特徴を挙げると以下のようである。

- ① 架構において下屋を二重に設けていること。
- ② 表側にノキシタを設けていること。
- ③ ザシキの裏側に造り付けのトダナを設け、始めてこの上手に仏壇を備えていること。
- ④ コザの上手に始めてトコ・トダナを設けていること。

当遺構は以上の様に、新旧の特徴を合わせ持っている。また、当家は江戸時代に代々名主を勤めた家柄という。このような事柄を考え合わせて当遺構の建造年代を推定すると、およそ一八世紀初期頃に建造した遺構と見ておけば妥当であろうと推定する。

なお、遺構は現在前面の屋根を小さく切り上げ、原初的な赤城型屋根(キリアゲニケエと呼称する)にしている。しかしこれは当初からのものでなく、後の改造によるものであることも調査の結果明らかにしたので、ここに付記しておく。

洪川益次家(写真―12・図―3)



洪川益次家 (竜蔵寺町)  
正面の屋根を切り上げたのは後の改造によるものである。また、屋根にトタンをかぶせたのは昭和30年代の終わり頃である。

当遺構の規模は桁行き八間半余り、梁間三間半である。当遺構の示す主要な古い建築的特徴を挙げると次のようである。

- ① 土間内に袖摺り柱と釜柱を残していること。

④ 大黒柱をチヨウナで仕上げていること。

⑤ 大黒柱の逃げがないこと。

⑥ ザシキ表にサマゴを残していること。

⑦ オクリとヘヤの境を土壁で閉鎖していること。

⑧ これに対し、主な新しい建築的特徴は以下の様である。

⑨ オクリの表側に土壁もサマゴも残していないこと。

⑩ オクリの上手にトコ・ワキドコを設けていること。

当家の言い伝えによれば、当家の初代は近くの渋川義一家から、かなり古い時代に分家したものであるという。しかし、当遺構の建造年代は伝えていないということである。

そこで当家に残る古い位牌を調べて見ると、分家した初代と思われる先祖は戒名を「法岩亮性居士」と称し、元文二年（一七二七）に没している。筆者は、当遺構の示す前述のような建築的特徴等から見て当遺構の建造年代は、一八世紀初期頃であろうと推察していた。従って当遺構は、分家した初代の先祖によって建造されたものと見て良いであろうと考えている。

なお、当遺構は昭和四八年以来空き家となり、現在蚕室や物置などに使っている。また、屋根の前面を切り上げて「キリアゲニケエ」としているのは、後の改造によるものである。

糸井義一家(写真—13・図—3)

当遺構は桁行き八間二尺、梁間四間の規模である。当遺構の示す建築的特徴で、主な古いものを挙げると次のようである。

① コザの表側の半分を土壁にしている。

② コザとヘヤの境を土壁で閉鎖している。

③ 袖摺り柱を残している。

新しい建築的特徴の主なものは以下のようである。



糸井義一家 (小坂子町)

正面の屋根を切り上げたのは後の改造によるものである。

のと判断した。

当遺構に見受ける主要な新旧の特徴は、大体以上のものである。また、遺構の建造年代については、全く伝えていないということであった。そこで復元した当遺構の示す各種特徴等から、建造年代を推定すれば当遺構はおよそ一八世紀初期頃に建造したものと見ておけば妥当であろうと考える。

なお、祖母（九〇歳）が数え年二一歳で当家に嫁に来た時、現在のようにザシキとコザの表側にエンガワを設けていなかったという。即ちここは、土間のままであったという。

設楽茂雄家(写真—14・図—3)

当遺構は桁行き八間半、梁間四間の規模である。前述の遺構のように当遺構も建築技術的に見て新旧の特徴に分けて見よう。まず、古い建築的特徴を挙げると次の様である。

① 大黒柱の逃げがない。

① ザシキの表側からサマゴが消滅している。

② ザシキの裏側に造り付けのトダナを設け、この上手を仏壇にしている。

③ ザシキの桁行き幅が狭くなっている（内法で一・二・五尺）。

なお、大黒柱は裏側の表面がかなり風化し、「逃げあり」の状態で見えていることなどから、後に取り替えているものと判断した。



設楽茂雄家（上細井町）  
正面の屋根を切り上げたのは後の改造によるものである。昭和41年トタンをかぶせる。

㊤ おくり（コザ）の表側に土壁を残している。

㊦ ザシキと土間（ダイドコ）境を解放（建具を入れない）にしていること。

㊧ ザシキの桁行き幅を一・二・三尺と、比較的広く取っている。これに対し新しい建築的特徴を挙げると、次のようである。

- ㊨ 土間内の上屋柱をほとんど総て省略している。
- ㊩ ザシキ表は、中央部に柱をたてているだけで、サマゴを残していない。
- ㊪ オクリとヘヤの境は半分を解放し、建具を入れている。
- ㊫ 大黒柱・下大黒柱ともカンナ仕上げにしている。

なお、当遺構は建造に関する記録を一切伝えていない。しかし、江戸時代は代々名主の役を務めた旧家であるという。そこで復元した遺構に見る各種の建築的特徴及び、名主役という階層差等を考慮に入れて建造年代を推定すれば、およそ一八世紀中頃に建造した遺構と見ておけばよいものと考ええる。

最後に当家の正月家例を述べておくと、当家は昔から正月三日に家中でソバを食べ、正月神にもソバをお供えする習わしであるという。しかし、いつの頃からかわからないが、暮れの二八日にはモチを搗くことになっているという。そして正月三日間の炊事は、戸主（男性）

がやる習わしになっているという。なお、昭和二一年までダイドコがウマヤで馬を飼っていたと伝えている。



鈴木清家（上細井町）  
昭和59年10月21日取り壊す。

鈴木清家（写真—15・図—3）  
当遺構は桁行き八間半、梁間四間の規模である。復元した当遺構の特徴をつぶさに観察すると、当遺構は多くの点で前述の設楽茂雄家の特徴と類似していた。しかし、次の諸点において若干異なっていた。

㊬ オクリ（コザ）の表側は中間に柱をたて、三本溝の開口部になっている。

㊭ エンガワを設けている（これは最初の例である）。

㊮ トコ・ワキドコを備えている。

㊯ ザシキの裏側に造り付けのトダナを設け、その上手を仏壇にしている。

㊰ 下大黒柱はチョウナ仕上げにしている。

当遺構は屋根の前面中央部を切り上げていた。しか



建造当初にあった桁（右側の木口の見えるもの）を切断し、そのすぐ上（左側）に新しい桁材を入れてキリアゲニケエを造り出しているのので、後の改造によく判る例である。（鈴木清家）。

しこれは、後の改造によるものであった。その様子は写真―16を見れば明らかであろう。残念ながら当遺構は、昭和五九年十月に取り壊してしまい現存しない。筆者は取り壊しの時に、棟札のような建造年代を示す物件の出現を期待して立ち合った。しかし、建造年代を示す物件は、一切発見できなかった。

そこで、復元した建築の示す各種特徴等から建造年代を推定すると当遺構は、およそ一八世紀中期頃に建造した遺構であろうと見ておけば妥当であろうと考える。

#### 太田林平家(写真―17・図―3)



太田林平家(荻窪町)

当遺構は桁行き八間半、梁間四間の規模である。復元した建築の各種特徴を比較してみると、前述の鈴木清家と大変よく似ている。その中で鈴木清家になかった特に新しい点を上げてみると次のようである。

① 大黒柱の逃げがある(これは三間取り遺構では初めてである)。

② ザシキの内法桁行き幅が一・二・一〇尺と狭くなっている。

③ ダイドコの表側上手に初めて

イトヒキバを設けた。  
④ イトヒキバの表側に初めてイトザマと呼称する連子窓を設けた。

伝承によれば当家は、林平氏の四代前の銀兵衛(天保六年二月没)の代に火災に遭ったため、立て替えたのが当遺構であるという。また、

当屋敷の西北の隅部には、大変立派な一間社流れ造りの祠に氏神様秋葉宮をまつっている。この祠は文化九年(二八一二)の棟札を残しており、建築の様式から見ても棟札の通り文化九年に建造したものと見て妥当である。従って当遺構(主家)と、この祠と同じ頃に竣工したものと見てよいものと推察する。

なお、当家の伝承によれば、大先祖は金右衛門と称し、上泉伊勢守に仕え四百石をいただいた高級の武士であったという。そこで当家に残されている初代の位牌を拝見させていただいた。それによれば初代金右衛門の戒名は「全功院参□本心居士」とあり、元禄三年二月に没している。また、彼の妻の戒名は「明照院玉心栄珠大姉」とあり、元禄七年七月に没している。この位牌より推察すれば、江戸時代の初期の頃に夫婦そろって院号付きの戒名を戴いていることなどから、前述の伝承はある程度の真実を物語っているものとみてよいものである。

最後に、当家の正月家例について報告すると、正月三カ日は古くからソバを食べ正月神にもソバを進げる習わしであるという。

#### 信沢福司家(写真―18・図―3)

当遺構は桁行き七間半、梁間三間四尺五寸程の規模である。建造当初に復元した間取りを見ると、コザとナンド境の間仕切りの上手半分を土壁にし、コザの上手にトコ・ワキドコを設け、コザとザシキの表側は中央に柱をたて三本溝の開口部になっている。また、大黒柱はカンナ仕上げとし逃げも有しているなど、前述の太田林平家の遺構と多くの点で類似した特徴を示している。しかし反面、それ以前にはなかった新しい特徴も示しているので、それらを掲げると次のようである。

① これまで述べてきた遺構はどれも皆、大黒柱を棟通りの真下に据えている。しかし当遺構は、大黒柱を棟通りから外して据えてい



信沢福司家（上細井町）  
建造当初より「キリアゲニケエ（赤城型）」  
とした最初の遺構である。

る。これは初めて見る新しい特徴である。

- ㊦ 前面の屋根を見ると、トボグチの上手に当たるところを桁行き幅一間半に渡って上屋根まで切り上げ、ここから初めて屋根裏へ採光することを試みており、最初の「キリアゲニケエ（赤城型）」の遺構である。

当家においては、当遺構の建造年代については、当遺構の建造年代についての伝承等を何も伝えていなかった。そこで復元した建築に見る各種の特徴等から、建造年代を推定すると、前述の太田林平家より少し後れて竣工したものの、およそ一九世紀初期頃に建造した遺構とみて妥当であろうと推察する。

齋藤恵佐雄家（写真—19・図—3）

当遺構は桁行き八間二尺、梁間四間の規模である。当遺構の示すこれまでに見受けなかった新しい特徴は、主に次のようである。

- ㊦ ナンドとコザ境の上手に残っていた土壁も取り除き、ナンドとコザ境の二間に建具四枚をはめていること。  
㊧ ザシキの表側に初めて三本溝の差し鴨居を採用していること。  
㊨ ザシキの内法桁行き幅を一二・〇〇尺にしていること。

しかし、遺構の建造に関する伝承は、全く何も伝えていなかった。そこで、建造当初に復元した遺構に見る各種の建築的特徴を手がかりとして、また名主をしていたと言う階層差を考慮に入れて、建造年代



齊藤恵佐雄家（竜蔵寺町）  
屋根前面の「キリアゲニケエ」は当初なし。

を推定すると、およそ一九世紀中期に竣工した遺構と見ておけば妥当であろうと推察する。

ここで、当主恵佐雄氏に聞いた各室の使い方について、述べておくと次のようである。

ガイドコロでは主に、稲や麦の脱穀・粃摺り・藁仕事等をおこなった。また、オコンマヤには奥の方に味噌樽・醤油樽・漬物樽等を置き手前の方には、米俵や麦俵等を積んで置いた。ザシキにおいては裏側に造り付けのトダナを二つ設け、この上手のトダナで上段の上手側を仏壇にしていた。また、このトダナの前面上部にはザシキの桁行き幅いっぱい奥行き一尺程の板を渡し、この上に各種の神様を祀っていた。

トダナから六尺程離れた表側にはイロリを設け、この回りで家族の団らんが行われた。また、近隣の軽い来客があった場合等は、ザシキに上げイロリの縁に座らせ、ここで談笑した。しかしザシキは、色々な作業をおこなったり、仕事を行う場所でもあった。例えば養蚕が始まれば主にザシキ・ガイドコロ・コザを活用した。また、稲や麦の収穫時になると主にザシキやガイドコロに穂の付いた稲や麦を取り込んだ。そして脱穀をガイドコロで行い、粃は一時ザシキに山積みして置いた。この山積みした粃は、庭先に広げた筵の上に広げて天日乾燥し、再びザシキに山積みして置き、粃摺りの作業に移るのである。

粃摺りの作業はガイドコロで行い、出来上がった玄米はザシキの板

の間上に山積みした。そして最後に、ダイドコロで玄米を俵に詰める作業を行うのである。以上の様にダイドコロとザシキは、作業上非常に関連深い空間であった。こうした理由から当初ザシキとダイドコロの境には、建具を入れていなかったのである。

オクリノヘヤは、昔コザとも呼称したと言うから、コザに対する新しい呼び名であろう。この室は上手にトコを備えていること及び、畳を敷き詰めていたのは、この室だけであったことからも判るよう  
に、この室は最も上等な室として位置付けられ、村の寄り合いを始め冠婚葬祭時の主室として使用した。

例えば結婚式の時は、嫁や一元客等をエンガワから直接オクノヘヤへ通し、婿側と嫁側の一元客は初めてこの室で対し、結婚の儀式を取り行うのである。なお、この室は上等な来客の客室（寢室）にも当てられるということである。

オサンベヤは、当地の伝統的呼び名によれば、ナンドあるいはヘヤと呼称する室である。しかし、当遺構の場合は、ナンドあるいはヘヤの一機能を端的に表す言葉として大変興味深い呼称としている。当主の話によればオサンベヤは戸主夫婦の寢室である。しかし、大正二〜四年頃までは、床を竹スノコにしていたという。そして、子供を産む時はこの室に籠もって産み、最初に産湯に入れるのもこの室とされていたという。また、死人が出るとこの室へ連れて来て湯灌をし、最後に死人を安置する室が、オクノヘヤ（コザ）であるという。

この様な伝承から推察すれば、当地方で一般にナンドあるいはヘヤ等と呼称する室は、まず当主の寢室であり、人がこの世に産まれ出た時と、この世から去る時の大事な儀式を取り行う室である。そしてコザは、最も上等な客室として位置付けられ、家人が使用できるのは死後の出棺までの間だけであった。

なお、当遺構はエンガワも昔、竹スノコを張ったものであったという。現在は遺構の前方に新しい主家を造り、そちらで生活している。従って遺構は現在空き家となっているため、残念ながらあまり遠くない将来に取り壊される運命にある。

ところで当家は「ゴーシ（郷司）」という屋号を有し、江戸時代に名字帯刀を許された家柄と伝えるから、いわゆる名主役を務めた家柄であろう。また、当家の禁忌作物は、カボチャとブドウであるといひも  
しこれらを作ると病人が絶えなくなるという。

最後に、当遺構はダイドコロの裏側中央部の柱（図-3参照）に釜神様を祀り、稲穂を逆さに掛けていた。そして喉にトゲが刺さった時は、この稲穂で喉を撫でるとトゲが取れるのだと伝えていた。

#### 須田繁家(写真-20・図-3)

当遺構は桁行き八間半、梁間四間半の規模である。建造当初の時から前面の屋根を幅五間に渡って切り上げて、発達した「キリアゲニケエ」にしたものである。

当遺構の建造当初に復元した平面に見る柱間装置は、前述の斎藤家と大変よく似ている。しかし、当遺構は次のような点において、より新しい要素を示している。

- ① 前面の屋根を大変大きな桁行幅に渡って切り上げている。
- ② トボグチの上手に一間半に亘る低い格子窓を設け、この内側を「イトヒキバ」にしている。なお、この格子窓を「サ



須田繁家(嶺町) 当初から「キリアゲニケエ」としたものである。





トブグチ(右端)の上手に今も残る「サマゴ」。この窓が低いのはこの内側で糸を曳いた姿勢(座操り器の高さ)に合わせたためである。また当地方ではこの窓を「イトザマ」とも呼称する(須田繁家)

「マゴ」と称している(写真—21参照)。

② ザシキとガイドコの間には一段低い板張り床(カッテ)を張り出し、そこにイロリを設けている。

③ ザシキはガイドコとの境に、総て建具を入れている。しかし夏季は建具と共に敷居まで取り外し、板の間として使用した。

そして、当家の伝承によれば、初代の茂七(嘉永元年四月没)が分家に出た時に建造したものと云うから、嘉永元年(一八四八)以前でしかも一九世紀中期頃に建造した遺構と見ておけば妥当であろう考える。なお、当家の屋号は「クルマヤ」と称して、初代の茂七から昭和一〇年まで、水車を回して穀物を搗いてやる商売をしていた。また江戸時代には、名主役も務めた家柄であるという。そして高貴な御方が来た時に接待する場所として、コザのさらに上手に別棟のデエを設置していたものという。このデエも屋根を草葺きとし、六畳と八畳を設け八畳の間にはトコ・ワキドコを備えていたという。

最後に、当家の正月家例について記しておく、正月の三カ日はソバを食べ、正月神様にもソバをお供えたものという。しかし、四日になるとゾーニを食べ(暮れの三〇日に餅を搗く)、五日になって始めて飯を食べる。そして七日には「ナナクサガユ」と称して、元日から

六日まで正月神様に進げたものを総てナベに入れ、いわゆる七草とごちや煮して七草粥をつくって食べるのだという。なお、当家では昭和四五年頃まで養蚕を行った。しかし、それ以後は全く行っていないという。

山田秋一家(写真—22・図—3)



山田秋一家(小坂子町)  
前面の「キリアゲニケエ」は建造当初からのものである。

当遺構は桁行き九間、梁間四間二尺五寸の規模である。当遺構は建造当初から全面の屋根を、幅二間に渡って切り上げている。各室境の柱間装置を見ると、前述の須田繁家と全く同様であると言つてよいほど類似している。

詳細な調査の結果によれば当遺構の場合、ザシキの上部は大黒柱より裏面を吹き抜けにしていた。これは、その下部にあるイロリから出る煙を、うまく上方へ導くためのものであった。従つて、養蚕のために二階を使用できたのは、大黒柱から表側のザシキ上部及び(大黒柱と下大黒柱に挟まれたガイドコ)の上部だけであった。また、当遺構もガイドコの表側上手の部分にイトヒキバを設け、その前面に低い連子格子の入った「サマゴ」と呼称する幅一間の窓を付けていた。

家人の話によれば当遺構は、嘉永元年(一八四八)生まれの孫七先祖の親が建造したものと伝えることから、一九世紀中期頃に竣工した遺構と見ておけば妥当であろうと推察する。



関丑之助家(亀泉町)

「キリアゲニケエ」は当初からのものである。

当遺構は桁行き九間、梁間四間の規模である。各室境の柱間装置を見ると、コザとナンド境は中央に柱をたて建具で仕切り、コザの表側も中央に柱をたて上手・下手とも三本溝の敷居・鴨居にしている。ザシキの表側は、三本溝の差し鴨居を用いて中央部にたつ柱を除去している。以上の個所の柱間装置は、前述の斎藤家・須田家・山田家にも共通するところである。

また、当遺構はトブグチの上手に幅二間に及ぶ幅広いイトザマ(背の低い格子窓)を設け、この内側をイトヒキバにしていた。そして丁度この上部の屋根を上屋根まで切り上げて、「キリアゲニケエ」にしているのである。

当家の伝承によれば当遺構は、嘉永二年生まれの先祖清太郎(明治三六年没)が建造したものと云うものの、具体的な建造年は不明であるという。しかし、この伝承を参考にして復元した遺構の示す各種の特徴等から推察すれば、当遺構は明治の初年頃即ち、一九世紀末期頃の建造と見ておけば妥当であろう考える。

### (五) 不整形田字間取りの民家

1 はじめに

この形式の民家は、床上の四室を田字の形に配置しているものの、

表側二室と裏側二室の奥行きを比較した場合、裏側二室の奥行きが表側二室の奥行きより狭くなっている農家遺構をいう。

第二次調査を実施した三九棟の農家遺構のうち、この形式に属す遺構は九棟であり約二三・一%を占め、前述の三間取り民家に次いで多かった。これら九棟の農家遺構の示す復元平面図・復元断面図は図―7に示す通りである。

次にこれらの遺構の一つ一つについて、建造年代の古い順に建築的な解説を行うことにする。

#### 2 調査遺構の建築解説

##### 渋川広吉家(写真―25・図―7)



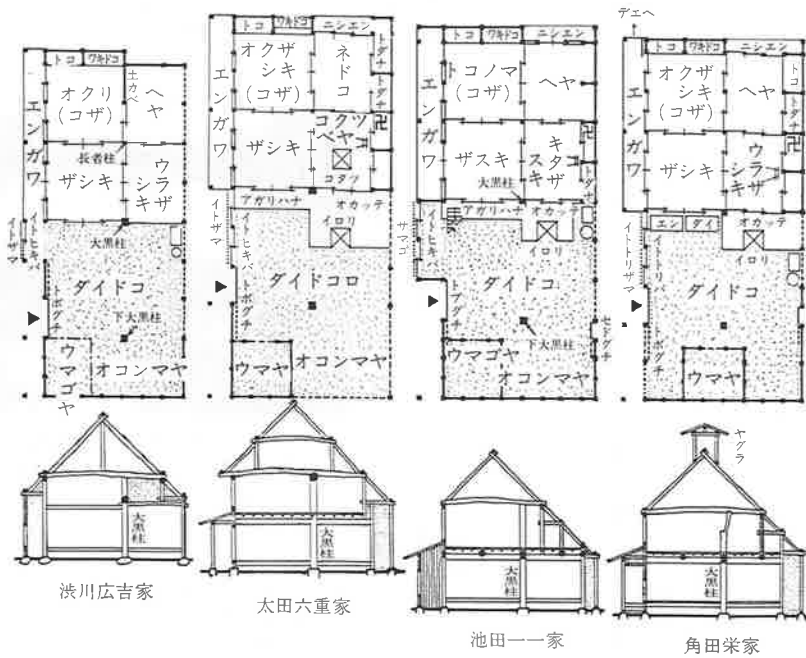
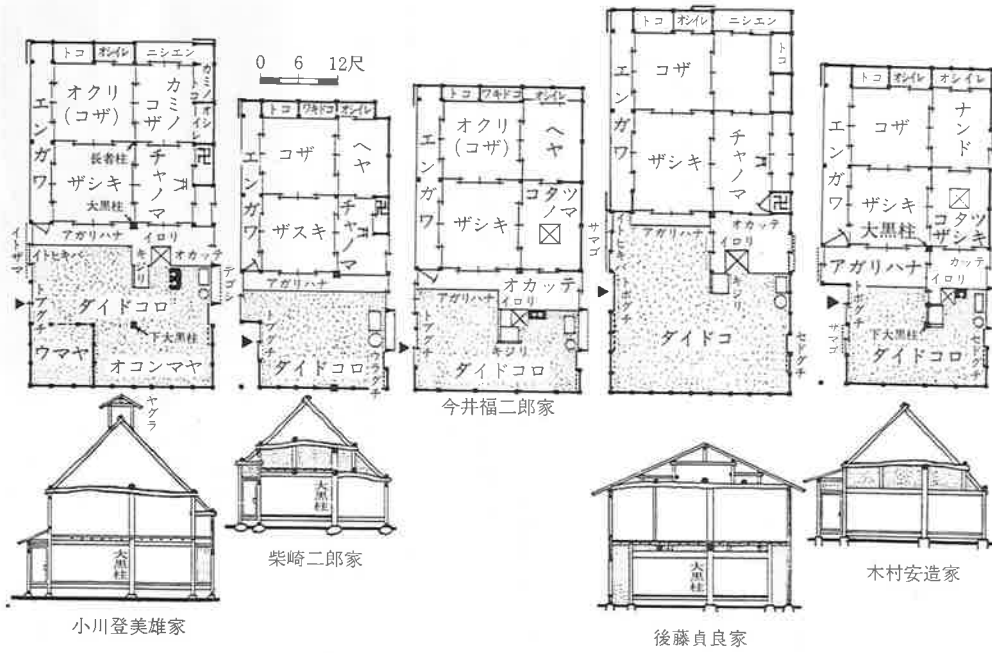
渋川広吉家(竜蔵寺町)  
左側の古い建物に接して新しい2階屋を増設している。

当遺構は桁行き八間半、梁間四間の規模である。当遺構は、桁行きのほぼ中央で床上と土間に区分し、土間をダイドコと呼称する。土間の下手表側に「ウマゴヤ」を配し、この裏側を「オコンマヤ」と呼ぶ。

そして、ダイドコの表側上手にはイトヒキバを設け、その表側に採光のためのイトザマを開けている。大黒柱は、カンナ仕上げとしているものの逃げを有

していないので、柱の角を欠いて畳を入れており古風である(写真―25)。

また、当遺構は現在前面の屋根を幅広く切り上げている。しかし、詳細に調査を進めると、後の改造によるものであることが判明した。



(図7) 不整形田字間取りの民家(復元平面図・復元断面図)



この大黒柱は「逃げなし」の状態  
で据えてあるので、柱の角を欠いて畳を入れている  
(渋川広吉家)。

にして、オクリの表側も中央部に柱をたてこの上手下手共三本溝にし  
ているなど、柱間装置に比較的古い特徴を残している。

当家の伝承によれば、当遺構は弘化二年(一八四五)に没した五代  
前の先祖金吾が、近くの本家渋川義一家から分家した時に建造したも  
のと言う。従って当遺構は、およそ一九世紀初期頃に建造したもの  
と見ておけば妥当であろうと推察する。なお、当遺構は不整形田字間取  
りの民家の中で、最も古いものであった。

太田六重家(写真126・図17)

当遺構は桁行き十間、梁間四間半の規模である。当遺構では前面の  
屋根の中央部を建造当初から上屋根<sup>じょうやげた</sup>まで切り取り、ここに窓を設けて  
屋根裏へ採光する方式をとっている。そして、これを「キリオトシニ  
ケエ」と呼称し、またこの様に屋根を切り取った部分を「キリオトシ」  
と呼んでいるということである。即ち、これまでこれと同様な屋根形  
式を「キリアゲニケエ」と呼称し、またその部分を「キリアゲ」と称  
してきたが、これと全く正反対の呼称もあるという事例を記しておか  
ねばならない事態となったわけである。なお、キリアゲ部分をキリオ  
トシといい、そのような採光方式をキリオトシニケエと呼称する例は、  
前述の渋川広吉家でも確認できたところである。

従って当遺構は  
建造当初、二階  
の使用を考えて  
いなかったもの  
と推察する。ま  
た、当遺構はオ  
クリとヘヤ境の  
上半分を土壁



太田六重家(荻窪町)  
当家では写真に見るような屋根形式を  
「キリオトシニケエ」と呼んでいる。

ここで当主の子供の頃、各室  
をどの様に使っていたか聞き取  
りしたのでその結果を記してお  
こう。

ネドコⅡ両親と五人の兄弟が  
寝た。

コタツベヤⅡ祖父父母が寝た。

家族の居間として使用した。

オクザシキ(コザ)Ⅱ上等な客  
人が寝た。また、村人の寄

り合いや冠婚葬祭の時は、  
ザシキとの境の建具を取り

払いその主室として使用した。その他、政治座談会・浪花節・ゴ  
ゼ・漫才師等が来て歌や芸などを催す時に、その主室として使用  
し、人々はザシキから見物した。養蚕の時はコバガイをこの室で  
行った。

ザシキⅡ比較的軽い客人が寝た。人の寄り合いや冠婚葬祭の時はオ  
クザシキに付随した室として、オクザシキと共に使用した。蚕が  
大きくなると、ザシキと養蚕空間として使用した。

オカツテⅡ家族が食事をした。イロリで煮炊きをした。近隣の軽い  
来客があつた場合、イロリにあたりながら談笑した。

イトヒキバⅡここにシチリンを据え、その上に鍋を掛けて繭を煮な  
がら、シチリンの右側に据えた座繰り器の取った手を回して生糸  
を採取した。

オコンマヤⅡ奥の方に味噌樽・醤油樽・漬物樽等を置き、手前の方  
には米俵・麦俵等を山積みしておいた。



池田一家（嶺町）

二階の採光用窓部分を「キリオトシ」とい  
い、建造当初から設けたものである。

く納め、新しい民家の特徴を示している。平面的な特徴は、前述の太田六重家と大変よく似ている。そしてトブグチの上手では、土間を幅二間に亘って下屋まで張りだし、そこをイトヒキバにしている。

当遺構は、三代前の先祖で文政九年（一八二六）生まれの藤吉（明治一三年没）が分家する際に建造したものと伝えられていることから推察して、およそ一九

養蚕Ⅱコバガイの時はオクザシキを使った。しかし、蚕が大きくなると使える室は総て使い、上二階<sup>うにかい</sup>まで使用した。なお、一般の二階部分をウワニカイ（上二階）といい、ウマヤとオコンマヤの上部を特にシタニカイ（下二階）と呼称して、この部分だけ一段低くなっており、蚕や農作業の手伝い人はここに寝たという。

当遺構の旧所有者は吉沢重平という人で、その人から明治四一年四月に二百五〇円で買い取って住むようになったのが当主の親であるという。従って、当遺構の建造年代は、伝承されていなかった。そこで復元した建築に見る各種の特徴等から建造年代を推定すれば、およそ一九世紀中頃に竣工した遺構と見ておけば妥当であろうと考える。

池田一家（写真―27・図―7）

当遺構は桁行き九間二尺、梁間約四間半の規模である。当遺構は建造当初から、前面の屋根を幅三間に亘って切り取り「キリオトシニケ工」と呼んで、ここから屋根裏へ採光している。そして軒も比較的高

世紀中期頃に竣工した遺構と見ておけば間違いないであろう。なお、ウマゴヤでは昭和二〇年まで、馬を飼っていたという。

角田栄家（写真―28・図―7）



角田栄家（端氣町）



エンダイを並べて「アガリハナ」として  
いる（角田栄家）。

当遺構は桁行き九間、梁間四間半の規模である。当遺構に見る各室境の柱間装置は、前述の池田家とほぼ類似している。しかし、ザシキの表側では、初めて二本溝の差し鴨居を使用しているなど、新しい手法も見受けることができる。

当遺構で面白いのは、ザシキの下手のダイドコ部分に縁台を並べてアガリハナとしていることである（写真―29）。一般に民家の土間は「ダイドコ」あるいは「ダイドコ」と呼称している。その名称の由来を、ここに見出すことができた思いがする。

民家の土間の役割は、これまでも述べてきたように、穀物の脱穀・糶摺り・養蚕・糞仕事等の農作業に当てられたため、できるだけ広大な空間を必要とした。しかし、右のような農作業を行わない時期は、建



主屋の左手に見える小さな建物が「デエ」であり、当初は草葺きの屋根であった（角田栄家）。

接待及び宿泊室に使用した。なお、デエも屋根は当初草葺きであったという。

当遺構（主家）の建造年代については、三代前の嘉永三年（一八五〇）生まれの先祖由造が、数え年二五歳の時に竣工したものと云うから、明治七年（一八七四）の建造ということになる。なお、昭和五年頃までエンガワは、外縁側（濡れ縁）であった。また、屋根にトタンを被せ

坪の半分を占める広大な空間が、遊んでいることになる。そこで農作業を行う時期になると、片付けることができる移動用のエンダイを並べて、アガリハナあるいは日常の軽い来客時の接待場所とした。

造り付けの「アガリハナ」あるいは張り出し縁は、この移動用のエンダイが発展し、固定したものと筆者は考える。民家の土間を「ダイドコロ」あるいは「ダイドコロ」と呼ぶようになったのは、この造り付けのアガリハナあるいは張り出し縁の出現以前のことと考えられ、移動用のエンダイを置く所という意味から発生したものと推察するのである。即ち、その沿革を次の様に考えるのである。

①エンダイをおくところ→②（エン）ダイ（オキ）トコロ→③ダイトコロ→④ダイドコロ→⑤ダイドコロ

当家では当遺構の上手に、当遺構と棟を直交する形で、小さな建物を配置している（写真→30）。この建物は、トコノマ付きの畳敷きの室（主室）と控えの室を備えたもので「デエ」と呼称し、上等な来客の

たのは、昭和四〇年であったということである。

小川登美雄家（写真→31・図→7）



小川登美雄家（川端町）

当遺構は桁行き八間半、梁間四間半の規模である。当遺構で目立つ新しい特徴を列挙すると、次のようである。

- ① 各室境の間仕切り上部に総て差し鴨居を使用していること。
- ② トコの奥行きを初めて三尺に取っていること。
- ③ 棟の上には当初からヤグラを上げていること。
- ④ 草葺きながらも総二階造りにしていること。

⑤ トブグチの戸はオオド（大戸）でなく引き違い戸にしている。

以上の五項目は、いづれもこれまでの遺構には見受けなかった新しいものばかりである。そして当遺構は、明治二八年に竣工したものと云い伝えていることから、おおよそ明治の中頃になると、前述の五項目のような特徴を示す民家が、出現して行ったものであろうと推察する。

柴崎二郎家（写真→32・図→7）

当遺構は桁行き七間二尺五寸、梁間四間の規模である。当遺構も各室境に総て差し鴨居を用いており、土間（ダイドコロ）の面積を非常に狭小に取っているのが目立つところである。その大きな理由は、明治以降になると屋根内に自由に別棟の納屋等を建てられるようになるため、脱穀・糶摺り等の農作業を、徐々に別棟の納屋で行うようになって



今井福二郎家（竜蔵寺町）



イロリの様子（今井福二郎）



後藤貞良家（小神明町）



サマゴ（イトザマ）の様子  
地面より高さ1.5尺位の低い位置から  
窓にしているのか特徴である。



柴崎二郎家（亀泉町）

で行ったためであろう。また、これとほぼ同じ頃、ウマヤも別棟の納屋に移行して行った。従って、主家の土間内で馬を飼育することは、やはりこの頃より無くなって行くのである。

当遺構は、三代前の先祖で明治七年生まれの兵二郎が建造したものであるから、およそ二〇世紀初期頃に建造した遺構と見ておけば妥当であろう。

今井福二郎家（写真—33・図—7）  
当遺構は桁行き七間二尺、梁間四間の規模であり、前述の柴崎家と

同様に、農家としては小規模な遺構である。そして、土間の面積も柴崎家と同様に大変狭小なものになっている。

当遺構で貴重に思われたのは、現在もイロリの様子を残していたことであり、そこには自在鉤を下げ、その先端に黒光りする鉄瓶をつるしていた。そして、その隣にはなつかしいカマドもあり、やはり黒光りする大きな釜と鍋をかけていた（写真—34）。

当遺構は伝承によれば、原之郷にあつた豪農船津伝次平の家を大正七年に移築したものであるという。そして、移築した時の大工は若宮町に住んでいた阿部与作という人であつたという。なお、当遺構は現在前面中央部の屋根を突き上げ、ここから屋根裏へ採光するように考えている。しかしこの突き上げ屋根は、昭和一三年に改造して設けた後補のものであるという。

後藤貞良家（写真—35・図—7）  
当遺構は桁行き九間半、梁間四間半の規模である。当遺構は沼田に



木村安造家（荻窪町）

昭和一五年まで建造してきたという。なお、当家の正月家例は「ソバガレイ」で、正月三日の朝食にソバを食べ、正月神様にもソバを進げるのを、昔からの習わしにしているというのである。

木村安造家（写真—37・図—7）  
当遺構は桁行き八間、梁間四間の規模である。当主の話によれば当遺構は、昭和一五年一月一五日に上棟したのだという。従って、不整形田字間取りの民家の中で最も新しい遺構であった。また、当遺構はここに報告する三九棟の民家遺構の中でも、最も新しい遺構であった。そして、当地において草葺きの民家は、昭和一五年まで建造してきたという

建っていた家を解体し、部材を筏に組んで利根川を流し、田口で引き上げて大正八年に再び現在の地に組上げたものというから、移築した遺構ということになる。屋根は、移築当初から瓦葺きである。

当遺構もトボグチの上手を「イトヒキバ」にしており、その前面には現在でもそのための採光窓であった「サマゴ」を残している。このサマゴは当地方の場合、「イトザマ」あるいは「イトトリザマ」とも呼称し、糸曳きの姿勢（座繰り器の高さ）に合わせて大変低い位置に窓を設けるのを特徴とする（写真—36）。

当家は昭和五二年に主家を新築し、そちらへ移り住んでから現在まで、当遺構を空き家にして置いている。従って、当遺構の寿命もそう長くはないであろう。棟の上には、養蚕の隆盛期を偲ばせるソーヤグラが見捨てられた現状を訴めるごとく、波打って歪んで残っていた。

木村正一家（写真—38・図—8）  
当遺構は桁行き九間余り、梁間四間半の規模である。土間は大変広く、桁行きのうち五間までを占めている。そして、トボグチの上手二間をイトヒキバとし、ここへの採光のため長さ二間に亘って低い格子窓であるイトザマを設けている。そして当遺構のイトザマは、格子の内側に明かり障子を残し、往時の様子をよく今日に伝えている（写真—39）。

貴重な証拠を提供してくれた大切な遺構でもあった。

当遺構の柱間寸法を見ると、一間を六・二二尺（セツク）に取っている。従って、昭和一五年になっても家作りの寸法は、セツク六尺（関東間）になっただけでなかったことを示すものであり、ここに改めて民家の伝統的な建造手法に驚かされるのである。

## （六）喰い違い四間取りの民家

### 1 はじめに

調査した農家遺構三九棟の中で、この形式に属するものは四棟（約一〇・三〇％）であった。これらの遺構の復元平面図及び復元断面図は図—8に掲げた通りである。次にこれら四棟について、主に建築的な解説を行うことにする。

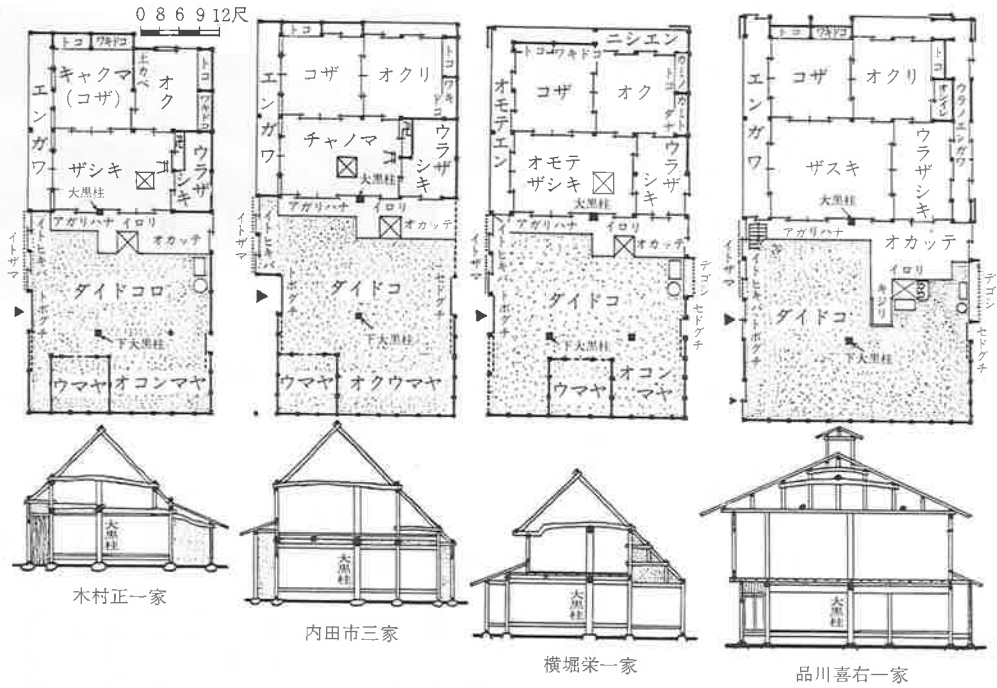
### 2 調査遺構の建築解説

#### 木村正一家（写真—38・図—8）

当遺構は桁行き九間余り、梁間四間半の規模である。土間は大変広く、桁行きのうち五間までを占めている。そして、トボグチの上手二間をイトヒキバとし、ここへの採光のため長さ二間に亘って低い格子窓であるイトザマを設けている。そして当遺構のイトザマは、格子の内側に明かり障子を残し、往時の様子をよく今日に伝えている（写真—39）。

当遺構の平面（間取り）を見ると、キヤクマ（コザ）とオク境の間仕切りの上手半分を土壁にし、キヤクマの表側は中央に柱を建て、その上手・下手共三本溝とし、ガシキ裏に設けたウラガシキを、奥行き一間の最小空間にしている等、古風な特徴を示している。この様な建築的特徴から推察すれば、当遺構の竣工年代は一九世紀初期頃まで遡であろう。





〔図-8〕喰い違い四間取りの民家(復元平面図・復元断面図)

内田市三家(写真140・図18)  
 当遺構は桁行き九間五尺、梁間四間五尺の規模である。土間は桁行きの下手五間半を占めているので、建坪の半分以上を土間で占めていることになる。屋根裏への採光は、現在幅五間に亘って前面の屋根を切り上げ、ここより行っている。しかし当初は、中央部を二間程切り上げていただけであった。

ところどころで当家の伝承によれば、明治八年生まれの先祖小金次が数え年一二歳の時、富士見村の原之郷にあった斎藤という家を移築したものとという。従って、結論的にいえば当遺構は、当初一九世紀初期頃に竣工した家を、明治一九年に現在の地にほぼ建造当初の姿のまま、移築したものとして見て良いであろうと推察する。

なお、当家の正月家例はソバ家例であり、正月三カ日の朝はソバを食べ、正月神様にもソバをお供えする習わしであるという。しかし最近、暮れの三〇日に餅をついているということである。



木村正一家(日輪寺町)



往時の様子をよく残しているイトザマ(木村正一家)



内田市三家（上細井）

現在は正面の屋根を幅5間に亘って切り上げています。しかし建造当初は、中央部の3間だけを切り上げていた。

当遺構は、珍しく調査時点においても、屋根を草葺きのままにしていた。この屋根は、現在八〇歳近い高齢の細野寅雄氏（前橋市上大島町三六六在住）の葺き上げたものという。屋根屋が高齢なので今後、草葺きで葺き替えることができないので、困っているということであった。当家の伝承によれば当遺構の前身主家

は、昔火災に遭い全焼してしまった。そしてその後ただちに建造したのが、当遺構であるということである。しかし、火災のあった年代及び当遺構の建造年代は、全く不明であるという。そこで、復元した遺構の示す各種の建築的特徴より推察すれば、当遺構の建造年代はおよそ一九世紀中頃と見ておけば妥当であろうと考える。

最後に、当家の正月家例について記しておく。正月三日の朝はソバを食べ、正月神様にもソバをお供えする習わしであるという。しかし、夜は飯をたべるとのことである。そして面白いのは、正月三日カ日の間は柳の枝から即席に作った箸を用いて、食事をとる習わしであるということである。

横堀栄一家（写真—41・図—8）

当遺構は桁行き九間半、梁間四間五尺の規模である。そして、桁行き九間半のうち、下手の五間までを土間（ダイドコ）にしているの



横堀栄一家（小坂子町）



現在でもイロリを活用していた。（横堀栄一家）。

建坪の半数以上を土間にしているわけである。

当遺構に見受ける新しい建築的特徴は、表側のエンガワを西側まで回していること、及びウマヤの位置をダイドコの表側から中程に後退していることである。ウマヤをこのように裏側にずらせば、その前面にできた空間は表側からの採光が可能になり、作業空間として活用できるわけである。従って、ウマヤを裏側に寄りにずらした目的は、ウマヤの前面に明るい作業空間を設けるためであったと推察できるのである。また当遺構は、屋根の前面を桁行き二間に亘って切り上げ、ここから屋根裏へ採光して屋根裏に養蚕空間を確保している。そして当家では、このような造りを「キリアゲニケエ」と呼称している。こうして屋根利用が可能になったダイドコ上部の天井は、直径三〇四センチの丸竹を並べたもので「スガキテンジョウ」と呼んでいた。

当遺構の建造についての伝承は、明治二二年生まれの先祖虎平が数え年五歳の時移築したものというから、明治二六年に移築した遺構と

見ておけばよいであろう。

なお、当家では現在でもなつかしいイロリを活用していたので、写真42にその様子を掲げておいた。

品川喜右一家(写真43・図18)



品川喜右一家(川端町)

当遺構の規模は桁行き十間、梁間五間四尺であるから、喰い違い四間取り民家としては、最大級の遺構である。そして当遺構は、随所に養蚕の影響を示している。例えばそれらを列挙すると次の様である。

- ① 総二階造りとしているばかりでなく、二階の前面を「ダシバリツクリ」にしていること。
- ② 棟上に「ソーヤグラ」を上げていること。

③ 広大な土間(ダイドコ)にはウマヤを設けず、トボグチ・セドグチ以外にもう一つの出入り口を設けていること。

- ④ 裏側にも縁側を回していること。

以上の事柄は、いずれも大規模な養蚕を行うために必要な設備であった。そして、一年に三回の掃き立てを行い、この家で五〇〇貫の繭を収穫したという。また、当遺構は日輪寺の田子光一郎家の先祖角太郎大工が建造し、明治三九年に竣工したものと伝え、当時一回の蚕で当遺構の建築費を賄えたということである。

なお、竣工した当時は「イタヤ」であり、五、六年経てから現在のように瓦葺きに改めたものという。また、庭先にある土蔵は、昭和五

年に千円の建築費で完成したものであるという。

最後に、当家の正月家例を記しておく。暮れの二八日に餅を揚ぐものの、正月三カ日はソバを食べ、正月神様にもソバを進ぜる習わしであるという。

### (七) 整形田字間取りの民家

- 1 はじめに

この形式は、床上の四つの室をバランスよく同じ大きさに整えたもので、平面的には四間取り民家の完成した形式とみてよいであろう。

調査した農家遺構三九棟のうち、整形田字間取りの民家に属す遺構は、三棟(約七・七%)だけであった。これら三棟の示す建造当初の平面図(間取り)及び断面図は、図19に示した通りである。次にこれら三棟に関する建築的解説を、建造年代の古い順に行うことにする。

- 2 調査遺構の建築解説

角田利良家(写真44・

図19)

当遺構の規模は桁行き九間一尺余り、梁間四間である。このうち桁行きの下手五間までを、土間としダイドコと称している。

当遺構に見受ける建築的に目立つ特徴を挙げる。次のようである。

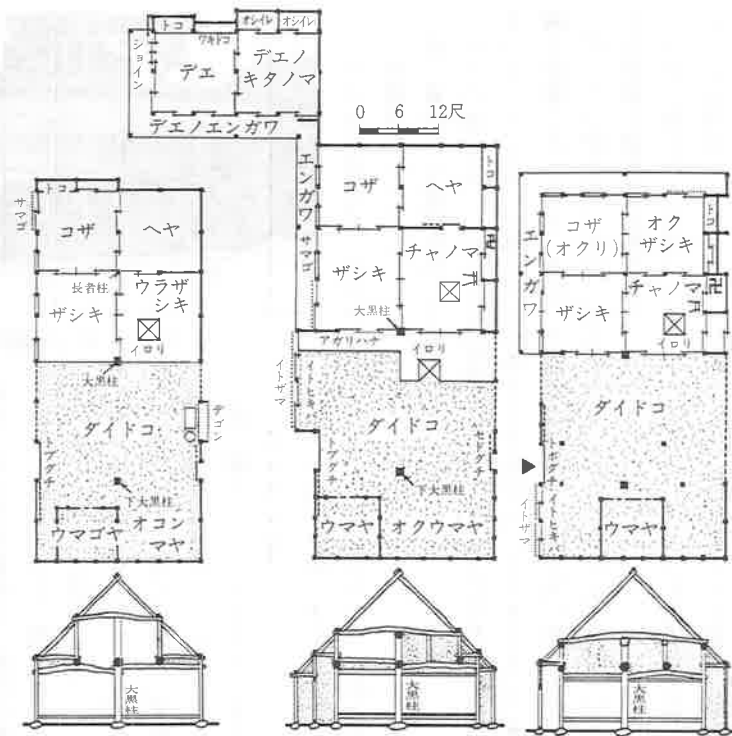
- ① 大黒柱はカンナ仕



角田利良家(下細井町)

屋根の中央部の「オシアゲヤネ」は昭和27年頃まで草葺きであったという。しかし、このオシアゲヤネも建造当初には無かったものである。

- ㊦ 上げとしているのが「逃げなし」の状態で据えている。
- ㊧ 下大黒柱はチョウナ仕上げとしている。
- ㊨ ザシキ・ウラザシキ共ダイドコとの境に建具を入れず、解放状態にしていた。
- ㊩ ザシキの表側中央部に柱をたてている。
- ㊪ コザの表側は中央部に柱をたて、その上手をサマゴにしていた。
- ㊫ 屋根前面の「オシアゲヤケ」は後補のものである。



角田利良家 長谷川隆治家 加々美清家  
 [図-9] 整形田字間取りの民家(復元平面図・復元断面図)



長谷川隆治家(上細井町)  
 当家ではこのような造りを「キリオトシニケエ」と呼んでいる。しかしこれは後の改造によるものであった。



主屋(右手)の上手にある「トーデエ」  
 当初のトーデエはめずらしく往時の草葺屋根のままであった。(長谷川隆治家)

㊬ コザの内法幅が大変広く一・二・一尺もある。  
 ㊭ ザシキの内法幅も大変広く一・三・一〇尺もある。  
 当遺構は棟札・墨書及び伝承等、建造年代を示す手掛りを全く残していなかった。そこで主に、以上のような建築的特徴を基にして建造年代を推察すると、およそ一八世紀中期頃に竣工した遺構とみておけば妥当であろうと考える。

なお、当家の禁忌作物はキューリであり、もし禁を破って作ると家族が死ぬといういわれがあったので、祖父の代までは作らなかったという。

長谷川隆治家(写真-45・図-9)  
 当遺構は桁行き十間、梁間四間五尺の規模である。そして、主家の上手前方へL字型に曲げて「トーデエ」を設け、「トーデエツクリ」と呼んでいる(写真-46)。

主家は現在正面の屋根を幅三間にわたって切り取り、ここから屋根

裏へ採光しており、これを当家の場合「キリオトシ」あるいは「キリオトシケエ」と呼んでいる。しかしこれは、建造当初からのものでなく、後の改造によるものである。

柱間の寸法等から考察すれば、主家とトーデエは同時期に建造したものと考えられる。そして、当遺構の建造年代に関係する建築的特徴を示すものを列挙してみると、次のようである。

- ① 大黒柱はカンナ仕上げとしているものの、逃げなしの状態で見えている。
- ② 下大黒柱は、下手側の一面をチョウナ仕上げとし、他の二面をカンナ仕上げとしていた。
- ③ コザの表側は、中央部に柱をたてて上手・下手とも三本溝の開講部にしていた。

④ 養蚕における屋根裏の利用を考えていなかった。  
⑤ ザシキの表側は中央部に柱をたて、その下手をサマゴにしていた。

以上のような事柄及び、天明三年の浅間山の噴火の時はずでに当遺構に住んでいたということ、及び前橋藩の総名主をしていたということなどを考慮に入れて建造年代を推定すると、当遺構は一八世紀末期頃に竣工したものとみておけば妥当であろうと推察する。

なお、トーデエは村内見回り役人及び代官等、上等な来客があった場合の接待所及び宿泊所として使用した建物である。そのためであるがデエは、トコ・チガイダナ・シヨイン等江戸時代においては、一般農民の住居に設けることのできなかつた書院造りの構えを備えている。

#### 加々美清家(写真47・図19)

当遺構は桁行き九間四尺、梁間五間の規模である。当家は当主の親



加々美清家(竜蔵寺町)

の代まで代々医者の家柄である。しかし、遺構を見ると農家の造りそのものであり、診察は主にコザで行ったということである。また実際には使用人を使つて農業も農家と同様におこなつたということであるので、農家の中に分類したわけである。当家の伝承によれば、当家の先祖は当地の渋川義一家から分家したということである。ところで、寛延二年三月、前橋藩主は酒井氏から松平氏に交替した。その際に加々美家から前橋藩役所へ提出した届書の下書きには、次のように記してある。

一、浪人 勢多郡龍蔵寺村 医師 加々美養仙  
右は親養仙義 雅楽頭方二相勤 五十年前浪人 龍蔵寺致住居候

寛延二年巳三月二日

寛延二年(一七四九)に龍蔵寺村で医師をしていた養仙は二代目であり、父親の養仙はその当時より五十年前から龍蔵寺村に居住し、仕官せずに医業を開業していたという意味である。従つて、この古文書から推察するところによれば、加々美家が渋川義一家から分家した年代は、元禄年間(一七世紀末期)頃まで遡るようである。

このように、三世紀近い間にわたつて医者を出した家であるにもかかわらず、当遺構は全く農家造りそのものであり、注目すべきことである。ところで、当遺構にみる特徴を挙げてみると次のようである。

① 柱間寸法を芯々六尺にしている(これは極めて早い例である)。

◎ 床上の各室が大変解放的になっている。

④ 桁行きの半分以上にもおよぶ農家と全く同様な広大な土間（ダイドコ）を有している。

⑤ トボグチにはオオド（大戸）を入れ、ダイドコにイトヒキバヤウマヤも設けているなど農家と変わらぬ設備も備えている。

ところで当遺構は、いつ頃建造したものであろうか。当家は多くの古文書を残しているにもかかわらず、今のところ当遺構の建造年代を示す資料を発見していない。

従って、復元した建築に見る各種の特徴等から推察すれば、当遺構の建造年代は幕末〜明治初年頃と見ておけば妥当であろうと考える。

なお、加々美の姓は前橋藩主酒井様からいただいたもので、当初は渋川の姓であったということも伝承として当家に伝えられている。

## (八) 多間取りの民家

1 はじめに

調査した農家遺構三九棟のうち、この形式に属す遺構は六棟（約一五・四％）であった。これら六棟の示す復元平面図及び復元断面図は図一10に示した通りである。以下に、これら六棟の建築的な解説を建造年代の古い順に行うことにする。

### 2 調査遺構の建築解説

#### 北爪栄吉家（写真—48・図—10）

当遺構は桁行き一二間半、梁間五間の規模である。当家の伝承によれば、当家は一七世紀の中頃に宮城村鼻毛石の北爪氏から分家し、当地に移住したものである。そして、いつの頃からか不明だが江戸時代には、名主役を務めたものである。そこで、当家の過去帳・位牌等を調べてみると、一九世紀中頃以降になると戒名に院号を付けるように



北爪栄吉家（江木町）

なること等から、恐らく一九世紀初期頃以降に名主役を務めるようになったものであると推察する。

当遺構の平面（間取り）を見ると、桁行きの下手六間までを土間としてダイドコと呼称し、その下手には表側の外壁に接してウマガヤを設け、その裏側をオコンマヤと称している。床上の空間は、梁間の中心線を前後の室の境にして、表側に三室裏側に三室を並べたものである。室名は、ダイドコに接した表側の室をザシキ

といい、その裏側をチャノマと呼ぶ。チャノマの裏側には、トダナを二つ造り付けにし上手のトダナを仏壇にし、その前面上部を神棚にしている。また、トダナの前方には、コタツも備えていることなどから、チャノマの機能は、家族の居間であつたと推察できる。

ザシキの上手はナカノマといい、その裏側をナンドと呼んでいる。ナンドの機能は、他の民家の場合と同様に家族の寝室である。

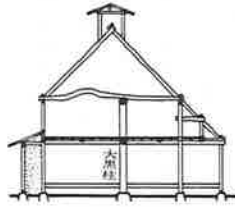
ナカノマの上手はコザと呼称し、コザの裏側の室をオクと呼んでいる。そしてオクの室は、武家住宅における書院造りの様式を取り入れて、トコ・ワキドコ・付け書院を備えている。このことから当遺構における最も上等な室は、オクの室であつたことを知ることができる。

当遺構は残念ながら、建造に関する資料及び伝承等を残していなかった。しかし、コザの上手にあるワキドコの地袋の戸裏に、このたび墨書を発見し、その最後に「可脩」の署名もあつた。そこでこの可脩なる人物を探して、位牌・過去帳等を調査した。その結果は、残念

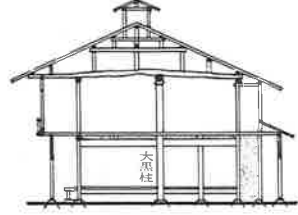
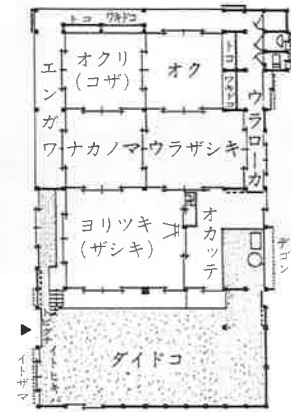
0 6 12尺



小林宏家



佐藤一三美家



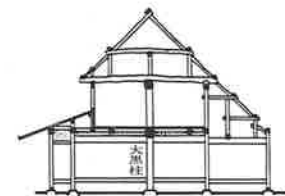
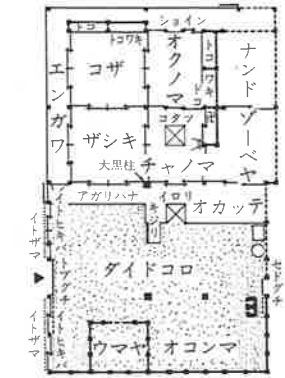
田子武男家



北爪栄吉家



高橋滋信家



小林寿明家

(図-10) 多間取りの民家(復元平面図・復元断面図)

ながら可脩なる人物を探し当てることができなかつた。しかし、可脩の妻については、次のような戒名を残していた。

木覚院真相足空大姉 北爪源之丞可脩妻 二二歳

安政六年九月一六日

この可脩の妻の位牌に記された年号から推察して、当遺構はおおよそ一九世紀中頃に竣工したものと見ておけば妥当であろうと考える。

なお、当遺構は建造当初から正面の屋根を五間にわたって切り上げており、西側と南側の二方の軒をセガイ造りにしている。

高橋滋信家(写真—49・図—10)

当遺構は桁行き一一・五間、梁間五・五間の規模である。桁行きの下手五・五間までを土間とし、ダイドコと称している。ダイドコの下手には二つのウマヤを置き、トボーグチの上手にイトヒキバも設けている。ダイドコの裏側には、チャノマ・コザシキの床より一段低い板張り床

を張り出し、オカツテと呼んでその表側寄りにイロリを設けている。

ところで、当遺構に見る床上の間取りは、喰い違い四間取り平面の上手に二室を付加したものと見るべきものである。即ち、当遺構に見るチャノマ・コザシキ・ナカノマ・ナンドの配置は、ナコノマをコザに名称変更すれば喰い違い四間取り平面の遺構そのものである。

当遺構に見るオクリとコザは両室境の建具を取り払い、村の寄り合い



高橋滋信家 (田口町)

や冠婚葬祭時の際に主要な室となるものであり、トコの他にワキドコも備えていること等から考えると、オクリがその際の主室になったものであろう。

当遺構は現在、正面の屋根を幅八間にわたって切り上げている。しかし、建造当初は現在の半分の四間を切り上げただけであった。

ところで、当遺構の建造年代については、当主の五代前の先祖富次郎の代に建造したものであるという。位牌によって富次郎の生年・没年を調べると、享和二年生まれで文久元年(一八六一)七月に没している。このことから推察すれば、当遺構はおおよそ一九世紀中頃に竣工したものと見ておけば妥当であろう。

最後に当家の正月家例について記しておく。暮れの三〇日に餅を搗くものの、元日と三日の朝はソバを食べ、二日の朝だけゾーニを食べるのだという。また正月神様には、ソバを進げる習わしであるという。

小林寿明家(写真—50・図—10)

当遺構は桁行き九間半、梁間六間の規模である。そして、桁行きの下手五間までをダイドコロとし、ダイドコロの表側は桁行きの総てにわたって低い格子窓を設け、これをイトザマと呼称し、この内側をイトヒキバにしていた。

当遺構の外観を見ると、重厚な草葺き屋根の左右に大き目の八の字破風を付け、前面の屋根軒の中央部を当初から、三間にわたって切り上げている。そして軒は、前面と左右の三方をセガイ造り(三方セガイ)にしていた。なお、棟の中央にはヤグラを上げている。しかしこのヤグラは後補のものであり、大正末頃まで切り上げ屋根の下部にある庇と共に草葺き(クズヤネ)にしていたという。

当遺構の床上空間は、桁行き方向に二室を並べ梁間方向に三室を配





小林寿明家（小坂子町）

ダイドコロの前面はすべて低い格子窓のイトザマにしている。切り上げ部の瓦葺き庇とヤグラの屋根は大正末頃まで草葺きであった。

場所であった。なお、チャノマとゾーベヤの下手には、一段低い板張り床を張り出しここをオカツと呼び、その少し表側寄りにイロリを設けている。そして家族が食事をとった場所は、もっぱらオカツであった。

ザシキの上手はコザといい、その裏側の室をオクノマと呼称している。そして、コザとオクノマの両室は共に、トコ・トコワキを設けている。また、オクノマは簡略化しているものの、三尺幅の平書院まで備えている。

従って、間取りから見ると大勢の村人の集まる寄り合い及び、冠婚葬祭等のセレモニーを行う場所として当遺構の場合は、コザとザシキを一続きにして使用する場合と、オクノマとコザを一続きにして使用する場合の二つの使用方法を考えることができる。そして、この二通りの使用方法のうち、どちらがより上等な使用方法かといえは、書院を備えているオクノマを主客室とし、コザをこれに付随した客室とし

置した六間取りの民家である。ダイドコロに接した表側の室は、ザシキと呼称してこの裏側にチャノマを配している。このチャノマには仏壇・神棚・コタツを設けている。従ってこのチャノマは、主に家族の居間に使用したものである。チャノマの裏室は、ゾーベヤといふ台所用品等を収納した

て、オクノマとコザを一続きの室にして使用する方法を、上等な続き座敷の使用方法と見ることができ、実際にもそのように使用したところである。なお、ナンドは家族の寝室に当てた室である。

ところで、当家は江戸時代に名主を務めた旧家である。仏壇に残されている位牌をひもといて見れば、元禄四年六月五日没の先祖「林興院泰岳道成居士」より以後現在に至るまで、一貫して院号付きの戒名となつている。従って、当家の先祖は江戸時代初期の頃より代々、名主を務めてきたことであろうことは容易に推察できる。

当遺構の建造年代については、近隣の古からの聞き取りによれば慶応元年に火災に遭い前身主家を燃やしてしまったので、その年内に再建したのが現存の遺構であるという。また、オクノマのフクロトダナ（袋戸棚）の戸には「乙年冬日應需臣禮寫」の墨書を残している。従って、この乙年とは慶応元年（一八六五）を指すものと見てよいものと推察し、当遺構は慶応元年に竣工したものと結論する。



小林宏家（小坂子町）

小林宏家（写真—51・図—10）

当遺構は桁行き九間半、梁間四間半の規模である。屋内を見ると桁行きの下手五間までをダイドコとし、その南側中央部にトボグチを開いている。そして、トボグチの上手・下手は総て低い格子窓のイトザマとし、その内側をイトヒキバにしていた。また、ウマヤの位置は前述の小林寿明家と同様に、イトヒキバの後ろに後退させ、その裏側をオコンマヤにしている。

床上の空間を見ると、ダイドコに接した表側の室をザシキと呼び、その裏側では八畳の室を前後の二つに仕切り、裏側をナンドといい表側をウラザシキと呼称する。ウラザシキとナンドの下手は、一段低い板張り床を張り出しオカツテと称して、ここで家族が食事をした。またオカツテには、表側寄りにイロリを設けている。

ザシキの上手はオクザシキ（コザともいう）といい、上手側に奥行き一・二尺（芯々）のトコ・ワキドコを備えている。従って、当遺構の場合は村人の寄り合いや冠婚葬祭等の際に、オクザシキを主客室とし、これに付随する客室をザシキとして、この両室を続き座敷として使用した。オクザシキの裏側の室は、ヘヤと呼称していたのでナンドと同じく家族の寝室に使用した室であったと推察する。

外観を見ると当遺構は、建造当初から正面の屋根を桁行き幅三間にわたって切り上げ、このような二階屋を「キリアゲニケエ」と称していた。また、棟の中央部には当初からヤグラをあげていた。

ところで当遺構において、建造当初に養蚕等に使用できた二階部分は、ザシキとウラザシキの上部および、その下手のダイドコ上部だけであった。この他に、下大黒柱より下手の上部は、ダイドコ上部の二階床より約三尺ほど低い位置に床を張り、ウマヤニケエと呼称していた。このウマヤニケエの床は、竹のスガキ天井（すのこ天井）にするのが普通で、主に馬の飼料（稲藁）等を収納したり、雇人の寝場所として使用した。

当家の伝承によれば、明治一七年頃に竣工した当遺構を、先祖の茂七が買い取って入居したものであるという。建造当初に復元した遺構に見る各種の建築的特徴から見ても、当遺構は伝承の通り明治一七年頃に竣工したものと見てよいであろうと推察する。

佐藤一三美家(写真—52・図—10)



佐藤一三美家（鳥取町）  
瓦葺きの庇部分およびヤグラの屋根も  
昭和23年までは茅葺きであった。

当遺構は桁行き九間半、梁間五間の規模である。当遺構の間取りを見ると、全く前述の小林宏家と類似している。強いて異なるところを挙げれば、梁間を半間増大しその分だけチャノマの奥行きを増大していることおよび、コザの裏側の室（オクリ）にトコ・ワキドコを設けていることである。

当遺構は建造当初から、前面の屋根の中央部を桁行き幅四間にわたって切り上げ、「キリアゲニケエ」と呼称している。そして、現在瓦葺きになっている切り上げ部分の庇は、昭和二三年まで茅葺きであったという。また、棟の中央部にはヤグラを上げている。このヤグラも建造当初から上げたものであり、やはり茅葺きであったようである。

当家の伝承によれば、前身主家は明治二八年二月二日に火災に遭い、全焼してしまった。その後ただちに再建工事にとりかかり、同年の五月に竣工したのが、現存の主家であるという。従って、伝承を信用してもよさそうである。

なお、当家は当主で分家後六代目になる。二代目の三代吉という人は、梨を栽培して梨屋を家業としながら、梨についての研究もし「大島梨」を開発したのもこの人であったという。

田子武男家(写真—53・図—10)

当遺構は桁行き一〇間、梁間五間四尺の規模である。屋根は切り妻



田子武男家（日輪寺町）

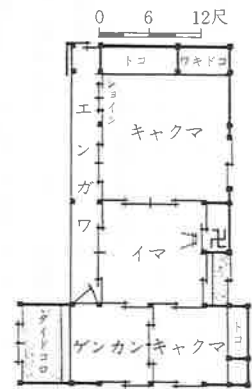
造りとし、当初から瓦葺きにしたものである。桁行きのうち下手三間までを土間とし、ダイドコと呼んでいる。従って、当遺構のダイドコ面積は、建坪の三分の一以下となっている。平面の様子を見ると、整形田字間取りの下手に一五畳のヨリツキとその裏側にオカッテを配置したと見るべきものである。

当遺構の建造年代については、三代前の先祖伊平の代の明治三十七年に、同じ町内の田子光一郎家の先祖角太郎大工が建造したものと伝えている。そして、当遺構を竣工させた後、川端町の品川喜右一家の工事に取いかかったものと伝えている。従って、右の伝承を信じてよいものと考ええる。なお、当家はこの遺構で大量の養蚕を行い、富田屋という屋号の蚕種屋を大正一〇年頃までやっていたという。

### (九) 特殊な間取りの民家

#### 1 はじめに

このたび調査した三九棟の農家遺構のうち、これまで述べてきた六形式に属さない間取りの民家が存在した。そこで、この形式を「特殊な間取りの民家」として、次に紹介することにする。この「特殊な間取りの民家」に相当する遺構は、一棟を調査しただけであり、その復元平面図は図-11のようである。



菅野茂八家

#### 2 調査遺構の建築解説

#### 菅野茂八家(写真54・図-11)

当遺構は桁行き六間半、梁間三間の規模である。当家の系譜は、江戸時代に名主役を務めた上泉の豪農である。また、当家は屋号を「くるまや」といい、水車を所有していたので、それを利用して食用油も生産していたという。

前身の主人は、草葺き(クズヤ)の大規模な構えの家であったという。この前身主家を取り壊して昭和七年に竣工したのが、現存の遺構である。大工は、上泉の斎藤伊勢五郎という



菅野茂八家（上泉町）

人であった。

当遺構の平面を見ると、土間はダイドコロの一坪半程の狭小なものとなり、現代民家に見る玄関の体裁をとっている。そして、間取りの様子を見ると家族の生活の場として計画したというよりも、二・五間×

〔図-11〕特殊な間取りの民家

二・五間という大きなキヤクマを取っていることでもわかるように、接客を重視した間取りになっている。即ち、当遺構ではすでに養蚕をこの遺構の屋内で行うことを、全く考えていない。この頃になると有力農家では、屋敷内に主家に匹敵するほどの大規模な別棟の蚕室を建て、もつぱらここで養蚕を行うようになる。従って、図-11に見るような主家も出現するようになったのであろう。

なお、当屋敷の南側中央部には、瓦葺きの立派な門を構えている。しかし、この門は主家より新しく、昭和二三年に当地の橋本及び岡村という両宮大工によって建造されたものという。

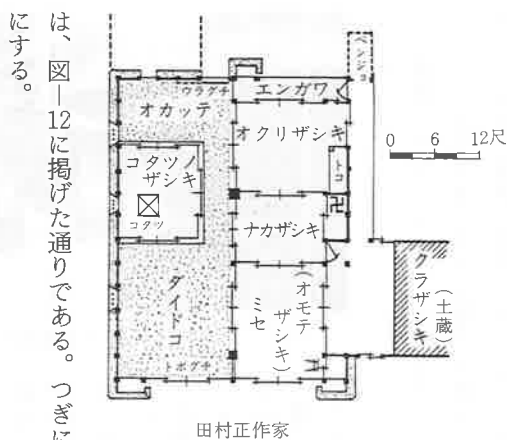
最後に、当遺構で特別注目しておかなければならないことは、昭和七年に竣工した建物であるにもかかわらず、二間の内法柱間を相変わらず一・二・〇〇尺に取っていることである。即ち、当遺構は昭和七年に建造した極めて新しい建物であるにもかかわらず、柱間を関東間でなく中京間で寸法取りしているところに、特別注目すべき重要な点があるということである。

### 三、町家造りの民家

#### (一) はじめに

一般に、物品を売る家のことを店家といい、町衆の住む家も含めて農家と区別する意味で町家と称している。

店家のことを古くはタナと称し、その発生は平安時代の初期にまで遡る。そして、古い時代の店家は家の前面に棚を突き出し、この上に品物を並べて売っていた。このような情景から、店家のことをタナと呼ぶようになったと考えられている。<sup>6)</sup>



〔図-12〕 町家造りの民家(復元平面図)

は、図-12に掲げた通りである。つぎに具体的な建築解説を行うことにする。

#### (二) 調査民家の建築解説

##### 田村正作家(写真-55・図-12)

一般に、町家造りあるいは町家形式の民家とは、片側に縦長の土間を取り、この土間に接して各室を配置することから、室の配置も縦長になっている造りの民家をいう。そして、この土間は表側から裏庭へ通り抜けになっており、裏側寄りにナガシヤやヘツツイを設けて、ここを炊事場とする。そこで研究者の間では、このような平面形式の民家を一般に「通り庭式民家」と称しており、通り庭式民家といえば町家形式の民家を指す代名詞になっている。この通り庭式民家の発生もやはり平安時代の初期まで遡り、都の町家にその発生源を認めることができる。

当遺構も丁度この通り庭式の平面をしており、町家造りの民家に分

このたび、前橋市北部(芳賀・南橋・桂萱)地区で本調査を実施した民家は、丁度四〇棟であった。これを農家と町家に区分すれば、前述のように農家は三九棟であり、町家造りの民家はたったの一棟であった。この町家造りの民家の復元平面図



田村正作家（上泉町）



前面道路から裏側へ抜ける土間（通り庭）  
にそって縦長に各室を並べている  
（田村正作家）。

類できるものである。ところで、当遺構の規模は間口五間、奥行き六間半である。外壁は、川越の土蔵造りの町家を思わせる重厚な土蔵造りとし、表側だけ黒壁仕上げにしている。このように土蔵造りにしたことについて当家では、次のように伝えている。当家の前身主家はクズヤの大きな家であった。しかし、明治二三年の春火災にあい、全焼してしまった。この火災に懲りに初代の庄作（安政元年生大正一四年没）が、川越の土蔵造りを見てきてそれと同じように造らせたものという。上泉の渡辺という大工が造り、明治二五年に竣工したものである。しかし、左官屋については残念ながら不明であるという。

当遺構で特に注目すべきは、棟上のヤグラである。このヤグラまで手間を掛けて丁寧に仕上げた土蔵造りにしているため、当遺構の外観は際立って豪壮感と重厚感を見る人に与えている。

なお、当遺構のすぐ東側には、やはり外壁を黒塗り仕上げした土蔵がある。これは一階を座敷にし、二階を物品の収納庫にしたものでザ

シキグラと称しており、ミセから直接出入りできるように、ミセ側に扉を開いている。この土蔵は、初代の庄作が数え年二五歳の時に竣工したものである。明治十一年の建造である。

— 当家の戸主は、初代から二代続いて庄作を名乗った。初代の庄作は当屋敷に接したすぐ前方の田村良衛家から分家したもので、本家は江戸時代に名主をした旧家である。初代の庄作は分家後、農業の他に米の仲置商や味噌・醤油の醸造業を行って、屈指の財産家となった。また、明治二四年には桂萱村の村会議員になり、同二六年には第二代の桂萱村長になり、県議会議員にも五回当選している。

ところで、前橋の繁華街から県道前橋—大胡線を東に走り、桂萱中学校を過ぎると間もなく左手（桃の木川の手前）に、重厚な白壁土蔵造りの建物群と鼠色のにぶい光を放つ瓦屋根との調和が美しいひと固まりの建築群が目に入る。この美しい建築群を形成しているのが、田村の本家と分家の所有する建物集団である。この建物集団は、偶然にも伝統的民家の示す群としての美しさを表現しており、周囲に明治の面影を伝える落ち着いた雰囲気を出している。そしてこのような雰囲気は、見る人に心の安らぎと古里の情念を呼び起こしてくれるものである。従って、これから先も末長くこのような家並みを保ってほしいものだと願っている。

（桑原 稔）

仕上・設備・寸法等						建 造 に つ い て の 設 録 等					
大黒柱 の仕上	下大黒柱 の仕上	トコ	二* 間の 柱間 寸法 内法 (尺)	ザシ キの 桁行 幅内 法	不 建 造 し た ま ま	移 築 し た も の	職 業 家 柄 等	推 定 建 造 年 代 (世紀)	備 考		
チ ョ ー ナ	カ ン ナ	カ ン ナ	な あ し り		明						
○			○	12.00	12.00			農	19末	3代前の先祖文太郎が建造した	
○	○	○	○	12.15	13.57	○		〃	17末	当家に伝わる最古の位牌は元禄12年「浄法源清居士」である	
○	○	○	○	12.09	12.74	○	名主	〃		初代は俗名市良右衛門と称し元禄12年没「勝月道有居士」	
○	○	○	○	12.07	12.18	○	藩医	〃		江戸時代は代々前橋藩主に医者として仕える	
○	○	○	○	12.09	12.70	○	農	18初		先祖の石塔は元禄時代が最古である	
○	○		○	12.08	12.68	○	名主	〃		初代「任関鐵心居士」は天和2年没	
○	○		○	12.08	12.71	○	農	〃		初代の位牌は「法岸亮性居士」で元文2年没	
○	○	○	○	12.09	12.15	○	〃	〃		明治28年生のおはあさんが数え年21歳で嫁に来た時エンガワがなかった	
○	○	○	○	12.06	12.22	○	名主	18中			
○	○		○	12.08	12.53	○	農	〃		1984年10月取り壊す	
○	○	○	○	12.06	12.10	○	〃	19初		天保6年没の銀兵衛の代に火災で焼け、その後建造したもの	
○	○	○	○	12.05	12.10	○	〃	〃			
○	○	○	○	12.00	12.00	○	名主	19中			
○	○	○	○	12.05	12.05	○	名主	〃		嘉永元年没の茂七が建造した	
○	○	○	○	12.05	12.05	○	農	〃		嘉永元年生の孫七の親が建造した	
○	○	○	○	11.62	11.62	○	〃	19末		清太郎(明治36年54歳没)が建造した	
○	○	○	○	12.05	12.05	○	〃	19初		5代前の金吾(弘化2年没)が分家する時建造した	
○	○	○	○	12.04	12.04	○	〃	19中			
○	○	○	○	12.04	12.06	○	〃	〃		藤吉(明治23年64歳没)が分家する時建造したもの	
○	○	○	○	12.02	12.02	○	〃	19末		由造(嘉永3年生)が数え25歳の時建造した	
○	○	○	○	12.00	12.01	○	〃	〃		明治28年に建造したもの	
○			○	11.58	11.57	○	〃	20初		明治7年生の兵二郎が建造した	
○			○	11.98	13.63	○	〃	〃		原之郷の船津伝次平の家を大正7年に移築したもの	
○			○	11.93	15.07	○	〃	〃		沼田にあった家を大正9年に移築したもの	
○	○	○	○	12.07	12.08	○	〃	20中		学治が分家するのの際して昭和15年に建造したもの	
○	○		○	12.05	12.03	○	〃	19初		明治20年に移築したもの。しかし移築前は19世紀初期頃のもの	
○			○	12.05	12.05	○	〃	19中		前身主屋を火災で焼失。富士見村横室から古家を移築したもの	
○	○	○	○	12.00	12.00	○	〃	19末		明治26年に移築したもの	
○	○	○	○	11.97	15.10	○	〃	20初		明治39年に日輪寺の田子角太郎大工が建造したもの	
○	○		○	12.11	13.10	○	〃	18中			
○	○	○	○	12.00	15.16	○	総名主	18末		天明3年浅間山噴火の前からあったもの	
○	○	○	○	11.64	11.64	○	藩医	19中		元禄(17世紀末)の頃から親の代まで代々医者を家業とした	
○	○	○	○	12.05	12.02	○	名主	19中		先祖は宮城村鼻毛石から18代前に移住したものという	
○	○	○	○	12.05	12.05	○	農	〃		5代前の富治郎(文久元年59歳没)が建てたもの	
○	○	○	○	12.00	12.03	○	名主	〃		前身主家は慶応元年に火災で燃え、その年内に建ったもの	
○	○	○	○	12.00	12.02	○	農	19末		明治17年頃に建造した当遺構を先祖の茂七が買って入った	
○	○	○	○	11.97	11.98	○	〃	19末		明治28年2月22日火災にあい、その年の5月には竣工したという	
○			○	11.95	11.97	○	〃	20初		明治37年当地の大工田子角太郎が建造したもの	
			○	12.00		○	名主	〃		上泉の斉藤伊勢五郎という大工が昭和7年に建造したもの	

表一 1 芳賀・南橘・桂萱地区における民家遺構（農家）の形式分類及び形式別編年表

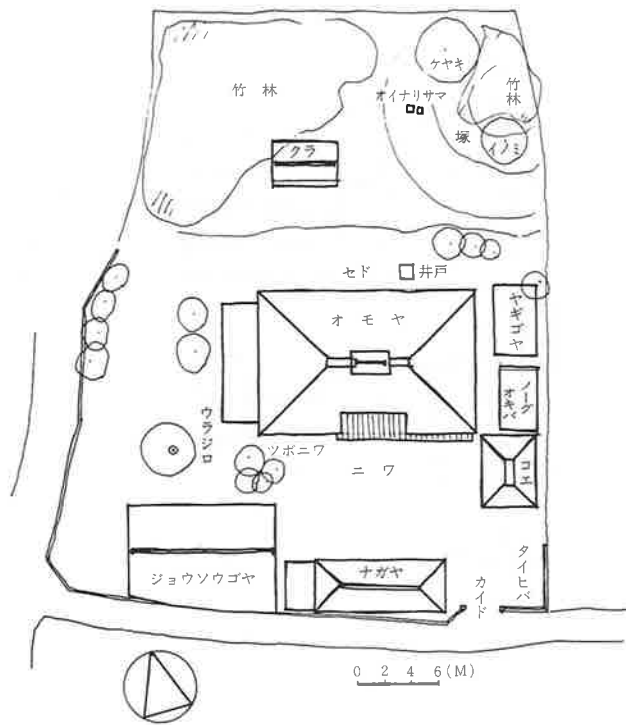
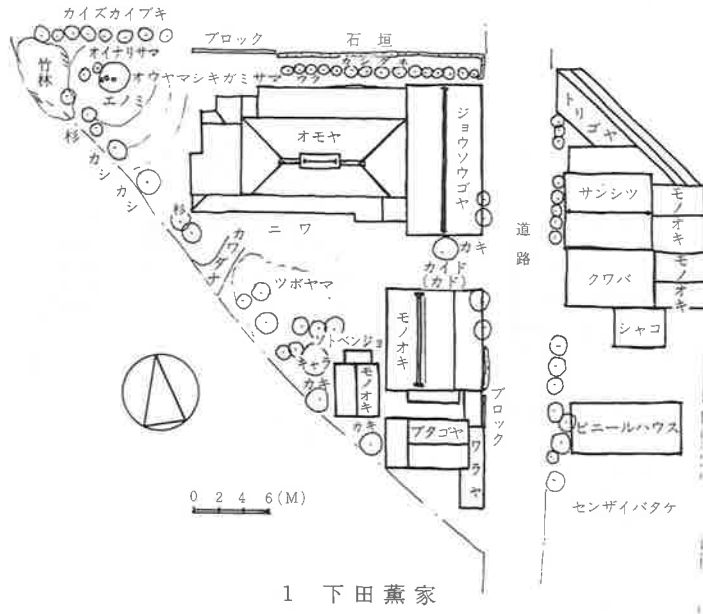
番号	所 然 者 名	所 在 地 (町)	間取の形式				柱 間 装 置							構 造					
			二 三 間 取 り	不 整 形 田 字 間 取 り	喰 い 違 い 四 間 取 り	整 形 田 字 間 取 り	特 殊 な 間 取 り	コ ザ (オ ク リ) の 壁 を 残 す	オ ク リ 側 サ シ カ 3 ミ	ゴ ザ (オ ク リ) と ナ ン ド (ハ ヤ) の 境	ザ 表 サ マ を 残 す	シ カ 2 ミ	キ の 側 サ シ カ 3 ミ	の 側 サ シ カ 2 ミ	土 台 な し	軒 裏 あ ら い	大 黒 柱 の 位 置	大 黒 柱 の 逃 げ	裏 の 利 用
1	下田 薫	田 口	○											○	○	○	○	○	○
2	長谷川芳衛	上細井	○						○					○	○	○	○	○	○
3	吉沢佐四郎	荻 窪	○						○					○	○	○	○	○	○
4	渋川 義一	竜蔵寺	○						○					○	○	○	○	○	○
5	青木 昇	荻 窪	○						○				○	○	○	○	○	○	○
6	荻原喜代治	小神明	○						○					○	○	○	○	○	○
7	渋川 益次	竜蔵寺	○						○					○	○	○	○	○	○
8	糸井 義一	小坂子	○						○					○	○	○	○	○	○
9	設楽 茂雄	上細井	○						○					○	○	○	○	○	○
10	鈴木 清	〃	○						○					○	○	○	○	○	○
11	太田 林平	荻 窪	○						○					○	○	○	○	○	○
12	信沢 福司	上細井	○						○					○	○	○	○	○	○
13	斉藤 恵佐雄	竜蔵寺	○						○					○	○	○	○	○	○
14	須田 繁	嶺	○						○					○	○	○	○	○	○
15	山田 秋一	小坂子	○						○					○	○	○	○	○	○
16	関 丑之助	亀 泉	○						○					○	○	○	○	○	○
17	渋川 広吉	竜蔵寺	○						○					○	○	○	○	○	○
18	太田 六重	荻 窪	○						○					○	○	○	○	○	○
19	池田 一一	嶺	○						○					○	○	○	○	○	○
20	角田 栄	端 気	○						○					○	○	○	○	○	○
21	小川登美雄	川 端	○						○					○	○	○	○	○	○
22	柴崎 二郎	亀 泉	○						○					○	○	○	○	○	○
23	今井福二郎	竜蔵寺	○						○					○	○	○	○	○	○
24	後藤 貞良	小神明	○						○					○	○	○	○	○	○
25	木村 安造	荻 窪	○						○					○	○	○	○	○	○
26	木村 正一	日輪寺		○					○					○	○	○	○	○	○
27	内田市 三	上細井		○					○					○	○	○	○	○	○
28	横堀 栄一	小坂子		○					○					○	○	○	○	○	○
29	品川喜右一	川 端		○					○					○	○	○	○	○	○
30	角田 利良	下細井			○				○					○	○	○	○	○	○
31	長谷川隆治	上細井			○				○					○	○	○	○	○	○
32	加々美 清	竜蔵寺			○				○					○	○	○	○	○	○
33	北爪 栄吉	江 木			○				○					○	○	○	○	○	○
34	高橋 滋信	田 口			○				○					○	○	○	○	○	○
35	小林 寿明	小坂子			○				○					○	○	○	○	○	○
36	小林 宏	〃			○				○					○	○	○	○	○	○
37	佐藤一三美	鳥 取			○				○					○	○	○	○	○	○
38	田子 武男	日輪寺			○				○					○	○	○	○	○	○
39	菅野 茂八	上 泉							○					○	○	○	○	○	○

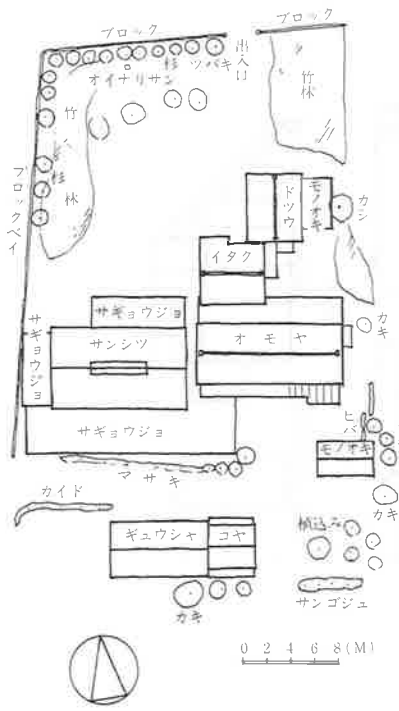
※コザ（オクリ）の桁行方向における実測値。但しコザ（オクリ）の桁行が1間半あるいは2間半の場合はコザ（オクリ）の梁間方向で測定した。

註

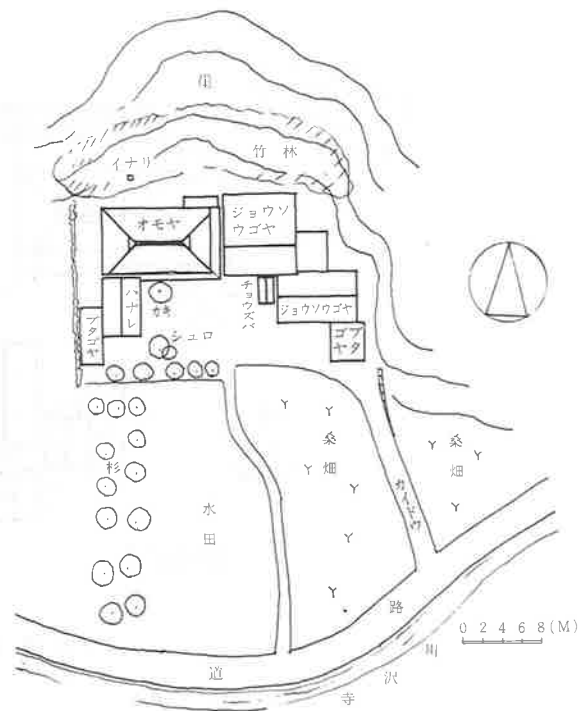
- (1) ここで使用する民家の室名は、総て所有者あるいは居住者の発音した呼称を、発音に忠実に採取することを心掛け、それを片仮名で文字化して使用している。従って、同じ位置の室名でも調査した家が異なれば、その呼称も微妙に異なっていることをあらかじめ御承知置き願いたい。
- (2) 室名と同様に柱名や各部材名も、所有者あるいは居住者の発音した呼称を、発音に忠実に採取することを心掛け、それを片仮名で文字化して使用している。従って、同じ位置の部材名でも調査した家が異なれば、その呼称も微妙に異なっていることは註1と同様である。
- (3) 桑原稔著「住居の歴史」現代工学社 昭和五四年四月発行 一四一頁〜一四二頁参照。
- (4) 丸山知良著「龍蔵寺町加々美家文書調査報告」前橋市文化財調査報告書 昭和五七年三月二五日発行。
- (5) 伊藤ていじ著「中世住居史」東京大学出版会 昭和三三年発行 一七五頁参照。



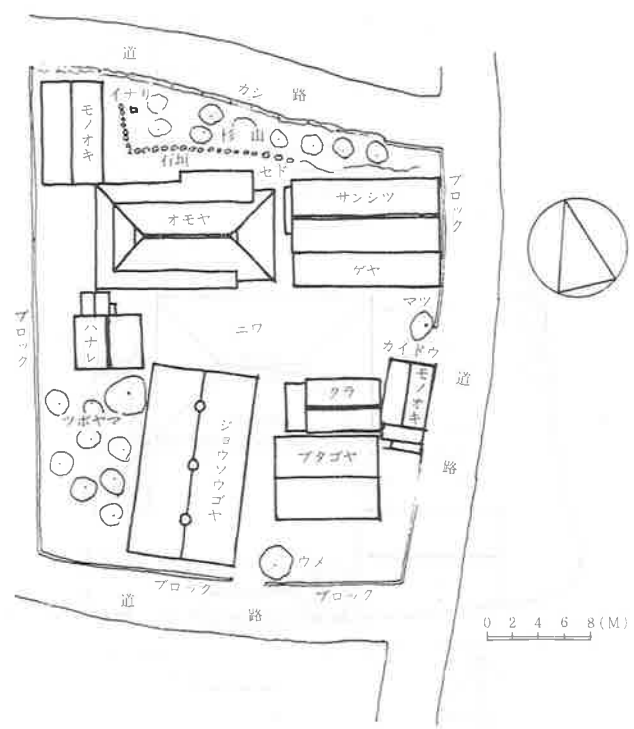




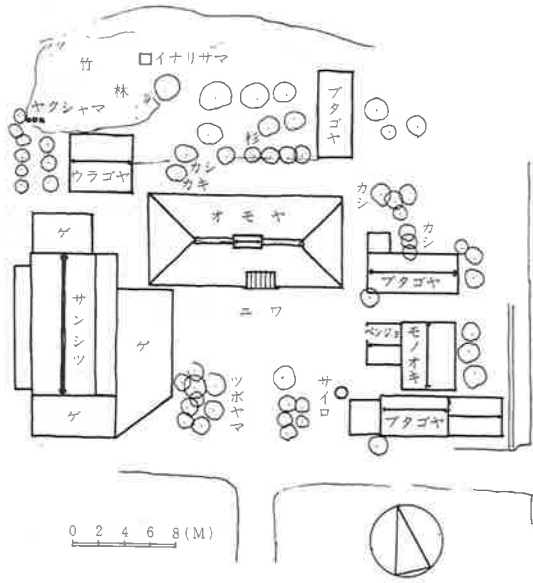
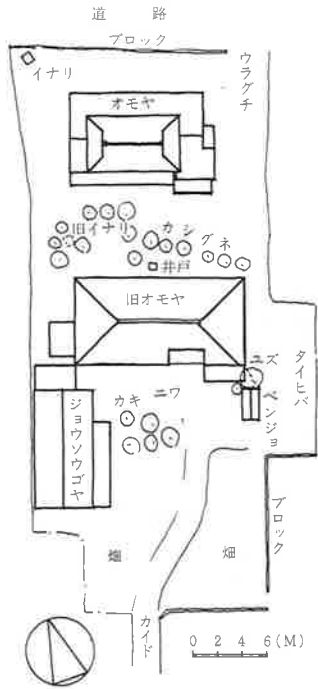
4 洪川義一家



3 吉沢佐四郎家

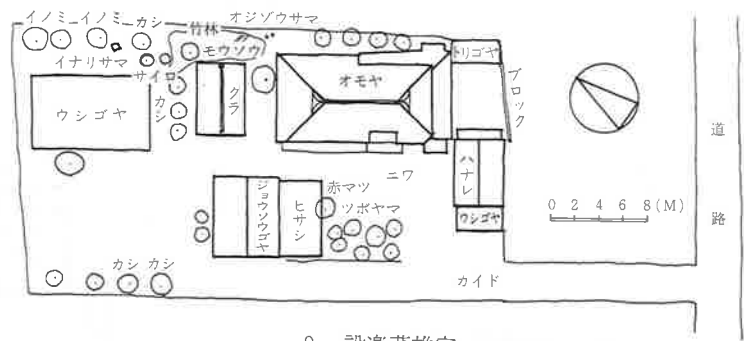


5 青木昇家

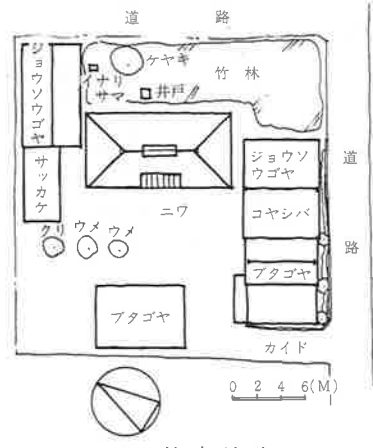


6 荻原喜代治家

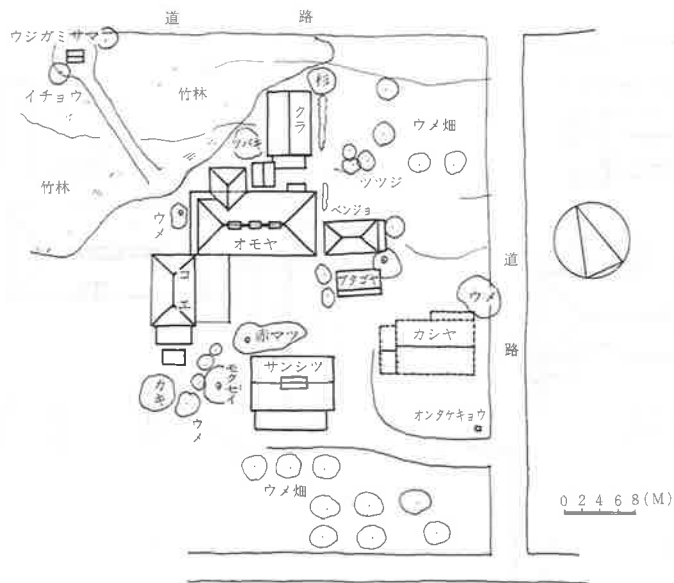
7 渋川益次家



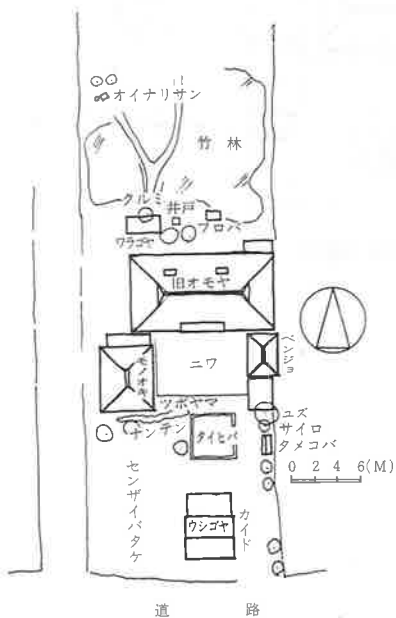
9 設楽茂雄家



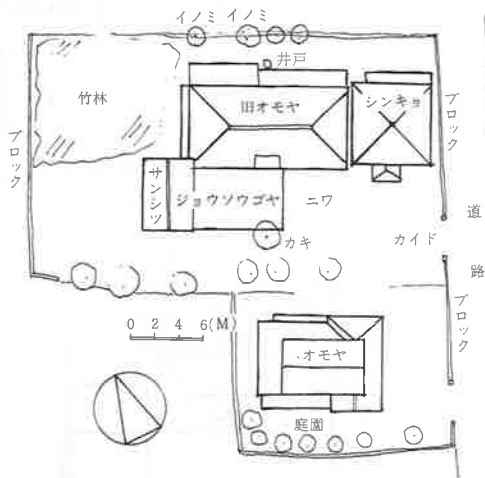
10 鈴木清家



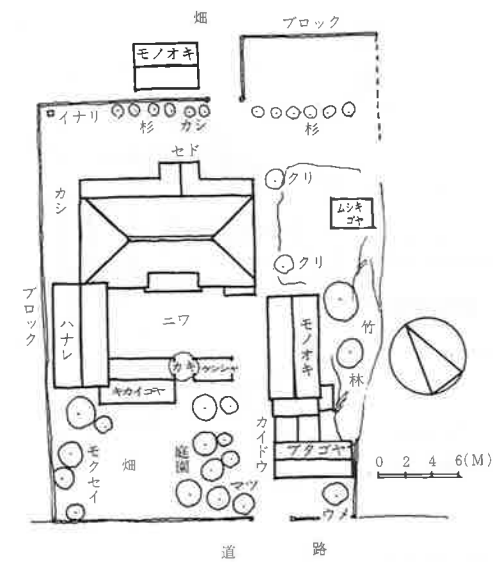
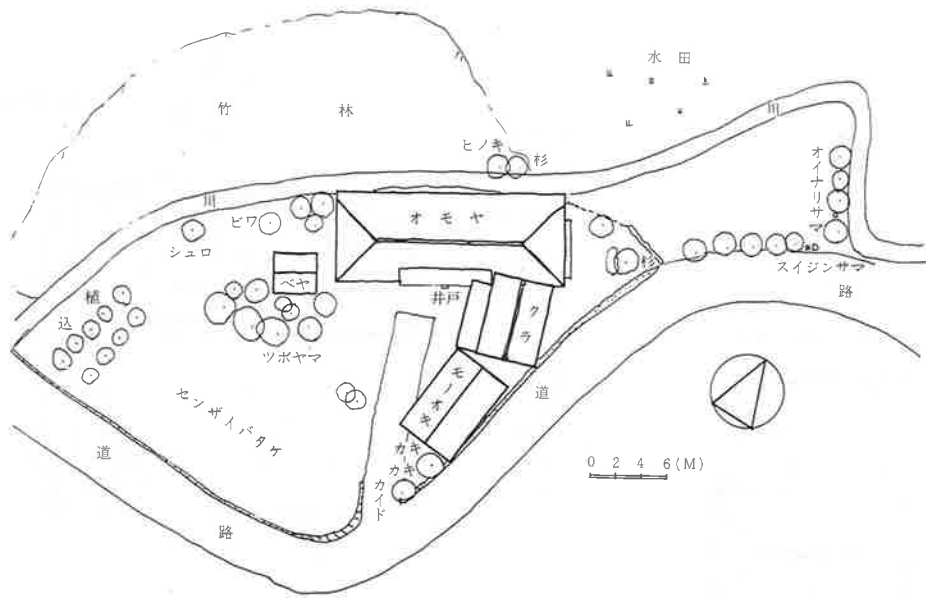
11 太田林平家



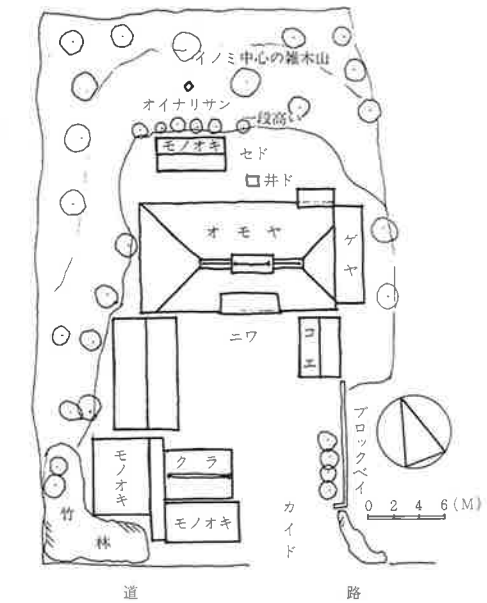
13 斉藤恵佐雄家



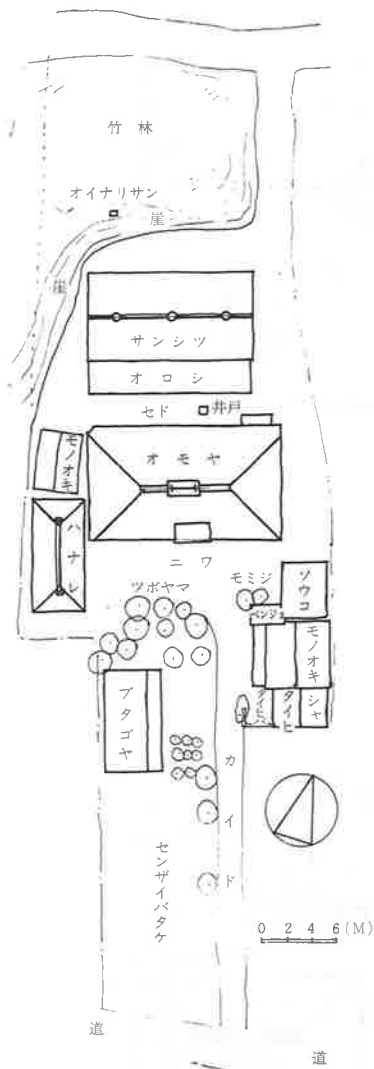
12 信澤福司家



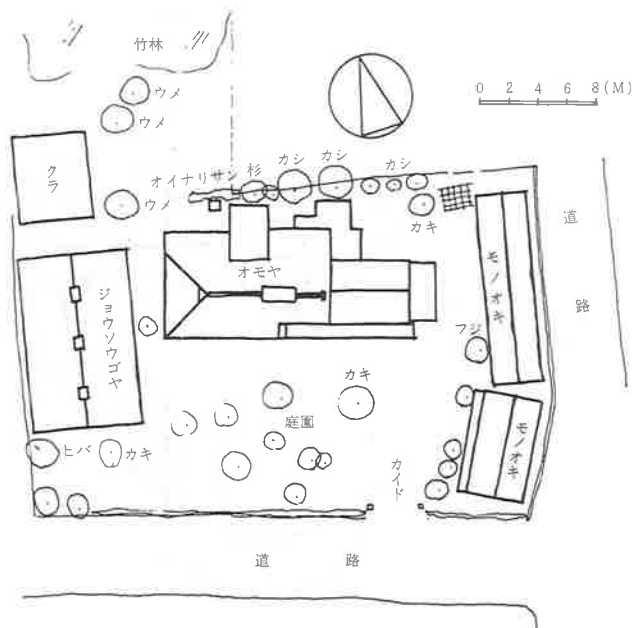
16 関丑之助家



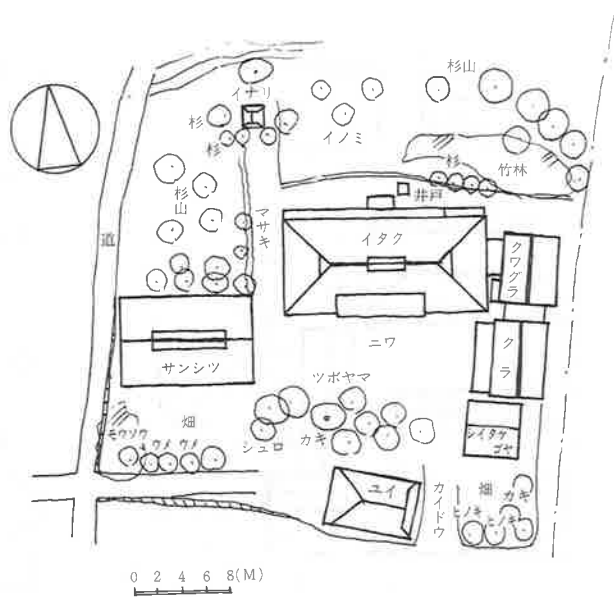
15 山田秋一家



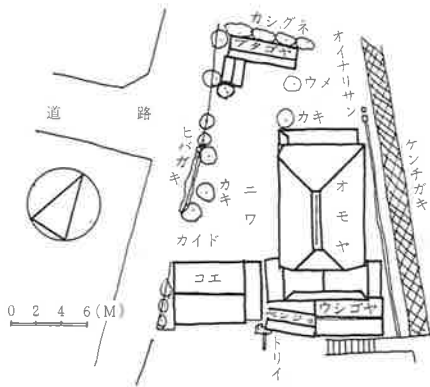
19 池田一家



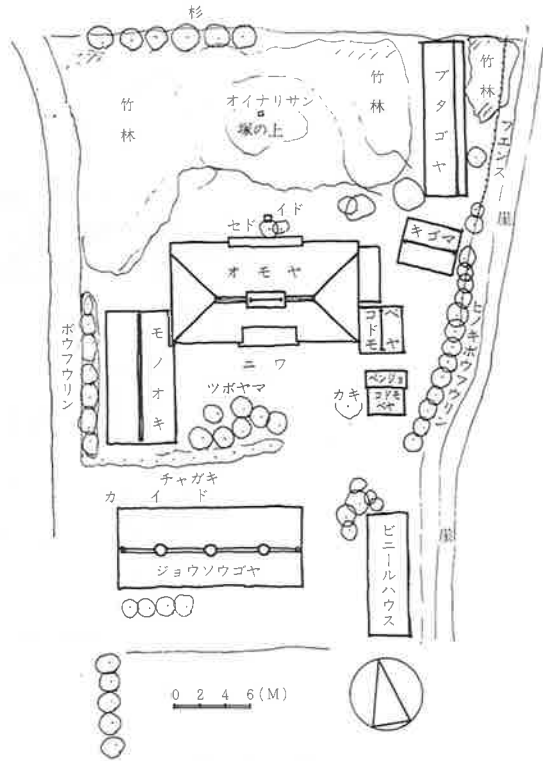
17 渋川広吉家



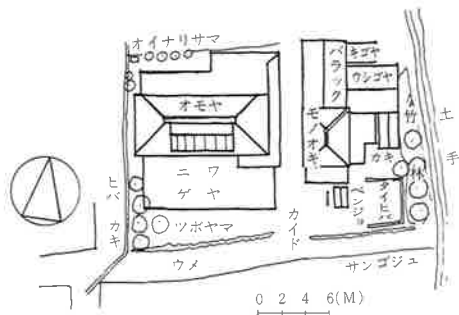
18 太田六重家



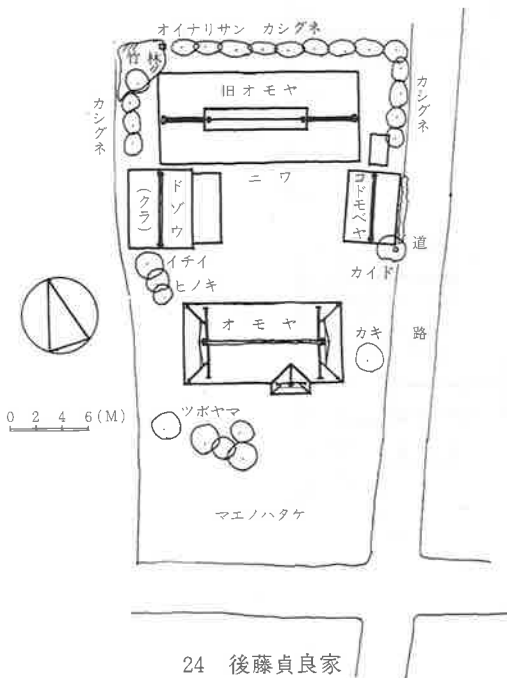
21 小川登美雄家



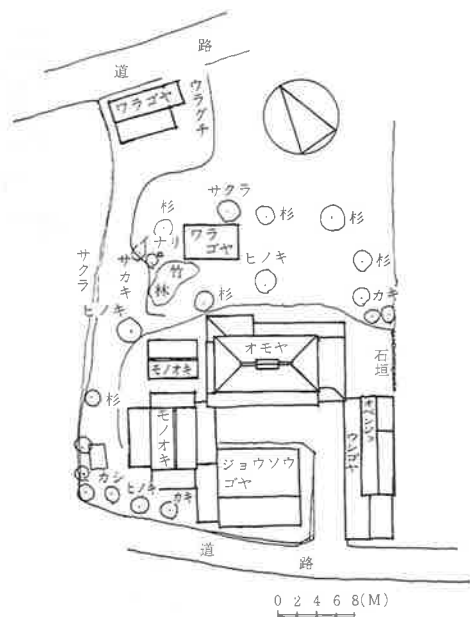
20 角田栄家



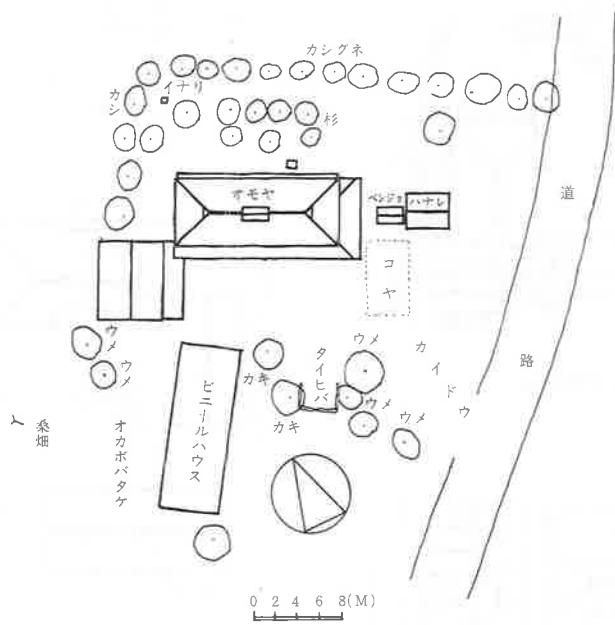
23 今井福二郎家



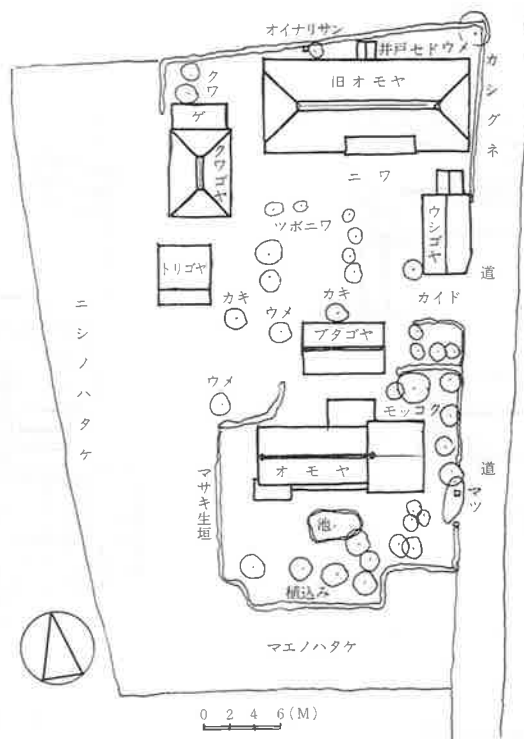
24 後藤貞良家



22 柴崎二郎家

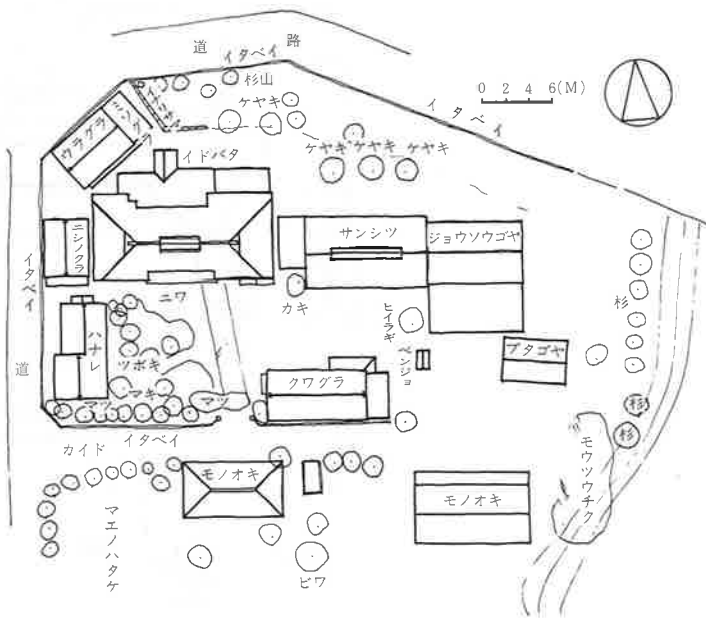


25 木村安造家

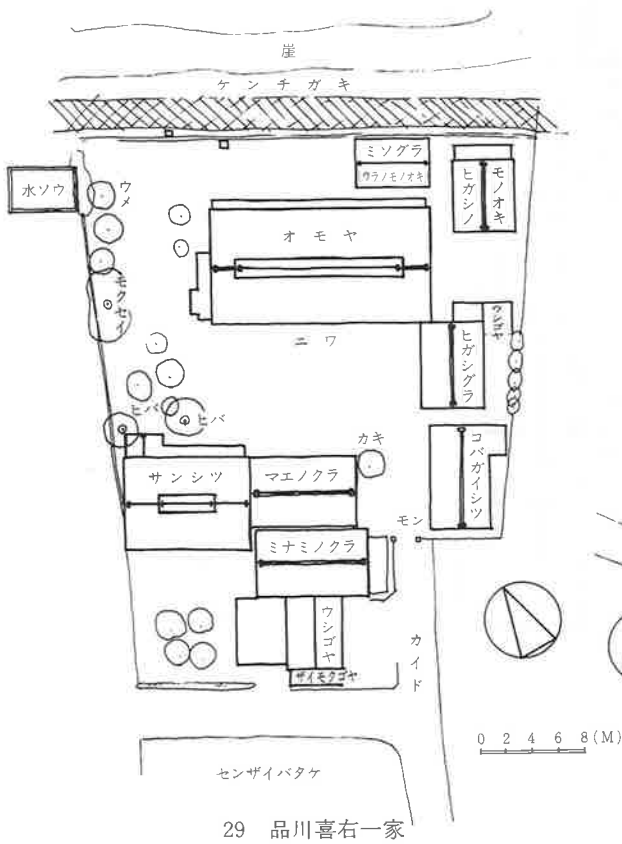


26 木村正一家

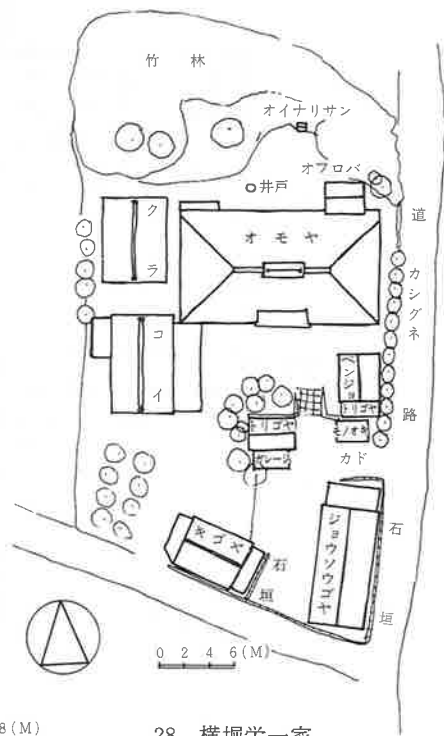




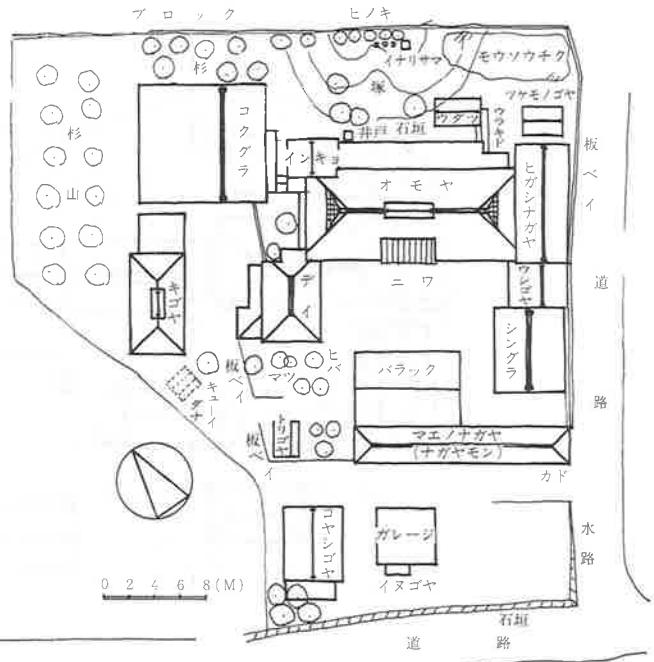
27 内田市三家



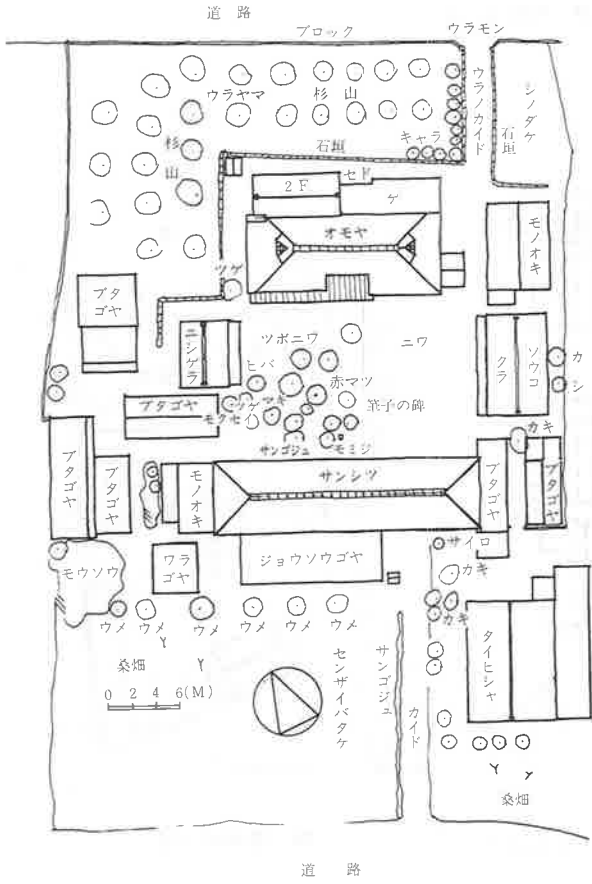
29 品川喜右一家



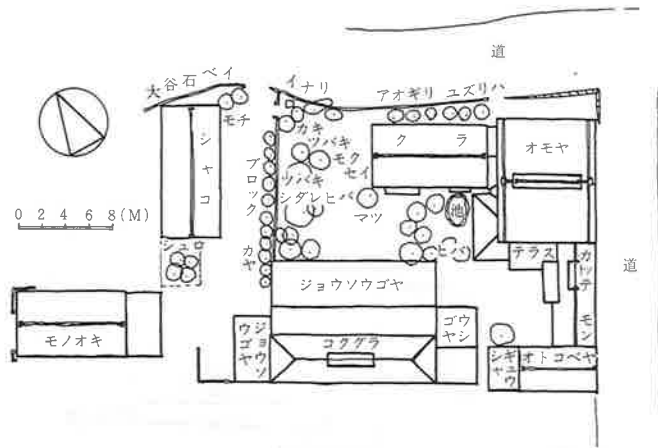
28 横堀米一家



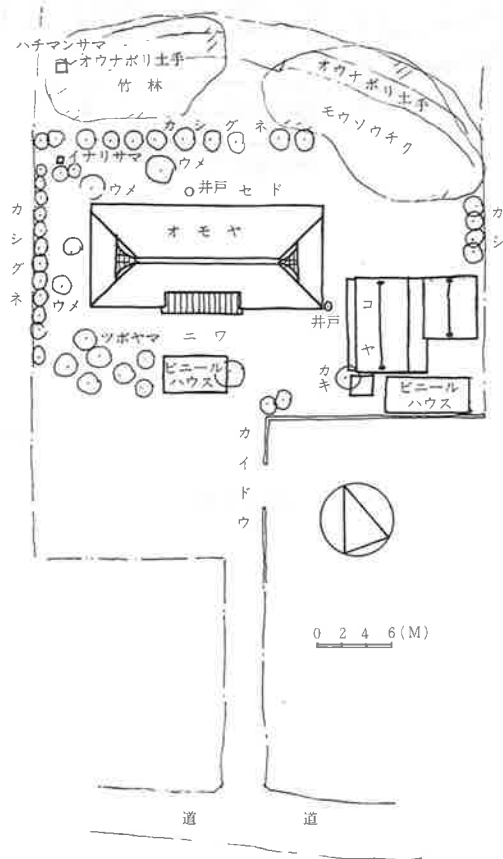
31 長谷川隆治家



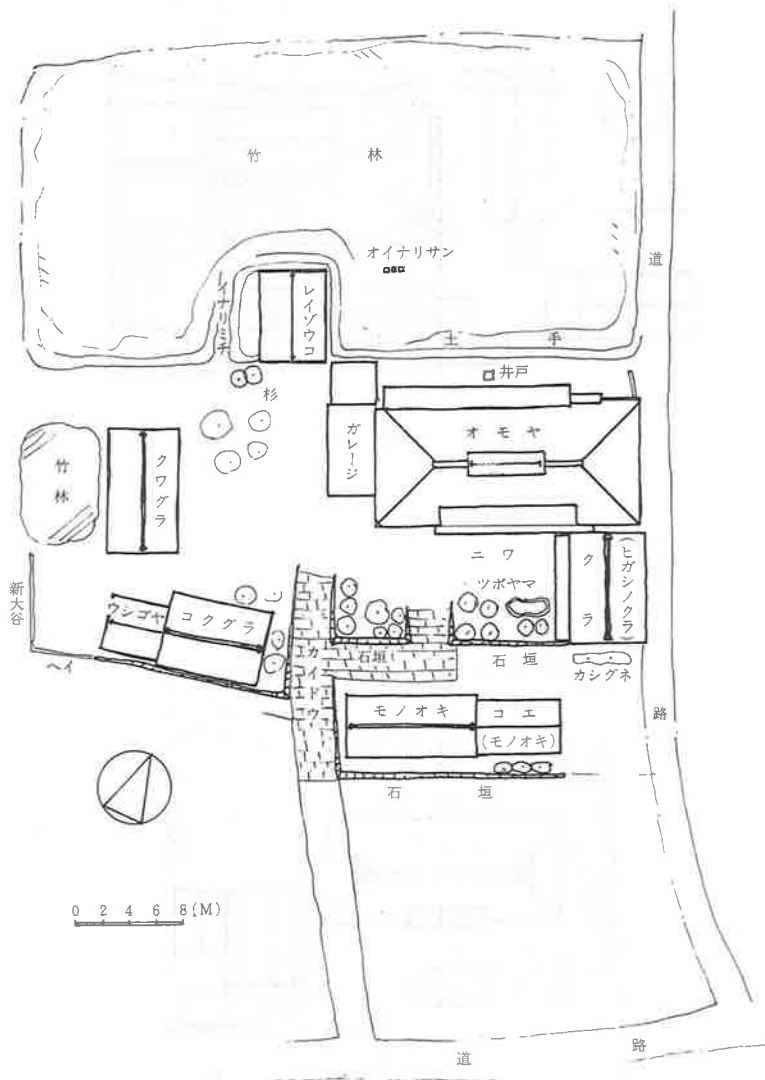
32 加々美清家



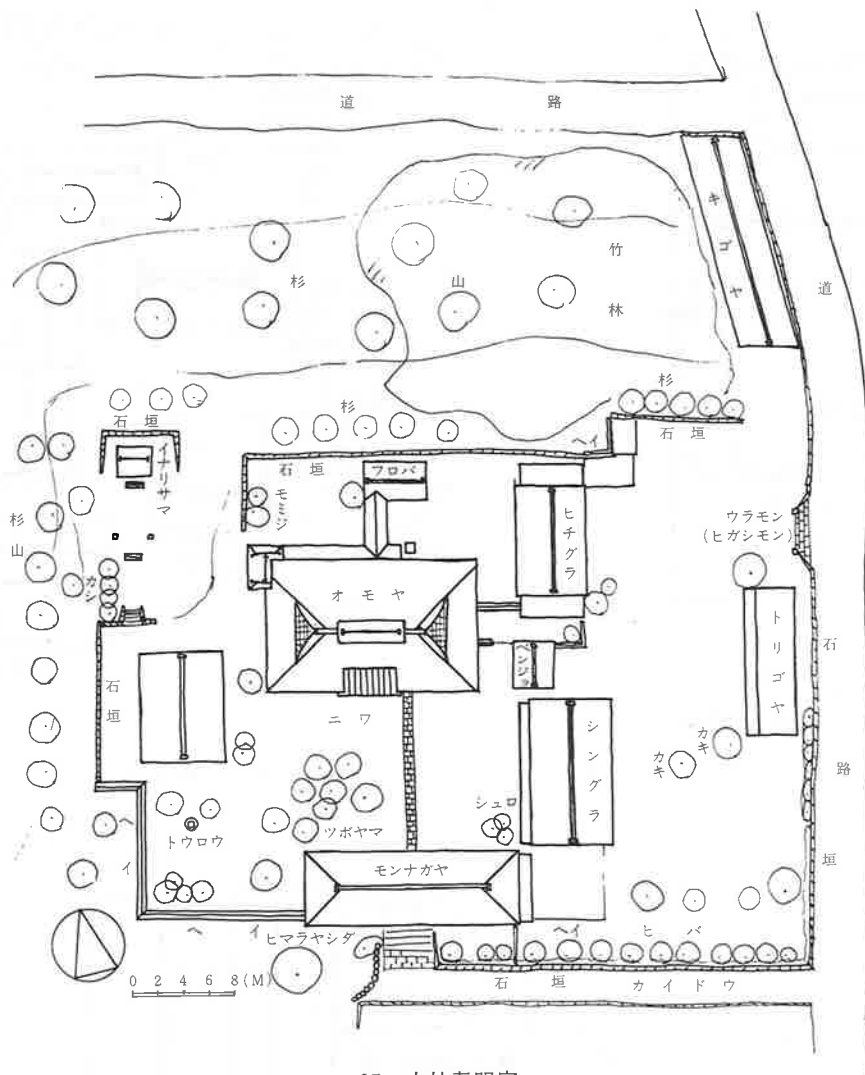
田村正作家



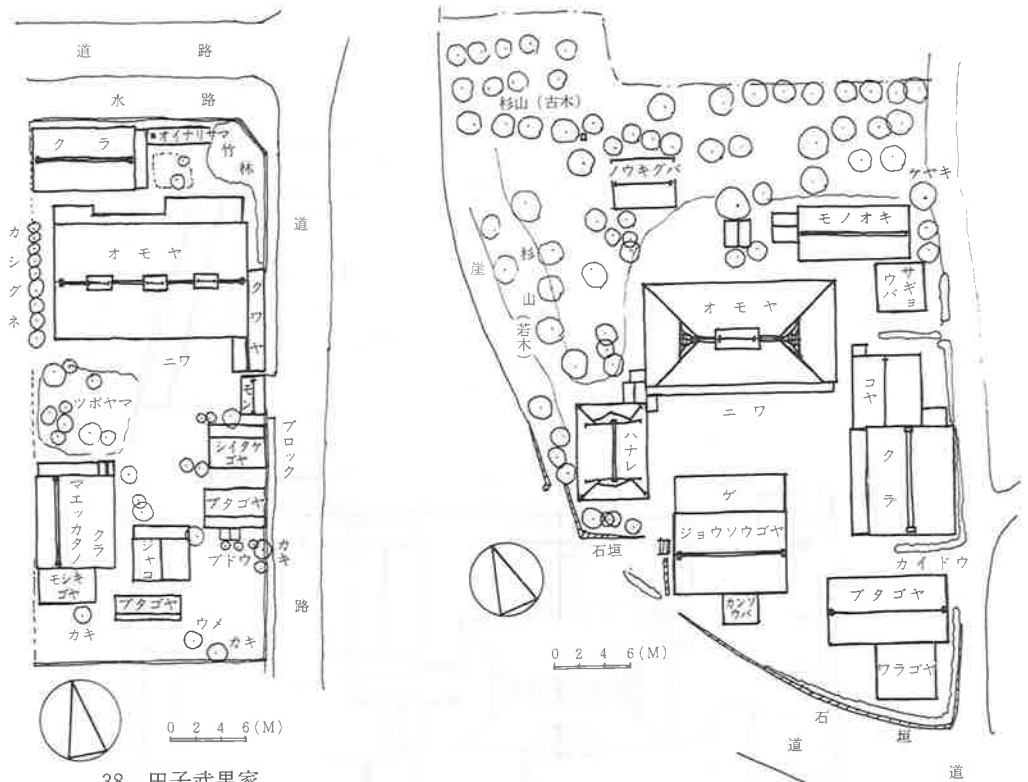
33 北爪栄吉家



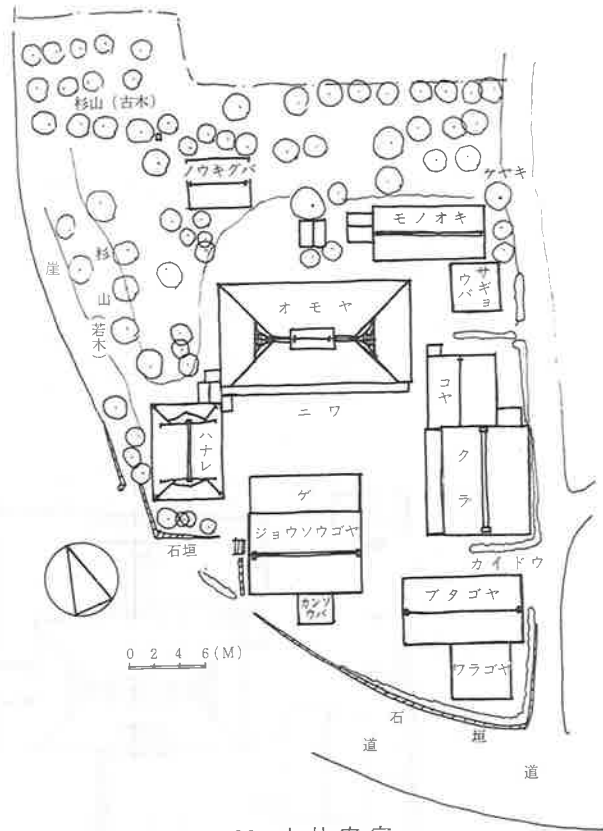
34 高橋滋信家



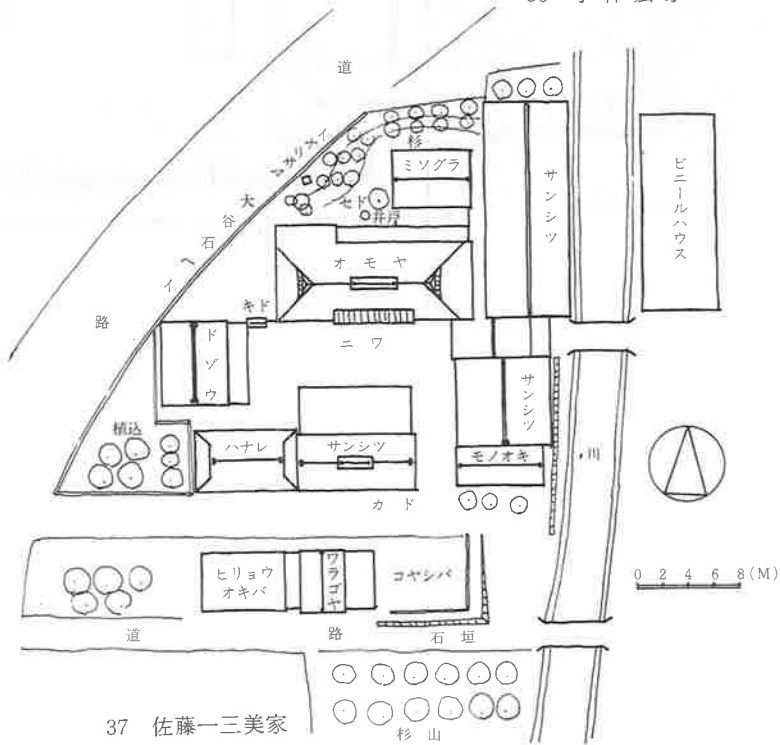
35 小林寿明家



38 田子武男家



36 小林宏家



37 佐藤一三美家

## 第十四章 金丸町の民俗（開拓地の民俗）

### 一、社会生活

**金丸の地名** 小坂子で、砂鉄、金くそが出るためか。

**金丸の土地** 勢多、前橋の一六八ヶ町村に貸し与えるため、明治十年に今井かんさく氏が測量したという。

**金丸** 金丸は全部の総称で、地籍の上では、芳賀村赤城山字赤城山だった。小坂子ウワノで手紙が届いた。大正頃、川と川の中の平らな所に入植した。家も自分で、松の材に茅葺きの屋根だった。

**境界** 金丸と大胡金丸との境は、うずら山線。前橋、富士見、宮城、大胡との境の点に自然石の記念碑がある。七百メートルくらいの所になつている。

**金丸の住人** 明治十年に大崎こうぞう氏が、大胡金丸に住みついたのが始めて、その人の石塔がある。バツタンという水車を作ったという。

**金丸の昔** 明治期には、一人住んでいただけだった。

**金丸町の成立** 金丸町に初めて入植が行われたのは、明治後期頃だった。話者（書上）は大正元年に入植した。金丸町の農家数は、明治期には三戸だったといわれる。その後も金丸川沿いを中心に入植が行われ、農家数は大正期には二十戸に増え、第二次世界大戦までの間に四十戸となった。また、大戦後、三十五戸の戦争引き上げ者世帯が

入植した。

**入植** 芳賀金丸に始めて入ったのは、米山長十郎氏だった。明治末から大正にかけて、たくさんの人が入植するようになった。

各町村で松を植えたが、三十年たたないと金にならないこともあり、村の人が共有林に入植し小作にはいった。しかし、水害や蚕の「おしゃれ」という伝染病で、換金作物がやられ、滞納する人が多かった。

**入植者** 金丸町への入植者は、旧芳賀村内やその周辺の村、あるいは旧前橋市の出身者が多かった。入植者は、普段の生活の上ではほとんど出身地とのつながりをもたなかった。ただし、祝儀・不祝儀の際には出身地との行き来があった。また、昭和二年に金丸町に共同墓地ができるまでは、死者は出身地の墓地に葬られていた。

**組** 大正期には、金丸町は北組と南組の二つの組から成っていた。その後、入植者が増え、新しい組もできたので、昭和初期には一組、二組というように番号で組名を呼ぶようになった。現在、金丸町には一組から十二組までの組があり、各組には伍長がおかれている。

**区** 金丸町には、金丸町を一つの区として区長がおかれている。昔は、相談事や行政機関からの連絡事項などがあると、必要に応じて総会が開かれた。総会は区長宅で行われ、区の会員が集まって相談をした。現在では区も大きくなったので、全員で総会を開くことはない。現在は、前橋市からの連絡事項を区長が受け、各組の伍長を通して各戸へ伝えることになっている。なお、毎年春には伍長が集まって花見

を行っている。

**金丸川** 小坂子の大切な農業用水で、戦国時代のものとして伝えている。天明三年の浅間山の爆発で被害があり、小坂子で金丸川普請をやつて、灰をとりのぞいている。作る時は提燈測量をしたと伝えている。

金丸川の水量は、昔はかなりのものがあつたが、大正十二年の震災の頃から枯れるようになった。行者がいたという小坂子の大滝や、富士見からの水もひあがつてしまった。

**井戸久保** 富士見分に入る所で、清水がしみ出していたところ。六尺（約一・八m）の井戸を掘つた。

**鎌取り坂** 戦後の農地解放以前は、馬屋に入れる草を地主に無断で刈つていた。そのため、地主が山林の入口にいて、草刈りに入ろうとする人の鎌を取り上げたものだった。それで、地主が待ち伏せしていたあたりを「鎌取り坂」と呼ぶようになった。

**縄しめし** 嶺公園の近く、金丸川が小坂子用水と出会うあたりを「縄しめし」という。これは、農作業をする人達が、荷を負うための背負い縄をここで湿したのでついた地名である。

**エ工** 養蚕の上蔭作業や、お産の時には組の中でお互いに手伝い合つた。このような仕組をエ工といつた。

## 二、衣食住

**開墾時の服装** 男の人は、ボタンのついたシャツを着て、股引をはいていた。女の人は、物着の古いものを着て裾をはしょっていた。冬は、これらの上に半てんを着たり、ボロの重ね着をしたりした。雨が降ると稲藁で作ったミノを着た。また、合羽を着てその上にキゴザを着ることもあつた。なお、昭和初期頃までかさをもっている人はほと

んどいなかった。

**食糧** 食糧として、大麦、小麦、オカボ、トウモロコシ、アワ、ヒエ、シコクビエ（朝鮮稗）、ソバ、サツマイモ、里芋、大豆、小豆、大根などを栽培した。このうち、最も多く作つたのは大麦と小麦であったが、雪の多いこの土地の気候に合つていたので比較的よくできた。

**食べ物** ヒエ（チョウセンビエ）、トウモロコシ、アワを食べた。チョウセンビエは、干ばつに強かつた。他の作物がだめでも、それだけにとれた。焼モチにしたり、粉にしてネジにして食べた。砂糖や正油を入れて、ごまかして食べた。粉っぽくて、粘着力がなく、何かまぜないと、とても食べにくいものだった。米はあまり食べなかつた。大正頃は、雹の害がよくあつて、実つた穂をよく落とされた。

**主食** ひきわり麦が半分、大根三割、米二割のまぜごはん、ふやすのには、さつまいもや里芋も入れた。

**飯** 米にヒキワリ、アワ、ヒエなどを混ぜて飯を炊いた。

**オネジ** すいとんのことをオネジという。シコクビエの粉を水でこね、汁の中で煮てオネジを作つた。粉に砂糖を加えることもあつた。トウモロコシの粉もオネジにしたが、渋味があつた。

**焼餅** シコクビエの粉や小麦粉を水でこねて丸め、焙烙で焼いて焼餅を作つた。

**ソバガキ** ソバ粉に熱湯を注いでかきまわし、ソバガキにして食べた。

**夕食** おきりこみが多かつた。粉をねつたものを切つて入れ、野菜を入れて煮た。

**小麦** 小麦は一反あたり三〜四俵とれた。小麦は石臼で挽いて粉にし、うどんや焼餅にした。また、小麦は商品として高崎市製粉業者に販売もされていた。そのため、話者（書上守一）が中心となって「小

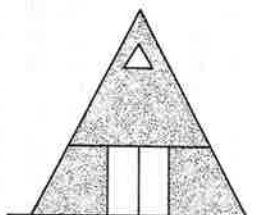
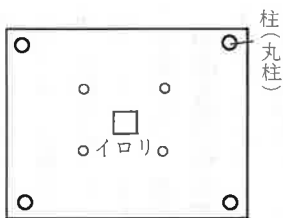


「麦会」が組織されていた。

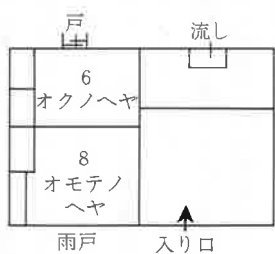
大麦 主食として最も多く作った。大麦は一反当たり四俵くらいとれた。大麦は水車で挽いてヒキワリにした。

おかず たくあん漬け、しゃくし菜、梅干しだった。里芋、ジャガイモをみそ汁の実にした。おかずは、買って食べるものではないと思っていた。山菜は、あまりとれない。

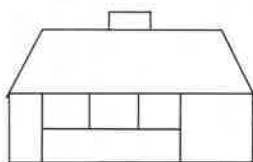
家 最初の家では、土間にムシロをしき、まん中を掘ってイロリにした。上からカギ竹をさげ、隣に、粘土でかまどを作った。竹を下地板にし、下から萱を葺き上げた。外から下だけ土をかけた。冬は風が強く、砂ぼこりが入るので、このかたちになった。各家で考えて作っ



戸の代りにむしろ  
萱の屋根

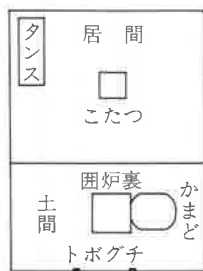
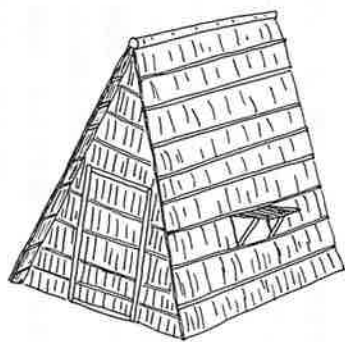


3間の5間  
タタミは入っていなかった。



神だな、仏だんはなく  
三宝荒神、おカマさま  
水の神、稲荷、年神を  
まつた。

明治期(上)と昭和30年代(下)の家



大正末期までの金丸町の農家

たので、一見防空頭巾のような形の家もあった。子どもは布団を敷いたが、大人は、落ち葉の乾いたものの上に、ワラをつんで、その中で寝た。足をイロリに向け、まわりに広がる形で寝るので、一晚中火をつけておいた。下に丸太をならべて台にし、その上にダンボール、ミカンの箱、おけなどをまわりにおき、物入れにした。お勝手は外で、水を入れるおけも外においた。洗うのは、水をかけ、ワラで作ったワラだわしでこすった。煙出しのない家は、家の中がけむかった。

水は川からくみ、てんびん棒でかついできた。風呂に入れる時は、四〜五回くみにいった。三回で風呂がいっぱいになり、あとは飲用と家畜用だった。ドラムかんの風呂で、底に松の木でいかだ状のものを作り、沈めておいた。庭に堆肥舎があり、便所がついていた。

大正末期までの家屋 明治期から大正末期までの家屋は、図のような簡単な構造のものだった。柱は松の掘立柱で、壁には篠のカツポシ(刈り干し)が用いられた。また、屋根は地面までとどき、茅葺きになっていた。内部は土間と居間に分かれ、土間には囲炉裏とかまどが設置されていた。囲炉裏やかまどから出る煙

は、入口や壁のすき間から抜けるようになっていた。居間の床には篠のカップシが敷かれ、さらにその上にむしろやアンペラが敷かれていた。居間にはタンスなどが置いてあり、こたつを造る人もあった。家屋の大きさはまちまちだったが、九尺×二間のものが多かった。このような家屋は、一週間くらいで造ることができた。

**昭和初期以降の家屋** 昭和初期以降に建てられた家屋は、切妻屋根をもった平屋であった。柱は旧来と同様に松の掘立柱だったが、壁には松の板が用いられていた。屋根は茅葺きのものが多く、杉皮葺きのものもみられたが少なかった。内部は土間と居間に分かれ、土間には囲炉裏とかまどが設置されていた。居間の床は、松の板を用いた板の間になっていた。このような家を建てる場合には懇意の人達に手伝ってもらうことが多く、十日くらいで造ることができた。家ができ上がると、手伝ってくれた人達に酒やうどんをふるまった。

**飲料水** 飲料水には、金丸川や寺沢沼の泉などの水を使った。水は桶を使って運んだ。水汲み場から離れた家に住む人の中には、一キロメートルも水を運ぶ人もあった。隣近所三軒くらいが共同で井戸を掘ったこともあったが、深く掘ってもなかなか水が出てこなかった。深い井戸では、深さ八丈くらいのものもあった。ようやく水が出て、五年くらい使うと涸れてしまうことが多かった。金丸町には、このような井戸が五箇所くらいあった。

なお、金丸町では昭和二十六年に、富士見村の江戸窪から皆沢川の水を引いて水道とし、飲用にした。

**水の苦勞** 雨水をためる、水くみにいく、竹樋で引くなどで水を得る努力をした。

**井戸** 大正七〜八年頃、井戸を三〜四本掘った。一年くらいで出なくなつた。八丈掘つたが、少し出ただけで、出なくなつた。井戸の中

から木の根が出た。

**風呂** 大正八年頃で、近所五軒くらいで、三晩も同じ風呂に入った。昔は隣近所で風呂を呼び合つて入つた。

**便所** サンマゲルという二斗ダルの土の中にいけ、丸太を二本わたし、またいで用をたした。山の草を入れて肥料にした。町から集めてくることはなかった。

**燃料** 囲炉裏やかまでの燃料には松の枝を使った。冬に雪の重みで折れた松の枝を集め、畑に山積みしておく、半年分くらいの燃料になつた。夏は、山林から枯れ枝を集めて燃料とした。

**照明** 明治期から大正期にかけては、石油ランプが照明に使われていた。昭和八年頃には、金丸町に電気が引かれた。

**灯火** 夜歩くのに、灯火が全くないので、上を見て、木の間から道の部分の切れ目の空を見て目印にした。上を見て足でさぐつて歩いた。木の根が出ているところで、つまづいた。

### 三、生産・生業

**生業** 明治大正頃は、山仕事で生活しており、大きな変化はなく、戦後の入植者まで同じだった。里の牛馬を借りてきて、急造の小屋で飼ひ堆肥を作つた。冬は山仕事で金をかせぎ、夏は蚕をやつた。建物には二間×三間のもので、竹のかごの下に入つて寝た。炭焼きはいない。花木に取り組むようになり、生活が向上してきた。商品になるまで三年はかかるので、専業になるのは、楽なことではなかった。市場に出すのにも、持ちこみで売りにいった。

**商品作物の工夫** 大正期には落花生を作つて売つたことがあつた。昭和十年頃から昭和二十年頃にかけては、美濃早生大根を作つて売つ

ていた。これは割合よく売れた。また、第二次世界大戦後には、花木を栽培する農家が多くなった。

**養蚕** 養蚕は、金丸町では大正五年頃から始まった。その頃は家が小さくて沢山飼うことができなかったので、年一回夏蚕を飼っていた。昭和に入ってから、春蚕や初秋蚕・晩秋蚕も飼うようになった。蚕室は掘立柱にトタン屋根の簡単な小屋で、日除けのため屋根の上に木の枝がのせてあった。桑については、坂東早生や魯桑などの品種を栽培した。なお、繭は旧前橋市内の製糸業者に販売した。

**馬** 堆肥を採るために、上川淵や下川淵の農家から馬を借りてきて飼った。馬屋には、夏は草を刈って入れ、冬は落葉を入れた。草や落葉は山林から採ってきたが、山林の地主からは採るなど言われていた。それで、地主に黙って採って使った。

**篠** 金丸町では、関東大震災の後から昭和二十年頃まで、篠を刈って販売していた。その多くは、家屋の壁の下地にするコマイ（木舞）用で、東京方面へ多く出荷した。また、静岡県にも行李用として出荷していた。特に松林の中に生えた篠は粘着力があつて細工によいといわれた。篠の販売は話者（書上守一）が中心となつて行い、安田銀行と提携もしていた。そのため、戦前の金丸町の農家では篠刈りによる収入が最も多く、腕のよい人で一日に一〜二円になった。

**松毬** 大正初期から昭和二十四年くらいまで、黒松林から松毬を拾い、たきつけ用として販売していた。松毬拾いが特に盛んだったのは、大正期から昭和十年頃までで、農家では松毬を麻袋に詰めて一俵五錢くらいで販売した。主に、旧前橋市内で売ることが多かった。

**材木** 昭和十四〜五年頃、物資が不足して切り出した。パルプ材としてチップに加工し、人絹の材料にした。

**炭焼き** 金丸町には、赤城山興業組合によつて明治期に黒松が植林

されたため、黒松林が広がっていた。この黒松を利用して炭焼きを行った人もいたが、松の炭は火力が弱かった。

**その他の林産物** 山林からキキョウやオミナエシなどを採ってきて金丸川の水にさしておき、盆花として旧前橋市内へ売りに行った。秋にはハツタケも採って売った。

**植林** 土の水持ちが悪く、杉、ヒノキを植えても枯れるので、松にした。

**畑** 唐ぐわで開こんした。火山灰土が厚くつもあり、地味が悪い。焼畑はない。粟、モロコシを作り、粉にして食べた。今の家畜のエサの方がいいくらい。

**耕地と山林** 金丸町では、道路に沿つて家屋が建ち、そのまわりに畑地が広がっている。家から遠い場所に耕地をもつ人もいたが、ほとんどの人は家の周辺に畑をもっていた。第二次世界大戦前の入植者は、一戸当たり一町くらいの土地をもっているが、それは比較的よい土地であつた。戦後の入植者は、一戸当たり一町五反くらいの土地をもっているが、その多くは西側斜面の土地だつた。西側斜面は西風が強く、あまりよい土地ではなかつた。

金丸町の土地は、もともと小坂子町などの地主のもつていたものが戦後に解放されたものなので、山林なども個人所有のものが多し。

**シコクビエ** シコクビエは朝鮮稗と呼ばれた。シコクビエは石臼で挽いて粉にし、オネジや焼餅にして食べた。

**ソバ** ソバについては、主に春ソバを作つた。秋ソバは台風被害を受けやすいので、ほとんど作らなかつた。ソバは一反当たり二〜三俵とれたが、年によつて当たりはずれが大きかつた。ソバは石臼で挽いてソバ粉にした。ソバ粉はソバガキにして食べるが多かつた。なお、ソバは昭和五年頃まで信州の商人に販売もされていた。

オカボ オカボにはうるちもちとがあつたが、常食用として粳を多く栽培した。オカボは日照りの影響を受けやすく、早魃の害を受ける年も多かった。そのため、昭和八年頃には県からお助け米（外米）が出たこともある。また、オカボは秋から冬には味が良いが、夏になると味が落ちた。オカボはほとんど自給用だったが、粳米を磨臼で玄米にして販売した人もいた。糯米はすべて自家用で、正月や節供などの餅にした。

肥料 昔は、草木灰と人糞尿を主な肥料としていた。草木灰は、春に赤城山で篠を焼いて作った。草木灰作りのときには、三日から一週間くらいかけて篠を焼き、できた草木灰の牛車うしぐるまで家まで運んだ。人糞尿は、旧前橋市内の家を回って買い集めた。人糞尿には米糠や雨水を加えて使った。畑に播種するときは、サクを切つてそこに草木灰を入れ、さらに人糞尿を入れた。終戦後、マツカーサー命令で人糞尿の使用をやめてからは、化学肥料を使うようになった。

害獣・害鳥 畑の近くに山林が広がっていたので、畑作物は鳥獣の被害を受けることが多かった。穀物の種はカラスや山鳥に掘られた。また、ブドウを作るとムクドリに食われた。このような被害を防ぐため、畑にはガランガラン（鳴子）を仕掛けたりした。また、山兎や山鳥は捕獲して食用にした。

干ばつ 田がないので、陸稲だったが、雨が降らないと収穫がなかった。トウモロコシを粉にして食べた。

しよいこ つめが出ていない形のものを使った。もつとけわしい所で働く人が、爪の出たしよいこを使った。

開こん道具 唐ぐわ、くまで、マンノウを使った。

水車 大正五年頃、金丸川沿いに水車が造られ、穀物の脱穀や製粉に使用された。穀物の製粉には左回りの石臼が使われていた。なお、

この水車は造られてから十年くらいで、水不足のために動かなくなつてしまつた。

## 四、交通交易

古着屋 古着を、自転車につけて、のぼつてきた。

芸人 マルイチの神楽は、飯田興業で、大正頃のこと。包丁やカマを投げて受けとめるような曲芸をした。

祭文語り ホラ貝を吹きながら来たのを覚えているという。ノラボウ芸人ともいった。

毒消し売り 新潟から、女の人が、ゴザをしよつて、三人組で来た。ムラに来た人々

富山の薬売り

新潟の毒消し売り

祭文（セエモン）よみ

マルイチの神楽

買い物 ワラや芝草を刈つてワラジを作り、洗いざらしの一重の着物を三尺のひもでしめ、ふろしきに山の花をもつて町へ行く。ワラジや山の花を売り、盆ごぎやシャツなどを買ってきた。帰る頃には、二〜三kmも家族が迎えに来た。

## 五、信 仰

赤城神社 元は英霊殿で、芳賀の英霊殿を、戦後千円で引きとつてきた。

十二様 大正初めに石宮のお十二様が、書上商店の前にあつた。こ

れが金丸の最初の神様だった。

山の神だから、測量する時にまつたものか。石宮の屋根はカラガマ石（火山から出て、スの入った軽い石）でできている。

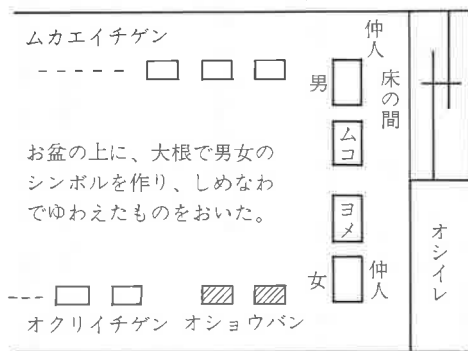
金丸町の十二神社は、明治十年頃に開かれ祀られたものである。もともとは、小坂子町や大胡町滝窪などから樵として山に入った人達によつて祀られていた。彼等は石宮を祀り、十二講を行っていた。金丸町に入植が行われてからは、金丸町からも山仕事に携わる人達が十二講に加わるようになった。金丸町には他に神社がなかったため、十二様は後に金丸町の神社として祀られるようになった。戦争中は、出征の前に十二様に参る人が多かった。また、子供の種痘のあとには、「疱瘡がよくつくように」と十二様に参る親も多かった。毎年十一月十二日には、十二様の秋祭りが行われた。この日にはけんちん汁を作り、魚を食べた。秋祭りは金丸町全体で行ったことも、各組毎に行つたこともあった。

ほうそう神 麻ひもをない、ウツギの木を切り、すげあんで四隅にひもでしばり、半紙をのせる。その上にみじんこの菓子をもせて、一〜二銭おさいせんと赤飯をそなえた。

## 六、人の一生

婚姻 仲人がとりまとめた。富士見、宮城、大胡、前決から来ているが、前橋からの人は、市内へ各地から働きにきている人だった。結納は、昔はタル入れといったが、口がために変つた。式は、親元の家でやり、チュウヤドは使わなかった。竹をまたいで、嫁が入った。ムカエイチゲンが四人、オクリイチゲンは四〜八人で、多くてもよかつた。正月四日には嫁さんにひまが出た。

ゴシユウギの席



出産 安産のおまもりは、産泰神社で受けた。

とりあげばあさんに手つだつてもらつたり自分でやった家もあった。直前まで仕事をし、生むと、すぐ仕事にもどつた。後産は、屋敷内で、犬にあらされない所に埋めたり、畑の隅に埋めた。へその緒は、自然に取れるまでほつておきチリ紙につつんでしまつておいた。

命名 家族、親せき、知人などにつけてもらった。

お七夜 赤ん坊をだいて、近所の便所をまわる。お七夜までは、子どもの体を洗うことや、母親の着物のせんたくまで、取り上げばあさんがやった。

初誕生 子どもに、七合くらいのもちをついて、しよわせた。誕生もちという。もちをかしわにつつんだものを、お返しにした。

子ども 食べるものがなく、腹ばかり大きくて、筋肉がない体つきだった。一軒に五〜六人から、八〜十人の子どもがいた。

葬儀 湯かんは、汚れを取り、しょうちゆうをふきかけ、清める。十万億土へ行くからと、よい着物を着せ、手甲、きやはんにワラジをはかせ、お金を持たせる。葬列の中では、年寄りになるほど花かごが多い。花かごの中にお金を入れる。列は、庭を左まわりに七回まわつて出る。位牌、写真、おせん、墓標、棺、タツガシラ、トウロウ、弓、五色の旗の順になる。坊さんがドラをならす。土葬で埋め、弓の竹、

旗、棺の竹を割って犬があらさないようにさす。位牌とおぜんを置き、そなえる。入り口にトウロウを置く。

隣保班の班長が、とりしきって、葬儀を進める。役割分担をして、仕事を進めた。

ツゲ 二人で、葬儀の事を連絡に行った。行くと、食事、酒を出してもてなした。

墓制 人が死ぬと、その人の出身地へ亡骸を運んで埋葬した。昭和二年に金丸町に共同墓地ができてからは、そこへ葬るようになった。

## 七、年中行事

一月六日山ハジメ 山入りともいう。その年、最初に山にはいつて仕事を始める日にあたる。この日には、チョウナハジメという言い方もある。家の主人が山にはいり、立ち木の根元に半紙を敷き、おさぎ、塩、酒を供える。

おかざりかえ 正月十四日に、おかざりかええをした。もちをのして、四角にして、ミズクサの木の枝にさした。三宝荒神、年神さまにそなえた。ニワトコの木を削って作ったツクリモノを飾った。

節分 木の枝のザンマタにイワシの頭をさし、大豆をとった枝で焼きながら

「作物にたかる虫の口をやきもうす」

「ほうじゃくの口をやきもうす」

「油虫の口をやく」

など、いろいろの虫の名を言って焼いた。焼いたあと、玄関の上のワラにさしておいた。大豆をほうろくでいって、そのあと焼いた。

バクチ場 五月八日の山開きに、鈴ヶ岳の山頂で、大トバクを開帳

した。狭くて、刑事がやつとのぼれるくらいの所を通っていったところ。大正頃の話だ。

盆 盆棚は、蚕の桑くれ台に、たなを一枚のせごぎをしいて作った。仏様を上のにのせ、ナスとキウリの馬を作って、前においた。ポタモチ、線香、スイカをあげた。下にかざる仏様は、まだ小さくて、日が浅くて、先祖の仲間入りできない仏様だという。

新しくとれた麦ワラを、ケイドウでもやして迎え日にした。七月一日は、釜の口あけで、ふかしまんじゅうをふかした。七月七日に墓送りをした。十六日に、ナスの馬をつくり、トウモロコシをそなえ、送り火をもやした。

農休み 七月十四日～十五日

トウカンヤ 麦まきのあとやった。ワラで作り、里芋の茎を入れた。家や畑のまわりを「トウカンヤ」ともぐらが根をさえぎらないようにたたいてまわった。

おくんち 十月十七日が祭日。戦後神社ができるまでは、十二様が神社で、出征兵士がおまいりにきた。

### 資料

## 金丸の今昔物語

書上守一著

### (1) 明治以前の金丸のようす

今から百年ほど前の金丸は、ススキやカヤがおいしげり、草原がづく荒地で、人々はだれも住んでいませんでした。

人々が住まなかつたのは、赤城山のふん火による火山灰の土地で、



明治の頃の金丸

作物もあまりよくできず、また、水が十分なかったからです。

しかし、赤城南面に住んでいた農家の人達は、金丸に草かりに来ました。牛や馬に食べさせるためと、かりとつた草を、つみ上げてくさせ、たいひをつくるためです。

また、秋から春にかけて、時々、野火が発生し人々をこまらせました。

#### 金丸を流れる二つの用水

##### ○金丸川と地名

金丸川は、赤城山のふもと「水の口」からわき出す水がみなもとです。この川は、宮城村の市之関方面へ流れていきますが、途中大胡の滝窪分校のあたりから、金丸方面へ用水として水を流しました。用水が作られたのは、戦国時代で今からおよそ三百年ぐらい前と思われる。この用水は、小坂子から芳賀小学校の東までつづいていました。小坂子の農家の人達がお米を作る用水の長さは、およそ七キロメートルですが、当時の技術や道具では、用水を作ることは、大変な作業でした。

土地の高低を調べるために、ちようちん測量を行ったと言われています。

此の用水も天明三年の浅間の大噴火に灰が降り用水の流れが悪くなり、小坂子では金丸川の川普請した記事があります。

用水からくる水は、小坂子の田をうるおし生活を豊かにしました。

しかし、宮城村の人達は、水不足になやまされ、二つの村は田植の時水をとる争いがたえませんでした。

このあらそいは長い間つづきましたが、昭和三十六年に話し合いをして水の分けかたを、宮城四、小坂子六と決め、両村はなかなかおりしました。この水利権を決めたことを記念して碑が立っています。此の碑の附近は現在、水は流れています。

金丸川の水車について、今の鈴木方西の坂が、大正六年水車が出来ました。

キネが四本、製粉、挽割一通り揃った便利の水車で皆さんが喜んで居りました。ところが大正十二年の大地震後段々川水が減り、廃車のやむなき至りました。実に残念でした。現在でもその跡は残っています。

此の金丸川にはカジカと言う頭の大きい川魚が居りました。宮城村で言植時引水を盗んで川水が干上るとゴロゴロ魚が拾えました。

又此の川は、夏から秋にかけて時々豪雨の時は道や畑に氾濫して村人を困らせました。

##### ○小坂子用水

金丸川からの水だけでは、まだ十分な水量がなかったので、小坂子の人々は、もう一つ用水を作ることを考えました。これが、小坂子用水です。

小坂子用水は、富士見村の皆沢から金丸通り笹原沼の西で金丸川と合流していました。

皆沢川も水量は十分でなく富士見村の米を作る人達との間に水あらそいがありました。

そこで小坂子の人達は、田に水を入れる間、用水の取り入れ口のそばに、見はり小屋をたてて毎日水番をしました。

小坂子用水も今は流れていませんが、川のあととは残っています。

二つの用水は、大正十二年の関東大震災の後水が少なくなり、この水を利用していた人々は、大変こまりました。

○地名

金丸と言う地名はどこにも無く全く不可解です。登記所では全部赤城山となつて居りました。思うのに金丸川が宮城・大胡・芳賀と三地区に渡り流れて居るので此の地全部を金丸と呼んでいたのです。しかも此の金丸の呼名大変古くから呼ばれていました。

書上が村会で正式に金丸と呼称大字設定を致しましたのが昭和二十四年でした。又金丸では、小さな地名が有りました。南部中嶋から北方公民館附近迄が縄しめし、米山から書上前迄上寺沢、書上より北方羽鳥前迄鎌取坂、地名のいはれ縄しめしは、青草や落葉等取時に縄が強くなる様水にひたしたからです。上寺沢は昔沼の北に寺が有つたのでその名を取つたのです。鎌取り濯坂は昔三夜沢に武士上りの強い者が居て勢内誇示する為、草刈人の鎌を取り上げて、自分の勢内範囲を示したのです。

又西の方に猿木林と言う広い土地がありました。それは元前橋藩の武士で廃藩になつた時に猿木小十郎と言う人が其のへんを領有していたと言われています。

今一ヶ所、栄太郎林と言う広い土地がありました。それは猿木より早くまだ前橋藩が廃藩にならない前に赤城南面の住民に将来は君達の山になるとの約束で、大面積に植林した人が青木栄太郎と言う藩士でした。其の内に廃藩になり、新政府の役人が青木に領村分を残して外全部を新政府に返還する様命じましたので、其の一部が今の小島附近一帯の広い土地を領有して居りました。其の栄太郎の孫に高橋錦次が居ります。

又猿木林の南方に五厘と言う地名の広い土地が有りますが、細かいことは不明です。

## (2) 秣場から黒松林へ

明治九年までは、所有者未定の原野として、近くの農家の秣場だった金丸も、明治十年初めて今井助作と言う人が測量を行い官有地となりました。従つて、金丸の草を刈る村は、借地として金をはらうことになりました。

その後、明治二十二年皇宮附属地、同二十三年御料地となりましたが引続いて借地でした。

明治二十六年には、赤城南面の秣場を全部借りるために関係している一六八の町村で赤城興業組合を作りました。借りた面積は、実測六六〇町歩です。

一六八の町村は、東は新里村から西は、赤城村までで、赤城山の南面と西の面にいたる間です。

赤城山興業組合は、借りた広い土地を、一六八の町村に分けました。各町村は、秣場にしておいては、あまりお金にもならないので将来を考え、植林することにしました。植えた木は黒松(八十パーセント)・ひのき・杉・くぬぎ・落葉松・栗・なら等です。黒松が多いのは、火山灰地で水分があまりなくても良く育つからです。このことは、富士見の船津伝次平が教えてくれました。現在も赤城南面に黒松が多いのは、そのためです。

各町村で植えたところには、町村名をつけておきました。今の公民館のあるところは、小坂子で植林したため、小坂子林です。その他、嶺林、神明山、勝沢林などあります。



### (3) 金丸に初めて人が住む

大正になると人々が全く住めなかつた荒地も、このころになると、黒松が大きく育ち、黒松林に変わっていました。

移住してきた人達は、住んでいる小屋のまわりの木を切り草道をほりおこして畑を作り、こく物をまいて生活しました。

大正時代になると近くの村から、さらに何人かの人達が、移住して来ました。

この人達は、水の便利な、金丸川近くに住みました。今の公民館があるところを中心に、書上商店から、南面道路にいたる間です。

金丸の原野、黒松林に入って来た人達は、それぞれ大変な決心だったと思いますが、土地を開き新しい村を作るために心はもえていました。

大正時代の金丸は冬は雪多く、寒い自然の中に山兔が多く、農家の庭迄出てきました。りす、山鳥、雉を始め、其の他の野鳥多く又猟師も金丸で七人居りました。時々鉄砲の音が山々にひびき渡りました。春は農の時付で多忙でした。真白いそばの花盛りは、雪が降った様でした。

夏は暑くて嶺の沼は水遊びで盛んでした。賑やかなのは朝早くカッコー鳥の鳴声山々にひびき渡り、又日中は松蟬の鳴声夕方はヒグラシ蟬の淋しい声又蚊の大軍やブヨ(毒性)には悩されました。夜は各村々で盆踊が盛んでした。

秋はなんとといっても初茸で金丸の現金収入に役立った。山で取る人と前橋へ行商する人は別々で売買がよく行われた。これは約一ヶ月位続きました。山で茸取りが一番注意するのはマムシ蛇で猛毒を持って

居り、やられたら大変です。又此の蛇は高く売れるので蛇取りの名人も居りました。又夜は鈴虫がよい声でなく有様は、音楽を聞く様でした。又夏の夜は、寺沢沼から沢山の「ホタル」が飛来してとても見事であった。

金丸十字路から、雄牛センターに至る間は、水の便が悪く、人々は住めませんでした。

金丸の西は、富士見とのさかいは小坂子用水があり、また、きれいなわき水もあつたので人々は住むことができました。

明治時代に芳賀金丸に移住した人は一之関の米山長十郎(今の米山)、滝窪の井上龍造(今の大島の所)、出身地不明の中上儀平(今の米書上昭一の所)の三人で内、井上と中上は大胡金丸に転出した。

大正初期に転出した人々に米山の前に養田某、裏にヨカヨカ飴屋の〇〇富吉、大島の所に田島清作、公民館の所に元人力車引の〇〇要造、宮内の前に〇〇権吉、重田の所に六本木高次 以上六人

次に大正の初期から後期にかけて移住した人々は嶋村頼吉、田中治徳、北爪豊太、書上信平、羽鳥啓二郎、小島長二郎、栗原清太郎、内田晴吉、山田金助、磯田亦一、小林勇三郎、小林長七、松本常吉、猪岡四五六、山本定吉、石井吉太郎、宮内直二郎、重田千造、境野長太郎、大島要太郎、鈴木忠平、須田茂十郎、狩野福造、小林幾造、入沢安次、北爪千代吉、須田浅二郎、小池米三郎、須田与吉、猪岡算三郎、須田浜吉、以上三十一人と米山長十郎で合計三十二戸で右の人々が赤城山御料地の私下事件の組合員となる。

#### 畑に作ったもの

そば・大麦・小麦・さつまいも・あわ・ひえ・ちようせんひえ・大豆・小豆・おかぼ・とうもろこしなどでした。

## 生活のようす

水不足なので風呂は近所の家同士で交替にたてました。三戸位ですが、一戸七、八人の人数なのでたちまち湯が濁ってしまいますが、水に不便なので三回位続けて利用すると臭かったが、風呂から上って茶を呑ながら世間話に花が咲き楽しい一時でした。風呂に恵まれ無い子供は、手足が真黒で金丸土人と言われた。

災害は大正から昭和の初期に年一回は必らず、多い時は三回位、天災がありました。其の主なのは、秋の雑穀の実った頃、大つぶの降雹で作物は全滅の災害に暗然としました。

又秋には必ず一、二回は台風に見舞われ、松の木、桂の堀立家はばたばたと破壊されたが、幸い死傷者は無かった。

災害で食料不足の時県で南京米の持配があつた。

食料状態は米がとれないので、粗食で麦の引割に芋類を入れて汁は葉類沢山入れおかずは、野菜の塩漬で夜はうどんの中に色々の野菜を沢山入れて食べました。又雑穀の粉でもちを造り、ゆでたり、焼いたりして食べました。其の中でも、そば粉でそばかきと言うのは、うまくあつた。今考えて見るとカロリーは少なかつたが、幸に山兎や山鳥、鶏、時には家畜の豚、山羊等共同で食べたので少しは栄養も取れたようでした。

又未開の山村で居酒屋で昼間から夜にかけて酒呑みの人達は多く、中には女性も居り酔が廻ると、よく喧嘩したが、翌日はケロリとして居た。

## ○着ていた物

上は、たけの短い作業用の着物やはんてん、下は、作業用ももひきやもんぺで、いづれもそまつなものでした。或る寒い朝のこと母親は赤ちゃんを素肌背負い其の上に何枚ものポロの着物を着て朝食の用

意をして居る姿は私は見た事があります。

## ○収入源

夏のおぼん前は、山に行つて花をたくさん取り、前橋の町で売り歩きました。ほとけさまにそなえるため、生花がよく売れました。ききょう、あわばな、山などでしこなどです。

当時養蚕が盛んで多くの人が出勤しました。

一年を通してよく売れたのはまつかさです。この頃は、まだガスなどなかつたためどの家庭でも火をもしてごはんをたいたり、おふるをわかしました。火をますときのたきつけにまつかさを使いました。

家族みんなでまつかさをひろい庭にほしておくとき大きくひらきました。それをふくろにつめて町へ持つていきました。町では、たきつけがきちよう品だったので、よくうれました。まつかさ売りは、昭和の初めまでつづきました。あさぶくろ一つにつめて五銭ぐらいでした。

大正四年には、白米一升十五銭でした。

## ○住居

家の柱は、近くにある松の木で、屋根は、麦わらやかやでした。近所の人達が協力して作りました。

夏はずいずいなのですが、冬の雪の日、雨の日は寒さで大変でした。

## ○子どもの遊び

ボールなげ、山こけをかわかしぬのでつつみ糸でまくとボールになる。竹馬、竹なんご、ゆみ、たこあげ、きんま、ねつくい

## ○乗り物

乗り物では、高橋久次郎が大正七年に自転車を乗り廻した。書上守一が昭和十二年に自動三輪車を運転し、芳賀村で第一号でした。

#### (4) 赤城山御料地払い下げもんだい

大崎幸造さんが初めて大胡金丸に来てからおよそ四十年、前橋金丸に人々が住んでから二十年近くたちました。この間少しづつ人々が増え、大正の末頃には、前橋金丸、大胡金丸、宮城金丸を合わせて、およそ百戸、九百人ぐらいの人々が住んでいました。

これらの人々は、地主の赤城山興業組合から借りた土地を開墾し一戸平均七反ぐらいの畑を持っていました。住む家、着る物もそまつな物で、食べる物も十分ではありませんでした。しかし、七反の畑をたがやし、手間賃取りや、林産物の収入で何とか生活していました。その頃、皇室の仕事をする宮内省では、御料地を国民に払い下げることになりました。

宮内省の中にある帝室林野管理局では、金丸の土地も赤城山興業組合に払い下げることになりました。

赤城山興業組合は、植林をすることを目的として、六六〇町歩の土地を借りていたがそのうちの一一〇町歩は、さらに小作人にまたがしをしていた。したがって、土地を買い取る払い下げの話があつたときは、小作人に出てもらいたかつた。

赤城山興業組合に入っている町村の中には、金丸の人たちに早く出ていってほしいので小作人の畑へ松の苗木を植えてしまうこともあつた。

この地に永住を決意していた人々は、とほうにくれました。金丸に入り開拓して十数年苦勞をかさねてやつと手にした土地で、何とか生活ができるようになっていたからです。何度も集まり相談しましたが良い考えはありませんでした。

この人達の苦しみをよそに、大正十四年十二月十八日、土地は、赤城山興業組合に払い下げられました。

土地が赤城山興業組合に払い下げられてしまい、金丸の人達にはどうすることもできなくなりました。そんな時、大胡町の後藤金次郎さんが、前橋の鈴木留太郎さんにお願ひしてみても、と提案しました。金丸の代表の人達は、鈴木さんのところへ行き、土地の問題を話し、何とか力になって下さいとお願ひしました。

鈴木さんは、「これは、大きな問題で、社会問題だ。金丸の人達も土地をおわれたら行くところがなくこまるだろう。」  
「いい、土地をとりもどすために、力になることを約束してくれました。」

当時、鈴木さんは前橋市連雀町に住んでいました。

鈴木さんが外出の時は、中オレ帽子に五ツ紋仙台平の袴、白足袋に厚い草履、ステッキ、巻タバコ、一吸してすぐ火ばちに刺す。吸ガラの林が出来る佐倉宗吾信奉者だつた。

鈴木さんは、金丸で農民全部を集め代表十二名を選ばせると、さつそく、宮内省や、帝室林野管理局と交渉を始めました。また、十二名

の代表は、時々家をあけ、畑仕事などできないので他の人達は、仕事を手伝ったり、食物などもちよつて助け合いました。

宮内省とは何度交渉してもだめでした。そこでついに裁判に持ち



鈴木留太郎さん

みました。

裁判は、赤城山興業組合に土地を払い下げたことは、まちがつてい  
る。小作人である金丸の人々に払い下げるべきだ、というもので、御  
料地払下無効確認訴訟といいました。

金丸の人々は、昭和元年に 赤城開墾組合をつくり裁判にもちこむ  
うったえた人、原告 赤城開墾組合、九三名の小作人  
うったえられた人、被告 宮内省 宮内大臣 一木喜徳郎

裁判所 前橋地方裁判所

裁判であらそつた中心は、

御料地を払い下げることについては、宮内省で決めた不存地特売法  
規の中に、御料地は、その土地に一番関係しているえんこ者に払い下げ  
る、と書かれている。

興業組合は、自分達が借りた土地だから えんこ者は 自分達である。  
開こん組合は、小作人とはいえ、この土地に住んで十数年開こんして  
畑を作つたのは自分達だから えんこ者は 私達である。

そこで 裁判の中心は、えんこ者は、誰れか、ということになった。

裁判をするには、たくさんのお金が必要である。しかし、金丸の人々  
には、そのお金がなかった。そこで、各町村から、土地、財産、お金は  
ありませんという、貧民の証明をもらつた。この証明があると、裁判に  
お金がかからない。

裁判中ではあつたが、鈴木さんは帝室林野局へ直訴した方がよいと言  
うので全員九十名が、ボロボロのみすぼらしい服装で夜明前に汽車に  
乗つて 先ず 千葉の佐倉宗吾神社に行つて 今日の嘆願が成功する様に  
大護摩をたいて祈願しました。再び汽車に乗つて、上野で降りて日比谷  
公園迄来た所 数名の警官に怪まれ ストップさせられた。鈴木さんは、  
山奥の貧しい農民が神参りだと言うと警官も諒解しました。

いよいよ帝室林野管理局に到着 大きな門の中へぞろぞろと入り始め  
た所、局長が非常に驚き 一旦は大門の外へ追出されたが、代表十二名

と鈴木さんが役所へ入ることに成り、他の者は門内に静かにしている様  
にこのことで 私も庭に休んで居りました。

此の中で私は、一番年若の十九才でした。

約二時間近い会談が終り、代表はゾロゾロ出て来ました。其の模様  
によると、鈴木さんと係官の間でかなりの論争があり鈴木さんもついに腹  
を立て係官に「このヘツピリ腰野郎」と一喝したと後で聞きました。

鈴木さんは、裁判であらそつている間も時々馬で金丸へ来て（畜産試  
験場まで自動車）

「金丸の人達は 九三人しつかり団結してくれ。興業組合から甘い言葉  
をかけられても 決してつてはいけない、一人でも落ご者を出しては  
ならない。そうすれば、裁判は かならずかつ。」

裁判は、六回の口頭弁論が開かれ、七回目、昭和三年八月二十一日  
に終りました。

裁判長は、「和解せよ」の判決を出しました。

金丸の人達は、ついに勝つたのです。鈴木さんと、三人の弁護士を  
中心にして、九三人の人々は、団結を守り、三年半の間苦しい中でよ  
くたたかい土地を自分達のものにしました。

赤城山興業組合で払い下げた土地のうち、金丸の人達の分は、お金  
を払い、買ひもどしました。しかし、金丸の人達にとつてこのお金を  
つくることはたいへんでした。

ある人は、家族を年季奉公に出したり、嫁入衣しやうを売つたり、  
馬の子を秋に売れば高いのにやすく売つたりして、お金をつくりまし  
た。県からもお金を借りましたがまだ六千円足りませんでした。そこ  
で鈴木さんが、六千円を出してくれました。

当時米一俵が金十二円二十八銭でした。（昭和三年）  
裁判により自分達の土地になったことを記念して碑をたてました。

其の碑は今大胡金丸の本間の前に有ります。

鈴木留太郎さんは、昭和十四年八十才でなくなりました。しかし、赤城開墾組合の人達は、昭和四年から今日まで、代表が鈴木さんの家にかがいてお世話になったお礼をしています。

毎年一月九日の初市に代表者十人位でうかがっています。

### (5) 発展への道づくり

土地の訴訟問題も解決し、小作人から地主になった人々は、いよいよ新しい村づくりにとりかかりました。

金丸でとれたこく物など前橋の町に売りに行く場合今の嶺小前の道路を下ったわけですが、道は細く急だったため大変な苦勞がありました。特に、嶺小から三百メートルぐらいのところは、急な坂道で荷車など少し荷物を積むと二人でも上がらない程でした。

そこで産業を興すには、まず道路が良くなければならないと考え、新しい道路を作りました。この道路は、現在の南面道路からおよそ百五十メートル下で、公園の北側のかなあみにそって西にまっすぐのびています。

富士見村の皆沢川までおよそ二キロメートル道路を作りましたが、すべて金丸の人達だけで作業をしました。皆沢川は深い沢になっていたのでここに橋をかけました。橋づくりは、最後の大変な工事でした。皆沢川から畜産試験場までは良い道路があり、そこから今の赤城県道を下りました。

道路は、畑の中に作られましたが、畑の持ち主は、快く提供してくれました。

この工事は、昭和五年に始め六年に終わりましたが、およそ二十人ぐらいの人達が農作業のあい間に少しずつやりました。産業を興こすた

めの新しい道路が完成し記念してたてたのが公民館にある「興産」の碑です。

ランプ生活から電燈が入ったのは昭和二十二年四月の事でした。

### (6) 戦後の開拓金丸の西側

昭和二十年第二次大戦が終わると、日本は、食糧不足が大きな問題となりました。

そこで政府は、食糧増産対策と、海外引あげ者、復員者、戦災者、仕事のない者、農家の二、三男対策とをあわせて、土地を広くひらき、畑を増やすことを考えました。

金丸の西側の土地も国の計画で開墾が始められました。

昭和二十二年から二十四年まで三回にわたり入植者が入りましたが、入植する人達には、きびしいしんさがありました。入植者数合計三十五戸でした。

与えられた土地は、一戸当り耕地一町五反、宅地一反で計一町六反です。

一町五反の土地を畑にすることは、大変な仕事で何年もかかりました。

前に植林した黒松は、全部切りたおされ大きな切りかぶが、たくさんありました。西側の開墾は、この大きな切りかぶをほり出すことが主な仕事でした。

畑にした土地には、こく物のたねをまき、その手入れをしなければならず、またさらに新しいところを畑にしていかなければなりません。切りかぶは、まきにして町へ持つていくと売れました。おかぼ、さつまいも、じゃがいもなども売ってお金にしました。しかしせっかくの畑も土地がやせていくもつは、思うようにとれませんでした。

新しく開拓をはじめた人達も、数年たった昭和三十年頃になると、このまま、畑にこく物を作っていたのでは、生活は苦しいので、何か新しい農業を考えなければなりませんでした。

### (7) こく物から花木へ

現在の金丸は、ほとんどの土地へ植木や花が植えられています。ハウスには、バラやカスミ草があります。これは、やせた土地にこく物を作るかわりに考えられた農業です。

昭和三十四、五年には金丸の開墾も全部終わりました。そして、その土地へは収入の良い花木が植えられるようになりました。又当時、赤城山独特の黒松が植木として盛んに成りました。

昭和四十年になると花木の専業が増加しました。それは、金丸の花がよく売れるようになったためです。金丸は高冷地で品質、色彩、花もちが良いため、市場でよく花が売れました。

昭和五十二年群馬用水の完成で畑に給水設備ができると便利になり花木づくりがさかんになりました。其れを記念して昭和六十年十月就農組合開拓記念碑の建設を見ました。

### (8) 金丸分校の開校

嶺小学校へ通学せよとの通知、大正五年十月に芳賀役場より有りました。当時嶺小は三人でした。他に四人居りましたが、滝窪小学校の方へ通学しました。

金丸の子ども達にとって、旧嶺小へ往復十キロメートルの通学は、たいへんでした。特に、雨の日や、雪の日などは、着る物、はく物など良い物がないたため、欠席が多くなりました。大正から昭和にかけて、この状態は、ずっと続きました。そして戦後の開拓が始まり子ども達

が多くなると、問題はさらにしんどくなりました。

昭和二十二年村会議員となった書上守一は、分校設立のために努力しました。村の議会や、県の議員、郡の視学官などへお願いしましたが、なかなか良い返事はありませんでした。分校を作るために関係するいろいろなところへお願いに行きましたが、さいわいにして勢多選出の伴内県議さんの御骨おりで、県から十四万円の補助金がおりので、村でも分校を作ることを、許可しました。(米一俵七百六十円)

長い間の夢がかない、人々はたいせん喜びました。

校舎を作ることや、校庭の整地はすべて金丸の人達でやりました。昭和二十三年十二月二十三日、芳賀村立嶺小学校金丸分校が誕生しました。

初めは、一年生から四年生までが分校で五、六年生は嶺小へ行く予定でしたが、その後、六年生まで全員が分校で学べるようになりました。秋の運動会は、分校の子どもたちと、お年よりまで金丸の人全部で楽しみました。其の後嶺小も分校も生徒数が非常に減ったので金丸の北端より嶺の南端の中間に新校舎を建設しました。

昭和四十三年六月旧嶺小と金丸分校は、いっしょになり現在の嶺小となりました。

### (9) 十二神社について

金丸の御十二様について、此の神様は書上商店前の十字路に在り、とても古い明治十年頃より持主不明の石造高さ二尺五寸位で、三重組立で、石はカラガマ石(とても軽い石)造られ、山の神として祭られて来た。

金丸より入隊除隊出征等皆村中来て送迎した此の神様を昭和四十年頃庭園ブームの時、何者かに盗まれてしまった。真に残念でした。又

赤松の大きな木が一本有りそれが地主に切られてしまい残念でした。

## (10) 金丸の赤城神社について

終戦後昭和二十四年マッカーサー元帥より日本の各地に在る戦争に  
関した神社や記念碑を目につかない所へ撤去せよとの通達あり、芳賀  
村でも第一に日清、日露以来、大小の戦争で戦死した兵士の御霊を祀  
った英霊殿(今の公民館に在った)、他に異動しなければならぬこと  
になって、当時芳賀村に在郷軍人会が困っていたのを聞いた書上は、  
直に金丸の神社として頂きたいと申込んだところ大喜びで金丸へ移す  
事になり、神社の御礼金とし金壹千円也包金として支払った。

金丸村中の人々は大喜びで一戸一人出て、英霊殿を(通)の大形トラッ  
クで赤城県道廻りで運んだのですが、途中一の鳥居が通過出来ず(当  
時の鳥居は小さかった)、農協の庭を借りて、金丸へ来る途中電線を切  
る事数回ようやく現地に鎮座する事が出来ました。

以来三十六年目で大分腐植したので、時の自治会長山本吉男の発言  
で大改修が出来た事は喜びにたえません。

## (11) 水道

金丸の人々が、使っていた水は、金丸川、小坂子用水、寺沢沼の泉  
などです。金丸は、深い井戸をほつても水が出なかつたからです。戦  
後になって人家がふえると、水から遠い所に住んでいる人達は、大変  
不便でした。従つて水道を引くことはみんなの願ひでした。

そこで、富士見村の皆沢川上流の江戸くぼからわき出している泉の  
水をもらい、水道を引く計画がすすめられました。

昭和二十六年五月五日芳賀村と富士見村の代表が富士見農協の二階で



江戸くぼの水源地

会議をする。

芳賀村代表 村長山田幸太良  
村会議員書上守一。富士見村代表  
村長大友常見 助役樺沢貞三。そ  
の他両村の代表者十名ずつ。

富士見村から出された誓約書に  
は、

○田植えの時は、水が必要だか  
ら、金丸の水道に水が行かな  
いこともある。

○水道小屋のかぎは、富士見村  
で管理する。

などいくつかのきびしい条件が  
あります。

山田村長は、この条件を見て署名することをちゅうちよしましたが、  
書上は、とにかく水をもらい水道を引くことが先だからきびしい条件  
については後で考えようと、村長と話し合い、署名捺印しました。  
七月には、ヒューム管をふせる工事が始まり、九月から家庭で水道が  
使える様になり、大喜びでした。

此の水道を十年間使用していました。

昭和三十七年には、開拓地に対し、農林省が地下水利用の水道を作っ  
てくれました。現在の水道です。

## (12) 是れからの金丸

金丸に人が住んでから、およそ八十年の間色々な問題を解決し力  
強く生きてきました。

土地の条件を生した金丸はこの二十年間めざましい進歩をとげました。現在、金丸の戸数一二二戸人口は四七六人、自動車は大小で約三〇〇台、押しも押されもしない一人前の金丸に発展を致しました事は御同慶に耐いません。

今後、花木始め果樹等も研究して土地の条件を生かす農業を心掛けて、更に金丸の大発展を希望して止みません。

書上守一著「金丸の今昔物語」(昭和六十二年一月発行)より





モシキ……………90  
 餅……………67  
 モチつき……………354, 376  
 物置……………82  
 物置小屋……………7  
 ものもらい……………224, 224, 255  
 喪服……………4, 53  
 モモヒキ……………50  
 桃割れ……………56  
 モライ一見……………310  
 モライッコ……………265  
 もらい水……………92  
 モロ……………83  
 モロコシ……………60  
 文句……………389  
 モンペ……………4, 51

や

ヤウツリ……………97  
 八木節……………251  
 焼き飯……………61  
 やきもち……………6  
 焼餅……………63, 450  
 役員……………34  
 やくおとし……………255  
 薬師様……………128  
 薬師堂……………177  
 厄年……………18, 228, 262, 290  
 厄除け……………290, 292  
 やけど……………225  
 野菜……………60  
 八坂神社……………123, 134, 213  
 屋敷稻荷……………23, 83, 114  
 屋敷神……………12, 114  
 屋敷どり……………6, 82  
 屋敷へび……………82  
 休み日……………355  
 ヤツデ……………221  
 屋根がえ……………97  
 屋根葺き……………96  
 屋根葺き職人……………105  
 八柱神社……………125  
 ヤブ入り……………355  
 山……………37  
 山入り……………348  
 山街道……………106  
 山の神……………125  
 山はじめ……………21  
 山ハジメ……………456

山開き……………22, 134, 362  
 やんめ……………225  
 ヤンメの神様……………129

ゆ

結納……………307  
 夕食……………76, 450  
 有線……………108  
 有線電話……………10  
 湯灌……………20, 331  
 ユキノシタ……………221  
 ゆで饅頭……………64  
 湯之気曲輪……………387  
 夢……………226  
 由来……………29  
 ユルリ……………88

よ

夜あそび……………48, 294, 300  
 ヨイマチ……………117  
 養蚕……………10, 103, 134, 453  
 用水……………99  
 ヨコサンヤシキ……………137  
 ヨソイギ……………51  
 四足門……………390  
 夜泣き……………224, 291, 391  
 夜泣き観音……………129  
 夜泣き地藏……………390  
 夜なべ仕事……………98  
 よばい……………48  
 嫁入り……………309  
 嫁入り行列……………314  
 嫁御ぎもん……………5  
 嫁迎え……………309  
 寄り合い……………36  
 寄居……………385

ら

雷電様……………125  
 ラジオ……………94  
 ランプ……………94

り

離婚……………327  
 リヤカー……………10, 108  
 龍蔵寺……………121, 392

竜沢寺……………194  
 旅行……………106

る

るす神……………373  
 ルスンギョウ……………11

れ

レンガ焼き……………105

ろ

浪曲……………255  
 六斎市……………11  
 六三除け……………138, 228  
 六所神社……………121, 210

わ

ワカイシ……………44  
 わかいしゅ組……………2  
 若い衆組……………43  
 若一王子神社……………193  
 若水……………345  
 わかれん……………2  
 ワカレン……………44  
 若連……………297  
 綿……………59  
 ワラ……………100  
 草鞋……………51  
 ワラジガケ……………54  
 ワラ仕事……………98  
 ワラジヌギ……………3  
 藁草履……………52, 54  
 ワラタタキ石……………89

フゴ .....392  
 不整形田字間取り .....412  
 二間取り .....395  
 ふだん着 .....4  
 普段着 .....50  
 仏壇 .....11, 114  
 ブッチメ .....391  
 不動様 .....130  
 布団 .....5  
 蒲団 .....59  
 フミゴザ .....79  
 フレ番 .....2, 10, 34  
 触れ番役 .....108  
 風呂 .....92, 225, 391, 452  
 風呂川 .....27  
 分家 .....3, 47  
 粉食 .....5

へ

兵隊ごっこ .....296  
 臍の緒 .....275  
 ヘツツイ .....88  
 へっぶり嫁御 .....383  
 へび .....227  
 ヘヤ .....8, 86, 271  
 便所 .....7, 93, 452  
 便所神 .....113  
 便所まいり .....18  
 ベンジョまいり .....281  
 弁天講 .....132  
 弁天様 .....130  
 弁当 .....78

ほ

ホイロ .....88  
 棒うち .....98  
 ホウカムリ .....54  
 ほうき .....218  
 帽子 .....54  
 法事 .....341  
 宝禅寺 .....201  
 ほうそう .....224  
 ほうそう神 .....455  
 包丁 .....80  
 防風林 .....82  
 宝林寺 .....182  
 焙烙 .....79, 220  
 細井神社 .....119, 157

ボタ餅 .....67  
 ぼたもちの話 .....384  
 ホド神 .....113  
 ホラ貝 .....10, 108  
 堀あげ .....38  
 堀払い .....38  
 盆 .....22, 364, 456  
 本膳 .....322

ま

埋薪法 .....103  
 前ぶれ .....227  
 枕 .....5, 59, 218  
 枕団子 .....330  
 馬子唄 .....245  
 マゴノテ .....79  
 まじない .....227  
 まぜ御飯 .....67  
 摩多利神 .....13, 129  
 待ち女房 .....315  
 町家造り .....430  
 松毬 .....453  
 祭り .....12  
 間取り .....7  
 マブシ .....104  
 豆 .....60  
 豆まき .....21  
 繭 .....104  
 まゆかき .....355  
 まゆだま .....352, 353  
 マユダマ .....358  
 まりつき歌 .....261  
 丸尾講 .....138  
 丸鬻 .....56  
 まわり舞台 .....257  
 マンガ祝い .....363  
 万才 .....252, 255  
 まんじゅう .....6  
 マント .....52

み

見合い .....303  
 水掛け着物 .....342  
 水ガメ .....88  
 水げんか .....8  
 水世話人 .....29  
 水不足 .....8  
 水虫 .....226

水盛 .....94  
 味噌 .....72  
 ミソコシ .....79  
 味噌汁 .....68  
 道あげ .....306  
 道しるべ .....107  
 道普請 .....37  
 三俣神社 .....41, 190  
 三峯講 .....15, 46, 132, 138  
 峯太々神楽 .....231  
 嶺の神楽 .....16  
 ミノ .....55  
 三間取り .....395  
 ミミズ .....223  
 耳塚の薬師 .....128  
 耳ふさぎ .....20  
 三夜沢街道 .....106

む

六日年 .....349  
 ムカエイチゲン .....309  
 ムカデ .....223  
 麦 .....60, 102  
 麦打ち唄 .....243  
 ムギまき .....10  
 麦わら地藏 .....13  
 麦わら地藏 .....128  
 婿取り .....304  
 婿どんぎもん .....5  
 虫 .....223  
 虫歯 .....222  
 虫封じ .....291  
 棟上げ .....218  
 村人足 .....392  
 ムラマワリ .....310  
 村廻り .....323

め

名物 .....390  
 命名 .....280, 455  
 メカイ .....369  
 メカゴ .....224  
 飯 .....61  
 メハジキ .....339

も

もぐら除け .....227

日輪寺 .....121, 175  
 新田塚 .....385  
 二百十日 .....369  
 ニボウトウ .....63  
 煮物 .....69  
 ニュウ .....83  
 入植 .....449  
 如意寺 .....204  
 庭 .....7, 82  
 庭帳 .....20  
 ニワトコ .....230  
 妊娠 .....265  
 妊婦 .....265

ぬ

沼田街道 .....10, 27

ね

願い事 .....227  
 ねじっこ .....6  
 ネジッコ .....63  
 寝小便 .....222  
 ネズミフサギ .....373  
 ネツキ .....296  
 根っ子祇園 .....259  
 ネドコ .....414  
 寝間 .....87  
 寝間着 .....59  
 年忌 .....343  
 ねんご .....226  
 年始回り .....348  
 年番 .....34  
 念仏 .....246  
 念仏供養 .....341  
 念仏講 .....132  
 念仏橋 .....107, 216  
 燃料 .....89

の

ノイチゴ .....221  
 納棺 .....333  
 農繁休暇 .....37  
 農休み .....2, 22, 37, 363, 456  
 後産 .....274  
 のど .....223  
 野辺送り .....20  
 野辺の送り .....336

野良着 .....50

は

歯 .....226  
 排水 .....93  
 排水路 .....83  
 歯痛 .....222  
 羽織 .....4, 52  
 墓 .....456  
 墓づくり .....339  
 掃木松 .....127  
 履物 .....54  
 萩原重左衛門 .....385  
 バクチ場 .....456  
 バクロウ .....105  
 箱膳 .....78  
 橋 .....106  
 ハシカ .....291  
 柱 .....95  
 機織り .....57  
 はたおり .....99  
 畑 .....453  
 蜂 .....222  
 八十八夜 .....361  
 鉢巻き .....54  
 八幡宮 .....119, 162  
 八幡様 .....116, 125  
 八幡山 .....390  
 初午 .....21, 358  
 初絵売り .....255  
 初買い .....348  
 二十日正月 .....356  
 八朔 .....22  
 八朔節句 .....325  
 八朔の節句 .....368  
 初節句 .....287, 361  
 初誕生 .....455  
 八丁ジメ .....37  
 八丁注連 .....137  
 初穂米 .....122  
 初参り .....345  
 初もうで .....345, 377  
 初ヨメ .....348  
 馬頭観音 .....134  
 鼻 .....223  
 ハナ .....351  
 花祭り .....22, 361  
 花嫁衣装 .....53  
 腹帯 .....268

腹くだし .....223  
 張り板 .....58  
 針供養 .....358  
 春駒 .....254  
 榛名講 .....46  
 春祭り .....359, 361  
 班 .....2, 35  
 半夏 .....8  
 半鐘 .....10, 108  
 半纏 .....4, 51

ひ

ヒイラギ .....357  
 日枝神社 .....41  
 彼岸 .....23, 360  
 ひきつけ .....224  
 ヒキワリ .....60  
 ひしゃく .....266  
 ヒシャク .....279  
 左住居 .....220  
 ヒッケエシナノカ .....341  
 ひでり .....99  
 ひとえもん .....5  
 ヒトザシキ .....311  
 ヒトナノカ .....342  
 ひなまつり .....22  
 ヒノエウマ .....137  
 火ノ神様 .....11  
 火のし .....57  
 ヒバ .....71, 221  
 百社参り .....46  
 百万遍 .....364  
 百万遍念仏 .....16, 135, 246  
 冷汁 .....68  
 肥料 .....99, 102, 454  
 拾い親 .....285  
 披露宴 .....321  
 ピワ .....221  
 火渡り .....138

ふ

ふかし饅頭 .....63  
 副業 .....99  
 副食物 .....5  
 福德寺 .....121  
 福守様 .....126, 265  
 福守神社 .....178  
 袋 .....59

ち

チカズキ .....311

力じまん .....390

力だめし .....264

チカラメシ .....335

乳 .....277

茶 .....80

茶柱 .....228

中気 .....225

中耳炎 .....222

昼食 .....76

中二階 .....89

中宿 .....310, 315

チョイチョイ着 .....50

朝食 .....75

帳台構え .....400

手斧 .....396

貯蔵 .....71

チンケ .....280

鎮守様 .....12

賃びき .....29

つ

通婚圏 .....309

ツクリモノ .....351

つくろい .....58

告げ .....334, 456

ツケ木 .....94

つけ物 .....70

堤沼 .....390

堤の獅子講 .....241

ツネギ .....50

椿の森稻荷 .....124

通夜 .....20, 330

吊り橋 .....28

つるべ縄 .....92

て

デードコ .....401

出かせぎ .....98

できもの .....223

デキモノ .....225

鉄釜 .....78

鉄鍋 .....79

鉄瓶 .....79

鉄砲火事 .....385

鉄砲馬場 .....390

手拭 .....53

出念仏 .....338

寺 .....42

寺子屋 .....31, 390

寺沢用水 .....99

寺総代 .....122

テレビ .....94

てんかん .....223

電気 .....94

天狗 .....138

天候 .....228

天神川 .....28

天神講 .....14, 21, 44, 131, 356, 372

374

天神様 .....125, 368

天道念仏 .....45, 246, 360

天王まつり .....123

と

砥石 .....218

灯火 .....452

十日夜 .....23, 264

トウカンヤ .....456

胴着 .....51

道具送り .....315

冬至 .....220, 225, 374

トウスミ .....94

道祖神 .....126

トウモロコシ .....220

とうりゅう様 .....127

棟梁送り .....95

道路 .....27

トウロウ .....45

灯籠 .....118

とうろう .....368

灯籠祭り .....120, 125, 258

道陸神講 .....15, 132

道路普請 .....15

十日夜 .....370

トーデエ .....422

通り庭式民家 .....430

戸隠講 .....46, 133

ドクダミ .....222, 230

とげ .....225

床上げ .....283

床入れ .....322

年祝い .....19, 294

年神様 .....377

渡船場 .....27, 106

土蔵 .....7

土葬 .....338

鳥取 .....385

とぼ口 .....7

トボグチ .....396

土用干し .....5

ドラ焼き .....64

トリアゲバアサン .....272

取り結び .....319

鳥目 .....223

泥棒除けの縄 .....227

とろろ .....225

ドンド焼き .....353

ドンドン焼き .....44

呑竜さま .....290

な

内職 .....99

苗代 .....9, 101

ナカノマ .....85

流れ灌頂 .....279

仲人 .....304

仲人まわり .....308

仲人礼 .....326

名付け .....18

菜種油 .....74

七草 .....349

七草粥 .....66, 251

ナノカ念仏 .....341

成り木ぜめ .....355

縄 .....230

縄しめし .....450

縄とび .....264

ナワとび .....295

なわない .....98

ナンド .....87, 271, 402

ナンマイダンボ .....127, 135, 258

に

二階 .....89

荷車 .....106

逃げがある .....404

逃げなし .....404

二十三夜講 .....132

二十三夜待 .....14

二十二夜講 .....132

二重まわし .....52

ニシン .....69

定使い	2
定使	34
ショウブ湯	362
照明	452
照明具	8
青面金剛	130
醤油	73
醤油しぼり	38
少林山講	133
ショウロ	69
食事	74
食生活	74
職人	105
食糧	60, 450
植林	453
処女会	299
女中	48
初潮	293
食器	78
初七日	342
シラジ	79
シリッパショイ	51
ジリヤキ	64
死霊	344
二郎の朔日	356
代掻き	102
神宮寺	121
神経痛	224
伸子張り	58
神社の土地	39
身上マワシ	47
新宅	47
新築祝い	97
神明宮	117
神明様	125
神明社	208
神明砦	387
親鸞	214
人力車	107
す	
水害	32
スイカン	80
水車	40, 80, 100, 454
水道	92
水団	6, 63
水利	29, 99
スガキテンジョウ	420
菅原神社	120, 125, 175, 212

すし	67
ススハキ	374
雀講	132
雀さま	119
雀神社	171, 392
スダレ	79
頭痛	222
捨子	18
炭焼き	102
すもう	117, 264
諏訪神社	118, 121, 199
寸法	94

せ

生業	28, 452
青年会	2, 43, 392
青年団	2, 43, 296
セイロ	79
セガイ造り	426
堰	107
せき	223
石造物	144
石尊様	124
石尊信仰	13
赤飯	66, 218
堰普請	38
節供	22
節句	360
セッチンまいり	282
節分	21, 357, 456
善勝寺	147
洗濯	58
洗髪	56
センブリ	221, 230

そ

総会	37
葬儀	455
葬式	218, 227, 327
葬式組	35
葬式の膳	77
双生児	221
総参り	15
草履	54
ソバ	6, 62, 230, 453
ソバガキ	450
反町薬師	290

た

田	100
大興寺	121, 188
大黒	113
太鼓たたき	43
代参	132
代参講	15, 46
大師様	13
大豆	60
台所	8
ガイドコロ	85, 396
大日様	130
大日さま	385
大八車	107
堆肥場	83
台風	32
大宝寺	386
田植え	8, 101, 221, 362
田植え唄	241
高山塚の稲荷	124
タキギトリ	39
たき木ひろい	99
タクアン	70
田草取	102
タグリ	91
竹やぶ	82
タコあげ	264, 296
ダシバリツクリ	421
辰の日	137
建前	95
たてまえ	218
棚かざり	375
タナサガシ	21, 348
七夕	229, 363
種屋	103
田の神	9, 126
田の神信仰	24
タバコ	81
足袋	5, 51, 54, 218
多間取り	424
魂呼び	19, 328
田休み	102
樽立て	305
檀家	122
ダンゴ突き	368
誕生祝い	288
壇那寺	122

耕地……………98  
 コウデ……………224  
 香奠……………338  
 公民館……………36  
 ゴエモンプロ……………92  
 氷池……………29  
 虚空蔵様……………13, 130, 259  
 虚空蔵まつり……………258  
 穀箱……………80  
 伍組……………2  
 ゴザ……………55  
 コザ……………402  
 小坂子街道……………106  
 こさ切り……………38  
 コサギリ……………82  
 子授け……………17, 265  
 御祝儀……………304, 309, 315, 392  
 呼称……………31  
 小正月……………351  
 呉汁……………68  
 小二郎薬師……………128, 388  
 小神明神社……………145  
 ごぜ……………252  
 子育て地蔵……………127  
 五代……………385  
 御大儀振る舞い……………325  
 五代神社……………116, 149  
 こたつ……………89  
 コタツノマ……………86  
 コタツベヤ……………414  
 伍長組……………2  
 後藤弁造……………386  
 コトハジメ……………21  
 子ども……………455  
 子ども組……………2  
 子供連……………44  
 コトヨウカ……………358  
 コネ鉢……………79  
 御年始日……………348  
 ゴマ……………74  
 コマ……………296  
 小麦……………450  
 米……………60  
 米野街道……………106  
 子守……………48, 289  
 子守唄……………249  
 こやしば……………7  
 娯楽……………294  
 互礼会……………347  
 婚姻……………455

金剛寺……………122, 185  
 混合食……………6  
 金比羅様……………125  
 婚約……………305  
 婚礼……………19

さ

再縁……………327  
 財産分け……………47  
 祭壇……………335  
 裁縫……………57  
 材木……………453  
 祭文……………253  
 西林寺……………202  
 魚……………69  
 作業小屋……………7  
 サクタテ……………350  
 桜……………221  
 酒……………81  
 座敷……………86  
 ザシキ……………396, 402, 414  
 サツマイモ……………60  
 サトイモ……………60, 220  
 里帰り……………19, 284, 310, 325  
 作法……………218  
 サマゴ……………396  
 ザル観音……………134  
 サルダヒコ……………131  
 猿まわし……………255  
 産育……………392  
 産泰様……………134, 265  
 サンバさん……………272  
 三本荒神様……………113  
 三面薬師……………42  
 サンリンボウ……………137  
 三隣亡……………229

し

痔……………222  
 シオビキ……………69  
 仕事着……………50  
 シキビ……………221  
 ジギョウ……………95  
 シコクビエ……………453  
 仕事はじめ……………348  
 地縞……………50  
 獅子舞……………255, 260  
 シシマツリ……………359

獅子まわし……………124  
 地震……………229  
 地蔵……………127  
 地蔵さま……………364  
 地蔵堂……………127  
 地蔵まつり……………257, 259  
 死体山……………385  
 下着……………59  
 したきりすずめ……………378  
 仕立て……………57  
 自治会……………32  
 自治会費……………36  
 七五三……………290  
 七本塔婆……………343  
 地鎮祭……………94  
 地づき……………95  
 しつけ……………218  
 自転車……………106  
 死水……………328  
 篠……………453  
 死の予兆……………327  
 芝居……………254, 255  
 シビレ……………225  
 しぼり水……………101  
 しまい正月……………356  
 島田髷……………56  
 シメ……………83  
 しめなわ作り……………375  
 下肥……………100  
 シャクジ様……………126  
 社日……………218, 360  
 社日待……………132  
 十王堂……………184  
 祝儀の着物……………53  
 祝儀の膳……………76  
 十五日粥……………218, 355  
 十五夜……………23, 367  
 十三仏……………138  
 十三夜……………23, 369  
 十二様……………135, 454  
 十八日ガユ……………355  
 主食……………5, 450  
 出産……………18, 221, 269, 455  
 出産祝い……………281  
 しょいこ……………454  
 正円寺……………207  
 正月さま……………374  
 正月棚……………111, 375  
 ショウギ……………80  
 上泉寺……………122

門付芸	17
門松	375
カドマツ	375
カナババ	277
金丸	449
カニ	70
かねがへびになった	
はなし	379
カネズカ	386
カネツケの祝い	324
かぶり物	53
壁塗り	96
カマカケ	101
釜神様	112
鎌倉坂	385
かまど	89
鎌取り坂	450
カマの口あき	364
カマノクチアケ	15
釜柱	396
上泉獅子舞	17, 237
神送り	373
髪かざり	56
髪型	55
神棚	11, 111, 218
雷	228
萱	97
かゆかき棒	9, 127, 352
カライリ	69
カラス	389
鳥鳴き	227
カラス鳴き	328
からゆ	81
家例	345
川	27
川木拾い	100
川さらい	107
川棚	93
変りもの	65
変りもの	391
寛永の絵馬	385
間食	76
乾燥芋	71
観音川	28
干ばつ	454
カンラン	220
き	
祇園	259

キゴザ	55
生地	56
キジリ	88
北枕	329
狐	387
狐憑き	138
絹糸	59
絹笠様	104, 114, 127
木福様	13, 126, 152, 259, 372 391
貴船様	266
擬嬖	18
鬼門	83
逆縁	327
休日	37
境界	37
行商	11
行商人	28, 108
共同作業	37
行人塚	24
共有財産	2, 40
共有地	39
共有林	38
玉泉寺	202
玉蔵院	193
浄めの塩	340
キリアゲニケエ	405
キリオトシニケエ	414
切干し	71
禁忌	218
キンピラゴボウ	69
金融	42
く	
区	449
食い合わせ	226
食い初め	285
食い違い四間取り	418
空襲	32
草刈り唄	246
草競馬	391
草分け	29
グシ餅	8
クズカキ	91
クズ屋	96
九頭竜様	130
果物	60
口がため	305
クチナシ	221

クツキアイ	302
熊野神社	120
熊野神社	208
組	33, 449
グミ	221
組長	34
組の付き合い	35
クモ	226
蔵造り	97
くら開き	350
栗	60
クルワ	2, 33, 35
クレ	38
桑	104, 390
桑市	11, 104
鞆だて	350
け	
ケイアン	48
芸人	11, 28, 109, 253, 454
競馬	49, 260, 295
けが除け観音	129
化粧品	56
下駄	55, 219
ケダイ	55
ケツカイ	18
結核	223
ケヤキ	221
下痢	223
けんか	23
ケンチョン汁	68
ゲンノショウコ	230

こ

小字	33
小出神社	118, 165
講	14
光運寺	159
郷蔵	391
高血圧	222
こうじ小屋	74
香集寺	121, 166
高岑院	290
庚申講	46
荒神様	11, 112
庚申様	126
庚申塚	130, 386
庚申待	14



梅若 .....360  
占い .....138  
運送屋 .....108  
運搬具 .....107

え

エエ(結) .....2, 450  
エエ仕事 .....36  
越後笠 .....54  
エド流し .....136  
エビス .....113  
エビス講 .....23, 356, 372, 374  
エプロン .....51  
エボ神様 .....126  
えぼ地藏 .....390  
縁側 .....87  
縁起 .....389  
縁切り髪 .....20  
延寿庵 .....122  
縁談 .....19

お

オイガキ念仏 .....138  
お稲荷さま .....373  
王渡し .....385  
大国主命神社 .....191  
大胡街道 .....27  
大正月 .....20  
大鳥神社 .....41  
大晦日 .....23, 377  
大嶺神社 .....41  
大峯神社 .....154  
大宮様 .....125  
お飾り .....83  
おかざりかえ .....21, 456  
おかず .....68  
オカッテ .....88, 414  
オカボ .....454  
おかまさま .....10, 11, 111  
オカマサマの穂 .....227  
お神送り .....121  
お粥 .....269  
荻窪神社 .....120, 206  
おきりこみ .....6  
オクザシキ .....7, 87, 414  
屋内神 .....11  
お蔵 .....40  
オクリ .....87, 271

オクリー見 .....310  
オクンチ .....12, 23, 45, 120, 370

456

オコシ .....51  
おことはじめ .....358  
おこ餅 .....368  
お籠り .....120  
オコンマヤ .....7, 85, 401, 414  
オサキ .....138  
オサゴ .....266  
オサナブリ .....9, 101, 362  
お産 .....269  
お地藏さん .....388  
お七夜 .....282, 455  
オシトギ .....116  
お十二様 .....126  
オシラサマ .....114  
おしらまち .....21  
おしろい薬師 .....46, 128  
おすまし .....73  
お諏訪様 .....42, 124, 368  
お歳暮 .....286, 326  
お節句 .....359  
オソーデン様 .....113  
おそなえ .....347  
オダ木 .....38  
オタキアゲ .....345  
オタナ .....111  
オタナアゲ .....341  
お茶屋 .....387  
オツキ .....330  
オツキアイ村 .....35  
オッキリ川 .....27, 386  
オッキリコミ .....63  
お手玉 .....263  
おてだま .....295  
お寺の田植え .....137  
オトウカ .....24  
おとうか .....387  
オナメ .....68  
オニッコ .....285  
オネジ .....450  
お子待 .....132  
お歯黒 .....56  
お化け .....388  
おぼ捨て山 .....384  
お囃子 .....259  
お彼岸 .....369  
お札 .....111  
オフダ .....376

オボアキ .....18, 283  
お宮参り .....282  
オモテザシキ .....7  
母屋 .....82  
おやつ .....81  
御嶽講 .....133  
女堀 .....386

か

蚕 .....227  
蚕祝い .....103  
蚕の神様 .....127  
かいこの話 .....382  
開墾 .....98, 450  
外出着 .....51  
かいどう .....7  
街道 .....27, 106  
買物 .....109  
買い物 .....454  
回覧板 .....10, 108  
柿 .....60  
書き初め .....377  
垣根 .....82  
カクラン .....291  
かくれんぼ .....391  
影絵 .....257  
笠 .....54  
かざりかえ .....351  
飾りかえ .....352  
菓子 .....81  
火事 .....227  
貸し借り .....392  
迦葉山 .....134  
数 .....229  
餅 .....50  
かぜ .....223, 225  
火葬 .....338  
かぞえ歌 .....249  
片貝神社 .....195  
片貝神社太々神楽 .....235  
片貝の神楽 .....17  
片口 .....80  
形見分け .....342  
勝城神社 .....144, 241  
河童 .....386, 389  
鯉節 .....269  
家庭生活 .....3  
カドイレ .....306  
門づけ .....252

# 索引

## あ

あいさつまわり .....315  
 あいさつ回り .....347  
 青物市 .....11  
 青柳大師 .....170, 348, 392  
 赤城型民家 .....6  
 赤城講 .....15, 46  
 赤城様 .....42  
 赤城信仰 .....24, 134  
 赤城神社 .....120, 163, 183, 204  
     205, 454  
 赤城と日光の話 .....386  
 赤城と榛名の争い .....386  
 赤城山 .....390  
 赤堀道元 .....24  
 赤堀道元の娘 .....383  
 あかり .....93  
 アガリハナ .....7, 85  
 秋葉講 .....132  
 秋葉信仰 .....13  
 秋葉大権現 .....123  
 秋祭り .....119  
 秋まつり .....370  
 アキヤシキ .....47  
 アキワ講 .....46  
 悪魔っばらい .....45  
 悪魔除け .....138  
 麻 .....59  
 あぎ .....221  
 アザ .....266  
 朝湯 .....345  
 アシいれ婚 .....307  
 小豆 .....60  
 小豆粥 .....9, 21, 66  
 小豆とぎばばあ .....388  
 あせも .....223  
 遊び .....261  
 愛宕神社 .....177  
 あつけ .....222, 224, 292  
 アトタズネ .....309  
 アナップサゲ .....361  
 穴掘り .....20, 335  
 アネサンカムリ .....54  
 油いため .....69  
 油味噌 .....68  
 油餅 .....66

油もち .....373  
 雨具 .....55  
 雨乞い .....8, 99, 137, 390  
 天沼薬師 .....155  
 あまねじ .....6  
 阿弥陀堂 .....130  
 阿弥陀如来 .....214  
 アラ汁 .....68  
 荒牧神社 .....173  
 アルキ .....108  
 淡島様 .....265  
 あわせ .....5  
 あんか .....89  
 安産祈願 .....17, 266  
 庵室 .....122  
 行燈 .....94

## い

イイツギ .....10, 108  
 家 .....451  
 五十嵐和泉守 .....217  
 イキダオレ .....32  
 池 .....93  
 石かつぎ .....264  
 石堂畑 .....136  
 イジメ .....79  
 伊勢参宮 .....15  
 伊勢参り .....107, 133  
 板葺 .....97  
 イタヤ .....421  
 市 .....108  
 入会地 .....39  
 一人前 .....48, 293  
 イチマケ .....3, 47  
 イチョウ .....221  
 银杏返し .....56  
 市杵島神社 .....125, 186  
 イッケ .....3, 47  
 一俵 .....100  
 一本松 .....386  
 井戸 .....7, 91, 328, 452  
 井戸神 .....113  
 井戸久保 .....450  
 イトチガイ .....267  
 イトヒキバ .....414, 418  
 井戸掘り .....100

稲作 .....8  
 稲荷様 .....12, 42  
 イナリ祭 .....371  
 稲 .....102  
 稲刈り .....10  
 祈り釘 .....137  
 衣服 .....4  
 イボ .....222, 224  
 イボ薬師 .....128  
 居間 .....86  
 忌み明け .....343  
 芋 .....60  
 イモガマ .....89  
 イモガラ .....71  
 芋畑へいこう .....383  
 入口 .....84  
 イロリ .....8, 88, 218, 220, 227, 396  
 イワシ .....357  
 イワシズカ .....385  
 インキョ小屋 .....47  
 飲料水 .....452

## う

牛車 .....108  
 氏子総代 .....121  
 白 .....220, 227, 340  
 碓氷社 .....103  
 失せもの .....227  
 謡 .....255, 315  
 ウタイゾメ .....348  
 内出 .....402  
 うちみ .....224  
 うどん .....6, 62  
 ウナギ .....69, 390  
 うなぎ針 .....100  
 うば皮 .....380  
 産神 .....219  
 産毛 .....280  
 ウブタメシ .....18, 274  
 馬 .....105, 223, 227, 453  
 馬市 .....11  
 馬の神様 .....116  
 馬屋 .....84  
 生まれかわり .....344  
 梅 .....60  
 梅干 .....70, 269



前橋市民俗文化財調査報告書第一集

# 赤城南麓の民俗

—芳賀・南橋・桂置地区—

平成元年三月二十八日 印刷  
平成元年三月三十日 発行  
(非売品)

編集 前橋市教育委員会  
前橋市大手町二丁目十二番一号  
電話 027(23)1111

印刷所 朝日印刷工業株式会社  
前橋市元総社町六七  
電話 027(51)2221(代)